

基本計画書

基本計画								
事項	記入欄						備考	
計画の区分	学部の設置							
フリガナ設置者	ガッコウホウジン キョウトセイカダイガク 学校法人 京都精華大学							
フリガナ大学の名称	キョウトセイカダイガク 京都精華大学 (Kyoto Seika University)							
大学本部の位置	京都市左京区岩倉木野町137番地							
大学の目的	京都精華大学は人間を尊重し人間を大切にすることを教育の基本とし、学問・芸術によって、人類社会に尽くそうとする自立した人間の形成を目的とする。							
新設学部等の目的	国際文化学部は、アフリカ・アジアの文化、京都を中心とした日本の歴史や文化、そして世界の相関を理解し、現在の社会が抱える多様な課題の解決に貢献し、より良い共生社会の実現と世界の発展に寄与できる人材を養成することを目的とする。							
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地
	国際文化学部 (Faculty of Global Culture) グローバルスタディーズ学科 (Department of Global Studies)	年	人	年次人	人	学士 (文化) 【Bachelor of Culture & Arts】	令和3 (2021)年 4月 第1年次	
	人文学科 (Department of Humanities)	4	90	-	360	学士 (文化) 【Bachelor of Culture & Arts】	令和3 (2021)年 4月 第1年次	
	計	4	160	-	640	学士 (文化) 【Bachelor of Culture & Arts】	令和3 (2021)年 4月 第1年次	
同一設置者内における変更状況 (定員の移行、名称の変更等)	メディア表現学部 メディア表現学科 (168) 令和2(2020)年4月届出 人文学部(廃止) 総合人文学科 (△300) ※令和3(2021)年4月学生募集停止 ポピュラーカルチャー学部(廃止) ポピュラーカルチャー学科 (△118) ※令和3(2021)年4月学生募集停止							
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数		
		講義	演習	実験・実習	計			
	グローバルスタディーズ学科	221科目	30科目	25科目	276科目	124単位		
	人文学科	216科目	35科目	25科目	276科目	124単位		

教 員 組 織 の 概 要	学 部 等 の 名 称		専任教員等					兼 任 教 員 等		
			教授	准教授	講師	助教	計	助手		
新 設 分 組	国 際 文 化 学 部	クローバルスタディーズ学科	4 (4)	1 (1)	3 (3)	0 (0)	8 (8)	0 (0)	122 (122)	
		人文学科	8 (8)	4 (4)	3 (3)	0 (0)	15 (15)	0 (0)	115 (115)	
		メディア表現学科	7 (7)	3 (3)	3 (3)	0 (0)	13 (13)	0 (0)	106 (106)	
		計	19 (19)	8 (8)	9 (9)	0 (0)	36 (36)	0 (0)	- (-)	
	既 設 分 組	芸 術 学 部	造形学科	12 (20)	3 (5)	0 (2)	0 (0)	15 (27)	0 (0)	99 (99)
			デザイン学部 イラスト学科	6 (6)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	9 (9)	0 (0)	25 (25)
		デ ザ イ ン 学 部	ビジュアルデザイン学科	5 (5)	3 (3)	1 (2)	0 (0)	9 (10)	0 (0)	52 (52)
			プロダクトデザイン学科	5 (5)	2 (2)	3 (3)	0 (0)	10 (10)	0 (1)	45 (45)
		デ ザ イ ン 学 部	建築学科	3 (3)	2 (2)	2 (3)	0 (0)	7 (8)	0 (0)	38 (38)
		マ ン ガ 学 部	マンガ学科	9 (11)	11 (11)	16 (13)	0 (0)	36 (35)	0 (4)	29 (29)
マ ン ガ 学 部		アニメーション学科	7 (7)	3 (4)	2 (2)	0 (0)	12 (13)	0 (0)	22 (22)	
		創造戦略機構	10 (14)	1 (3)	15 (15)	0 (0)	26 (32)	0 (0)	0 (0)	
	計	57 (71)	28 (33)	39 (40)	0 (0)	124 (144)	0 (5)	- (-)		
	合 計	76 (90)	36 (41)	48 (49)	0 (0)	160 (180)	0 (5)	- (-)		
教 員 以 外 の 職 員 の 概 要	職 種		専 任		兼 任		計			
	事 務 職 員		58 (55)		55 (55)		113 (110) 人			
	技 術 職 員		0 (0)		0 (0)		0 (0)			
	図 書 館 専 門 職 員		1 (1)		20 (20)		21 (21)			
	そ の 他 の 職 員		0 (0)		0 (0)		0 (0)			
	計		59 (56)		75 (75)		134 (131)			

令和2(2020)年
4月届出済み

既設大学等の状況	プロダクトデザイン学科	4	72	-	288	学士 (芸術)	0.97	2006		
	建築学科	4	56	-	224	学士 (芸術)	1.24	2006		
	マンガ学部						1.13			
	マンガ学科	4	232	-	928	学士 (芸術)	1.17	2006		
	アニメーション学科	4	80	-	320	学士 (芸術)	1.01	2006		
	ポピュラーカルチャー学部						0.54			
	ポピュラーカルチャー学科	4	118	-	472	学士 (芸術)	0.54	2013		2021(令和3)年度より募集停止
	人文学部						0.29			
	総合人文学科	4	300	-	1200	学士 (人文)	0.29	2009		2021(令和3)年度より募集停止
	【京都精華大学大学院】									
	芸術研究科						0.76			
	芸術専攻 博士前期課程	2	20	-	40	修士 (芸術)	0.82	2000		
	芸術専攻 博士後期課程	3	5	-	15	博士 (芸術)	0.45	2003		
	デザイン研究科						0.48			
デザイン専攻 修士課程	2	10	-	20	修士 (芸術)	0.48	2010			
建築専攻 修士課程	2	5	-	10	修士 (芸術)	0.50	2010			
マンガ研究科						0.81				
マンガ専攻博士前期課程	2	20	-	40	修士 (芸術)	0.90	2010			
マンガ専攻博士後期課程	3	4	-	12	博士 (芸術)	0.38	2012			
人文学研究科						0.33				
人文学専攻 修士課程	2	10	-	20	修士 (人文学)	0.33	1993			
附属施設の概要	該当なし									

(注)

- 1 共同学科等の認可の申請及び届出の場合、「計画の区分」、「新設学部等の目的」、「新設学部等の概要」、「教育課程」及び「教員組織の概要」の「新設分」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 2 「教員組織の概要」の「既設分」については、共同学科等に係る数を除いたものとする。
- 3 私立の大学又は高等専門学校の出定員に係る学則の変更の届出を行おうとする場合は、「教育課程」、「教室等」、「専任教員研究室」、「図書・設備」、「図書館」及び「体育館」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 4 大学等の廃止の認可の申請又は届出を行おうとする場合は、「教育課程」、「校地等」、「校舎」、「教室等」、「専任教員研究室」、「図書・設備」、「図書館」、「体育館」及び「経費の見積もり及び維持方法の概要」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 5 「教育課程」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。
- 6 空欄には、「-」又は「該当なし」と記入すること。

学校法人京都精華大学 設置認可等に関わる組織の移行表

令和2(2020)年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	令和3(2021)年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由
京都精華大学				京都精華大学				
芸術学部				芸術学部				
造形学科	112	—	448	造形学科	112	—	448	
ポピュラーカルチャー学部								
ポピュラーカルチャー学科	118	—	472		<u>0</u>	—	<u>0</u>	令和3年4月学生募集停止
				メディア表現学部				学部の設置(届出)
				メディア表現学科	<u>168</u>	—	<u>672</u>	
デザイン学部				デザイン学部				
ビジュアルデザイン学科	64	—	256	ビジュアルデザイン学科	64	—	256	
プロダクトデザイン学科	72	—	288	プロダクトデザイン学科	72	—	288	
建築学科	56	—	224	建築学科	56	—	224	
イラスト学科	64	—	256	イラスト学科	64	—	256	
マンガ学部				マンガ学部				
マンガ学科	232	—	928	マンガ学科	232	—	928	
アニメーション学科	80	—	320	アニメーション学科	80	—	320	
人文学部								
総合人文学科	300	—	1200		<u>0</u>	—	<u>0</u>	令和3年4月学生募集停止
				国際文化学部				学部の設置(届出)
				人文学科	<u>160</u>	—	<u>640</u>	
				グローバルスタディーズ学科	<u>90</u>	—	<u>360</u>	
-----				-----				
計	1098	—	4392	計	1098	—	4392	
京都精華大学大学院				京都精華大学大学院				
芸術研究科				芸術研究科				
博士前期課程芸術専攻(M)	20	—	40	博士前期課程芸術専攻(M)	20	—	40	
博士後期課程芸術専攻(D)	5	—	15	博士後期課程芸術専攻(D)	5	—	15	
デザイン研究科				デザイン研究科				
デザイン専攻(M)	10	—	20	デザイン専攻(M)	10	—	20	
建築専攻(M)	5	—	10	建築専攻(M)	5	—	10	
マンガ研究科				マンガ研究科				
博士前期課程マンガ専攻(M)	20	—	40	博士前期課程マンガ専攻(M)	20	—	40	
博士後期課程マンガ専攻(D)	4	—	12	博士後期課程マンガ専攻(D)	4	—	12	
人文学研究科				人文学研究科				
人文学専攻(M)	10	—	20	人文学専攻(M)	10	—	20	
-----				-----				
計	74	—	157	計	74	—	157	

教育課程等の概要																
(国際文化学部人文学科)																
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
導入プログラム	フレッシュヤーズ・キャンプ	1 1Q	1					○	1						兼2	集中
	クリエイティブ・ワークショップ	1 2Q	1					○	1						兼2	
	小計 (2科目)	—	2	0	0	—			2	0	0	0	0	兼2		
共通教育科目	コミュニケーションスキル1	1 1Q	1					○							兼1	
	コミュニケーションスキル2	1 3Q	1					○							兼1	
	アカデミックスキル1	1 2Q	1					○							兼1	
	アカデミックスキル2	1 4Q	1					○							兼1	
	アカデミックスキル3	3 3Q	1					○							兼1	
	アカデミックスキル4	3 4Q	1					○							兼1	
	デッサン1	1 1Q	1					○							兼1	
	デッサン2	1 2Q		1				○							兼1	
	デッサン3	1 3Q		1				○							兼1	
	デッサン4	1 4Q		1				○							兼1	
	グラフィックデザインソフトスキル	1 2Q	1					○							兼1	
	芸術学	1 2Q		2			○								兼1	
	美学概論	1 3Q		2			○		1							
	現代美術概論	1 4Q		2			○								兼1	
	美術史	1 2Q		2			○								兼1	
	日本美術史	1 3Q		2			○		1							
	東洋美術史	1 4Q		2			○		1							
	西洋美術史	1 3Q		2			○								兼1	
	工芸概論	1 4Q		2			○								兼1	
	デザイン論	1 3Q		2			○								兼1	
	素材論	1 4Q		2			○								兼1	
	音楽概論	1 2Q		2			○								兼1	
	ポピュラー音楽論	1 3Q		2			○								兼1	
	身体表現論	1 2Q		2			○								兼1	
	身体文化演習1	1 3Q		1			○								兼1	
	身体文化演習2	1 4Q		1			○								兼1	
	表現と社会	1 4Q		2			○								兼1	
	表現と倫理	1 3Q		2			○								兼1	
	表現と知的財産権	1 4Q		2			○								兼1	
	写真技法	1 3Q		1					○						兼1	
	小計 (30科目)	—	8	38	0	—			2	0	0	0	0	兼23		
	グローバル科目	日本文化概論	2 3Q	1					○							兼1
		英語1	1 1Q		1				○		1					兼2
英語2		1 2Q		1				○		1					兼2	
英語3		1 3Q		1				○		1					兼2	
英語4		1 4Q		1				○		1					兼2	
日本語1		1 1Q		1				○							兼3	
日本語2		1 2Q		1				○							兼3	
日本語3		1 3Q		1				○							兼3	
日本語4		1 4Q		1				○							兼3	
Business English		2 1Q		1				○							兼1	
English discussion	2 2Q		1				○							兼1		

グローバル科目	Effective presentation	2 3Q	1		○														兼1
	English for studying abroad	2 4Q	1		○														兼1
	中国語 1	1 1Q	1		○														兼1
	中国語 2	1 2Q	1		○														兼1
	韓国語 1	1 1Q	1		○														兼1
	韓国語 2	1 2Q	1		○														兼1
	フランス語 1	1 1Q	1		○														兼1
	フランス語 2	1 2Q	1		○														兼1
	タイ語	1 1Q	1		○														兼1
	ベトナム語	1 1Q	1		○														兼1
	インドネシア語	1 1Q	1		○														兼1
	スワヒリ語	1 1Q	1		○														兼1
	ドイツ語	1 1Q	1		○														兼1
	スペイン語	1 1Q	1		○														兼1
	イタリア語	1 1Q	1		○														兼1
	サステナビリティと社会	1 3Q	2		○				1										
	現代社会の諸問題	1 3Q	2		○														兼1
	海外ショートプログラム入門	1 3Q	2		○														兼1
	世界と食	1 4Q	2		○														兼1
	日本語学概論	1 4Q	2		○														兼1
言語学	1 4Q	2		○														兼1	
小計 (32科目)	—	1	37	0	—			1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	兼21
共通教育科目	自由論	1 3Q	1		○														兼1
	シティズンシップとダイバーシティ	1 4Q	1		○					1									兼1
	創造的思考法	1 3Q	1			○													兼1
	情報と倫理	1 1Q	1		○														兼1
	人権と教育	2 1Q	1		○														兼1
	グローバル化と社会	2 2Q	1		○														兼1
	障害学	2 3Q	2		○														兼1
	哲学入門	1 2Q	2		○				1										兼1
	政治学	1 2Q	2		○						1								兼1
	法学	1 2Q	2		○														兼1
	日本国憲法	1 3Q	2		○														兼1
	物語論	1 4Q	2		○														兼1
	考古学	1 2Q	2		○														兼1
	民俗学	1 3Q	2		○														兼1
	情報科学概論	1 2Q	1		○														兼1
	データサイエンス入門	2 1Q	1				○												兼1
	統計的思考法	1 3Q	2		○														兼1
	プログラミング 1	1 3Q	1				○												兼1
	プログラミング 2	1 4Q	1				○												兼1
	プログラミング 3	2 1Q	1				○												兼1
	プログラミング 4	2 2Q	1				○												兼1
	情報テクノロジー 1	1 3Q	2		○														兼1
	情報テクノロジー 2	1 4Q	2		○														兼1
	人類と人工知能	1 3Q	2		○														兼1
	教職コンピューター入門	1 4Q	2		○														兼1
	自然科学概論	1 2Q	2		○														兼1
	科学史	1 3Q	2		○														兼1
生物学	1 3Q	2		○														兼1	
数学的思考法	1 4Q	2		○														兼1	
行動心理学	1 3Q	2		○														兼1	
スポーツ実習 1	1 2Q	1				○												兼1	
スポーツ実習 2	1 3Q	1				○												兼1	

	小計 (32科目)	—	8	42	0	—	0	1	1	0	0	兼16	
社会実践力育成プログラム	大学連携プログラム	2 1Q		2		○						兼1	集中
	インターンシップ1	2 3Q		2		○						兼1	集中
	インターンシップ2	2 4Q		2		○						兼1	集中
	海外ショートプログラム	1 2Q		2		○						兼1	集中
	国内ショートプログラム	1 2Q		2		○						兼1	集中
	産学連携PBLプログラム1	2 3Q		2		○						兼1	
	産学連携PBLプログラム2	2 4Q		2		○						兼1	
	小計 (7科目)	—	0	14	0	—	0	0	0	0	0	兼3	
キャリア科目	キャリア1	1 1Q	1			○						兼1	
	キャリア2	2 2Q		1		○						兼1	
	キャリア3	3 3Q		1		○						兼1	
	職業研究	1 3Q		2		○						兼1	
	ベンチャー・ビジネス論	1 4Q		1		○						兼1	
	スポーツとビジネス	1 4Q		1		○						兼1	
	表現活動と経済	1 3Q		1		○	○					兼1	
	クリエイティブの現場	1 4Q		2		○						兼1	
	日本の企業文化研究	1 3Q		1		○						兼1	
	ポートフォリオ実習1	1 3Q		1				○				兼1	
	ポートフォリオ実習2	1 4Q		1				○				兼1	
	コミュニケーション実践演習	1 3Q		1			○					兼1	
	小計 (12科目)	—	1	13	0	—	0	0	0	0	0	兼6	
共通教育科目	美術概論1	2 1Q		1		○						兼1	
	美術史1	2 3Q		1		○						兼1	
	美術リテラシー1	2 3Q		2		○						兼1	
	美術リテラシー2	2 4Q		2		○						兼1	
	美術特講1	2 1Q		2		○						兼1	
	美術特講2	2 2Q		2		○						兼1	
	デザイン概論1	2 1Q		1		○						兼1	
	デザイン史1	2 3Q		1		○						兼1	
	デザインリテラシー1	2 3Q		2		○						兼1	
	デザインリテラシー2	2 4Q		2		○						兼1	
	デザイン特講1	2 1Q		2		○						兼1	
	デザイン特講2	2 2Q		2		○						兼1	
	マンガ概論1	2 1Q		1		○						兼1	
	マンガ史1	2 3Q		1		○						兼1	
	マンガリテラシー1	2 3Q		2		○						兼1	
	マンガリテラシー2	2 4Q		2		○						兼1	
	マンガ特講1	2 1Q		2		○						兼1	
	マンガ特講2	2 2Q		2		○						兼1	
	メディア表現概論1	2 1Q		1		○						兼1	
	メディア表現史1	2 3Q		1		○						兼1	
	メディア表現リテラシー1	2 3Q		2		○						兼1	
	メディア表現リテラシー2	2 4Q		2		○						兼1	
	メディア表現特講1	2 1Q		2		○						兼1	
	メディア表現特講2	2 2Q		2		○						兼1	
	和の伝統文化論	1 4Q		1		○						兼1	
	京都のまちづくり	2 4Q		1		○						兼1	
	京都の伝統工芸講座1	2 1Q		2		○						兼1	
	京都の伝統工芸講座2	2 2Q		2		○						兼1	
	京都の習俗	2 3Q		2		○						兼1	
	京都の伝統産業実習	2 2Q		2			○					兼1	集中
	ファイナンス論	1 4Q		1		○						兼1	
マーケティング論	2 1Q		1		○						兼1		

共通教育科目	マイナー科目	ビジネスモデル論	2 2Q		2		○											兼1	
		イノベーション論	2 3Q		2		○												兼1
		ソーシャルビジネス演習 1	3 3Q		2				○										兼1
		ソーシャルビジネス演習 2	3 4Q		2				○										兼1
		アフリカ・アジア概論	1 4Q		1		○												兼1
		アフリカ・アジア史	2 1Q		1		○												兼1
		アフリカ・アジアリテラシー 1	2 2Q		2		○												兼1
		アフリカ・アジアリテラシー 2	2 3Q		2		○												兼1
		アフリカ・アジア特講 1	2 3Q		2		○												兼1
		アフリカ・アジア特講 2	2 4Q		2		○												兼1
		日本事情理解	1 4Q		1		○												兼1
		言語と心理	2 1Q		1		○												兼1
		言語と社会	2 2Q		2		○												兼1
		日本語学	2 3Q		2		○												兼1
		日本語教育演習 1	3 3Q		2				○										兼1
日本語教育演習 2	3 4Q		2				○										兼1		
小計 (48科目)		—	0	80	0		—		0	0	0	0	0	0	0	0	兼30		
専門演習科目	基礎演習科目	基礎演習 1	1 1Q	1			○		8	3	3								
		基礎演習 2	1 2Q	1			○		8	3	3								
		基礎演習 3	1 3Q	1			○		8	3	3								
		基礎演習 4	1 4Q	1			○		8	3	3								
		基礎演習 5	2 1Q	2			○		8	3	3								
		基礎演習 6	2 2Q	2			○		8	3	3								
	小計 (6科目)		—	8	0	0	—		8	3	3	0	0						
	応用演習科目	応用演習 1	2 3Q	2			○		8	3	3								
		応用演習 2	2 4Q	2			○		8	3	3								
		応用演習 3	3 1Q	2			○		8	3	3								
		応用演習 4	3 2Q	2			○		8	3	3								
		応用演習 5	3 3Q	2			○		8	3	3								
		応用演習 6	3 4Q	2			○		8	3	3								
	小計 (6科目)		—	12	0	0	—		8	3	3	0	0						
	卒業研究演習科目	卒業研究演習 1	4 1Q	2			○		8	3	3								
卒業研究演習 2		4 2Q	2			○		8	3	3									
卒業研究演習 3		4 3Q	2			○		8	3	3									
卒業論文		4 3Q	2			○		8	3	3							集中		
卒業発表		4 4Q	2			○		8	3	3							集中		
小計 (5科目)		—	10	0	0	—		8	3	3	0	0							
専門講義・演習・実習科目	国際文化基礎科目	国際文化概論 1	1 1Q		1		○											兼1	
		国際文化概論 2	1 2Q		1		○											兼1	
		国際文化史 1	1 3Q		1		○											兼1	
		国際文化史 2	1 4Q		1		○											兼1	
		国際文化リテラシー 1	1 3Q		2		○											兼1	
		国際文化リテラシー 2	1 4Q		2		○											兼1	
		国際文化特講 1	2 2Q		2		○											兼1	
		国際文化特講 2	2 2Q		2		○											兼1	
	小計 (8科目)		—	0	12	0	—		0	0	0	0	0	0	0	0	0	兼4	
	専攻基盤科目	文学概論	2 2Q		2		○					1							
		日本文学研究 1	2 2Q		1		○				1								
		日本文学研究 2	2 2Q		1		○		1										
		歴史学概論	2 2Q		2		○		1										
		日本史研究 1	2 2Q		1		○						1						
		日本史研究 2	2 2Q		1		○		1										
現代社会論		2 2Q		2		○				1									
社会研究 1	2 2Q		1		○						1								

専攻 基盤 科目	社会研究 2	2 2Q		1		○			1								
	日本文化論	2 2Q		2		○			1								
	日本文化研究 1	2 2Q		1		○			1								
	日本文化研究 2	2 2Q		1		○			1								
	小計 (12科目)	—	0	16	0	—			6	2	3	0	0				
	学科 講義・ 演習 科目	講読演習 1	2 4Q	2			○			8	3	3					集中
		講読演習 2	3 4Q	2			○			8	3	3					集中
		長期フィールドワーク 1	3 1Q	2			○			8	3	3					集中
		長期フィールドワーク 2	3 1Q	2			○			8	3	3					集中
		長期フィールドワーク 3	3 1Q	2			○			8	3	3					集中
		哲学概論	1 2Q		2		○				1						
		倫理学	1 2Q		2		○										兼1
心理学		1 2Q		2		○										兼1	
宗教学		1 2Q		2		○										兼1	
小計 (9科目)	—	10	8	0	—			8	3	3	0	0			兼3		
文学 講義 科目	日本語学特講	2 2Q		2		○				1						兼1	
	漢文学	2 3Q		2		○										兼1	
	口承文化論	2 3Q		2		○										兼1	
	古典文法	2 1Q		2		○				1							
	書誌学	2 4Q		2		○					1					兼1	
	書道	2 4Q		2		○										兼1	
	日本文学史	2 2Q		2		○						1					
	批評理論	2 1Q		2		○			1							兼1	
	世界の文学 1	2 3Q		2		○										兼1	
	世界の文学 2	2 4Q		2		○										兼1	
小計 (10科目)	—	0	20	0	—			1	1	1	0	0			兼5		
歴史 講義 科目	古文書解読	2 1Q		2		○					1						
	日本史	2 1Q		2		○					1						
	歴史地理学	2 3Q		2		○										兼1	
	京都の歴史	2 2Q		2		○			1								
	日本民衆史	2 4Q		2		○			1								
	日本地域史	2 3Q		2		○					1						
	日本社会史	2 3Q		2		○					1						
	日本・アジア関係史	2 4Q		2		○			1								
	西洋史	2 2Q		2		○										兼1	
	東洋史	2 2Q		2		○										兼1	
小計 (10科目)	—	0	20	0	—			2	0	1	0	0			兼3		
社会 講義 科目	社会学	2 1Q		2		○				1							
	社会調査法	2 1Q		2		○			1								
	ジェンダー論	2 4Q		2		○										兼1	
	社会思想史	2 4Q		2		○					1						
	経済学	2 3Q		2		○			1								
	自然地理学	2 4Q		2		○										兼1	
	NGO論	2 4Q		2		○										兼1	
	地球環境学概論 1	2 4Q		2		○										兼1	
	地球環境学概論 2	3 3Q		2		○										兼1	
	地球環境学概論 3	3 4Q		2		○										兼1	
	人間の安全保障	2 3Q		2		○										兼1	
	市民社会論	2 2Q		2		○										兼1	
	平和学	2 2Q		2		○										兼1	
	エイジング研究概論	3 4Q		2		○										兼1	
	子ども学概論	3 4Q		2		○										兼1	
先住民族研究	2 3Q		2		○										兼1		
国際開発論	2 2Q		2		○										兼1		

日本文化講義科目	小計 (17科目)	—	0	34	0	—	2	1	1	0	0	兼10
	文化社会学	2 1Q		2		○						兼1
	文化政策論	2 3Q		2		○						兼1
	日本の文化遺産	2 2Q		2		○	1					
	観光学総論	2 3Q		2		○						兼1
	民芸論	2 4Q		2		○	1					
	日本の現代文化	2 2Q		2		○						兼1
	日本芸能史	2 3Q		2		○						兼1
	日本の風土	2 2Q		2		○						兼1
	日本思想史	2 3Q		2		○						兼1
アイヌ文化論	2 3Q		2		○						兼1	
南島文化論	2 4Q		2		○	1						
小計 (11科目)	—	0	22	0	—	3	0	0	0	0	兼8	
地域研究科目	地域研究入門	2 1Q		2		○						兼1
	アフリカ地域研究 1	2 3Q		2		○						兼1
	アフリカ地域研究 2	2 4Q		2		○						兼1
	アジア地域研究 1	2 3Q		2		○						兼1
	アジア地域研究 2	2 4Q		2		○						兼1
	大洋州地域研究	2 3Q		2		○						兼1
	アメリカ地域研究 1	2 3Q		2		○						兼1
	アメリカ地域研究 2	2 4Q		2		○						兼1
	欧州地域研究	2 3Q		2		○						兼1
	世界の宗教	2 3Q		2		○						兼1
	アフリカ・アジア関係論	2 2Q		2		○						兼1
	グローバル・ビジネス論	2 4Q		2		○						兼1
	グローバル化とメディア	2 4Q		2		○						兼1
小計 (13科目)	—	0	24	0	—	0	0	0	0	0	兼11	
世界文化科目	世界文化遺産	2 1Q		2		○						兼1
	アフリカ美術	2 2Q		2		○						兼1
	マテリアル・カルチャー概論	2 3Q		2		○						兼2
	比較服飾文化論	2 3Q		2		○						兼1
	比較建築文化論	2 3Q		2		○						兼1
	民族音楽論	2 4Q		2		○						兼1
小計 (6科目)	—	0	10	0	—	0	0	0	0	0	兼6	
合計 (276科目)		—	60	390	0	—	8	4	3	0	0	兼115
学位又は称号	文化	学位又は学科の分野				社会学・社会福祉学関係						
卒業要件及び履修方法						授業期間等						
<p>共通教育科目のうち必修科目24単位を修得（母国語を日本語とするものは英語1, 2, 3, 4を選択必修、母国語を英語とするものは日本語1, 2, 3, 4を選択必修）。共通教育科目のうち、社会実践力育成プログラムの科目群から4単位を選択必修として修得。共通マイナー科目の中から10単位を選択必修として修得。全共通教育科目の中から12単位以上を修得。</p> <p>学科・各専攻で定めた必修科目54単位を修得。専門講義・演習・実習科目のうち、選択科目20単位以上を修得（各専攻ごとに定めた3科目6単位を選択必修）。合計124単位以上を修得すること。（年間上限単位40単位）</p>						1 学年の学期区分			4期			
						1 学期の授業期間			8週			
						1 時限の授業時間			90分			

教育課程等の概要															
(国際文化学部グローバルスタディーズ学科)															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
導入プログラム	フレッシュャーズ・キャンプ	1 1Q	1					○	1						兼2 集中
	クリエイティブ・ワークショップ	1 2Q	1					○	1						兼2
	小計 (2科目)	—	2	0	0			—	1	0	0	0	0	0	兼2
共通教育科目	コミュニケーションスキル1	1 1Q	1					○							兼1
	コミュニケーションスキル2	1 3Q	1					○							兼1
	アカデミックスキル1	1 2Q	1					○							兼1
	アカデミックスキル2	1 4Q	1					○							兼1
	アカデミックスキル3	3 3Q	1					○							兼1
	アカデミックスキル4	3 4Q	1					○							兼1
	デッサン1	1 1Q	1					○							兼1
	デッサン2	1 2Q		1				○							兼1
	デッサン3	1 3Q		1				○							兼1
	デッサン4	1 4Q		1				○							兼1
	グラフィックデザインソフトスキル	1 2Q	1					○							兼1
	芸術学	1 2Q		2			○								兼1
	美学概論	1 3Q		2			○								兼1
	現代美術概論	1 4Q		2			○								兼1
	美術史	1 2Q		2			○								兼1
	日本美術史	1 3Q		2			○								兼1
	東洋美術史	1 4Q		2			○								兼1
	西洋美術史	1 3Q		2			○								兼1
	工芸概論	1 4Q		2			○								兼1
	デザイン論	1 3Q		2			○								兼1
	素材論	1 4Q		2			○								兼1
	音楽概論	1 2Q		2			○								兼1
	ポピュラー音楽論	1 3Q		2			○								兼1
	身体表現論	1 2Q		2			○								兼1
	身体文化演習1	1 3Q		1			○								兼1
	身体文化演習2	1 4Q		1			○								兼1
	表現と社会	1 4Q		2			○								兼1
	表現と倫理	1 3Q		2			○								兼1
	表現と知的財産権	1 4Q		2			○								兼1
	写真技法	1 3Q		1					○						兼1
	小計 (30科目)	—	8	38	0			—	0	0	0	0	0	0	兼25
グローバル科目	日本文化概論	2 3Q	1					○							兼1
	英語1	1 1Q		1				○							兼3
	英語2	1 2Q		1				○							兼3
	英語3	1 3Q		1				○							兼3
	英語4	1 4Q		1				○							兼3
	日本語1	1 1Q		1				○							兼3
	日本語2	1 2Q		1				○							兼3
	日本語3	1 3Q		1				○							兼3
	日本語4	1 4Q		1				○							兼3
	中国語1	1 1Q		1				○							兼1
中国語2	1 2Q		1				○							兼1	
韓国語1	1 1Q		1				○							兼1	
韓国語2	1 2Q		1				○							兼1	

グローバル科目	フランス語 1	1 1Q		1		○												兼1		
	フランス語 2	1 2Q		1		○												兼1		
	タイ語	1 1Q		1		○												兼1		
	ベトナム語	1 1Q		1		○												兼1		
	インドネシア語	1 1Q		1		○												兼1		
	スワヒリ語	1 1Q		1		○												兼1		
	ドイツ語	1 1Q		1		○												兼1		
	スペイン語	1 1Q		1		○												兼1		
	イタリア語	1 1Q		1		○												兼1		
	サステナビリティと社会	1 3Q		2		○												兼1		
	現代社会の諸問題	1 3Q		2		○												兼1		
	海外ショートプログラム入門	1 3Q		2		○												兼1		
	世界と食	1 4Q		2		○				1								兼1		
	日本語学概論	1 4Q		2		○												兼1		
	言語学	1 4Q		2		○												兼1		
	小計 (28科目)	—	1	33	0	—			0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	兼21	
	共通教育科目	リベラルアーツ科目	自由論	1 3Q	1		○			1										
			シティズンシップとダイバーシティ	1 4Q	1		○													兼1
			創造的思考法	1 3Q	1			○												兼1
情報と倫理			1 1Q	1			○												兼1	
人権と教育			2 1Q	1			○												兼1	
グローバル化と社会			2 2Q	1			○												兼1	
障害学			2 3Q		2		○												兼1	
哲学入門			1 2Q		2		○												兼1	
政治学			1 2Q		2		○												兼1	
法学			1 2Q		2		○												兼1	
日本国憲法			1 3Q		2		○												兼1	
物語論			1 4Q		2		○												兼1	
考古学			1 2Q		2		○												兼1	
民俗学			1 3Q		2		○												兼1	
情報科学概論			1 2Q	1			○												兼1	
データサイエンス入門			2 1Q	1				○											兼1	
統計的思考法			1 3Q		2		○												兼1	
プログラミング 1			1 3Q		1			○											兼1	
プログラミング 2			1 4Q		1			○											兼1	
プログラミング 3			2 1Q		1			○											兼1	
プログラミング 4			2 2Q		1			○											兼1	
情報テクノロジー 1			1 3Q		2		○												兼1	
情報テクノロジー 2			1 4Q		2		○												兼1	
人類と人工知能			1 3Q		2		○												兼1	
教職コンピューター入門			1 4Q		2		○												兼1	
自然科学概論			1 2Q		2		○												兼1	
科学史			1 3Q		2		○												兼1	
生物学			1 3Q		2		○												兼1	
数学的思考法			1 4Q		2		○												兼1	
行動心理学	1 3Q		2		○												兼1			
スポーツ実習 1	1 2Q		1			○											兼1			
スポーツ実習 2	1 3Q		1			○											兼1			
小計 (32科目)	—	8	42	0	—			1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	兼17		
社会実践力育成プログラム	大学連携プログラム	2 1Q		2				○										兼1	集中	
	インターンシップ 1	2 3Q		2				○										兼1	集中	
	インターンシップ 2	2 4Q		2				○										兼1	集中	
	海外ショートプログラム	1 2Q		2				○			1								集中	
	国内ショートプログラム	1 2Q		2				○			1								集中	
	産学公連携PBLプログラム 1	2 3Q		2				○										兼1		
産学公連携PBLプログラム 2	2 4Q		2				○										兼1			

	小計 (7科目)	—	0	14	0	—	—	0	0	1	0	0	兼2
キャリア科目	キャリア1	1 1Q	1			○							兼1
	キャリア2	2 2Q		1		○							兼1
	キャリア3	3 3Q		1		○							兼1
	職業研究	1 3Q		2		○							兼1
	ベンチャー・ビジネス論	1 4Q		1		○							兼1
	スポーツとビジネス	1 4Q		1		○							兼1
	表現活動と経済	1 3Q		1			○						兼1
	クリエイティブの現場	1 4Q		2		○							兼1
	日本の企業文化研究	1 3Q		1		○							兼1
	ポートフォリオ実習1	1 3Q		1				○					兼1
	ポートフォリオ実習2	1 4Q		1					○				兼1
	コミュニケーション実践演習	1 3Q		1			○						兼1
	小計 (12科目)	—	1	13	0	—	—	0	0	0	0	0	兼6
共通教育科目	マイナー科目	美術概論1	2 1Q		1		○						兼1
		美術史1	2 3Q		1		○						兼1
		美術リテラシー1	2 3Q		2		○						兼1
		美術リテラシー2	2 4Q		2		○						兼1
		美術特講1	2 1Q		2		○						兼1
		美術特講2	2 2Q		2		○						兼1
		デザイン概論1	2 1Q		1		○						兼1
		デザイン史1	2 3Q		1		○						兼1
		デザインリテラシー1	2 3Q		2		○						兼1
		デザインリテラシー2	2 4Q		2		○						兼1
		デザイン特講1	2 1Q		2		○						兼1
		デザイン特講2	2 2Q		2		○						兼1
		マンガ概論1	2 1Q		1		○						兼1
		マンガ史1	2 3Q		1		○						兼1
		マンガリテラシー1	2 3Q		2		○						兼1
		マンガリテラシー2	2 4Q		2		○						兼1
		マンガ特講1	2 1Q		2		○						兼1
		マンガ特講2	2 2Q		2		○						兼1
	メディア表現概論1	2 1Q		1		○						兼1	
	メディア表現史1	2 3Q		1		○						兼1	
	メディア表現リテラシー1	2 3Q		2		○						兼1	
	メディア表現リテラシー2	2 4Q		2		○						兼1	
	メディア表現特講1	2 1Q		2		○						兼1	
	メディア表現特講2	2 2Q		2		○						兼1	
	和の伝統文化論	1 4Q		1		○							兼1
	京都のまちづくり	2 4Q		1		○							兼1
	京都の伝統工芸講座1	2 1Q		2		○							兼1
	京都の伝統工芸講座2	2 2Q		2		○							兼1
	京都の習俗	2 3Q		2		○							兼1
	京都の伝統産業実習	2 2Q		2				○					兼1
	ファイナンス論	1 4Q		1		○							兼1
	マーケティング論	2 1Q		1		○							兼1
	ビジネスモデル論	2 2Q		2		○							兼1
	イノベーション論	2 3Q		2		○							兼1
	ソーシャルビジネス演習1	3 3Q		2			○						兼1
	ソーシャルビジネス演習2	3 4Q		2			○						兼1
アフリカ・アジア概論	1 4Q		1		○							兼1	
アフリカ・アジア史	2 1Q		1		○							兼1	
アフリカ・アジアリテラシー1	2 2Q		2		○							兼1	
アフリカ・アジアリテラシー2	2 3Q		2		○							兼1	
アフリカ・アジア特講1	2 3Q		2		○							兼1	
アフリカ・アジア特講2	2 4Q		2		○							兼1	

共通教育科目	マイナー科目	日本事情理解	1 4Q		1		○									兼1	
		言語と心理	2 1Q		1		○									兼1	
		言語と社会	2 2Q		2		○									兼1	
		日本語学	2 3Q		2		○									兼1	
		日本語教育演習 1	3 3Q		2			○								兼1	
		日本語教育演習 2	3 4Q		2			○								兼1	
		小計 (48科目)		—	0	80	0		—		0	0	0	0	0	0	兼30
専門演習科目	基礎演習科目	グローバルゼミ	1 1Q	2			○			4	1	3					
		海外短期フィールドワーク	1 2Q	2			○					1				集中	
		基礎演習 1	1 3Q	2			○			4	1	3					
		基礎演習 2	1 4Q	2			○			4	1	3					
		基礎演習 3	2 1Q	2			○			4	1	3					
		基礎演習 4	2 2Q	2			○			4	1	3					
	小計 (6科目)		—	12	0	0		—	4	1	3	0	0				
	応用演習科目	応用演習 1	2 3Q	2				○		4	1	3					
		応用演習 2	2 4Q	2				○		4	1	3					
		応用演習 3	3 1Q	2				○		4	1	3					
		応用演習 4	3 2Q	2				○		4	1	3					
		応用演習 5	3 3Q	2				○		4	1	3					
		応用演習 6	3 4Q	2				○		4	1	3					
	小計 (6科目)		—	12	0	0		—	4	1	3	0	0				
	卒業研究演習科目	卒業研究演習 1	4 1Q	2				○		4	1	3					
		卒業研究演習 2	4 2Q	2				○		4	1	3					
卒業研究演習 3		4 3Q	2				○		4	1	3						
卒業論文		4 3Q	2				○		4	1	3				集中		
卒業発表		4 4Q	2				○		4	1	3				集中		
小計 (5科目)		—	10	0	0		—	4	1	3	0	0					
専門講義・演習科目	国際文化基礎科目	国際文化概論 1	1 1Q	1			○			1							
		国際文化概論 2	1 2Q	1			○			1							
		国際文化史 1	1 3Q	1			○									兼1	
		国際文化史 2	1 4Q	1			○									兼1	
		国際文化リテラシー 1	1 3Q		2		○			1							
		国際文化リテラシー 2	1 4Q		2		○									兼1	
		国際文化特講 1	2 2Q		2		○									兼1	
		国際文化特講 2	2 2Q		2		○									兼1	
	小計 (8科目)		—	4	8	0		—	2	0	0	0			兼2		
	フィールドワーク科目	Business English	2 1Q		1		○										兼1
		English discussion	2 2Q		1		○										兼1
		Effective presentation	2 3Q		1		○										兼1
		English for studying abroad	2 4Q		1		○										兼1
		フランス語圏事情理解	2 1Q		1		○										兼1
		フランス語圏文化理解	2 2Q		1		○					1					兼1
		フランス語圏経済理解	2 3Q		1		○										
フランス語圏のメディア		2 4Q		1		○					1						
フィールドワーク入門		2 2Q	2			○				1							
フィールドワーク方法論		2 3Q	2			○					1						
海外長期フィールドワーク 1		3 1Q	2			○					1					集中	
海外長期フィールドワーク 2		3 1Q	2			○					1					集中	
海外長期フィールドワーク 3		3 1Q	2			○					1					集中	
海外長期フィールドワーク 4		3 2Q	2			○					1					集中	
海外長期フィールドワーク 5	3 2Q	2			○					1					集中		
海外長期フィールドワーク 6	3 2Q	2			○					1					集中		
小計 (16科目)		—	16	8	0		—	0	1	3	0	0		兼3			
地域研究	地域研究入門	2 1Q		2		○					1						
	地域研究特講	2 2Q		2		○				1							
	アフリカ地域研究 1	2 3Q		2		○					1						

専門講義・演習科目	地域研究科目	アフリカ地域研究2	2 4Q	2	○			1						兼1	
		アジア地域研究1	2 3Q	2	○									兼1	
		アジア地域研究2	2 4Q	2	○									兼1	
		アメリカ地域研究1	2 3Q	2	○									兼1	
		アメリカ地域研究2	2 4Q	2	○									兼1	
		大洋州地域研究	2 3Q	2	○					1					
		欧州地域研究	2 3Q	2	○									兼1	
		小計 (10科目)	—	0	20	0	—		1	1	2	0	0	兼5	
		グローバル関係科目	グローバル関係概論	2 1Q	2	○			1						
			グローバル歴史概論	2 1Q	2	○								兼1	
			グローバル歴史特講	2 2Q	2	○								兼1	
			多国籍企業論	2 3Q	2	○								兼1	
			社会運動論	2 4Q	2	○				1					
			世界の宗教	2 3Q	2	○								兼1	
			アフリカ・アジア関係論	2 2Q	2	○								兼1	
			国際政治学	2 2Q	2	○								兼1	
			国際社会の法秩序	2 3Q	2	○								兼1	
			人口動態論	3 3Q	2	○								兼1	
			人口政策論	3 3Q	2	○								兼1	
			比較社会学	2 4Q	2	○								兼1	
		小計 (12科目)	—	0	24	0	—		1	1	1	0	0	兼7	
		グローバル共生社会科目	先住民研究	2 2Q	2	○								兼1	
			ポストコロナ概論	2 2Q	2	○								兼1	
			国際開発論	2 2Q	2	○								兼1	
			マイノリティ研究概論	2 2Q	2	○			1						
			グローバル・ビジネス論	2 4Q	2	○								兼1	
			グローバル化とメディア	2 4Q	2	○								兼1	
			エイジング研究概論	3 4Q	2	○								兼1	
			子ども学概論	3 4Q	2	○								兼1	
			地球環境学概論1	2 4Q	2	○					1				
			地球環境学概論2	3 3Q	2	○				1					
			地球環境学概論3	3 4Q	2	○				1					
			NGO論	2 4Q	2	○				1					
			平和学	2 2Q	2	○								兼1	
			市民社会論	2 2Q	2	○								兼1	
			人間の安全保障	2 3Q	2	○								兼1	
		小計 (15科目)	—	0	30	0	—		1	1	1	0	0	兼8	
	グローバル文化科目	観光学総論	2 3Q	2	○					1					
		世界の文学1	2 3Q	2	○								兼1		
		世界の文学2	2 4Q	2	○			1							
		世界文化遺産	2 1Q	2	○			1							
		アフリカ美術	2 2Q	2	○					1					
		マテリアル・カルチャー概論	2 3Q	2	○					1			兼1		
		民族音楽論	2 4Q	2	○								兼1		
		比較服飾文化論	2 3Q	2	○								兼1		
		比較建築文化論	2 3Q	2	○					1					
	小計 (9科目)	—	0	18	0	—		2	0	2	0	0	兼3		
	学科基礎講義科目	哲学概論	1 2Q	2	○								兼1		
		倫理学	1 2Q	2	○								兼1		
		心理学	1 2Q	2	○								兼1		
		社会学	2 1Q	2	○								兼1		
		社会調査法	2 1Q	2	○								兼1		
		経済学	2 3Q	2	○								兼1		
		批評理論	2 1Q	2	○								兼1		
		ジェンダー論	2 4Q	2	○								兼1		
		宗教学	2 2Q	2	○								兼1		

専門講義・演習科目	学科基礎講義科目	社会思想史	2 4Q		2		○											兼1	
		自然地理学	2 4Q		2		○												兼1
		文化政策論	2 3Q		2		○												兼1
		文化社会学	2 1Q		2		○												兼1
		西洋史	2 2Q		2		○												兼1
		東洋史	2 2Q		2		○												兼1
		小計 (15科目)		—	0	30	0	—			0	0	0	0	0	0	0	0	兼15
	日本文化科目	日本史	2 1Q		2		○												兼1
		日本地域史	2 3Q		2		○												兼1
		日本社会史	2 3Q		2		○												兼1
		日本・アジア関係史	2 4Q		2		○												兼1
		日本の文化遺産	2 2Q		2		○												兼1
		歴史地理学	2 3Q		2		○												兼1
		京都の歴史	2 2Q		2		○												兼1
		日本民衆史	2 4Q		2		○												兼1
		日本文学史	2 2Q		2		○												兼1
		漢文学	2 3Q		2		○												兼1
		口承文化論	2 3Q		2		○												兼1
		書誌学	2 4Q		2		○												兼1
		古典文法	2 1Q		2		○												兼1
書道	2 4Q		2		○												兼1		
古文書解読	2 1Q		2		○												兼1		
小計 (15科目)		—	0	30	0	—			0	0	0	0	0	0	0	0	兼12		
合計 (276科目)			—	74	388	0	—		4	1	3	0	0	0	0	0	0	兼122	
学位又は称号	文化	学位又は学科の分野				社会学・社会福祉学関係													
卒業要件及び履修方法								授業期間等											
<p>共通教育科目のうち必修科目24単位を修得（母国語を日本語とするものは英語1, 2, 3, 4を選択必修、母国語を英語とするものは日本語1, 2, 3, 4を選択必修）。共通教育科目のうち、社会実践力育成プログラムの科目群から4単位を選択必修として修得。共通マイナー科目の中から10単位を選択必修として修得。全共通教育科目の中から12単位以上を修得。</p> <p>学科・各専攻で定めた必修科目54単位を修得。専門講義・演習・実習科目のうち、選択科目20単位以上を修得（各専攻ごとに定めた3科目6単位を選択必修）。合計124単位以上を修得すること。（年間上限単位40単位）</p>								1 学年の学期区分				4期							
								1 学期の授業期間				8週							
								1 時限の授業時間				90分							

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文化学部人文学科等)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
導入プログラム	フレッシュャーズ・キャンプ	この授業は1年次第1クォーターの必修科目にあたる。本学に入学したばかりの学生に対して、学生自身が他の学生とともにキャンパスを出、直接異文化の中に身を置きながら他の学生との情報共有などを経ることで、その後の学習において協力し合える関係性を学生間で持てることをめざす。加えて、本学の学びの中で特に重要な「自身の意思の伝達」、「他者の理解」、「自文化・多文化の認識」について身につけることを目的とする。この授業を経て大学の学びに向き合うことにより、教員、学生同士の関係を深め、より横断的な視野で学習することができる。	
	クリエイティブ・ワークショップ	本学での学びは、各専門分野にとじこもるのではなく、分野を超えた中での新たな価値観の発見を通じ、これからの社会をよりよくできる人間の育成を目的とする。そのために必要な相互理解と発展の第一歩として本授業においては今ともに学ぶ隣人がどのような専門性と将来像を描きながら学んでいるのかを各領域の教員の講義や上回生の事例を紹介しながら学ぶこととする。自らの専門の枠を超えた学びを描けることによる視野の拡張で、これ以後の学びの可能性を広げ、自らの学習計画の向上と改善ができることをめざす。	
共通教育科目	コミュニケーションスキル1	学問・芸術においては自らの思考を言語化し、発信し、コミュニケーションをとることが重要である。全学部生1年次必修となる本科目は、身近にある「読む」「書く」「話す」を通じて、ことばの多様性を理解し、自分のことばに関する強み、弱みを自覚し、エッセイや感想文、評論文により他者に向けて実践することを目的とする。1,000～2,000字で与えられたテーマをもとに繰り返し実践を行うことで、思考力を磨き、受け手を意識し、主体性を持ってことばを使える能力を身につける。	
	コミュニケーションスキル2	「コミュニケーションスキル1」で修得したことばを使う基礎能力をもとに、さらに「読む」「書く」「話す」の実践を深め、ことばを使える応用能力を身につける。自分の活動や思考した内容を膨らませて長文化したり、他者に伝えるトレーニングを行いながら、主体的かつ積極的にことばを使うコミュニケーション力を伸ばさせることを目的とする。最終段階では自身の生活や創作活動に関連した「ことば」の表現能力を高めていくことをめざす。	
	アカデミックスキル1	1年次第1クォーターの必修科目である本科目では、大学での学習の基礎となる「調べる」ことについての能力習得を目指す。「調べる」ことは私たちの日常的な営みのひとつであり、物事を多様な方法で知ることは、個々人にとっても社会にとっても重要なことである。この授業では、調査に関わる基本的な知識、技術を習得することによって、「調べる」ことの重要性、社会科学の基本的な考え方、量的調査・質的調査の方法論、調査倫理を学ぶ。さらに方法論の観点から実証研究を評価する視点を学び、現代の社会について主体的に考察する方法を学ぶ。	
	アカデミックスキル2	この授業では、「論文とはどのような文章なのか」といった初歩から始める。大学での学びは、「聴く」ことや「読む」ことといった受動的な学びに、「問う」ことや「書く」ことといった能動的な学びが伴って、初めて完結する。「考えるという行為」と「書くという行為」の相関を論じた基礎的な文献『知的複眼思考法』を教科書にして、大学で学ぶためのリテラシー能力の向上に努める。『知的複眼思考法』は全国の多くの大学で、「論文の書き方」の教科書として使われている。「『問い』を意識しながら読み、『問い』を意識しながら書く」という、すべての科目に共通する初年次教養教育を、少人数のゼミナール形式で展開する。	
	アカデミックスキル3	4年生の口頭試問や卒業発表展への参加、協力することを通じ、自らが4年次になった際のイメージを獲得するとともに、これまで培ってきた力を卒業論文、卒業制作へとまとめ、展示・発表へといたるために必要な表現力、プレゼンテーション能力を修得することをめざす。授業は4年次の卒業研究演習への参加と、授業内での模擬発表などを中心とするものであり、自身の先輩たちの姿を見ることで、次の年の同じ時期の自らを投影し、実感をもって4年次の学びへ向かうこととなる。	
表現科目			

アカデミックスキル4	卒業論文や卒業制作におけるポートフォリオなど、4年次ではこれまでの授業では求められなかったボリュームの論文を各学部でまとめなければならない。そのために必要な構成力、論理力、表現力を身につけることを本授業における目的とする。これらの力は卒業論文やポートフォリオの作成だけでなく、今後社会に出てからも必要となることだろう。各自はそれぞれの専門において取り組んできたテーマについて自身で振り返るとともに定期的な相互共有を通じ、他の専門で学ぶものたちの考え方やものの捉え方も同時に理解することとなる。培った専門的視野と他者から知る横断的な視野による複層的な視点をもって、これまで体験してこなかった論文の執筆へと向き合う力を獲得する。	
デッサン1	あらゆる表現の基本は「見ること」、「聞くこと」、「読むこと」、から始まる。対象を観察することにより、それまで気づかなかった世界がそこにあることに気づく。しっかりと対象を観察することを重視し、見えたもの捉えたものを伝えるために表現するデッサンの基礎を習得する。デッサン1では、そのために必要な知識や描写の基本を学び、幅広い様々なデッサンの表現を通じて観察力と描写力を養い、表現の礎を築く事を目的とする。	
デッサン2	表現を追求する上で、または思考を整理し編集・表現していく上において、対象物を良く観察し、見える形として表現する事は重要である。デッサン2では、デッサン表現の基礎要素となる、形、線、タッチ、調子、材質感、遠近感、構図、材料などの基礎を学び、描写する力、表現する力である、基礎描写力を身につけることを目的とする。また、より幅広い身近の環境、現象、興味に意識を向け、デッサン表現の幅を広げていけることを目標とする。	
デッサン3	デッサン表現は、対象を「観察する」ことから始まり、次に捉えた「要素を抽出・理解」し、手を動かし「表現する」といった一連の流れが複雑に往復しながら絡み合い成立している。この流れを繰り返すことにより、よりの確な表現として成立する。デッサン3では、表現するうえで必要となる、より深化させた観察力や描写力を様々なデッサンで養う事を目標とし、さらには解剖学的な知見から、人体の形態と機能、その外形と内部構造の関係などを知ることによって、表現力の効果的な向上を目指す。	
デッサン4	この授業では履修者が「デッサン3」までに獲得した力をもとに、デッサンによる表現のさらなる展開として、単に「描写する」、「表現する」だけにとどまらず、さまざまな「表現のバリエーション」を実践しながら、デッサン表現による「作品としての成立」までを目指すこととする。そのため、表現手段や手法といった構成要素も検討するだけではなく、モチーフやテーマの設定を構想し、デッサン表現の「可能性を追求する」ことを目標とする。	
グラフィックデザインソフトスキル	本授業では、コンピューターグラフィックの基本を修得する。具体的には、コンピューターグラフィック作成アプリケーションソフトのスタンダードであるAdobe Photoshop®とAdobe Illustrator®の入門から基本操作の修得を目標とし、ビットマップ画像の補正・加工・合成、ベクトル画像によるロゴやイラストの作成をはじめ、印刷物作成をベースとしたグラフィックデザイン手法の基礎を学修する。本授業で修得したスキルは、個展やグループ展、コンサートなどの社会に向けてのアプローチを告知するポストカードなどの案内物の作成に活用が可能である。また、企画などのプレゼンテーション資料作成においても活用が期待できる。	
芸術学	本講義では、視覚的イメージをコミュニケーションのためのメディアと考え、ヴィジュアル・リテラシー（視覚的な読み書き能力）について理解を深めることを目標とする。扱う対象は、絵画、映画、マンガと多岐にわたるが、それらが「意味」をどのように作り上げているのか、そのメカニズムについて理解を深めていきたい。さらに、そのような理解の上で、近代における「芸術」という制度の成立や「デザイン」という概念の誕生、その変容を幅広く見ていくことによって、芸術と近代社会・文化との関わりを再考する。絵画、彫刻、デザイン、さらには音楽における近代主義（モダニズム）の確立と変容を通じて、私たちが今日受容している「芸術」というものがどのような歴史的、思想的プロセスを経て成立してきたのかを問いたい。このようなプロセスに関する知識を得ることで、受講生自らが学んでいる文化制作を相対化することを目標とする。	

美学概論	<p>美学は論理学や倫理学と並んで人間の認識と行動を対象とする哲学の一分野である。とくに美学においては、美に代表される感性的な価値の判断を出発点として、様々な美的認識と芸術制作を対象とする。計算によって導き出される価値や、道徳や伝統によって定められた価値ではない、純粋な美的価値の存在とそれをめぐる議論について親しむことがこの授業の目的である。</p> <p>授業全体は7つのテーマについて「問題提起」の回と「解説」の回を繰り返すことにより成り立っている。「問題提起」の回の終わりには扱っているテーマに関するアンケートを実施し、次の「解説」の回にその結果を発表・解説するので、そのテーマに対する自分の立場を客観視する手立てとすること。また後述の通り、計7回の「解説」の回で扱ったテーマに関するレポート課題を発表するので、授業時間外に取り組んで各テーマに関する復習とすること。</p>	
現代美術概論	<p>本講義では、主に20世紀から21世紀の世界の美術を、履修者側の予備知識のないところから、具体的な作品に即して、説明する。ある作家が、どうしてそういう作品を作るにいったのか（たとえば、どうして便器が「泉」（マルセル・デュシャン・1917年）なのか）、そのような作品が生み出された時代や世相などの背景や、作者自身の理由を学ぶことで、各地での美術館で開催される現代美術の展覧会をどう楽しむのかを解説する。</p>	
美術史	<p>美術史（art history）とは何か？ それをかみ砕いてみると、美術にまつわる「ひとびとの物語（story）」と理解することもできる。この「物語」は、空想やファンタジーではなく、事実として「過去にあったできごと」である。</p> <p>この基本姿勢に基づいて、本講義では、世界各地の美術品（=過去に人間の手で作られたもの）を彫刻、絵画、建築・工芸の三つのジャンルに分類し、それについて、最低限知っておくべき特徴、作者、制作背景を紹介する。授業を通じて有史から現代にいたる「美術の物語」のおおまかな見取図のインプットを目的とする。</p>	
日本美術史	<p>日本の美術は世界の中でもたいそうユニークな性格をもっている。だが、根底にはアジアに共通するものがある。それは仏教美術である。古くインドを発祥としながら各地でさまざまな形で変化をしたこの大きな基盤の上に、アジア各地で独特の美術が育まれていった。したがって、日本の美術をより良く把握するためには、まず仏教美術について学ぶことが重要である。本講義ではまず仏教美術に関する概説を行ったのち、仏教美術の影響について解説しつつ、日本美術の特徴を見極めていきたい。</p>	
東洋美術史	<p>わが国では近代以降、西洋からの影響が大きくなると、教育現場で東洋美術の歴史や実技を学ぶことがほとんどなくなってしまった。</p> <p>今では多くの西洋の芸術家の名前や作品が一般的に知れわたっているのに対し、東洋については知られていることが極端に少ない。本授業ではまず、多くの人々が現在は忘れてしまった東洋の優れた作品を紹介するとともにそれらの作品の生まれた時代などの背景などを解説する。履修者にはまず東洋美術に興味をもってもらうことを目的とした。</p>	
西洋美術史	<p>本講義では、西欧のルネサンスから十九世紀までの絵画様式を皮切りに美術史への理解を深めることを目的とする。単に個人的な好き嫌いだけでそれらの作品を判断するのではなく、複数の視点から作品を鑑賞する方法も身につけていく。それぞれの絵画にはそれらの作品が生まれた時代や地域ごとの特色がはっきり現われており、その時代その時代の背景や、各地域の当時の様子などをふまえつつ、その特徴を丹念に整理しながら把握していく。</p>	
工芸概論	<p>古代から制作されてきた漆芸、染織、陶芸、木工、金工などは、明治時代（近代）になると「工芸」としてくられることになる。この講義では、とくに漆芸、染織をモデル・ケースとして取り上げ、前近代から近代にかけて、これらのジャンルがどのように変化したか、あるいは、変化しなかったのかを検討し、それらの素材の特性や技術、デザインの変遷を理解する。さらに、各分野において、近代化にどのように向き合い、発展をとげてきたのかその歴史をまなぶことで、現代の工芸制作とデザインの方法を考える。また、適宜その日紹介した作品や事項について、自分の意見・感想をまとめてもらう。</p>	
デザイン論	<p>今日のわれわれが日常生活に使う大抵の物には「デザイン」が施されている。そしてそれらはさまざまなメディアを通じて人々に対して紹介され、選択され、そして購入されている。この授業では、近年の情報メディアの変化と、デザインとの関係を軸としたうえで、現代社会において、デザインに求められていることとはなにかについて、考えていく。「人に対して望ましい状況であることを中心に考えて実践する」というデザイン本来の意義に対する認識を確かなものとしながら、デザイナーの視点や発想や手法への理解を深め、その社会的な価値を自覚することが当授業の目標である。</p>	

<p>素材論</p>	<p>ものづくりでは「素材」とその「加工技術」及び「応用」に関わる知識習得は重要である。更にそれらは技術の進歩とともに急速に変化しており、芸術計画、建築計画や商品開発、CMやアート制作における加工技術もその進歩に対応せざるを得ない。現在では複数技術の融合による多岐にわたる領域にまたがる技術の進歩がその礎になっている。芸術造形・デザイン・建築制作時に最低限必要な、伝統的素材と最新素材及びその加工技術を学習する。</p>	
<p>音楽概論</p>	<p>現在の音楽文化を知る上で、私たちが未知の音楽に出会ったときどのような姿勢で聴き、受け止めているのか、あるいは、私たちが慣れ親しんでいる音楽を私たちがまったく違うバックグラウンドをもつ人々がどのように聴き、受け止めているのかを考えることはとても重要である。技術の発達により音楽の行き来する範囲が大きく広がっている現在、世界中のあらゆる国々でそれまでふれることのなかった音楽に出会うことがあたりまえとなりつつある。この講義では、音楽や芸術、文化を考える方法について、世界のさまざまな地域で行われている音楽実践の事例を通して学ぶ。さらにそれを通して、自分たちの慣れ親しんできた音楽について、それを未知とする人々に対し、自分の言葉で説明する技術を身につけることを目指す。</p>	
<p>ポピュラー音楽論</p>	<p>『ポピュラー音楽史』では、「媒介～メディアエーション」という考え方を中心に、音楽の制作、流通、聴取に係る技術がどのような歴史の変遷を遂げ、それがポピュラー音楽の作られ方、聴かれ方にどのような影響を及ぼして来たかを紐解いてゆく。レコードやCD、あるいはネットやラジオやテレビを通して耳に届くポピュラー音楽は、逆に言えばレコーディング技術やメディア技術なしには成立し得ない現象であり、作り手と聴き手を結ぶこれらの媒介がなければ、音楽は《表現》としてさえ成り立たない。本講義では音楽そのものに耳を傾ける一方で、社会学、政治経済理論、メディア論などの方法を通し、その音楽を可能にしている力学を見極める能力の獲得を目標とする。</p>	
<p>身体表現論</p>	<p>この授業では、身体表現における特に「演劇」を核として学ぶ。何かを「演じる」という行為は学生にとっては縁遠いものも多いことだろう。しかし、幼いころには、多くの子供たちが友人や兄弟、姉妹らとともに「ごっこ遊び」に興じた記憶をもっているのではないか。しかし、いつの間にか子どもはごっこ遊びから「卒業」してしまう。一方で演劇は古代より続く文化の源流のひとつと言え、神話や文学、音楽などのさまざまな文化は演劇という行為とともに発達してきた。この授業では、子どもの遊びのひとつである「ごっこ遊び」と古代から続く演劇との共通点についてさまざまな演劇を紹介しながら感じてもらう。そして人々が演じること、演者を見ることで感じてきたことを理解する。演劇を通じて広がった文化について知ること、文化に対する教養の枠を広げることへとつなげることを目的とする。</p>	
<p>身体文化演習 1</p>	<p>身体を文化の問題として捉える視点、アプローチの仕方、理解の方法について学ぶ。全ての人間が等しく持つ「身体」であるが、文化的に異なる身体観や動かし方、感じ方、表現の仕方、伝え方などがある。本授業では、主に国内における諸文化について学ぶ。特に華道、茶道、柔道、剣道、などの身体の所作や動作による表現を行う具体的な事例を体験することで、自己の身体が文化とどのように関わっているのか、また自己の身体と他者の身体がいかなる文化的つながりを持つものであるのかを理解する。</p>	
<p>身体文化演習 2</p>	<p>身体を文化の問題として捉える視点、アプローチの仕方、理解の方法について学ぶ。全ての人間が等しく持つ「身体」であるが、文化的に異なる身体観や動かし方、感じ方、表現の仕方、伝え方などがある。本授業では、主に海外における諸文化について学ぶ。特にヨガ、太極拳などの身体の所作や動作による表現を行う具体的な事例を体験することで、自己の身体が文化とどのように関わっているのか、また自己の身体と他者の身体がいかなる文化的つながりを持つものであるのかを理解する。</p>	
<p>表現と社会</p>	<p>個人としての表現者が自身の作品を出す先は社会である。一方で表現者自身が属しているものもまた社会であり、たとえ表現者個人がその作品を生み出したとしても、そこには社会の影響が少なからずある。生み出されたさまざまな作品と社会とのかわり、表現者自身と社会との関係性について、特に現代社会に焦点をあてて考えたい。授業では、さまざまなデジタル機器とインターネットの発達により、すべてのひとびとが表現者となり得、かつそれを手軽に社会に発信できる現代社会の特性についても考察する。</p>	
<p>表現と倫理</p>	<p>表現活動においては、常に倫理の問題がかかわってくる。ときにそれは表現者とその題材となった対象との関係であることもあり、時に法、社会との関係であることもある。とくに現代社会においては、多様な価値観の中で、ひとびとの倫理観も変化をかさねており、少し前には問題のなかったことでも、批判の対象となることもある。表現者は倫理的な問題を常に認識し、ときに対峙しながら活動をしていくこととなる。この授業では、現代社会における表現活動と倫理のあり方について、歴史的な事例や、現代において生じた裁判、事件、マスメディアの批判、インターネット上での炎上などさまざまな事例を紹介し、考察していく。</p>	

表現科目	表現と知的財産権	表現活動を職業にするという事は、自らを好き勝手に外部に発信することではない。表現活動は、社会的行為である以上、社会を規律する法律と切り離すことはできない。表現活動を守り支える法律を知り、使いこなすことができること、それは、クリエイターが身につけるべきリテラシーとして重要な地位を占めている。著作権法をはじめとする表現活動を規律する法律の基本的知識と、具体的な表現活動に法律がどのように影響しているかを、具体的事例を交えながら解説する。	
	写真技法	この授業では、カメラや写真表現の経験のない、あるいは浅い履修者を対象とし、写真表現やポートフォリオを作成するために必要な基礎知識と、技術を学ぶことを目的とする。実際に各自が持ってきたカメラを使い、そのカメラの機能と基本操作から授業を始め、ある程度の基本操作を学んだ後、写真スタジオなどを使ったライティングの習得と、Adobe Photoshopなどの写真編集ソフトを活用したデジタルレタッチテクニックの基礎を学ぶ。	
共通教育科目	日本文化概論	近年「日本文化」に関するテレビ番組や雑誌記事が数多く制作されるなど、国内外で「日本文化」に注目があつまっている。しかし、そうしたメディアの情報では、表面的な部分しかとりあげられないことも多い。本講義ではいわゆる「日本文化」について、現在ある事象と、そこにいたる歴史的変遷や背景について学び、「日本文化」について考えるための基礎的な知識を習得することを目標とする。「日本文化」と一言で言っても、分野もさまざまであり非常に幅広い。そのため、京都精華大学があり、受講生にも身近な場所である「京都」を中心におき、「京都」にかかわりの深いものを中心にとりあげる。	
	英語 1	「英語 1」では、まず、英語を使う上で必要となる基礎的なコミュニケーション能力を支える文法力や語彙力を強化することを目標とする。履修者が高校までで学んだ英語の文法や語彙の知識を確認したうえでレベル別にクラスを配当し、さらに高いレベルのコミュニケーションを可能にするための文法力・語彙力を身につける。語彙面では3,000語レベルの語彙の定着を図り、文法面では基礎的な文法事項を整理・確認することをめざす。	
	英語 2	「英語 2」では、「英語 1」に引き続き、英語を使う上で必要となるコミュニケーション能力を支える文法力や語彙力を強化することを目標とする。英語 1と同じ習熟度別クラスのなかで履修者が高校までで学んだ英語の文法や語彙の知識を確認し、さらに高いレベルのコミュニケーションを可能にするための文法力・語彙力を身につける。語彙面では3,000語レベルの語彙の定着を図るとともに、文法面では基礎的な文法事項を整理・確認する。	
	英語 3	「英語 3」は必修科目として配置されている。日本語を母語とする国内学生を対象とした必修科目である「英語 2」までに身につけた能力をふまえ、英語による「読む」「書く」「聞く」「話す」の4技能の運用能力を発展的に高め、学術目的で使われる英語を理解するとともに、自分の考えを英語で的確に発信できるより高度な技術を身につけることを目標とする。また、授業を通して、多様な文化に関する知識と理解を深め、国際的な視野を身に付けることもめざす。	
	英語 4	必修科目である「英語 3」につづくこの「英語 4」においては、担当教員が紹介する資料や各自の持ち込んだ資料などを通じ、英語の文章構造とそれに伴う単語や文法について学習することを通じ、学問や芸術分野について履修者が英語でディスカッションできるようになることを目標とする。さらに英語によるライティングの力を伸ばすことで、自分自身の専門分野における研究活動や表現活動について、英語でプレゼンテーションできる力を身につけることを目的とする。	
	日本語 1	「日本語 1」では、大学でレポートや論文を書くための基本的な技術を養う。与えられた情報を整理し、レポートや論文にふさわしい形式と組み立て方で、自分が言いたいことが読者に誤解なく伝わるようにまとめることを学ぶ。文体レベルで気を付けるべき句読点や記号の使い方について学び、さらに事柄に視点をあてた客観的な文、主述関係、引用のしかた、参考文献表の書き方、アウトラインの作り方、報告型のレポートの書き方などを学ぶ。レポートや論文にふさわしい基本的な「形式」を身に付けることを目標とする。	
	グローバル科目		

日本語 2	「日本語 2」では、大学で学ぶために必要な、レポートを作成する方法を学ぶ。的確な表現を使い、正しい構造の文で、論理的な文章を書く力を身に付ける。また、さまざまなジャンルの作品における記述や批評をレポートし、合評における自分の作品のコンセプトや説明に役立てる。さらに、ショートショート、短編小説、エッセイ、新聞記事、論説文などさまざまなテキストを読み、あらすじをつかむ力を身に付け、解説文の必要な項目に着目する力を養う。また、簡単な批評や論文などを読み、作品のどこに着眼して批評が行われているかを考察する。	
日本語 3	「日本語 3」では、日本語能力試験1級レベルの日本語能力の習得を目指す。文字・語彙、聴解、文法、読解の問題を解きながら、日本語への理解を深める。また、現代小説やエッセイに加え、新聞記事などの生きた教材を読み、日本語の読解力を伸ばし語彙力を身に付ける。読解問題に取り組む際には、まず語彙や表現について学習した上で、練習問題を解いて理解を深める。また、本文について話し合いレポートを作成することで、アカデミックな文章を書く技術も養う。	
日本語 4	「日本語 4」では、日本語能力試験1級レベルの日本語能力の習得を目指す。漢字力と語彙力を伸ばし、時間や様子、関係性などを表す機能語について理解を深める。また、現代小説やエッセイなどに加え、新聞記事などの生きた教材を読み、日本語の読解力を伸ばす。読解問題に取り組む際には、まず語彙や表現について学習した上で、練習問題を解いて理解を深める。また、アカデミックな文章を書く技術を養うため、論理的なレポートを作成する実習を行う。	
Business English	情報化社会では世界中から発信される様々な情報を的確に読み解く外国語リテラシーが必要となります。本授業は、「聞く・話す・読む・書く」の4技能の側面からビジネスの場面で必要となる基礎的なコミュニケーション力を養成することを目的とします。ビジネス英語特有の語彙・表現を身につけると同時に、多様な価値観や異文化への理解を深め、異なる意見に耳を傾け、多角的に判断する思考力を身につけることで様々な場面で応用可能な英語による交渉力を向上させます。	
English discussion	この「English discussion」では、少人数のクラスにおいて、英語によるスピーキング力を徹底して強化し、アカデミックな環境で必要とされるディスカッション能力の育成を目標とする。この授業はすべて英語でおこなう。各回で講師が紹介するテーマに関するリーディングもおこなった上で、履修者の身近な関心事など、さまざまなテーマについて話しあう練習を重ねることで学生自身が英語でディスカッションできるようにしていくことを目的とする。	
Effective presentation	この「Effective presentation」では、各自がそれぞれの題材を設定し、構成方法、視覚資料の使い方、効果的な言語・非言語メッセージの伝え方など、英語での他者へのプレゼンテーションにおいて不可欠なスキルを学んでいく。授業においてはノートパソコンの持込を必須とし、各自のパソコンにインストールされたプレゼンテーションソフトを利用する。また、基本パターンをベースにアウトラインを作成し、回を追うごとに徐々に長いプレゼンテーションができるようにする。	
English for studying abroad	この授業は、主に海外大学への留学希望者のための授業である。留学時に必要となるTOEFLやIELTSなどの試験対策、スピーキングセクションの訓練などを行うとともに、ノートテイキングや口頭発表など、留学先の大学でのアカデミックな活動にスムーズに参加するための英語によるコミュニケーション能力を養成する。すでに留学先についての候補が決まっている学生についてはその留学先に適したテーマなどをもとに授業の課題を設定するなどの指導もおこなう。	
中国語 1	日本においても中国語圏からの外国人留学生・旅行者が飛躍的に増加している。世界的な物価の変動に伴う円安によるショッピングなどを受けて、今後ますますこの傾向は高まるといわれている。そのような中、コミュニケーション能力を重視する中国語学習が求められている。この授業では、中国語の発音や基礎文法とともに、実用的な会話を習得する。異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力の向上を重視し、聞けて話せる中国語をめざす。	

中国語 2	日本においても、中国語圏からの外国人留学生・旅行者が飛躍的に増加している。世界的な物価の変動に伴う円安によるショッピングなどを受けて、今後ますますこの傾向は高まるといわれている。そのような中、コミュニケーション能力を重視する中国語学習が求められている。「中国語 2」では、「中国語 1」で学習した内容を踏まえ、基本文法の習得を進める。異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力向上を重視し、聞けて話せる中国語をめざす。	
韓国語 1	日本に最も近い朝鮮半島の人たちが使っている言葉と文化に親しんでもらうことが、この授業の大きなねらいである。この授業では、韓国語・朝鮮語固有の文字であるハングルの読み書きとともに、自己紹介などの基本的な会話ができることをめざす。また、朝鮮半島のことを理解できるように民族の風土や習俗などの紹介をおりまぜて、授業を進めていく。在学中に短期間でも実際に現地に赴く意欲を刺激するような現地の情報なども提供しつつ、言語の基礎的な能力習得をめざす。	
韓国語 2	「韓国語 1」につづき、日本に最も近い朝鮮半島の人たちが使っている言葉と文化に親しんでもらうことが、この授業の大きなねらいである。この授業では、韓国語・朝鮮語の基礎文法の学習と会話の練習を通じて、基本的な日常会話と読解、作文ができることをめざす。また、朝鮮半島のことを理解できるように民族の風土や習俗などの紹介をおりまぜて、授業を進めていく。在学中に短期間でも実際に現地に赴く意欲を刺激するような現地の情報なども提供しつつ、言語の基礎的な能力習得をめざす。	
フランス語 1	この「フランス語 1」は、発音の習得および基本構造の理解と必須語彙の習得により、自己紹介や自分の住んでいる場所、好きなものなどについて初歩的な語句を使って会話による意思疎通ができることを目標とする。会話と並行して、簡単な文章を読む練習をおこなう。また、フランスの美術、音楽、映画、ファッションなどにも触れ、フランス文化への理解も深めることで、在学中に短期間でも実際に現地に赴く意欲を刺激するような現地の情報なども提供しつつ、言語の基礎的な能力習得をめざす。	
フランス語 2	この「フランス語 2」は、「フランス語 1」に引き続き、発音の習得および基本構造の理解と必須語彙の習得により、量や時間の表現、未来や過去の表現、比較表現などについて会話による意思疎通ができることを目標とする。会話と並行して、「フランス語 1」よりも長い文章を読む練習を行う。また、フランスの美術、音楽、映画、ファッションなどにも触れ、フランス文化への理解も深めることで、在学中に短期間でも実際に現地に赴く意欲を刺激するような現地の情報なども提供しつつ、言語の基礎的な能力習得をめざす。	
タイ語	「タイ語」では、発音記号を用いて学習し、簡単な日常会話ができるようになることを目標とする。タイの文字は子音文字と母音符号によって成り立っている。授業ではタイ文字の書き方を練習し、簡単な読み書きができることも目指す。さらに、総合的な学習として、タイの文化を紹介し、タイをより身近に感じ、タイ語および文化への理解を深める。履修者はこの授業を通じ、短期間の現地観光をする際に苦にはならない程度の言語の習得を目標とする。	
ベトナム語	「ベトナム語」で履修者は、ベトナム語を学習するにあたって基礎となる発音、文字の読み方、書き方からはじめ、基本語句、基礎文法を学ぶ。ベトナム語の基礎文法、初歩的な表現を習得することを目標とする。授業では、発音、文字の読み書きを学んだ後、基礎的文法事項を学んでいく。音声も用いた具体的な会話表現の中から文法事項を学んでいき、重要な定型表現は暗記することをめざす。履修者はこの授業を通じ、短期間の現地観光をする際に苦にはならない程度の言語の習得を目標とする。	
インドネシア語	インドネシア語はインドネシア共和国の共通語として多くの人々に話されており、マレーシア語とマレー語とも非常によく似た言語で、それらの隣国でも通じる。表記は、アルファベットで、しかもローマ字読みすれば、大体通じるので、発音も構造も比較的簡単である。インドネシア語では、文字の発音から始め、初歩的な文法や文章を使って、インドネシア語の日常会話や旅行の時に役に立つ会話の修得を目標とする。授業は、口頭の練習を中心に進めていく。	

スワヒリ語	「スワヒリ語」は東アフリカ（タンザニア・ケニア・ウガンダなど）を中心に、地域共通語として広く話されている。この授業では、スワヒリ語の初級文法について学び、簡単なスワヒリ語文の作成の能力と、簡単な会話の能力を身につけることを目標とする。スワヒリ語にまつわるエピソードとして、タンザニアを中心とした、スワヒリ語圏の国の文化についても紹介する。履修者はこの授業を通じ、短期間の現地観光をする際に苦にはならない程度の言語の習得を目標とする。	
ドイツ語	「ドイツ語」では、ドイツ語のアルファベットの紹介と発音練習からはじめて、ドイツ語の基礎的な文法事項について学ぶとともに、授業で出される練習問題をおこなないながら、簡単なドイツ語の文章が読め、会話できることを目標とする。また、言語の学習と同時に、ドイツ語圏の国々のさまざまな文化や社会についても触れ、異文化理解を深める。履修者はこの授業を通じ、短期間の現地観光をする際に苦にはならない程度の言語の習得を目標とする。	
スペイン語	スペイン語は20カ国以上、約4億人に話されており、国際共通語のひとつと言われている。「スペイン語」では「読み・書き」よりも「聞く・話す」ことに重点をおきながら、スペイン語の基礎を学んでいく。まず、スペイン語の音に慣れ、発音を身につけ、自己紹介、挨拶表現などを学ぶ。また、文法ではスペイン語に特徴的な点を学び、文法で学んだことを用いながら会話学習、聴解練習を通じて、自分の身の回りのことが表現できるようになることを目指す。	
イタリア語	「イタリア語」では、初めてイタリア語に接する学生を対象に、発音から始め、基本的な文法を学習しながら、さまざまなシチュエーションに応じたイタリア語表現を身につけ、簡単な会話ができるようになることを目標とする。言語の学習と並行して、イタリアの文化をより深く理解するとともに、イタリアと日本の文化間の違いや自己表現の違いなども学ぶ。履修者はこの授業を通じ、短期間の現地観光をする際に苦にはならない程度の言語の習得を目標とする。	
サステナビリティと社会	人類の経済・社会活動に起因する地球環境問題が世界中で顕在化する中、現代の世代が将来の世代の利益や要求を充足する能力を損なわない範囲内で環境を利用、生活していく「持続可能性」が、人類がこの地球環境問題を克服するための一つの指針として重要視されている。 この授業では、各分野における持続可能な社会に向けての取り組みの状況と課題を学習する。 また受講生が大学4年間で獲得を目指す専門との関係も含めて、持続可能な社会のためにどう取り組むかを考える。 最終回の授業では、本人の理解を得たうえで受講生から提出された期末レポートを発表してもらい、その内容についてのディスカッションを行う。	
現代社会の諸問題	現代社会の諸問題について、倫理、社会、文化、政治、経済など様々な観点からアプローチする。新聞、雑誌、テレビ、インターネットなどのメディアで報道されている現在進行中のトピックスをケース・スタディとして取り上げながら、さまざまな立場・視点から考察を加える。対立構造にある問題については、自らの意見をまとめて表明できるようにするとともに、他者の立場や視点を俯瞰的に理解し、問題の本質をたどる姿勢・態度を身につける。	
海外ショートプログラム入門	「海外ショートプログラム入門」では、現在のわたしたちを取り巻く世界の諸課題を改めて認識するとともに、短期あるいは長期の旅や留学等を通じた、海外への渡航体験の意義を考察する。履修者は各自の専攻や共通科目でこれから在学中に体験するであろう海外でのフィールドワーク等の調査技術を身につけるとともに、異文化適応のための心理学に触れ、危機管理の方法についても学び、各自のこれからの渡航、滞在と調査のための計画を発表する。	
世界と食	2050年には世界の人口は100億人に達すると言われ、食の問題は益々注目を浴びていくことになる。しかし、食の問題は、カロリーの問題であるばかりか、共食による社会的紐帯を確かめ合い、加えて、味覚という人間の嗜好や快楽の問題にも結びつく。この講義では、世界の食文化を通じ、我われの食の問題を見直し、将来の食糧問題の解決策を探る。受講者は、自らの食生活を顧み、グローバルな問題として食の問題を考察することが求められる。	

グローバル科目	日本語学概論	この授業では、「日本語学」の基礎知識を学ぶとともに、周囲に溢れるさまざまな「言語現象」、学内にも多く在籍しているさまざまな国から来ている外国人留学生の存在に目を向けることで、21世紀を生きる上で必要とされる論理的思考力および自らを相対化して客観的に物事を分析する力を養う。授業は主に講義形式でこない、授業の指定教科書の第1部「社会・文化・地域」、第5部「言語一般」、第6部「日本語の構造」の内容を中心に進める。	
	言語学	この授業では、「ことば」について学ぶ。各回のテーマとしては、すべての言語に共通する特徴や、人間が使うことばに対し、動物はどのようなコミュニケーションをとっているのか、ことばはどのように、なぜ変化してきたのか、などの具体的な問題を取り扱うことを予定している。これら各回のテーマに触れることで、ことばとはそもそも何なのか、どのように働くのか、という根源的な問いについて、受講者自身がその答えを見出すことをめざす。	
共通教育科目	自由論	この「自由論」は本学が標榜する「自由自治」ということばを自らのことばとして語れるようになるための入り口としての役割を担う。本講義の主たるテーマは、いわゆる意思としての自由ではない。本講義で論じるのは、誤解されやすい哲学用語という必然にたいしての意思の自由ではなく、市民としての自由、社会における自由についてである。逆にいえば、個人にたいして社会が正当に行使できる権力の性質、およびその限界を論じたい。	
	シティズンシップとダイバーシティ	「シティズンシップ」とは「市民権」を指すが、「日本では市民社会が不在である」あるいは「未熟である」と、常套句的に言われる。そのとき、「市民社会の不在」ないし「未熟」とは何を指しているのだろうか。そして、それが本当のことだとするならば、私たちは何を知り、考えなければならないだろうか。本講義では、毎回折々の時事ニュースを素材に、日本社会で起こる事件等の背景としての「日本の市民社会の諸問題」に接近する。	
	創造的思考法	こんにちの多様化・複雑化が加速する社会では、問題解決や価値創出の手段として、様々な要素を有機的に組み合わせ、全体としての新しい価値を創出して行く創造的思考が求められる。このような思考をはじめ、アートあるいはデザイン的な視点やアプローチなどを学び、世界を捉えることで、各自の属する専門分野を超えたクリエイティブな発想力と提案力を身につけることを目標とする。授業ではアートシンキングやデザインシンキングなどのさまざまな思考法とそれを活かすような事例などを紹介するとともに、各自の問題意識、専門分野などをもちよることで、視野の拡張と思考の深化、拡大をめざす。	
	情報と倫理	今日のインターネットの普及は、電子メール、Webによる情報検索、オンラインショッピングなど、私たちの生活にさまざまな恩恵をもたらしている。しかし、便利になった反面、個人情報の流出、著作権の侵害、ネット上での詐欺など、いろいろな問題が起こっている。さらに、インターネットや携帯電話の利用者が低年齢化するとともに、児童や生徒を巻き込んだトラブルや事件も目立つようになってきた。 本講義では、初めに、インターネットの「光と影」（便利な点と危険な点）について解説する。次に、インターネット社会（情報社会）におけるルールやマナーを考えていく。ネット被害やセキュリティについても学習する。また、個人情報とプライバシー、知的財産全体について概説したい。	
	人権と教育	人権とは「人が人として当然に有する権利」である。しかしながら、過去から現在に至るまで、規模の大小や国内外を問わず、日々人権侵害が発生しており、特に、マジョリティ（多数者）中心にシステムが構築されている現代社会においては、マイノリティ（少数者）は絶対的に社会的弱者の立場にあるがゆえに人権侵害を受けやすい傾向にある。そこで、こうした現状を踏まえ、マイノリティを巡る人権侵害事例を中心に扱いながら、人権とはそもそも何なのか、そして、人権を守る手段には一体どういったものがあるのかについて学ぶことを目的とする。 なお、本講義では従来の一般的な講義形式にとらわれず、ビデオ教材などを使用することによって、より身近な問題として感じられるように配慮をし、また、グループワーク等を通じて、受講生自身が主体的に考え、学べるような授業を行う予定である。	
リベラルアーツ科目			

グローバル化と社会	<p>私たちが住まう日本という国の抱えるさまざまな問いを皮切りに、世界の現状と来歴（どのような経緯で今のようになったのか）、これからどう変動していくのか、私たちはその奔流のなかで人間として尊厳を保ちあえるのか、といったことを考えてみたい。果たして日本は先進国なのか、「日本の常識は世界の非常識」といわれるのはなぜか、平和憲法を持ちながら戦争で利益を得ている矛盾、移民問題など、日本に暮らす中でもさまざまな問題を感じる機会があるだろう。あまり抽象的な次元で議論するのではなく、現代の国際社会が直面する具体的問題を手掛かりに、視野を広げる作業をしていく。</p>	
障害学	<p>現在の社会において、障害者は圧倒的に少数派（マイノリティ）である。少数派であるということは単に「数が少ない」という意味にとどまらず、多数派（マジョリティ）のこじか考えずにつくられた社会の中で、さまざまに抑圧されたり、不利益を受けていることを意味する。障害者の場合、「障害があるから、いろんなことができなくても仕方がない」と考えられてきた歴史が長くあった。さまざまな障害者が何を考え、どんなふうに住んでいるのか、その「なまの声」を知らない人が圧倒的に多いのではないか。この授業では、さまざまな障害者の姿、経験、意見などを紹介し、その背景を考えることを通して、私たちをとりまく「社会のあり方」を多角的にみつめていく。「目からうろこ」の経験をしたり、障害のことを考える・行動するのは「おもしろい、やりがいがある」と思えるためのきっかけを提供できればと思う。</p>	
哲学入門	<p>ポスト・トゥルース（真実の後）の時代、そう現在が呼ばれ始めている。真実や事実というものがないがしろにされ、政治的効果を狙った根拠がない誹謗中傷や噂話、すなわち「デマ」が猛威をふるっており、実際に世界中でその効果は大規模に出現している。だが、たとえば、諸君が愛するもの、愛する人についてデマしか知らなかったとしたらどうであろう。そのような悲しいことが他にあるだろうか。このような衰弱が、許されてしかるべきなのか。わたしたちは、このような趨勢に抵抗するために、芸術的な創造行為は政治的な創造行為と切り離せないことを確認しつつ、「真理の芸術（アート）」としての哲学を考えたい。端的に創造行為に「役に立つ」ように、具体的に芸術家や音楽家などの名前をあげつつ、「哲学的芸術入門」としても受講できるように配慮する</p>	
政治学	<p>本講義では、現代政治の構造を、とりわけ「階級」と「ナショナリズム」に着目しながら、考察する。「階級」は、「1%と99%」の標語に象徴されるように、現代世界を引き裂く巨大な力として現れている。他方、「ナショナリズム」は、同胞意識を基礎として、分裂を縫い合わせる事が期待されている。しかし当然、現実には、止めどなく分裂が進行し、ナショナリズムは排外主義へと転化しているのが実情である。なぜ、現実がこのような状況になっているのか。本講義では、近代の政治史を振り返りつつ、日々現れる時事的トピックにも言及しながら、現代世界の政治状況を解析する。</p>	
法学	<p>この授業では、身近なニュースや問題を題材に、憲法・刑法・民法という代表的な3つの法律を学習する。法律について日常的に身近に感じることはまれかもしれない。日ごろ、無縁に感じる法律について、「難しい」と思っている方も多いだろうが、一方で、我々は知らず知らずのうちに法律のバリアに守られ、法律にしたがいながら生活をしている。刑事裁判とも無縁なつもりでも裁判員として関わることも起こり得、些細な日常のやりとりにおける損害でも法律が機能する事もある。選挙権は憲法改正への投票権をもつこととなる。普段の何気ない風景や場面に潜む「法」を発見し、「法学」という視点からものごとを考える力を養うことを目標とする。</p>	
日本国憲法	<p>「憲法」はテレビや新聞で見聞きするものだけでなく、私たちの「あたりまえ」の生活にも「憲法」が大きく関係している。そうした「憲法」の働きを広く知り、それに基づいて考える能力を身につけることが、この授業の狙いである。現在、「憲法」を改正しようという議論もさかんになっている。そうした議論を少しでも身近なものとして考えられるようになるため、授業では、身近なニュースや問題を題材に、そこに潜む「憲法」を発見し、最終的には「憲法」についての自分の意見を表現できる力を身につけることを目指す。</p>	
物語論	<p>「物語」の発生と展開を知り、その特色について、関連する諸事情にも広く目を向けて考えられるようにする。世界各地で生まれた「物語」はどのようにして生みだされたか、生み出された物語が神話、演劇、文学などへと発展し、生成されていったか、各地のさまざまな事例を紹介しながら学ぶ。世界中で生み出された物語について、地域、時代などの背景に触れ、その類型化などの分析を行う。加えて、現代でも生み出されるさまざまな物語についてもこれらの物語と比較することで、「物語」とひとびとのかかわりについて考える機会とする。</p>	

考古学	考古学とは、その地に生きていた人々が地上や地下に残したさまざまな痕跡（遺跡・遺構・遺物）から歴史を考える学問である。考古学の「遺跡や遺構や遺物のような物質的な資料から歴史を読み取る」という独特な手法は、文献資料から歴史を見る方法とは根本的に異なる方法である。授業では、このような考古学の特徴とその方法を具体的に解説したうえで、環境と道具に関連してエジプトを、思想と文化に関連して中国を取り上げた後、日本の古代はどうとらえられるのかを探っていく。	
民俗学	「民俗学」というと、古いことや過去について学ぶ学問であると考えられることが多いが、この授業では、現代を生きるわたしたちの問題として「民俗」を考える。そのためにこの講義では、盆や正月の行事など、私たちにとってできる限り身近な民俗的事象を多く取り上げる。それらの行事の検討を通じて、現代の生活と民俗との深い関わりを認識し、自分自身の考え方や行動を、民俗の視点から、今一度見つめなおすことを目的とする。	
情報科学概論	この「情報科学概論」では、情報科学技術のさまざまな基礎事項を理解し、コンピュータ・ソフトウェア、知識情報処理、情報理論、数理科学とその応用、ネットワーク、データマイニング、アルゴリズム、モバイルシステムでの情報伝達等の現代社会に広がるさまざまな分野の概要や研究動向を学ぶ。履修者は現在社会において生活の中に溶け込むものの中にある技術的な面を知ることから、これからの時代におけるさまざまな表現活動と技術の関係性を理解し、在学中の表現活動における広がりや可能性を見出すとともに、社会の可能性と問題を認識する事を目的とする。	
データサイエンス入門	データサイエンスは、21世紀を切り拓く分野であり、ビッグデータ分析、人工知能などの新技術を包含するだけでなく、社会、ビジネス、自然環境における意思決定、問題解決に不可欠な基盤的な科学となってきた。本講義は、データサイエンスの今日的な意義、歴史・将来展望、基礎的な知識、学習方法を俯瞰的に学習するとともに、実際にデータサイエンスのもたらすビジネス・社会的なインパクト事例や最先端な研究トピックスを紹介する。これらの講義を通じてデータサイエンスの重要性について理解を深める。	
統計的思考法	あらゆる学問分野、産業分野で、調査・実験・観測などの様々なデータを数学的に扱うには、確率と統計が必要となり統計によりデータを整理・分析するための手法が提供され、確率はその基礎的な数理となる。この「確率統計的思考法」においては、統計データ解析をおこなう際に必要となる確率と統計の基礎を、扱う。入学するまで数学を苦手とする学生においても、コンピュータの基本ソフトを活用しながらその数字の意味や背景を知ること、自然と思考方法を習得できるようになることを本授業の目的とする。	
プログラミング1	こんにちの社会において、ひとびとの誰もが日常的に触れているインターネットだが、このインターネットにおいては、ウェブ上のプログラミングは欠かせない。プログラミング分野において得に身近なものであるこのインターネットについて、この授業ではWeb標準技術であるHTML5、CSS3、JavaScriptの基礎的な要素をまんべんなく修得して、この授業の合間や、修得後も自学・自習をしながらプログラミング開発できることをめざす。	
プログラミング2	今日の社会において日常の中に隠れているプログラミングについて理解をするため、「Python」などのプログラミングに慣れていない履修者でも取り組みやすいアプリケーションを用いたデータの加工、分析、可視化技術を身につける。このようなスキルを修得することを通じ、問題解決力や論理的思考力、創造力を養うために、オンラインコンピュータゲーム上で建造物や自動装置、論理回路などの製作をプログラミングで実現する演習を実施する。	
プログラミング3	コンピュータは、極めて高度な情報処理を人手を介さずに行っているように見えても、どのような手順で情報を処理・加工するかを指定する命令の列（プログラム）に従ってのみ動作している。プログラミングとは、コンピュータを思い通りに動作させるためにプログラムを作成する行為である。本授業では、演習を通して実際にプログラムを作成することで基本的なプログラミング技術を習得し、コンピュータの基礎知識を習得することを目的とする。なお、本授業では、プログラムを記述する言語（プログラミング言語）として、現在最も勢いのある言語のひとつであるPythonを用いる。	

プログラミング 4	今日の社会においてさまざまな場所でデジタル画像は普及している。特に、スマートフォンの爆発的な普及でより身近なものになった。一方で技術的な進歩もめざましく、計算機による画像処理は科学から娯楽まであらゆる分野で精力的に研究されている。この授業では、授業で紹介するいくつかの課題を通して、画像処理とそのプログラミングによる実装を学ぶ。またグループワークによって実際に動作するシステムの構築に挑戦し、理解を深める。	
情報テクノロジー 1	スマートフォンなどの情報端末は、情報社会において生活やビジネスに欠かせないツールとなりつつあり、通信の技術革新と生産技術の進化で今や社会基盤として世界的にも広く浸透するに至った。また今後も新しい技術により、情報端末はウェアラブル端末などの新しい形に進化し、益々生活に浸透するものとなると思われる。本科目では、情報端末の歴史をたどりながら、情報端末の通信方式やサービスの仕組みについて学習する。また、スマートフォンによるアプリやインターネットサービスの活用、画像や動画などのマルチメディアコンテンツの作成方法などを通じてビジネスへの有効活用ができることを目指す。	
情報テクノロジー 2	デジタル技術の発展とインターネット利用の拡充は、様々な情報サービスや新しいビジネスモデルを創出しただけでなく、人間社会へ多大な影響をもたらした。本科目では、アナログ情報のデジタル化から圧縮技術の基礎を学び、その上でインターネットの利便性の広がりに伴う様々な技術的取り組みを理解する。さらに、これらの技術革新が産業構造や一般生活にもたらした影響と変化について、事例を以て理解し、様々なサービスモデルの創成と人々のITスキルの向上が今後の社会をどのように変化させていくのか、その考察も試みる。	
人類と人工知能	本講義はビッグデータと人工知能についてこれまでの歴史、我々との関わり合いを事例を挙げながら紹介する。人工知能とは人間の思考プロセスをモデル化した処理を含むソフトウェア技術である。ビッグデータに人工知能を適用することにより、これまで知られてない新たな知識の発見、蓄積、統合、配信を実現している。ビッグデータ分析は人工知能が適用されることにより、次世代の新たな人智を築く基礎となりつつある。本講義では、実際のビッグデータに人工知能を適用することによってどのような知識エコシステムを生むのか、事例を紹介しながら、その適用手法について学ぶ。	
教職コンピュータ入門	教職課程履修者を中心に、マルチメディアを扱うためのソフトウェアの使い方を学ぶ。画像処理、3DCG、表計算ソフトを用いた二進数十六進数の計算などを理解することで、コンピュータの使い方だけでなく構造を学習する。以上の講義をふまえて教職課程上必須となる知識を学ぶとともに、教職免許取得後の教育現場において、各々が生徒へコンピュータの操作や仕組みを説明できるだけの技術と知識を修得する事を目的とする。なお、教職課程履修者を主な対象とした科目であるが、今日の社会において必要不可欠なものとなるこれらの技術を修得することは教職課程対象者でなくとも必要な知識では全くない。	
自然科学概論	人類は自然科学と向き合い、その発達とともに今日の社会を築いてきたといえる。この「自然科学概論」では、物理学、科学、生物学、地球科学、天文学など自然科学の各分野それぞれの成り立ちや体系、解明をめざす問題、自然科学全体や社会とのかかわりなどについて学ぶ。自然科学全体を概観し、情報化時代の現代において、「人間とは何か」、「科学的認識とは何か」、科学技術が人間に何をもたらしているのかについて理解を深める。	
科学史	この授業では、古代から現在に至る科学の歴史を概説する。現代の科学や科学技術を考えるうえで、17世紀のヨーロッパにおいて起こった「科学革命」は重要なイベントである。この科学史上の特出すべき事象を焦点としながら、近代科学の方法論と自然観がどのように形成されてきたかを具体的に理解し、その特徴と問題点をさぐる。授業では、各時代に起きた特筆すべきできごとを紹介し、それらのできごとと現代社会との関係性などを紹介し、「歴史」と自身とのつながりについても考える機会とする。	
生物学	現生生物は長い地球の歴史の中、40億年近い時間をかけて多様に進化をしてきた。その長い時間の中で、生物領域に特有の様々な仕組みや形や働きが選択され分岐してきた。この講義では、生物多様性の重要性や、ひいては「ヒト」という生物の特性を理解していくことを目指す。具体的には、生物現象の一定の領域の諸事例を提示しながら、どのような構造と機能が、それを支え、そこからどういう生物学的意義が明らかになるのかを考える。	

リベラル アーツ 科目	数学的思考法	現代社会では、種々の社会現象、自然現象の分析に数理的方法や数学的思考がもち られている。数学とその基礎となる数学的思考は、さまざまな学問分野の基盤のひ とつとよいうてよいだろう。この講義では、数学と数学的思考の歴史を概観し、数学 的思考の基礎となる数学的論理や方法を学び、芸術的・文化的学問との関係や異同に ついて、具体的な数学の領域を参照しながら学んでゆく。授業においては履修者自 身が実際に数学的な思考につながるワークに取り組むことで、実践的に思考法を身 につける時間を設ける。	
	行動心理学	心理学の中の特に「行動心理学」は、意識を対象とする「心理学」に対し、「全 体的行動の科学」としての心理学を総称するものにあたる。この授業では、その入口 として、比較心理学、動物心理学、エソロジー、行動生態学、比較認知科学、人類 学、進化生物学などの諸領域で明らかにされた知見を総合して、行動の機能、発 達、進化について概説する。進化心理学についても簡単に紹介する。さまざまな領 域を知ることにより、発達してきた心理学の体系を理解し、さらに心理学を考える 上での入口としたい。	
	スポーツ実習1	特に教職課程における必修科目であるこの授業では、スポーツや身体表現の実践を 通して身体運動能力を養うとともに、健康の保持・増進をはかる。動きと表現、動 きとリズム、動きと身体構造を学ぶため、卓球、バスケットボール、テニス、バ レーボール、バドミントン、フットサルなど一般のスポーツ競技だけでなく、ダン スや身体科学等の要素を取り入れた授業も含めてクラスを構成する。自身が各種種 目、競技を体験することで、教員をめざすものにおいては、生徒を指導する際の技 術を実践的に学ぶものとする。	
	スポーツ実習2	特に教職課程における必修科目であるこの授業では、スポーツ実習1につづき、ス ポーツや身体表現の実践を通して身体運動能力を養うとともに、健康の保持・増進 をはかる。動きと表現、動きとリズム、動きと身体構造を学ぶため、卓球、バス ケットボール、テニス、バレーボール、バドミントン、フットサルなど一般のス ポーツ競技だけでなく、ダンスや身体科学等の要素を取り入れた授業も含めてクラ スを構成する。自身が各種種目、競技を体験することで、教員をめざすものにお いては、生徒を指導する際の技術を実践的に学ぶものとする。	
社会 実践 力 育 成 プ ロ グ ラ ム	大学連携プログラム	この授業は集中授業として開催を予定している。主に夏季休暇期間などを利用し、 国内外の大学間で連携した授業を開講する。各大学における共通した専攻分野ある いは異なる分野の学生が一同に会し、共同で1つの目的に沿ったワークショップや 演習などを通じ、それぞれの分野における学びを共同体験する中で生まれる新たな 知見や技術を修得する。授業はグループワークなども取り入れたものとなるが、各 グループは原則として別々の大学、学部のもの同士で構成されるものとし、授業を 通じた新たな視野の獲得に重きを置いた形で開催する。	
	インターンシップ1	この科目では、自由で創造的な未来を築くためにはどのような社会へのかかわりが 求められていくのか、社会問題解決に向けたイノベーションを実践するNGO・NPOで の活動を通して、「組織人」としてではなく「社会人」「地球人」としての社会の 関わり、働き方を考える。日ごろの大学での学びが社会でどのように役□つか、そ の社会的な役割や意義を□解するとともに、学ぶ楽しさや面白さの気づきを、「幅 広い業種での職場体験」を通じて検証する。	
	インターンシップ2	企業や行政機関が独自に募集を行うインターンシップ先や、全国の経営者協会等が 斡旋するインターンシップ先の中から、希望するインターンシップ先を探し出し、 許可を得てきた学生に対して、その自主的な活動をバックアップすることを目的に して開講されている科目である。自らが受け入れ先を探し、交渉まで取り組むこ とにより、自らの取り組みたい関心を深め、意欲を高め、より充実した体験を通じた 自らの職業観、社会人としての能力向上をめざす。	
	海外ショートプログラム	この授業では本学が用意する世界各地が舞台となる。海外の現場での学修を通し、 学生がグローバルな視野を獲得する契機とする。学修目的を大きく「語学研修型」 と「テーマ設定型」の2種類に分け、それぞれのプログラムごとの目標に向けて、 1週間から4週間程度、海外の教育機関等の現場で受ける実地研修を通し、異文化 での生活を体験しながら行う学びによって、グローバルな視野を獲得し、より高度 な学修への動機づけを行う。この授業は現地でのものを基本とするが、現地に訪れ る前には現地の文化や諸制度を理解するための事前学習と、事後の報告会などを予 定している。事前の理解と事後の共有を通じ、体験を学修へと結晶化させる。	
共通 教育 科目			

社会実践力育成プログラム	国内ショートプログラム	この授業は本学が用意する日本各地が舞台となる。前期・後期ともに国内のフィールドを選定し、担当教員による事前指導の後、現地での約一週間の引率指導、地域研究を実施する。歴史、文化、自然、環境、生活、社会問題などを切り口にテーマを設定し、現地での見学、交流、体験、実践を通して、各フィールドにおける知識、理解を深め、そこから日本あるいは世界を相対視することを目的とする。この授業は現地でのものを基本とするが、現地に訪れる前には現地の文化や諸制度を理解するための事前学習と、事後の報告会などを予定している。事前の理解と事後の共有を通じ、体験を学修へと結晶化させる。	
	産学公連携PBLプログラム1	チームで活動するとはどういうことかを理解した学生が、10～15名程度のチームを1つのクラスとし、本学が連携先とする企業から提供いただく実課題を解決することを通じて、「社会人基礎力」「自他肯定感」「自在に人と関わる力」を身につける。企業等からの課題は具体的であり、学内だけではなく学外でも積極的に活動することが求められる。授業の最後には企業への報告とプレゼンテーションの機会を設け、授業で得られたさまざまな知見やアイデアを実際に協力企業の方に伝えその評価を得ることで実践的な学びへとつなげる。	
	産学公連携PBLプログラム2	「産学公連携PBLプログラム1」の受講を経て課題解決活動とはいかなるものかを体得した学生が、10～15名程度のチームを1つのクラスとし、企業から提供いただく実課題を解決することを通じて、「社会人基礎力」「自他肯定感」「自在に人と関わる力」をさらに伸ばすための科目である。特に受講生自身が設定した成長目標をどのように達成するかに重点が置かれる。授業の最後には企業への報告とプレゼンテーションの機会を設け、授業で得られたさまざまな知見やアイデアを実際に協力企業の方に伝えその評価を得ることで実践的な学びへとつなげる。	
共通教育科目	キャリア1	1年次の第1クォーターに置かれる、全学生対象の必修科目である。卒業生の実例をもとに卒業後の多様な進路の可能性を示すことで、入学者が抱える将来に対する不安を和らげ、進路に対する視野を広げ柔軟な考えを持てるよう促す。また、学生一人一人の強みや弱み、傾向を把握したうえで「将来何がしたいか」を考え、そのために「大学生活をどう過ごすか」の各々の目標設定を行い、大学での学びや生活と社会、進路との連続性に対する意識を醸成する。	
	キャリア2	インターンシップに関心を持つ学生を対象とし、インターンシップ参加前には学外企業や団体等とやりとりをする上で必要不可欠なメールや電話対応、文書作成等の一定のビジネスマナーを身につける。「インターンシップ1」「インターンシップ2」を受講する学生は本科目を必修とし、インターンシップ参加後はインターンシップで体験、観察、獲得したことについて振り返り、成果を報告書としてまとめ発表を行うことで、インターンシップに関心を持つ他学生への情報共有も行う。	
	キャリア3	主な進路として国内外の企業への就職を希望する学生が対象となる。業界や職種の種類や仕事内容、多様な働き方やその仕事に必要な要素に関する理解を深める。そのうえで、社会で自身がどのような役割を果たしたいか、それをどのような仕事を通して実現させたいか、大学時代のこれまでの学びから生かせる自身の強みは何か、その仕事をどう探すか、など、仕事に対する考えや意識を具体的に明確にし、それを他者に言語化して伝えPRにつなげるための実践的な授業を行う。	
	職業研究	この授業は、市井の人から仕事の多面性を学び、働くことの本質に迫ることを目的とする。授業では、まず職種研究として、「営業職」「企画・管理職」「事務職」「サービス・販売職」などのいわゆる「職種」について理解することからはじめる。その次に、実際に仕事に従事している人をお招きし、個別具体的に仕事の実例をうかがい、そのゲストのキャリアを通して、仕事人生の生き方や仕事の本質にふれることにより、自己のキャリア構想のヒントを得る。	
	ベンチャー・ビジネス論	高度な成熟化社会の到来とグローバルな視点での経営環境の変革期を迎えた中で、日本経済の持続的な成長のためには、イノベーションを成し遂げ新規事業を創造していくことが求められる。そして、その担い手として期待されるのが、企業家精神あふれるアントレプレナーに率いられたベンチャー企業の実在である。本講義では、ベンチャー創造の枠組みについて、先進事例の紹介などもまじえ、イノベーションやアントレプレナーシップ、ベンチャー企業の誕生と成長など、幅広い視点で講義を進め、事業創造の主体としてのベンチャービジネスに求められるマネジメント能力などに関する知識の習得を図る。	
キャリア科目			

<p>スポーツとビジネス</p>	<p>スポーツ産業における、特にイベントビジネスの位置づけと特性、イベントの構造や優れたイベント運営についての理解を深め、市民レベルのイベントを運営する際に必要な知見を学習する授業である。履修者は、本講義を受講することによって、(1)イベントの運営を評価する力や、(2)イベントの持つ社会的機能について考える力を身につけることができる。さらに、優れたイベントとするための運営ノウハウを習得することができる。</p>	
<p>表現活動と経済</p>	<p>「芸術と経済」は「水と油」のような関係として理解されるかもしれない。しかし、芸術活動も歴とした経済活動である。芸術の創造者は経済学の言葉で表わせば供給者であり、芸術作品を購入したり楽しんだりする鑑賞者は需要者である。このような供給者と需要者が、モノの売買取引する場を「市場」と呼んでいる。そこで、この授業では芸術作品に焦点を当てながら、市場取引の経済学的なメリットとデメリットを理解して欲しい。さらに、芸術を含めた文化財が市場主義に馴染まない側面についても言及していきたい。</p>	
<p>クリエイティブの現場</p>	<p>この授業では、市井の人から仕事の多面性を学び、働くことの本質に迫ることを目的とする。授業では、主に「クリエイティブ」業界と言われる分野の職種について理解する。次に、特に履修者が卒業後の自身をイメージできるような卒業生を中心に、実際に仕事に従事している人から個別具体的に仕事の実例をうかがい、そのゲストのキャリアを通して、仕事人生の生き方や仕事の本質にふれることにより、自己のキャリア構想のヒントを得る。</p>	
<p>日本の企業文化研究</p>	<p>本学に多数在籍する外国人留学生の中には日本での就職をめざす学生も多い。これから就職活動をはじめめる3年生の留学生には特にその点において苦戦する学生も多いことだろう。この授業では、外国人にはわかりづらい日本企業独特の制度や文化について学び、以後の就職活動における心理的な負担の解消と諸制度理解の不足による事務的な手続き等の失敗の防止を支援する。授業では、進路を決定した4年生の留学生をゲストとして招き、先輩からの助言を直接受ける機会も置くこととする。</p>	
<p>ポートフォリオ実習1</p>	<p>デザイナーをはじめとするクリエイティブ業界に就職するには「作品ポートフォリオ」が必要である。厳しいクリエイティブ職採用の中、本格的な就職活動が始まってからでは準備不足が原因で不本意な結果が予想される。一度制作しても就職活動をしながら業界・職種別に更にブラッシュアップが必要となってくる。この授業ではポートフォリオ制作初心者が、最低限、今後の就職活動に必要な、採用に関わるポートフォリオの土台作りとして、必要な知識、スキルを身につける。</p>	
<p>ポートフォリオ実習2</p>	<p>デザイナーをはじめとするクリエイティブ業界に就職するには「作品ポートフォリオ」が必要である。「ポートフォリオ実習1」の履修者を対象とする。したがってこの授業はポートフォリオ制作の経験を有するものを対象とする。デザイナー、プランナーなどのクリエイティブな企業をめざす学生に対して、今後の就職活動で必要となる採用に関わるポートフォリオについて、効果的に伝えるために必要な知識、スキル、テクニックやノウハウを身につける。</p>	
<p>コミュニケーション実践演習</p>	<p>この授業は、相手の考えや意見をきちんと理解し、自分の気持ちやアイデアをわかりやすく説明できる「コミュニケーション力」をアップさせることを目的とする。コミュニケーションのスキルは、定形を覚えるだけのマナー講座などでは身につかない。即興演劇、インタビュー、グーグルの社内研修で用いられているマインドフルネスなどさまざまな手法を使って、人前で自分をオープンにする姿勢を築き、その場しのぎではない本物の聞く力、話す力を養っていく。</p>	
<p>美術概論1</p>	<p>「造形芸術」あるいは「造形美術」は様々な素材に働きかけることによって創造される視覚的、空間的な美の表現を目指す芸術である。この授業は、本学で学ぶことのできる分野である洋画、日本画、彫刻、陶芸、染織、版画、写真、映像など美術に関わる分野を通じて、人間がなぜ美術を必要とし発展してきたかといった、美術と社会、美術と生活などとの関わりを知り、芸術としての美術について理解を深めながら、美術に対する基礎知識を身につけることを目的とする。</p>	

美術史 1	この講義では、本学の学ぶことのできる分野である洋画、日本画、彫刻、陶芸、染織、版画、写真、映像など美術に関わる分野の表現の歴史とその作品や成り立ち、表現技法との関わりから現代にいたるまで、各分野における美術表現の変遷についてを学ぶ。また制作表現を行う上で重要な関係にあるこれらについて、理解を深めるとともに各自が自身の表現の立ち位置を確認しながら、美術に対する基礎知識を身につけることを目的とする。	
美術リテラシー 1	「造形芸術」あるいは「造形美術」は様々な素材に働きかけることによって創造される視覚的、空間的な美の表現を目指す芸術である。この授業では、本学で学ぶことのできる洋画、日本画、立体造形、陶芸、テキスタイル、版画、写真、映像表現など、美術に関わる分野それぞれの表現の基礎知識と、その表現方法を実践を通じて学ぶことによって、創造的な表現と作品の鑑賞の能力を身につけることで、芸術としての美術の意義を学ぶことを目的とする。	
美術リテラシー 2	造形芸術あるいは造形美術は様々な素材に働きかけることによって創造される視覚的、空間的な美の表現を目指す芸術である。美術リテラシー 2 では、美術リテラシー 1 に続き、洋画、日本画、立体造形、陶芸、テキスタイル、版画、写真、映像表現など、美術に関わる各分野の表現の基礎知識とその表現方法を実践を通じて学ぶことによって、さらなる創造的な表現と鑑賞の能力を身につけ、芸術としての美術の意義を学ぶことを目的とする。	
美術特講 1	20世紀半ば以降、文化や芸術に関わる理論的探究は、その裾野を狭義の美学や芸術学を超えた領域（たとえば記号論、精神分析、ジェンダー論、ポスト・コロニアリズム、カルチュラル・スタディーズ、メディア論、など）にまで押し広げた。こうした経緯を念頭に、まず「表現」と「表象」の違いについて理解した上で、美術にとどまらず映画、音楽、演劇、文学などの幅広い領域から作品、作家、運動を紹介しながら、自らの「表現」の素材や契機として時代と社会から何かを掴み取るための思考を促す。	
美術特講 2	「現代アート」は、従来の枠組みを破壊し、新たな表現を求めることで発展してきた。それは、わたしたちの感性に訴え、知的に問題を提起するとともに、一方で私たちの欲望を掻き立てている。こんにち、私たちの社会においてそうしたアートや芸術はどのような意味をもつのだろうか。あるいは、それをどのように経験することができるのか。この授業では、主に20世紀後半から現在までのアート作品を通じたこれらの問いへの答えを考察する。	
デザイン概論 1	デザイン学部にある、ビジュアルデザイン、プロダクトデザイン、建築、イラストをはじめ、ゲーム・アプリ・Webなどのインタラクティブデザイン、動きをデザインするモーションデザイン、地域や社会をデザインするソーシャルデザイン、インフォメーションデザイン、UIやUXなどの行動デザイン、人と人をつなぐコミュニケーションデザイン、デザインシンキングなど、世の中には様々なデザインと名前のつく物事がある。それら様々なデザインの事例と内容を紹介し、デザインの領域やデザインの役割など、デザインについての理解を深めデザインについての基礎知識を身につける。	
デザイン史 1	本講義では、産業革命以降のプロダクト、建築、インテリア、ファッションなどの近代デザインの歴史をたどっていく。住宅、車、テレビ、スーツ、椅子、スプーンなどのデザインされたものの生産史だけではなく、そのものがどのように流通し、私たちの生活空間のなかに受け入れられてきたのかを学んでいく。さらに、展覧会などを通して事例を紹介することで、それらの素材の特性や技術の仕組みを理解する。このような講義を通じて、作り手の立場から、いかにして近代デザインの歴史から今日のデザインを読み解くことができるのかを探っていく。	
デザインリテラシー 1	デザインという行為には目的とプロセスがある。デザインの目的は様々な課題を解決するためにある。そして、デザインを行うには考え方や進め方にプロセスがある。課題を見つけ出し、理解を深め、リサーチを行い、アイデアを導き出し、プロトタイプを制作して、テスト運用を行う。デザインの目的とプロセスを理解することで、デザインと人との関係、デザインと社会との関係、デザインとビジネスとの関係など、デザインの意義を学ぶ授業。	

デザインリテラシー2	デザインは社会とつながっており、社会とつなげるために必要な基礎的な概念の1つがマーケティングである。マーケティングとは、個人・企業あるいはその他の組織が消費者のニーズを具体化し（製品、サービス、そしてアイデアという形をとる）、その具体化したものを消費者に伝達する一連のプロセスである。そして、それは消費者と企業組織間の情報と製品の流れを考察し、両者にとって効果的かつ効率的に行うにはどうしたらよいか、という目的意識を強く持つ。本講義は、主にマーケティングの基本概念的ななかから、発想法とフレームワーク、その原理を学ぶとともに、自分自身や自身の作品などを価値のある魅力的な商品にする方法をグループワークを通じて構想する。	
デザイン特講1	デザインという行為を届けるためのしくみがメディアである。メディア (media) という単語の単数形、メデイウム (medium) には、死者の言葉を現世に伝える「霊媒」という意味もあるように、それは発信者と受信者の「間」にあって、何らかのメッセージを運ぶ乗り物のような存在である。普段の生活ではあまり意識はされていないが、私たちはメディアを通じて、世界を理解し、世界にメッセージを送っている。本講義では、視覚文化研究 (ヴィジュアル・カルチャー・スタディーズ) の視点から、視覚的イメージと人間の関係、社会のなかでのはたらきを考えることを目指したい。	
デザイン特講2	考古学や人類学などの領域において、物質文化 (マテリアル・カルチャー) 論は、以前より重要な方法論として存在してきた。文献を資料とする歴史学とは違って、それらの分野は、過去の遺品や、異文化において使われた物品など——すなわち「モノ」——を第一次資料として、研究の対象としてきた。たとえば現代人が使っているさまざまなモノも、また物質文化として研究対象となりうるのである。本講義では、物質文化論の視点から、デザイン、建築、都市と人間の関係を再考することを目指す。	
マンガ概論1	マンガをマンガたらしめるものは何だろうか。現代において、マンガは絵画・文学・映画など様々な表現領域から影響を受けながら今日の隆盛を迎えるに至った。この授業では、それらのジャンルとマンガの共通点と相違点を踏まえ、マンガとはどういう表現領域なのかを考察する。またマンガと他の領域とのインタラクティブな関係に目を向け、こんにちの社会や文化の中でマンガが果たしている役割とこれからの可能性について多面的に考察する。	
マンガ史1	マンガについて理論的に学び批評・制作を行なっていく上で、基礎知識となるマンガの作品・作家、出来事や研究状況について歴史的に考察する。ただし「歴史的に考察する」とは言っても、単に関連情報を年代順に羅列して覚えていくわけではない。視覚表現・メディアとしてのマンガを構成する諸要素やその時代の変化に注目しつつ、「マンガを読む」という行為が日常生活に定着するまでの歴史について、多角的に考察していくことを目標とする。	
マンガリテラシー1	マンガは線、コマ、フキダシ、擬音など様々な要素から構成されている。マンガに日ごろ触れることのない人がはじめて目にした際、「読めない」と聞く。この授業では、マンガが発展の中で生み出されてきたそれらの諸要素や効果をどのように活用し、意味やメッセージを伝えているのかを分析する。またその諸要素からどのようにしてキャラクターや世界観が生み出されているのかについても考察し、マンガを描くこととマンガを読むことがどのような営為であるのかを根本から考えることを目的とする。	
マンガリテラシー2	アニメーションとマンガは似ているようで異なる表現手段である。日本においてはマンガを原作とするアニメーション、あるいはアニメーションのコミカライズなどが多数生み出されてきた。本講義では日本のコンテンツにおいてマンガとともに発展してきたアニメーションに焦点をあて、その表現がどのようにして成立したかを歴史的に考察し、また技術的側面からもアニメーションという表現の特異性を探る。連続した絵や立体から動きを生み出すアニメーションという表現領域の持つ魅力を深く知ることを目的とする。	
マンガ特講1	マンガはその時代の社会が持つ様々な問題を内包し、それらと関わりながら発展してきた。本授業ではマンガと社会の関わりを様々な角度から考察し、マンガが社会の中でどのような役割を果たしてきたか、そして今後どのような役割を果たしうるのかを実践的に考える。その中で特に今日の社会において課題となるジェンダーや人権について改めて学ぶことで、その時代その時代における価値観の中で生み出されてきたマンガを批評的に読み、制作する態度を身につけることを目的とする。	

マンガ特講 2	日本は世界有数のマンガ大国であり、質・量ともに高いレベルのマンガを生み出し、読者はそれを享受してきた。しかし世界各地に目を向けると、それぞれの地域にはそれぞれのマンガ文化が存在し、それもスマートフォンなどのさまざまな技術の進化や各地の事情により変化してきた。それらはその地域の伝統も踏まえ、日本マンガにはない様々な魅力をもっている。本講義ではそれら世界のマンガについて学び、マンガの持つ可能性を改めて認識し、また翻って日本のマンガの特異性を考えることを目的とする。	
メディア表現概論 1	この授業では、「メディア」とはどのようなものであるかについて概説する。具体的には、メディアと情報に関する環境と歴史を概観したうえで、メディアをどのように活用し、「コンテンツ」を作成していくかの表現技能について触れる。この授業を入口とし、専門的な学びに触れていく中で、最終的には、新しい価値を創造するための知識・思考力・表現技能を身に付けることで、他者理解や社会の課題解決に寄与する人材の育成を目指す。	
メディア表現史 1	この授業では、「メディア」を成り立たせている技術と表現の歴史的な相互作用について、人類史の観点から概観する。印刷技術や写真、録音等、情報の記録や複製を可能にするメディア技術は、社会の仕組みを再構成し、現在に至るまで生活の中に深く組み込まれている。そうしたメディアの歴史的背景や、メディアの普及とともに生まれた表現を理解することで、現在のメディア環境がもつ可能性についても洞察を深められるようになることを目指す。	
メディア表現リテラシー 1	大学におけるさまざまな授業では多様な機材を使用する。日常的に使用する機器の多くは、取扱説明書を読まなくとも使用できるものも多い。また、ユーザーは使用するうえで支障がなければ、機器の仕様などについても把握せずに使用しているものも多いだろう。しかし、授業で使用する専門的な機材においては、そのスペックを把握し、使用方法を熟知しておくことで格段に完成度の変化するものもある。本授業では、実際に使用する各種機器を使いながらその取扱説明書の読み方、スペックの把握を通じ、それらの機材の性能を100パーセント引き出すための術を身につけることを目的とする。	
メディア表現リテラシー 2	この授業では、授業で使用する機材に関する取扱説明書を作成することに取り組む。取扱説明書はその機材に関する性能や、期待される効果について熟知し、そのうえで、他者にわかりやすく伝えるための資料である。取扱説明書の作成を通じ、使用する機材について「完全に」その性能を理解するとともに、使用中に起こりうるさまざまなトラブルなどを検証する。この授業を通じ、学生は自ら、情報を獲得する術と、使用者の理解、他者へ伝える力を身につけることを目的とする。	
メディア表現特講 1	この授業では、「メディア表現」をめぐる今日の話題を取り上げ、さまざまな事例をもとに、多面的かつ徹底的に論じる。特に、音楽や映像、ゲーム、インタラクティブアートといった領域における先進的な表現に焦点を当て、メディアを駆使したクリエイティビティについて考察する。授業でとりあげるトピックによっては、当事者であるデザイナーやアーティスト自身を授業内でゲストに招き、講演やワークショップ形式による授業を実施する。	
メディア表現特講 2	この授業では、「メディア表現」をめぐる今日の話題を取り上げ、多面的かつ徹底的に論じる。特に、メディアを活用したビジネスやサービス、社会活動といったさまざまな領域における先進的な実践事例に焦点を当て、メディアデザインを通じた社会との関わりについて考察する。授業でとりあげるトピックによっては、実際に事業に取り組む企業などの当事者をゲストにお招きし、講演やグループワーク、ワークショップ形式による授業を実施する。	
和の伝統文化論	この授業は、日本の伝統的な文化や芸術の特質と意義を深く考察することで、今ある私たちの文化のあり方を見つめ直すことを目的とする。現代に脈々と受け継がれてきた能楽、歌舞伎、茶の湯、生け花など、幅広いジャンルの伝統文化について学習する。さまざまな伝統文化は、時代をさかのぼることで、その根底においてつながっていること、現代社会においてどう活かされているのかについて学ぶことで、現代に生きる我々の文化とのつながりを理解することをめざす。	

京都のまちづくり	この授業では、日本における京都の「都」としての位置づけとその後の展開過程について、各時代の変遷をたどりながら、地形、景観、建築、産業構造などさまざまな視点を軸とし、まちづくりの進められ方を考察する。また伝統文化や建造物が多く存在する「まち」として、その都市計画や景観づくり、産業、交通等が各時代においてどのように検討されてきたかを歴史的にたどり、現代の都市としての京都が形成される経過を学び、日本において特異な変化を重ねた京都と、他の都市との共通点、差異などを知る端緒とする。	
京都の伝統工芸講座 1	この授業では、担当する教員のもと、京都の伝統産業・美術・工芸の現場から、伝統工芸士、作家、技術者、研究者を毎回講師として招き、各講師の専門分野での実経験に基づいて「伝統とは何か、伝統を受け継ぐとはどういうことか」を中心に講義が行われる。長年培われてきた京都の伝統産業・美術・工芸の歴史と現状を理解することで、私たちの生活の中で、伝統産業・美術・工芸がどのような意味を持ち、また持つべきなのかを考察する。	
京都の伝統工芸講座 2	この授業では、「京都の伝統工芸講座 1」につづき、担当する教員のもと、京都の伝統産業・美術・工芸の現場から、伝統工芸士、作家、技術者、研究者を毎回講師として招き、各講師の専門分野での実経験に基づいて「伝統とは何か、伝統を受け継ぐとはどういうことか」を中心に講義が行われる。長年培われてきた京都の伝統産業・美術・工芸の歴史と現状を理解することで、私たちの生活の中で、伝統産業・美術・工芸がどのような意味を持ち、また持つべきなのかを考察する。	
京都の習俗	京都には、人々の暮らしの中で、食、住まい、ならわし、季節の行事、祭りといった様々な伝統文化が今なお息づいている。この授業では、それぞれの習俗がどのような歴史的な背景を持ち、現代まで継承されているのか、また途絶えようとしているのか、その意義と変遷について文献や聞き取り調査の資料を基に検証しながら解説する。変化する社会の中で変わり続ける価値観などを知り、現在に生きる我々にとっての習俗の意味について考察する。	
京都の伝統産業実習	この授業は、1200年以上の歴史を持つ京都の伝統工芸、伝統産業の現場で実習をするインターンシップを軸とする授業である。事前指導を受けた後に、受講生は本学が指定するさまざまな伝統工芸、伝統産業の現場で直接指導を受ける。「手技を学ぶ」、「歴史・文化的背景を学ぶ」、「環境を学ぶ」など、日ごろ、制作活動を学びの中心とする学生から、日ごろはことばを軸とした学びに取り組む理論系の学生まで、様々な学部、専攻の学生が実習できるプログラムとする。	
ファイナンス論	現在の日本では、証券市場やそれに関連する事柄が大きな注目を集めており、企業活動においても、また個人の生活においても浸透している。この講義の内容は、それを理解するために必要であるとともに、ファイナンス分野を理解するための基礎となるものである。授業では、(1) 証券に関する基本的な知識をつける、(2) 債券と金利の基本概念を理解する、(3) 企業財務の基本的知識をつける、という3つの大きなテーマについて学ぶ。	
マーケティング論	マーケティングとは、個人・企業あるいはその他の組織が消費者のニーズを具体化し（製品、サービス、そしてアイデアという形をとる）、その具体化したものを消費者に伝達する一連のプロセスである。そして、それは消費者と企業組織間の情報と製品の流れを考察し、両者にとって効果的かつ効率的に行うにはどうしたらよいか、という目的意識を強く持つ。本講義は、マーケティングの基本概念的なことから、発想法とフレームワーク、その原理を学ぶとともに、自分自身の作品を商品にする方法をグループワークを通じて構想する。	
ビジネスモデル論	ビジネスモデルは、企業が収益を上げるためだけでなく、競争優位の確立・維持においても大変重要な概念である。特に近年、消費者と企業間の連絡手段として、インターネットなどの新たな情報技術を活用し、一連の商行為を整理、システム化し、収益性を高めた新規性のある事業形態が登場したことで、注目されるようになった。この授業ではビジネスモデルとは何かを理解し、それを踏まえて、各人が特定のビジネスモデルを想定し、現実的に創業できるレベルのプランを作成する。	

イノベーション論	国内外における企業のイノベーションの事例、国内地域の行政やNPO法人におけるソーシャル・イノベーションの実例を学び、イノベーションが何故生じたか、それらが如何なる工夫の中で完遂され、新たな価値創出が成されたかについて学ぶ中から、イノベーションの本質を自らのものとしていく。また事業化するための考え方・方法論を具体的なケースを通して知ることにより、現在学んでいる自分の専門について、将来の可能性を模索する。	
ソーシャルビジネス演習 1	近年、ソーシャル・ビジネスの台頭、営利企業のCSR/CSV戦略化、非営利組織の事業化、というように、異なる基盤を持つ多くの組織が「事業性」と「社会性」の両ミッション（デュアル・ミッション）追求という共通の方向性を見出すようになってきている。 この授業ではソーシャル・ビジネスを、これらを含めた大きなムーブメントの中でとらえ、その関連する諸概念、発展過程、経営の実際、課題を多面的に事例を紹介しながら検討する。	
ソーシャルビジネス演習 2	環境問題や少子化、高齢化、貧困、地域再生など、複雑化し成熟化した社会において浮上している昨今のさまざまな社会的課題は、これまでのように国や自治体が担う公共サービスや営利企業が市場の中で提供する商品やサービスだけで解決することは難しくなりつつある。すなわち、これまでの枠組みや仕組みに基づいてより良い社会を構想し、形作っていくことはもはや困難であり、従来とは異なる対処方法が求められている。こうした状況の中、近年、NPOや社会的企業、企業の社会貢献活動、各セクターの協働等、社会をより良くしていくことを目指したさまざまな取り組みが広がってきている。このような社会をより良く変えていこうとするさまざまな営みのひとつにソーシャルビジネスがある。 本授業では、各種事例や諸研究からソーシャルビジネスを概観し、特にその主たる担い手であるNPOに着目し、組織の特徴、意義、歴史、諸制度等の基本事項を学習し、そのマネジメントについて考える。マネジメントを考えるにあたっては、行政や企業など外部との関係に着目するとともに、一般論を踏まえ、できる限り具体的な事例に基づき考究する。	
アフリカ・アジア概論	2000年代以降の世界の政治経済、そして文化の台風の目となったアフリカ・アジア地域。これらの地域の「発展」の過程は、欧米のそれと同じものではない。テクノロジー、経済、政治、そのすべてが、20世紀までの大国の影響を受けつつ、これらの地域独自の路線を歩んできた。この講義では、これからこの地域について、あるいはこの地域で学ぶ学生の前提となる知識、すなわちアフリカ・アジアの歴史、地理、政治経済、そして人びとの生活に関する知識を学び、これらの地域に関して包括的に理解することを目指していく。	
アフリカ・アジア史	かつて開発途上国と呼ばれたアジア諸国、最貧国と呼ばれたアフリカ諸国は、過去には想像もつかないほどの「発展」を遂げつつあり、もはや「貧困」という枠組みだけからは、これらの地域を語ることは正しくない。そこで、本講義は、アフリカ・アジア諸地域の現在の概略を紹介し、現代のアフリカ・アジアの躍動の原動力を明らかにし、これからアフリカ・アジアを舞台に活躍する受講者が、どのようにアフリカ・アジアを理解すべきかを考察する足掛かりをつかむことを狙いとする。	
アフリカ・アジアリテラシー 1	文化が「知識、信条、芸術、法、道徳、慣習などすべてを含みこむ複雑な総体」（タイラー）であるとする、その多くは宗教によって下支えされてきた。私たちが学ぶアフリカ・アジア地域は、三大宗教が生まれ、そして現在までその形を様々に変えて宗教が人びとの生活に根付いている。そこで、この講義では、アフリカ・アジアにおける宗教動態に着目し、宗教と文化の関係を人びとの生活レベルからせり上げて理解することを目的とする。講義は、文化人類学や宗教社会学、そして宗教学の文献を読み込むことによるが、講師の生の体験は、履修者のアフリカ・アジアで受けるカルチャーショックを和らげることも目的とする。	
アフリカ・アジアリテラシー 2	21世紀に入り、中国の経済的台頭に伴い、世界の政治経済のパワーバランスは大きく変革した。今後、インド、アフリカの経済力上昇に伴い、さらにこのバランスは大きく変わっていくことが予測され、私たちの生活は、アフリカ、アジア抜きには語れなくなってくるだろう。この講義では、中国をはじめとするアジア諸国を中心とした現在の世界の政治経済の状況を踏まえつつ、インド、アフリカの将来展望を学び、未来志向型の政治経済のあり方を模索していく。	

共通教育科目	マイナー科目	アフリカ・アジア特講 1	アフリカ・アジアの多くの地域が温帯から熱帯気候の温暖な気候帯に位置している。人びとは豊かな自然から農林水産資源を享受し、巨大な人口を維持してきた。しかし、例えば、砂漠化や洪水、さらに土壌海洋汚染など、この地域の環境問題は近年益々深刻な問題となり、それは人びとの生活を脅かそうとしている。この講義では、現在アフリカ・アジアで起こる環境問題を概観し、現在の環境問題への取り組みを解説する。そして、現状を理解した上で、持続可能な社会を作るためにはどのようにすればよいかを考察していく。	
		アフリカ・アジア特講 2	その国、その地域の歴史を知ることは、その文化や人を知る第一歩となる。しかし、本学科で着目するアフリカやアジアの歴史を、これまでどれほど学んできたのだろうか？受講者の多くが、これから活躍するアフリカやアジアがどのような過去をたどり、現在、どのような方向に進もうとしているのか。巨大な地域と人口を抱える、この地続きの大地には多様な歴史が埋もれているが、西欧との関係で考えたとき、共通項は思いのほか多いはずである。そこで、本講義では、近代以降のアフリカ・アジアの歴史の大きな流れをつかみ、講師が専門とする地域のいくつかの事例を学ぶことで、アフリカ・アジア地域の理解の端緒を開くことを目的とする。	
		日本事情理解	現在、日本を取り巻く環境は刻々と変化している。特に近年は外国人技能実習制度や日本に住む外国人の子どもなどの日本語教育の問題等、これからの日本のあり方を考えていく上で無視できない喫緊の課題が山積みとなっている。このような状況を踏まえ、本講義では、国際社会と日本の実情とを比較しつつ、これからの日本における「多文化共生」のあり方について様々な視点から深く考え、それらと日本語教育の実践とを関連づける能力を養う。	
		言語と心理	本講義では、日本語教育において重要である日本語学習者の言語理解を実現する情報処理のプロセス、推測能力、記憶のメカニズムをはじめ、言語教育に必要な言語習得の理論、認知過程に関する心理学、認知言語学等の基礎的知識について学ぶ。また日本語学習者が異文化との接触によって表面化する「心と文化」の問題について、特に発達心理学や異文化間教育の観点から深く考察し、言語教育における(心理的)学習のメカニズムについて学ぶ。	
		言語と社会	本講義では、広く国際社会の動向から見た国や地域間の関係性を踏まえ、現代社会においてはあたりまえに発生する「異文化接触」に伴って起こる「言語現象」や各国の「言語政策」、「言語変種」、「言語運用のルール」、「言語・非言語行動」、「社会文化能力」等を学ぶ。履修者は、さまざまな社会文化的背景を視野に入れ、個人々の言語使用を具体的な社会文化的状況の中で捉える力を養うことで、日本語教育において必要な基礎的知識を獲得する。	
		日本語学	本講義では、日本語教育において必要とされる現代日本語の音声・音韻、語彙、文法、意味、運用等に関する基礎的知識を学ぶことを第一の目的とする。これに加えて、一般言語学、対照言語学等の知見を活かして、日本語と他の言語とを比較する能力、さらには「言語現象」を客観的に分析する能力を養う。講義全体を通して、日本語学習者の誤用の原因を探り、履修者が日本語教育を担う際に、適切な指導を行うための基礎力を養成する。	
		日本語教育演習 1	この演習では、比較的少人数の授業で、日本語教員をめざす履修者に対し、日本語教員として必要とされる資質・能力をはじめ、コースデザインや各種シラバス、教授法、評価等についての基礎的知識を学ぶ。また教案作成や模擬授業等の実践活動を通じて具体的な日本語の教え方を学ぶとともに、学習者にとってどのような活動が教育的効果が高いのかを考える。以上の学びを通じて、変化の激しい現代の日本語教員として必要とされる総合的な教育能力を養う。	
		日本語教育演習 2	この演習では、「日本語教育演習 1」につづき、日本語教員をめざす履修者を対象に、日本語学習者の具体的な学習活動や教授法・評価の問題、学習者の誤用に関する問題、教材に関する問題等、日本語教育における様々な課題について、これまで蓄積されてきた研究論文等を精読し、それらの問題を解決するための具体的な方策について受講生全員で議論を行う。そこから得られる学びを通して多様化する日本語教育のいかなる現場でも柔軟に対応できる人材の育成を目指す。	

基礎演習科目	基礎演習 1	1年次第1クォーターに置かれ、学部の初年次教育の中心となる演習形式の必修科目である。教員1名あたり約20名の学生による少人数クラスを編成し、情報検索、現地調査、ディスカッションなどの基礎的な研究方法を、とくに人文学系の学びに即して学ぶことにより、大学生活へのスムーズな導入を図る。人文学科を構成する「文学」「歴史」「社会」「日本文化」の4専攻のうち、文学専攻の学びの内容を紹介し、これに即して上記の基礎的な研究方法を習得するとともに、人文学科の学びの一端を理解する。	
	基礎演習 2	1年次第2クォーターに置かれ、学部の初年次教育の中心となる演習形式の必修科目である。教員1名あたり約20名の学生による少人数クラスを編成し、情報検索、現地調査、ディスカッションなどの基礎的な研究方法を、とくに人文学科を構成する「文学」「歴史」「社会」「日本文化」の4専攻のうち、歴史専攻の学びの内容を紹介し、これに即して上記の基礎的な研究方法を習得するとともに、人文学科の学びの一端を理解する。	
	基礎演習 3	1年次第3クォーターに置かれ、学部の初年次教育の中心となる演習形式の必修科目である。教員1名あたり約20名の学生による少人数クラスを編成し、情報検索、現地調査、ディスカッションなどの基礎的な研究方法を、とくに人文学系の学びに即して学ぶことにより、大学生活へのスムーズな導入を図る。人文学科を構成する「文学」「歴史」「社会」「日本文化」の4専攻のうち、社会専攻の学びの内容を紹介し、これに即して上記の基礎的な研究方法を習得するとともに、人文学科の学びの一端を理解する。	
	基礎演習 4	1年次第4クォーターに置かれ、学部の初年次教育の中心となる演習形式の必修科目である。教員1名あたり約20名の学生による少人数クラスを編成し、情報検索、現地調査、ディスカッションなどの基礎的な研究方法を、とくに人文学系の学びに即して学ぶことにより、大学生活へのスムーズな導入を図る。人文学科を構成する「文学」「歴史」「社会」「日本文化」の4専攻のうち、日本文化専攻の学びの内容を紹介し、これに即して上記の基礎的な研究方法を習得するとともに、人文学科の学びの一端を理解する。	
	基礎演習 5	2年次第1クォーターに置かれ、文学専攻、歴史専攻、社会専攻、日本文化専攻それぞれを構成するゼミの学びにとって基本となる文献・資料を講読することによって、各ゼミの学びの基礎を理解するための演習形式の必修科目である。この演習は開講するすべての担当教員のクラスが開かれている。履修生は自身が所属する専攻のなかで、その間に異なるゼミ担当者のクラスを2つ参加した上で、2年次第3クォーター以降に所属するゼミを決定するとともに、専門性のいっそう高まった内容を学ぶことによって、自身の所属する専攻への帰属意識を養う。	
	基礎演習 6	2年次第2クォーターに置かれ、文学専攻、歴史専攻、社会専攻、日本文化専攻それぞれを構成するゼミの学びにとって基本となる文献・資料を講読することによって、各ゼミの学びの基礎を理解するための演習形式の必修科目である。基礎演習5と同様に、履修生は自身が所属する専攻のなかで、異なるゼミ担当者が開講するクラスに2つ参加した上で、2年次第3クォーター以降に所属するゼミを決定するとともに、専門性のいっそう高まった内容を学ぶことによって、自身の所属する専攻への帰属意識を養う。	
応用演習科目	応用演習 1	2年次第3クォーターに置かれ、自身が所属するゼミでの卒業論文の作成を念頭に、専門的な学びを深めていくための演習形式の必修科目である。とくに「応用演習1」は、これ以降、ゼミ内で取り組む卒業論文の作成にとっての第一歩であり、その意味では自らが定めたテーマを専門に研究するための導入科目となるため、所属するゼミの専門的な学びにとって基本となる文献の講読や現地調査、作品研究などに取り組むことによって、自身の卒業論文の作成にとって必須の専門知識や方法論を習得する。	
	応用演習 2	2年次第4クォーターに置かれ、「応用演習1」に引き続いて自身が所属するゼミでの卒業論文の作成を念頭に、専門的な学びを深めていくための演習形式の必修科目である。とくに「応用演習2」では、担当教員の指導のもとで3年次第1クォーターで履修する「長期フィールドワーク」での学びを、所属ゼミの学びに引きつけながら計画することによって、各自が自らの学問的な関心に従ってテーマを定め、調査・研究を行なう「卒業論文」に取り組むための自主性を身につける。	

応用演習科目	応用演習 3	3年次第1クォーターに置かれ、「応用演習2」に引き続いて自身が所属するゼミでの卒業論文の作成を念頭に、専門的な学びを深めていくための演習形式の必修科目である。とくに「応用演習3」では、自身が履修している「長期フィールドワーク」での学びの進捗状況についてゼミ担当教員に定期的に報告し、それに対する教員からの指導のもとで調査・研究を並行して行なうことによって、「長期フィールドワーク」の履修を所属ゼミの学びへと接続し、自らの専門的な学びに重層的な厚みを加える。	
	応用演習 4	3年次第2クォーターに置かれ、「応用演習3」に引き続いて自身が所属するゼミでの卒業論文の作成を念頭に、専門的な学びを深めていくための演習形式の必修科目である。とくに「応用演習4」では、自身が履修している「長期フィールドワーク」での学びの進捗状況についてゼミ担当教員に定期的に報告し、それに対する教員からの指導のもとで調査・研究を並行して行なうことによって、「長期フィールドワーク」の履修を所属ゼミの学びへと接続し、自らの専門的な学びに重層的な厚みを加える。	
	応用演習 5	3年次第3クォーターに置かれ、「応用演習4」に引き続いて自身が所属するゼミでの卒業論文の作成を念頭に、専門的な学びを深めていくための演習形式の必修科目である。特に「応用演習5」では、各ゼミ内での専門的な方法論の習得と並行して、「卒業研究演習3」での上級生の卒業論文の口頭試問を聴講し、それについてのゼミ内でのディスカッションを行なうことによって、自身の卒業論文のイメージを確定させるとともに、これを完成させるために4年次の「卒業研究演習1」ならびに「卒業研究演習2」において習得すべき技能や知識や、実行すべき作業を自覚する。	
	応用演習 6	3年次第4クォーターに置かれ、「応用演習5」に引き続いて自身が所属するゼミでの卒業論文の作成を念頭に、専門的な学びを深めていくための演習形式の必修科目である。特に「応用演習5」では、3年次第1および/あるいは第2クォーターで履修した「長期フィールドワーク」での学びと、これと並行して「応用演習3」で取り組んだ調査・研究に関する報告書を作成する。また、その内容を他者を意識しながら視覚的にも理解しやすい展示形式へと落とし込むことを演習形式で体験することによって、自らの学びの成果を他者へ伝達するための技能を習得する。	
	卒業研究演習 1	4年次第1クォーターに置かれ、「応用演習6」に引き続いて卒業論文の執筆に必要な学術的スキルを演習形式で習得するための必修科目である。各履修者の卒業論文とテーマ・方法論を共有する先行研究論文の講読を通じて、当該領域に固有の学術論文の形式を熟知するとともに、自身の卒業論文の構想の発表、それに続くゼミ内でのディスカッションを通じて、他のゼミ生の卒業論文の内容や進捗状況との比較を行ない、各自の卒業論文に欠如している部分を自覚しながら学術論文の作成を進めていく。	
	卒業研究演習 2	4年次第2クォーターに置かれ、「卒業研究演習1」に引き続いて卒業論文の執筆に必要な学術的スキルを演習形式で習得するための必修科目である。各履修者の卒業論文とテーマ・方法論を共有する先行研究論文の講読を通じて、当該領域に固有の学術論文の形式を熟知するとともに、自身の卒業論文作成の途中経過の発表、それに続くゼミ内でのディスカッションを通じて、他のゼミ生の卒業論文の内容や進捗状況との比較を行ない、各自の卒業論文に欠如している部分を自覚しながら学術論文の完成、さらに提出までを行なう。	
卒業研究演習科目	卒業研究演習 3	4年次第3クォーターに置かれ、「卒業研究演習2」の終わりに提出した卒業論文について、自身の所属する専攻のすべてのゼミからなる合同クラスのなかで、この専攻に所属する教員全員による口頭試問を受けるための必修科目である。所属するゼミ内での口頭試問の準備を通じて自身の卒業論文の優れた点と不十分な点を把握するとともに、他の学生の口頭試問を聴講することによって、自らの所属ゼミでの学びをいっそう広い専攻の学びの中に位置付け、学術的な視野を広げる。	
	卒業論文	4年次第3クォーターに置かれ、人文学科における4年間を通じた学習・研究・調査の成果をまとめ、学術論文として提出する。学生個人でテーマや課題を設定し、それに応じた研究・調査・論文作成計画を立て、一定の書式を整えた学術論文の作成に必要な知識や技能、研究・調査方法を身につけた上で、ゼミ担当教員の指導のもとで、1年以上の時間をかけて、24,000字から48,000字程度の分量で卒業論文を書き上げる。自らの4年間の学びについて、その内容を専門的知識や技能に依拠しながらわかりやすく説明する技能を獲得する。	

専門演習科目	卒業発表	4年次第4クォーターに置かれ、自らが作成した「卒業論文」の内容を分かりやすく、かつ印象的に他者に伝えるための方法を演習形式で実践的に学ぶための必修科目である。自身の「卒業論文」の主張ないし仮説、そしてそれを論証するための論理展開と説明とを、限られた情報量のなかで要約することに加え、これを視覚的にも理解しやすい発表形式へと落とし込むことを演習形式で体験し、他者の視線を意識しながら自らの学びの成果を客観的に伝達するための技能を習得する。	
	国際文化概論1	グローバル化の時代と呼ばれるようになり久しいが、人びとの暮らしは、すでに何千年前から様々な地域との交流の中で成り立っている。私たちがその地域独特の文化だと考える人びとの文化的営みは、思いのほか様々な地域、文化の影響を受けながら作り上げられている。この講義では、歴史、文化、政治、経済と言った文化を構成する複合的な要素を概観し、現代社会の成り立ちを概説する。受講者は、そこから自らの興味関心を明らかにし、専門領域の基礎を上げることが望まれる。	
専門講義・演習・実習科目	国際文化概論2	日常的に私たちが接する様々な芸術。例えば、音楽や絵画、映画や詩は、作家の頭の中だけで構成されたものではなく、外の世界の様々な事象を異なる形に再構成し、表象されたものであると捉えることが可能だ。この講義では、世界的に影響をもったいくつかの芸術作品を事例とし、作家や作品がいかに構成されたか、また、それらが社会にどのような影響を及ぼしたかを知り、文化が持つ力を理解し私たちの生活における文化の位置づけを習得することを考えていく。	
	国際文化史1	わたしたちが日ごろ地域特有のものと思っている文化は、実は複数の文化が地域外から伝わり、長い時間をかけてその土地に根差していったものであることが多い。本講義では、いくつかの地域の文化交流史を紐解き、いかにその文化が交流し、変化し、固定化されていったのかをたどってみたい。そして、これらの文化交流が単なる偶然の産物ではなく、交流の背景には様々な文脈が隠されているはずである。この講義では、まず、歴史的な分析方法を習得し、いくつかの事例を通し、文化を史的な観点から理解することの重要性を理解することを目指す。	
	国際文化史2	この講義では、現存するアフリカ・アジアの文化事象を例にとり、その背景にある「宗教-政治-文化」や「社会運動-文化」と言った複合的な文化構成を学ぶ。これらの文化現象は、上部構造から押し付けられたものではなく、人間一人一人の生活や、人びとの交流からせり上げられたものであることが理解できるはずである。こうした視点に立てば、文化史は、年代記を超えた多文化間の交渉の観点から国際関係の変遷をとらえなおすし、グローバル社会の仕組みを習得することにもなる。本講義受講者は、事前、ないし同時に歴史学の基礎を学ぶ科目を受講していることが望ましい。	
	国際文化リテラシー1	グローバル化・国際化が進む現代において、日常生活から職場など様々な場面において、異なる文化的背景を持つ人々と相互理解し協働することが求められる。「国際文化リテラシーII」では、実際に異なる文化的背景を持つ人々と接し、文化の差異を実体験するとともに、どの言動がどのようなロジックに基づくものなのかを理解する。アジアやアフリカの文化を事例として取上げ、多様な文化の存在を知り、その学び方を修得するとともに、自文化との差異を理解し、対等・平等に考える姿勢を身につける。	
	国際文化リテラシー2	グローバル化・国際化が進む現代において、日常生活から職場など様々な場面において、異なる文化的背景を持つ人々と相互理解し協働することが求められる。「国際文化リテラシーII」では、実際に異なる文化的背景を持つ人々と接し、文化の差異を実体験するとともに、どの言動がどのようなロジックに基づくものなのかを理解する。言語、信仰、価値観、生活習慣の違いから生じる課題を理解し、文化を超えて相互理解し協働するために、どのような工夫ができるかを対話を通じて探索し、その方法を習得する。	
	国際文化特講1	人類はまだ誕生していなかった時代にも、「文化」と呼べるものがあつた。しかし現生人類が登場して以降、「文化」は人類社会の物質的、精神的な展開に必須のものとなった。この授業では人類出現以前の「文化」から、現代の「文化」まで、時間的にも、空間的にも縦横にテーマをとりあげ、さまざまな領域に関連させながら、人類にとっての「文化」の諸相を学ぶ。具体的には、「文化」の定義を明確化し、その定義が前提とする生物学的特徴を確認すること。「文化人類学」の諸分野について理解を深めることを狙う。	
	卒業発表	4年次第4クォーターに置かれ、自らが作成した「卒業論文」の内容を分かりやすく、かつ印象的に他者に伝えるための方法を演習形式で実践的に学ぶための必修科目である。自身の「卒業論文」の主張ないし仮説、そしてそれを論証するための論理展開と説明とを、限られた情報量のなかで要約することに加え、これを視覚的にも理解しやすい発表形式へと落とし込むことを演習形式で体験し、他者の視線を意識しながら自らの学びの成果を客観的に伝達するための技能を習得する。	

国際文化基礎科目	国際文化特講 2	グローバル化にともない、日本にも外国人留学生や労働者が増えると同時に、海外に出る日本人も増えてきた。今後日本の生活文化についてその他のアジアの国や欧米の国々文化などと比較し、理解し説明することができる能力が必要とされている。本講座では、もっとも身近な日本文化を手がかりにしながら、常に世界の文化に興味を持つ姿勢を身につけ、それぞれの特徴や現代の課題を幅広い視点から探究することを目的としている。文化圏は、アジア諸国、欧米、アフリカ、南北アメリカ、アラブ地域など、テーマは伝統文化、宗教、現代社会、ジェンダー、芸術やメディアなど。(264字)	
	文学概論	上代から近代まで幅広く日本文学の諸作品を紹介しながら詩・小説・戯曲・随筆、評論といった様々な文学ジャンルの区別とそれぞれの特徴について理解した上で、フォーマリズムや物語の類型分析、ナラトロジーといった文学の内容と形式を分析するための構造主義的な方法論、さらに脱構築やクイア理論、ポストコロニアル理論といった文学に携わる主体のありようをも視野に入れた方法論を概観することによって、文学とは何か、文学表現とはどのような行為なのかといった根本的な問いについて考察するための視座を獲得する。	
専攻基礎科目	日本文学研究 1	上代、中古、中世の各時代から日本の文学作品が一つずつ取り上げられ、それらを主題とした研究が、各領域におけるその位置付け、そこで用いられている研究の方法論、結論にいたるまでの具体的な研究手順とともに紹介されることによって、自らの所属する文学専攻の学びと日本文学研究の具体的な研究調査手順を概観するとともに、研究対象ではなく研究方法の観点から自らの所属するゼミ、ならびに2年次以降に自分の所属するゼミとは別に履修が可能な「応用演習2」「応用演習4・5」「卒業研究演習1・2」を選択するための指標を獲得する。	
	日本文学研究 2	近世、近代の各時代から日本の文学作品が一つずつ取り上げられ、それらを主題とした研究が、各領域におけるその位置付け、そこで用いられている研究の方法論、結論にいたるまでの具体的な研究手順とともに紹介されることによって、自らの所属する文学専攻の学びと日本文学研究の具体的な研究調査手順を概観するとともに、研究対象ではなく研究方法の観点から自らの所属するゼミ、ならびに2年次以降に自分の所属するゼミとは別に履修が可能な「応用演習2」「応用演習4・5」「卒業研究演習1・2」を選択するための指標を獲得する。	
	歴史学概論	古代における歴史学の始まりから近代歴史学の成立にいたるまで、人類が様々な展開してきた「歴史の見方・語り方」に加え、それらの「歴史」と同時代社会との関わりを概観した上で、歴史学という学問的営みの特質、様々な歴史学の方法論の対象とその射程、歴史と叙述との関係などを理解する。また、社会史・民衆史といった近年の歴史研究の動向の意味を理解することによって、歴史学が持つ文化的・社会的な意義についても考察し、現代日本人として歴史を学ぶための基礎となる視座と歴史認識を獲得する。	
	日本史研究 1	古代、中世の各時代に関する研究がそれぞれに取り上げられ、各領域におけるその研究の位置付け、そこで用いられている研究の方法論、結論にいたるまでの具体的な研究手順とともに紹介されることによって、自らの所属する歴史専攻の学びと日本史研究の具体的な研究調査手順を概観する。研究対象ではなく研究方法の観点から自らの所属するゼミ、ならびに2年次以降に自分の所属するゼミとは別に履修が可能な「応用実習2」「応用実習4・5」「卒業実習1・2」を選択するための指標を獲得する。	
	日本史研究 2	近世、近代の各時代に関する研究がそれぞれに取り上げられ、各領域におけるその研究の位置付け、そこで用いられている研究の方法論、結論にいたるまでの具体的な研究手順とともに紹介されることによって、自らの所属する歴史専攻の学びと日本史研究の具体的な研究調査手順を概観するとともに、研究対象ではなく研究方法の観点から自らの所属するゼミ、ならびに2年次以降に自分の所属するゼミとは別に履修が可能な「応用演習2」「応用演習4・5」「卒業研究演習1・2」を選択するための指標を獲得する。	
	現代社会論	日本の近代化から戦後の高度経済成長を経て今日にいたる日本社会の変化を視野に入れながら、現代日本社会がどのように形作られ変化していったのかを、産業構造の変化、都市化、家族の変化、メディア技術の発達といった観点から学ぶ。その上で、現代の私たちをとりまく社会の構造や人間関係がどのような様相を呈しているのかについて、ジェンダー、政治、自然環境、生活環境、経済活動といった複数のテーマに分け、具体的な問題や現象に関する報道などの紹介を交えながら理解することによって、現代日本社会が抱える諸問題を俯瞰的に見渡す視座を獲得する。	
	専門講義・演習・実習科目		

専攻基盤科目	社会研究 1	理論的な性格の強い社会研究がいくつか取り上げられ、そのそれぞれの研究の位置付け、そこで用いられている研究の方法論、結論にいたるまでの具体的な研究手順とともに紹介されることによって、自らの所属する社会専攻の学びと社会研究の具体的な研究調査手順を概観するとともに、研究対象ではなく研究方法の観点から自らの所属するゼミ、ならびに2年次以降に自分の所属するゼミとは別に履修が可能な「応用演習2」「応用演習4・5」「卒業研究演習1・2」を選択するための指標を獲得する。	
	社会研究 2	実践的な性格の強い社会研究をいくつか取り上げられ、そのそれぞれの研究の位置付け、そこで用いられている研究の方法論、結論にいたるまでの具体的な研究手順とともに紹介されることによって、自らの所属する社会専攻の学びと社会研究の具体的な研究調査手順を概観するとともに、研究対象ではなく研究方法の観点から自らの所属するゼミ、ならびに2年次以降に自分の所属するゼミとは別に履修が可能な「応用演習2」「応用演習4・5」「卒業研究演習1・2」を選択するための指標を獲得する。	
	日本文化論	能楽、歌舞伎、茶の湯、生花など、幅広いジャンルの日本の伝統文化に加え、今日、「日本」のものとして世界に発信されているマンガ、ファッション、ポピュラー音楽などのサブカルチャーを含めた現代文化について学習する。特に伝統文化については、その近接する他文化との影響関係と現代日本社会における継承のありよう、また現代文化については他地域での受容とそこでの変容のありようを考察することによって、「日本文化」を見つめ直すための包括的な視野を獲得し、ひいては伝統文化と現代文化に通底する日本文化の特質と意義を理解することを目的とする。	
	日本文化研究 1	日本の伝統文化に関する研究がいくつか取り上げられ、そのそれぞれの研究の位置付け、そこで用いられている研究の方法論、結論にいたるまでの具体的な研究手順とともに紹介されることによって、自らの所属する日本文化専攻の学びと日本文化研究の具体的な研究調査手順を概観するとともに、研究対象ではなく研究方法の観点から自らの所属するゼミ、ならびに2年次以降に自分の所属するゼミとは別に履修が可能な「応用演習2」「応用演習4・5」「卒業演習1・2」を選択するための指標を獲得する。	
	日本文化研究 2	日本の現代文化に関する研究がいくつか取り上げられ、そのそれぞれの研究の位置付け、そこで用いられている研究の方法論、結論にいたるまでの具体的な研究手順とともに紹介されることによって、自らの所属する日本文化専攻の学びと日本文化研究の具体的な研究調査手順を概観するとともに、研究対象ではなく研究方法の観点から自らの所属するゼミ、ならびに2年次以降に自分の所属するゼミとは別に履修が可能な「応用演習2」「応用演習4・5」「卒業演習1・2」を選択するための指標を獲得する。	
	学科講義・演習科目	講読演習 1	2年次第4クォーターに置かれ、専攻の各ゼミ担当者の研究領域において必須と位置付けられる重要な文献・論文を講読することによって、自身の卒業論文のテーマを決定する際の方向性を体得する。初回授業で文献・論文を担当教員が指示もしくは配布し、履修者は毎回の授業前の予習のなかで疑問点や議論を用意して授業に臨む。授業では、履修者から提出された疑問点について教員が解説することで履修者全員の共通理解を形成した後に履修者同士によるディスカッションを行なうことによって、各自が卒業論文で取り組むテーマを定める。
講読演習 2		3年次第4クォーターに置かれ、専攻の各ゼミ担当者の研究領域において必須と位置付けられる重要な文献・論文を講読することによって、自身の卒業論文で用いる方法論を決定する際の方向性を体得する。初回授業で文献・論文を担当教員が指示もしくは配布し、履修者は毎回の授業前の予習のなかで疑問点や議論を用意して授業に臨む。授業では、履修者から提出された疑問点について教員が解説することで履修者全員の共通理解を形成した後に履修者同士によるディスカッションを行なうことによって、各自が卒業論文で用いる方法論を定める。	
長期フィールドワーク 1		調査の前提となる現地での生活と現地語の運用に慣れることを第一の目的としつつ、調査を進める上で利用することとなる交通機関や通信手段といったインフラ、さらに研究機関、図書館、博物館、アーカイブ、調査協力者といったリソースの現状を確認し、また現地でのみアクセス可能な情報なども反映しながら、事前に作成していたフィールドワーク計画を、指導教員による遠隔指導のもとで、いっそう具体的かつ実現可能なものに練り上げる。必要に応じて、現地の状況に即した調査計画の大幅な変更も行なう。	

長期フィールドワーク 2	「長期フィールドワーク 1」において練り上げたフィールドワーク計画に従って、参与観察、インタビューやアンケート、現地でのみ入手可能な資料や情報の収集といった調査を実行する。指導教員による遠隔指導のもとで、研究機関、図書館、博物館、アーカイブ、調査協力者といったリソースを利用するための具体的な手続きを行ない、事前に学習したフィールド調査の技法を実際に駆使しながら、予定されていた情報などを収集、整理、保存する。必要に応じて、調査の進展に即した計画の軽微な変更も行なう。	
長期フィールドワーク 3	「長期フィールドワーク 2」で行なったフィールドワークを通じておおよそ計画通りに情報が収集、整理、保存された段階で、その分析・解釈を現地で行なう。フィールドワーク計画を立案する際に参照した先行調査・研究等と、自身で行なった現地調査結果の分析・解釈とを対照させながら、暫定的な調査報告書をまとめ、指導教員に提出し、査読を受ける。調査報告書をまとめるなかで新たに得られた知見、さらに調査報告書を査読した指導教員からの指摘などに即して、追加の現地調査を立案・計画し、実行する。	
哲学概論	プラトンの対話篇に登場するソクラテスが説く倫理や、カントによる人間的思考の限界の追及、またフランクフルト学派による文化産業と現代社会の結びつきに対する糾弾など、各時代の主要な思想家を取り上げながら、哲学的思考にとって必要な基本概念を理解するとともに、それぞれが取り組んだ哲学的課題とその背景、さらに独自の思考の進め方を学ぶことによって、哲学そして哲学者が「時代」と切り結んだ関係が有していた「アクチュアリティ」を理解すると同時に、ひるがえって履修者自身が「現代」をアクチュアルに思考するための方法論を獲得する。	
倫理学	「善き生とは何か」という問いのうち、「幸福な人生とはどのような生か」という問いは、古代ギリシャ以来、多くの倫理学者たちにとって大きな問題だった。なぜなら、それは非常に難しい問題だからである。「幸せ」「幸福」とは一体どのようなものだろう。それは、ある一瞬の出来事だろうか、それとも一生の中でずっと続いているなければならない状態か。また、本人が満足していればその人は幸せだと呼べるのか、それとも何かそれ以外の条件を満たしていないと幸福な人とは呼べないのだろうか。講義では、古代から現代までの哲学者たちのテキストを紹介し、ビデオや映画なども見たりしながら、幸福について考えていく。	
心理学	心理学が個別科学として独立してから今日まで、人間の心理現象を実証科学的に探求する種々の試みがなされてきた。この授業では、「科学」としての心理学がどのように形成され、発展してきたのかについて紹介するとともに、実験心理学、発達心理学、社会心理学等、多岐にわたる心理学全般の基本的知見を概観することによって、心理学の目的と方法、さらに人間の生物学的基礎、心理的発達、感覚、知覚、意識、学習、記憶、言語と思考、動機づけ、情動、知能など、人の心の基本的な仕組みや働きを、日常生活の中で経験する様々な事柄と関連づながら生理解する。	
宗教学	本講義では、なによりも我々の「生活」をキーワードとし、宗教を捉える。21世紀を生きる我々にとっての日常「生活」と「宗教」を学び、これからの「宗教」の可能性と問題点を見いだしていく。現代社会の「生活」と「宗教」に求められているものとは何かを考えるため、これまでの宗教が果たしている機能とは何かを取り上げる。これらの目標を達成するために本講義では、基本的な宗教の概念および定義やその意味、宗教形態に関する概要をまとめ、宗教がもつ本来の役割とは何かを深く考察する。	
日本語学特講	この科目は、中世から近代の文献を対象として、日本語の歴史について、共時的・歴史的観点からそれぞれの時代の主要な作品をとりあげ、その言語的特徴を文字・表記・音韻・文法・語彙などの観点から具体的に説明する。そこから、現代日本語にかかわる様々な事象が、日本語の歴史的な変化・変遷につらなるものであることを理解し、日本語そのものについての深い知識を身につける。授業形態としては、プロジェクターを利用し、古典籍を含む日本語資料の画像を紹介する。	
漢文学	現代の日本語文は漢文（中国古典文）とは異なる言語でありながら、その影響を受けて成立している。講義では、中国文学・思想の特徴や、漢文が常態であった時代以降の日本文学における漢文学の受容の諸相などの基礎知識に加え、漢文を読む上で必要となる工具書や参考文献も紹介しながら、返り点、送り仮名の付いた漢文を正確に書き下し文にし、口語訳できるようになるための読解力を習得する。漢文法の基礎を習得しつつ漢文学の特質を理解するとともに、その伝統が日本文化に根強い影響を与えてきたことを再認識する。	

口承文化論	人間の普遍的な営みとしての口伝えについて、伝説・昔話・噂話などの具体的なテーマを取り上げながら、その民俗性、歴史性、ならびに現代的な意義に加え、その研究方法について理解する。東北には地震や津波の恐怖を語り継いできた地域があったことから分かるとおり、現代日本においても口承文化はその重要性を保っている。講義では、主に日本国内で伝承されてきた民話を中心に、話の展開に一定の「型」を見出し、話型を利用してさらに多くの類話を収集し、比較研究する方法を学ぶとともに、語り手一人一人にとっての語りの重要性についても理解する。	
古典文法	たんなる暗記の連続ではなく、具体的な古典作品を文学として味わいながら古典文法を理解していくことを通して、日本の古典文学を「正しく」読解するための文法知識を習得する。講義では、上代から近世までの具体的な文学作品の紹介を通じて、動詞・形容詞・形容動詞・助動詞・助詞などの様々な品詞の区別に関する基本的な認識にはじまり、それぞれの用法や敬語、ならびにそれらの変遷について理解することに加えて、文法史の基礎を学ぶことによって日本語の仕組みと変遷とを総合的・分析的に理解するための視野を習得する。	
書誌学	巻物や冊子など、さまざまな形態を備えるモノとしての書物について、主に和本を取り上げながら、紙を作る技術と書物の形態の関係、人々の読書への興味と印刷技術の発展といった時代の移り変わりと書物の変化の関係などについて学ぶ。実物および複製本・影印本などを用いながら、書物の成立・発展、印刷・製本・材質・形態、保管・分類といった側面に加え、書物がどのように流通し、どのように読まれたかといった側面についても理解し、書物のモノとしての価値と資料的価値をめぐって形成された文化について体系的に理解する。	
書道	文字、ならびに文字を書くという行為はたんなる意思伝達的手段としてではなく、そこには自己表現的な意義はもちろん、特定の文字にまつわる精神的な文化としての側面や、とりわけ東洋思想の具象化としての側面が内包されている。楷書、行書、草書、篆書、隸書の五書体による古典籍の臨書も交えながら、文字の筆法を習得することにとどまらず、「書」の歴史を概観し、東洋の文化において「書」がどのように捉えられ、扱われてきたのかも学ぶことによって、文字を書く行為そのものを見つめ直す視点の獲得を目的とする。	
日本文学史	日本文学史に関する基礎知識を習得した上で、作品の背景にある時代、社会、言語への理解、日本語を使って継続的に営まれてきた創造活動、さらには普遍的な人間の心理についての理解を深める。上代から近世までの主要な文学作品を講読しながら、その具体的な表現に触れ、日本文学の歴史的な展開や個々の時代の特色について学ぶとともに、文学ジャンルやその時代性、古今の文学の結びつき、東西文学の交流や相互影響、文学表現とそれを伝えるためのメディアとの関係など、日本文学の全体像を把握し、広く日本文化の本質とその担い手への洞察を養う。	
批評理論	主に文学における批評理論を体系的に学ぶことにより、テキストについて感想・印象を述べることを超えて、理論によりつつ「批評」できるようになることを目的とする。古典主義的な批評にはじまり、言語哲学、構造主義、記号論などの強い影響を受けて成立した文学理論、さらにそれを乗り越えようとするジェンダー批評、ポストコロニアル批評にいたるまで、文学表現を考察し評価するための主要な批評理論について、その基礎にある思想・言語哲学と個々の具体的な批評実践の紹介を通じて、それぞれの批評理論の特性と射程を俯瞰的に理解する。	
世界の文学 1	従来の「国民文学」の枠組みを超え、多様なバックグラウンドを持った作家の文学作品を通して、国境を越えて存在する今日的課題について考え、地域文化とグローバル世界との関わりを再検討することが本講義の目的である。本講義では、ポストコロニアル批評やジェンダー批評など現代の文学批評理論を紹介したうえで、アジアの文学と世界中に在住するアジア出身の作家の作品を中心に、その背景にある歴史・社会的文脈を読み解いていく。	
世界の文学 2	従来の「国民文学」の枠組みを超え、多様なバックグラウンドを持った作家の文学作品を通して、国境を越えて存在する今日的課題について考え、地域文化とグローバル世界との関わりを再検討することが本講義の目的である。本講義では、アフリカの文学と世界中に在住するアフリカ出身の作家の作品を中心に、その背景にある歴史・社会的文脈を読み解き、アフリカ地域文化に触れるとともに、これらの作品と特に関わりの深い「植民地主義」「越境と移動」といったテーマについて考察を進める。	

古文書解読	近世以前の日本史および日本文学研究においては、翻刻された史料集だけにとどまらず、くずし字で書かれた原本を広く読みこなす技能を習得することもきわめて重要である。講義では、主に江戸時代に作成された古文書・記録類、典籍などの版本などの写真版コピーを用いながら、日本における古文書を解読するための基礎的な知識と方法を学ぶ。旧字体、近世の古文書の形式、古文書に特徴的な表現・言い回しなど、必要な知識を学んだ上で、実際に演習形式で古文書を読み下していくことによって、古文書を解読する技能を習得する。	
日本史	古代、中世、近世、近現代までの日本史の流れを概観しつつ、民衆史や地域史といった近年の歴史研究の動向も簡単に紹介することによって、各時代の政治に加えて社会・文化・「日本」と周辺地域との関わりといった様々な分野のトピックを学ぶ。高校までの生徒が一般的に抱きがちな、著名な政治家や政治体制の変転にまつわる年号を暗記するという「歴史＝政治史」観から脱却するとともに、履修者が高校までの学習の中で形成した「日本の歴史」のイメージを各自で相対化するための視点を獲得する。	
歴史地理学	心理学や文化人類学の研究成果に関する積極的な紹介を交えながら、人文主義地理学の観点からの歴史地理学の研究史、歴史時代の地理的行動とその結果としての地理的空間を研究するための方法論、この方法論にもとづくフィールドワークの進め方について理解する。特に文化・民俗・環境に焦点を当て、私たちの祖先がどのように環境を知覚し、行動を起こし、環境と共存してきたのかを知ることによって、古代から現代にいたる人間集団の環境への接し方を総合的に理解し、さらに未来の人間と環境の関わりについて考察するための視座を獲得する。	
京都の歴史	京都とその周辺に位置する地域との関わり、また京都で暮らした多様な人びとの生活と社会関係について、京都市内で発掘された遺跡や残された様々な史料、関連する文献などを通じて学ぶことによって、古代から近代にいたる京都の通史と、地域に対する理解を培う。文献・史料や地図情報をもとに、現地を歩いて体感するフィールドワークも実施しながら、京都の都市空間がどのように変化していったのかを知り、その歴史的な連続性と段階性を踏まえつつ、現代京都の都市空間とそこで継承されている文化が形成されてきた経緯を理解する。	
日本民衆史	中央における政治と権力闘争を中心に歴史を綴るのではなく、生産者・被支配者に光を当てて歴史形成の主体として見直そうとする民衆史の方法論とその成立経緯ならびに問題点について学ぶ。とりわけ民衆史では、対象となる「歴史に埋もれた人々」に関する史料が少ないことから、数多くの断片的な資料を掘り起こし、過去を再構成することが重要となる。講義では、日本における民衆史的アプローチの事例紹介を通じて、この方法論を進める上での調査手順、またこれによって何が明らかになるのかを理解する。	
日本地域史	奈良、京都、江戸／東京における中央権力の政治動向とそれにまつわる政治家・知識人らを中心に歴史を綴るのではなく、この権力との複雑な関係を保ってきた諸地域の歴史を掘り起こそうとする地域史の方法論とその成立経緯ならびに問題点に加え、この地域史に先立つ地方史、またこれらに近接する郷土史との相違、特定の地域史と現代の地域住民との関わりについて学ぶ。日本の特定の具体的な時代・地域に対する地域史的アプローチの事例紹介を通じて、この方法論によって何が明らかになるのかを理解する。	
日本社会史	著名な人物や彼らが関わった事件を連ねることによって歴史を綴るのではなく、それらの背景にあってその時代・地域の社会の全ての構成員、とりわけ普通の人々の日々の営みに意味を与えていた家族、性、出産、育児、衣食住、貧困、犯罪、死といった事象に目を向け、社会構造全体の変遷をたどり、歴史研究の全体性を取り戻そうとする社会史の方法論とその成立経緯ならびに問題点について学ぶ。日本の特定の具体的な時代・地域に対する社会史的アプローチの事例紹介を通じて、この方法論によって何が明らかになるのかを理解する。	
日本・アジア関係史	古代史・中世史・近世史・近代史それぞれにおける日本とアジアのあいだの人・物・文化の移動と交流、戦争や侵略の歴史、さらに「アジア」認識の変化などについて、とりわけ琉球、韓国、中国、台湾、フィリピン、タイなどからなる東アジア地域と日本との関係に焦点を当てながら通時代的に学ぶ。日本史をアジア史のなかで有機的に理解することによって、これを相対的に捉える視野を獲得するとともに、今日の日本が形成されるまでの経緯をそのダイナミズムとともに理解し、また現代の「歴史認識」をめぐる問題の根源についても理解する。	

歴史講義科目	西洋史	ヨーロッパは2000年以上前から世界の文化、政治、経済の中心として中国を中心とする東洋とともに世界をリードしてきた。この地域の歴史を知ることは、いわば世界の潮流の半分を知ることであり、現代世界を考えるうえでも大変重要である。しかし、歴史は高校世界史で学んだような、政治的イベントの連なりのみを見ればよいのではない。それぞれの時代にある、人びとの生活が見えるような歴史を学ばねば、生きた歴史とは言えない。この講義では、これらの背景に留意しながら、歴史学の考え方を学び、現代につながる西欧の歴史の連なりを概観していく。	
	東洋史	サイードによる「オリエンタリズム」の批判から、はヨーロッパ的な意味の「東洋」は解体され、これまで「東洋」とされてきた日本（極東）から北アフリカのマグレブにかけてを指す地域のそれぞれの歴史が研究されるようになってきた。しかし、これらの地域は古くから互いに密接な交流を重ねてきており、現在、世界の最大の人口規模、生産の中心である、この地域を理解する上で、巨視的な歴史理解は重要である。そこで、この講義では、「東洋」の一部の地域の地域史を学ぶだけでなく、「東洋」全体を理解することを目指す。	
専門講義・演習・実習科目	社会学	「社会学」とは、非常に広い意味を持った言葉である。「社会学」と名のつく学問領域も多岐にわたる（例えば医療社会学、家族社会学、環境社会学、教育社会学のように）。しかしそのような多岐にわたる学問体系、多様な専門領域をもつ「社会学」という学問の基盤には常に「現在の世の中に対する問い」という共通の問題意識が内包されている。講義では社会学の基礎、その思想的背景、具体的な研究例について学んでゆく。それらの教養は人文諸学を学ぶ上でいずれ必ず必要になるものである。	
	社会調査法	統計処理を前提としたデータを扱う量的調査と、個人的なドキュメントの分析や参与的観察などによる質的調査との双方にわたる調査方法を学習する。量的調査については、データの収集方法と分析方法、その手順と過程、統計処理の手段などの方法論、また質的調査については、インタビュー調査、参与観察法、ドキュメント分析、映像テキスト分析、会話分析などの方法論を習得するとともに、社会調査の基本的な性格やその系譜と歴史、さらにデータの収集と保存、公開にまつわる技術的・倫理的について具体的な事例の紹介を通じて学ぶ。	
	ジェンダー論	「ジェンダー」はしばしば「社会的な性別」や「社会・文化的な性の様態」などと説明されるが、現在、ジェンダーは「社会・文化」の下位概念を超え、「社会や文化がジェンダーを作り出す」のではなく「ジェンダーが社会や文化を構築する」と考えられるようになってきている。こうしたジェンダー論の展開は、20世紀以降の思想・哲学の進展と深い関係を有している。講義ではプラトン以降の西洋哲学史を概観した上で、東洋における性差の理解に加え、脱構築やクイア理論などの現代思想におけるジェンダー理解について検討する。	
	社会思想史	プラトンとアリストテレスに代表される古代ギリシアの国家論・政治学から、ホブズやロックが描いた近代市民社会論をへて、現代の社会理論にいたるまでの重要な社会哲学を、それらが生まれた時代背景や地域の特性などに即して体系的・包括的に理解することに加え、それぞれの社会哲学の方法論を現代の日本社会が抱える具体的な問題に適用することによって、その射程を見極めるとともに、現代の日本社会への理解を深める。社会を理解するための多角的な視点を身につけた上で、これからの現代社会の変貌を見通すことのできる視座を獲得する。	
	経済学	『国富論』のアダム・スミスが同時に『道徳感情論』の著者でもあり、またジョン・メイナード・ケインズの『一般理論』のなかに「美人コンテスト」の実例が登場するように、本来、経済学とは人間が何に価値を付与し、それら価値を付与されたものをめぐって個々人がどのように振る舞い、そしてそれらの振る舞いが集合することによってどのような社会現象が生み出されるのかに関する学問である。この講義では、難解な数式を避けながら、個々人の消費や労働、企業、政府・国の諸活動を履修生自身の生活から出発して考察するための基本的な考え方を獲得する。	
	自然地理学	地理学は、地表を探索して「世界」についての知識を拡げ、その地図を作ることに始まった。現在では自然地理、人文地理と大別されているが、空間という広がりの中で地形、気候、植生などの自然的条件を把握すること、そしてそれらの環境条件と人間生活との相互作用の関係を解明すること、さらにそうした知見を地図などによって表現し、世界の諸地域の理解やその地域の発展に資することが、この学問の基本であり存在意義であることに変わりはない。講義では、地理学のもつ様々な側面のなかでももっとも基礎的といえる、自然地理学と人間—環境関係学の部分を取り上げて、その見方・考え方を修得することを目指す。	
	社会講義科目		

NGO論	世界的に見れば、20世紀初頭にその原型が認められるNGO。その起こりは、戦傷者の治療、そして、恵まれない人へのチャリティーにある。日本においては、1995年に発生した阪神・淡路大震災をきっかけに起こったボランティアのブームは、その後NGOの隆盛に繋がった。以降、NGOは20年以上に渡り日本国内のみならず、世界の各地で支援活動を展開するようになった。そして、現在のNGOはチャリティーの枠を大きく超え、国際社会における「市民社会」の代表者として、政治的な発言力を持つようになって久しい。この講義では、NGO史を概観して、近現代史における市民社会つまり、民主化の変遷を追うとともに、現代社会におけるNGOの新たな役割を学んでいく。	
地球環境学概論 1	地震や洪水など劇的な自然災害は人びとの生活を破壊し、多くのものを失わせる。それらばかりではなく、地球温暖化や大気・水質汚染といった人びとの生活を緩やかに脅かす自然災害も現代社会にとって重大な環境課題となっている。「地球環境学概論1」では、自然災害に対してレジリアンスを持ち、持続可能な社会とはなにかを考えることを目的とする。この課題を考えるため、本講義では、超学際的（トランス・ディシプリナリー）なアプローチから素材を提供する。	
地球環境学概論 2	地球上にある様々な「資源」は、お互いに関連しあい、「資源」に関わる問題は一つを解決しても全体の解決にはなることはない。「地球環境学概論2」では、国内外の農林水資源・生態資源を含む多様な資源の生産・流通・消費のあり方を考える。これら資源の問題は、「科学的」な正しさのみから解答を与えられるわけではなく、それらに関わるステークホルダー（利害関係者）の関与を強く意識する必要がある。この講義狙いは、科学者とステークホルダーが取り組む資源利用に関する事例から、資源の公正な利用と最適な管理とガバナンスを実現するための方策を考える。	
地球環境学概論 3	世界人口の7割以上が住まうアフリカ、アジア地域では、人間活動の急速な拡大により、環境破壊、生物多様性の消失を経験している。このプロセスでは、都市部への人口集中、農山漁村での過疎化が起り、両者の生活圏の劣化が加速している。「地球環境学概論3」では、社会・文化・資源・生態環境との相互連関の場としての生活圏の概念を再構築し、都市域や農村漁村域など多様な生活圏相互の連環を解明し、生活圏の様々なステークホルダーとともに、直面する諸問題の解決や生活圏の持続可能な未来像を描くことを目指す。	
人間の安全保障	冷戦の時代が終わり、私たちの「安全保障」の考え方は大きく変わった。21世紀にはいると、人間ひとりひとりの生存、生活、尊厳が守られることが現代的な安全保障の考え方とされ、その問題は、国民国家同士の争いから、貧困、環境、感染症、テロと言った、どの地域でも恒常的にリスクを抱える課題が重要なものとされるようになった。この講義では、人間の安全保障を脅かすリスクを私たちの生活世界の中から抽出し、そうした中で人間の安全保障がどのような考え方なのかを学ぶ。そして、どのように人間の安全保障を担保するのかという方法論を実例を交えながら議論していく。	
市民社会論	「市民社会（civil society）」は、公的領域で活動する人びとの自発的な運動の領域として、世界各地で発展してきた。これまで、「市民社会」はある意味、社会的弱者を支援する公共の福祉に関わる人びとを限定的に指す傾向にあったが、現代のグローバルな文脈において、そのアクターはグローバル企業、多国籍企業をも含め、NGO、企業、国家、国際機関を混然一体としたものとして理解する必要がある。本講義では、「市民社会」の基礎知識と歴史的展開を学ぶと同時に、多様化するアクターたちがどのように「市民社会」を構築するのか、その可能性について検討していく。	
平和学	人類史上、人間は平穏にその生を紡いでいくことを目指してきたにも関わらず、現在に至るまで絶え間なく争いを続け、それは時に多くの人の命を奪い、人びとを不幸のどん底に突き落としてきた。しかし、こうした争いのないことのみが「平和」の条件だろうか。平和の条件は、私たちが自由に往来し、暴力に妨げられることなく、自己実現することではないだろうか。この講義では、争いのない平和（消極的平和）のみならず、人間が自由に能力を発揮できる状態（積極的平和）を獲得するためにはどのようにすればよいかを、学際的な観点から考察する。	
エイジング研究概論	日本をはじめとするいわゆる「先進国」の多くの国で、極度な少子高齢化社会が進行している。老年学は「老いること」の心理学的な分析をその根幹に置くが、現在の社会状況を考えれば、「老い」そのものだけを考えるだけでは不十分である。老年学はそれほど新しいものではなく、日本でも戦後すぐにこの領域が生まれ、現在の時代背景の中でますます盛んになってきた領域である。そこで、この講義では、「老い」というすべての人間が将来的に経験する時間域を考えるだけでなく、福祉の意味を考えるうえで、国内外の政策や社会的な取り組みの事例を交えながら、「老い」の社会的意味を捉えることを目的とする。	

社会講義科目	子ども学概論	「子ども」の概念、「子ども」がオトナによって保護されるという、現在では当たり前となった「子ども」に対する考え方は比較的新しいものであることは、歴史学で明らかになり、私たちがイメージしがちな弱い存在としての子どもは、社会的に作られたものである。そこで、この講義では、一旦子どもに付与された弱者性を排除し、教育、生物学、発達心理学、文化人類学（「遊び」や「学び」）と言った多角的な視点からとらえる思考を鍛えていく。こうした学びから、子ども以外の後天的な弱者へのまなざしを客観的に考える思考を獲得していく。	
	先住民族研究	現在、世界中に少なくとも5,000の先住民族が、70カ国以上の国々に居住するとされる。本科目では、先住民が先祖伝来の土地のなかで維持してきた多様な思想、文化様式、社会制度などを学ぶ。また、これまで先住民族が弾圧、搾取の対象となり、社会に強制的に同化させられてきた歴史的背景を理解するとともに、先住民族の伝来の土地と民族的アイデンティティを維持・発展させる取り組みを学び、先住民族の文化理解と文化共生について考える。	
	国際開発論	第2次大戦後の戦禍の復興に始まる国際開発は、やがて貧困問題解決のための大きなうねりとなり、国際的な課題を担う領域となり、その学問領域も拡大していった。しかし、援助側、被援助側のこれまでの取り組みが功を奏し、状況は次第に変化し、過去の貧困問題とはその様相を異にするようになった。本講義では、貧困問題の本質を捉え、現代の貧困問題とそれに取り組む国際開発のアクターの施策の変容を考察していくことを目的とする。	
専門講義・演習・実習科目	文化社会学	いわゆる「高級文化」ではなく、概して娯楽や商品として消費されるがゆえに、その社会的価値や文化的な意味が見過されがちなテレビ番組や広告、映画、ポップミュージック、ファッション、アニメ、ゲームなどといった「大衆文化」を主たる対象としながら、そのそれぞれの特徴や分析方法、グローバル化における位置づけを、私たちの日常生活と社会との関わりのなかで理解するための様々な理論や概念、方法論を習得する。個別具体的な事例の紹介も取り上げながら、現代社会における多様な文化現象を批判的・多角的に分析できる思考力を養う。	
	文化政策論	国や地方自治体の政策の中で文化が扱われる過程とその意義について、関連する世界の動向ならびに歴史をも見据えながら考察し、現代日本における国と地方自治体の文化政策の基本的な枠組みとその方向性を概観する。とりわけ京都市・京都府に見出される文化政策の特徴と問題点を理解した上で、伝統文化と、さらに大衆文化における新しい文化事象が文化政策においてどのように扱われうるのか、また文化政策への地域住民の理想的な参与のあり方はどのようなものかについても考察し、将来の文化政策について一定の見識を習得する。	
	日本の文化遺産	「世界の文化及び自然遺産の保護に関する条約」にもとづいて世界文化遺産に登録されたもののうち京都を中心に関西圏にあるものについて、特に下鴨神社・上賀茂神社・慈照寺など大学キャンパス近辺にあるものに関しては実見も実施しながら、その概要の紹介を通じて京都の文化に関する理解を深める。また、条約の理念や目的、世界遺産の登録要件、文化財を世界遺産に登録する目的と意義について、国内の文化財保護法との関連や地元住民や行政が直面している保全と活用の問題点なども視野に入れながら考察する。	
	観光学総論	観光産業は平和産業かつ成長産業として、グローバル化が進む現代において最も注目を浴びている産業の一つである。観光による地域振興は、日本のみならず世界的なパッケージとなりつつある。それゆえ、一般的な地域社会での観光振興のみならず、宗教やグローバル経済と言った、多様な文脈の中で語ることが可能である。さらに、観光はゲスト-ホスト関係という人間社会における普遍的なテーマを含みこむ。この講義では、いくつかのトピックから現代の観光を考察することを目的とする。	
	民芸論	大正から昭和初期にかけて興った民俗学や民具学といった学術的な動向、さらに英国のアーツ・アンド・クラフツ運動の影響を受けた民芸運動や郷土玩具趣味のような文化的・趣味的な動向、そして農民美術運動のような社会運動的要素を持った動向などを踏まえ、その文化的価値が見直されてきた日本の各地域に伝承される手工芸を、その背景となる各地域固有の衣食住文化の特性と合わせて理解する。あわせて、これらの文化的価値の変容を、いわゆる「人間国宝」や無形文化財といった制度的な枠組み、観光や地域振興といった地域経済的な枠組みのなかで捉え直す。	
日本文化講義科目			

日本の現代文化	20世紀末以降の現代日本の文化状況を、主にポップカルチャーの変遷をたどりながら、いくつかのジャンルで展開されつつある文化実践を概観し、現代社会が大衆と文化産業との関わりの中で生み出してきた文化的な価値観を理論的に考察する。具体的にはアニメ、ライトノベル、ポピュラー音楽、SNSなど、現代文化を代表するジャンルにおいて複雑化・多様化しつつある動向を、大衆文化批評の主要な論点も紹介しつつカルチュラル・スタディーズなどの方法論を用いて構造的に理解し、現代文化の抱える諸問題について考察する。	
日本芸能史	田楽、神楽、風流、獅子舞から歌謡、平曲、能、狂言、浄瑠璃、歌舞伎にいたる日本の様々な芸能を映像資料や実際の上演の見学などを交えつつ考察することによって、日本芸能の原点とも言える田楽・神楽その他の地域伝統芸能から歌舞伎・浄瑠璃に至る日本芸能文化を概観し、日本の芸能文化に通底する本質的な美学を理解する。それぞれの芸能の歴史的展開と相関関係、およびその背景をなす日本史上の出来事も知り、伝統文化を固定されたものとしてではなく、固有の文化的ダイナミズムとともに考察するための視座を獲得する。	
日本の風土	日本列島において人間が自然との関わりの中で生活を営み、その生活圏を拡大していく中で創出してきた文化を、「風土」という概念を中心に据えつつ人間と環境との関係の観点から理解する。まず、和辻哲郎の『風土論』における議論を概観した上で、日本の風土を自然、植生、基層文化、信仰、伝統、自然景観、文化的・歴史的景観、里山・里地、湿地といった多面的観点から見直すことによって、風土という概念およびそれを取り上げる意義を理解するとともに、現代においても日本文化の基底をなしている精神性について考察するための視座を獲得する。	
日本思想史	日本の思想史の根底にある自然観や死生観、また陰陽道や神仏習合といった独自の宗教思想、さらに儒教や道教といった中国からの思想的影響やキリスト教や啓蒙思想と行った西洋からの思想的影響などについて、重要なトピックを紹介する。これらの日本の思想史における特徴的なトピックを、各時代の国際環境の中で日本に影響を与えた外来思想も視野に入れながら概観することによって、現代の日本人のものの考え方や生活にも影響を及ぼしている倫理・宗教・政治思想の基底について理解する。	
アイヌ文化論	北海道ならびに極東ロシアとそれに隣接する島嶼群で営まれてきた伝統的なアイヌ文化を、生活習俗、生業、通過儀礼、コスモロジー、カムイの概念といった観点から考察した上で、この文化が近代以降の日本（松前藩および日本政府）とロシアおよびソビエト連邦との関わりの中で変化していった経緯とそのダイナミズムの紹介を通じて、アイヌ民族の現状ならびにアイヌ文化に関する基礎的知識を理解し、さらに周縁的な立場に置かれた文化一般が抱える諸問題を考察するための視座、加えていわゆる「日本文化」と文化一般を相対化する視座を獲得する。	
南島文化論	かつて奄美大島から台湾との国境に向かって弧状に連なる九州の南西海上の島嶼群に存続していた琉球王国の文化を、地理的・地政学的な諸条件、政治経済、神話体系、生活習俗といった観点から考察した上で、この文化が近世以降の日本（薩摩藩および日本政府）とアメリカ合衆国との関わりの中で変化していった経緯とそのダイナミズムの紹介を通じて、琉球文化に関する基礎知識とその現状を理解し、さらに周縁的な立場に置かれた文化一般が抱える諸問題を考察するための視座、加えていわゆる「日本文化」と文化一般を相対化する視座を獲得する。	
地域研究入門	地域研究は、異文化の社会について、生態環境、社会、文化、政治、経済、歴史など、複眼的に捉え、異文化に身を置くフィールドワークを通じて、対象とする社会を総合的に理解するものである。本科目では、異文化を学ぶ、地域を総合的に理解する、フィールドワークを行う意味を理解するとともに、生態環境、社会、文化などを関係づける方法、学際的な分野として異なる分野の方法や考え方の総合的な利用、フィールドワークの調査方法を学び地域研究を行うための素地を養う。	
アフリカ地域研究1	本講ではアフリカにおける多様な文化・社会の理解を目的として以下の三点を主に学ぶ。第一に伝統社会における家族や民族文化、宗教について、第二に植民地時代から近代化への過程の中で、西洋や国際社会との関わりの中で生まれた新たな社会形態や文化について、第三に、国際化する現代アフリカ社会における都市文化やポピュラーカルチャー、メディア等を含む新たな文化の生成と発展について。西東、南アフリカなど地域間の違いも理解しつつ、アフリカ全体の社会・文化を概観する。	

<p>アフリカ地域研究 2</p>	<p>アフリカの異なる地域における社会・文化の多様性を理解しつつ、政治、経済について概観することを目的とする。本講義では以下の三点に着目する。第一に伝統社会における家族や民族文化等を含む政治形態や、それに根ざした経済のあり方について、第二に植民地支配から近代国家形成の経緯と、独立後の国家における統治と経済の変容について、第三に、現在の国際社会におけるアフリカの政治的、経済的役割について、特にヨーロッパや新興国(中国、ブラジルなどを含む)との関係を中心に学ぶ。</p>	
<p>アジア地域研究 1</p>	<p>アジアは世界の人口の半数以上を抱える地域である。東アジアから南西アジアまで広域に及び、異なる気候や自然環境のもと、様々な民族、言語、宗教、文化によって構成される。本科目では、アジア全域における地理的な基礎知識を修得するとともに、それぞれの地域に固有の文化や社会、人々の生活や生業の特性とその変容を総合的に学び、アジアの多様なあり方について考える。また、地域の固有性や特性の複合的な捉え方を理解する。</p>	
<p>アジア地域研究 2</p>	<p>現代のアジアは、グローバル化や経済発展、国内および国際的な政治変動の影響を受け、めまぐるしく変化している。また、急激な経済成長や都市化による環境劣化、格差の拡大、人口増加と少子化、宗教や民族間の確執などの新たな問題も生じている。本科目では、アジア各地域における政治、経済、社会、文化の状況と諸問題について概観するとともに、新たな国や地域間の関係や相互影響を学び、多角的な視点から変動する現代アジアに関する理解を深める。</p>	
<p>大洋州地域研究</p>	<p>大洋州とは、オーストラリア、ニュージーランド、太平洋の島々を含む広範囲を含む。本科目では、大洋州の地理的な基礎知識、伝統社会から植民地化、独立国家成立への歴史の変遷を概観するとともに、島嶼国特有の自然環境と暮らし、地域固有の文化や慣習について学び、大洋州の多様性について理解する。また、グローバル化、自然災害や気候変動による影響など現代の島嶼国が直面する課題、日本や諸外国との関係について学び、小島嶼国としての発展のあり方について考察する。</p>	
<p>アメリカ地域研究 1</p>	<p>本講義の目的は、アメリカ合衆国の歴史、文化、社会、思想、宗教、政治経済等を総合的に学ぶことを目的とする。奴隷制時代から現代に至るまでの歴史理解を通し、米国における人種、階級、ジェンダー形成の問題について、これまで軽視されがちだったマイノリティ集団が果たしてきた役割も含め学ぶ。また、現代に至るまでの世界におけるアメリカの位置づけや、アジア太平洋地域との関係、日米関係に關しても考察する。</p>	
<p>アメリカ地域研究 2</p>	<p>かつてスペイン、ポルトガル、フランスなどヨーロッパ諸国の植民地であったラテンアメリカは、言語、文化、宗教や政治制度等に多くの共通点があるが、独立から国民国家形成の過程を経てそれぞれの国で多様な発展を遂げてきた。本講では、自然環境や人種、民族、階級、政治制度等、異なる要素に関して通史的に講義すると同時に、ナショナルな文化の形成過程とグローバル化社会の中で変容するラテンアメリカの役割について理解する。</p>	
<p>欧州地域研究</p>	<p>大小さまざまな国が隣接し、古くから攻防を繰り返してきたヨーロッパ地域において、ひとびとはどのように共存してきたのだろうか。本講義では、まず地域統合という観点から現在の欧州連合が成立するまでの同地域を歴史にたどり、現代の欧州地域の成り立ちを概観する。そのうえで、欧州連合の仕組みを、政治・経済・社会・文化の各方面から学ぶ。欧州連合は現代の国際社会の一つのモデルともなっているから、欧州のモデルを基準に、他の地域との比較の可能性について検討することが最終的な目標である。</p>	
<p>世界の宗教</p>	<p>いわゆる世界三大宗教(イスラーム、仏教、キリスト教)は、これまでも世界を動かし続けてきたが、21世紀に入り、政治経済的側面においてもそれらは性質を変えつつ、強大な影響力を保ち続け、私たちはこれまでと異なる宗教を理解することが必要となっている。この講義では、これら大宗教の基礎となる教義レベルの概略を学び、さらに地域ごとの動きを明らかにすることで、それぞれの宗教が多層的レベルでうごめいていることを理解することを目指す。</p>	

地域研究科目	アフリカ・アジア関係論	グローバル化の進行にともなって、世界の各地域間の情報、モノ、人の交流は近年ますます盛んになっている。しかし、アジアとアフリカに目を向ければ、いくつかの経路で脈々とその交流は続けられている。現代の文脈では経済的観点から語られることの多い両地域間の関係を、本講義では、さらに政治・文化・社会を含む歴史を起点として考察していく。現代世界のグローバル化の潮流を考えれば、経済に着目されがちであるが、そこには、経済的な事由に加え、宗教や文化と言った側面から考えることの重要性を読み取ることができるだろう。こうした両地域の歴史的交流に目を向けることで、普段とは異なる世界の見方を検討することが本講義の目的である。	
	グローバル・ビジネス論	現在のビジネスシーンにおいて、海外との関係を意識することは不可欠である。企業を取り巻く環境は変化し、企業経営やビジネス活動のグローバル化が急速に進んでいる。本科目では、グローバルビジネスの歴史の変遷や経済環境を概観するとともに、グローバルに展開する企業を取り上げ、その戦略や考え方、求められる人材能力などを理解する。また、現代社会が直面する様々な社会問題とそれに対応する新しいグローバル・ビジネスのトレンドを学ぶ。	
	グローバル化とメディア	ヒト、モノ、情報、サービス、カネ等が国境を越え移動するグローバル化社会において我々は様々なグローバル 이슈に直面するようになった。特にインターネットを利用した情報のやり取りは現代社会の日常生活に多大な影響を与えている。インターネット、テレビ、新聞、広告等のメディアの作り手はいかなる意図のもとに情報を発信するのか、またメディアが社会に与える影響は何か。グローバル化に伴うメディアの変容を理解すると同時に、理論と実践を通し、受信者、発信者として情報を作り出し、また読み解くための能力（メディア・リテラシー）を身に着ける。	
専門講義・演習・実習科目	世界文化遺産	文化遺産は、人類の文化的活動によって生み出された有形・無形のものであり、多様な文化が共生する社会を実現するために、後世に伝えていく必要がある。本科目では、「世界の文化及び自然遺産の保護に関する条約」「無形文化遺産の保護に関する条約」の成立と理念、登録の目的を理解し文化遺産保護の意義を学ぶ。また、国際的な枠組みにおける各ステークホルダーの役割を理解し、各地の「世界文化遺産」「世界無形文化遺産」を対象に、具体的な取り組みと現地で生じる課題を理解し、これからの文化遺産保護のあり方を考える。	
	アフリカ美術	アフリカ美術は我々の日常生活においてそれほど馴染みは深くない。アフリカ美術の多くは名もなき製作者によって生産され、オリエンタリズムに満ちたまなごしに晒されてきた。しかし、近年、多くのアフリカ出身のアーティストが様々な作品を手掛けるようになった。本講義では、アフリカを舞台に、アフリカの美術を取り巻く環境を紹介し、アフリカ的美術について学び、同時に、アーティストとは誰か、という問いに対して考察する。	
	マテリアル・カルチャー概論	かつて人びとの生活の中のマテリアル（物質）を収集することは、異文化を知る最も有力な方法とされた。この領域は文化人類学や民俗学で発展し、実存するモノを生産し、それを使う計画、方法、理由などを人びとに提供する人間の習性や行動を分析するとし、モノを起点に人間のあり様を哲学的に考える領域だと言える。モノが溢れた現代社会において、モノとは何か、そこにまつわる人間の生活がどのように構成されているかを考えるのが本講義の狙いである。この講義では、マテリアル・カルチャーの理論に加え、モノをどのように描写するかについても学んでいく。	
	比較服飾文化論	服飾は時代背景や地域、風土、そしてそれぞれの文化を反映すると同時に、それを生み出した社会の思想や生活を視覚的に伝達する。本講では、異なる歴史的背景（古代文明から現在まで）、また異なる地域や風土（アジア、アフリカ、ヨーロッパ、ラテンアメリカ、アラブ地域など）における服飾文化の流れと変容を比較文化的視点から学ぶ。多様な時代や文化によって生み出された服飾文化について理解することで、今日のファッションにおいても異なる文化的要素を取り入れた新たなトレンドを発見することに繋がる。	
	比較建築文化論	建築物は、世界各地の自然環境、歴史と文化の多様性を示す。本科目では、人々の暮らしと密接に関わる住居を中心に、異なる地域の気候風土に適応する多様な建築形式、住居と家族形態、生活様式、信仰など社会文化的要素との関連を理解し、比較文化の視点から住居の地域固有性について学ぶ。また、現代社会における暮らしを取り巻く環境変化による住居への影響、現代の新たな住居の課題を理解し、地域の自然環境や文化に適応した持続的な住居のあり方を考える。	
世界文化科目			

専門講義・演習・実習科目	世界文化科目	民族音楽論	<p>世界中、ありとあらゆる社会に音楽は存在し、それぞれの様式美がある。芸能として発達し、西欧音階に転記されポップな音楽になったものがある一方、音楽の中には農耕や漁業と言った生業に密接にかかわるものも少なくない。しかし、私たちの生まれ育った場所で育まれた音楽は、いづいぶん縁遠い存在となってしまった。この講義では、まず、音楽理論を学び、これを基礎としながら、各民族に独特の様式やパフォーマンスを分析し、ある社会における音楽のあり方を理解することを目指していく。</p>	
--------------	--------	-------	--	--

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文化学部グローバルスタディーズ学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
導入プログラム	フレッシュャーズ・キャンプ	この授業は1年次第1クォーターの必修科目にあたる。本学に入学したばかりの学生に対して、学生自身が他の学生とともにキャンパスを出、直接異文化の中に身を置きながら他の学生との情報共有などを経ることで、その後の学習において協力し合える関係性を学生間で持てることをめざす。加えて、本学の学びの中で特に重要な「自身の意思の伝達」、「他者の理解」、「自文化・多文化の認識」について身につけることを目的とする。この授業を経て大学の学びに向き合うことにより、教員、学生同士の関係を深め、より横断的な視野で学習することができる。	
	クリエイティブ・ワークショップ	本学での学びは、各専門分野にとじこもるのではなく、分野を超えた中での新たな価値観の発見を通じ、これからの社会をよりよくできる人間の育成を目的とする。そのために必要な相互理解と発展の第一歩として本授業においては今ともに学ぶ隣人がどのような専門性と将来像を描きながら学んでいるのかを各領域の教員の講義や上回生の事例を紹介しながら学ぶこととする。自らの専門の枠を超えた学びを描けることによる視野の拡張で、これ以後の学びの可能性を広げ、自らの学習計画の向上と改善ができることをめざす。	
共通教育科目	コミュニケーションスキル1	学問・芸術においては自らの思考を言語化し、発信し、コミュニケーションをとることが重要である。全学部生1年次必修となる本科目は、身近にある「読む」「書く」「話す」を通じて、ことばの多様性を理解し、自分のことばに関する強み、弱みを自覚し、エッセイや感想文、評論文により他者に向けて実践することを目的とする。1,000~2,000字で与えられたテーマをもとに繰り返し実践を行うことで、思考力を磨き、受け手を意識し、主体性を持つてことばを使える能力を身につける。	
	コミュニケーションスキル2	「コミュニケーションスキル1」で修得したことばを使う基礎能力をもとに、さらに「読む」「書く」「話す」の実践を深め、ことばを使える応用能力を身につける。自分の活動や思考した内容を膨らませて長文化したり、他者に伝えるトレーニングを行いながら、主体的かつ積極的にことばを使うコミュニケーション力を伸長させることを目的とする。最終段階では自身の生活や創作活動に関連した「ことば」の表現能力を高めていくことをめざす。	
	アカデミックスキル1	1年次第1クォーターの必修科目である本科目では、大学での学習の基礎となる「調べる」ことについての能力習得を目指す。「調べる」ことは私たちの日常的な営みのひとつであり、物事を多様な方法で知ることは、個々人にとっても社会にとっても重要なことである。この授業では、調査に関わる基本的な知識、技術を習得することによって、「調べる」ことの重要性、社会科学の基本的な考え方、量的調査・質的調査の方法論、調査倫理を学ぶ。さらに方法論の観点から実証研究を評価する視点を学び、現代の社会について主体的に考察する方法を学ぶ。	
	アカデミックスキル2	この授業では、「論文とはどのような文章なのか」といった初歩から始める。大学での学びは、「聴く」ことや「読む」ことといった受動的な学びに、「問う」ことや「書く」ことといった能動的な学びが伴って、初めて完結する。「考えるという行為」と「書くという行為」の相関を論じた基礎的な文献『知的複眼思考法』を教科書にして、大学で学ぶためのリテラシー能力の向上に努める。『知的複眼思考法』は全国の多くの大学で、「論文の書き方」の教科書として使われている。「『問い』を意識しながら読み、『問い』を意識しながら書く」という、すべての科目に共通する初年次教養教育を、少人数のゼミナール形式で展開する。	
	アカデミックスキル3	4年生の口頭試問や卒業発表展への参加、協力することを通じ、自らが4年次になった際のイメージを獲得するとともに、これまで培ってきた力を卒業論文、卒業制作へとまとめ、展示・発表へといたるために必要な表現力、プレゼンテーション能力を修得することをめざす。授業は4年次の卒業研究演習への参加と、授業内での模擬発表などを中心とするものであり、自身の先輩たちの姿を見ることで、次の年の同じ時期の自らを投影し、実感をもって4年次の学びへ向かうこととなる。	
表現科目			

アカデミックスキル4	卒業論文や卒業制作におけるポートフォリオなど、4年次ではこれまでの授業では求められなかったボリュームの論文を各学部でまとめなければならない。そのために必要な構成力、論理力、表現力を身につけることを本授業における目的とする。これらの力は卒業論文やポートフォリオの作成だけでなく、今後社会に出てからも必要となることだろう。各自はそれぞれの専門において取り組んできたテーマについて自身で振り返るとともに定期的な相互共有を通じ、他の専門で学ぶものたちの考え方やものの捉え方も同時に理解することとなる。培った専門的視野と他者から知る横断的な視野による複層的な視点をもって、これまで体験してこなかった論文の執筆へと向き合う力を獲得する。	
デッサン1	あらゆる表現の基本は「見ること」、「聞くこと」、「読むこと」、から始まる。対象を観察することにより、それまで気づかなかった世界がそこにあることに気づく。しっかりと対象を観察することを重視し、見えたもの捉えたものを伝えるために表現するデッサンの基礎を習得する。デッサン1では、そのために必要な知識や描写の基本を学び、幅広い様々なデッサンの表現を通じて観察力と描写力を養い、表現の礎を築く事を目的とする。	
デッサン2	表現を追求する上で、または思考を整理し編集・表現していく上において、対象物を良く観察し、見える形として表現する事は重要である。デッサン2では、デッサン表現の基礎要素となる、形、線、タッチ、調子、材質感、遠近感、構図、材料などの基礎を学び、描写する力、表現する力である、基礎描写力を身につけることを目的とする。また、より幅広い身近な環境、現象、興味に意識を向け、デッサン表現の幅を広げていけることを目標とする。	
デッサン3	デッサン表現は、対象を「観察する」ことから始まり、次に捉えた「要素を抽出・理解」し、手を動かし「表現する」といった一連の流れが複雑に往復しながら絡み合い成立している。この流れを繰り返すことにより、よりの確な表現として成立する。デッサン3では、表現するうえで必要となる、より深化させた観察力や描写力を様々なデッサンで養う事を目標とし、さらには解剖学的な知見から、人体の形態と機能、その外形と内部構造の関係などを知ることによって、表現力の効果的な向上を目指す。	
デッサン4	この授業では履修者が「デッサン3」までに獲得した力をもとに、デッサンによる表現のさらなる展開として、単に「描写する」、「表現する」だけにとどまらず、さまざまな「表現のパリエーション」を実践しながら、デッサン表現による「作品としての成立」までを目指すこととする。そのため、表現手段や手法といった構成要素も検討するだけでなく、モチーフやテーマの設定を構想し、デッサン表現の「可能性を追求する」ことを目標とする。	
グラフィックデザインソフトスキル	本授業では、コンピューターグラフィックの基本を修得する。具体的には、コンピューターグラフィック作成アプリケーションソフトのスタンダードである Adobe Photoshop®と Adobe Illustrator®の入門から基本操作の修得を目標とし、ビットマップ画像の補正・加工・合成、ベクトル画像によるロゴやイラストの作成をはじめ、印刷物作成をベースとしたグラフィックデザイン手法の基礎を学ぶ。本授業で修得したスキルは、個展やグループ展、コンサートなどの社会に向けてのアプローチを告知するポストカードなどの案内物の作成に活用が可能である。また、企画などのプレゼンテーション資料作成においても活用が期待できる。	
芸術学	本講義では、視覚的イメージをコミュニケーションのためのメディアと考え、ヴィジュアル・リテラシー（視覚的な読み書き能力）について理解を深めることを目標とする。扱う対象は、絵画、映画、マンガと多岐にわたるが、それらが「意味」をどのように作り上げているのか、そのメカニズムについて理解を深めていきたい。さらに、そのような理解の上で、近代における「芸術」という制度の成立や「デザイン」という概念の誕生、その変容を幅広く見ていくことにより、芸術と近代社会・文化との関わりを再考する。絵画、彫刻、デザイン、さらには音楽における近代主義（モダニズム）の確立と変容を通じて、私たちが今日受容している「芸術」というものがどのような歴史的、思想的プロセスを経て成立してきたのかを問いたい。このようなプロセスに関する知識を得ることで、受講生自らが学んでいる文化制作を相対化することを目標とする。	

美学概論	<p>美学は論理学や倫理学と並んで人間の認識と行動を対象とする哲学の一分野である。とくに美学においては、美に代表される感性的な価値の判断を出発点として、様々な美的認識と芸術制作を対象とする。計算によって導き出される価値や、道徳や伝統によって定められた価値ではない、純粋な美的価値の存在とそれをめぐる議論について親しむことがこの授業の目的である。</p> <p>授業全体は7つのテーマについて「問題提起」の回と「解説」の回を繰り返すことにより成り立っている。「問題提起」の回の終わりには扱っているテーマに関するアンケートを実施し、次の「解説」の回にその結果を発表・解説するので、そのテーマに対する自分の立場を客観視する手立てとすること。また後述の通り、計7回の「解説」の回で扱ったテーマに関するレポート課題を発表するので、授業時間外に取り組んで各テーマに関する復習とすること。</p>
現代美術概論	<p>本講義では、主に20世紀から21世紀の世界の美術を、履修者側の予備知識のないところから、具体的な作品に即して、説明する。ある作家が、どうしてそういう作品を作るにいたったのか（たとえば、どうして便器が「泉」（マルセル・デュシャン・1917年）なのか）、そのような作品が生み出された時代や世相などの背景や、作者自身の理由を学ぶことで、各地での美術館で開催される現代美術の展覧会をどう楽しむのかを解説する。</p>
美術史	<p>美術史 (art history) とは何か？ それをかみ砕いてみると、美術にまつわる「ひとびとの物語 (story) 」と理解することもできる。この「物語」は、空想やファンタジーではなく、事実として「過去にあったできごと」である。</p> <p>この基本姿勢に基づいて、本講義では、世界各地の美術品 (=過去に人間の手で作られたもの) を彫刻、絵画、建築・工芸の三つのジャンルに分類し、それについて、最低限知っておくべき特徴、作者、制作背景を紹介する。授業を通じて有史から現代にいたる「美術の物語」のおおまかな見取図のインプットを目的とする。</p>
日本美術史	<p>日本の美術は世界の中でもたいそうユニークな性格をもっている。だが、根底にはアジアに共通するものがある。それは仏教美術である。古くインドを発祥としながら各地でさまざまな形で変化をしたこの大きな基盤の上に、アジア各地で独特の美術が育まれていった。したがって、日本の美術をより良く把握するためには、まず仏教美術について学ぶことが重要である。本講義ではまず仏教美術に関する概説を行ったのち、仏教美術の影響について解説しつつ、日本美術の特徴を見極めていきたい。</p>
東洋美術史	<p>わが国では近代以降、西洋からの影響が大きくなると、教育現場で東洋美術の歴史や実技を学ぶことがほとんどなくなってしまった。</p> <p>今では多くの西洋の芸術家の名前や作品が一般的に知れわたっているのに対し、東洋については知られていることが極端に少ない。本授業ではまず、多くの人々が現在は忘れてしまった東洋の優れた作品を紹介するとともにそれらの作品の生まれた時代などの背景などを解説する。履修者にはまず東洋美術に興味をもってもらうことを目的とした。</p>
西洋美術史	<p>本講義では、西欧のルネサンスから十九世紀までの絵画様式を皮切りに美術史への理解を深めることを目的とする。単に個人的な好き嫌いだけでそれらの作品を判断するのではなく、複数の視点から作品を鑑賞する方法も身につけていく。それぞれの絵画にはそれらの作品が生まれた時代や地域ごとの特色がはっきり現われており、その時代その時代の背景や、各地域の当時の様子などをふまえつつ、その特徴を丹念に整理しながら把握していく。</p>
工芸概論	<p>古代から制作されてきた漆芸、染織、陶芸、木工、金工などは、明治時代（近代）になると「工芸」としてくくられることになる。この講義では、とくに漆芸、染織をモデル・ケースとして取り上げ、前近代から近代にかけて、これらのジャンルがどのように変化したか、あるいは、変化しなかったのかを検討し、それらの素材の特性や技術、デザインの変遷を理解する。さらに、各分野において、近代化にどのように向き合い、発展をとげてきたのかその歴史をまなぶことで、現代の工芸制作とデザインの方法を考える。また、適宜その日紹介した作品や事項について、自分の意見・感想をまとめてもらう。</p>
デザイン論	<p>今日のわれわれが日常生活に使う大抵の物には「デザイン」が施されている。そしてそれらはさまざまなメディアを通じて人々に対して紹介され、選択され、そして購入されている。この授業では、近年の情報メディアの変化と、デザインとの関係を軸としたうえで、現代社会において、デザインに求められていることとはなにかについて、考えていく。「人に対して望ましい状況であることを中心に考えて実践する」というデザイン本来の意義に対する認識を確かなものとしながら、デザイナーの視点や発想や手法への理解を深め、その社会的な価値を自覚することが当授業の目標である。</p>

<p>素材論</p>	<p>ものづくりでは「素材」とその「加工技術」及び「応用」に関わる知識習得は重要である。更にそれらは技術の進歩とともに急速に変化しており、芸術計画、建築計画や商品開発、CMやアート制作における加工技術もその進歩に対応せざるを得ない。現在では複数技術の融合による多岐にわたる領域にまたがる技術の進歩がその礎になっている。芸術造形・デザイン・建築制作時に最低限必要な、伝統的素材と最新素材及びその加工技術を学習する。</p>	
<p>音楽概論</p>	<p>現在の音楽文化を知る上で、私たちが未知の音楽に出会ったときどのような姿勢で聴き、受け止めているのか、あるいは、私たちが慣れ親しんでいる音楽を私たちとまったく違うバックグラウンドをもつ人々がどのように聴き、受け止めているのかを考えることはとても重要である。技術の発達により音楽の行き来する範囲が大きく広がっている現在、世界中のあらゆる国々でそれまでふれることのない音楽に出会うことがあたりまえとなりつつある。この講義では、音楽や芸術、文化を考える方法について、世界のさまざまな地域で行われている音楽実践の事例を通して学ぶ。さらにそれを通して、自分たちの慣れ親しんできた音楽について、それを未知とする人々に対し、自分の言葉で説明する技術を身につけることを目指す。</p>	
<p>ポピュラー音楽論</p>	<p>『ポピュラー音楽史』では、「媒介～メディアーション」という考え方を中心に、音楽の制作、流通、聴取に係る技術がどのような歴史的変遷を遂げ、それがポピュラー音楽の作られ方、聴かれ方にどのような影響を及ぼして来たかを紐解いてゆく。レコードやCD、あるいはネットやラジオやテレビを通して耳に届くポピュラー音楽は、逆に言えばレコーディング技術やメディア技術なしには成立し得ない現象であり、作り手と聴き手を結ぶこれらの媒介がなければ、音楽は《表現》としてさえ成り立たない。本講義では音楽そのものに耳を傾ける一方で、社会学、政治経済理論、メディア論などの方法を通し、その音楽を可能にしている力学を見極める能力の獲得を目標とする。</p>	
<p>身体表現論</p>	<p>この授業では、身体表現における特に「演劇」を核として学ぶ。何かを「演じる」という行為は学生にとっては縁遠いものも多いことだろう。しかし、幼いころには、多くの子供たちが友人や兄弟、姉妹らとともに「ごっこ遊び」に興じた記憶をもっているのではないかと。しかし、いつの間にか子どもはごっこ遊びから「卒業」してしまう。一方で演劇は古代より続く文化の源流のひとつと言え、神話や文学、音楽などのさまざまな文化は演劇という行為とともに発達してきた。この授業では、子どもの遊びのひとつである「ごっこ遊び」と古代から続く演劇との共通点についてさまざまな演劇を紹介しながら感じてもらう。そして人々が演じることで、演者を見ることで感じてきたことを理解する。演劇を通じて広がった文化について知ることで、文化に対する教養の枠を広げることへとつなげることを目的とする。</p>	
<p>身体文化演習 1</p>	<p>身体を文化の問題として捉える視点、アプローチの仕方、理解の方法について学ぶ。全ての人間が等しく持つ「身体」であるが、文化的に異なる身体観や動かし方、感じ方、表現の仕方、伝え方などがある。本授業では、主に国内における諸文化について学ぶ。特に華道、茶道、柔道、剣道、などの身体の所作や動作による表現を行う具体的な事例を体験することで、自己の身体が文化とどのように関わっているのか、また自己の身体と他者の身体がいかなる文化的つながりを持つものであるのかを理解する。</p>	
<p>身体文化演習 2</p>	<p>身体を文化の問題として捉える視点、アプローチの仕方、理解の方法について学ぶ。全ての人間が等しく持つ「身体」であるが、文化的に異なる身体観や動かし方、感じ方、表現の仕方、伝え方などがある。本授業では、主に海外における諸文化について学ぶ。特にヨガ、太極拳などの身体の所作や動作による表現を行う具体的な事例を体験することで、自己の身体が文化とどのように関わっているのか、また自己の身体と他者の身体がいかなる文化的つながりを持つものであるのかを理解する。</p>	
<p>表現と社会</p>	<p>個人としての表現者が自身の作品を出す先は社会である。一方で表現者自身が属しているものもまた社会であり、たとえ表現者個人がその作品を生み出したとしても、そこには社会の影響が少なからずある。生み出されたさまざまな作品と社会とのかかわり、表現者自身と社会との関係性について、特に現代社会に焦点をあてて考えたい。授業では、さまざまなデジタル機器とインターネットの発達により、すべてのひとびとが表現者となり得、かつそれを手軽に社会に発信できる現代社会の特性についても考察する。</p>	

表現科目	表現と倫理	表現活動においては、常に倫理の問題がかかわってくる。ときにそれは表現者とその題材となった対象との関係であることもあり、時に法、社会との関係であることもある。とくに現代社会においては、多様な価値観の中で、ひとびとの倫理観も変化をかさねており、少し前には問題のなかったことでも、批判の対象となることもある。表現者は倫理的な問題を常に認識し、ときに対峙しながら活動を続けていくこととなる。この授業では、現代社会における表現活動と倫理のあり方について、歴史的な事例や、現代において生じた裁判、事件、マスメディアの批判、インターネット上での炎上などさまざまな事例を紹介し、考察していく。	
	表現と知的財産権	表現活動を職業にするということは、自らを好き勝手に外部に発信することではない。表現活動は、社会的行為である以上、社会を規律する法律と切り離すことはできない。表現活動を守り支える法律を知り、使いこなすことができること、それは、クリエイターが身につけるべきリテラシーとして重要な地位を占めている。著作権をはじめとする表現活動を規律する法律の基本的知識と、具体的な表現活動に法律がどのように影響しているかを、具体的事例を交えながら解説する。	
	写真技法	この授業では、カメラや写真表現の経験のない、あるいは浅い履修者を対象とし、写真表現やポートフォリオを作成するために必要な基礎知識と、技術を学ぶことを目的とする。実際に各自が持ってきたカメラを使い、そのカメラの機能と基本操作から授業を始め、ある程度の基本操作を学んだ後、写真スタジオなどを使ったライティングの習得と、Adobe Photoshopなどの写真編集ソフトを活用したデジタルレタッチテクニックの基礎を学ぶ。	
共通教育科目	日本文化概論	近年「日本文化」に関するテレビ番組や雑誌記事が数多く制作されるなど、国内外で「日本文化」に注目があつまっている。しかし、そうしたメディアの情報では、表面的な部分しかとりあげられないことも多い。本講義ではいわゆる「日本文化」について、現在ある事象と、そこにいたる歴史の変遷や背景について学び、「日本文化」について考えるための基礎的な知識を習得することを目標とする。「日本文化」と一言と言っても、分野もさまざまであり非常に幅広い。そのため、京都精華大学があり、受講生にも身近な場所である「京都」を中心におき、「京都」にかかわりの深いものを中心にとりあげる。	
	英語 1	「英語 1」では、まず、英語を使う上で必要となる基礎的なコミュニケーション能力を支える文法力や語彙力を強化することを目標とする。履修者が高校までで学んだ英語の文法や語彙の知識を確認したうえでレベル別にクラスを配当し、さらに高いレベルのコミュニケーションを可能にするための文法力・語彙力を身につける。語彙面では3,000語レベルの語彙の定着を図り、文法面では基礎的な文法事項を整理・確認することをめざす。	
	英語 2	「英語 2」では、「英語 1」に引き続き、英語を使う上で必要となるコミュニケーション能力を支える文法力や語彙力を強化することを目標とする。英語 1 と同じ習熟度別クラスのなかで履修者が高校までで学んだ英語の文法や語彙の知識を確認し、さらに高いレベルのコミュニケーションを可能にするための文法力・語彙力を身につける。語彙面では3,000語レベルの語彙の定着を図るとともに、文法面では基礎的な文法事項を整理・確認する。	
	英語 3	「英語 3」は必修科目として配置されている。日本語を母語とする国内学生を対象とした必修科目である「英語 2」までに身につけた能力をふまえ、英語による「読む」「書く」「聞く」「話す」の4技能の運用能力を発展的に高め、学術目的で使われる英語を理解するとともに、自分の考えを英語で的確に発信できるより高度な技術を身につけることを目標とする。また、授業を通して、多様な文化に関する知識と理解を深め、国際的な視野を身に付けることもめざす。	
	英語 4	必修科目である「英語 3」につづくこの「英語 4」においては、担当教員が紹介する資料や各自の持ち込んだ資料などを通じ、英語の文章構造とそれに伴う単語や文法について学習することを通じ、学問や芸術分野について履修者が英語でディスカッションできるようになることを目標とする。さらに英語によるライティングの力を伸ばすことで、自分自身の専門分野における研究活動や表現活動について、英語でプレゼンテーションできる力を身につけることを目的とする。	
グローバル科目			

日本語 1	「日本語 1」では、大学でレポートや論文を書くための基本的な技術を養う。与えられた情報を整理し、レポートや論文にふさわしい形式と組み立て方で、自分が言いたいことが読者に誤解なく伝わるようにまとめることを学ぶ。文体レベルで気を付けるべき句読点や記号の使い方について学び、さらに事柄に視点をあてた客観的な文、主述関係、引用のしかた、参考文献表の書き方、アウトラインの作り方、報告型のレポートの書き方などを学ぶ。レポートや論文にふさわしい基本的な「形式」を身に付けることを目標とする。
日本語 2	「日本語 2」では、大学で学ぶために必要な、レポートを作成する方法を学ぶ。的確な表現を使い、正しい構造の文で、論理的な文章を書く力を身に付ける。また、さまざまなジャンルの作品における記述や批評をレポートし、合評における自分の作品のコンセプトや説明に役立てる。さらに、ショートショート、短編小説、エッセイ、新聞記事、論説文などさまざまなテキストを読み、あらすじをつかむ力を身に付け、解説文の必要な項目に着目する力を養う。また、簡単な批評や論文などを読み、作品のどこに着眼して批評が行われているかを考察する。
日本語 3	「日本語 3」では、日本語能力試験1級レベルの日本語能力の習得を目指す。文字・語彙、聴解、文法、読解の問題を解きながら、日本語への理解を深める。また、現代小説やエッセイに加え、新聞記事などの生きた教材を読み、日本語の読解力を伸ばし語彙力を身に付ける。読解問題に取り組む際には、まず語彙や表現について学習した上で、練習問題を解いて理解を深める。また、本文について話し合いレポートを作成することで、アカデミックな文章を書く技術も養う。
日本語 4	「日本語 4」では、日本語能力試験1級レベルの日本語能力の習得を目指す。漢字力と語彙力を伸ばし、時間や様子、関係性などを表す機能語について理解を深める。また、現代小説やエッセイなどに加え、新聞記事などの生きた教材を読み、日本語の読解力を伸ばす。読解問題に取り組む際には、まず語彙や表現について学習した上で、練習問題を解いて理解を深める。また、アカデミックな文章を書く技術を養うため、論理的なレポートを作成する実習を行う。
中国語 1	日本においても中国語圏からの外国人留学生・旅行者が飛躍的に増加している。世界的な物価の変動に伴う円安によるショッピングなどを受けて、今後ますますこの傾向は高まるといわれている。そのような中、コミュニケーション能力を重視する中国語学習が求められている。この授業では、中国語の発音や基礎文法とともに、実用的な会話を習得する。異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力の向上を重視し、聞けて話せる中国語をめざす。
中国語 2	日本においても、中国語圏からの外国人留学生・旅行者が飛躍的に増加している。世界的な物価の変動に伴う円安によるショッピングなどを受けて、今後ますますこの傾向は高まるといわれている。そのような中、コミュニケーション能力を重視する中国語学習が求められている。「中国語 2」では、「中国語 1」で学習した内容を踏まえ、基本文法の習得を進める。異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力向上を重視し、聞けて話せる中国語をめざす。
韓国語 1	日本に最も近い朝鮮半島の人たちが使っている言葉と文化に親しんでもらうことが、この授業の大きなねらいである。この授業では、韓国語・朝鮮語固有の文字であるハングルの読み書きとともに、自己紹介などの基本的な会話ができることをめざす。また、朝鮮半島のことや理解できるように民族の風土や習俗などの紹介をおりまぜて、授業を進めていく。在学中に短期間でも実際に現地へ赴く意欲を刺激するような現地の情報なども提供しつつ、言語の基礎的な能力習得をめざす。
韓国語 2	「韓国語 1」につづき、日本に最も近い朝鮮半島の人たちが使っている言葉と文化に親しんでもらうことが、この授業の大きなねらいである。この授業では、韓国語・朝鮮語の基礎文法の学習と会話の練習を通じて、基本的な日常会話と読解、作文ができることをめざす。また、朝鮮半島のことや理解できるように民族の風土や習俗などの紹介をおりまぜて、授業を進めていく。在学中に短期間でも実際に現地へ赴く意欲を刺激するような現地の情報なども提供しつつ、言語の基礎的な能力習得をめざす。

フランス語 1	この「フランス語 1」は、発音の習得および基本構造の理解と必須語彙の習得により、自己紹介や自分の住んでいる場所、好きなものなどについて初歩的な語句を使って会話による意思疎通ができることを目標とする。会話と並行して、簡単な文章を読む練習をおこなう。また、フランスの美術、音楽、映画、ファッションなどにも触れ、フランス文化への理解も深めることで、在学中に短期間でも実際に現地に赴く意欲を刺激するような現地の情報なども提供しつつ、言語の基礎的な能力習得をめざす。
フランス語 2	この「フランス語 2」は、「フランス語 1」に引き続き、発音の習得および基本構造の理解と必須語彙の習得により、量や時間の表現、未来や過去の表現、比較表現などについて会話による意思疎通ができることを目標とする。会話と並行して、「フランス語 1」よりも長い文章を読む練習を行う。また、フランスの美術、音楽、映画、ファッションなどにも触れ、フランス文化への理解も深めることで、在学中に短期間でも実際に現地に赴く意欲を刺激するような現地の情報なども提供しつつ、言語の基礎的な能力習得をめざす。
タイ語	「タイ語」では、発音記号を用いて学習し、簡単な日常会話ができるようになることを目標とする。タイの文字は子音文字と母音符号によって成り立っている。授業ではタイ文字の書き方を練習し、簡単な読み書きができることも目指す。さらに、総合的な学習として、タイの文化を紹介し、タイをより身近に感じ、タイ語および文化への理解を深める。履修者はこの授業を通じ、短期間の現地観光をする際に苦にはならない程度の言語の習得を目標とする。
ベトナム語	「ベトナム語」で履修者は、ベトナム語を学習するにあたって基礎となる発音、文字の読み方、書き方からはじめ、基本語句、基礎文法を学ぶ。ベトナム語の基礎文法、初歩的な表現を習得することを目標とする。授業では、発音、文字の読み書きを学んだ後、基礎的な文法事項を学んでいく。音声も用いた具体的な会話表現の中から文法事項を学んでいき、重要な定型表現は暗記することをめざす。履修者はこの授業を通じ、短期間の現地観光をする際に苦にはならない程度の言語の習得を目標とする。
インドネシア語	インドネシア語はインドネシア共和国の共通語として多くの人々に話されており、マレーシア語とマレー語とも非常によく似た言語で、それらの隣国でも通じる。表記は、アルファベットで、しかもローマ字読みすれば、大体通じるので、発音も構造も比較的簡単である。インドネシア語では、文字の発音から始め、初歩的な文法や文章を使って、インドネシア語の日常会話や旅行の時に役に立つ会話の修得を目標とする。授業は、口頭の練習を中心に進めていく。
スワヒリ語	「スワヒリ語」は東アフリカ（タンザニア・ケニア・ウガンダなど）を中心に、地域共通語として広く話されている。この授業では、スワヒリ語の初級文法について学び、簡単なスワヒリ語文の作成の能力と、簡単な会話の能力を身につけることを目標とする。スワヒリ語にまつわるエピソードとして、タンザニアを中心とした、スワヒリ語圏の国の文化についても紹介する。履修者はこの授業を通じ、短期間の現地観光をする際に苦にはならない程度の言語の習得を目標とする。
ドイツ語	「ドイツ語」では、ドイツ語のアルファベットの紹介と発音練習からはじめて、ドイツ語の基礎的な文法事項について学ぶとともに、授業で出される練習問題をおこないながら、簡単なドイツ語の文章が読め、会話できることを目標とする。また、言語の学習と同時に、ドイツ語圏の国々のさまざまな文化や社会についても触れ、異文化理解を深める。履修者はこの授業を通じ、短期間の現地観光をする際に苦にはならない程度の言語の習得を目標とする。
スペイン語	スペイン語は20カ国以上、約4億人に話されており、国際共通語のひとつと言われている。「スペイン語」では「読み・書き」よりも「聞く・話す」ことに重点をおきながら、スペイン語の基礎を学んでいく。まず、スペイン語の音に慣れ、発音を身につけ、自己紹介、挨拶表現などを学ぶ。また、文法ではスペイン語に特徴的な点を学び、文法で学んだことを用いながら会話学習、聴解練習を通じて、自分の身の回りのことが表現できるようになることを目指す。

共通教育科目	グローバル科目	イタリア語	「イタリア語」では、初めてイタリア語に接する学生を対象に、発音から始め、基本的な文法を学習しながら、さまざまなシチュエーションに応じたイタリア語表現を身につけ、簡単な会話ができるようになることを目標とする。 言語の学習と並行して、イタリアの文化をより深く理解するとともに、イタリアと日本の文化間の違いや自己表現の違いなども学ぶ。履修者はこの授業を通じ、短期間の現地観光をする際に苦にはならない程度の言語の習得を目標とする。		
		サステナビリティと社会	人類の経済・社会活動に起因する地球環境問題が世界中で顕在化する中、現代の世代が将来の世代の利益や要求を充足する能力を損なわない範囲内で環境を利用、生活していく「持続可能性」が、人類がこの地球環境問題を克服するための一つの指針として重要視されている。 この授業では、各分野における持続可能な社会に向けての取り組みの状況と課題を学習する。 また受講生が大学4年間で獲得を目指す専門との関係も含めて、持続可能な社会のためにどう取り組むかを考える。 最終回の授業では、本人の理解を得たうえで受講生から提出された期末レポートを発表してもらい、その内容についてのディスカッションを行う。		
		現代社会の諸問題	現代社会の諸問題について、倫理、社会、文化、政治、経済など様々な観点からアプローチする。新聞、雑誌、テレビ、インターネットなどのメディアで報道されている現在進行中のトピックスをケース・スタディとして取り上げながら、さまざまな立場・視点から考察を加える。対立構造にある問題については、自らの意見をまとめて表明できるようにするとともに、他者の立場や視点を俯瞰的に理解し、問題の本質をたどる姿勢・態度を身につける。		
		海外ショートプログラム入門	「海外ショートプログラム入門」では、現在のわたしたちを取り巻く世界の諸課題を改めて認識するとともに、短期あるいは長期の旅や留学等を通じた、海外への渡航体験の意義を考察する。履修者は各自の専攻や共通科目でこれから在学中に体験するであろう海外でのフィールドワーク等の調査技術を身につけるとともに、異文化適応のための心理学に触れ、危機管理の方法についても学び、各自のこれからの渡航、滞在と調査のための計画を発表する。		
		世界と食	2050年には世界の人口は100億人に達すると言われ、食の問題は益々注目を浴びていくことになる。しかし、食の問題は、カロリーの問題であるばかりか、共食による社会的紐帯を確かめ合い、加えて、味覚という人間の嗜好や快樂の問題にも結びつく。この講義では、世界の食文化を通じ、我われの食の問題を見直し、将来の食糧問題の解決策を探る。受講者は、自らの食生活を顧み、グローバルな問題として食の問題を考察することが求められる。		
		日本語学概論	この授業では、「日本語学」の基礎知識を学ぶとともに、周囲に溢れるさまざまな「言語現象」、学内にも多く在籍しているさまざまな米国から来ている外国人留学生の存在に目を向けることで、21世紀を生きる上で必要とされる論理的思考力および自らを相対化して客観的に物事を分析する力を養う。授業は主に講義形式でおこない、授業の指定教科書の第1部「社会・文化・地域」、第5部「言語一般」、第6部「日本語の構造」の内容を中心に進める。		
		言語学	この授業では、「ことば」について学ぶ。各回のテーマとしては、すべての言語に共通する特徴や、人間が使うことばに対し、動物はどのようなコミュニケーションをとっているのか、ことばはどのように、なぜ変化してきたのか、などの具体的な問題を取り扱うことを予定している。これら各回のテーマに触れることで、ことばとはそもそも何なのか、どのように働くのか、という根源的な問いについて、受講者自身がその答えを見出すことをめざす。		
		リベラルアーツ科目	自由論	この「自由論」は本学が標榜する「自由自治」ということばを自らのことばとして語れるようになるための入り口としての役割を担う。本講義の主たるテーマは、いわゆる意思としての自由ではない。本講義で論じるのは、誤解されやすい哲学用語でいう必然にたいしての意思の自由ではなく、市民としての自由、社会における自由についてである。逆にいえば、個人にたいして社会が正当に行使できる権力の性質、およびその限界を論じたい。	

<p>シティズンシップとダイバーシティ</p>	<p>「シティズンシップ」とは「市民権」を指すが、「日本では市民社会が不在である」あるいは「未熟である」と、常套句的に言われる。そのとき、「市民社会の不在」ないし「未熟」とは何を指しているのだろうか。そして、それが本当のことだとするならば、私たちは何を知り、考えなければならないだろうか。本講義では、毎回折々の時事ニュースを素材に、日本社会で起こる事件等の背景としての「日本の市民社会の諸問題」に接近する。</p>	
<p>創造的思考法</p>	<p>こんにちの多様化・複雑化が加速する社会では、問題解決や価値創出の手段として、様々な要素を有機的に組み合わせ、全体としての新しい価値を創出して行く創造的な思考が求められる。このような思考をはじめ、アートあるいはデザイン的な視点やアプローチなどを学び、世界を捉えることで、各自の属する専門分野を超えたクリエイティブな発想力と提案力を身につけることを目標とする。授業ではアートシンキングやデザインシンキングなどのさまざまな思考法とそれを活かすような事例などを紹介するとともに、各自の問題意識、専門分野などをもちよることで、視野の拡張と思考の深化、拡大をめざす。</p>	
<p>情報と倫理</p>	<p>今日のインターネットの普及は、電子メール、Webによる情報検索、オンラインショッピングなど、私たちの生活にさまざまな恩恵をもたらしている。しかし、便利になった反面、個人情報の流出、著作権の侵害、ネット上での詐欺など、いろいろな問題が起こっている。さらに、インターネットや携帯電話の利用者が低年齢化するとともに、児童や生徒を巻き込んだトラブルや事件も目立つようになってきた。 本講義では、初めに、インターネットの「光と影」（便利な点と危険な点）について解説する。次に、インターネット社会（情報社会）におけるルールやマナーを考えていく。ネット被害やセキュリティについても学習する。また、個人情報とプライバシー、知的財産全体について概説したい。</p>	
<p>人権と教育</p>	<p>人権とは「人が人として当然に有する権利」である。しかしながら、過去から現在に至るまで、規模の大小や国内外を問わず、日々人権侵害が発生しており、特に、マジョリティ（多数者）中心にシステムが構築されている現代社会においては、マイノリティ（少数者）は絶対的に社会的弱者の立場にあるがゆえに人権侵害を受けやすい傾向にある。そこで、こうした現状を踏まえ、マイノリティを巡る人権侵害事例を中心に扱いつつ、人権とはそもそも何なのか、そして、人権を守る手段には一体どういったものがあるのかについて学ぶことを目的とする。 なお、本講義では従来の一般的な講義形式にとらわれず、ビデオ教材などを使用することによって、より身近な問題として感じられるように配慮をし、また、グループワーク等を通じて、受講生自身が主体的に考え、学べるような授業を行う予定である。</p>	
<p>グローバル化と社会</p>	<p>私たちが住まう日本という国の抱えるさまざまな問いを皮切りに、世界の現状と来歴（どのような経緯で今ようになったのか）、これからどう変動していくのか、私たちはその奔流のなかで人間として尊厳を保ちあえるのか、といったことを考えてみたい。果たして日本は先進国なのか、「日本の常識は世界の非常識」といわれるのはなぜか、平和憲法を持ちながら戦争で利益を得ている矛盾、移民問題など、日本に暮らす中でもさまざまな問題を感じる機会があるだろう。あまり抽象的な次元で議論するのではなく、現代の国際社会が直面する具体的問題を手掛かりに、視野を広げる作業をしていく。</p>	
<p>障害学</p>	<p>現在の社会において、障害者は圧倒的に少数派（マイノリティ）である。少数派であるということは単に「数が少ない」という意味にとどまらず、多数派（マジョリティ）のことしか考えずにつくられた社会の中で、さまざまに抑圧されたり、不利益を受けていることを意味する。障害者の場合、「障害があるから、いろんなことができなくても仕方がない」と考えられてきた歴史が長くあった。さまざまな障害者が何を考え、どんなふうにも暮らしているのか、その「なまの声」を知らない人が圧倒的に多いのではないか。この授業では、さまざまな障害者の姿、経験、意見などを紹介し、その背景を考えることを通じて、私たちをとりまく「社会のあり方」を多角的にみつめていく。「目からうろこ」の経験をしたリ、障害のことを考える・行動するのは「おもしろい、やりがいがある」と思えるためのきっかけを提供できればと思う。</p>	

哲学入門	<p>ポスト・トゥルース（真実の後）の時代、そう現在が呼ばれ始めている。真実や事実というものがないがしろにされ、政治的効果を狙った根拠がない誹謗中傷や噂話、すなわち「デマ」が猛威をふるっており、実際に世界中でその効果は大規模に出現している。だが、たとえば、諸君が愛するもの、愛する人についてデマしか知らなかったとしたらどうであろう。そのような悲しいことが他にあるだろうか。このような衰弱が、許されてしかるべきなのか。わたしたちは、このような趨勢に抵抗するために、芸術的な創造行為は政治的な創造行為と切り離せないことを確認しつつ、「真理の芸術（アート）」としての哲学を考えたい。端的に創造行為に「役に立つ」ように、具体的に芸術家や音楽家などの名前をあげつつ、「哲学的芸術入門」としても受講できるように配慮する</p>
政治学	<p>本講義では、現代政治の構造を、とりわけ「階級」と「ナショナリズム」に着目しながら、考察する。「階級」は、「1%と99%」の標語に象徴されるように、現代世界を引き裂く巨大な力として現れている。他方、「ナショナリズム」は、同胞意識を基礎として、分裂を縫い合わせることを期待されている。しかし当然、現実には、止めどなく分裂が進行し、ナショナリズムは排外主義へと転化しているのが実情である。なぜ、現実がこのような状況になっているのか。本講義では、近代の政治史を振り返りつつ、日々現れる時事的トピックにも言及しながら、現代世界の政治状況を解析する。</p>
法学	<p>この授業では、身近なニュースや問題を題材に、憲法・刑法・民法という代表的な3つの法律を学習する。法律について日常的に身近に感じることはまれかもしれない。日ごろ、無縁に感じる法律について、「難しい」と思っている方も多いだろうが、一方で、我々は知らず知らずのうちに法律のバリアに守られ、法律にしたがいながら生活をしている。刑事裁判とも無縁なつもりでいても裁判員として関わることも起こり得、些細な日常のやりとりにおける損害でも法律が機能する事もある。選挙権は憲法改正への投票権をもつこととなる。普段の何気ない風景や場面に潜む「法」を発見し、「法学」という視点からものごとを考える力を養うことを目標とする。</p>
日本国憲法	<p>「憲法」はテレビや新聞で見聞きするものだけでなく、私たちの「あたりまえ」の生活にも「憲法」が大きく関係している。そうした「憲法」の働きを広く知り、それに基づいて考える能力を身につけることが、この授業の狙いである。現在、「憲法」を改正しようという議論もさかんになっている。そうした議論を少しでも身近なものとして考えられるようになるため、授業では、身近なニュースや問題を題材に、そこに潜む「憲法」を発見し、最終的には「憲法」についての自分の意見を表現できる力を身につけることを目指す。</p>
物語論	<p>「物語」の発生と展開を知り、その特色について、関連する諸事情にも広く目を向けて考えられるようにする。世界各地で生まれた「物語」はどのようにして生みだされたか、生み出された物語が神話、演劇、文学などへと発展し、生成されていったか、各地のさまざまな事例を紹介しながら学ぶ。世界中で生み出された物語について、地域、時代などの背景に触れ、その類型化などの分析を行う。加えて、現代でも生み出されるさまざまな物語についてもこれらの物語と比較することで、「物語」とひとつひとつのかかわりについて考える機会とする。</p>
考古学	<p>考古学とは、その地に生きていた人々が地上や地下に残したさまざまな痕跡（遺跡・遺構・遺物）から歴史を考える学問である。考古学の「遺跡や遺構や遺物のような物質的な資料から歴史を読み取る」という独特な手法は、文献資料から歴史を見る方法とは根本的に異なる方法である。授業では、このような考古学の特質とその方法を具体的に解説したうえで、環境と道具に関連してエジプトを、思想と文化に関連して中国を取り上げた後、日本の古代はどうとらえられるのかを探っていく。</p>
民俗学	<p>「民俗学」というと、古いことや過去について学ぶ学問であると考えられることが多いが、この授業では、現代を生きるわたしたちの問題として「民俗」を考える。そのためにこの講義では、盆や正月の行事など、私たちにとってできる限り身近な民俗的事象を多く取り上げる。それらの行事の検討を通じて、現代の生活と民俗との深い関わりを認識し、自分自身の考え方や行動を、民俗の視点から、今一度見つめなおすことを目的とする。</p>
情報科学概論	<p>この「情報科学概論」では、情報科学技術のさまざまな基礎事項を理解し、コンピュータ・ソフトウェア、知識情報処理、情報理論、数理科学とその応用、ネットワーク、データマイニング、アルゴリズム、モバイルシステムでの情報伝達等の現代社会に広がるさまざまな分野の概要や研究動向を学ぶ。履修者は現在社会において生活の中に溶け込むものの中にある技術的な面を知ることから、これからの時代におけるさまざまな表現活動と技術の関係性を理解し、在学中の表現活動における広がりや可能性を見出すとともに、社会の可能性と問題を認識する事を目的とする。</p>

データサイエンス入門	データサイエンスは、21世紀を切り拓く分野であり、ビッグデータ分析、人工知能などの新技術を包含するだけでなく、社会、ビジネス、自然環境における意思決定、問題解決に不可欠な基盤的な科学となってきた。本講義は、データサイエンスの今日的な意義、歴史・将来展望、基礎的な知識、学習方法を俯瞰的に学習するとともに、実際にデータサイエンスのもたらすビジネス・社会的なインパクト事例や最先端な研究トピックスを紹介する。これらの講義を通じてデータサイエンスの重要性について理解を深める。
統計的思考法	あらゆる学問分野、産業分野で、調査・実験・観測などの様々なデータを数学的に扱うには、確率と統計が必要となり統計によりデータを整理・分析するための手法が提供され、確率はその基礎的数理となる。この「確率統計的思考法」においては、統計データ解析をおこなう際に必要となる確率と統計の基礎を、扱う。入学するまで数学を苦手とする学生においても、コンピュータの基本ソフトを活用しながらその数字の意味や背景を知ること、自然と思考方法を習得できるようになることを本授業の目的とする。
プログラミング 1	こんにちの社会において、ひとびとの誰もが日常的に触れているインターネットだが、このインターネットにおいては、ウェブ上のプログラミングは欠かせない。プログラミング分野において得に身近なものであるこのインターネットについて、この授業ではWeb標準技術であるHTML5、CSS3、JavaScriptの基礎的な要素をまんべんなく修得して、この授業の合間や、修得後も自学・自習をしながらプログラミング開発できることをめざす。
プログラミング 2	今日の社会において日常の中に隠れているプログラミングについて理解するため、「Python」などのプログラミングに慣れていない履修者でも取り組みやすいアプリケーションを用いたデータの加工、分析、可視化技術を身につける。このようなスキルを修得することを通じ、問題解決力や論理的思考力、創造力を養うために、オンラインコンピュータゲーム上で建造物や自動装置、論理回路などの製作をプログラミングで実現する演習を実施する。
プログラミング 3	コンピュータは、極めて高度な情報処理を人手を介さず行っているように見えても、どのような手順で情報を処理・加工するかを指定する命令の列（プログラム）に従ってのみ動作している。プログラミングとは、コンピュータを思い通りに動作させるためにプログラムを作成する行為である。本授業では、演習を通して実際にプログラムを作成することで基本的なプログラミング技術を習得し、コンピュータの基礎知識を習得することを目的とする。なお、本授業では、プログラムを記述する言語（プログラミング言語）として、現在最も勢いのある言語のひとつであるPythonを用いる。
プログラミング 4	今日の社会においてさまざまな場所でデジタル画像は普及している。特に、スマートフォンの爆発的な普及でより身近なものになった。一方で技術的な進歩もめざましく、計算機による画像処理は科学から娯楽まであらゆる分野で積極的に研究されている。この授業では、授業で紹介するいくつかの課題を通して、画像処理とそのプログラミングによる実装を学ぶ。またグループワークによって実際に動作するシステムの構築に挑戦し、理解を深める。
情報テクノロジー 1	スマートフォンなどの情報端末は、情報社会において生活やビジネスに欠かせないツールとなりつつあり、通信の技術革新と生産技術の進化で今や社会基盤として世界的にも広く浸透するに至った。また今後も新しい技術により、情報端末はウェアラブル端末などの新しい形に進化し、益々生活に浸透するものとなると思われる。 本科目では、情報端末の歴史をたどりながら、情報端末の通信方式やサービスの仕組みについて学習する。また、スマートフォンによるアプリやインターネットサービスの活用、画像や動画などのマルチメディアコンテンツの作成方法などを通じてビジネスへの有効活用ができることを目指す。
情報テクノロジー 2	デジタル技術の発展とインターネット利用の拡充は、様々な情報サービスや新しいビジネスモデルを創出しただけでなく、人間社会へ多大な影響をもたらした。本科目では、アナログ情報のデジタル化から圧縮技術の基礎を学び、その上でインターネットの利便性の広がりに伴う様々な技術的取り組みを理解する。さらに、これらの技術革新が産業構造や一般生活にもたらした影響と変化について、事例を以って理解し、様々なサービスモデルの創成と人々のITスキルの向上が今後の社会をどのように変化させていくのか、その考察も試みる。

人類と人工知能	本講義はビッグデータと人工知能についてこれまでの歴史、我々との関わり合いを事例を挙げながら紹介する。人工知能とは人間の思考プロセスをモデル化した処理を含むソフトウェア技術である。ビッグデータに人工知能を適用することにより、これまで知られてない新たな知識の発見、蓄積、統合、配信を実現している。ビッグデータ分析は人工知能が適用されることにより、次世代の新たな人智を築く基礎となりつつある。本講義では、実際のビッグデータに人工知能を適用することによってどのような知識エコシステムを生むのか、事例を紹介しながら、その適用手法について学ぶ。	
教職コンピュータ入門	教職課程履修者を中心に、マルチメディアを扱うためのソフトウェアの使い方を学ぶ。画像処理、3DCG、表計算ソフトを用いた二進数十六進数の計算などを理解することで、コンピュータの使い方だけではなく構造を学習する。以上の講義をふまえて教職課程上必須となる知識を学ぶとともに、教職免許取得後の教育現場において、各々が生徒へコンピュータの操作や仕組みを説明できるだけの技術と知識を修得する事を目的とする。なお、教職課程履修者を主な対象とした科目であるが、今日の社会において必要不可欠なものとなるこれらの技術を修得することは教職課程対象者でなくとも必要な知識では全くない。	
自然科学概論	人類は自然科学と向き合い、その発達とともに今日の社会を築いてきたといえる。この「自然科学概論」では、物理学、科学、生物学、地球科学、天文学など自然科学の各分野それぞれの成り立ちや体系、解明をめざす問題、自然科学全体や社会とのかかわりなどについて学ぶ。自然科学全体を概観し、情報化時代の現代において、「人間とは何か」、「科学的認識とは何か」、科学技術が人間に何をもたらしているのかについて理解を深める。	
科学史	この授業では、古代から現在に至る科学の歴史を概説する。現代の科学や科学技術を考えるうえで、17世紀のヨーロッパにおいて起こった「科学革命」は重要なイベントである。この科学史上の特出すべき事象を焦点としながら、近代科学の方法論と自然観がどのように形成されてきたかを具体的に理解し、その特徴と問題点をさぐる。授業では、各時代に起きた特筆すべきできごとを紹介し、それらのできごとと現代社会との関係性などを紹介し、「歴史」と自身とのつながりについても考える機会とする。	
生物学	現生生物は長い地球の歴史の中で、40億年近い時間をかけて多様に進化をしてきた。その長い時間の中で、生物領域に特有の様々な仕組みや形や働きが選択され分岐してきた。この講義では、生物多様性の重要性や、ひいては「ヒト」という生物の特性を理解していくことを目指す。具体的には、生物現象の一定の領域の諸事例を提示しながら、どのような構造と機能が、それを支え、そこからどういふ生物学的意義が明らかになるのかを考える。	
数学的思考法	現代社会では、種々の社会現象、自然現象の分析に数学的方法や数学的思考がもちられている。数学とその基礎となる数学的思考は、さまざまな学問分野の基盤のひとつといってよいだろう。この講義では、数学と数学的思考の歴史を概観し、数学的思考の基礎となる数学的論理や方法を学び、芸術的文化的学問との関係や異同について、具体的な数学の領域を参照しながら学んでゆく。授業においては履修者自身が実際に数学的な思考につながるワークに取り組むことで、実践的に思考法を身につける時間を設ける。	
行動心理学	心理学の中の特に「行動心理学」は、意識を対象とする「心理学」に対し、「全体的行動の科学」としての心理学を総称するものにあたる。この授業では、その入口として、比較心理学、動物心理学、エソロジー、行動生態学、比較認知科学、人類学、進化生物学などの諸領域で明らかにされた知見を総合して、行動の機能、発達、進化について概説する。進化心理学についても簡単に紹介する。さまざまな領域を知ることにより、発達してきた心理学の体系を理解し、さらに心理学を考える上での入口としたい。	
スポーツ実習 1	特に教職課程における必修科目であるこの授業では、スポーツや身体表現の実践を通して身体運動能力を養うとともに、健康の保持・増進をはかる。動きと表現、動きとリズム、動きと身体構造を学ぶため、卓球、バスケットボール、テニス、バレーボール、バドミントン、フットサルなど一般のスポーツ競技だけでなく、ダンスや身体科学等の要素を取り入れた授業も含めてクラスを構成する。自身が各種種目、競技を体験することで、教員をめざすものにおいては、生徒を指導する際の技術を実践的に学ぶものとする。	

リベラル アーツ 科目	スポーツ実習2	特に教職課程における必修科目であるこの授業では、スポーツ実習1につづき、スポーツや身体表現の実践を通して身体運動能力を養うとともに、健康の保持・増進をはかる。動きと表現、動きとリズム、動きと身体構造を学ぶため、卓球、バスケットボール、テニス、バレーボール、バドミントン、フットサルなど一般のスポーツ競技だけでなく、ダンスや身体科学等の要素を取り入れた授業も含めてクラスを構成する。自身が各種種目、競技を体験することで、教員をめざすものにおいては、生徒を指導する際の技術を実践的に学ぶものとする。	
	大学連携プログラム	この授業は集中授業として開催を予定している。主に夏季休暇期間などを利用し、国内外の大学間で連携した授業を開講する。各大学における共通した専攻分野あるいは異なる分野の学生が一同に会し、共同で1つの目的に沿ったワークショップや演習などを通じ、それぞれの分野における学びを共同体験する中で生まれる新たな知見や技術を修得する。授業はグループワークなども取り入れたものとなるが、各グループは原則として別々の大学、学部のもの同士で構成されるものとし、授業を通じた新たな視野の獲得に重きを置いた形で開催する。	
	インターンシップ1	この科目では、自由で創造的な未来を築くためにはどのような社会へのかかわりが求められていくのか、社会問題解決に向けたイノベーションを実践するNGO・NPOでの活動を通して、「組織人」としてではなく「社会人」「地球人」としての社会の関わり、働き方を考える。日ごろの大学での学びが社会でどのように役立つのか、その社会的な役割や意義を解するとともに、学ぶ楽しさや面白さの気づきを、「幅広い業種での職場体験」を通じて検証する。	
	インターンシップ2	企業や行政機関が独自に募集を行うインターンシップ先や、全国の経営者協会等が斡旋するインターンシップ先の中から、希望するインターンシップ先を探し出し、許可を得てきた学生に対して、その自主的な活動をバックアップすることを目的にして開講されている科目である。自らが受け入れ先を探し、交渉まで取り組むことにより、自らの取り組みたい関心を深め、意欲を高め、より充実した体験を通じた自らの職業観、社会人としての能力向上をめざす。	
	海外ショートプログラム	この授業では本学が用意する世界各地が舞台となる。海外の現場での学修を通じ、学生がグローバルな視野を獲得する契機とする。学修目的を大きく「語学研修型」と「テーマ設定型」の2種類に分け、それぞれのプログラムごとの目標に向けて、1週間から4週間程度、海外の教育機関等の現場で受ける実地研修を通じ、異文化での生活を体験しながら行う学びによって、グローバルな視野を獲得し、より高度な学修への動機づけを行う。この授業は現地でのものを基本とするが、現地に訪れる前には現地の文化や諸制度を理解するための事前学習と、事後の報告会などを予定している。事前の理解と事後の共有を通じ、体験を学修へと結晶化させる。	
	国内ショートプログラム	この授業は本学が用意する日本各地が舞台となる。前期・後期ともに国内のフィールドを選定し、担当教員による事前指導の後、現地での約一週間の引率指導、地域研究を実施する。歴史、文化、自然、環境、生活、社会問題などを切り口にテーマを設定し、現地での見学、交流、体験、実践を通して、各フィールドにおける知識、理解を深め、そこから日本あるいは世界を相対視することを目的とする。この授業は現地でのものを基本とするが、現地に訪れる前には現地の文化や諸制度を理解するための事前学習と、事後の報告会などを予定している。事前の理解と事後の共有を通じ、体験を学修へと結晶化させる。	
	産学公連携PBLプログラム1	チームで活動するとはどういうことかを理解した学生が、10～15名程度のチームを1つのクラスとし、本学が連携先とする企業から提供いただく実課題を解決することを通じて、「社会人基礎力」「自己肯定感」「自在に人と関わる力」を身につける。企業等からの課題は具体的であり、学内だけではなく学外でも積極的に活動することが求められる。授業の最後には企業への報告とプレゼンテーションの機会を設け、授業で得られたさまざまな知見やアイデアを実際に協力企業の方に伝えその評価を得ることで実践的な学びへとつなげる。	
	産学公連携PBLプログラム2	「産学公連携PBLプログラム1」の受講を経て課題解決活動とはいかなるものかを体得した学生が、10～15名程度のチームを1つのクラスとし、企業から提供いただく実課題を解決することを通じて、「社会人基礎力」「自己肯定感」「自在に人と関わる力」をさらに伸ばすための科目である。特に受講生自身が設定した成長目標をどのように達成するかに重点が置かれる。授業の最後には企業への報告とプレゼンテーションの機会を設け、授業で得られたさまざまな知見やアイデアを実際に協力企業の方に伝えその評価を得ることで実践的な学びへとつなげる。	
	社会実践力育成プログラム		

キャリア1	1年次の第1クォーターに置かれる、全学生対象の必修科目である。卒業生の実例をもとに卒業後の多様な進路の可能性を示すことで、入学者が抱える将来に対する不安を和らげ、進路に対する視野を広げ柔軟な考えを持てるよう促す。また、学生一人一人の強みや弱み、傾向を把握したうえで「将来何がしたいか」を考え、そのために「大学生活をどう過ごすか」の各々の目標設定を行い、大学での学びや生活と社会、進路との連続性に対する意識を醸成する。	
キャリア2	インターンシップに関心を持つ学生を対象とし、インターンシップ参加前には学外企業や団体等とやりとりをする上で必要不可欠なメールや電話対応、文書作成等の一定のビジネスマナーを身につける。「インターンシップ1」「インターンシップ2」を受講する学生は本科目を必修とし、インターンシップ参加後はインターンシップで体験、観察、獲得したことについて振り返り、成果を報告書としてまとめ発表を行うことで、インターンシップに関心を持つ他学生への情報共有も行う。	
キャリア3	主な進路として国内外の企業への就職を希望する学生が対象となる。業界や職種の種類や仕事内容、多様な働き方やその仕事に必要な要素に関する理解を深める。そのうえで、社会で自身がどのような役割を果たしたいか、それをどのような仕事を通して実現させたいか、大学時代のこれまでの学びから生かせる自身の強みは何か、その仕事をどう探すか、など、仕事に対する考えや意識を具体的に明確にし、それを他者に言語化して伝えPRにつなげるための実践的な授業を行う。	
職業研究	この授業は、市井の人から仕事の多面性を学び、働くことの本質に迫ることを目的とする。授業では、まず職種研究として、「営業職」「企画・管理職」「事務職」「サービス・販売職」などのいわゆる「職種」について理解することからはじめる。その次に、実際に仕事に従事している人をお招きし、個別具体的に仕事の実例をうかがい、そのゲストのキャリアを通して、仕事人生の生き方や仕事の本質にふれることにより、自己のキャリア構想のヒントを得る。	
ベンチャー・ビジネス論	高度な成熟化社会の到来とグローバルな視点での経営環境の変革期を迎えた中で、日本経済の持続的な成長のためには、イノベーションを成し遂げ新規事業を創造していくことが求められる。そして、その担い手として期待されるのが、企業家精神あふれるアントレプレナーに率いられたベンチャー企業の存在である。本講義では、ベンチャー創造の枠組みについて、先進事例の紹介などもまじえ、イノベーションやアントレプレナーシップ、ベンチャー企業の誕生と成長など、幅広い視点で講義を進め、事業創造の主体としてのベンチャービジネスに求められるマネジメント能力などに関する知識の習得を図る。	
スポーツとビジネス	スポーツ産業における、特にイベントビジネスの位置づけと特性、イベントの構造や優れたイベント運営についての理解を深め、市民レベルのイベントを運営する際に必要な知見を学習する授業である。履修者は、本講義を受講することによって、(1)イベントの運営を評価する力や、(2)イベントの持つ社会的機能について考える力を身につけることができる。さらに、優れたイベントとするための運営ノウハウを習得することができる。	
表現活動と経済	「芸術と経済」は「水と油」のような関係として理解されるかもしれない。しかし、芸術活動も歴とした経済活動である。芸術の創造者は経済学の言葉で表わせば供給者であり、芸術作品を購入したり楽しんだりする鑑賞者は需要者である。このような供給者と需要者が、モノの売買取引する場を「市場」と呼んでいる。そこで、この授業では芸術作品に焦点を当てながら、市場取引の経済学的なメリットとデメリットを理解して欲しい。さらに、芸術を含めた文化財が市場主義に馴染まない側面についても言及していきたい。	
クリエイティブの現場	この授業では、市井の人から仕事の多面性を学び、働くことの本質に迫ることを目的とする。授業では、主に「クリエイティブ」業界と言われる分野の職種について理解する。次に、特に履修者が卒業後の自身をイメージできるような卒業生を中心に、実際に仕事に従事している人から個別具体的に仕事の実例をうかがい、そのゲストのキャリアを通して、仕事人生の生き方や仕事の本質にふれることにより、自己のキャリア構想のヒントを得る。	

キャリア科目	日本の企業文化研究	本学に多数在籍する外国人留学生の中には日本での就職をめざす学生も多い。これから就職活動をはじめめる3年生の留学生には特にその点において苦戦する学生も多いことだろう。この授業では、外国人にはわかりづらい日本企業独特の制度や文化について学び、以後の就職活動における心理的な負担の解消と諸制度理解の不足による事務的な手続き等の失敗の防止を支援する。授業では、進路を決定した4年生の留学生をゲストとして招き、先輩からの助言を直接受ける機会も置くこととする。	
	ポートフォリオ実習1	デザイナーをはじめとするクリエイティブ業界に就職するには「作品ポートフォリオ」が必要である。厳しいクリエイティブ職採用の中、本格的な就職活動が始まってからでは準備不足が原因で本意な結果が予想される。一度制作しても就職活動をしながらい業界・職種別に更にブラッシュアップが必要となってくる。この授業ではポートフォリオ制作初心者が、最低限、今後の就職活動に必要な、採用に関わるポートフォリオの土台作りとして、必要な知識、スキルを身につける。	
	ポートフォリオ実習2	デザイナーをはじめとするクリエイティブ業界に就職するには「作品ポートフォリオ」が必要である。「ポートフォリオ実習1」の履修者を対象とする。したがってこの授業はポートフォリオ制作の経験を有するものを対象とする。デザイナー、プランナーなどのクリエイティブな企業をめざす学生に対して、今後の就職活動で必要となる採用に関わるポートフォリオについて、効果的に伝えるために必要な知識、スキル、テクニックやノウハウを身につける。	
	コミュニケーション実践演習	この授業は、相手の考えや意見をきちんと理解し、自分の気持ちやアイデアをわかりやすく説明できる「コミュニケーション力」をアップさせることを目的とする。コミュニケーションのスキルは、定形を覚えるだけのマナー講座などでは身につかない。即興演劇、インタビュー、グーグルの社内研修で用いられているマインドフルネスなどさまざまな手法を使って、人前で自分をオープンにする姿勢を築き、その場しのぎではない本物の聞く力、話す力を養っていく。	
マイナー科目	美術概論1	「造形芸術」あるいは「造形美術」は様々な素材に働きかけることによって創造される視覚的、空間的な美的表現を目指す芸術である。この授業は、本学で学ぶことのできる分野である洋画、日本画、彫刻、陶芸、染織、版画、写真、映像など美術に関わる分野を通じて、人間がなぜ美術を必要とし発展してきたかといった、美術と社会、美術と生活などとの関わりを知り、芸術としての美術について理解を深めながら、美術に対する基礎知識を身につけることを目的とする。	
	美術史1	この講義では、本学の学ぶことのできる分野である洋画、日本画、彫刻、陶芸、染織、版画、写真、映像など美術に関わる分野の表現の歴史とその作品や成り立ち、表現技法との関わりから現代にいたるまで、各分野における美術表現の変遷についてを学ぶ。また制作表現を行う上で重要な関係にあるこれらについて、理解を深めるとともに各自が自身の表現の立ち位置を確認しながら、美術に対する基礎知識を身につけることを目的とする。	
	美術リテラシー1	「造形芸術」あるいは「造形美術」は様々な素材に働きかけることによって創造される視覚的、空間的な美的表現を目指す芸術である。この授業では、本学で学ぶことのできる洋画、日本画、立体造形、陶芸、テキスタイル、版画、写真、映像表現など、美術に関わる分野それぞれの表現の基礎知識と、その表現方法を実践を通じて学ぶことによって、創造的な表現と作品の鑑賞の能力を身につけることで、芸術としての美術の意義を学ぶことを目的とする。	
	美術リテラシー2	造形芸術あるいは造形美術は様々な素材に働きかけることによって創造される視覚的、空間的な美的表現を目指す芸術である。美術リテラシー2では、美術リテラシー1に続き、洋画、日本画、立体造形、陶芸、テキスタイル、版画、写真、映像表現など、美術に関わる各分野の表現の基礎知識とその表現方法を実践を通じて学ぶことによって、さらなる創造的な表現と鑑賞の能力を身につけ、芸術としての美術の意義を学ぶことを目的とする。	
共通教育科目			

美術特講 1	20世紀半ば以降、文化や芸術に関わる理論的探究は、その裾野を狭義の美学や芸術学を超えた領域（たとえば記号論、精神分析、ジェンダー論、ポスト・コロニアリズム、カルチュラル・スタディーズ、メディア論、など）にまで押し広げた。こうした経緯を念頭に、まず「表現」と「表象」の違いについて理解した上で、美術にとどまらず映画、音楽、演劇、文学などの幅広い領域から作品、作家、運動を紹介しながら、自らの「表現」の素材や契機として時代と社会から何かを掘み取るための思考を促す。	
美術特講 2	「現代アート」は、従来の枠組みを破壊し、新たな表現を求めることで発展してきた。それは、わたしたちの感性に訴え、理性的に問題を提起するとともに、一方で私たちの欲望を掻き立てている。こんにち、私たちの社会においてそうしたアートや芸術はどのような意味をもつのだろうか。あるいは、それをどのように経験することができるのか。この授業では、主に20世紀後半から現在までのアート作品を通じたこれらの問いへの答えを考察する。	
デザイン概論 1	デザイン学部にある、ビジュアルデザイン、プロダクトデザイン、建築、イラストをはじめ、ゲーム・アプリ・Webなどのインタラクティブデザイン、動きをデザインするモーションデザイン、地域や社会をデザインするソーシャルデザイン、インフォメーションデザイン、UIやUXなどの行動デザイン、人と人をつなぐコミュニケーションデザイン、デザインシンキングなど、世の中には様々なデザインと名前のつく物事がある。それら様々なデザインの事例と内容を紹介し、デザインの領域やデザインの役割など、デザインについての理解を深めデザインについての基礎知識を身につける。	
デザイン史 1	本講義では、産業革命以降のプロダクト、建築、インテリア、ファッションなどの近代デザインの歴史をたどっていく。住宅、車、テレビ、スーツ、椅子、スプーンなどのデザインされたものの生産史だけではなく、そのものがどのように流通し、私たちの生活空間のなかに受け入れられてきたのかを学んでいく。さらに、展覧会などを通して実例を紹介することで、それらの素材の特性や技術の仕組みを理解する。このような講義を通じて、作り手の立場から、いかにして近代デザインの歴史から今日のデザインを読み解くことができるのかを探っていききたい。	
デザインリテラシー 1	デザインという行為には目的とプロセスがある。デザインの目的は様々な課題を解決するためにある。そして、デザインを行うには考え方や進め方にプロセスがある。課題を見つけ出し、理解を深め、リサーチを行い、アイデアを導き出し、プロトタイプを制作して、テスト運用を行う。デザインの目的とプロセスを理解することで、デザインと人との関係、デザインと社会との関係、デザインとビジネスとの関係など、デザインの意義を学ぶ授業。	
デザインリテラシー 2	デザインは社会とつながっており、社会とつなげるために必要な基礎的な概念の1つがマーケティングである。マーケティングとは、個人・企業あるいはその他の組織が消費者のニーズを具体化し（製品、サービス、そしてアイデアという形をとる）、その具体化したものを消費者に伝達する一連のプロセスである。そして、それは消費者と企業組織間の情報と製品の流れを考察し、両者にとって効果的かつ効率的に行うにはどうしたらよいか、という目的意識を強く持つ。本講義は、主にマーケティングの基本概念的ななかから、発想法とフレームワーク、その原理を学ぶとともに、自分自身や自身の作品などを価値のある魅力的な商品にする方法をグループワークを通じて構想する。	
デザイン特講 1	デザインという行為を届けるためのしくみがメディアである。メディア (media) という単語の単数形、メディウム (medium) には、死者の言葉を現世に伝える「霊媒」という意味もあるように、それは発信者と受信者の「間」にあって、何らかのメッセージを運ぶ乗り物のような存在である。普段の生活ではあまり意識はされていないが、私たちはメディアを通じて、世界を理解し、世界にメッセージを送っている。本講義では、視覚文化研究 (ヴィジュアル・カルチャー・スタディーズ) の視点から、視覚的イメージと人間の関係、社会のなかでのはたらきを考えることを目指したい。	
デザイン特講 2	考古学や人類学などの領域において、物質文化 (マテリアル・カルチャー) 論は、以前より重要な方法論として存在してきた。文献を資料とする歴史学とは違って、それらの分野は、過去の遺品や、異文化において使われた物品など——すなわち「モノ」——を第一次資料として、研究の対象としてきた。たとえば現代人が使っているさまざまなモノも、また物質文化として研究対象となりうるのである。本講義では、物質文化論の視点から、デザイン、建築、都市と人間との関係を再考することを目指す。	

マンガ概論 1	マンガをマンガたらしめるものは何だろうか。現代において、マンガは絵画・文学・映画など様々な表現領域から影響を受けながら今日の隆盛を迎えるに至った。この授業では、それらのジャンルとマンガの共通点と相違点を踏まえ、マンガとはどのような表現領域なのかを考察する。またマンガと他の領域とのインタラクティブな関係に目を向け、こんにちの社会や文化の中でマンガが果たしている役割とこれからの可能性について多面的に考察する。
マンガ史 1	マンガについて理論的に学び批評・制作を行なっていく上で、基礎知識となるマンガの作品・作家、出来事や研究状況について歴史的に考察する。ただし「歴史的に考察する」とは言っても、単に関連情報を年代順に羅列して覚えていくわけではない。視覚表現・メディアとしてのマンガを構成する諸要素やその時代的变化に注目しつつ、「マンガを読む」という行為が日常生活に定着するまでの歴史について、多角的に考察していくことを目標とする。
マンガリテラシー 1	マンガは線、コマ、フキダシ、擬音など様々な要素から構成されている。マンガに日ごろ触れることのない人がはじめて目にした際、「読めない」と聞く。この授業では、マンガが発展の中で生み出されてきたそれらの諸要素や効果をどのように活用し、意味やメッセージを伝えているのかを分析する。またその諸要素からどのようにしてキャラクターや世界観が生み出されているのかについても考察し、マンガを描くこととマンガを読むことがどのような営為であるのかを根本から考えることを目的とする。
マンガリテラシー 2	アニメーションとマンガは似ているようで異なる表現手段である。日本においてはマンガを原作とするアニメーション、あるいはアニメーションのコミカライズなどが多数生み出されてきた。本講義では日本のコンテンツにおいてマンガとともに発展してきたアニメーションに焦点をあて、その表現がどのようにして成立したかを歴史的に考察し、また技術的側面からもアニメーションという表現の特異性を探る。連続した絵や立体から動きを生み出すアニメーションという表現領域の持つ魅力を深く知ることを目的とする。
マンガ特講 1	マンガはその時代の社会が持つ様々な問題を内包し、それらと関わりながら発展してきた。本授業ではマンガと社会の関わりを様々な角度から考察し、マンガが社会の中でどのような役割を果たしてきたか、そして今後どのような役割を果たしうるのかを実践的に考える。その中で特に今日の社会において課題となるジェンダーや人権について改めて学ぶことで、その時代その時代における価値観の中で生み出されてきたマンガを批判的に読み、制作する態度を身につけることを目的とする。
マンガ特講 2	日本は世界有数のマンガ大国であり、質・量ともに高いレベルのマンガを生み出し、読者はそれを享受してきた。しかし世界各地に目を向けると、それぞれの地域にはそれぞれのマンガ文化が存在し、それもスマートフォンなどのさまざまな技術の進化や各地の事情により変化してきた。それらはその地域の伝統も踏まえ、日本マンガにはない様々な魅力を有している。本講義ではそれら世界のマンガについて学び、マンガの持つ可能性を改めて認識し、また翻って日本のマンガの特異性を考えることを目的とする。
メディア表現概論 1	この授業では、「メディア」とはどのようなものであるかについて概説する。具体的には、メディアと情報に関する環境と歴史を概観したうえで、メディアをどのように活用し、「コンテンツ」を作成していくかの表現技能について触れる。この授業を入口とし、専門的な学びに触れていく中で、最終的には、新しい価値を創造するための知識・思考力・表現技能を身に付けることで、他者理解や社会の課題解決に寄与する人材の育成を目指す。
メディア表現史 1	この授業では、「メディア」を成り立たせている技術と表現の歴史的な相互作用について、人類史の観点から概観する。印刷技術や写真、録音等、情報の記録や複製を可能にするメディア技術は、社会の仕組みを再構成し、現在に至るまで生活の中に深く組み込まれている。そうしたメディアの歴史的背景や、メディアの普及とともに生まれた表現を理解することで、現在のメディア環境がもつ可能性についても洞察を深められるようになることを目指す。

メディア表現リテラシー1	大学におけるさまざまな授業では多様な機材を使用する。日常的に使用する機器の多くは、取扱説明書を読まなくとも使用できるものも多い。また、ユーザーは使用するうえで支障がなければ、機器の仕様などについても把握せずに使用しているものもいだろう。しかし、授業で使用する専門的な機材においては、そのスペックを把握し、使用方法を熟知しておくことで格段に完成度の変わるものもある。本授業では、実際に使用する各種機器を使いながらその取扱説明書の読み方、スペックの把握を通じ、それらの機材の性能を100パーセント引き出すための術を身につけることを目的とする。	
メディア表現リテラシー2	この授業では、授業で使用する機材に関する取扱説明書を作成することに取り組む。取扱説明書はその機材に関する性能や、期待される効果について熟知し、そのうえで、他者にわかりやすく伝えるための資料である。取扱説明書の作成を通じ、使用する機材について「完全に」その性能を理解するとともに、使用中に起こりうるさまざまなトラブルなどを検証する。この授業を通じ、学生は自ら、情報を獲得する術と、使用者の理解、他者へ伝える力を身につけることを目的とする。	
メディア表現特講1	この授業では、「メディア表現」をめぐる今日的话题を取り上げ、さまざまな事例をもとに、多面的かつ徹底的に論じる。特に、音楽や映像、ゲーム、インタラクティブアートといった領域における先進的な表現に焦点を当て、メディアデザインを駆使したクリエイティビティについて考察する。授業でとりあげるトピックによっては、当事者であるデザイナーやアーティスト自身を授業内でゲストに招き、講演やワークショップ形式による授業を実施する。	
メディア表現特講2	この授業では、「メディア表現」をめぐる今日的话题を取り上げ、多面的かつ徹底的に論じる。特に、メディアを活用したビジネスやサービス、社会活動といったさまざまな領域における先進的な実践事例に焦点を当て、メディアデザインを通じた社会との関わりについて考察する。授業でとりあげるトピックによっては、実際に事業に取り組む企業などの当事者をゲストにお招きし、講演やグループワーク、ワークショップ形式による授業を実施する。	
和の伝統文化論	この授業は、日本の伝統的な文化や芸術の特質と意義を深く考察することで、今ある私たちの文化のあり方を見つめ直すことを目的とする。現代に脈々と受け継がれてきた能楽、歌舞伎、茶の湯、生け花など、幅広いジャンルの伝統文化について学習する。さまざまな伝統文化は、時代をさかのぼることで、その根底においてつながっていること、現代社会においてどう活かされているのかについて学ぶことで、現代に生きる我々の文化とのつながりを理解することをめざす。	
京都のまちづくり	この授業では、日本における京都の「都」としての位置づけとその後の展開過程について、各時代の変遷をたどりながら、地形、景観、建築、産業構造などさまざまな視点を軸とし、まちづくりの進められ方を考察する。また伝統文化や建造物が多く存在する「まち」として、その都市計画や景観づくり、産業、交通等が各時代においてどのように検討されてきたかを歴史的にたどり、現代の都市としての京都が形成される経過を学び、日本において特異な変化を重ねた京都と、他の都市との共通点、差異などを知る端緒とする。	
京都の伝統工芸講座1	この授業では、担当する教員のもと、京都の伝統産業・美術・工芸の現場から、伝統工芸士、作家、技術者、研究者を毎回講師として招き、各講師の専門分野での実経験に基づいて「伝統とは何か、伝統を受け継ぐとはどういうことか」を中心に講義が行われる。長年培われてきた京都の伝統産業・美術・工芸の歴史と現状を理解することで、私たちの生活の中で、伝統産業・美術・工芸がどのような意味を持ち、また持つべきなのかを考察する。	
京都の伝統工芸講座2	この授業では、「京都の伝統工芸講座1」につづき、担当する教員のもと、京都の伝統産業・美術・工芸の現場から、伝統工芸士、作家、技術者、研究者を毎回講師として招き、各講師の専門分野での実経験に基づいて「伝統とは何か、伝統を受け継ぐとはどういうことか」を中心に講義が行われる。長年培われてきた京都の伝統産業・美術・工芸の歴史と現状を理解することで、私たちの生活の中で、伝統産業・美術・工芸がどのような意味を持ち、また持つべきなのかを考察する。	

京都の習俗	京都には、人々の暮らしの中で、食、住まい、ならわし、季節の行事、祭りといった様々な伝統文化が今なお息づいている。この授業では、それぞれの習俗がどのような歴史的な背景を持ち、現代まで継承されているのか、また途絶えようとしているのか、その意義と変遷について文献や聞き取り調査の資料を基に検証しながら解説する。変化する社会の中で変わり続ける価値観などを知り、現在に生きる我々にとっての習俗の意味について考察する。	
京都の伝統産業実習	この授業は、1200年以上の歴史を持つ京都の伝統工芸、伝統産業の現場で実習をするインターンシップを軸とする授業である。事前指導を受けた後に、受講生は本学が指定するさまざまな伝統工芸、伝統産業の現場で直接指導を受ける。「手技を学ぶ」、「歴史・文化的背景を学ぶ」、「環境を学ぶ」など、日ごろ、制作活動を学びの中心とする学生から、日ごろはことばを軸とした学びに取り組む理論系の学生まで、様々な学部、専攻の学生が実習できるプログラムとする。	
ファイナンス論	現在の日本では、証券市場やそれに関連する事柄が大きな注目を集めており、企業活動においても、また個人の生活においても浸透している。この講義の内容は、それを理解するために必要であるとともに、ファイナンス分野を理解するための基礎となるものである。授業では、(1)証券に関する基本的知識をつける、(2)債券と金利の基本概念を理解する、(3)企業財務の基本的知識をつける、という3つの大きなテーマについて学ぶ。	
マーケティング論	マーケティングとは、個人・企業あるいはその他の組織が消費者のニーズを具体化し(製品、サービス、そしてアイデアという形をとる)、その具体化したものを消費者に伝達する一連のプロセスである。そして、それは消費者と企業組織間の情報と製品の流れを考察し、両者にとって効果的かつ効率的に行うにはどうしたらよいか、という目的意識を強く持つ。本講義は、マーケティングの基本概念のなかから、発想法とフレームワーク、その原理を学ぶとともに、自分自身の作品を商品にする方法をグループワークを通じて構想する。	
ビジネスモデル論	ビジネスモデルは、企業が収益を上げるためだけでなく、競争優位の確立・維持においても大変重要な概念である。特に近年、消費者と企業間の連絡手段として、インターネットなどの新たな情報技術を活用し、一連の商行為を整理、システム化し、収益性を高めた新規性のある事業形態が登場したことで、注目されるようになった。この授業ではビジネスモデルとは何かを理解し、それを踏まえて、各人が特定のビジネスモデルを想定し、現実的に創業できるレベルのプランを作成する。	
イノベーション論	国内外における企業のイノベーションの事例、国内地域の行政やNPO法人におけるソーシャル・イノベーションの実例を学び、イノベーションが何故生じたか、それらが如何なる工夫の中で完遂され、新たな価値創出が成されたかについて学ぶ中から、イノベーションの本質を自らのものとしていく。また事業化するための考え方・方法論を具体的なケースを通して知ることにより、現在学んでいる自分の専門について、将来の可能性を模索する。	
ソーシャルビジネス演習1	近年、ソーシャル・ビジネスの台頭、営利企業のCSR/CSV戦略化、非営利組織の事業化、というように、異なる基盤を持つ多くの組織が「事業性」と「社会性」の両ミッション(デュアル・ミッション)追求という共通の方向性を見出すようになってきている。 この授業ではソーシャル・ビジネスを、これらを含んだ大きなムーブメントの中でとらえ、その関連する諸概念、発展過程、経営の実際、課題を多面的に事例を紹介しながら検討する。	
ソーシャルビジネス演習2	環境問題や少子化、高齢化、貧困、地域再生など、複雑化し成熟化した社会において浮上している昨今のさまざまな社会的課題は、これまでのように国や自治体が担う公共サービスや営利企業が市場の中で提供する商品やサービスだけで解決することは難しくなりつつある。すなわち、これまでの枠組みや仕組みに基づいてより良い社会を構想し、形作っていくことはもはや困難であり、従来とは異なる対処方法が求められている。こうした状況の中、近年、NPOや社会的企業、企業の社会貢献活動、各セクターの協働等、社会をより良くしていくことを目指したさまざまな取り組みが広がってきている。このような社会をより良く変えていくこうとするさまざまな営みのひとつにソーシャルビジネスがある。 本授業では、各種事例や諸研究からソーシャルビジネスを概観し、特にその主たる担い手であるNPOに着目し、組織の特徴、意義、歴史、諸制度等の基本事項を学習し、そのマネジメントについて考える。マネジメントを考えるにあたっては、行政や企業など外部との関係に着目するとともに、一般論を踏まえ、できる限り具体的な事例に基づき考究する。	

<p>アフリカ・アジア概論</p>	<p>2000年代以降の世界の政治経済、そして文化の台風の目となったアフリカ・アジア地域。これらの地域の「発展」の過程は、欧米のそれと同じものではない。テクノロジー、経済、政治、そのすべてが、20世紀までの大国の影響を受けつつ、これらの地域独自の路線を歩んできた。この講義では、これからこの地域について、あるいはこの地域で学ぶ学生の前提となる知識、すなわちアフリカ・アジアの歴史、地理、政治経済、そして人びとの生活に関する知識を学び、これらの地域に関して包括的に理解することを目指していく。</p>	
<p>アフリカ・アジア史</p>	<p>かつて開発途上国と呼ばれたアジア諸国、最貧国と呼ばれたアフリカ諸国は、過去には想像もつかないほどの「発展」を遂げつつあり、もはや「貧困」という枠組みだけからは、これらの地域を語ることは正しくない。そこで、本講義は、アフリカ・アジア諸地域の現在の概略を紹介し、現代のアフリカ・アジアの躍動の原動力を明らかにし、これからアフリカ・アジアを舞台に活躍する受講者が、どのようにアフリカ・アジアを理解すべきかを考察する足掛かりをつかむことを狙いとする。</p>	
<p>アフリカ・アジアリテラシー1</p>	<p>文化が「知識、信条、芸術、法、道徳、慣習などすべてを含みこむ複雑な総体」(タイラー)であるとすると、その多くは宗教によって下支えされてきた。私たちが学ぶアフリカ・アジア地域は、三大宗教が生まれ、そして現在までその形を様々に変えて宗教が人びとの生活に根付いている。そこで、この講義では、アフリカ・アジアにおける宗教動態に着目し、宗教と文化の関係を人びとの生活レベルからせり上げて理解することを目的とする。講義は、文化人類学や宗教社会学、そして宗教学の文献を読み込むことによるが、講師の生の体験は、履修者のアフリカ・アジアで受けるカルチャーショックを和らげることも目的とする。</p>	
<p>アフリカ・アジアリテラシー2</p>	<p>21世紀に入り、中国の経済的台頭に伴い、世界の政治経済のパワーバランスは大きく変革した。今後、インド、アフリカの経済力上昇に伴い、さらにこのバランスは大きく変わっていくことが予測され、私たちの生活は、アフリカ、アジア抜きには語れなくなってくるだろう。この講義では、中国をはじめとするアジア諸国を中心とした現在の世界の政治経済の状況を踏まえつつ、インド、アフリカの将来展望を学び、未来志向型の政治経済のあり方を模索していく。</p>	
<p>アフリカ・アジア特講1</p>	<p>アフリカ・アジアの多くの地域が温帯から熱帯気候の温暖な気候帯に位置している。人びとは豊かな自然から農林水産資源を享受し、巨大な人口を維持してきた。しかし、例えば、砂漠化や洪水、さらに土壌海洋汚染など、この地域の環境問題は近年益々深刻な問題となり、それは人びとの生活を脅かそうとしている。この講義では、現在アフリカ・アジアで起こる環境問題を概観し、現在の環境問題への取り組みを解説する。そして、現状を理解した上で、持続可能な社会を作るためにはどのようにすればよいかを考察していく。</p>	
<p>アフリカ・アジア特講2</p>	<p>その国、その地域の歴史を知ることは、その文化や人を知る第一歩となる。しかし、本学科で着目するアフリカやアジアの歴史を、これまでどれほど学んできたか？受講者の多くが、これから活躍するアフリカやアジアがどのような過去をたどり、現在、どのような方向に進もうとしているのか。巨大な地域と人口を抱える、この地続きの大地には多様な歴史が埋もれているが、西欧との関係で考えたとき、共通項は思いのほか多いはずである。そこで、本講義では、近代以降のアフリカ・アジアの歴史の大きな流れをつかみ、講師が専門とする地域のいくつかの事例を学ぶことで、アフリカ・アジア地域の理解の端緒を開くことを目的とする。</p>	
<p>日本事情理解</p>	<p>現在、日本を取り巻く環境は刻々と変化している。特に近年は外国人技能実習制度や日本に住む外国人の子どもなどの日本語教育の問題等、これからの日本のあり方を考えていく上で無視できない喫緊の課題が山積みとなっている。このような状況を踏まえ、本講義では、国際社会と日本の実情とを比較しつつ、これからの日本における「多文化共生」のあり方について様々な視点から深く考え、それらと日本語教育の実践とを関連づける能力を養う。</p>	
<p>言語と心理</p>	<p>本講義では、日本語教育において重要である日本語学習者の言語理解を実現する情報処理のプロセス、推測能力、記憶のメカニズムをはじめ、言語教育に必要な言語習得の理論、認知過程に関する心理学、認知言語学等の基礎的知識について学ぶ。また日本語学習者が異文化との接触によって表面化する「心と文化」の問題について、特に発達心理学や異文化間教育の観点から深く考察し、言語教育における(心理的)学習のメカニズムについて学ぶ。</p>	

共通教育科目	マイナー科目	言語と社会	本講義では、広く国際社会の動向から見た国や地域間の関係性を踏まえ、現代社会においてはあたりまえに発生する「異文化接触」に伴って起こる「言語現象」や各国の「言語政策」、「言語変種」、「言語運用のルール」、「言語・非言語行動」、「社会文化能力」等を学ぶ。履修者は、さまざまな社会文化的背景を視野に入れ、個々人の言語使用を具体的な社会文化的状況の中で捉える力を養うことで、日本語教育において必要な基礎的な知識を獲得する。	
		日本語学	本講義では、日本語教育において必要とされる現代日本語の音声・音韻、語彙、文法、意味、運用等に関する基礎的な知識を学ぶことを第一の目的とする。これに加えて、一般言語学、対照言語学等の知見を活かして、日本語と他の言語とを比較する能力、さらには「言語現象」を客観的に分析する能力を養う。講義全体を通して、日本語学習者の誤用の原因を探り、履修者が日本語教育を担う際に、適切な指導を行うための基礎力を養成する。	
		日本語教育演習 1	この演習では、比較的少人数の授業で、日本語教員をめざす履修者に対し、日本語教員として必要とされる資質・能力をはじめ、コースデザインや各種シラバス、教授法、評価等についての基礎的な知識を学ぶ。また教案作成や模擬授業等の実践活動を通じて具体的な日本語の教え方を学ぶとともに、学習者にとってどのような活動が教育的効果が高いかを考える。以上の学びを通じて、変化の激しい現代の日本語教員として必要とされる総合的な教育能力を養う。	
		日本語教育演習 2	この演習では、「日本語教育演習 1」につづき、日本語教員をめざす履修者を対象に、日本語学習者の具体的な学習活動や教授法・評価の問題、学習者の誤用に関する問題、教材に関する問題等、日本語教育における様々な課題について、これまで蓄積されてきた研究論文等を精読し、それらの問題を解決するための具体的な方策について受講生全員で議論を行う。そこから得られる学びを通して多様化する日本語教育のいかなる現場でも柔軟に対応できる人材の育成を目指す。	
専門演習科目	基礎演習科目	グローバルゼミ	1年次第1クォーターに置かれ、学部の初年次教育の中心となる演習形式の必修科目である。教員1名あたり約20名の学生による少人数クラスを編成し、情報検索、現地調査、意見交換などの基礎的な研究方法を学ぶことにより、大学生活へのスムーズな導入を図る。グローバルスタディーズ学科を構成する「アフリカ・アジアの文化」「グローバル関係」「グローバル共生社会」3専攻のうち、1つの専攻の学びの内容を紹介し、これに即して上記の基礎的な研究方法を習得するとともに、グローバルスタディーズ学科の学びの一端を理解する。	
		海外短期フィールドワーク	本科目では、海外フィールドワークの入門として、教員の引率にて近隣国に2週間渡航し、協定締結大学・機関と連携して企画されるグループワークを基本とした共同プログラムに参加する。渡航前には、オリエンテーションに参加し、フィールドワークの目的を理解し、個々での安全管理に備える。また、グループごとに渡航先の国の文化や社会、グループワークに必要な情報を収集するとともに、個々で目標を設定する。帰国後には、フィールドワークの経験や得た知見を報告会で発表するとともに、個々で設定した目標の達成度を確認し、3年次の海外長期フィールドワークに向け習得すべき事項を確認する。	
		基礎演習 1	1年次第3クォーターに置かれ、学部の初年次教育の中心となる演習形式の必修科目である。教員1名あたり約20名の学生による少人数クラスを編成し、情報検索、現地調査、意見交換などの基礎的な研究方法を学ぶことにより、大学生活へのスムーズな導入を図る。グローバルスタディーズ学科を構成する「アフリカ・アジア文化」「グローバル関係」「グローバル共生社会」3専攻のうち、1つの専攻の学びの内容を紹介し、これに即して上記の基礎的な研究方法を習得するとともに、グローバルスタディーズ学科の学びの一端を理解する。	
		基礎演習 2	1年次第4クォーターに置かれ、学部の初年次教育の中心となる演習形式の必修科目である。教員1名あたり約20名の学生による少人数クラスを編成し、情報検索、現地調査、意見交換などの基礎的な研究方法を学ぶことにより、大学生活へのスムーズな導入を図る。グローバルスタディーズ学科を構成する「アフリカ・アジア文化」「グローバル関係」「グローバル共生社会」3専攻のうち、1つの専攻の学びの内容を紹介し、これに即して上記の基礎的な研究方法を習得するとともに、グローバルスタディーズ学科の学びの一端を理解する。	

基礎演習科目	基礎演習 3	2年次第1クォーターに置かれ、アフリカ・アジア文化専攻、グローバル共生社会専攻、グローバル関係専攻それぞれを構成するゼミの学びにとって基本となる文献・資料を講読することによって、各ゼミの学びの基礎を理解するための演習形式の必修科目である。履修生は自身が所属する専攻の中で2年次第3クォーター以降に所属するゼミを決定するとともに、専門性のいっそう高まった内容を学ぶことによって、自身の所属する専攻への帰属意識を養う。		
	基礎演習 4	2年次第2クォーターに置かれ、アフリカ・アジア文化専攻、グローバル関係専攻、グローバル共生社会専攻それぞれを構成するゼミの学びにとって基本となる文献・資料を講読することによって、各ゼミの学びの基礎を理解するための演習形式の必修科目である。基礎演習3と同様に、履修生は自身が所属する専攻のなかで、異なるゼミ担当者が開講するクラスに2つ参加した上で、2年次第3クォーター以降に所属するゼミを決定するとともに、専門性のいっそう高まった内容を学ぶことによって、自身の所属する専攻への帰属意識を養う。		
専門演習科目	応用演習科目	応用演習 1	2年次第3クォーターに置かれ、自身が所属するゼミでの卒業論文の作成を念頭に、専門的な学びを深めていくための演習形式の必修科目である。とくに「応用演習1」は、これ以降、ゼミ内で取り組む卒業論文の作成にとっての第一歩であり、その意味では自らが定めたテーマを専門に研究するための導入科目となるため、所属するゼミの専門的な学びにとって基本となる文献の講読や現地調査、作品研究などに取り組むことによって、自身の卒業論文の作成にとって必須の専門知識や方法論を習得する。	
		応用演習 2	2年次第4クォーターに置かれ、「応用演習1」に引き続いて自身が所属するゼミでの卒業論文の作成を念頭に、専門的な学びを深めていくための演習形式の必修科目である。とくに「応用演習2」では、3年次第1および/あるいは第2クォーターで履修する「海外長期フィールドワーク」での学びを、所属ゼミの学びに引きつけながら計画する。また、所属専攻内であれば、他のゼミの同科目も並行して履修できるため、多角的な視点から自らの専門的な学びを発展させることができる。	
		応用演習 3	3年次第1クォーターに置かれ、「応用演習2」に引き続いて自身が所属するゼミでの卒業論文の作成を念頭に、専門的な学びを深めていくための演習形式の必修科目である。とくに「応用演習3」では、自身が履修している「海外長期フィールドプログラム」での学びの進捗状況についてゼミ担当教員に定期的に報告し、それに対する教員からの指導のもとで調査・研究を並行して行なうことによって、「海外長期フィールドプログラム」の履修を所属ゼミの学びへと接続し、自らの専門的な学びに重層的な厚みを加える。	
	応用演習科目	応用演習 4	3年次第2クォーターに置かれ、「応用演習3」に引き続いて自身が所属するゼミでの卒業論文の作成を念頭に、専門的な学びを深めていくための演習形式の必修科目である。とくに「応用演習4」では、自身が履修している「海外長期フィールドワーク」での学びの進捗状況についてゼミ担当教員に定期的に報告し、それに対する教員からの指導のもとで調査・研究を並行して行なうことによって、「海外長期フィールドワーク」の履修を所属ゼミの学びへと接続し、自らの専門的な学びに重層的な厚みを加える。	
		応用演習 5	3年次第3クォーターに置かれ、「応用演習4」に引き続いて自身が所属するゼミでの卒業論文の作成を念頭に、専門的な学びを深めていくための演習形式の必修科目である。特に「応用演習5」では、各ゼミ内での専門的な学術書の講読と並行して、「卒業研究演習3」での上級生の卒業論文の口頭試問を聴講し、それについてのゼミ内でのディスカッションを行なうことによって、自身の卒業論文のイメージを確定させるとともに、これを完成させるために4年次の「卒業研究演習1」ならびに「卒業研究演習2」において習得すべき技能や知識や、実行すべき作業を自覚する。	
		応用演習 6	3年次第4クォーターに置かれ、「応用演習5」に引き続いて自身が所属するゼミでの卒業論文の作成を念頭に、専門的な学びを深めていくための演習形式の必修科目である。特に「応用演習6」では、3年次第1から第2クォーターの間に履修した「海外長期フィールドワーク」での学びと、これと並行して「応用演習3」で取り組んだ調査・研究とに関する報告書を作成する。また、その内容を他者を意識しながら視覚的にも理解しやすい展示形式へと落とし込むことを演習形式で体験することによって、自らの学びの成果を他者へ伝達するための技能を習得する。	

専門演習科目	卒業研究演習科目	卒業研究演習 1	4年次第1クォーターに置かれ、「応用演習6」に引き続いて卒業論文の執筆に必要な学術的スキルを演習形式で習得するための必修科目である。各履修者の卒業論文とテーマ・方法論を共有する先行研究論文の講読を通じて、当該領域に固有の学術論文の形式を熟知するとともに、自身の卒業論文の構想の発表、それに続くゼミ内でのディスカッションを通じて、他のゼミ生の卒業論文の内容や進捗状況との比較を行ない、各自の卒業論文に欠如している部分を自覚しながら学術論文の作成を進めていく。	
		卒業研究演習 2	4年次第2クォーターに置かれ、「卒業研究演習1」に引き続いて卒業論文の執筆に必要な学術的スキルを演習形式で習得するための必修科目である。各履修者の卒業論文とテーマ・方法論を共有する先行研究論文の講読を通じて、当該領域に固有の学術論文の形式を熟知するとともに、自身の卒業論文作成の途中経過の発表、それに続くゼミ内でのディスカッションを通じて、他のゼミ生の卒業論文の内容や進捗状況との比較を行ない、各自の卒業論文に欠如している部分を自覚しながら学術論文の完成、さらに提出までを行なう。	
		卒業研究演習 3	4年次第3クォーターに置かれ、「卒業研究演習2」の終わりに提出した卒業論文について、自身の所属する専攻のすべてのゼミからなる合同クラスのなかで、この専攻に所属する教員全員による口頭試問を受けるための必修科目である。所属するゼミ内での口頭試問の準備を通じて自身の卒業論文の優れた点と不十分な点を把握するとともに、他の学生の口頭試問を聴講することによって、自らの所属ゼミでの学びをいっそう広い専攻の学びの中に位置付け、学術的な視野を広げる。	
		卒業論文	4年次第3クォーターに置かれ、グローバルスタディーズ学科における4年間を通じた学修・研究・調査の成果をまとめ、学術論文として提出する。学生個人でテーマや課題を設定し、それに応じた研究・調査・論文作成計画を立て、一定の書式を整えた学術論文の作成に必要な知識や技能、研究・調査方法を身につけた上で、ゼミ担当教員の指導のもとで、24,000字から48,000字程度の分量で卒業論文を書き上げる。自らの4年間の学びについて、その内容を専門的知識や技能に依拠しながらわかりやすく説明するスキルを獲得する。	
		卒業発表	4年次第4クォーターに置かれ、自らが作成した「卒業論文」の内容をわかりやすく、かつ印象的に他者に伝えるための方法を演習形式で実践的に学ぶための必修科目である。自身の「卒業論文」の主張ないし仮説、そしてそれを論証するための論理展開と説明とを、限られた情報量のなかで要約することに加え、これを視覚的にも理解しやすい発表形式へと落とし込むことを演習形式で体験し、他者の視線を意識しながら自らの学びの成果を客観的に伝達するためのスキルを習得する。	
専門講義・演習科目	国際文化基礎科目	国際文化概論 1	グローバル化の時代と呼ばれるようになり久しいが、人びとの暮らしは、すでに何千年も前から様々な地域との交流の中で成り立っている。私たちがその地域独特の文化だと考える人びとの文化的営みは、思いのほか様々な地域、文化の影響を受ける中で作り上げられている。この講義では、歴史、文化、政治、経済といった文化を構成する複合的な要素を概観し、現代社会の成り立ちを概説する。受講者は、そこから自らの興味関心を明らかにし、専門領域の基礎を作り上げることが望まれる。	
		国際文化概論 2	日常的に私たちが接する様々な芸術。例えば、音楽や絵画、映画や詩は、作家の頭の中だけで構成されたものではなく、外の世界の様々な事象を異なる形に再構成し、表象されたものであると捉えることが可能だ。この講義では、世界的に影響をもったいくつかの芸術作品を事例とし、作家や作品がいかに構成されたか、また、それらが社会にどのような影響を及ぼしたかを知り、文化が持つ力を理解し私たちの生活における文化の位置づけを習得することを考えていく。	
		国際文化史 1	わたしたちが日ごろ地域特有のものと思っている文化は、実は複数の文化が地域外から伝わり、長い時間をかけてその土地に根差していったものであることが多い。本講義では、いくつかの地域の文化交流史を紐解き、いかにその文化が交流し、変化し、固定化されていったのかをたどってみたい。そして、これらの文化交流が単なる偶然の産物ではなく、交流の背景には様々な文脈が隠されているはずである。この講義では、まず、歴史学的な分析方法を習得し、いくつかの事例を通じ、文化を史的な観点から理解することの重要性を理解することを目指す。	

国際文化基礎科目	国際文化史 2	この講義では、現存するアフリカ・アジアの文化事象を例にとり、その背景にある「宗教-政治-文化」や「社会運動-文化」と言った複合的な文化構成を学ぶ。これらの文化現象は、上部構造から押し付けられたものではなく、人間一人一人の生活や、人びとの交流からせり上げられたものであることが理解できるはずである。こうした視点に立てば、文化史は、年代記を超えた多文化間の交渉の観点から国際関係の変遷をとらえなおすし、グローバル社会の仕組みを習得することにもなる。本講義受講者は、事前、ないし同時に歴史学の基礎を学ぶ科目を受講していることが望ましい。	
	国際文化リテラシー 1	グローバル化・国際化が進む現代において、日常生活から職場など様々な場面において、異なる文化的背景を持つ人々と相互理解し協働することが求められられる。「国際文化リテラシー 1」では、実際に異なる文化的背景を持つ人々と接し、文化の差異を実体験するとともに、どの言動がどのようなロジックに基づくものなのかを理解する。アジアやアフリカの文化を事例として取上げ、多様な文化の存在を知り、その学び方を修得するとともに、自文化との差異を理解し、対等・平等に考える姿勢を身につける。	
	国際文化リテラシー 2	グローバル化・国際化が進む現代において、日常生活から職場など様々な場面において、異なる文化的背景を持つ人々と相互理解し協働することが求められられる。「国際文化リテラシー 2」では、実際に異なる文化的背景を持つ人々と接し、文化の差異を実体験するとともに、どの言動がどのようなロジックに基づくものなのかを理解する。言語、信仰、価値観、生活習慣の違いから生じる課題を理解し、文化を超えて相互理解し協働するために、どのような工夫ができるかを対話を通じて探索し、その方法を習得する。	
	国際文化特講 1	人類がまだ誕生していなかった時代にも、「文化」と呼べるものがあつた。しかし現生人類が登場して以降、「文化」は人類社会の物質的、精神的な展開に必須のものとなった。この授業では人類出現以前の「文化」から、現代の「文化」まで、時間的にも、空間的にも縦横にテーマをとりあげ、さまざまな領域に関連させながら、人類にとっての「文化」の諸相を学ぶ。具体的には、「文化」の定義を明確化し、その定義が前提とする生物学的特徴を確認すること。「文化人類学」の諸分野について理解を深めることを狙う。	
	国際文化特講 2	グローバル化にともない、日本にも外国人留学生や労働者が増えると同時に、海外に出る日本人も増えてきた。今後日本の生活文化についてその他のアジアの国や欧米の文化などと比較し、理解し説明することができる能力が必要とされている。本講座では、もっとも身近な日本文化を手がかりにしながら、常に世界の文化に興味を持つ姿勢を身につけ、それぞれの特徴や現代の課題を幅広い視点から探究することを目的としている。文化圏は、アジア諸国、欧米、アフリカ、南北アメリカ、アラブ地域など、テーマは伝統文化、宗教、現代社会、ジェンダー、芸術やメディアなど。	
	Business English	情報化社会では世界中から発信される様々な情報を的確に読み解く外国語リテラシーが必要となる。本授業は、「聞く・話す・読む・書く」の英語の4技能の側面からビジネスの場面で必要となる基礎的なコミュニケーション力を養成することを目的とする。ビジネス英語特有の語彙・表現を身につけると同時に、多様な価値観や異文化への理解を深め、異なる意見に耳を傾け、多角的に判断する思考力を身につけることで様々な場面で応用可能な英語による交渉力を向上させる。	
ワールドワーク科目	English discussion	この「English discussion」では、少人数のクラスにおいて、英語によるスピーキング力を徹底して強化し、アカデミックな環境で必要とされるディスカッション能力の育成を目標とする。この授業はすべて英語でおこなう。各回で講師が紹介するテーマに関するリーディングもおこなった上で、履修者の身近な関心事など、さまざまなテーマについて話しあう練習を重ねることで、学生自身が英語でディスカッションできるようにしていくことを目的とする。	
	Effective presentation	この「Effective presentation」では、各自がそれぞれの題材を設定し、構成方法、視覚資料の使い方、効果的な言語・非言語メッセージの伝え方など、英語での他者へのプレゼンテーションにおいて不可欠なスキルを学んでいく。授業においてはノートパソコンの持込を必須とし、各自のパソコンにインストールされたプレゼンテーションソフトを利用する。また、基本パターンをベースにアウトラインを作成し、回を追うごとに徐々に長いプレゼンテーションができるようにする。	
専門講義・演習科目			

English for studying abroad	この授業は、主に海外大学への留学希望者のための授業である。留学時に必要となるTOEFLやIELTSなどの試験対策、スピーキングセッションの訓練などを行うとともに、ノートテイキングや口頭発表など、留学先の大学でのアカデミックな活動にスムーズに参加できるための英語によるコミュニケーション能力を養成する。すでに留学先についての候補が決まっている学生についてはその留学先に適したテーマなどをもとに授業の課題を設定するなどの指導もおこなう。
フランス語圏事情理解	本講座は、主に聞くこと、話すことに重点を置きながら、仏語圏への生活や留学などに必要な語学力の習得を目的とする。その為の語彙力や文法理解を進めると同時に、実際にスキットを使った日常会話の講習を行う他、アンケートやフィールド調査に必要なフランス語でのプレゼンテーション技法や集団でのディスカッションの技法等を学ぶ。また、異なるシチュエーションでのメールや電話での相手とのやり取りなど、実用的なフランス語コミュニケーションのスキルを習得する。
フランス語圏文化理解	本講義は、辞書を使ってフランス語中級レベルの文章を読むことができるようになることを目標とする。フランス語の文学作品、フランスの時事に関する新聞や雑誌の記事等を原文で読むことで、フランス語の読解力、語彙力を高める。同時に仏語の文章読解を通し、フランス語圏の文化や社会、政治的背景について理解を深める。また、購読を通しフランス語の語彙や表現を豊かにすると同時に、フランス語を用いて自分の意見を表現する能力を高める。
フランス語圏経済理解	現在フランス語圏における日本映画や漫画、アニメやゲームを含むエンターテインメントに関する需要が高騰してきている一方、日本語で表現されたメディア媒体を的確に仏語圏の消費者へ向けて商品化しビジネスにするための人材が極端に不足している。本講義では主にエンターテインメントの業界に焦点を当て、仏語圏でのビジネスに必要な語学力の習得を目的とする。日本語で表現されたメディア媒体を適切に通訳するためのノウハウを学ぶと同時に、仏語でのプレゼンテーション技法やコミュニケーションの技法、企画書作成などについても講習と演習を通じて学ぶ。
フランス語圏のメディア	本講座は仏語の記事やラジオ・TVのニュースなどの文章や、音声・映像資料を含むメディア素材を用いてフランス語の基礎力を上げながら仏語圏に関する知識を深める。そのために、社会や政治、メディアに関する基礎講義に加え、各自が興味をもったテーマに関し、主体的に情報媒体にアクセスするノウハウを学び、得られた情報を通して語彙力、語学力を鍛える。講義で扱う素材は、社会、文化、ビジネス、政治、環境問題や教育など。授業では文化的背景に関する講義で基礎知識を補完しつつ課題をグループワークで読解していく。また各自が興味を持ったテーマを中心として仏語のメディア媒体で得られた情報に関するプレスレビューを作成し批評会を行う。
フィールドワーク入門	本科目では、3年次に実施する海外フィールドワーク（長期）への準備とし、渡航先の選定、海外フィールドワーク（長期）の計画の作成、渡航中の報告、帰国後の報告会までの一連の流れを理解するとともに、ビザの取得や予防接種など発生し得る事前手続き、海外滞在中の安全管理・健康管理について学ぶ。また、各地域を担当する教員が、渡航先の候補となる地域、受け入れ先の提携大学・機関、活動テーマなど順次紹介する。個々の関心と適性に基づき、渡航先の候補を検討する。
フィールドワーク方法論	本科目では、3年次に実施する海外フィールドワーク（長期）への準備とし、担当教員の指導のもと、メールやウェブ会議を通じて現地受け入れ先の担当者を変えて、個々の海外フィールドワーク（長期）の目標、計画を作成する。渡航先の地域に関して、担当教員や出身者へのヒアリング、国や地域に関する文献を読むことで、情報を知識として蓄積するとともに、現地での生活に必要な基本言語、固有の慣習への理解、フィールドワークに必要な参与観察やインタビューなどの調査手法などを修得する。
海外長期フィールドワーク 1	海外長期フィールドワークは、協定締結大学・機関を受け入れ機関とし、3年次の1クォーター、2クォーターにかけて実施する。海外長期フィールドワークは、個々の関心と適性に合わせて、個人もしくはグループとして、大学が提供するプログラムに参加する留学型、現地でのフィールド調査を実施する調査型、企業やNGOにおける研修に参加する実践型のいずれかに参加し、海外での実経験を得る。参加期間中は、日々の活動、進捗や所感を週報を作成するとともに、定期的なウェブ会議にて担当教員に報告する。帰国後には、個々の研修の成果をまとめ報告会で発表する。

フィールドワーク科目	海外長期フィールドワーク 2	海外長期フィールドワークは、協定締結大学・機関を受け入れ機関とし、3年次の1クォーター、2クォーターにかけて実施する。海外長期フィールドワークは、個々の関心と適性に合わせて、個人もしくはグループとして、大学が提供するプログラムに参加する留学型、現地でのフィールド調査を実施する調査型、企業やNGOにおける研修に参加する実践型のいずれかに参加し、海外での実経験を得る。参加期間中は、日々の活動、進捗や所感を週報を作成するとともに、定期的なウェブ会議にて担当教員に報告する。帰国後には、個々の研修の成果をまとめ報告会で発表する。	
	海外長期フィールドワーク 3	海外長期フィールドワークは、協定締結大学・機関を受け入れ機関とし、3年次の1クォーター、2クォーターにかけて実施する。海外長期フィールドワークは、個々の関心と適性に合わせて、個人もしくはグループとして、大学が提供するプログラムに参加する留学型、現地でのフィールド調査を実施する調査型、企業やNGOにおける研修に参加する実践型のいずれかに参加し、海外での実経験を得る。参加期間中は、日々の活動、進捗や所感を週報を作成するとともに、定期的なウェブ会議にて担当教員に報告する。帰国後には、個々の研修の成果をまとめ報告会で発表する。	
	海外長期フィールドワーク 4	海外長期フィールドワークは、協定締結大学・機関を受け入れ機関とし、3年次の1クォーター、2クォーターにかけて実施する。海外長期フィールドワークは、個々の関心と適性に合わせて、個人もしくはグループとして、大学が提供するプログラムに参加する留学型、現地でのフィールド調査を実施する調査型、企業やNGOにおける研修に参加する実践型のいずれかに参加し、海外での実経験を得る。参加期間中は、日々の活動、進捗や所感を週報を作成するとともに、定期的なウェブ会議にて担当教員に報告する。帰国後には、個々の研修の成果をまとめ報告会で発表する。	
	海外長期フィールドワーク 5	海外長期フィールドワークは、協定締結大学・機関を受け入れ機関とし、3年次の1クォーター、2クォーターにかけて実施する。海外長期フィールドワークは、個々の関心と適性に合わせて、個人もしくはグループとして、大学が提供するプログラムに参加する留学型、現地でのフィールド調査を実施する調査型、企業やNGOにおける研修に参加する実践型のいずれかに参加し、海外での実経験を得る。参加期間中は、日々の活動、進捗や所感を週報を作成するとともに、定期的なウェブ会議にて担当教員に報告する。帰国後には、個々の研修の成果をまとめ報告会で発表する。	
	海外長期フィールドワーク 6	海外長期フィールドワークは、協定締結大学・機関を受け入れ機関とし、3年次の1クォーター、2クォーターにかけて実施する。海外長期フィールドワークは、個々の関心と適性に合わせて、個人もしくはグループとして、大学が提供するプログラムに参加する留学型、現地でのフィールド調査を実施する調査型、企業やNGOにおける研修に参加する実践型のいずれかに参加し、海外での実経験を得る。参加期間中は、日々の活動、進捗や所感を週報を作成するとともに、定期的なウェブ会議にて担当教員に報告する。帰国後には、個々の研修の成果をまとめ報告会で発表する。	
	地域研究科目	地域研究入門	地域研究は、異文化の社会について、生態環境、社会、文化、政治、経済、歴史など、複眼的に捉え、異文化に身を置くフィールドワークを通じて、対象とする社会を総合的に理解するものである。本科目では、異文化を学ぶ、地域を総合的に理解する、フィールドワークを行う意味を理解するとともに、生態環境、社会、文化などを関係づける方法、学際的な分野として異なる分野の方法や考え方の総合的な利用、フィールドワークの調査方法を学び地域研究を行うための素地を養う。
地域研究特講		私たちが住む世界は様々な単位で分節化することが可能であるが、ある人びとの集団を理解する上で、地域という単位は、世界を鳥瞰的に理解する上で、有用な単位である。宗教や政治、生態はこうした単位でより明確に特色や問題の理解を進める。この講義では、特にアフリカ・アジアの特定地域を事例とし、文化、政治経済、生態など、複眼的な視点から一つの地域を深く理解することを目的とする。また、こうした事例研究を通じて獲得した分析手法を、受講者が専門とする地域に当てはめていくことを目指していく。本講義の受講生は、「地域研究入門」を受講していることが望ましい。	
アフリカ地域研究 1		本講ではアフリカにおける多様な文化・社会の理解を目的として以下の三点を主に学ぶ。第一に伝統社会における家族や民族文化、宗教について、第二に植民地時代から近代化への過程の中で、西洋や国際社会との関わりの中で生まれた新たな社会形態や文化について、第三に、国際化する現代アフリカ社会における都市文化やポピュラーカルチャー、メディア等を含む新たな文化の生成と発展について。西東、南アフリカなど地域間の違いも理解しつつ、アフリカ全体の社会・文化を概観する。	

専門講義・演習科目

<p>アフリカ地域研究 2</p>	<p>アフリカの異なる地域における社会・文化の多様性を理解しつつ、政治、経済について概観することを目的とする。本講義では以下の三点に着目する。第一に伝統社会における家族や民族文化等を含む政治形態や、それに根ざした経済のあり方について、第二に植民地支配から近代国家形成の経緯と、独立後の国家における統治と経済の変容について、第三に、現在の国際社会におけるアフリカの政治的、経済的役割について、特にヨーロッパや新興国(中国、ブラジルなどを含む)との関係を中心に学ぶ。</p>	
<p>アジア地域研究 1</p>	<p>アジアは世界の人口の半数以上を抱える地域である。東アジアから南西アジアまで広域に及び、異なる気候や自然環境のもと、様々な民族、言語、宗教、文化によって構成される。本科目では、アジア全域における地理的な基礎知識を修得するとともに、それぞれの地域に固有の文化や社会、人々の生活や生業の特性とその変容を総合的に学び、アジアの多様なあり方について考える。また、地域の固有性や特性の複合的な捉え方を理解する。</p>	
<p>アジア地域研究 2</p>	<p>現代のアジアは、グローバル化や経済発展、国内および国際的な政治変動の影響を受け、めまぐるしく変化している。また、急激な経済成長や都市化による環境劣化、格差の拡大、人口増加と少子化、宗教や民族間の確執などの新たな問題も生じている。本科目では、アジア各地域における政治、経済、社会、文化の状況と諸問題について概観するとともに、新たな国や地域間の関係や相互影響を学び、多角的な視点から変動する現代アジアに関する理解を深める。</p>	
<p>アメリカ地域研究 1</p>	<p>本講義の目的は、アメリカ合衆国の歴史、文化、社会、思想、宗教、政治経済等を総合的に学ぶことを目的とする。奴隷制時代から現代に至るまでの歴史理解を通し、米国における人種、階級、ジェンダー形成の問題について、これまで軽視されがちだったマイノリティ集団が果たしてきた役割も含め学ぶ。また、現代に至るまでの世界におけるアメリカの位置づけや、アジア太平洋地域との関係、日米関係に関しても考察する。</p>	
<p>アメリカ地域研究 2</p>	<p>かつてスペイン、ポルトガル、フランスなどヨーロッパ諸国の植民地であったラテンアメリカは、言語、文化、宗教や政治制度等に多くの共通点があるが、独立から国民国家形成の過程を経てそれぞれの国で多様な発展を遂げてきた。本講義では、自然環境や人種、民族、階級、政治制度等、異なる要素に関して通史的に講義すると同時に、ナショナルな文化の形成過程とグローバル化社会の中で変容するラテンアメリカの役割について理解する。</p>	
<p>大洋州地域研究</p>	<p>大洋州とは、オーストラリア、ニュージーランド、太平洋の島々を含む広範囲を含む。本科目では、大洋州の地理的な基礎知識、伝統社会から植民地化、独立国家成立への歴史の変遷を概観するとともに、島嶼国特有の自然環境と暮らし、地域固有の文化や慣習について学び、大洋州の多様性について理解する。また、グローバル化、自然災害や気候変動による影響など現代の島嶼国が直面する課題、日本や諸外国との関係について学び、小島嶼国としての発展のあり方について考察する。</p>	
<p>欧州地域研究</p>	<p>大小さまざまな国が隣接し、古くから攻防を繰り返してきたヨーロッパ地域において、ひとびとはどのように共存してきたのだろうか。本講義では、まず地域統合という観点から現在の欧州連合が成立するまでの同地域を歴史にたどり、現代の欧州地域の成り立ちを概観する。そのうえで、欧州連合の仕組みを、政治・経済・社会・文化の各方面から学ぶ。欧州連合は現代の国際社会の一つのモデルともなっているから、欧州のモデルを基準に、他の地域との比較の可能性について検討することが最終的な目標である。</p>	
<p>グローバル関係概論</p>	<p>世界はどのように動くのか。近年まで盛んに使われた「国際」という言葉は、多くの場合、「グローバル」という語に置き換えて考えられるようになった。グローバル化が我々の生活に浸透するにつれ、「国」だけでは世の中をとらえきれなくなっている。この講義では、「国家」という近代以来、我々が依拠してきた枠組みを含みつつ、複雑に絡み合う様々な権力媒体によって動く現代世界の関係性を考察していくことを目的とする。</p>	

グローバル歴史概論	高校までに習う歴史の内容は、各地の政治イベントを起点とした年代史であることが多い。歴史が人びとが織りなした営みの群れを理解する学問であるなら、ある階層のイベントのみを扱うだけでは不十分である。そこで生まれたのが、グローバル・歴史という考え方である。本講義では、グローバル・歴史という考え方（長期の歴史動向を捉えること、広域地域を考察対象とすること、西欧中心史観に代わる視座を提示すること、各地域の互換性に注目すること、地域横断的な問題等、多様な問題設定を行うこと）を習得することを目的とする。
グローバル歴史特講	本講義では、グローバル・歴史の思考方法を基礎とし、特に脱植民地以降のアフリカ、アジア、中南米のディアスポラ世界の史的動態を、ヨーロッパ世界による植民地帝国の枠組みだけではなく、グローバルかつローカルな動きを組み合わせながら解説する。その方法論として、従来の歴史的分析手法に加え、文化人類学や政治学、経済学と言った複数の視覚から切り込み、ディアスポラ世界の成り立ちを複眼的にとらえることを目指していく。本講義の受講生はグローバル・歴史概論を受講し、グローバル・歴史がどのような考え方なのかを理解していることが望ましい。
多国籍企業論	グローバル化が浸透するにつれ、国境を越えた経済活動や企業のグローバル化はさらに加速している。こうした世界において、多国籍企業は、政治・経済・社会の各側面において重要な役割を果たしている。本講義では、民間企業のグローバル展開を、直接投資やマーケティング、人材育成などの視点から考察し、現在のサプライチェーンや政治面での影響力、さまざまな社会変容について明らかにする。指定されたテキストを読み込むことを基礎とし、講師の経験から、具体的な事例を挙げながら多国籍企業論について学ぶ。
社会運動論	アメリカの公民権運動、ネルソン・マンデラらによる反アパルトヘイト運動…常にその時代の新たな価値を提示してきたのは、市民たちによる社会運動だった。時に暴力が介在した社会運動は、その形を大きく変え、現代社会への異議申し立ての方法も大きく変化した。この講義では、社会運動の起こる仕組みや、社会運動の歴史を学び、私たちが目指すべき社会像を考えるための素養を身につけることを目的とする。社会運動を遠い世界のものとせず、自らの問題として考える視点を身につけることが本講義の目的である。
世界の宗教	いわゆる世界三大宗教（イスラーム、仏教、キリスト教）は、これまでも世界を動かし続けてきたが、21世紀に入り、政治経済的側面においてもそれらは性質を変えつつ、強大な影響力を保持し続け、私たちはこれまでと異なる宗教を理解することが必要となっている。この講義では、これら三大宗教の基礎となる教義レベルの概略を学び、さらに地域ごとの動きを明らかにすることで、それぞれの宗教が多層的レベルでうごめいていることを理解することを目指す。
アフリカ・アジア関係論	グローバル化の進行にともなって、世界の各地域間の情報、モノ、人の交流は近年ますます盛んになっている。しかし、アジアとアフリカに目を向ければ、いくつかの経路で脈々とその交流は続けられている。現代の文脈では経済的観点から語られることの多い両地域間の関係を、本講義では、さらに政治・文化・社会を含む歴史を起点として考察していく。現代世界のグローバル化の潮流を考えれば、経済に着目されがちであるが、そこには、経済的な事由に加え、宗教や文化と言った側面から考えることの重要性を読み取ることができるだろう。こうした両地域の歴史的交流に目を向けることで、普段とは異なる世界の見方を検討することが本講義の目的である。
国際政治学	国際社会の様相は、地域経済共同体の形成、新興国の台頭、多国籍企業の拡大などの影響により変化し、国や地域間に新たな対立や緊張が生まれている。本講義では、国際政治の成立から歴史的变化、その理論や思想の基本を学ぶとともに、現代社会の民族間の紛争、資源、環境問題などを取り巻く国際政治の様相を俯瞰し、グローバル化、トランスナショナル化に直面する国際社会における国際政治の課題やこれからのあり方について考える。
国際社会の法秩序	私たちの社会は法により規律され、国家間においても法的拘束力の有無を問わず、様々な規範が共有されている。国家間のそれは、国家を罰することではなく、より良い世界を目指すための規律であり、例えば、人権やグローバルな課題を解決するための指針、また紛争を予防解決するための規則である。本講義では、国際法をはじめとする国際社会が規律される仕組みを学び、これらの法が発出される国連組織の現代的意義についても学ぶ。本講義の課題を通じて国際的に認められる問題を明確にし、さらには平和とは何か、を考える。

グローバル関係科目	人口動態論	現在、世界的には人口は増加しつつも、それぞれの国や地域においては人口変動は多様である。人口動態は、社会、経済的諸条件と密接な関係を持ち、社会の諸特徴を示す一つの指標である。本科目では、人口学が対象とする人口規模、人口構造（年齢や地域分布）、人口過程（出生、死亡、移動等）の基本的性質を理解するとともに、現代社会における人口変動（人口増加、死亡率・出生率の低下、高齢化、都市化、結婚と家族の変化等）の動向を学び、変動の要因を考察する。また、経済的側面、環境的側面に対する人口動態による影響を学ぶ。	
	人口政策論	世界各地では、地域や国で見ると、多様な人口変動が見られ、その要因は様々である。人口減少による経済成長の停滞、人口増加による食料・エネルギーの不足、貧困の拡大など、過剰な人口変動は社会発展に深刻な懸念を生じさせる。本科目では、具体的事例をとおして現代社会における人口変動による課題を学ぶとともに、人口変動の要因（出生・死亡・移動）への対応および人口変動によって生じる社会経済現象への対応の2つの側面から人口政策を考える。	
	比較社会学	私たちはなぜ他の社会を学ぶのか。それは、単に他者を知る、ということにとどまらず、他の社会を知ること、私たち自身が所属する社会を相対化し、自らをよりよく知るためではないだろうか。ここに本講義の大きな目的を置き、そこに至るプロセスとして、まず、比較社会学の分析方法として、マクロ・レベルと、よりミクロな社会体系の比較軸の建て方を習得する。この分析手法を用い、本講義ではアフリカ・アジアの教育・福祉を事例にとりそれぞれの社会の仕組みを解説した上で、受講者は自身の出身社会の同領域の事例を調べ分析する。	
専門講義・演習科目	先住民研究	現在、世界中に少なくとも5,000の先住民民族が、70カ国以上の国々に居住するとされる。本科目では、先住民が先祖伝来の土地のなかで維持してきた多様な思想、文化様式、社会制度などを学ぶ。また、これまで先住民が弾圧、搾取の対象となり、社会に強制的に同化させられてきた歴史的背景を理解するとともに、先住民の伝来の土地と民族的アイデンティティを維持・発展させる取り組みを学び、先住民の文化理解と文化共生について考える。	
	ポストコロニアル概論	サイードによる植民地主義的言説批判に端を発するポストコロニアル理論は、現在の政治や世論の形成に大きな役割を果たした。この考え方は、現在では、植民地主義に対してのもののみならず、自社会における階級や差別を固定化しようとする様々な枠組みに対する批判理論として理解され、ポストコロニアル理論に基づく様々な文学作品を生み出している。この講義では、ポストコロニアル理論の成り立ちを理解し、近年発表されたいくつかの文学作品を読み、それらの作品で語られる権力構造、さらに、それらに対する批判を解説する。	
	国際開発論	第2次大戦後の戦禍の復興に始まる国際開発は、やがて貧困問題解決のための大きなうねりとなり、国際的な課題を担う領域となり、その学問領域も拡大していった。しかし、援助側、被援助側のこれまでの取り組みが功を奏し、状況は次第に変化し、過去の貧困問題とはその様相を異にするようになった。本講義では、貧困問題の本質を捉え、現代の貧困問題とそれに取り組む国際開発のアクターの施策の変容を考察していくことを目的とする。	
	マイノリティ研究概論	マイノリティとはだれか？経済的な標準化が進むと言われるグローバル化した世界において、それまで隠されていた格差と排除の構造が発見され、我われの生きる世界には多様な特色をもった生があることがわかってきた。人が構造的排除や格差から逃れ、他の人びとに迎合せずに、ありのままの生を生きるためには、他者・当事者・支援者として、こうした人びととどのように関わっていけばよいのか。この講義では、マイノリティ問題にアプローチするためのフィールド・ワークの方法を学び、マイノリティの立場から出発し、マイノリティ、しいては私たち自身が自由に生きるための生活圏づくりを考察していく。	
	グローバル・ビジネス論	現在のビジネスシーンにおいて、海外との関係を意識することは不可欠である。企業を取り巻く環境は変化し、企業経営やビジネス活動のグローバル化が急速に進んでいる。本科目では、グローバルビジネスの歴史の変遷や経済環境を概観するとともに、グローバルに展開する企業を取り上げ、その戦略や考え方、求められる人材能力などを理解する。また、現代社会が直面する様々な社会問題とそれに対応する新しいグローバル・ビジネスのトレンドを学ぶ。	
グローバル共生社会科目			

グローバル化とメディア	ヒト、モノ、情報、サービス、カネ等が国境を越え移動するグローバル化社会において我々は様々なグローバルイシューに直面するようになった。特にインターネットを利用した情報のやり取りは現代社会の日常生活に多大な影響を与えている。インターネット、テレビ、新聞、広告等のメディアの作り手はいかなる意図のもとに情報を発信するのか、またメディアが社会に与える影響は何か。グローバル化に伴うメディアの変容を理解すると同時に、理論と実践を通し、受信者、発信者として情報を作り出し、また読み解くための能力（メディア・リテラシー）を身に着ける。
エイジング研究概論	日本をはじめとするいわゆる「先進国」の多くの国で、極度な少子高齢化社会が進行している。老年学は「老いること」の心理学的な分析をその根幹に置くが、現在の社会状況を考えれば、「老い」そのものだけを考えるだけでは不十分である。老年学はそれほど新しいものではなく、日本でも戦後すぐにこの領域が生まれ、現在の時代背景の中でますます盛んになってきた領域である。そこで、この講義では、「老い」というすべての人間が将来的に経験する時間域を考えるだけでなく、福祉の意味を考えるうえで、国内外の政策や社会的な取り組みの事例を交えながら、「老い」の社会的意味を捉えることを目的とする。
子ども学概論	「子ども」の概念、「子ども」がオトナによって保護されるという、現在では当たり前となった「子ども」に対する考え方は比較的新しいものであることは、歴史学で明らかになり、私たちがイメージしがちな弱い存在としての子どもは、社会的に作られたものである。そこで、この講義では、一旦子どもに付与された弱者性を排除し、教育、生物学、発達心理学、文化人類学（「遊び」や「学び」）と言った多角的な視点からとらえる思考を鍛えていく。こうした学びから、子ども以外の後天的な弱者へのまなざしを客観的に考える思考を獲得していく。
地球環境学概論 1	地震や洪水など劇的な自然災害は人びとの生活を破壊し、多くのものを失わせる。それらばかりではなく、地球温暖化や大気・水質汚染といった人びとの生活を緩やかに脅かす自然災害も現代社会にとって重大な環境課題となっている。「地球環境学概論1」では、自然災害に対してレジリエンスを持ち、持続可能な社会とはなにかを考えることを目的とする。この課題を考えるため、本講義では、超学際的（トランス・ディシプリナリー）なアプローチから素材を提供する。
地球環境学概論 2	地球上にある様々な「資源」は、お互いに関連しあい、「資源」に関わる問題は一つを解決しても全体の解決にはなることはない。「地球環境学概論2」では、国内外の農林水資源・生態資源を含む多様な資源の生産・流通・消費のあり方を考える。これら資源の問題は、「科学的」な正しさのみから解答を与えられるわけではなく、それらに関わるステークホルダー（利害関係者）の関与を強く意識する必要がある。この講義狙いは、科学者とステークホルダーが取り組む資源利用に関する事例から、資源の公正な利用と最適な管理とガバナンスを実現するための方策を考える。
地球環境学概論 3	世界人口の7割以上が住まうアフリカ、アジア地域では、人間活動の急速な拡大により、環境破壊、生物多様性の消失を経験している。このプロセスでは、都市部への人口集中、農山漁村での過疎化が起こり、両者の生活圏の劣化が加速している。「地球環境学概論3」では、社会・文化・資源・生態環境との相互連関の場としての生活圏の概念を再構築し、都市域や農村漁村域など多様な生活圏相互の連環を解明し、生活圏の様々なステークホルダーとともに、直面する諸問題の解決や生活圏の持続可能な未来像を描くことを目指す。
NGO論	世界的に見れば、20世紀初頭にその原型が認められるNGO。その起こりは、戦傷者の治療、そして、恵まれない人へのチャリティーにある。日本においては、1995年に発生した阪神・淡路大震災をきっかけに起こったボランティアのブームは、その後NGOの隆盛に繋がった。以降、NGOは20年以上に渡り日本国内のみならず、世界の各地で支援活動を展開するようになった。そして、現在のNGOはチャリティーの枠を大きく超え、国際社会における「市民社会」の代表者として、政治的な発言力を持つようになって久しい。この講義では、NGO史を概観して、近現代史における市民社会つまり、民主化の変遷を追うとともに、現代社会におけるNGOの新たな役割を学んでいく。
平和学	人類史上、人間は平穏にその生を紡いでいくことを目指してきたにも関わらず、現在に至るまで絶え間なく争いを続け、それは時に多くの人の命を奪い、人びとを不幸のどん底に突き落としてきた。しかし、こうした争いのないことのみが「平和」の条件だろうか。平和の条件は、私たちが自由に往来し、暴力に妨げられることなく、自己実現することではないだろうか。この講義では、争いのない平和（消極的平和）のみならず、人間が自由に能力を発揮できる状態（積極的平和）を獲得するためにはどのようにすればよいかを、学際的な観点から考察する。

グローバル共生社会科目	市民社会論	「市民社会 (civil society)」は、公的領域で活動する人びとの自発的な運動の領域として、世界各地で発展してきた。これまで、「市民社会」はある意味、社会的弱者を支援する公共の福祉に関わる人びとを限定的に指す傾向にあったが、現代のグローバルな文脈において、そのアクターはグローバル企業、多国籍企業をも含め、NGO、企業、国家、国際機関を混然一体としたものとして理解する必要がある。本講義では、「市民社会」の基礎知識と歴史的展開を学ぶと同時に、多様化するアクターたちがどのように「市民社会」を構築するのか、その可能性について検討していく。	
	人間の安全保障	冷戦の時代が終わり、私たちの「安全保障」の考え方は大きく変わった。21世紀にはいると、人間ひとりひとりの生存、生活、尊厳が守られることが現代的な安全保障の考え方とされ、その問題は、国民国家同士の争いから、貧困、環境、感染症、テロと言った、どの地域でも恒常的にリスクを抱える課題が重要なものとされるようになった。この講義では、人間の安全保障を脅かすリスクを私たちの生活世界の中から抽出し、そうした中で人間の安全保障がどのような考え方なのかを学ぶ。そして、どのように人間の安全保障を担保するのかという方法論を実例を交えながら議論していく。	
専門講義・演習科目	観光学総論	観光産業は平和産業かつ成長産業として、グローバル化が進む現代において最も注目を浴びている産業の一つである。観光による地域振興は、日本のみならず世界的なパッケージとなりつつある。それゆえ、一般的な地域社会での観光振興のみならず、宗教やグローバル経済といった、多様な文脈の中で語ることが可能である。さらに、観光はゲスト-ホスト関係という人間社会における普遍的なテーマを含みこむ。この講義では、いくつかのトピックから現代の観光を考察することを目的とする。	
	世界の文学 1	従来の「国民文学」の枠組みを超え、多様なバックグラウンドを持った作家の文学作品を通して、国境を越えて存在する今日的課題について考え、地域文化とグローバル世界との関わりを再検討することが本講義の目的である。本講義では、ポストコロニアル批評やジェンダー批評など現代の文学批評理論を紹介したうえで、アジアの文学と世界中に在住するアジア出身の作家の作品を中心に、その背景にある歴史・社会的文脈を読み解いていく。	
	世界の文学 2	従来の「国民文学」の枠組みを超え、多様なバックグラウンドを持った作家の文学作品を通して、国境を越えて存在する今日的課題について考え、地域文化とグローバル世界との関わりを再検討することが本講義の目的である。本講義では、アフリカの文学と世界中に在住するアフリカ出身の作家の作品を中心に、その背景にある歴史・社会的文脈を読み解き、アフリカ地域文化に触れるとともに、これらの作品と特に関わりが深い「植民地主義」「越境と移動」といったテーマについて考察を進める。	
	世界文化遺産	文化遺産は、人類の文化的活動によって生み出された有形・無形のものであり、多様な文化が共生する社会を実現するために、後世に伝えていく必要がある。本科目では、「世界の文化及び自然遺産の保護に関する条約」「無形文化遺産の保護に関する条約」の成立と理念、登録の目的を理解し文化遺産保護の意義を学ぶ。また、国際的な枠組みにおける各ステークホルダーの役割を理解し、各地の「世界文化遺産」「世界無形文化遺産」を対象に、具体的な取り組みと現地で生じる課題を理解し、これからの文化遺産保護のあり方を考える。	
	アフリカ美術	アフリカ美術は我々の日常生活においてそれほど馴染みは深くない。アフリカ美術の多くは名もなき製作者によって生産され、オリエンタリズムに満ちたまなざしに晒されてきた。しかし、近年、多くのアフリカ出身のアーティストが様々な作品を手掛けるようになった。本講義では、アフリカを舞台に、アフリカの美術を取り巻く環境を紹介し、アフリカ的な美術について学び、同時に、アーティストとは誰か、という問いに対して考察する。	
	マテリアル・カルチャー概論	かつて人びとの生活の中のマテリアル（物質）を収集することは、異文化を知る最も有力な方法とされた。この領域は文化人類学や民俗学で発展し、実存するモノを生産し、それを使う計画、方法、理由などを人びとに提供する人間の習性や行動を分析するとし、モノを起点に人間のあり様を哲学的に考える領域だと言える。モノが溢れた現代社会において、モノとは何か、そこにまつわる人間の生活がどのように構成されているかを考えるのが本講義の狙いである。この講義では、マテリアル・カルチャーの理論に加え、モノをどのように描写するかについても学んでいく。	

グローバル文化科目	民族音楽論	世界中、ありとあらゆる社会に音楽は存在し、それぞれの様式美がある。芸能として発達し、西欧音階に転記されポップな音楽になったものがある一方、音楽の中には農耕や漁業と言った生業に密接にかかわるものも少なくない。しかし、私たちの生まれ育った場所で育まれた音楽はずいぶん縁遠い存在となってしまう。この講義では、まず、音楽理論を学び、これを基礎としながら、各民族に独特の様式やパフォーマンスを分析し、ある社会における音楽のあり方を理解することを目指していく。	
	比較服飾文化論	服飾は時代背景や地域、風土、そしてそれぞれの文化を反映すると同時に、それを生み出した社会の思想や生活を視覚的に伝達する。本講では、異なる歴史的背景（古代文明から現在まで）、また異なる地域や風土（アジア、アフリカ、ヨーロッパ、ラテンアメリカ、アラブ地域など）における服飾文化の流れと変容を比較文化的視点から学ぶ。多様な時代や文化によって生み出された服飾文化について理解することで、今日のファッションにおいても異なる文化的要素を取り入れた新たなトレンドを発見することに繋がる。	
	比較建築文化論	建築物は、世界各地の自然環境、歴史と文化の多様性を示す。本科目では、人々の暮らしと密接に関わる住居を中心に、異なる地域の気候風土に適応する多様な建築形式、住居と家族形態、生活様式、信仰など社会文化的要素との関連を理解し、比較文化的視点から住居の地域固有性について学ぶ。また、現代社会における暮らしを取り巻く環境変化による住居への影響、現代の新たな住居の課題を理解し、地域の自然環境や文化に適応した持続的な住居のあり方を考える。	
専門講義・演習科目	哲学概論	プラトンの対話篇に登場するソクラテスが説く倫理や、カントによる人間的思考の限界の追及、またフランクフルト学派による文化産業と現代社会の結びつきに対する糾弾など、各時代の主要な思想家を取り上げながら、哲学的思考にとって必要な基本概念を理解するとともに、それぞれが取り組んだ哲学的課題とその背景、さらに独自の思考の進め方を学ぶことによって、哲学そして哲学者が「時代」と切り結んだ関係が有していた「アクチュアリティ」を理解すると同時に、ひるがえって履修者自身が「現代」をアクチュアルに思考するための方法論を獲得する。	
	倫理学	「善き生とは何か」という問いのうち、「幸福な人生とはどのような生か」という問いは、古代ギリシャ以来、多くの倫理学者たちにとって大きな問題だった。なぜなら、それは非常に難しい問題だからである。「幸せ」「幸福」とは一体どのようなものだろうか。それは、ある一瞬の出来事だろうか、それとも一生の中でずっと続いているなければならない状態か。また、本人が満足していればその人は幸せだと呼べるのか、それとも何かそれ以外の条件を満たしていないと幸福な人とは呼べないのだろうか。講義では、古代から現代までの哲学者たちのテキストを紹介し、ビデオや映画なども見たりしながら、幸福について考えていく。	
	心理学	心理学が個別科学として独立してから今日まで、人間の心理現象を実証科学的に探求する種々の試みがなされてきた。この授業では、「科学」としての心理学がどのように形成され、発展してきたのかについて紹介するとともに、実験心理学、発達心理学、社会心理学等、多岐にわたる心理学全般の基本的知見を概観することによって、心理学の目的と方法、さらに人間の生物学的基礎、心理的発達、感覚、知覚、意識、学習、記憶、言語と思考、動機づけ、情動、知能など、人の心の基本的な仕組みや働きを、日常生活の中で経験する様々な事柄と関連づけながら理解する。	
	社会学	「社会学」とは、非常に広い意味を持った言葉である。「社会学」と名のつく学問領域も多岐にわたる（例えば医療社会学、家族社会学、環境社会学、教育社会学のように）。しかしそのような多岐にわたる学問体系、多様な専門領域をもつ「社会学」という学問の基盤には常に「現在の世の中に対する問い」という共通の問題意識が内包されている。講義では社会学の基礎、その思想的背景、具体的な研究例について学んでゆく。それらの教養は人文諸学を学ぶ上でいずれ必ず必要になるものである。	
	社会調査法	統計処理を前提としたデータを扱う量的調査と、個人的なドキュメントの分析や参与的観察などによる質的調査との双方にわたる調査方法を学習する。量的調査については、データの収集方法と分析方法、その手順と過程、統計処理の手段などの方法論、また質的調査については、インタビュー調査、参与観察法、ドキュメント分析、映像テキスト分析、会話分析などの方法論を習得するとともに、社会調査の基本的な性格やその系譜と歴史、さらにデータの収集と保存、公開にまつわる技術的・倫理的について具体的な事例の紹介を通じて学ぶ。	
学科基礎講義科目			

経済学	『国富論』のアダム・スミスが同時に『道徳感情論』の著者でもあり、またジョン・メイナード・ケインズの『一般理論』のなかに「美人コンテスト」の実例が登場するように、本来、経済学とは人間が何に価値を付与し、それら価値を付与されたものをめぐって個人がどのように振る舞い、そしてそれらの振る舞いが集合することによってどのような社会現象が生み出されるのかに関する学問である。この講義では、難解な数式を避けながら、個人々の消費や労働、企業、政府・国の諸活動を履修生自身の生活から出発して考察するための基本的な考え方を獲得する。
批評理論	主に文学における批評理論を体系的に学ぶことにより、テキストについて感想・印象を述べることを超えて、理論によりつつ「批評」できるようになることを目的とする。古典主義的な批評にはじまり、言語哲学、構造主義、記号論などの強い影響を受けて成立した文学理論、さらにそれを乗り越えようとするジェンダー批評、ポストコロニアル批評にいたるまで、文学表現を考察し評価するための主要な批評理論について、その基礎にある思想・言語哲学と個人々の具体的な批評実践の紹介を通じて、それぞれの批評理論の特性と射程を俯瞰的に理解する。
ジェンダー論	「ジェンダー」はしばしば「社会的な性別」や「社会・文化的な性の様態」などと説明されるが、現在、ジェンダーは「社会・文化」の下位概念を超え、「社会や文化がジェンダーを作り出す」のではなく「ジェンダーが社会や文化を構築する」と考えられるようになってきている。こうしたジェンダー論の展開は、20世紀以降の思想・哲学の進展と深い関係を有している。講義ではプラトン以降の西洋哲学史を概観した上で、東洋における性差の理解に加え、脱構築やクイア理論などの現代思想におけるジェンダー理解について検討する。
宗教学	本講義では、なによりも我々の「生活」をキーワードとし、宗教を捉える。21世紀を生きる我々にとっての日常「生活」と「宗教」を学び、これからの「宗教」の可能性と問題点を見いだしていく。現代社会の「生活」と「宗教」に求められているものとは何かを考えるため、これまでの宗教が果たしている機能とは何かを取り上げる。これらの目標を達成するために本講義では、基本的な宗教の概念および定義やその意味、宗教形態に関する概要をまとめ、宗教がもつ本来の役割とは何かを深く考察する。
社会思想史	プラトンとアリストテレスに代表される古代ギリシアの国家論・政治学から、ホブズやロックが描いた近代市民社会論をへて、現代の社会理論にいたるまでの重要な社会哲学を、それらが生まれた時代背景や地域の特性などに即して体系的・包括的に理解することに加え、それぞれの社会哲学の方法論を現代の日本社会が抱える具体的な問題に適用することによって、その射程を見極めるとともに、現代の日本社会への理解を深める。社会を理解するための多角的な視点を身につけた上で、これからの現代社会の変貌を見通すことのできる視座を獲得する。
自然地理学	地理学は、地表を探索して「世界」についての知識を上げ、その地図を作ることに始まった。現在では自然地理、人文地理と大別されているが、空間という広がりの中で地形、気候、植生などの自然的条件を把握すること、そしてそれらの環境条件と人間生活との相互作用の関係を解明すること、さらにそうした知見を地図などによって表現し、世界の諸地域の理解やその地域の発展に資することが、この学問の基本であり存在意義であることに変わりはない。講義では、地理学のもつ様々な側面の中からもっとも基礎的といえる、自然地理学と人間環境関係学の部分を取り上げて、その見方・考え方を修得することを目標とする。
文化政策論	国や地方自治体の政策の中で文化が扱われる過程とその意義について、関連する世界の動向ならびに歴史をも見据えながら考察し、現代日本における国と地方自治体の文化政策の基本的な枠組みとその方向性を概観する。とりわけ京都府・京都府に見出される文化政策の特徴と問題点を理解した上で、伝統文化と、さらに大衆文化における新しい文化事象が文化政策においてどのように扱われるのか、また文化政策への地域住民の理想的な参加のあり方はどのようなものかについても考察し、将来の文化政策について一定の見識を習得する。
文化社会学	いわゆる「高級文化」ではなく、概して娯楽や商品として消費されるがゆえに、その社会的価値や文化的な意味が見過されがちなテレビ番組や広告、映画、ポップミュージック、ファッション、アニメ、ゲームなどといった「大衆文化」を主たる対象としながら、そのそれぞれの特徴や分析方法、グローバル化における位置づけを、私たちの日常生活と社会との関わりのなかで理解するための様々な理論や概念、方法論を習得する。個別具体的な事例の紹介も取り上げながら、現代社会における多様な文化現象を批判的・多角的に分析できる思考力を養う。

学科基礎講義科目	西洋史	ヨーロッパは2000年以上前から世界の文化、政治、経済の中心として中国を中心とする東洋とともに世界をリードしてきた。この地域の歴史を知ることは、いわば世界の潮流の半分を知ることであり、現代世界を考えるうえでも大変重要である。しかし、歴史は高校世界史で学んだような、政治的イベントの連なりのみを見ればよいのではない。それぞれの時代にある、人びとの生活が見えるような歴史を学ばねば、生きた歴史とは言えない。この講義では、これらの背景に留意しながら、歴史学の考え方を学び、現代につながる西欧の歴史の連なりを概観していく。	
	東洋史	サイードによる「オリエンタリズム」の批判から、ヨーロッパ的な意味の「東洋」は解体され、これまで「東洋」とされてきた日本（極東）から北アフリカのマグレブにかけてを指す地域のそれぞれの歴史が研究されるようになってきた。しかし、これらの地域は古くから互いに密接な交流を重ねてきており、現在、世界の最大の人口規模、生産の中心である、この地域を理解する上で、巨視的な歴史理解は重要である。そこで、この講義では、「東洋」の一部の地域の地域史を学ぶだけでなく、「東洋」全体を理解することを目指す。	
専門講義・演習科目	日本史	古代、中世、近世、近現代までの日本史の流れを概観しつつ、民衆史や地域史といった近年の歴史研究の動向も簡単に紹介することによって、各時代の政治に加えて社会・文化・「日本」と周辺地域との関わりといった様々な分野のトピックを学ぶ。高校までの生徒が一般的に抱きがちで、著名な政治家や政治体制の変転にまつわる年号を暗記するという「歴史＝政治史」観から脱却するとともに、履修者が高校までの学習の中で形成した「日本の歴史」のイメージを各自で相対化するための視点を獲得する。	
	日本地域史	奈良、京都、江戸／東京における中央権力の政治動向とそれに関わる政治家・知識人らを中心に歴史を綴るのではなく、この権力との複雑な関係を保ってきた諸地域の歴史を掘り起こそうとする地域史の方法論とその成立経緯ならびに問題点に加え、この地域史に先立つ地方史、またこれらに近接する郷土史との相違、特定の地域史と現代の地域住民との関わりについて学ぶ。日本の特定の具体的な時代・地域に対する地域史のアプローチの事例紹介を通じて、この方法論によって何が明らかになるのかを理解する。	
	日本社会史	著名な人物や彼らが関わった事件を連ねることによって歴史を綴るのではなく、それらの背景にあつてその時代・地域の社会の全ての構成員、とりわけ普通の人々の日々の営みに意味を与えていた家族、性、出産、育児、衣食住、貧困、犯罪、死といった事象に目を向け、社会構造全体の変遷をたどり、歴史研究の全体性を取り戻そうとする社会史の方法論とその成立経緯ならびに問題点について学ぶ。日本の特定の具体的な時代・地域に対する社会史のアプローチの事例紹介を通じて、この方法論によって何が明らかになるのかを理解する。	
	日本・アジア関係史	古代史・中世史・近世史・近代史それぞれにおける日本とアジアのあいだの人・物・文化の移動と交流、戦争や侵略の歴史、さらに「アジア」認識の変化などについて、とりわけ琉球、韓国、中国、台湾、フィリピン、タイなどからなる東アジア地域と日本との関係に焦点を当てながら通時代的に学ぶ。日本史をアジア史のなかで有機的に理解することによって、これを相対的に捉える視野を獲得するとともに、今日の日本が形成されるまでの経緯をそのダイナミズムとともに理解し、また現代の「歴史認識」をめぐる問題の根源についても理解する。	
	日本の文化遺産	「世界の文化及び自然遺産の保護に関する条約」にもとづいて世界文化遺産に登録されたもののうち京都を中心に関西圏にあるものについて、特に下鴨神社・上賀茂神社・慈照寺など大学キャンパス近辺にあるものに関しては実見も実施しながら、その概要の紹介を通じて京都の文化に関する理解を深める。また、条約の理念や目的、世界遺産の登録要件、文化財を世界遺産に登録する目的と意義について、国内の文化財保護法との関連や地元住民や行政が直面している保全と活用の問題点なども視野に入れながら考察する。	
	歴史地理学	心理学や文化人類学の研究成果に関する積極的な紹介を交えながら、人文主義地理学の観点からの歴史地理学の研究史、歴史時代の地理的行動とその結果としての地理的空間を研究するための方法論、この方法論にもとづくフィールドワークの進め方について理解する。特に文化・民俗・環境に焦点を当て、私たちが祖先がどのように環境を知覚し、行動を起こし、環境と共存してきたのかを知ることによって、古代から現代にいたる人間集団の環境への接し方を総合的に理解し、さらに未来の人間と環境の関わりについて考察するための視座を獲得する。	
	日本文化科目		

京都の歴史	京都とその周辺に位置する地域との関わり、また京都で暮らした多様な人びとの生活と社会関係について、京都市内で発掘された遺跡や残された様々な史料、関連する文献などを通じて学ぶことによって、古代から近代にいたる京都の通史と、地域に対する理解を培う。文献・史料や地図情報をもとに、現地を歩いて体感するフィールドワークも実施しながら、京都の都市空間がどのように変化していったのかを知り、その歴史的な連続性と段階性を踏まえつつ、現代京都の都市空間とそこで継承されている文化が形成されてきた経緯を理解する。
日本民衆史	中央における政治と権力闘争を中心に歴史を綴るのではなく、労働者や女性といった生産者・被支配者に光を当てて歴史形成の主体として見直そうとする民衆史の方法論とその成立経緯ならびに問題点について学ぶ。とりわけ民衆史では、対象となる「歴史に埋もれた人々」に関する史料が少ないことから、数多くの断片的な資料を掘り起こし、過去を再構成することが重要となる。講義では、日本における民衆史のアプローチの事例紹介を通じて、この方法論を進める上での調査手順、またこれによって何が明らかになるのかを理解する。
日本文学史	日本文学史に関する基礎知識を習得した上で、作品の背景にある時代、社会、言語への理解、日本語を使って継続的に営まれてきた創造活動、さらには普遍的な人間の心理についての理解を深める。上代から近世までの主要な文学作品を講読しながら、その具体的な表現に触れ、日本文学の歴史的な展開や個々の時代の特色について学ぶとともに、文学ジャンルやその時代性、古今の文学の結びつき、東西文学の交流や相互影響、文学表現とそれを伝えるためのメディアとの関係など、日本文学の全体像を把握し、広く日本文化の本質とその担い手への洞察を養う。
漢文学	現代の日本語文は漢文（中国古典文）とは異なる言語でありながら、その影響を受けて成立している。講義では、中国文学・思想の特徴や、漢文が常態であった時代以降の日本文学における漢文学の受容の諸相などの基礎知識に加え、漢文を読む上で必要となる工具書や参考文献も紹介しながら、返り点、送り仮名の付いた漢文を正確に書き下し文にし、口語訳できるようになるための読解力を習得する。漢文法の基礎を習得しつつ漢文学の特質を理解するとともに、その伝統が日本文化に根強い影響を与えてきたことを再認識する。
口承文化論	人間の普遍的な営みとしての口伝えについて、伝説・昔話・噂話などの具体的なテーマを取り上げながら、その民俗性、歴史性、ならびに現代的な意義に加え、その研究方法について理解する。東北には地震や津波の恐怖を語り継いできた地域があったことから分かるとおり、現代日本においても口承文化はその重要性を保っている。講義では、主に日本国内で伝承されてきた民話を中心に、話の展開に一定の「型」を見出し、話型を利用してさらに多くの類話を収集し、比較研究する方法を学ぶとともに、語り手一人一人にとっての語りの重要性についても理解する。
書誌学	巻物や冊子など、さまざまな形態を備えるモノとしての書物について、主に和本を取り上げながら、紙を作る技術と書物の形態の関係、人々の読書への興味と印刷技術の発展といった時代の移り変わりや書物の変化の関係などについて学ぶ。実物および複製本・影印本などを用いながら、書物の成立・発展、印刷・製本・材質・形態、保管・分類といった側面に加え、書物がどのように流通し、どのように読まれたかといった側面についても理解し、書物のモノとしての価値と資料的価値をめぐって形成された文化について体系的に理解する。
古典文法	たんなる暗記の連続ではなく、具体的な古典作品を文学として味わいながら古典文法を理解していくことを通して、日本の古典文学を「正しく」読解するための文法知識を習得する。講義では、上代から近世までの具体的な文学作品の紹介を通じて、動詞・形容詞・形容動詞・助動詞・助詞などの様々な品詞の区別に関する基本的な認識にはじまり、それぞれの用法や敬語、ならびにそれらの変遷について理解することに加えて、文法史の基礎を学ぶことによって日本語の仕組みと変遷とを総合的・分析的に理解するための視野を習得する。
書道	文字、ならびに文字を書くという行為はたんなる意思伝達の手段としてではなく、そこには自己表現的な意義はもちろん、特定の文字にまつわる精神的な文化としての側面や、とりわけ東洋思想の具象化としての側面が内包されている。楷書、行書、草書、篆書、隸書の五書体による古典籍の臨書も交えながら、文字の筆法を習得することにとどまらず、「書」の歴史を概観し、東洋の文化において「書」がどのように捉えられ、扱われてきたのかも学ぶことによって、文字を書く行為そのものを見つめ直す視点の獲得を目的とする。

<p>専門講義・演習科目</p>	<p>日本文化科目</p>	<p>古文書解読</p>	<p>近世以前の日本史および日本文学研究においては、翻刻された史料集だけにとどまらず、くずし字で書かれた原本を広く読みこなす技能を習得することもきわめて重要である。講義では、主に江戸時代に作成された古文書・記録類、典籍などの版本などの写真版コピーを用いながら、日本における古文書を解読するための基礎的な知識と方法を学ぶ。旧字体、近世の古文書の形式、古文書に特徴的な表現・言い回しなど、必要な知識を学んだ上で、実際に演習形式で古文書を読み下していくことによって、古文書を解読する技能を習得する。</p>	
------------------	---------------	--------------	--	--

1 校地校舎図面

① 京都精華大学 都道府県内位置図（1 ページ）

2 出典

株式会社ゼンリン 他

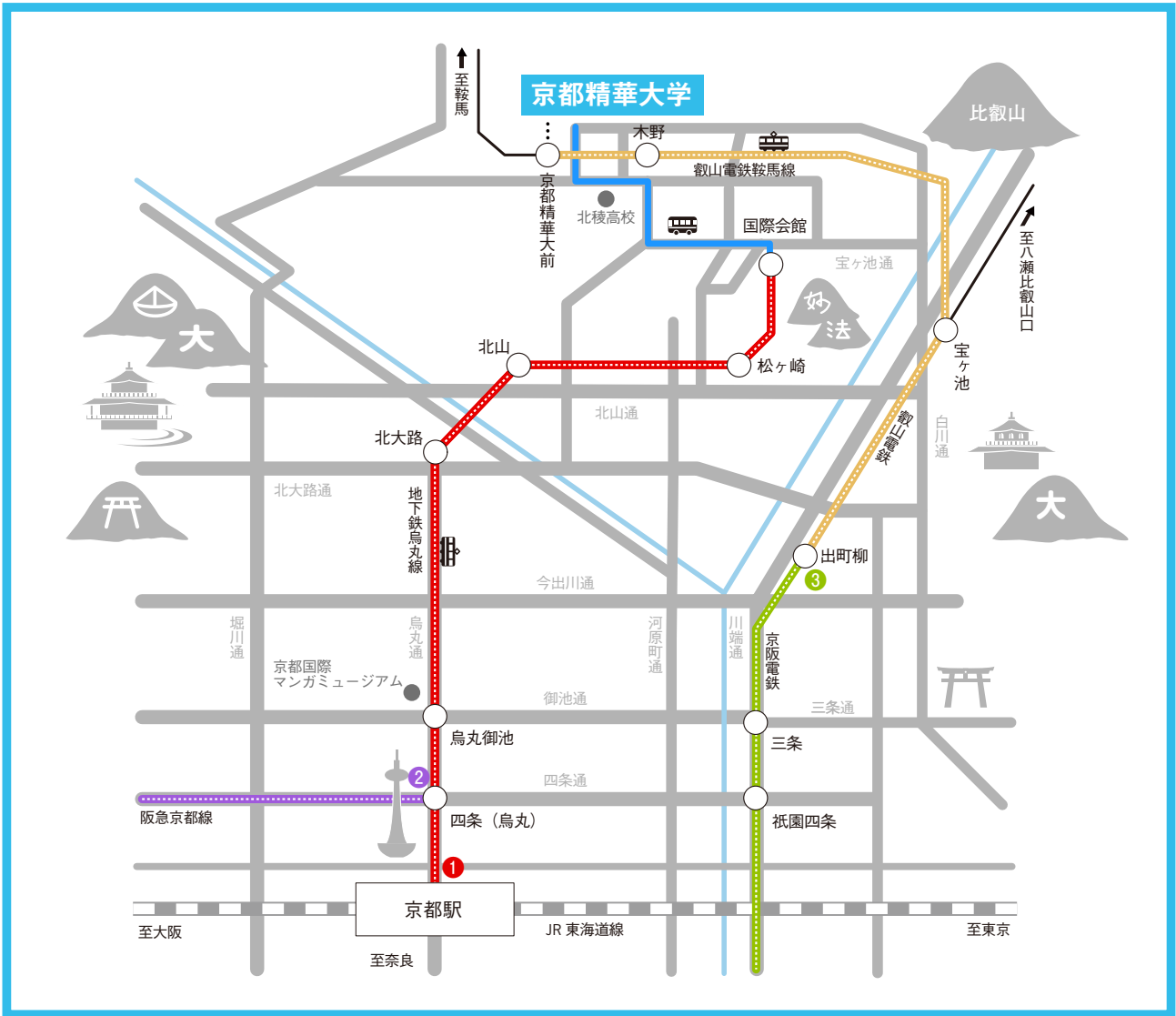
3 引用範囲

<https://www.google.com/maps/place/%E4%BA%AC%E9%83%BD%E7%B2%BE%E8%8F%AF%E5%A4%A7%E5%AD%A6/@35.0731108,135.4901855,10z/data=!4m5!3m4!1s0x6001a7ea867e8957:0xd35b16a5927f6837!8m2!3d35.0731108!4d135.7703369>

4 説明

京都精華大学 都道府県内位置図は「Google マップ」によって作成したものである。

②最寄り駅からの距離や交通機関



① 京都駅から



② 阪急沿線から



③ 京阪沿線から



京都精華大学



④ 京都精華大学 校舎平面図

- 一部メディア表現学部専用校舎
- 一部国際文化学部専用校舎
- 一部全学共用校舎

京都精華大学学則

第1章 総則

(目的)

第1条 本学は学校教育法および教育基本法の規定するところに従い、大学教育を施し、広く知識を授けるとともに、深奥な学問芸術を研究・教授し、よりよき社会人としての人間形成を行うことを目的とする。

(自己評価等)

第2条 本学は、教育研究水準の向上を図り、本学の目的および社会的使命を達成するため、本学における教育研究活動等の状況について自ら点検および評価を行い、その結果を公表する。

2 前項の点検および評価を行うため、委員会を設ける。

3 委員会に関する規程は、これを別に定める。

4 点検、評価の項目等については、別にこれを定める。

(学部、学科、入学定員および収容定員)

第3条 本学に次の学部・学科をおく。

芸術学部

造形学科

デザイン学部

イラスト学科

ビジュアルデザイン学科

プロダクトデザイン学科

建築学科

マンガ学部

マンガ学科

アニメーション学科

メディア表現学部

メディア表現学科

国際文化学部

人文学科

グローバルスタディーズ学科

2 前項の学部・学科の入学定員および収容定員は次のとおりとする。

学 部	学 科	入学定員	収容定員
芸術学部	造形学科	112 人	448 人
デザイン学部	イラスト学科	64 人	256 人
	ビジュアル デザイン学科	64 人	256 人
	プロダクト デザイン学科	72 人	288 人

	建築学科	56人	224人
マンガ学部	マンガ学科	232人	928人
	アニメーション 学科	80人	320人
メディア表現学部	メディア表現学科	168人	672人
国際文化学部	人文学科	160人	640人
	グローバルスタディーズ学 科	90人	360人

(人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的)

第3条の2 前条の学部・学科の人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的は次のとおりとする。

芸術学部

人間の多様性を理解した上で、幅広い視野から適切な表現方法を用いてコミュニケーションをとることができ、さらに芸術によって培われる専門性と創造力で人類社会の諸課題に取り組むことができる主体性をもった人間形成を目的とする。

造形学科

伝統的造形芸術の知識技法にとどまらず、多角的な観察と自立した思考力によって新たな表現を創造する能力と造形芸術を開拓できる資質を備えた人材の養成を行う。

デザイン学部

デザイン領域において高度な技法知識を修得し新たな可能性を探究すること、および自立した思考によってグローバル社会および地域社会に現実的に貢献するデザイナー・プランナーの資質を備えた、よりよき社会人としての人間形成を行うことを目的とする。

イラスト学科

デザインやアートといった多様なフィールドで展開が可能となるイラスト領域において、現実の社会に貢献できる資質を備えた人材の養成を行う。

ビジュアルデザイン学科

情報技術の発展によってその目的および手法が飛躍的に拡大した視覚デザインの領域において、現実の社会に貢献できる資質を備えた人材の養成を行う。

プロダクトデザイン学科

社会活動や生活に使用される道具、器具、装置などのデザインの領域において、現実の社会に貢献できる資質を備えた人材の養成を行う。

建築学科

環境、建築、居住空間などのデザイン・設計の領域において、現実の社会に貢献できる資質を備えた人材の養成を目的とする。

マンガ学部

マンガ文化の再評価とともに重要視されるマンガやアニメーションの制作と理論について

多角的な教育研究を行い新たな可能性を探究すること、およびマンガ文化の継承と発展に貢献する資質を備えた、よりよき社会人としての人間形成を行うことを目的とする。

マンガ学科

マンガの作品史、表現などについての理論および技法の修得にとどまらず、実践によってマンガ表現の発展に貢献できる資質を備えた人材の養成を目的とする。

アニメーション学科

アニメーションの作品史、表現などについての理論および技法の修得にとどまらず、実践によってアニメーションの発展に貢献できる資質を備えた人材の養成を目的とする。

メディア表現学部

メディアと情報に関する広範な知識と専門的な表現技能を活用した豊かな人間性を育む文化表現を通して、コンテンツの制作やメディアの活用、新しいビジネスモデルの構想などによって次世代の産業界の発展に貢献する資質を備えた、人間形成を行うことを目的とする。

メディア表現学科

技術革新が進む人類社会において、急激に変化し続けるメディアと産業システムの動向をふまえたうえで、豊かな文化の発展にも寄与し、時代の先端を切り開くコンテンツ、メディア、新たなビジネスモデルを創造できる人材の養成を目的とする。

国際文化学部

アフリカ・アジアの文化、京都を中心とした日本の歴史や文化、そして世界の相関を理解し、現在の社会が抱える多様な課題の解決に貢献し、より良い共生社会の実現と世界の発展に寄与できる人間形成を行うことを目的とする。

人文学科

日本の「文学」、「歴史」、「社会」、「文化」を研究対象とし、日本を基点とした世界の文化と社会を多角的に捉え、課題の解決に貢献し、より良い共生社会の実現と世界の発展に寄与できる人材の養成を目的とする。

グローバルスタディーズ学科

著しい発展と同時に多様な課題を抱え、世界が注目するアフリカ・アジア地域に学びの場を重点化し、世界の新しい関係性や構造をグローバルな視点で捉え、課題の解決に貢献し、より良い共生社会の実現と世界の発展に寄与できる人材の養成を目的とする。

(大学院)

第4条 本学に大学院をおく。

2 大学院の学則は、別に定める。

(修業年限)

第5条 本学の修業年限は4年とする。ただし、8年を超えて在学することはできない。

2 学長が有益と認めるときは、他の大学等における修学期間を修業年限に算入することができる。ただし、修業年限については1年を超えて算入することはできない。

3 前項の規定は、外国の大学における修学期間についても準用する。

第2章 学年・学期および休業日

(学年)

第6条 本学の学年は4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

(学期および授業日数)

第7条 1学年の授業日数は定期試験の日数を含めて35週、210日を下らないものとし、1学年を分けて次の学期とする。

- ① 第1クォーター
- ② 第2クォーター
- ③ 第3クォーター
- ④ 第4クォーター

2 第1クォーター、第3クォーターの開始日はそれぞれ4月1日、10月1日とし、第2クォーター・第4クォーターの開始日は、学長が年度ごとに定める。

3 第2クォーター、第4クォーターの終了日はそれぞれ9月30日、3月31日とし、第1クォーター・第3クォーターの終了日は、学長が年度ごとに定める。

4 学長が必要と認めたときは、クォーターの開始日・終了日を変更することができる。

(休業日)

第8条 休業日は次のとおりとする。

- ① 日曜日
- ② 国民の祝日に関する法律(昭和23年法律第178号)に規定する休日
- ③ 春季・夏季・秋季・冬季の休業期間は、学長が年度ごとに定める。

2 学長が必要と認めたときは、臨時に休業日を設け、または休業日を変更することができる。

3 学長が必要と認めたときは、休業日に授業を行うことができる。

第3章 教育課程・単位・教育課程の履修

(教育課程の編成)

第9条 本学は、学部および学科等の教育上の目的を達成するために必要な授業科目を開設し、体系的に教育課程を編成する。

2 教育課程は、各授業科目を必修科目、選択科目に分け、これを各年次に配当して編成する。

(授業科目および単位数)

第10条 本学の授業科目および単位数は別表Ⅰ、別表Ⅱ、別表Ⅲ、および別表Ⅳのとおりとする。

2 学長は他学部および他学科が開設する授業科目の中から学部交流科目および学科交流科目を定め、当該学部および学科の卒業に必要な単位とすることができる。

(単位計算方法)

第11条 各授業科目の単位数は、1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって

構成することを標準とし、次の各号の基準によって計算する。

(1) 講義および演習については、15 時間から 30 時間までの範囲で定められた時間の授業をもって 1 単位とする。

(2) 実験、実習および実技等の授業については、30 時間から 45 時間までの範囲で定められた時間の授業をもって 1 単位とする。ただし、個人指導による実技の授業については、相応の時間の授業をもって 1 単位とする。

2 前項の規定にかかわらず、卒業論文、卒業制作、学外学修・個別課題学習等の授業科目および公の技能審査等による認定を受けた者については、これらの学修の成果を評価して適切な単位を授与することができる。

(教育課程の履修)

第 12 条 学生は原則として、別表 I に定める教育課程に従い、各年次に配当された授業科目を履修する。

2 学生が各年次所定の授業科目を履修しない場合、または所定の単位を修得しない場合は、次学年に進級することができない。進級に関する事項は別にこれを定める。

3 卒業に必要な単位は、124 単位とする。

(他の大学または短期大学における授業科目の履修等)

第 13 条 学長が教育上有益と認めるときは、学生が他の大学または短期大学の授業科目を履修することを認める。

2 前項の規定に基づいて学生が履修した単位は 30 単位を超えない範囲で、本学で修得したものとみなすことができる。

3 前項の規定は、学生が外国の大学に留学する場合に準用する。

4 留学に関する規程は、別にこれを定める。

(大学以外の教育施設等における学修)

第 14 条 学長が本学における教育水準を有し、教育上有益と認めるときは、学生が行う高等専門学校専攻科における学修、修業年限 2 年以上の専修学校専門課程における学修、文部科学大臣の認定を受けた技能審査の合格に係る学修を本学における履修とみなし単位を与えることができる。

2 前項により与えることができる単位数は 30 単位を超えないものとする。

(入学前の既習得単位等の認定)

第 15 条 学長が教育上有益と認めるときは、学生が本学入学前に大学または短期大学において履修した授業科目について修得した単位を本学で修得したものとみなすことができる。

2 学長が教育上有益と認めるときは、本学に入学する前に行った前条第 1 項に規定する学修を本学における授業科目の履修とみなし、単位を与えることができる。

3 前 2 項により修得したものとみなし、または与えることのできる単位数は、編入学の場合を除き、本学において修得した単位以外のものについては、あわせて 30 単位を超えないものとする。

(特別聴講生)

第 16 条 他の大学等の学生で、当該他の大学等との協議に基づき、本学において授業科目を履修することを志願する者については特別聴講生として、学長がこれを許可することがある。

2 特別聴講生に関する規程は本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(履修登録)

第 17 条 学生は履修しようとする授業科目を毎学期始め、所定の期日までに届け出なければならない。

2 学生は当該学部が定める登録上限単位数の範囲内で履修登録しなければならない。

(資格の取得)

第 18 条 本学に教育職員免許状授与の所要資格を得させるための課程をおく。

本学において教育職員免許状の取得を希望する者は、教育職員免許法および教育免許法施行規則に基づき、本学が別表Ⅱに定める教職および教科に関する専門科目を履修し、その単位を修得しなければならない。

本学における教育職員免許状の教科および種類は、以下の表に掲げるとおりとする。

学 部	学 科	免許状の種類(教科)
芸術学部	造形学科	中学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(工芸)
デザイン学部	イラスト学科	中学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(美術)
	ビジュアル デザイン学科	中学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(美術)
	プロダクト デザイン学科	中学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(工芸)
マンガ学部	マンガ学科	中学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(美術)
	アニメーション 学科	中学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(美術)
国際文化学部	人文学科	中学校教諭一種免許状(国語) 中学校教諭一種免許状(社会) 高等学校教諭一種免許状(国語) 高等学校教諭一種免許状(地理歴史) 高等学校教諭一種免許状(公民)
	グローバルスタ ディーズ学科	中学校教諭一種免許状(社会) 高等学校教諭一種免許状(公民)

--	--	--

2 図書館司書の資格を取得しようとする者は、図書館法および図書館法施行規則に基づき、本学が別表Ⅲに定める図書館司書課程に関する授業科目を履修し、その単位を修得しなければならない。図書館司書課程を設置する学部および学科は、以下の表に掲げるとおりとする。

学 部	学 科
芸術学部	造形学科
デザイン学部	イラスト学科
	ビジュアルデザイン学科
	プロダクトデザイン学科
マンガ学部	マンガ学科
	アニメーション学科
メディア表現学部	メディア表現学科
国際文化学部	人文学科
	グローバルスタディーズ学科

3 博物館学芸員の資格を取得しようとする者は、博物館法および博物館法施行規則に基づき、本学が別表Ⅳに定める図書館司書課程に関する授業科目を履修し、その単位を修得しなければならない。博物館学芸員課程を設置する学部および学科は、以下の表に掲げるとおりとする。

学 部	学 科
芸術学部	造形学科
デザイン学部	イラスト学科
	ビジュアルデザイン学科
	プロダクトデザイン学科
マンガ学部	マンガ学科
	アニメーション学科
メディア表現学部	メディア表現学科
国際文化学部	人文学科
	グローバルスタディーズ学科

第4章 教育課程修了の認定・単位の授与・卒業および称号

(教育課程修了の認定)

第19条 教育課程修了の認定は授業科目の試験、研究報告の成績を審査し、その結果に基づき、教授会の審議を経て学長が行う。

2 成績の評価はS(100点～90点)、A(89点～80点)、B(79点～70点)、C(69点～60点)、F(59点以下)、K(評価対象外)とし、S、A、B、Cをもって合格とする。

3 総合成績評価として GPA を用いる場合は、前項の成績評価の S を 4、A を 3、B を 2、C を 1、F および K を 0 の評点に置き換え、履修科目の単位数で乗じた点数の合計を、総履修科目単位数で除して算出する。

(単位の授与)

第 20 条 学長は、別表 I から IV に定める授業科目を履修した学生に対し、当該授業科目の試験および研究報告の成績を審査し、その結果に基づき、教授会の審議を経て、相当する数の単位を与える。

(卒業)

第 21 条 学長は本学の学部で 4 年以上在学し、第 12 条に規定する卒業に必要な単位を修得し、かつ学費等納入金について大学への諸債務を滞納していない者について、教授会の審議を経て卒業を認定する。

2 学長は卒業を認定した者に対し、学位記を授与する。

(学位の授与)

第 22 条 本学の芸術学部、デザイン学部およびマンガ学部を卒業した者に、学士(芸術)の学位を授与する。

2 本学のメディア表現学部を卒業した者に、学士(メディア表現)の学位を授与する。

3 本学の国際文化学部を卒業した者に、学士(文化)の学位を授与する。

第 5 章 入学・編入学・転入学・休学・復学・退学・転学・除籍および再入学

(入学)

第 23 条 本学の入学は学年の始めとする。

2 前項の規定にかかわらず、国際文化学部については、外国人留学生・帰国生徒の第 3 クォーターよりの入学を認めることができる。

(入学資格)

第 24 条 本学の第 1 年次に入学することのできる者は、次の各号のいずれかに該当する者でなければならない。

- ① 高等学校を卒業した者
- ② 通常の課程による 12 年の学校教育を修了した者(通常の課程以外の課程によりこれに相当する学校教育を修了した者を含む)
- ③ 外国において学校教育における 12 年の課程を修了した者、またはこれに準ずる者で文部科学大臣の指定した者
- ④ 文部科学大臣の指定した者
- ⑤ 文部科学大臣が高等学校の課程と同等の課程を有するものとして認定した在外教育施設の当該課程を修了した者
- ⑥ 大学入学資格検定規程により文部科学大臣の行う大学入学資格検定に合格した者
- ⑦ 相当の年齢に達し、高等学校を卒業した者と同等以上の学力があるものと本学が認めた者

(入学志願手続および合否判定)

第 25 条 入学を志願する者は、本学所定の出願書類に別表 V に定める入学検定料を添えて提出しなければならない。

2 提出の方法、時期、同時に提出すべき書類等については別に定める。

3 学長は入学を志願する者に対して入学試験を実施する。

4 学長は入学試験を受験した者に対して、教授会における合否判定の審議を経て、結果を通知する。

(入学手続金の納入および入学許可)

第 26 条 入学試験に合格した者は、学長が指定する期日までに所定の納付金を納入し、かつ必要書類を提出しなければならない。

2 学長は、前項の規定により所定の納付金を納入し、必要書類を提出した者に対して、入学を許可する。

(編入学)

第 27 条 本学の第 3 年次および第 2 年次に編入学を希望する者については、選考のうえ、学長はこれを許可することがある。

2 第 3 年次に編入学できる者は、次の各号のいずれかに該当する者とする。

① 大学を卒業した者、または大学に 2 年以上在学した者

② 短期大学または高等専門学校を卒業した者

③ 専修学校の専門課程を修了した者のうち、学校教育法第 132 条の規定により大学に編入学できる者

3 第 2 年次に編入学できる者は、次の各号のいずれかに該当する者とする。

① 大学に 1 年以上在学した者

② 短期大学または高等専門学校を卒業した者

4 前 2 項の規定により入学を許可された者がすでに履修した科目および単位の取扱いについては、別にこれを定める。

(転入学)

第 28 条 他の大学に 1 年以上在学してから、本学の学部転入学しようとする者について、選考のうえ、既に在学していた大学および履修した授業科目の内容と成績とを考慮して、学長は入学を許可することがある。

2 本条により入学を許可された者の修学年限は、他大学における在学年数が 1 年であった者は 3 年、2 年以上であった者は 2 年とし、それぞれ 6 年、4 年を超えて在学することはできない。

3 転入学を許可された者が既に履修した授業科目および単位の取扱いについては、別に定めるところによる。

(転学部、転学科)

第 28 条の 2 転学部および転学科に関する規程は、別にこれを定める。

(休学)

第 29 条 学生が疾病その他の事由によって 1 ヶ月以上就学することができないときは、保証人と連署のうえ、所定の様式により願い出て、休学することができる。

2 休学期間は 1 年以内とする。ただし、特別の理由がある場合は 1 年を限度として、休学期間の延長を認めることができる。

3 前項の定めに関わらず、学長が特別な理由があると認めるときは、休学期間を延長することができる。

4 休学の期間は通算して 4 年を超えることができない。

5 休学の期間は、第 5 条に定める修業年限および在学年限に算入しない。

6 休学期間中の学費は、1 クォーター 10,000 円、通年 40,000 円とし、納入等に関する規定は第 34 条による。

7 休学に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。(休学)

(復学)

第 30 条 休学者が復学しようとするときは、保証人連署のうえ、所定の様式により願い出て、学長の許可を得たうえ復学することができる。

2 復学は、学期の始めからとする。

3 復学に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(退学および転学)

第 31 条 疾病、その他の事由によって退学または転学しようとする者は、保証人連署のうえ、所定の様式により退学願または転学願を提出しなければならない。

2 退学および転学に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

3 懲戒による退学に関する規程は、第 50 条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(除籍)

第 32 条 学長は、学生が各号のいずれかに該当するときは、学生を除籍する。

① 第 5 条に規定する在学年限を超えた者

② 第 29 条第 2 項および第 3 項に規定する休学年限を超えた者

③ 所定の授業料等学費の納付を怠り、その督促を受けてもこれを納付しない者

④ 第 30 条の復学手続きのない者

⑤ 本学での就学の意思のない者

⑥ 本人が死亡したとき

⑦ その他、学長が相当の理由を認めた者

2 除籍に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(再入学)

第 33 条 退学または除籍となった者が、保証人連署のうえ、所定の様式により再入学を願い出たときは、教授会の審議を経て、学長がこれを許可することがある。

2 再入学を願い出ることのできる期間は、退学または除籍の日より 2 年以内とする。

3 再入学は学期の始めからとする。

4 再入学に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

第1節 入学検定料、入学金および授業料

(学費等納付金および手数料)

第34条 入学検定料、入学金および授業料は、別表Vの①のとおりとする。

2 前項に規定する既納の入学検定料、入学金および授業料等の学費は、原則として返還しない。

3 前項の規定にかかわらず、入学許可を得た者で、指定の期日までに入学手続の取り消しを願った者については、入学金またはこれに相当する金額を除く学費を返還する。

4 入学検定料以外の手数料については、別にこれを定める。

5 学費納入等に関する規定は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

第2節 職員組織および教授会

(職員組織)

第35条 本学に学長、副学長、教授、准教授、講師、助教、助手、事務職員、その他の職員をおく。

2 学長は本学則に定める職務を行い、所属職員を統督する。

3 副学長は、学長の職務を助ける。

4 教授、准教授、講師、助教、助手、事務職員、その他の職員の職務は、学校教育法、その他の法令および本学諸規程の定めるところによる。

(教授会)

第36条 本学の教育研究に関する事項を審議するために教授会をおく。

2 教授会は、これを分けて全学教授会と学部教授会とする。

3 教授会に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(全学教授会)

第36条の2 全学教授会は、学長、専任の教授・准教授および講師を構成員として、これを組織する。

2 全学教授会は、前項に定める者の他、必要に応じ他の教職員などの出席を求めることができる。

3 全学教授会は、次の各号に掲げる事項を審議する。

① 全学に関する重要事項

② 各学部間の連絡調整に関する事項

③ 全学共通の教育課程の編成に関する事項

④ 全学共通の授業科目の担当に関する事項

⑤ 教員の人事に関する事項

⑥ その他学長が必要と認める事項

(学部教授会)

第 36 条の 3 学部教授会は、各学部に所属する専任の教授・准教授および講師を構成員として、これを組織する。

2 学部教授会は、前項に定める者の他、必要に応じ他の教職員などの出席を求めることができる。

3 学部教授会は、学長が次に掲げる事項について決定を行うにあたり意見を述べるものとする。

① 学生の入学（編入学・転入学を含む）、卒業および課程の修了

② 学位の授与

③ 前 2 号に掲げるもののほか、教育研究に関する重要な事項で、学部教授会の意見を聴くことが必要なものとして学長が定めるもの

4 学部教授会は、前項に規定するもののほか、学長及び学部長（以下、この項において「学長等」という。）がつかさどる教育研究に関する事項について審議し、及び学長等の求めに応じ、意見を述べることができる。

第 3 節 聴講生・科目等履修生・委託生・研究生・外国人留学生・帰国生徒および社会人（聴講生）

第 37 条 本学の教職課程科目のうち「教職に関する専門科目」について聴講しようとする者があるときは、本学の教育・研究に支障のない場合に限り教授会の審議を経て、学長がこれを許可する。

2 聴講を許可する授業科目は 1 年度につき 12 単位とし、在学年限は 1 年以内とする。

3 学長は、特定の授業科目を履修し、その単位を修得した聴講生に対して、単位修得証明書を交付することができる。

4 聴講料等の納付金については、別表 V の③に定めるところによる。

5 聴講生に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

（科目等履修生）

第 38 条 本学の学生以外の者が本学の特定の授業科目を履修しようとするときは、本学の教育・研究に支障がない限り、教授会の審議を経て、学長がこれを許可することができる。

2 履修を許可する授業科目の単位数は、1 年度につき 12 単位とし、在学年限は 1 年以内とする。

3 学長は、特定の授業科目を履修し、その単位を修得した科目等履修生に対し、単位修得証明書を交付することができる。

4 科目等履修の納付金については、別表 V の④に定めるところによる。

5 科目等履修生に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

（委託生）

第 39 条 公共団体その他の機関から本学の特定の学科に修学を委託されたときは、選考のうえこれを受託し、委託の目的に合致する特定の授業科目の履修について、学長がこれを許可することができる。

2 前項の特定の授業科目の履修およびその単位は、委託者の希望を考慮し教授会の審議を経て、

学長が決定する。

3 学長は、特定の授業科目を聴講し、その単位を修得した委託生に対し、単位修得証明書を交付することができる。

4 委託生の委託料は、別表Vの①に規定する授業料相当額とする。

5 委託生に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(研究生)

第40条 本学の専任教員のもとで研究しようとする者があるときは、教授会の審議を経て、学長がこれを許可することがある。

2 研究生の授業料等の学費は、別表Vの⑤に定めるところによる。

3 研究生に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(外国人留学生)

第41条 勉学の目的をもった外国人で、第24条に定める要件を充足する者が本学への入学を志願するときは、選考のうえ、学長が入学を許可することがある。

2 外国人留学生に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(帰国生徒)

第42条 長期間の海外生活を経験した者で、第24条に定める要件を充足する者が本学への入学を志願するときは、選考のうえ、学長が入学を許可することがある。

2 帰国生徒に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(社会人)

第43条 社会的経験を有する者で、第24条に定める要件を充足する者が本学への入学を志願するときは、選考のうえ、学長が入学を許可することがある。

2 社会人に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

第4節 公開講座および履修証明プログラム

(公開講座)

第44条 本学に公開講座をおくことができる。

2 公開講座は、一般市民に対し本学の教育を公開し、学問・芸術の研究向上に資することを目的とする。

3 公開講座に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(履修証明プログラム)

第44条の2 本学に履修証明プログラムをおくことができる。

2 履修証明プログラムは、本学および他大学の学生以外の社会人等を対象として、体系的な知識、技術等の習得を目指す課程とする。

3 履修証明プログラムに関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

第5節 情報館

(情報館)

第 45 条 本学の情報館をおき、教育および研究活動に必要な図書、文献、画像、視聴覚資料および研究資料を収集管理し、教職員、学生および一般市民の利用に供する。

2 情報館に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

第 6 節 保健施設および学生寮

(保健施設)

第 46 条 本学に教職員および学生の保健衛生を管理するために、保健室をおく。

2 学生は、毎年定められた時期に健康診断を受けなければならない。

(学生寮)

第 47 条 本学に学生寮をおく。

2 学生寮に関する規程は、別にこれを定める。

第 7 節 育英奨学制度

(育英奨学制度)

第 48 条 本学に育英奨学制度を設ける。

2 育英奨学制度に関する規程は、別にこれを定める。

第 8 節 賞罰

(表彰)

第 49 条 学長は、品行・学業とも優秀で他の模範となる学生に対して、表彰を行うことがある。

(懲戒)

第 50 条 学長は学則または規則に違反し、その他学生の本分に背く行為のあった学生に対して、教授会の審議を経て懲戒する。

2 懲戒は訓告、停学および退学とする。

3 前項の退学は、次の各号のいずれかに該当する者に対して行う。

① 性行不良で改善の見込みがないと認められる者

② 正当の理由なく、出席が常でない者

③ 大学の秩序を乱し、その他学生の本分に背く者

4 学生の懲戒に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

附 則

第 1 項 この学則に定めるもののほか、学則の施行に関し、さらに必要な事項は別にこれを定める。

第 2 項 この学則は 1979(昭和 54)年 4 月 1 日から実施する。

第 3 項 1979(昭和 54)年度の美術学部造形学科・デザイン学科の総定員は第 4 条の規定にかか

ならず次のとおりとする。

1979(昭和54)年度

造形学科 120名

デザイン学科 120名

第4項 この学則は、1982(昭和57)年12月1日から実施する。

第5項 この学則は、1983(昭和58)年4月1日から実施する。

第6項 この学則は、1984(昭和59)年4月1日から実施する。

第7項 この学則は、1985(昭和60)年4月1日から実施する。

第8項 この学則は、1986(昭和61)年4月1日から実施する。

第9項 この学則は、1987(昭和62)年4月1日から実施する。

ただし、第4条の規定にかかわらず、1987(昭和62)年度から1995(平成7)年度までの間の入学定員は、次のとおりとする。

学部・学科等	入学定員
美術学部	人
造形学科	120
デザイン学科	120
計	240

第10項 この学則は、1988(昭和63)年4月1日から実施する。

第11項 この学則は、1989(平成元)年4月1日から実施する。

第12項 この学則は、1990(平成2)年4月1日から実施する。

第13項 この学則は、1991(平成3)年4月1日から実施する。

第18条に規定する人文学部における英語・中学校1種免許状、高等学校1種免許状を取得しようとする者は、1989(平成元)年4月入学者より必要単位を履修できるものとする。

2 第4条および附則第9項ただし書きの規定にかかわらず、1991(平成3)年度から1999(平成11)年度までの間の入学定員は、次のとおりとする。

学部・学科等	入学定員
美術学部	人
造形学科	150(1996(平成8)年度から1999(11)年度までは130人)
デザイン学科	150(1996(平成8)年度から1999(11)年度までは130人)
計	300(1996(平成8)年度から1999(11)年度までは260人)
人文学部	
人文学科	300
計	300

第14項 この学則は、1992(平成4)年4月1日から実施する。

ただし、第22条第1項については、1991(平成3)年12月1日より施行する。

第 15 項 この学則は、1993(平成 5)年 4 月 1 日から実施する。

この学則は、1993(平成 5)年 4 月 1 日入学者より適用する。1993(平成 5)年以前の入学者(1993(平成 5)年度美術学部編入生を含む)については、従来の第 12 条第 1 項別表 I を適用する。

第 16 項 この学則は、1994(平成 6)年 4 月 1 日から実施する。

第 17 項 この学則は、1996(平成 8)年 4 月 1 日から実施する。

2 ただし、第 4 条の規定にかかわらず、1996(平成 8)年度から 1999(平成 11)年度までの間の入学定員は、次のとおりとする。

学部・学科等	入学定員
美術学部	人
造形学科	150
デザイン学科	150
計	300

第 18 項 この学則は、1997(平成 9)年 4 月 1 日から実施する。

第 19 項 この学則は、2000(平成 12)年 4 月 1 日から実施する。

2 別表 I ①に規定する芸術学部教育課程については全学年一斉に移行し、1999(平成 11)年度以前入学者に対する移行・経過措置については、別にこれを定める。

3 第 4 条の規定にかかわらず、2000(平成 12)年度から 2003(平成 15)年までの間の入学定員は、次のとおりとする。

学部・学科等	入学定員			
	2000(平成 12)年度	2001(平成 13)年度	2002(平成 14)年度	2003(平成 15)年度
芸術学部	人	人	人	人
造形学科	150	145	140	135
デザイン学科	170	165	160	155
計	320	310	300	290
人文学部				
人文学科	248	236	224	212
計	248	236	224	212

第 20 項 この学則は、2001(平成 13)年 4 月 1 日から実施する。

ただし、第 18 条に規定する芸術学部マンガ学科における中学校教諭 1 種免許状(美術)および高等学校教諭 1 種免許状(美術)を取得しようとする者は、2000(平成 12)年 4 月入学者より必要単位を履修できるものとする。

また、人文学部環境社会学科において図書館司書の資格を取得しようとする者および芸術学部マンガ学科・人文学部環境社会学科において博物館学芸員の資格を取得しようとする者は、2000(平成 12)年 4 月入学者より必要単位を履修できるものとする。

第 21 項 この学則は、2003(平成 15)年 4 月 1 日から実施する。

ただし、人文学部人文学科は、改定後の学則第 3 条の規定にかかわらず、当該学科に在籍する者が当該学科に在籍しなくなるまでの間、存続するものとする。

また、改定後の学則第 4 条の規定にかかわらず、2003(平成 15)年度の人文学部社会メディア学科および文化表現学科の入学定員は、人文学部人文学科の臨時的定員の漸減計画による人数を継承し、以下のとおりとする。

学部・学科等	入学定員
人文学部	人
社会メディア学科	116
文化表現学科	96
計	212

第 22 項 この学則は、2004(平成 16)年 4 月 1 日から実施する。

ただし、人文学部社会メディア学科において第 18 条に規定する高等学校教諭 1 種免許状(公民)を取得しようとする者は、2003(平成 15)年 4 月入学者より必要単位を履修することができるものとする。

また、芸術学部造形学科・デザイン学科・マンガ学科、人文学部社会メディア学科・文化表現学科において図書館司書の資格を取得しようとする者、および人文学部社会メディア学科・文化表現学科において博物館学芸員の資格を取得しようとする者は、2003(平成 15)年 4 月入学者より必要単位を履修することができるものとする。

第 23 項 この学則は、2005(平成 17)年 4 月 1 日から実施する。

ただし、人文学部環境社会学科において第 18 条に規定する高等学校教諭 1 種免許状(公民)を取得しようとする者は、2004(平成 16)年 4 月入学者より必要単位を履修することができるものとする。

第 24 項 この学則は、2006(平成 18)年 4 月 1 日から実施する。

ただし、別表 I に規定する教育課程のうち、芸術学部基礎講義・演習科目、デザイン学部基礎講義・演習科目、マンガ学部基礎講義・演習科目、芸術学部専門講義科目、デザイン学部専門講義科目、デザイン学部建築学科専門教育科目の一部、マンガ学部専門講義科目については、芸術学部の 2005(平成 17)年 4 月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

第 25 項 この学則は、2007(平成 19)年 4 月 1 日から実施する。

ただし、別表 I に規定する教育課程のうち、デザイン学部建築学科専門教育科目の「身体空間演習」と「インテリア表現演習」については 2007(平成 19)年 4 月入学者より適用し、人文学部専門教育科目については 2005(平成 17)年 4 月入学者より適用し、それ以外については 2006(平成 18)年 4 月入学者より適用する。

第 26 項 この学則は、2008(平成 20)年 4 月 1 日から実施する。

ただし、別表 I に規定する教育課程のうち、芸術学部造形学科専門教育科目、デザイン学部基礎講義・演習科目、ビジュアルデザイン学科専門教育科目、マンガ学部基礎講義・演習科目、

専門講義科目、アニメーション学科専門教育科目の一部については2008(平成20)年4月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

また、第34条に規定する入学金は2009(平成21)年4月入学者より適用し、授業料は、2008(平成20)年4月入学者より適用する。

さらに、第29条第5項に規定する休学期間中の学費は、2008(平成20)年4月1日より在籍学生に一斉適用する。

第27項 この学則は、2009(平成21)年4月1日から実施する。

ただし、別表Iに規定する教育課程のうち、芸術学部基礎講義・演習科目の一部、専門講義科目、造形学科専門教育科目、素材表現学科専門教育科目の一部、デザイン学部基礎講義・演習科目の一部、ビジュアルデザイン学科専門教育科目の一部、プロダクトデザイン学科専門教育科目の一部、マンガ学部基礎講義・演習科目の一部、専門講義科目、マンガ学科専門教育科目、マンガプロデュース学科専門教育科目の一部、アニメーション学科専門教育科目については2009(平成21)年4月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

第28項 この学則は、2010(平成22)年4月1日から実施する。

ただし、別表Iに規定する教育課程のうち、芸術学部専門講義科目の一部、造形学科専門教育科目の一部、素材表現学科専門教育科目の一部、メディア造形学科専門教育科目の一部、デザイン学部専門講義科目、ビジュアルデザイン学科専門教育科目の一部、プロダクトデザイン学科専門教育科目の一部、建築学科専門教育科目の一部、マンガ学部マンガプロデュース学科専門教育科目、アニメーション学科専門教育科目、人文学部総合人文学科専門教育科目については2010(平成22)年4月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

第29項 この学則は、2011(平成23)年4月1日から実施する。

ただし、別表Iに規定する教育課程のうち、芸術学部専門講義科目の一部、造形学科専門教育科目の一部、素材表現学科専門教育科目の一部、メディア造形学科専門教育科目の一部、デザイン学部基礎講義・演習科目の一部、ビジュアルデザイン学科専門教育科目の一部、プロダクトデザイン学科専門教育科目の一部、建築学科専門教育科目の一部、マンガ学部基礎講義・演習科目・専門講義科目の一部、マンガ学科専門教育科目の一部、マンガプロデュース学科専門教育科目の一部、アニメーション学科専門教育科目の一部、人文学部総合人文学科専門教育科目については2011(平成23)年4月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

第30項 この学則は、2012(平成24)年4月1日より実施する。

ただし、別表Iに規定する教育課程のうち、芸術学部基礎講義・演習科目の一部、デザイン学部基礎講義・演習科目の一部、デザイン学部建築学科専門教育科目の一部、マンガ学部基礎講義・演習科目の一部、人文学部基礎教育科目の一部については2012(平成24)年4月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。また、芸術学部造形学科専門教育科目の一部

については2011(平成23)年と4月入学者についても適用する。その移行・経過措置は別に定める。

第31項 この学則は、2013(平成25)年4月1日より実施する。

ただし、別表Iに規定する教育課程のうち、芸術学部専門講義科目の一部、造形学科専門教育科目の一部、素材表現学科専門教育科目の一部、デザイン学部専門講義科目の一部、マンガ学部基礎講義・演習科目の一部、マンガ学部専門講義科目の一部、アニメーション学科専門教育科目の一部については2013(平成25)年4月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

第32項 この学則は、2014(平成26)年4月1日より実施する。ただし、別表Iに規程する教育課程のうち、芸術学部専門講義科目の一部については2014(平成26)年4月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

第33項 この学則は、2015(平成27)年4月1日から実施する。ただし、別表Iに規定する教育課程のうち、芸術学部専門講義科目の一部、造形学科専門教育科目の一部、素材表現学科専門教育科目の一部、メディア造形学科専門教育科目の一部、デザイン学部プロダクトデザイン学科専門教育科目の一部、建築学科専門教育科目の一部については2015(平成27)年4月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

第34項 この学則は、2016(平成28)年4月1日から実施する。ただし、第29条(休学)および別表Iに規定する教育課程のうち芸術学部、デザイン学部、マンガ学部、ポピュラーカルチャー学部の基礎講義演習科目の一部と人文学部総合人文学科専門教育科目の一部については2015(平成27)年4月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

第35項 この学則は、2017(平成29)年4月1日から実施する。ただし、別表Iに規定する教育課程のうち全学共通科目の一部、および芸術学部、デザイン学部、マンガ学部、ポピュラーカルチャー学部、人文学部の専門教育科目の一部については2016(平成28)年4月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

第36項 この学則は、2018(平成30)年4月1日から実施する。ただし、別表Iに規定する教育課程のうち全学共通科目の一部については2017(平成29)年4月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。また、人文学部の専門教育科目の一部については2015(平成27)年4月入学者より適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

第37項 この学則は、2019(平成31)年4月1日から実施する。ただし、別表Iに規定する教育課程のうち、デザイン学部建築学科専門教育科目の「プレゼンテーション演習2」については2015(平成27)年4月入学者より適用する。また、別表Vに規定する授業料については、2018(平成30)年4月以前入学者に対しても一斉に適用するものとする。

第38項 この学則は、2020(令和2)年4月1日から実施する。

第39項 この学則は、2021(令和3)年4月1日から実施する。

別表I 教育課程

①全学共通科目

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考	
				必修	選択	計		
全学部共通	全学科共通	共通教育科目					●共通教育科目から50単位以上必修	
		【導入プログラム】						
		フレッシュャーズ・キャンプ	1	1		1		
		クリエイティブ・ワークショップ	1	1		1		
		【表現科目】						
		コミュニケーションスキル1	1	1		1		
		コミュニケーションスキル2	1	1		1		
		アカデミックスキル1	1	1		1		
		アカデミックスキル2	1	1		1		
		アカデミックスキル3	3	1		1		
		アカデミックスキル4	3	1		1		
		デッサン1	1	1		1		
		デッサン2	1・2・3・4			1	1	
		デッサン3	1・2・3・4			1	1	
		デッサン4	1・2・3・4			1	1	
		グラフィックデザインソフトスキル	1	1			1	
		芸術学	1・2・3・4			2	2	
		美学概論	1・2・3・4			2	2	
		現代美術概論	1・2・3・4			2	2	
		美術史	1・2・3・4			2	2	
		日本美術史	1・2・3・4			2	2	
		東洋美術史	1・2・3・4			2	2	
		西洋美術史	1・2・3・4			2	2	
		工芸概論	1・2・3・4			2	2	
		デザイン論	1・2・3・4			2	2	
		素材論	1・2・3・4			2	2	
		音楽概論	1・2・3・4			2	2	
		ポピュラー音楽論	1・2・3・4			2	2	
		身体表現論	1・2・3・4			2	2	
		身体文化演習1	1・2・3・4			1	1	
		身体文化演習2	1・2・3・4			1	1	
		表現と社会	1・2・3・4			2	2	
		表現と倫理	1・2・3・4			2	2	
		表現と知的財産権	1・2・3・4			2	2	
		写真技法	1・2・3・4			1	1	
		【グローバル科目】						
		日本文化概論	2	1			1	●【グローバル科目】選択科目から母国語を日本語とするものは「英語1/英語2/英語3/英語4」4単位必修（母国語を日本語としないものは「日本語1/日本語2/日本語3/日本語4」4単位必修）
		英語1	1			1	1	
		英語2	1			1	1	
		英語3	1			1	1	
英語4	1			1	1			
日本語1	1			1	1			
日本語2	1			1	1			
日本語3	1			1	1			
日本語4	1			1	1			
Business English	2・3・4			1	1			
English discussion	2・3・4			1	1			
Effective presentation	2・3・4			1	1			

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考	
				必修	選択	計		
全 学 部 共 通	全 学 科 共 通	English for studying abroad	2・3・4		1	1		
		中国語1	1・2・3・4		1	1		
		中国語2	1・2・3・4		1	1		
		韓国語1	1・2・3・4		1	1		
		韓国語2	1・2・3・4		1	1		
		フランス語1	1・2・3・4		1	1		
		フランス語2	1・2・3・4		1	1		
		タイ語	1・2・3・4		1	1		
		ベトナム語	1・2・3・4		1	1		
		インドネシア語	1・2・3・4		1	1		
		スワヒリ語	1・2・3・4		1	1		
		ドイツ語	1・2・3・4		1	1		
		スペイン語	1・2・3・4		1	1		
		イタリア語	1・2・3・4		1	1		
		サステナビリティと社会	1・2・3・4		2	2		
		現代社会の諸問題	1・2・3・4		2	2		
		海外ショートプログラム入門	1・2・3・4		2	2		
		世界と食	1・2・3・4		2	2		
		日本語学概論	1・2・3・4		2	2		
		言語学	1・2・3・4		2	2		
		【リベラルアーツ科目】						
		自由論		1	1		1	
		シティズンシップとダイバーシティ		1	1		1	
		創造的思考法		1	1		1	
		情報と倫理		1	1		1	
		人権と教育		2	1		1	
		グローバル化と社会		2	1		1	
		障害学		2・3・4		2	2	
		哲学入門		1・2・3・4		2	2	
		政治学		1・2・3・4		2	2	
		法学		1・2・3・4		2	2	
		日本国憲法		1・2・3・4		2	2	
		物語論		1・2・3・4		2	2	
		考古学		1・2・3・4		2	2	
		民俗学		1・2・3・4		2	2	
		情報科学概論		1	1		1	
		データサイエンス入門		2	1		1	
		統計的思考法		1・2・3・4		2	2	
		プログラミング1		1・2・3・4		1	1	
		プログラミング2		1・2・3・4		1	1	
		プログラミング3		2・3・4		1	1	
		プログラミング4		2・3・4		1	1	
		情報テクノロジー1		1・2・3・4		2	2	
		情報テクノロジー2		1・2・3・4		2	2	
		人類と人工知能		1・2・3・4		2	2	
		教職コンピューター入門		1・2・3・4		2	2	
		自然科学概論		1・2・3・4		2	2	
科学史		1・2・3・4		2	2			
生物学		1・2・3・4		2	2			
数学的思考法		1・2・3・4		2	2			

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考	
				必修	選択	計		
全 学 部 共 通	全 学 科 共 通	行動心理学	1・2・3・4		2	2	●【社会実践力育成プログラム】選択科目から4単位以上必修	
		スポーツ実習1	1・2・3・4		1	1		
		スポーツ実習2	1・2・3・4		1	1		
		【社会実践力育成プログラム】						
		大学連携プログラム	2・3・4		2	2		
		インターンシップ1	2・3・4		2	2		
		インターンシップ2	2・3・4		2	2		
		海外ショートプログラム	1・2・3・4		2	2		
		国内ショートプログラム	1・2・3・4		2	2		
		産学公連携PBLプログラム1	2・3・4		2	2		
		産学公連携PBLプログラム2	2・3・4		2	2		
		【キャリア科目】						
		キャリア1	1	1		1		
		キャリア2	2・3・4		1	1		
		キャリア3	3・4		1	1		
		職業研究	1・2・3・4		2	2		
		ベンチャー・ビジネス論	1・2・3・4		1	1		
		スポーツとビジネス	1・2・3・4		1	1		
		表現活動と経済	1・2・3・4		1	1		
		クリエイティブの現場	1・2・3・4		2	2		
		日本の企業文化研究	1・2・3・4		1	1		
		ポートフォリオ実習1	1・2・3・4		1	1		
		ポートフォリオ実習2	1・2・3・4		1	1		
		コミュニケーション実践演習	1・2・3・4		1	1		
		【マイナー科目】						
		国際文化概論1	2・3・4		1	1	●【マイナー科目】から10単位以上必修	
		国際文化史1	2・3・4		1	1		
		国際文化リテラシー1	2・3・4		2	2		
		国際文化リテラシー2	2・3・4		2	2		
		国際文化特講1	2・3・4		2	2		
		国際文化特講2	2・3・4		2	2		
		メディア表現概論1	2・3・4		1	1		
		メディア表現史1	2・3・4		1	1		
		メディア表現リテラシー1	2・3・4		2	2		
		メディア表現リテラシー2	2・3・4		2	2		
		メディア表現特講1	2・3・4		2	2		
		メディア表現特講2	2・3・4		2	2		
		美術概論1	2・3・4		1	1		
		美術史1	2・3・4		1	1		
		美術リテラシー1	2・3・4		2	2		
		美術リテラシー2	2・3・4		2	2		
		美術特講1	2・3・4		2	2		
		美術特講2	2・3・4		2	2		
デザイン概論1	2・3・4		1	1				
デザイン史1	2・3・4		1	1				
デザインリテラシー1	2・3・4		2	2				
デザインリテラシー2	2・3・4		2	2				
デザイン特講1	2・3・4		2	2				
デザイン特講2	2・3・4		2	2				
マンガ概論1	2・3・4		1	1				

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
全学部 共通	全学科 共通	マンガ史 1	2・3・4		1	1	
		マンガリテラシー 1	2・3・4		2	2	
		マンガリテラシー 2	2・3・4		2	2	
		マンガ特講 1	2・3・4		2	2	
		マンガ特講 2	2・3・4		2	2	
		和の伝統文化論	1・2・3・4		1	1	
		京都のまちづくり	2・3・4		1	1	
		京都の伝統工芸講座 1	2・3・4		2	2	
		京都の伝統工芸講座 2	2・3・4		2	2	
		京都の習俗	2・3・4		2	2	
		京都の伝統産業実習	2・3・4		2	2	
		ファイナンス論	1・2・3・4		1	1	
		マーケティング論	2・3・4		1	1	
		ビジネスモデル論	2・3・4		2	2	
		イノベーション論	2・3・4		2	2	
		ソーシャルビジネス演習 1	3・4		2	2	
		ソーシャルビジネス演習 2	3・4		2	2	
		アフリカ・アジア概論	1・2・3・4		1	1	
		アフリカ・アジア史	2・3・4		1	1	
		アフリカ・アジアリテラシー 1	2・3・4		2	2	
		アフリカ・アジアリテラシー 2	2・3・4		2	2	
		アフリカ・アジア特講 1	2・3・4		2	2	
		アフリカ・アジア特講 2	2・3・4		2	2	
		日本事情理解	1・2・3・4		1	1	
		言語と心理	2・3・4		1	1	
		言語と社会	2・3・4		2	2	
		日本語学	2・3・4		2	2	
		日本語教育演習 1	3・4		2	2	
		日本語教育演習 2	3・4		2	2	

別表I 教育課程

②国際文化学部

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考	
				必修	選択	計		
国際文化学部	人文学科	専門演習科目					●人文学科 74単位以上必修	
		【基礎演習科目】						
		基礎演習1	1	2		2		
		基礎演習2	1	2		2		
		基礎演習3	1	2		2		
		基礎演習4	1	2		2		
		基礎演習5	2	2		2		
		基礎演習6	2	2		2		
		【応用演習科目】						
		応用演習1	2	2		2		
		応用演習2	2	2		2		
		応用演習3	3	2		2		
		応用演習4	3	2		2		
		応用演習5	3	2		2		
		応用演習6	3	2		2		
		【卒業研究演習科目】						
		卒業研究演習1	4	2		2		
		卒業研究演習2	4	2		2		
		卒業研究演習3	4	2		2		
		卒業論文	4	2		2		
		卒業発表	4	2		2		
		専門講義・演習・実習科目						
		【国際文化基礎科目】						
		国際文化概論1	1	1		1		
		国際文化概論2	1	1		1		
		国際文化史1	1	1		1		
		国際文化史2	1	1		1		
		国際文化リテラシー1	1・2・3・4			2		
		国際文化リテラシー2	1・2・3・4			2		
		国際文化特講1	2・3・4			2		
		国際文化特講2	2・3・4			2		
		【専攻基盤科目】						
		文学概論	2・3・4			2		
		日本文学研究1	2・3・4			2		
		日本文学研究2	2・3・4			2		
		歴史学概論	2・3・4			2		
		日本史研究1	2・3・4			2		
		日本史研究2	2・3・4			2		
		現代社会論	2・3・4			2		
		社会研究1	2・3・4			2		
		社会研究2	2・3・4			2		
		日本文化論	2・3・4			2		
		日本文化研究1	2・3・4			2		
		日本文化研究2	2・3・4			2		
		【学科講義・演習科目】						
		講読演習1	2	2		2		
		講読演習2	3	2		2		
		長期フィールドワーク1	3	2		2		
		長期フィールドワーク2	3	2		2		
		長期フィールドワーク3	3	2		2		
		哲学概論	1・2・3・4			2		
		倫理学	1・2・3・4			2		
		心理学	1・2・3・4			2		
		宗教学	1・2・3・4			2		
		【文学講義科目】						
		日本語学特講	2・3・4			2		
		漢文学	2・3・4			2		
口承文化論	2・3・4			2				
古典文法	2・3・4			2				
書誌学	2・3・4			2				
書道	2・3・4			2				
日本文学史	2・3・4			2				
批評理論	2・3・4			2				
世界の文学1	2・3・4			2				

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
国際文化学部	人文学科	世界の文学 2	2・3・4		2	2	
		【歴史講義科目】					
		古文書解読	2・3・4		2	2	
		日本史	2・3・4		2	2	
		歴史地理学	2・3・4		2	2	
		京都の歴史	2・3・4		2	2	
		日本民衆史	2・3・4		2	2	
		日本地域史	2・3・4		2	2	
		日本社会史	2・3・4		2	2	
		日本・アジア関係史	2・3・4		2	2	
		西洋史	2・3・4		2	2	
		東洋史	2・3・4		2	2	
		【社会講義科目】					
		社会学	2・3・4		2	2	
		社会調査法	2・3・4		2	2	
		ジェンダー論	2・3・4		2	2	
		社会思想史	2・3・4		2	2	
		経済学	2・3・4		2	2	
		自然地理学	2・3・4		2	2	
		NGO論	2・3・4		2	2	
		地球環境学概論 1	2・3・4		2	2	
		地球環境学概論 2	3・4		2	2	
		地球環境学概論 3	3・4		2	2	
		人間の安全保障	2・3・4		2	2	
		市民社会論	2・3・4		2	2	
		平和学	2・3・4		2	2	
		エイジング研究概論	3・4		2	2	
		子ども学概論	3・4		2	2	
		先住民民族研究	2・3・4		2	2	
		国際開発論	2・3・4		2	2	
		【日本文化講義科目】					
		文化社会学	2・3・4		2	2	
		文化政策論	2・3・4		2	2	
		日本の文化遺産	2・3・4		2	2	
		観光学総論	2・3・4		2	2	
		民芸論	2・3・4		2	2	
		日本の現代文化	2・3・4		2	2	
		日本芸能史	2・3・4		2	2	
		日本の風土	2・3・4		2	2	
		日本思想史	2・3・4		2	2	
		アイヌ文化論	2・3・4		2	2	
		南島文化論	2・3・4		2	2	
		【地域研究科目】					
		地域研究入門	2・3・4		2	2	
		アフリカ地域研究 1	2・3・4		2	2	
		アフリカ地域研究 2	2・3・4		2	2	
		アジア地域研究 1	2・3・4		2	2	
		アジア地域研究 2	2・3・4		2	2	
		大洋州地域研究	2・3・4		2	2	
		アメリカ地域研究 1	2・3・4		2	2	
		アメリカ地域研究 2	2・3・4		2	2	
		欧州地域研究	2・3・4		2	2	
		世界の宗教	2・3・4		2	2	
		アフリカ・アジア関係論	2・3・4		2	2	
		グローバル・ビジネス論	2・3・4		2	2	
		グローバル化とメディア	2・3・4		2	2	
		【世界文化科目】					
		世界文化遺産	2・3・4		2	2	
		アフリカ美術	2・3・4		2	2	
		マテリアル・カルチャー概論	2・3・4		2	2	
		比較服飾文化論	2・3・4		2	2	
比較建築文化論	2・3・4		2	2			
民族音楽論	2・3・4		2	2			

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考	
				必修	選択	計		
国際文化学部	グローバルスタディーズ学科	専門演習科目					●グローバルスタディーズ学科 74単位以上必修	
		【基礎演習科目】						
		グローバルゼミ	1	2		2		
		海外短期フィールドワーク	1	2		2		
		基礎演習1	1	2		2		
		基礎演習2	1	2		2		
		基礎演習3	2	2		2		
		基礎演習4	2	2		2		
		【応用演習科目】						
		応用演習1	2	2		2		
		応用演習2	2	2		2		
		応用演習3	3	2		2		
		応用演習4	3	2		2		
		応用演習5	3	2		2		
		応用演習6	3	2		2		
		【卒業研究演習科目】						
		卒業研究演習1	4	2		2		
		卒業研究演習2	4	2		2		
		卒業研究演習3	4	2		2		
		卒業論文	4	2		2		
		卒業発表	4	2		2		
		専門講義・演習科目						
		【国際文化基礎科目】						
		国際文化概論1	1	1		1		
		国際文化概論2	1	1		1		
		国際文化史1	1	1		1		
		国際文化史2	1	1		1		
		国際文化リテラシー1	1・2・3・4		2	2		
		国際文化リテラシー2	1・2・3・4		2	2		
		国際文化特講1	2・3・4		2	2		
		国際文化特講2	2・3・4		2	2		
		【フィールドワーク科目】						
		Business English	2・3・4		1	1		
		English discussion	2・3・4		1	1		
		Effective presentation	2・3・4		1	1		
		English for studying abroad	2・3・4		1	1		
		フランス語圏事情理解	2・3・4		1	1		
		フランス語圏文化理解	2・3・4		1	1		
		フランス語圏経済理解	2・3・4		1	1		
		フランス語圏のメディア	2・3・4		1	1		
		フィールドワーク入門	2	2		2		
		フィールドワーク方法論	2	2		2		
		海外長期フィールドワーク1	3	2		2		
		海外長期フィールドワーク2	3	2		2		
		海外長期フィールドワーク3	3	2		2		
		海外長期フィールドワーク4	3	2		2		
		海外長期フィールドワーク5	3	2		2		
海外長期フィールドワーク6	3	2		2				
【地域研究科目】								
地域研究入門	2・3・4		2	2				
地域研究特講	2・3・4		2	2				
アフリカ地域研究1	2・3・4		2	2				
アフリカ地域研究2	2・3・4		2	2				
アジア地域研究1	2・3・4		2	2				
アジア地域研究2	2・3・4		2	2				
アメリカ地域研究1	2・3・4		2	2				
アメリカ地域研究2	2・3・4		2	2				
大洋州地域研究	2・3・4		2	2				
欧州地域研究	2・3・4		2	2				
【グローバル関係科目】								
グローバル関係概論	2・3・4		2	2				
グローバルヒストリー概論	2・3・4		2	2				
グローバルヒストリー特講	2・3・4		2	2				
多国籍企業論	2・3・4		2	2				
社会運動論	2・3・4		2	2				
世界の宗教	2・3・4		2	2				

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考	
				必修	選択	計		
国際文化学部	グローバルスタディーズ学科	アフリカ・アジア関係論	2・3・4		2	2		
		国際政治学	2・3・4		2	2		
		国際社会の法秩序	2・3・4		2	2		
		人口動態論	3・4		2	2		
		人口政策論	3・4		2	2		
		比較社会学	2・3・4		2	2		
		【グローバル共生社会科目】						
		先住民研究	2・3・4		2	2		
		ポストコロニアル概論	2・3・4		2	2		
		国際開発論	2・3・4		2	2		
		マイノリティ研究概論	2・3・4		2	2		
		グローバル・ビジネス論	2・3・4		2	2		
		グローバル化とメディア	2・3・4		2	2		
		エイジング研究概論	3・4		2	2		
		子ども学概論	3・4		2	2		
		地球環境学概論1	2・3・4		2	2		
		地球環境学概論2	3・4		2	2		
		地球環境学概論3	3・4		2	2		
		NGO論	2・3・4		2	2		
		平和学	2・3・4		2	2		
		市民社会論	2・3・4		2	2		
		人間の安全保障	2・3・4		2	2		
		【グローバル文化科目】						
		観光学総論	2・3・4		2	2		
		世界の文学1	2・3・4		2	2		
		世界の文学2	2・3・4		2	2		
		世界文化遺産	2・3・4		2	2		
		アフリカ美術	2・3・4		2	2		
		マテリアル・カルチャー概論	2・3・4		2	2		
		民族音楽論	2・3・4		2	2		
		比較服飾文化論	2・3・4		2	2		
		比較建築文化論	2・3・4		2	2		
		【学科基礎講義科目】						
		哲学概論	1・2・3・4		2	2		
		倫理学	1・2・3・4		2	2		
		心理学	1・2・3・4		2	2		
		社会学	2・3・4		2	2		
		社会調査法	2・3・4		2	2		
		経済学	2・3・4		2	2		
		批評理論	2・3・4		2	2		
		ジェンダー論	2・3・4		2	2		
		宗教学	2・3・4		2	2		
		社会思想史	2・3・4		2	2		
		自然地理学	2・3・4		2	2		
		文化政策論	2・3・4		2	2		
		文化社会学	2・3・4		2	2		
		西洋史	2・3・4		2	2		
		東洋史	2・3・4		2	2		
		【日本文化科目】						
		日本史	2・3・4		2	2		
日本地域史	2・3・4		2	2				
日本社会史	2・3・4		2	2				
日本・アジア関係史	2・3・4		2	2				
日本の文化遺産	2・3・4		2	2				
歴史地理学	2・3・4		2	2				
京都の歴史	2・3・4		2	2				
日本民衆史	2・3・4		2	2				
日本文学史	2・3・4		2	2				
漢文学	2・3・4		2	2				
口承文化論	2・3・4		2	2				
書誌学	2・3・4		2	2				
古典文法	2・3・4		2	2				
書道	2・3・4		2	2				
古文書解読	2・3・4		2	2				

別表I 教育課程

③メディア表現学部

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考	
				必修	選択	計		
メディア表現学部	メディア表現学科	専門実習科目					●メディア表現学科 74単位以上必修	
		【基礎実習科目】						
		基礎実習1	1	2		2		
		基礎実習2	1	2		2		
		基礎実習3	1	2		2		
		基礎実習4	1	2		2		
		基礎実習5	2	2		2		
		基礎実習6	2	2		2		
		【応用実習科目】						
		応用実習1	2	2		2		
		応用実習2	2	2		2		
		応用実習3	3	2		2		
		応用実習4	3	2		2		
		社会実践実習1	3	1		1		
		社会実践実習2	3	1		1		
		社会実践実習3	3	1		1		
		社会実践実習4	3	1		1		
		応用実習5	3	2		2		
		応用実習6	3	2		2		
		【卒業実習科目】						
		卒業研究実習1	4	2		2		
		卒業研究実習2	4	2		2		
		卒業研究実習3	4	2		2		
		卒業論文・卒業制作	4	2		2		
		卒業展示	4	2		2		
		専門講義・演習・実習科目						
		【メディア表現基盤科目】						
		メディア表現概論1	1	1		1		
		メディア表現概論2	1	1		1		
		メディア表現史1	1	1		1		
		メディア表現史2	1	1		1		
		メディア表現リテラシー1	1・2・3・4		2	2		
		メディア表現リテラシー2	1・2・3・4		2	2		
		メディア表現特講1	2・3・4		2	2		
		メディア表現特講2	2・3・4		2	2		
		基礎演習1	2・3・4		1	1		
		基礎演習2	2・3・4		1	1		
		基礎演習3	2・3・4		1	1		
		基礎演習4	2・3・4		1	1		
		基礎演習5	3・4		1	1		
		基礎演習6	3・4		1	1		
		基礎演習7	2・3・4		1	1		
		基礎演習8	2・3・4		1	1		
		基礎演習9	2・3・4		1	1		
		基礎演習10	2・3・4		1	1		
		基礎演習11	3・4		1	1		
基礎演習12	3・4		1	1				
基礎演習13	2・3・4		1	1				
基礎演習14	2・3・4		1	1				
基礎演習15	2・3・4		1	1				
基礎演習16	2・3・4		1	1				
基礎演習17	3・4		1	1				
基礎演習18	3・4		1	1				
基礎演習19	2・3・4		1	1				
基礎演習20	2・3・4		1	1				
基礎演習21	2・3・4		1	1				
基礎演習22	2・3・4		1	1				
応用演習1	2・3・4		1	1				
応用演習2	2・3・4		1	1				
応用演習3	3・4		1	1				
応用演習4	3・4		1	1				
応用演習5	3・4		1	1				
応用演習6	3・4		1	1				
応用演習7	2・3・4		1	1				

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考	
				必修	選択	計		
メディア表現学部	メディア表現学科	応用演習8	2・3・4		1	1		
		応用演習9	3・4		1	1		
		応用演習10	3・4		1	1		
		応用演習11	3・4		1	1		
		応用演習12	3・4		1	1		
		応用演習13	2・3・4		1	1		
		応用演習14	2・3・4		1	1		
		応用演習15	3・4		1	1		
		応用演習16	3・4		1	1		
		応用演習17	3・4		1	1		
		応用演習18	3・4		1	1		
		応用演習19	3・4		1	1		
		応用演習20	3・4		1	1		
		応用演習21	3・4		1	1		
		応用演習22	3・4		1	1		
		特別演習1	3・4		1	1		
		特別演習2	3・4		1	1		
		特別演習3	3・4		1	1		
		特別演習4	3・4		1	1		
		特別演習5	3・4		1	1		
		特別演習6	3・4		1	1		
		特別演習7	3・4		1	1		
		特別演習8	3・4		1	1		
		特別演習9	3・4		1	1		
		特別演習10	3・4		1	1		
		特別演習11	3・4		1	1		
		特別演習12	3・4		1	1		
		特別演習13	3・4		1	1		
		特別演習14	3・4		1	1		
		【音楽表現講義科目】						
			音楽研究概論	1・2・3・4		1	1	
			音楽理論1	2・3・4		1	1	
			音楽理論2	2・3・4		1	1	
			音響工学1	2・3・4		1	1	
			音響工学2	2・3・4		1	1	
			音楽分析1	2・3・4		1	1	
			音楽分析2	2・3・4		1	1	
			音響技術論1	2・3・4		1	1	
			音響技術論2	2・3・4		1	1	
		【イメージ表現講義科目】						
			映像研究概論	1・2・3・4		1	1	
			映像理論1	2・3・4		1	1	
			映像理論2	2・3・4		1	1	
			画像工学1	2・3・4		1	1	
			画像工学2	2・3・4		1	1	
			映像分析1	2・3・4		1	1	
			映像分析2	2・3・4		1	1	
			映像技術論1	2・3・4		1	1	
			映像技術論2	2・3・4		1	1	
		【メディア情報講義科目】						
	メディア研究概論	1・2・3・4		1	1			
	メディアデザイン理論1	2・3・4		1	1			
	メディアデザイン理論2	2・3・4		1	1			
	メディア工学1	2・3・4		1	1			
	メディア工学2	2・3・4		1	1			
	メディア分析1	2・3・4		1	1			
	メディア分析2	2・3・4		1	1			
	メディア技術論1	2・3・4		1	1			
	メディア技術論2	2・3・4		1	1			
【学科共通講義科目】								
	コンテンツビジネス1	2・3・4		1	1			
	コンテンツビジネス2	2・3・4		1	1			
	コンテンツビジネス3	2・3・4		1	1			
	サウンドスケープ論	1・2・3・4		2	2			
	メディアアート論	1・2・3・4		2	2			
	ゲームデザイン論	1・2・3・4		2	2			

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
メディア表現学部	メディア表現学科	ウェブデザイン論	1・2・3・4		2	2	
		コンピュータ&ネットワーク論	1・2・3・4		2	2	
		サブカルチャーとメディア	1・2・3・4		2	2	
		文化産業論	1・2・3・4		2	2	
		文化政策論	1・2・3・4		2	2	
		広告メディア論	1・2・3・4		2	2	
		教育メディア論	1・2・3・4		2	2	
		メディアミックス論	2・3・4		2	2	
		ソーシャルメディア論	2・3・4		2	2	

別表I 教育課程

④芸術学部

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考	
				必修	選択	計		
芸術学部	造形学科	【芸術学部必修科目】					●造形学科 74単位以上必修	
		美術概論1	1	1		1		
		美術概論2	1	1		1		
		美術史1	1	1		1		
		美術史2	1	1		1		
		基礎実習1	1	2		2		
		基礎実習2	1	2		2		
		基礎実習3	1	2		2		
		基礎実習4	1	2		2		
		基礎実習5	2	2		2		
		基礎実習6	2	2		2		
		応用実習1	2	2		2		
		応用実習2	2	2		2		
		応用実習3	3	2		2		
		応用実習4	3	2		2		
		社会実践実習1	3	1		1		
		社会実践実習2	3	1		1		
		社会実践実習3	3	1		1		
		社会実践実習4	3	1		1		
		応用実習5	3	2		2		
		応用実習6	3	2		2		
		卒業研究実習1	4	2		2		
		卒業研究実習2	4	2		2		
		卒業研究実習3	4	2		2		
		卒業論文・卒業制作	4	2		2		
		卒業展示	4	2		2		
		【芸術学部選択科目】						
		美術リテラシー1	1・2・3・4		2	2		
		美術リテラシー2	1・2・3・4		2	2		
		美術特講1	2・3・4		2	2		
		美術特講2	2・3・4		2	2		
		メチエ基礎1	1・2・3・4		1	1		
		メチエ基礎2	1・2・3・4		1	1		
		メチエ基礎3	1・2・3・4		1	1		
		メチエ基礎4	1・2・3・4		1	1		
		メチエ基礎5	1・2・3・4		1	1		
		メチエ基礎6	1・2・3・4		1	1		
		メチエ基礎7	1・2・3・4		1	1		
		美術史特論1	2・3・4		1	1		
		美術史特論2	2・3・4		1	1		
		美術史特論3	2・3・4		1	1		
		美術史特論4	2・3・4		1	1		
		美術工芸史1	2・3・4		1	1		
		美術工芸史2	2・3・4		1	1		
		美術工芸史3	2・3・4		1	1		
		美術工芸史4	2・3・4		1	1		
		現代社会システム論	2・3・4		1	1		
		現代美術論1	2・3・4		1	1		
		現代美術論2	2・3・4		1	1		
		芸術表象論1	2・3・4		1	1		
		芸術表象論2	2・3・4		1	1		
		芸術と哲学1	2・3・4		1	1		
		芸術と哲学2	2・3・4		1	1		
アートマネジメント論1	2・3・4		1	1				
アートマネジメント論2	2・3・4		1	1				
美術解剖学	2・3・4		1	1				
視覚認知論1	2・3・4		1	1				
視覚認知論2	2・3・4		1	1				
芸術と精神分析1	2・3・4		1	1				
芸術と精神分析2	2・3・4		1	1				
芸術評論1	2・3・4		1	1				
芸術評論2	2・3・4		1	1				
表現研究1	2・3・4		1	1				
表現研究2	2・3・4		1	1				

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
芸術学部	造形学科	表現研究3	2・3・4		1	1	
		表現研究4	2・3・4		1	1	
		現代アートプロジェクト演習1	2・3・4		1	1	
		現代アートプロジェクト演習2	2・3・4		1	1	
		現代アートプロジェクト演習3	2・3・4		1	1	
		現代アートプロジェクト演習4	2・3・4		1	1	
		現代アートプロジェクト演習5	2・3・4		1	1	
		現代アートプロジェクト演習6	2・3・4		1	1	
		ドローイング1	2・3・4		1	1	
		ドローイング2	2・3・4		1	1	
		工芸1	2・3・4		1	1	
		工芸2	2・3・4		1	1	
		工芸3	2・3・4		1	1	
		工芸4	2・3・4		1	1	
		図法製図1	2・3・4		1	1	
		図法製図2	2・3・4		1	1	
		造形演習1	2・3・4		1	1	
		造形演習2	2・3・4		1	1	
		造形演習3	2・3・4		1	1	
		造形演習4	2・3・4		1	1	
		写真・映像メディア表現	2・3・4		1	1	
		映像メディア表現	2・3・4		1	1	
写真表現	2・3・4		1	1			

別表I 教育課程

⑤デザイン学部

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考	
				必修	選択	計		
デザイン学部	デザイン学部共通	【デザイン学部必修科目】						
		デザイン概論1	1		1	1		
		デザイン概論2	1		1	1		
		デザイン史1	1		1	1		
		デザイン史2	1		1	1		
		【デザイン学部選択科目】						
		デザインリテラシー1	1・2・3・4		2	2		
		デザインリテラシー2	1・2・3・4		2	2		
		デザイン特講1	2・3・4		2	2		
		デザイン特講2	2・3・4		2	2		
		デザイン特講3	2・3・4		1	1		
		デザイン特講4	2・3・4		1	1		
		家具史1	2・3・4		1	1		
		家具史2	2・3・4		1	1		
		写真史1	2・3・4		1	1		
		写真史2	2・3・4		1	1		
		印刷論1	2・3・4		1	1		
		印刷論2	2・3・4		1	1		
		写真論1	2・3・4		1	1		
		写真論2	2・3・4		1	1		
		色彩学1	2・3・4		1	1		
		色彩学2	2・3・4		1	1		
		視覚文化論1	2・3・4		1	1		
		視覚文化論2	2・3・4		1	1		
		ユニバーサルデザイン論1	2・3・4		1	1		
		ユニバーサルデザイン論2	2・3・4		1	1		
		デザインマネージメント論1	2・3・4		1	1		
		デザインマネージメント論2	2・3・4		1	1		
		ランドスケープデザイン論1	2・3・4		1	1		
		ランドスケープデザイン論2	2・3・4		1	1		
		商品開発論1	2・3・4		1	1		
		商品開発論2	2・3・4		1	1		
		デザイン英語1	2・3・4		1	1		
		デザイン英語2	2・3・4		1	1		
		デザイン英語3	2・3・4		1	1		
		デザイン英語4	2・3・4		1	1		
		近代空間論1	2・3・4		1	1		
		近代空間論2	2・3・4		1	1		
		インテリアデザイン論1	2・3・4		1	1		
		インテリアデザイン論2	2・3・4		1	1		
		デザイン法規概論1	2・3・4		1	1		
		デザイン法規概論2	2・3・4		1	1		
		人間生活工学1	2・3・4		1	1		
		人間生活工学2	2・3・4		1	1		
		ファッション史1	1・2・3・4		1	1		
		ファッション史2	1・2・3・4		1	1		
		アパレル素材論1	2・3・4		1	1		
アパレル素材論2	2・3・4		1	1				
造形論1	2・3・4		1	1				
造形論2	2・3・4		1	1				
日本服飾史1	2・3・4		1	1				
日本服飾史2	2・3・4		1	1				
サステナブル・ファッション1	2・3・4		1	1				
サステナブル・ファッション2	2・3・4		1	1				
イラスト学科	イラスト学科	【イラスト学科必修科目】					●イラスト学科 デザイン学部必修科目、デザイン学部選択科目、イラスト学科必修科目、イラスト学科選択科目から74単位以上必修	
		基礎実習1	1	2	2			
		基礎実習2	1	2	2			
		基礎実習3	1	2	2			
		基礎実習4	1	2	2			
		基礎実習5	2	2	2			
		基礎実習6	2	2	2			
		応用実習1	2	2	2			
		応用実習2	2	2	2			
		応用実習3	3	2	2			

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考	
				必修	選択	計		
デザイン学部	イラスト学科	応用実習4	3	2		2		
		社会実践実習1	3	1		1		
		社会実践実習2	3	1		1		
		社会実践実習3	3	1		1		
		社会実践実習4	3	1		1		
		応用実習5	3	2		2		
		応用実習6	3	2		2		
		卒業研究実習1	4	2		2		
		卒業研究実習2	4	2		2		
		卒業研究実習3	4	2		2		
		卒業論文・卒業制作	4	2		2		
		卒業展示	4	2		2		
		【イラスト学科選択科目】						
			イラスト基礎演習1	1・2・3・4		1	1	
			イラスト基礎演習2	1・2・3・4		1	1	
			イラスト基礎演習3	1・2・3・4		1	1	
			イラスト基礎演習4	1・2・3・4		1	1	
			イラスト基礎演習5	1・2・3・4		1	1	
			イラスト基礎演習6	1・2・3・4		1	1	
			イラスト基礎演習7	2・3・4		1	1	
			イラスト基礎演習8	2・3・4		1	1	
			イラスト基礎演習9	2・3・4		1	1	
			イラスト基礎演習10	2・3・4		1	1	
			イラスト基礎演習11	2・3・4		1	1	
		イラスト基礎演習12	2・3・4		1	1		
		イラスト基礎演習13	2・3・4		1	1		
		イラスト基礎演習14	2・3・4		1	1		
		イラスト応用演習1	3・4		1	1		
		イラスト応用演習2	3・4		1	1		
		イラスト応用演習3	3・4		1	1		
		イラスト応用演習4	3・4		1	1		
		イラスト応用演習5	3・4		1	1		
		イラスト応用演習6	3・4		1	1		
		【ビジュアルデザイン学科必修科目】						
		基礎実習1	1	2		2	●ビジュアルデザイン学科 デザイン学部必修科目、デザイン学部選 択科目、ビジュアルデザイン学科必修科 目、ビジュアルデザイン学科選択科目か ら74単位以上必修	
		基礎実習2	1	2		2		
		基礎実習3	1	2		2		
		基礎実習4	1	2		2		
		基礎実習5	2	2		2		
		基礎実習6	2	2		2		
		応用実習1	2	2		2		
		応用実習2	2	2		2		
		応用実習3	3	2		2		
		応用実習4	3	2		2		
		社会実践実習1	3	1		1		
		社会実践実習2	3	1		1		
	社会実践実習3	3	1		1			
	社会実践実習4	3	1		1			
	応用実習5	3	2		2			
	応用実習6	3	2		2			
	卒業研究実習1	4	2		2			
	卒業研究実習2	4	2		2			
	卒業研究実習3	4	2		2			
	卒業論文・卒業制作	4	2		2			
	卒業展示	4	2		2			
	【ビジュアルデザイン学科選択科目】							
	デザインスキル選択実習1	1・2・3・4		1	1			
	デザインスキル選択実習2	1・2・3・4		1	1			
	デザインスキル選択実習3	1・2・3・4		1	1			
	デザインスキル選択実習4	1・2・3・4		1	1			
	デザインスキル選択実習5	1・2・3・4		1	1			
	デザインスキル選択実習6	1・2・3・4		1	1			
	デザインスキル選択実習7	1・2・3・4		1	1			
	デザインスキル選択実習8	1・2・3・4		1	1			
	デザインスキル選択実習9	2・3・4		1	1			
	デザインスキル選択実習10	2・3・4		1	1			

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考	
				必修	選択	計		
デザイン学部	ビジュアルデザイン学科	デザインスキル選択実習1 1	2・3・4		1	1		
		デザインスキル選択実習1 2	2・3・4		1	1		
		デザインスキル選択実習1 3	2・3・4		1	1		
		デザインスキル選択実習1 4	2・3・4		1	1		
		デザインスキル選択実習1 5	2・3・4		1	1		
		デザインスキル選択実習1 6	2・3・4		1	1		
		デザインスキル応用実習1	3・4		1	1		
		デザインスキル応用実習2	3・4		1	1		
		デザインスキル応用実習3	3・4		1	1		
		デザインスキル応用実習4	3・4		1	1		
		デザインスキル応用実習5	3・4		1	1		
		デザインスキル応用実習6	3・4		1	1		
		デザインスキル応用実習7	3・4		1	1		
		デザインスキル応用実習8	3・4		1	1		
	デザイン学部	【プロダクトデザイン学科必修科目】	基礎実習1	1	2		2	●プロダクトデザイン学科 デザイン学部必修科目、デザイン学部選 択科目、プロダクトデザイン学科必修科 目、プロダクトデザイン学科選択科目か ら74単位以上必修
			基礎実習2	1	2		2	
			基礎実習3	1	2		2	
			基礎実習4	1	2		2	
			基礎実習5	2	2		2	
			基礎実習6	2	2		2	
			応用実習1	2	2		2	
			応用実習2	2	2		2	
			応用実習3	3	2		2	
			応用実習4	3	2		2	
			社会実践実習1	3	1		1	
			社会実践実習2	3	1		1	
			社会実践実習3	3	1		1	
社会実践実習4			3	1		1		
応用実習5			3	2		2		
応用実習6			3	2		2		
卒業研究実習1			4	2		2		
卒業研究実習2			4	2		2		
卒業研究実習3			4	2		2		
卒業論文・卒業制作			4	2		2		
卒業展示		4	2		2			
プロダクトデザイン学科		【プロダクトデザイン学科選択科目】	プロダクトカラー論1	1・2・3・4		1	1	
			プロダクトカラー論2	1・2・3・4		1	1	
			プロダクトデザイン基礎演習1	1・2・3・4		1	1	
			プロダクトデザイン基礎演習2	1・2・3・4		1	1	
			プロダクトデザイン基礎演習3	1・2・3・4		1	1	
			プロダクトデザイン基礎演習4	1・2・3・4		1	1	
			プロダクトデザイン基礎演習5	1・2・3・4		1	1	
			プロダクトデザイン基礎演習6	1・2・3・4		1	1	
			プロダクトデザイン基礎演習7	1・2・3・4		1	1	
			プロダクトデザイン基礎演習8	1・2・3・4		1	1	
			プロダクトデザイン基礎演習9	1・2・3・4		1	1	
			プロダクトデザイン基礎演習10	1・2・3・4		1	1	
			プロダクトデザイン基礎演習11	1・2・3・4		1	1	
			プロダクトデザイン基礎演習12	1・2・3・4		1	1	
			プロダクトデザイン応用演習1	2・3・4		1	1	
			プロダクトデザイン応用演習2	2・3・4		1	1	
	プロダクトデザイン応用演習3		2・3・4		1	1		
プロダクトデザイン応用演習4	2・3・4		1	1				
プロダクトデザイン応用演習5	3・4		1	1				
プロダクトデザイン応用演習6	3・4		1	1				
プロダクトデザイン応用演習7	3・4		1	1				
プロダクトデザイン応用演習8	3・4		1	1				
プロダクトデザイン応用演習9	3・4		1	1				
プロダクトデザイン応用演習10	3・4		1	1				
プロダクトデザイン応用演習11	2・3・4		1	1				
プロダクトデザイン応用演習12	2・3・4		1	1				
プロダクトデザイン応用演習13	2・3・4		1	1				
プロダクトデザイン応用演習14	2・3・4		1	1				
プロダクトデザイン応用演習15	2・3・4		1	1				

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考		
				必修	選択	計			
デザイン学部	プロダクトデザイン学科	プロダクトデザイン応用演習16	2・3・4		1	1			
		プロダクトデザイン応用演習17	2・3・4		1	1			
		プロダクトデザイン応用演習18	2・3・4		1	1			
		プロダクトデザイン応用演習19	2・3・4		1	1			
		プロダクトデザイン応用演習20	2・3・4		1	1			
		プロダクトデザイン応用演習21	2・3・4		1	1			
		プロダクトデザイン応用演習22	2・3・4		1	1			
		プロダクトデザイン応用演習23	2・3・4		1	1			
		プロダクトデザイン応用演習24	2・3・4		1	1			
		プロダクトデザイン応用演習25	2・3・4		1	1			
		プロダクトデザイン応用演習26	2・3・4		1	1			
		プロダクトデザイン応用演習27	3・4		1	1			
		プロダクトデザイン応用演習28	3・4		1	1			
		プロダクトデザイン応用演習29	2・3・4		1	1			
		プロダクトデザイン応用演習30	2・3・4		1	1			
		プロダクトデザイン応用演習31	2・3・4		1	1			
		プロダクトデザイン応用演習32	2・3・4		1	1			
		プロダクトデザイン応用演習33	2・3・4		1	1			
		プロダクトデザイン応用演習34	2・3・4		1	1			
		プロダクトデザイン応用演習35	2・3・4		1	1			
	プロダクトデザイン応用演習36	2・3・4		1	1				
	プロダクトデザイン応用演習37	2・3・4		1	1				
	プロダクトデザイン応用演習38	2・3・4		1	1				
	プロダクトデザイン応用演習39	2・3・4		1	1				
	プロダクトデザイン応用演習40	2・3・4		1	1				
		建築学科	【建築学科必修科目】						●建築学科 デザイン学部必修科目、デザイン学部選択科目、建築学科必修科目、建築学科選択科目から74単位以上必修
			基礎実習1	1	2	2			
			基礎実習2	1	2	2			
			基礎実習3	1	2	2			
			基礎実習4	1	2	2			
			基礎実習5	2	2	2			
			基礎実習6	2	2	2			
			応用実習1	2	2	2			
			応用実習2	2	2	2			
			応用実習3	3	2	2			
			応用実習4	3	2	2			
			社会実践実習1	2	1	1			
			社会実践実習2	2	1	1			
			社会実践実習3	3	1	1			
			社会実践実習4	3	1	1			
	応用実習5		3	2	2				
	応用実習6		3	2	2				
	卒業研究実習1		4	2	2				
	卒業研究実習2		4	2	2				
	卒業研究実習3		4	2	2				
	卒業論文・卒業制作	4	2	2					
	卒業展示	4	2	2					
	【建築学科選択科目】								
	身体空間論	1・2・3・4		1	1				
	建築計画	1・2・3・4		2	2				
	一般構造	1・2・3・4		2	2				
	西洋建築史	2・3・4		2	2				
	仮想空間論	2・3・4		2	2				
	住環境論1	2・3・4		1	1				
	住環境論2	2・3・4		1	1				
	日本建築史	1・2・3・4		2	2				
	まちづくり論1	3・4		1	1				
	まちづくり論2	3・4		1	1				
	建築力学	2・3・4		2	2				
	環境工学	3・4		2	2				
	近現代建築史	3・4		2	2				
	建築構造	2・3・4		2	2				
	設備工学1	3・4		1	1				
	設備工学2	3・4		1	1				
	伝統建築工法1	2・3・4		1	1				
	伝統建築工法2	2・3・4		1	1				

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考	
				必修	選択	計		
デザイン学部	建築学科	建築構法演習	1・2・3・4		1	1		
		コンピューター演習1	1・2・3・4		2	2		
		コンピューター演習2	2・3・4		2	2		
		仮想空間演習	2・3・4		2	2		
		建築材料演習	2・3・4		2	2		
		コンピューター演習3	2・3・4		2	2		
		建築法規演習	3・4		2	2		
		材料実験	3・4		2	2		
		プレゼン演習	3・4		2	2		
		施工演習	3・4		2	2		
		測量演習	2・3・4		2	2		
		積算演習	3・4		2	2		
		フィールドワーク1	2・3・4		2	2		
		フィールドワーク2	2・3・4		2	2		
		人間環境デザインプログラム選択科目						
		【人間環境デザイン基盤科目】						
			国際文化概論1	1		1		
			国際文化概論2	1		1		
			国際文化史1	1		1		
			国際文化史2	1		1		
			国際文化リテラシー1	1・2・3・4		2		
			国際文化リテラシー2	1・2・3・4		2		
			国際文化特講1	2・3・4		2		
			国際文化特講2	2・3・4		2		
			自然環境演習	1・2・3・4		1	1	
			国内インターンシップ	1・2・3・4		1	1	
			長期インターンシップ1	3・4		2	2	
			長期インターンシップ2	3・4		2	2	
			長期インターンシップ3	3・4		2	2	
			長期インターンシップ4	3・4		2	2	
			長期インターンシップ5	3・4		2	2	
			長期インターンシップ6	3・4		2	2	
		【グローバル地域研究科目】						
			地域研究入門	2・3・4		2		
			地域研究特講	2・3・4		2		
			アフリカ地域研究1	2・3・4		2		
			アフリカ地域研究2	2・3・4		2		
			アジア地域研究1	2・3・4		2		
			アジア地域研究2	2・3・4		2		
			アメリカ地域研究1	2・3・4		2		
			アメリカ地域研究2	2・3・4		2		
			大洋州地域研究	2・3・4		2		
			欧州地域研究	2・3・4		2		
		【グローバル関係科目】						
			グローバル関係概論	2・3・4		2		
			グローバルヒストリー概論	2・3・4		2		
			グローバルヒストリー特講	2・3・4		2		
	多国籍企業論	2・3・4		2				
	社会運動論	2・3・4		2				
	世界の宗教	2・3・4		2				
	アフリカ・アジア関係論	2・3・4		2				
	国際政治学	2・3・4		2				
	国際社会の法秩序	2・3・4		2				
	人口動態論	3・4		2				
	人口政策論	3・4		2				
	比較社会学	2・3・4		2				
【グローバル共生社会科目】								
	先住民研究	2・3・4		2				
	ポストコロニアル概論	2・3・4		2				
	国際開発論	2・3・4		2				
	マイノリティ研究概論	2・3・4		2				
	グローバル・ビジネス論	2・3・4		2				
	グローバル化とメディア	2・3・4		2				
	エイジング研究概論	3・4		2				
	子ども学概論	3・4		2				
	地球環境学概論1	2・3・4		2				

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考	
				必修	選択	計		
デザイン学部	建築学科	地球環境学概論2	3・4		2			
		地球環境学概論3	3・4		2			
		NGO論	2・3・4		2			
		平和学	2・3・4		2			
		市民社会論	2・3・4		2			
		人間の安全保障	2・3・4		2			
		【グローバル文化科目】						
		観光学総論	2・3・4		2			
		世界の文学1	2・3・4		2			
		世界の文学2	2・3・4		2			
		世界文化遺産	2・3・4		2			
		アフリカ美術	2・3・4		2			
		マテリアル・カルチャー概論	2・3・4		2			
		民族音楽論	2・3・4		2			
		比較服飾文化論	2・3・4		2			
		比較建築文化論	2・3・4		2			
		【グローバル基礎講義科目】						
		哲学概論	1・2・3・4		2			
		倫理学	1・2・3・4		2			
		心理学	1・2・3・4		2			
		社会学	2・3・4		2			
		社会調査法	2・3・4		2			
		経済学	2・3・4		2			
		批評理論	2・3・4		2			
		ジェンダー論	2・3・4		2			
		宗教学	2・3・4		2			
		社会思想史	2・3・4		2			
		自然地理学	2・3・4		2			
		文化政策論	2・3・4		2			
		文化社会学	2・3・4		2			
		西洋史	2・3・4		2			
		東洋史	2・3・4		2			
		【日本文化科目】						
		日本史	2・3・4		2			
		日本地域史	2・3・4		2			
		日本社会史	2・3・4		2			
		日本・アジア関係史	2・3・4		2			
		日本の文化遺産	2・3・4		2			
		歴史地理学	2・3・4		2			
		京都の歴史	2・3・4		2			
		日本民衆史	2・3・4		2			
		日本文学史	2・3・4		2			
		漢文学	2・3・4		2			
		口承文化論	2・3・4		2			
		書誌学	2・3・4		2			
		古典文法	2・3・4		2			
		書道	2・3・4		2			
		古文書解読	2・3・4		2			
		【メディア表現講義科目】						
		コンテンツビジネス1	2・3・4		1			
		コンテンツビジネス2	2・3・4		1			
		コンテンツビジネス3	2・3・4		1			
		サウンドスケープ論	1・2・3・4		2			
		メディアアート論	1・2・3・4		2			
		ゲームデザイン論	1・2・3・4		2			
		ウェブデザイン論	1・2・3・4		2			
		コンピュータ&ネットワーク論	1・2・3・4		2			
		サブカルチャーとメディア	1・2・3・4		2			
		文化産業論	1・2・3・4		2			
		文化政策論	1・2・3・4		2			
		広告メディア論	1・2・3・4		2			
		教育メディア論	1・2・3・4		2			
		メディアミックス論	2・3・4		2			
		ソーシャルメディア論	2・3・4		2			
		【芸術講義科目】						
		美術史特論1	2・3・4		1			

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考	
				必修	選択	計		
デザイン学部	建築学科	美術史特論 2	2・3・4		1			
		美術史特論 3	2・3・4		1			
		美術史特論 4	2・3・4		1			
		美術工芸史 1	2・3・4		1			
		美術工芸史 2	2・3・4		1			
		美術工芸史 3	2・3・4		1			
		美術工芸史 4	2・3・4		1			
		現代社会システム論	2・3・4		1			
		現代美術論 1	2・3・4		1			
		現代美術論 2	2・3・4		1			
		芸術表象論1	2・3・4		1			
		芸術表象論2	2・3・4		1			
		芸術と哲学 1	2・3・4		1			
		芸術と哲学 2	2・3・4		1			
		アートマネジメント論1	2・3・4		1			
		アートマネジメント論2	2・3・4		1			
		美術解剖学	2・3・4		1			
		視覚認知論 1	2・3・4		1			
		視覚認知論 2	2・3・4		1			
		芸術と精神分析1	2・3・4		1			
		芸術と精神分析2	2・3・4		1			
		芸術評論1	2・3・4		1			
		芸術評論2	2・3・4		1			
		【マンガ講義科目】						
		マンガ表現史1	2・3・4		1			
		マンガ表現史2	2・3・4		1			
		メディア産業論1	2・3・4		1			
		メディア産業論2	2・3・4		1			
		キャラクター造形論1	2・3・4		1			
		キャラクター造形論2	2・3・4		1			
		キャラクター造形論3	2・3・4		1			
		キャラクター造形論4	2・3・4		1			
		アニメーション作品作家研究1	2・3・4		1			
		アニメーション作品作家研究2	2・3・4		1			
		アニメーション作品作家研究3	2・3・4		1			
		アニメーション作品作家研究4	2・3・4		1			
		マンガ業界論1	2・3・4		1			
		マンガ業界論2	2・3・4		1			
		海外コミックマンガ論1	2・3・4		1			
		海外コミックマンガ論2	2・3・4		1			
		比較マンガ論1	2・3・4		1			
		比較マンガ論2	2・3・4		1			
		新世代マンガ総合講座1	2・3・4		1			
		新世代マンガ総合講座2	2・3・4		1			
IP研究 1	2・3・4		1					
IP研究 2	2・3・4		1					
IP研究 3	2・3・4		1					
IP研究 4	2・3・4		1					

別表I 教育課程

⑥マンガ学部

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考	
				必修	選択	計		
マンガ学部	マンガ学部共通	【マンガ学部必修科目】						
		マンガ概論1	1	1		1		
		マンガ概論2	1	1		1		
		マンガ史1	1	1		1		
		マンガ史2	1	1		1		
		【マンガ学部選択科目】						
		マンガリテラシー1	1・2・3・4		2	2		
		マンガリテラシー2	1・2・3・4		2	2		
		マンガ特講1	2・3・4		2	2		
		マンガ特講2	2・3・4		2	2		
		マンガ表現史1	2・3・4		1	1		
		マンガ表現史2	2・3・4		1	1		
		メディア産業論1	2・3・4		1	1		
		メディア産業論2	2・3・4		1	1		
		キャラクター造形論1	2・3・4		1	1		
		キャラクター造形論2	2・3・4		1	1		
		キャラクター造形論3	2・3・4		1	1		
		キャラクター造形論4	2・3・4		1	1		
		アニメーション作品作家研究1	2・3・4		1	1		
		アニメーション作品作家研究2	2・3・4		1	1		
		アニメーション作品作家研究3	2・3・4		1	1		
		アニメーション作品作家研究4	2・3・4		1	1		
		マンガ業界論1	2・3・4		1	1		
		マンガ業界論2	2・3・4		1	1		
		海外コミックマンガ論1	2・3・4		1	1		
		海外コミックマンガ論2	2・3・4		1	1		
		比較マンガ論1	2・3・4		1	1		
		比較マンガ論2	2・3・4		1	1		
		新世代マンガ総合講座1	2・3・4		1	1		
		新世代マンガ総合講座2	2・3・4		1	1		
		IP研究1	2・3・4		1	1		
		IP研究2	2・3・4		1	1		
		IP研究3	2・3・4		1	1		
		IP研究4	2・3・4		1	1		
		イラスト講座1	2・3・4		1	1		
		イラスト講座2	2・3・4		1	1		
		コラボレーション演習1	2・3・4		1	1		
		コラボレーション演習2	2・3・4		1	1		
		コラボレーション演習3	2・3・4		1	1		
		コラボレーション演習4	2・3・4		1	1		
		絵本技法1	2・3・4		1	1		
		絵本技法2	2・3・4		1	1		
		絵本技法3	2・3・4		1	1		
		絵本技法4	2・3・4		1	1		
		シナリオ技法1	2・3・4		1	1		
		シナリオ技法2	2・3・4		1	1		
		シナリオ技法3	2・3・4		1	1		
		シナリオ技法4	2・3・4		1	1		
		実用マンガ演習1	2・3・4		1	1		
		実用マンガ演習2	2・3・4		1	1		
		編集実践演習1	2・3・4		1	1		
		編集実践演習2	2・3・4		1	1		
		ゲーム作画演習1	2・3・4		1	1		
		ゲーム作画演習2	2・3・4		1	1		
ゲーム作画演習3	2・3・4		1	1				
ゲーム作画演習4	2・3・4		1	1				
人体研究1	2・3・4		1	1				
人体研究2	2・3・4		1	1				
人体研究3	2・3・4		1	1				
人体研究4	2・3・4		1	1				
マンガ学科	【マンガ学科必修科目】					●マンガ学科 マンガ学部必修科目、マンガ学部選択科目、マンガ学科必修科目、マンガ学科選択科目から74単位以上必修		
	基礎実習1	1	2		2			
	基礎実習2	1	2		2			
	基礎実習3	1	2		2			

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考	
				必修	選択	計		
マンガ学部	マンガ学科	基礎実習4	1	2		2		
		基礎実習5	2	2		2		
		基礎実習6	2	2		2		
		応用実習1	2	2		2		
		応用実習2	2	2		2		
		応用実習3	3	2		2		
		応用実習4	3	2		2		
		マンガ実践実習1	3	1		1		
		マンガ実践実習2	3	1		1		
		マンガ実践実習3	3	1		1		
		マンガ実践実習4	3	1		1		
		応用実習5	3	2		2		
		応用実習6	3	2		2		
		卒業研究実習1	4	2		2		
		卒業研究実習2	4	2		2		
		卒業研究実習3	4	2		2		
		卒業論文・卒業制作	4	2		2		
		卒業展示	4	2		2		
		【マンガ学科選択科目】						
			脚本概論1	2・3・4		1	1	
			脚本概論2	2・3・4		1	1	
			脚本概論3	2・3・4		1	1	
			脚本概論4	2・3・4		1	1	
			編集概論1	2・3・4		1	1	
			編集概論2	2・3・4		1	1	
			編集概論3	2・3・4		1	1	
			編集概論4	2・3・4		1	1	
			風刺画論1	2・3・4		1	1	
			風刺画論2	2・3・4		1	1	
			物語キャラクター論1	2・3・4		1	1	
			物語キャラクター論2	2・3・4		1	1	
			日本アニメーション史1	2・3・4		1	1	
			日本アニメーション史2	2・3・4		1	1	
			世界アニメーション史1	2・3・4		1	1	
			世界アニメーション史2	2・3・4		1	1	
			基礎デジタル演習1	2・3・4		1	1	
			基礎デジタル演習2	2・3・4		1	1	
			基礎デジタル演習3	2・3・4		1	1	
			基礎デジタル演習4	2・3・4		1	1	
			デジタル演習1	2・3・4		1	1	
			デジタル演習2	2・3・4		1	1	
			デジタル演習3	2・3・4		1	1	
			デジタル演習4	2・3・4		1	1	
			マンガデザイン1	2・3・4		1	1	
			マンガデザイン2	2・3・4		1	1	
			マンガデザイン3	2・3・4		1	1	
			マンガデザイン4	2・3・4		1	1	
			動態描写技法1	2・3・4		1	1	
			動態描写技法2	2・3・4		1	1	
			動態描写技法3	2・3・4		1	1	
	動態描写技法4	2・3・4		1	1			
	パース技法1	2・3・4		1	1			
	パース技法2	2・3・4		1	1			
	カラー演習1	2・3・4		1	1			
	カラー演習2	2・3・4		1	1			
	カラー演習3	2・3・4		1	1			
	カラー演習4	2・3・4		1	1			
	キャラクター造形基礎1	2・3・4		1	1			
	キャラクター造形基礎2	2・3・4		1	1			
	キャラクター造形基礎3	2・3・4		1	1			
	キャラクター造形基礎4	2・3・4		1	1			
	アニメーション演習1	2・3・4		1	1			
	アニメーション演習2	2・3・4		1	1			
	アニメーション演習3	2・3・4		1	1			
	アニメーション演習4	2・3・4		1	1			
	アニメーション3DCG演習1	2・3・4		1	1			

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考	
				必修	選択	計		
マンガ学部	マンガ学科	アニメーション3DCG演習2	2・3・4		1	1		
		アニメーション3DCG演習3	2・3・4		1	1		
		アニメーション3DCG演習4	2・3・4		1	1		
		基礎デッサン1	2・3・4		1	1		
		基礎デッサン2	2・3・4		1	1		
		基礎デッサン3	2・3・4		1	1		
		基礎デッサン4	2・3・4		1	1		
	アニメーション学科		【アニメーション学科必修科目】					●アニメーション学科 マンガ学部必修科目、マンガ学部選択科目、アニメーション学科必修科目、アニメーション学科選択科目から74単位以上必修
			基礎実習1	1	2	2		
			基礎実習2	1	2	2		
			基礎実習3	1	2	2		
			基礎実習4	1	2	2		
			基礎実習5	2	2	2		
			基礎実習6	2	2	2		
			応用実習1	2	2	2		
			応用実習2	2	2	2		
			応用実習3	3	2	2		
			応用実習4	3	2	2		
			社会実践実習1	3	1	1		
			社会実践実習2	3	1	1		
			社会実践実習3	3	1	1		
			社会実践実習4	3	1	1		
			応用実習5	3	2	2		
			応用実習6	3	2	2		
			卒業研究実習1	4	2	2		
			卒業研究実習2	4	2	2		
			卒業研究実習3	4	2	2		
			卒業論文・卒業制作	4	2	2		
			卒業展示	4	2	2		
			【アニメーション学科選択科目】					
			アニメーション基礎研究1	1・2・3・4		1	1	
			アニメーション基礎研究2	1・2・3・4		1	1	
			アニメーション基礎研究3	1・2・3・4		1	1	
			アニメーション基礎研究4	1・2・3・4		1	1	
			アクションドローイング基礎1	1・2・3・4		1	1	
			アクションドローイング基礎2	1・2・3・4		1	1	
		アクションドローイング基礎3	1・2・3・4		1	1		
		アニメーション演出概論1	2・3・4		1	1		
		アニメーション演出概論2	2・3・4		1	1		
		アニメーション演出特論1	2・3・4		1	1		
		アニメーション演出特論2	2・3・4		1	1		
		シナリオ概論1	2・3・4		1	1		
		シナリオ概論2	2・3・4		1	1		
	シナリオ特論1	2・3・4		1	1			
	シナリオ特論2	2・3・4		1	1			
	日本アニメーション史1	2・3・4		1	1			
	日本アニメーション史2	2・3・4		1	1			
	世界アニメーション史1	2・3・4		1	1			
	世界アニメーション史2	2・3・4		1	1			
	アニメーション3DCG演習1	2・3・4		1	1			
	アニメーション3DCG演習2	2・3・4		1	1			
	アニメーション3DCG演習3	2・3・4		1	1			
	アニメーション3DCG演習4	2・3・4		1	1			
	アニメーション音響基礎1	2・3・4		1	1			
	アニメーション音響基礎2	2・3・4		1	1			
	アニメーション音響基礎3	2・3・4		1	1			
	アニメーション音響基礎4	2・3・4		1	1			
	アクションドローイング1	2・3・4		1	1			
	アクションドローイング2	2・3・4		1	1			
	アクションドローイング3	2・3・4		1	1			
	アクションドローイング4	2・3・4		1	1			
	アニメーション音響演出1	3・4		1	1			
	アニメーション音響演出2	3・4		1	1			
	アニメーション音響演出3	3・4		1	1			
	アニメーション音響演出4	3・4		1	1			
	エディトリアル演習1	3・4		1	1			

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
マンガ学部	アニメーション学科	エディトリアル演習2	3・4		1	1	
		ブックデザイン演習1	3・4		1	1	
		ブックデザイン演習2	3・4		1	1	
		エフェクト技法1	3・4		1	1	
		エフェクト技法2	3・4		1	1	
		エフェクト技法3	3・4		1	1	
		エフェクト技法4	3・4		1	1	

別表Ⅱ 教職に関する専門科目

教育の基礎的理解に関する科目等

学部	学科	授 業 科 目	単 位 数			備 考
			必修	選択	計	
芸術学部・デザイン学部・マンガ学部・国際文化学部	課程を 設置する 各学科	教育の基礎的理解に関する科目				「道徳教育論」および「教育実習Ⅱ」の単位は、中一種免取得希望者のみ必修とする。
		教育原論	2		2	
		教職論	2		2	
		教育制度論	2		2	
		教育心理学	2		2	
		特別支援教育論	1		1	
		教育課程論	2		2	
		道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目				
		道徳教育論		2	2	
		総合的な学習の時間の指導論	1		1	
		特別活動論	2		2	
		教育方法論	2		2	
		生徒・進路指導論	2		2	
		教育相談	2		2	
		教育実践に関する科目				
		事前・事後指導	1		1	
教育実習Ⅰ	2		2			
教育実習Ⅱ		2	2			
教職実践演習(中・高)	2		2			

教科及び教科の指導法に関する科目

芸術学部・デザイン学部・マンガ学部・国際文化学部	課程を 設置する 各学科	各教科の指導法				「各教科の指導法」は該当教科の指導法を履修する。なお、各教科の指導法より、中一種免は8単位、高一種免は4単位以上をそれぞれ選択必修とする。
		美術科教育法Ⅰ		2	2	
		美術科教育法Ⅱ		2	2	
		美術科・工芸科教育法Ⅰ		2	2	
		美術科・工芸科教育法Ⅱ		2	2	
		国語科教育法Ⅰ		2	2	
		国語科教育法Ⅱ		2	2	
		国語科教育法Ⅲ		2	2	
		国語科教育法Ⅳ		2	2	
		社会科地歴科教育法Ⅰ		2	2	
		社会科地歴科教育法Ⅱ		2	2	
		社会科公民科教育法Ⅰ		2	2	
		社会科公民科教育法Ⅱ		2	2	

大学が独自に設定する科目

学部	学科	授 業 科 目	単 位 数			備 考
			必修	選択	計	
芸術学部・デザイン学部・マンガ学部・国際文化学部	課程を 設置する 各学科	人 権 教 育 論		2	2	「大学が独自に設定する科目」の選択科目又は最低修得単位を超えて履修した「教科及び教科の指導法に関する科目」「教育の基礎的理解に関する科目」「道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目」「教育実践に関する科目」について、併せて、中一種免の場合には4単位以上、高一種免の場合には12単位以上を修得する。
		現 代 学 校 論		2	2	
		障 が い 者 理 解		2	2	
		学 校 安 全 論		2	2	
		学 校 ボ ラ ン テ ィ ア		2	2	

別表Ⅲ 図書館司書課程に関する科目

学部	学科	区分	授業科目	単位数			備考	
				必修	選択	計		
芸術学部・デザイン学部・マンガ学部 ・メディア表現学部・国際文化学部	課程を設置する学科	必修科目	生涯学習概論	2		2		
			図書館概論	2		2		
			図書館制度・経営論	2		2		
			図書館情報技術論	2		2		
			図書館サービス概論	2		2		
			情報サービス論	2		2		
			児童サービス論	2		2		
			情報サービス演習1	1		1		
			情報サービス演習2	1		1		
			図書館情報資源概論	2		2		
			情報資源組織論	2		2		
			情報資源組織演習1	1		1		
		情報資源組織演習2	1		1			
		選択科目	図書館サービス特論		2	2		3科目のうち2科目を選択必修。
			図書館情報資源特論		2	2		
図書・図書館史			2	2				

別表Ⅳ 博物館学芸員課程に関する科目

学部	学科	区分	授業科目	単位数			備考	
				必修	選択	計		
芸術学部・デザイン学部・マンガ学部・メディア表現学部・国際文化学部	課程を 設置する 学科	必修科目	生涯学習概論	2		2	2系列以上にわたり、それぞれ1科目以上、計2科目4単位以上を履修しなければならない。	
			博物館概論	2		2		
			博物館経営論	2		2		
			博物館資料論	2		2		
			博物館資料保存論	2		2		
			博物館展示論	2		2		
			博物館教育論	2		2		
			博物館情報・メディア論	2		2		
			博物館実習	3		3		
		選択科目	文化史	日本文化史概論		2		2
				説話・伝承史		2		2
			美術史	美術史		2		2
				日本美術史		2		2
				東洋美術史		2		2
				西洋美術史		2		2
			考古学	考古学		2		2
			民俗学	民俗学		2		2
自然科学史	自然科学概論		2	2				
生物学	生物学		2	2				

別表V

① 正規の学生の授業料等

1. 入学検定料

費 目	金 額
入 学 検 定 料	35,000円
大学入学共通テストを利用する入学試験の検定料	10,000円

注) 入学検定料は、学内規定により減免することができる。

2. 入学金

費 目	金 額
入 学 金	200,000円

3. 芸術学部学費

費 目	第1クォーター	第2クォーター	第3クォーター	第4クォーター	年 間
授 業 料	387,500円	387,500円	387,500円	387,500円	1,550,000円

4. デザイン学部学費

費 目	第1クォーター	第2クォーター	第3クォーター	第4クォーター	年 間
授 業 料	394,750円	394,750円	394,750円	394,750円	1,579,000円

5. マンガ学部学費

費 目	第1クォーター	第2クォーター	第3クォーター	第4クォーター	年 間
授 業 料	394,750円	394,750円	394,750円	394,750円	1,579,000円

6. メディア表現学部学費

費 目	第1クォーター	第2クォーター	第3クォーター	第4クォーター	年 間
授 業 料	296,500円	296,500円	296,500円	296,500円	1,186,000円

7. 国際文化学部学費

費 目	第1クォーター	第2クォーター	第3クォーター	第4クォーター	年 間
授 業 料	271,500円	271,500円	271,500円	271,500円	1,086,000円

- ② 編入学・転入学・再入学の授業料等は入学年次に相当する正規の学生の年次の授業料等に準ずるものとし、入学検定料および入学金については正規の学生の1年生に準ずるものとする。

③ 聴講料

登 録 料	15,000円
聴 講 料 (1 単 位 あ た り)	15,000円

④ 科目等履修料

登 録 料	15,000円
聴 講 料 (1 単 位 あ た り)	15,000円

⑤ 研究生学費

研 究 生	前 期	後 期	年 間
芸 術 学 部	291,500円	291,500円	583,000円
デ ザ イ ン 学 部	296,500円	296,500円	593,000円
マ ン ガ 学 部	296,500円	296,500円	593,000円
メ デ ィ ア 表 現 学 部	231,000円	231,000円	462,000円
国 際 文 化 学 部	214,500円	214,500円	429,000円

京都精華大学研究生学費算出基準

- (1) 研究生出願手数料 = 学部入学検定料×1/3
- (2) 研究生授業料 = (学部入学金+学部授業料)×1/3
- (3) ただし、1,000円未満は四捨五入とする。

2021 年度学則変更に関する事由

以下の事由により学則を変更します。

記

変更の事由

- ・ 2021 年度より開設するメディア表現学部、国際文化学部について定める。(第 3 条、第 3 条 2、第 3 条の 2、第 18 条、別表 I、別表 II、別表 III、別表 IV、別表 V)
- ・ 学期について従来のセメスター制を改め、クォーター制について定める。(第 7 条、第 8 条、第 29 条、第 29 条の 6、別表 V)
- ・ 休学要件と休学学費を改定する。(別表 V)
- ・ 全学共通科目および芸術学部・デザイン学部・マンガ学部が開設する教育課程を改定する。(別表 I)
- ・ 2021 年 4 月から募集を停止するポピュラーカルチャー学部、人文学部を学則から削除する。(第 3 条、第 3 条 2、第 3 条の 2、第 18 条、別表 I、別表 II、別表 III、別表 IV、別表 V)
- ・ 附則において、施行日を西暦と和暦を併記する。(附則)

変更時期

令和 3 年 (2021 年) 4 月 1 日

以上

「京都精華大学学則」改定（案）

改定の主旨

- ・2021年度より開設するメディア表現学部、国際文化学部について定める。
- ・クォーター制について定める。
- ・休学要件と休学学費を改定する。
- ・全学共通科目および芸術・デザイン・マンガ学部が開設する教育課程を改定する。
- ・附則において、施行日を西暦と和暦を併記する。

【 新 】	【 旧 】																														
<p>第1章 総則 (目的)</p> <p>第1条 本学は学校教育法および教育基本法の規定するところに従い、大学教育を施し、広く知識を授けるとともに、深奥な学問芸術を研究・教授し、よりよき社会人としての人間形成を行うことを目的とする。</p> <p>(自己評価等)</p> <p>第2条 本学は、教育研究水準の向上を図り、本学の目的および社会的使命を達成するため、本学における教育研究活動等の状況について自ら点検および評価を行い、その結果を公表する。</p> <p>2 前項の点検および評価を行うため、委員会を設ける。</p> <p>3 委員会に関する規程は、これを別に定める。</p> <p>4 点検、評価の項目等については、別にこれを定める。</p> <p>(学部、学科、入学定員および収容定員)</p> <p>第3条 本学に次の学部・学科をおく。</p> <p>芸術学部 造形学科 デザイン学部 イラスト学科 ビジュアルデザイン学科 プロダクトデザイン学科 建築学科 マンガ学部 マンガ学科 アニメーション学科</p> <p>メディア表現学部 メディア表現学科 国際文化学部 人文学科 グローバルスタディーズ学科</p> <p>2 前項の学部・学科の入学定員および収容定員は次のとおりとする。</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; margin-top: 10px;"> <thead> <tr> <th>学 部</th> <th>学 科</th> <th>入 学 定 員</th> <th>収 容 定 員</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>芸術学部</td> <td>造形学科</td> <td>112人</td> <td>448人</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">デザイン学部</td> <td>イラスト学科</td> <td>64人</td> <td>256人</td> </tr> <tr> <td>ビジュアルデザイン学科</td> <td>64人</td> <td>256人</td> </tr> </tbody> </table>	学 部	学 科	入 学 定 員	収 容 定 員	芸術学部	造形学科	112人	448人	デザイン学部	イラスト学科	64人	256人	ビジュアルデザイン学科	64人	256人	<p>第1章 総則 (目的)</p> <p>第1条 本学は学校教育法および教育基本法の規定するところに従い、大学教育を施し、広く知識を授けるとともに、深奥な学問芸術を研究・教授し、よりよき社会人としての人間形成を行うことを目的とする。</p> <p>(自己評価等)</p> <p>第2条 本学は、教育研究水準の向上を図り、本学の目的および社会的使命を達成するため、本学における教育研究活動等の状況について自ら点検および評価を行い、その結果を公表する。</p> <p>2 前項の点検および評価を行うため、委員会を設ける。</p> <p>3 委員会に関する規程は、これを別に定める。</p> <p>4 点検、評価の項目等については、別にこれを定める。</p> <p>(学部、学科、入学定員および収容定員)</p> <p>第3条 本学に次の学部・学科をおく。</p> <p>芸術学部 造形学科 デザイン学部 イラスト学科 ビジュアルデザイン学科 プロダクトデザイン学科 建築学科 マンガ学部 マンガ学科 アニメーション学科</p> <p><u>ポピュラーカルチャー学部</u> <u>ポピュラーカルチャー学科</u> <u>人文学部</u> <u>総合人文学科</u></p> <p>2 前項の学部・学科の入学定員および収容定員は次のとおりとする。</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; margin-top: 10px;"> <thead> <tr> <th>学 部</th> <th>学 科</th> <th>入 学 定 員</th> <th>収 容 定 員</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>芸術学部</td> <td>造形学科</td> <td>112人</td> <td>448人</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">デザイン学部</td> <td>イラスト学科</td> <td>64人</td> <td>256人</td> </tr> <tr> <td>ビジュアルデザイン学科</td> <td>64人</td> <td>256人</td> </tr> </tbody> </table>	学 部	学 科	入 学 定 員	収 容 定 員	芸術学部	造形学科	112人	448人	デザイン学部	イラスト学科	64人	256人	ビジュアルデザイン学科	64人	256人
学 部	学 科	入 学 定 員	収 容 定 員																												
芸術学部	造形学科	112人	448人																												
デザイン学部	イラスト学科	64人	256人																												
	ビジュアルデザイン学科	64人	256人																												
学 部	学 科	入 学 定 員	収 容 定 員																												
芸術学部	造形学科	112人	448人																												
デザイン学部	イラスト学科	64人	256人																												
	ビジュアルデザイン学科	64人	256人																												

	プロダクト デザイン学科	72人	288人
	建築学科	56人	224人
マンガ学部	マンガ学科	232人	928人
	アニメーション 学科	80人	320人
メディア 表現学部	メディア 表現学科	168人	672人
国際文化 学部	人文学科	160人	640人
	グローバル スタディー ズ学科	90人	360人

(人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的)

第3条の2 前条の学部・学科の人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的は次のとおりとする。

芸術学部

人間の多様性を理解した上で、幅広い視野から適切な表現方法を用いてコミュニケーションをとることができ、さらに芸術によって培われる専門性と創造力で人類社会の諸課題に取り組むことができる主体性をもった人間形成を目的とする。

造形学科

伝統的造形芸術の知識技法にとどまらず、多角的な観察と自立した思考力によって新たな表現を創造する能力と造形芸術を開拓できる資質を備えた人材の養成を行う。

デザイン学部

デザイン領域において高度な技法知識を修得し新たな可能性を探究すること、および自立した思考によってグローバル社会および地域社会に現実的に貢献するデザイナー・プランナーの資質を備えた、よりよき社会人としての人間形成を行うことを目的とする。

イラスト学科

デザインやアートといった多様なフィールドで展開が可能となるイラスト領域において、現実の社会に貢献できる資質を備えた人材の養成を行う。

ビジュアルデザイン学科

情報技術の発展によってその目的および手法が飛躍的に拡大した視覚デザインの領域において、現実の社会に貢献できる資質を備えた人材の養成を行う。

プロダクトデザイン学科

社会活動や生活に使用される道具、器具、装置などのデザインの領域において、現実の社会に貢献できる資質を備えた人材の養成を行う。

建築学科

環境、建築、居住空間などのデザイン・設計の領域において、現実の社会に貢献できる資質を備えた人材の養成を目的とする。

マンガ学部

マンガ文化の再評価とともに重要視されるマンガやアニメーションの制作と理論について多角的な教育研究を行い新たな可能性を探究すること、お

	プロダクト デザイン学科	72人	288人
	建築学科	56人	224人
マンガ学部	マンガ学科	232人	928人
	アニメーション 学科	80人	320人
ポピュラー カルチャー 一学部	ポピュラー カルチャー学 科	118人	472人
人文学部	総合人文学 科	300人	1,200人

(人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的)

第3条の2 前条の学部・学科の人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的は次のとおりとする。

芸術学部

人間の多様性を理解した上で、幅広い視野から適切な表現方法を用いてコミュニケーションをとることができ、さらに芸術によって培われる専門性と創造力で人類社会の諸課題に取り組むことができる主体性をもった人間形成を目的とする。

造形学科

伝統的造形芸術の知識技法にとどまらず、多角的な観察と自立した思考力によって新たな表現を創造する能力と造形芸術を開拓できる資質を備えた人材の養成を行う。

デザイン学部

デザイン領域において高度な技法知識を修得し新たな可能性を探究すること、および自立した思考によってグローバル社会および地域社会に現実的に貢献するデザイナー・プランナーの資質を備えた、よりよき社会人としての人間形成を行うことを目的とする。

イラスト学科

デザインやアートといった多様なフィールドで展開が可能となるイラスト領域において、現実の社会に貢献できる資質を備えた人材の養成を行う。

ビジュアルデザイン学科

情報技術の発展によってその目的および手法が飛躍的に拡大した視覚デザインの領域において、現実の社会に貢献できる資質を備えた人材の養成を行う。

プロダクトデザイン学科

社会活動や生活に使用される道具、器具、装置などのデザインの領域において、現実の社会に貢献できる資質を備えた人材の養成を行う。

建築学科

環境、建築、居住空間などのデザイン・設計の領域において、現実の社会に貢献できる資質を備えた人材の養成を目的とする。

マンガ学部

マンガ文化の再評価とともに重要視されるマンガやアニメーションの制作と理論について多角的な教育研究を行い新たな可能性を探究すること、お

よびマンガ文化の継承と発展に貢献する資質を備えた、よりよき社会人としての人間形成を行うことを目的とする。

マンガ学科

マンガの作品史、表現などについての理論および技法の修得にとどまらず、実践によってマンガ表現の発展に貢献できる資質を備えた人材の養成を目的とする。

アニメーション学科

アニメーションの作品史、表現などについての理論および技法の修得にとどまらず、実践によってアニメーションの発展に貢献できる資質を備えた人材の養成を目的とする。

メディア表現学部

メディアと情報に関する広範な知識と専門的な表現技能を活用した豊かな人間性を育む文化表現を通して、コンテンツの制作やメディアの活用、新しいビジネスモデルの構想などによって次世代の産業界の発展に貢献する資質を備えた、人間形成を行うことを目的とする。

メディア表現学科

技術革新が進む人類社会において、急激に変化し続けるメディアと産業システムの動向をふまえたうえで、豊かな文化の発展にも寄与し、時代の先端を切り開くコンテンツ、メディア、新たなビジネスモデルを創造できる人材の養成を目的とする。

国際文化学部

アフリカ・アジアの文化、京都を中心とした日本の歴史や文化、そして世界の相関を理解し、現在の社会が抱える多様な課題の解決に貢献し、より良い共生社会の実現と世界の発展に寄与できる人間形成を行うことを目的とする。

人文学科

日本の「文学」、「歴史」、「社会」、「文化」を研究対象とし、日本を基点とした世界の文化と社会を多角的に捉え、課題の解決に貢献し、より良い共生社会の実現と世界の発展に寄与できる人材の養成を目的とする。

グローバルスタディーズ学科

著しい発展と同時に多様な課題を抱え、世界が注目するアフリカ・アジア地域に学びの場を重点化し、世界の新しい関係性や構造をグローバルな視点で捉え、課題の解決に貢献し、より良い共生社会の実現と世界の発展に寄与できる人材の養成を目的とする。

(大学院)

- 第4条 本学に大学院をおく。
2 大学院の学則は、別に定める。

(修業年限)

- 第5条 本学の修業年限は4年とする。ただし、8年を超えて在学することはできない。
2 学長が有益と認めるときは、他の大学等における修学期間を修業年限に算入することができる。ただし、修業年限については1年を超えて算入する

よびマンガ文化の継承と発展に貢献する資質を備えた、よりよき社会人としての人間形成を行うことを目的とする。

マンガ学科

マンガの作品史、表現などについての理論および技法の修得にとどまらず、実践によってマンガ表現の発展に貢献できる資質を備えた人材の養成を目的とする。

アニメーション学科

アニメーションの作品史、表現などについての理論および技法の修得にとどまらず、実践によってアニメーションの発展に貢献できる資質を備えた人材の養成を目的とする。

ポピュラーカルチャー学部

国際的に注目される、ポピュラーカルチャー領域において、多角的な教育研究を行い、豊かな人間性を育む文化表現を通して、次世代の産業界の発展に貢献する資質を備えた、よりよき社会人としての人間形成を行うことを目的とする。

ポピュラーカルチャー学科

ポピュラーカルチャー領域における制作および理論の修得にとどまらず、時代の先端を切り開くコンテンツを創造し、次世代産業の発展に貢献できる資質を備えた人材の養成を目的とする。

人文学部

国際的な視野と体験を重視し、地球環境問題の深刻化、情報技術化、経済のグローバル化の時代に求められる人間の社会と文化についての学際的な教育研究を行うこと、および自立した思考力によって現実の社会と文化に貢献する資質を備えた、よりよき社会人としての人間形成を行うことを目的とする。

総合人文学科

主に以下の5つの視点から学士課程教育を行い、これら視点間の学際的な連関にも配慮して、総合的な教養を備えた人材の養成を目的とする。
(1) 物事を論理的・根源的に考える「哲学」的な視点。(2) 表現された「私」をみることで初めて認識できる「私」について考える「文学」の視点。(3) 人間がどこから来たのか、そしていま、どのような形になっているのかを学ぶ「歴史」の視点。(4) 「私」の問題として社会について考え、「私」という立場から働きかけることを学ぶ「社会」の視点。(5) 「自分とは何か」「人間とは何か」「私たちはいかに生きるべきか」という究極の問いを追究する「人文学」の視点。

(大学院)

- 第4条 本学に大学院をおく。
2 大学院の学則は、別に定める。

(修業年限)

- 第5条 本学の修業年限は4年とする。ただし、8年を超えて在学することはできない。
2 学長が有益と認めるときは、他の大学等における修学期間を修業年限に算入することができる。ただし、修業年限については1年を超えて算入する

ことはできない。

- 3 前項の規定は、外国の大学における修学期間についても準用する。

第2章 学年・学期および休業日 (学年)

第6条 本学の学年は4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

(学期および授業日数)

第7条 1学年の授業日数は定期試験の日数を含めて35週、210日を下らないものとし、1学年を分けて次の学期とする。

- ① 第1クォーター
- ② 第2クォーター
- ③ 第3クォーター
- ④ 第4クォーター

2 第1クォーター、第3クォーターの開始日はそれぞれ4月1日、10月1日とし、第2クォーター・第4クォーターの開始日は、学長が年度ごとに定める。

3 第2クォーター、第4クォーターの終了日はそれぞれ9月30日、3月31日とし、第1クォーター・第3クォーターの終了日は、学長が年度ごとに定める。

4 学長が必要と認めるときは、クォーターの開始日・終了日を変更することができる。

(休業日)

第8条 休業日は次のとおりとする。

- ① 日曜日
 - ② 国民の祝日に関する法律(昭和23年法律第178号)に規定する休日
 - ③ 春季・夏季・秋季・冬季の休業期間は、学長が年度ごとに定める。
- 2 学長が必要と認めるときは、臨時に休業日を設定、または休業日を変更することができる。
- 3 学長が必要と認めるときは、休業日に授業を行うことができる。

第3章 教育課程・単位・教育課程の履修 (教育課程の編成)

第9条 本学は、学部および学科等の教育上の目的を達成するために必要な授業科目を開設し、体系的に教育課程を編成する。

2 教育課程は、各授業科目を必修科目、選択科目に分け、これを各年次に配当して編成する。

(授業科目および単位数)

第10条 本学の授業科目および単位数は別表Ⅰ、別表Ⅱ、別表Ⅲ、および別表Ⅳのとおりとする。

2 学長は他学部および他学科が開設する授業科目の中から学部交流科目および学科交流科目を定め、当該学部および学科の卒業に必要な単位とすることができる。

ことはできない。

- 3 前項の規定は、外国の大学における修学期間についても準用する。

第2章 学年・学期および休業日 (学年)

第6条 本学の学年は4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

(学期および授業日数)

第7条 1学年の授業日数は定期試験の日数を含めて35週、210日を下らないものとし、1学年を分けて次の学期とする。

- ① 前期 4月1日より9月30日まで
- ② 後期 10月1日より3月31日まで

2 第1クォーター、第3クォーターの開始日はそれぞれ4月1日、10月1日とし、第2クォーター・第4クォーターの開始日は、学長が年度ごとに定める。

3 第2クォーター、第4クォーターの終了日はそれぞれ9月30日、3月31日とし、第1クォーター・第3クォーターの終了日は、学長が年度ごとに定める。

4 学長が必要と認めるときは、クォーターの開始日・終了日を変更することができる。

(休業日)

第8条 休業日は次のとおりとする。

- ① 日曜日
 - ② 国民の祝日に関する法律(昭和23年法律第178号)に規定する休日
 - ③ 春季・夏季・冬季の休業期間は、各年度ごとに定める。
- 2 学長が必要と認めるときは、臨時に休業日を設定、または休業日を変更することができる。
- 3 学長が必要と認めるときは、休業日に授業を行うことができる。

第3章 教育課程・単位・教育課程の履修 (教育課程の編成)

第9条 本学は、学部および学科等の教育上の目的を達成するために必要な授業科目を開設し、体系的に教育課程を編成する。

2 教育課程は、各授業科目を必修科目、選択科目に分け、これを各年次に配当して編成する。

(授業科目および単位数)

第10条 本学の授業科目および単位数は別表Ⅰ、別表Ⅱ、別表Ⅲ、および別表Ⅳのとおりとする。

2 学長は他学部および他学科が開設する授業科目の中から学部交流科目および学科交流科目を定め、当該学部および学科の卒業に必要な単位とすることができる。

(単位計算方法)

第 11 条 各授業科目の単位数は、1 単位の授業科目を 45 時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、次の各号の基準によって計算する。

- (1) 講義および演習については、15 時間から 30 時間までの範囲で定められた時間の授業をもって 1 単位とする。
 - (2) 実験、実習および実技等の授業については、30 時間から 45 時間までの範囲で定められた時間の授業をもって 1 単位とする。ただし、個人指導による実技の授業については、相応の時間の授業をもって 1 単位とする。
- 2 前項の規定にかかわらず、卒業論文、卒業制作、学外学修・個別課題学習等の授業科目および公の技能審査等による認定を受けた者については、これらの学修の成果を評価して適切な単位を授与することができる。

(教育課程の履修)

第 12 条 学生は原則として、別表 I に定める教育課程に従い、各年次に担当された授業科目を履修する。

- 2 学生が各年次所定の授業科目を履修しない場合、または所定の単位を修得しない場合は、次学年に進級することができない。進級に関する事項は別にこれを定める。
- 3 卒業に必要な単位は、124 単位とする。

(他の大学または短期大学における授業科目の履修等)

第 13 条 学長が教育上有益と認めるときは、学生が他の大学または短期大学の授業科目を履修することを認める。

- 2 前項の規定に基づいて学生が履修した単位は 30 単位を超えない範囲で、本学で修得したものとみなすことができる。
- 3 前項の規定は、学生が外国の大学に留学する場合に準用する。
- 4 留学に関する規程は、別にこれを定める。

(大学以外の教育施設等における学修)

第 14 条 学長が本学における教育水準を有し、教育上有益と認めるときは、学生が行う高等専門学校の専攻科における学修、修業年限 2 年以上の専修学校専門課程における学修、文部科学大臣の認定を受けた技能審査の合格に係る学修を本学における履修とみなし単位を与えることができる。

- 2 前項により与えることができる単位数は 30 単位を超えないものとする。

(入学前の既習得単位等の認定)

第 15 条 学長が教育上有益と認めるときは、学生が本学入学前に大学または短期大学において履修した授業科目について修得した単位を本学で修得したものとみなすことができる。

(単位計算方法)

第 11 条 各授業科目の単位数は、1 単位の授業科目を 45 時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、次の各号の基準によって計算する。

- (1) 講義および演習については、15 時間から 30 時間までの範囲で定められた時間の授業をもって 1 単位とする。
 - (2) 実験、実習および実技等の授業については、30 時間から 45 時間までの範囲で定められた時間の授業をもって 1 単位とする。ただし、個人指導による実技の授業については、相応の時間の授業をもって 1 単位とする。
- 2 前項の規定にかかわらず、卒業論文、卒業制作、学外学修・個別課題学習等の授業科目および公の技能審査等による認定を受けた者については、これらの学修の成果を評価して適切な単位を授与することができる。

(教育課程の履修)

第 12 条 学生は原則として、別表 I に定める教育課程に従い、各年次に担当された授業科目を履修する。

- 2 学生が各年次所定の授業科目を履修しない場合、または所定の単位を修得しない場合は、次学年に進級することができない。進級に関する事項は別にこれを定める。
- 3 卒業に必要な単位は、124 単位とする。

(他の大学または短期大学における授業科目の履修等)

第 13 条 学長が教育上有益と認めるときは、学生が他の大学または短期大学の授業科目を履修することを認める。

- 2 前項の規定に基づいて学生が履修した単位は 30 単位を超えない範囲で、本学で修得したものとみなすことができる。
- 3 前項の規定は、学生が外国の大学に留学する場合に準用する。
- 4 留学に関する規程は、別にこれを定める。

(大学以外の教育施設等における学修)

第 14 条 学長が本学における教育水準を有し、教育上有益と認めるときは、学生が行う高等専門学校の専攻科における学修、修業年限 2 年以上の専修学校専門課程における学修、文部科学大臣の認定を受けた技能審査の合格に係る学修を本学における履修とみなし単位を与えることができる。

- 2 前項により与えることができる単位数は 30 単位を超えないものとする。

(入学前の既習得単位等の認定)

第 15 条 学長が教育上有益と認めるときは、学生が本学入学前に大学または短期大学において履修した授業科目について修得した単位を本学で修得したものとみなすことができる。

- 2 学長が教育上有益と認めるときは、本学に入学する前に行った前条第1項に規定する学修を本学における授業科目の履修とみなし、単位を与えることができる。
- 3 前2項により修得したものとみなし、または与えることのできる単位数は、編入学の場合を除き、本学において修得した単位以外のものについては、あわせて30単位を超えないものとする。

(特別聴講生)

第16条 他の大学等の学生で、当該他の大学等との協議に基づき、本学において授業科目を履修することを志願する者については特別聴講生として、学長がこれを許可することがある。

- 2 特別聴講生に関する規程は本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(履修登録)

第17条 学生は履修しようとする授業科目を毎学期始め、所定の期日までに届け出なければならない。

- 2 学生は当該学部が定める登録上限単位数の範囲内で履修登録しなければならない。

(資格の取得)

第18条 本学に教育職員免許状授与の所要資格を得させるための課程をおく。

本学において教育職員免許状の取得を希望する者は、教育職員免許法および教育免許法施行規則に基づき、本学が別表Ⅱに定める教職および教科に関する専門科目を履修し、その単位を修得しなければならない。

本学における教育職員免許状の教科および種類は、以下の表に掲げるとおりとする。

学部	学科	免許状の種類(教科)
芸術学部	造形学科	中学校教諭一種免許状(美術)
		高等学校教諭一種免許状(美術)
		高等学校教諭一種免許状(工芸)
デザイン学部	イラスト学科	中学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(美術)
	ビジュアルデザイン学科	中学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(美術)
	プロダクトデザイン学科	中学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(工芸)
マンガ学	マンガ学科	中学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(美術)

- 2 学長が教育上有益と認めるときは、本学に入学する前に行った前条第1項に規定する学修を本学における授業科目の履修とみなし、単位を与えることができる。

- 3 前2項により修得したものとみなし、または与えることのできる単位数は、編入学の場合を除き、本学において修得した単位以外のものについては、あわせて30単位を超えないものとする。

(特別聴講生)

第16条 他の大学等の学生で、当該他の大学等との協議に基づき、本学において授業科目を履修することを志願する者については特別聴講生として、学長がこれを許可することがある。

- 2 特別聴講生に関する規程は本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(履修登録)

第17条 学生は履修しようとする授業科目を毎学期始め、所定の期日までに届け出なければならない。

- 2 学生は当該学部が定める登録上限単位数の範囲内で履修登録しなければならない。

(資格の取得)

第18条 本学に教育職員免許状授与の所要資格を得させるための課程をおく。

本学において教育職員免許状の取得を希望する者は、教育職員免許法および教育免許法施行規則に基づき、本学が別表Ⅱに定める教職および教科に関する専門科目を履修し、その単位を修得しなければならない。

本学における教育職員免許状の教科および種類は、以下の表に掲げるとおりとする。

学部	学科	免許状の種類(教科)
芸術学部	造形学科	中学校教諭一種免許状(美術)
		高等学校教諭一種免許状(美術)
		高等学校教諭一種免許状(工芸)
デザイン学部	イラスト学科	中学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(美術)
	ビジュアルデザイン学科	中学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(美術)
	プロダクトデザイン学科	中学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(工芸)
マンガ学	マンガ学科	中学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(美術)

部	アニメーション学科	中学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(美術)
国際文化学部	人文学科	中学校教諭一種免許状(国語) 中学校教諭一種免許状(社会) 高等学校教諭一種免許状(国語) 高等学校教諭一種免許状(地理歴史) 高等学校教諭一種免許状(公民)
	グローバルスタディーズ学科	中学校教諭一種免許状(社会) 高等学校教諭一種免許状(公民)

2 図書館司書の資格を取得しようとする者は、図書館法および図書館法施行規則に基づき、本学が別表Ⅲに定める図書館司書課程に関する授業科目を履修し、その単位を修得しなければならない。図書館司書課程を設置する学部および学科は、以下の表に掲げるとおりとする。

学部	学科
芸術学部	造形学科
デザイン学部	イラスト学科
	ビジュアルデザイン学科
	プロダクトデザイン学科
マンガ学部	マンガ学科
	アニメーション学科
メディア表現学部	メディア表現学科
国際文化学部	人文学科 グローバルスタディーズ学科

3 博物館学芸員の資格を取得しようとする者は、博物館法および博物館法施行規則に基づき、本学が別表Ⅳに定める図書館司書課程に関する授業科目を履修し、その単位を修得しなければならない。博物館学芸員課程を設置する学部および学科は、以下の表に掲げるとおりとする。

学部	学科
芸術学部	造形学科
デザイン学部	イラスト学科
	ビジュアルデザイン学科
	プロダクトデザイン学科
マンガ学部	マンガ学科
	アニメーション学科
メディア表現学部	メディア表現学科
国際文化学部	人文学科 グローバルスタディーズ

部	アニメーション学科	中学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(美術)
人文学部	総合人文学科	中学校教諭一種免許状(国語) 中学校教諭一種免許状(社会) 高等学校教諭一種免許状(国語) 高等学校教諭一種免許状(地理歴史) 高等学校教諭一種免許状(公民)

2 図書館司書の資格を取得しようとする者は、図書館法および図書館法施行規則に基づき、本学が別表Ⅲに定める図書館司書課程に関する授業科目を履修し、その単位を修得しなければならない。図書館司書課程を設置する学部および学科は、以下の表に掲げるとおりとする。

学部	学科
芸術学部	造形学科
デザイン学部	イラスト学科
	ビジュアルデザイン学科
	プロダクトデザイン学科
マンガ学部	マンガ学科
	アニメーション学科
ポピュラーカルチャー学部	ポピュラーカルチャー学科
人文学部	総合人文学科

3 博物館学芸員の資格を取得しようとする者は、博物館法および博物館法施行規則に基づき、本学が別表Ⅳに定める図書館司書課程に関する授業科目を履修し、その単位を修得しなければならない。博物館学芸員課程を設置する学部および学科は、以下の表に掲げるとおりとする。

学部	学科
芸術学部	造形学科
デザイン学部	イラスト学科
	ビジュアルデザイン学科
	プロダクトデザイン学科
マンガ学部	マンガ学科
	アニメーション学科
ポピュラーカルチャー学部	ポピュラーカルチャー学科
人文学部	総合人文学科

	学科
--	-----------

第4章 教育課程修了の認定・単位の授与・卒業および称号

(教育課程修了の認定)

第19条 教育課程修了の認定は授業科目の試験、研究報告の成績を審査し、その結果に基づき、教授会の審議を経て学長が行う。

- 2 成績の評価はS(100点～90点)、A(89点～80点)、B(79点～70点)、C(69点～60点)、F(59点以下)、K(評価対象外)とし、S、A、B、Cをもって合格とする。
- 3 総合成績評価としてGPAを用いる場合は、前項の成績評価のSを4、Aを3、Bを2、Cを1、FおよびKを0の評点に置き換え、履修科目の単位数で乗じた点数の合計を、総履修科目単位数で除して算出する。

(単位の授与)

第20条 学長は、別表IからIVに定める授業科目を履修した学生に対し、当該授業科目の試験および研究報告の成績を審査し、その結果に基づき、教授会の審議を経て、相当する数の単位を与える。

(卒業)

第21条 学長は本学の学部で4年以上在学し、第12条に規定する卒業に必要な単位を修得し、かつ学費等納入金について大学への諸債務を滞納していない者について、教授会の審議を経て卒業を認定する。

- 2 学長は卒業を認定した者に対し、学位記を授与する。

(学位の授与)

第22条 本学の芸術学部、デザイン学部およびマンガ学部を卒業した者に、学士(芸術)の学位を授与する。

2 本学のメディア表現学部を卒業した者に、学士(メディア表現)の学位を授与する。

3 本学の国際文化学部を卒業した者に、学士(文化)の学位を授与する。

第5章 入学・編入学・転入学・休学・復学・退学・転学・除籍および再入学

(入学)

第23条 本学の入学は学年の始めとする。

2 前項の規定にかかわらず、国際文化学部については、外国人留学生・帰国生徒の第3クォーターよりの入学を認めることができる。

(入学資格)

第24条 本学の第1年次に入学することのできる者は、次の各号のいずれかに該当する者でなければならない。

- ① 高等学校を卒業した者
- ② 通常の課程による12年の学校教育を修了した

第4章 教育課程修了の認定・単位の授与・卒業および称号

(教育課程修了の認定)

第19条 教育課程修了の認定は授業科目の試験、研究報告の成績を審査し、その結果に基づき、教授会の審議を経て学長が行う。

- 2 成績の評価はS(100点～90点)、A(89点～80点)、B(79点～70点)、C(69点～60点)、F(59点以下)、K(評価対象外)とし、S、A、B、Cをもって合格とする。
- 3 総合成績評価としてGPAを用いる場合は、前項の成績評価のSを4、Aを3、Bを2、Cを1、FおよびKを0の評点に置き換え、履修科目の単位数で乗じた点数の合計を、総履修科目単位数で除して算出する。

(単位の授与)

第20条 学長は、別表IからIVに定める授業科目を履修した学生に対し、当該授業科目の試験および研究報告の成績を審査し、その結果に基づき、教授会の審議を経て、相当する数の単位を与える。

(卒業)

第21条 学長は本学の学部で4年以上在学し、第12条に規定する卒業に必要な単位を修得し、かつ学費等納入金について大学への諸債務を滞納していない者について、教授会の審議を経て卒業を認定する。

- 2 学長は卒業を認定した者に対し、学位記を授与する。

(学位の授与)

第22条 本学の芸術学部、デザイン学部、マンガ学部およびポピュラーカルチャー学部を卒業した者に、学士(芸術)の学位を授与する。

2 本学の人文学部を卒業した者に、学士(人文)の学位を授与する。

第5章 入学・編入学・転入学・休学・復学・退学・転学・除籍および再入学

(入学)

第23条 本学の入学は学年の始めとする。

2 前項の規定にかかわらず、人文学部については、外国人留学生・帰国生徒の後期よりの入学を認めることができる。

(入学資格)

第24条 本学の第1年次に入学することのできる者は、次の各号のいずれかに該当する者でなければならない。

- ① 高等学校を卒業した者
- ② 通常の課程による12年の学校教育を修了した

者(通常の課程以外の課程によりこれに相当する学校教育を修了した者を含む)

- ③ 外国において学校教育における12年の課程を修了した者、またはこれに準ずる者で文部科学大臣の指定した者
- ④ 文部科学大臣の指定した者
- ⑤ 文部科学大臣が高等学校の課程と同等の課程を有するものとして認定した在外教育施設の当該課程を修了した者
- ⑥ 大学入学資格検定規程により文部科学大臣の行う大学入学資格検定に合格した者
- ⑦ 相当の年齢に達し、高等学校を卒業した者と同等以上の学力があるものと本学が認めた者

(入学志願手続および合否判定)

第25条 入学を志願する者は、本学所定の出願書類に別表Vに定める入学検定料を添えて提出しなければならない。

- 2 提出の方法、時期、同時に提出すべき書類等については別に定める。
- 3 学長は入学を志願する者に対して入学試験を実施する。
- 4 学長は入学試験を受験した者に対して、教授会における合否判定の審議を経て、結果を通知する。

(入学手続金の納入および入学許可)

第26条 入学試験に合格した者は、学長が指定する期日までに所定の納付金を納入し、かつ必要書類を提出しなければならない。

- 2 学長は、前項の規定により所定の納付金を納入し、必要書類を提出した者に対して、入学を許可する。

(編入学)

第27条 本学の第3年次および第2年次に編入学を希望する者については、選考のうえ、学長はこれを許可することがある。

- 2 第3年次に編入学できる者は、次の各号のいずれかに該当する者とする。
 - ① 大学を卒業した者、または大学に2年以上在学した者
 - ② 短期大学または高等専門学校を卒業した者
 - ③ 専修学校の専門課程を修了した者のうち、学校教育法第132条の規定により大学に編入学できる者
- 3 第2年次に編入学できる者は、次の各号のいずれかに該当する者とする。
 - ① 大学に1年以上在学した者
 - ② 短期大学または高等専門学校を卒業した者
- 4 前2項の規定により入学を許可された者がすでに履修した科目および単位の取扱いについては、別にこれを定める。

(転入学)

第28条 他の大学に1年以上在学してから、本学の学部転入学しようとする者について、選考のう

者(通常の課程以外の課程によりこれに相当する学校教育を修了した者を含む)

- ③ 外国において学校教育における12年の課程を修了した者、またはこれに準ずる者で文部科学大臣の指定した者
- ④ 文部科学大臣の指定した者
- ⑤ 文部科学大臣が高等学校の課程と同等の課程を有するものとして認定した在外教育施設の当該課程を修了した者
- ⑥ 大学入学資格検定規程により文部科学大臣の行う大学入学資格検定に合格した者
- ⑦ 相当の年齢に達し、高等学校を卒業した者と同等以上の学力があるものと本学が認めた者

(入学志願手続および合否判定)

第25条 入学を志願する者は、本学所定の出願書類に別表Vに定める入学検定料を添えて提出しなければならない。

- 2 提出の方法、時期、同時に提出すべき書類等については別に定める。
- 3 学長は入学を志願する者に対して入学試験を実施する。
- 4 学長は入学試験を受験した者に対して、教授会における合否判定の審議を経て、結果を通知する。

(入学手続金の納入および入学許可)

第26条 入学試験に合格した者は、学長が指定する期日までに所定の納付金を納入し、かつ必要書類を提出しなければならない。

- 2 学長は、前項の規定により所定の納付金を納入し、必要書類を提出した者に対して、入学を許可する。

(編入学)

第27条 本学の第3年次および第2年次に編入学を希望する者については、選考のうえ、学長はこれを許可することがある。

- 2 第3年次に編入学できる者は、次の各号のいずれかに該当する者とする。
 - ① 大学を卒業した者、または大学に2年以上在学した者
 - ② 短期大学または高等専門学校を卒業した者
 - ③ 専修学校の専門課程を修了した者のうち、学校教育法第132条の規定により大学に編入学できる者
- 3 第2年次に編入学できる者は、次の各号のいずれかに該当する者とする。
 - ① 大学に1年以上在学した者
 - ② 短期大学または高等専門学校を卒業した者
- 4 前2項の規定により入学を許可された者がすでに履修した科目および単位の取扱いについては、別にこれを定める。

(転入学)

第28条 他の大学に1年以上在学してから、本学の学部転入学しようとする者について、選考のう

え、既に在学していた大学および履修した授業科目の内容と成績とを考慮して、学長は入学を許可することができる。

- 2 本条により入学を許可された者の修学年限は、他大学における在学年数が1年であった者は3年、2年以上であった者は2年とし、それぞれ6年、4年を超えて在学することはできない。
- 3 転入学を許可された者が既に履修した授業科目および単位の取扱いについては、別に定めるところによる。

(転学部、転学科)

第28条の2 転学部および転学科に関する規程は、別にこれを定める。

(休学)

第29条 学生が疾病その他の事由によって1ヶ月以上就学することができないときは、保証人と連署のうえ、所定の様式により願い出て、休学することができる。

- 2 休学期間は1年以内とする。ただし、特別の理由がある場合は1年を限度として、休学期間の延長を認めることができる。
- 3 前項の定めに関わらず、学長が特別な理由があると認めるときは、休学期間を延長することができる。
- 4 休学の期間は通算して4年を超えることができない。
- 5 休学の期間は、第5条に定める修業年限および在学年限に算入しない。
- 6 休学期間中の学費は、1クォーター10,000円、通年40,000円とし、納入等に関する規定は第34条による。
- 7 休学に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(復学)

第30条 休学者が復学しようとするときは、保証人連署のうえ、所定の様式により願い出て、学長の許可を得たうえ復学することができる。

- 2 復学は、学期の始めからとする。
- 3 復学に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(退学および転学)

第31条 疾病、その他の事由によって退学または転学しようとする者は、保証人連署のうえ、所定の様式により退学願または転学願を提出しなければならない。

- 2 退学および転学に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。
- 3 懲戒による退学に関する規程は、第50条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(除籍)

第32条 学長は、学生が各号のいずれかに該当するときは、学生を除籍する。

- ① 第5条に規定する在学年限を超えた者

え、既に在学していた大学および履修した授業科目の内容と成績とを考慮して、学長は入学を許可することができる。

- 2 本条により入学を許可された者の修学年限は、他大学における在学年数が1年であった者は3年、2年以上であった者は2年とし、それぞれ6年、4年を超えて在学することはできない。
- 3 転入学を許可された者が既に履修した授業科目および単位の取扱いについては、別に定めるところによる。

(転学部、転学科)

第28条の2 転学部および転学科に関する規程は、別にこれを定める。

(休学)

第29条 学生が疾病その他の事由によって3ヶ月以上就学することができないときは、保証人と連署のうえ、所定の様式により願い出て、休学することができる。

- 2 休学期間は1年以内とする。ただし、特別の理由がある場合は1年を限度として、休学期間の延長を認めることができる。
- 3 前項の定めに関わらず、学長が特別な理由があると認めるときは、休学期間を延長することができる。
- 4 休学の期間は通算して4年を超えることができない。
- 5 休学の期間は、第5条に定める修業年限および在学年限に算入しない。
- 6 休学期間中の学費は、半期10,000円、通年20,000円とし、納入等に関する規定は第34条による。
- 7 休学に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(復学)

第30条 休学者が復学しようとするときは、保証人連署のうえ、所定の様式により願い出て、学長の許可を得たうえ復学することができる。

- 2 復学は、学期の始めからとする。
- 3 復学に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(退学および転学)

第31条 疾病、その他の事由によって退学または転学しようとする者は、保証人連署のうえ、所定の様式により退学願または転学願を提出しなければならない。

- 2 退学および転学に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。
- 3 懲戒による退学に関する規程は、第50条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(除籍)

第32条 学長は、学生が各号のいずれかに該当するときは、学生を除籍する。

- ① 第5条に規定する在学年限を超えた者

- ② 第 29 条第 2 項および第 3 項に規定する休学年限を超えた者
 - ③ 所定の授業料等学費の納付を怠り、その督促を受けてもこれを納付しない者
 - ④ 第 30 条の復学手続きのない者
 - ⑤ 本学での就学の意思のない者
 - ⑥ 本人が死亡したとき
 - ⑦ その他、学長が相当の理由を認めた者
- 2 除籍に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(再入学)

- 第 33 条 退学または除籍となった者が、保証人連署のうえ、所定の様式により再入学を願い出たときは、教授会の審議を経て、学長がこれを許可することがある。
- 2 再入学を願い出ることのできる期間は、退学または除籍の日より 2 年以内とする。
 - 3 再入学は学期の始めからとする。
 - 4 再入学に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

第 1 節 入学検定料、入学金および授業料
(学費等納付金および手数料)

- 第 34 条 入学検定料、入学金および授業料は、別表 V の①のとおりとする。
- 2 前項に規定する既納の入学検定料、入学金および授業料等の学費は、原則として返還しない。
 - 3 前項の規定にかかわらず、入学許可を得た者で、指定の期日までに入学手続きの取り消しを願い出た者については、入学金またはこれに相当する金額を除く学費を返還する。
 - 4 入学検定料以外の手数料については、別にこれを定める。
 - 5 学費納入等に関する規定は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

第 2 節 職員組織および教授会
(職員組織)

- 第 35 条 本学に学長、副学長、教授、准教授、講師、助教、助手、事務職員、その他の職員をおく。
- 2 学長は本学則に定める職務を行い、所属職員を統督する。
 - 3 副学長は、学長の職務を助ける。
 - 4 教授、准教授、講師、助教、助手、事務職員、その他の職員の職務は、学校教育法、その他の法令および本学諸規程の定めるところによる。

(教授会)

- 第 36 条 本学の教育研究に関する事項を審議するために教授会をおく。
- 2 教授会は、これを分けて全学教授会と学部教授会とする。
 - 3 教授会に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(全学教授会)

- ② 第 29 条第 2 項および第 3 項に規定する休学年限を超えた者
 - ③ 所定の授業料等学費の納付を怠り、その督促を受けてもこれを納付しない者
 - ④ 第 30 条の復学手続きのない者
 - ⑤ 本学での就学の意思のない者
 - ⑥ 本人が死亡したとき
 - ⑦ その他、学長が相当の理由を認めた者
- 2 除籍に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(再入学)

- 第 33 条 退学または除籍となった者が、保証人連署のうえ、所定の様式により再入学を願い出たときは、教授会の審議を経て、学長がこれを許可することがある。
- 2 再入学を願い出ることのできる期間は、退学または除籍の日より 2 年以内とする。
 - 3 再入学は学期の始めからとする。
 - 4 再入学に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

第 1 節 入学検定料、入学金および授業料
(学費等納付金および手数料)

- 第 34 条 入学検定料、入学金および授業料は、別表 V の①のとおりとする。
- 2 前項に規定する既納の入学検定料、入学金および授業料等の学費は、原則として返還しない。
 - 3 前項の規定にかかわらず、入学許可を得た者で、指定の期日までに入学手続きの取り消しを願い出た者については、入学金またはこれに相当する金額を除く学費を返還する。
 - 4 入学検定料以外の手数料については、別にこれを定める。
 - 5 学費納入等に関する規定は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

第 2 節 職員組織および教授会
(職員組織)

- 第 35 条 本学に学長、副学長、教授、准教授、講師、助教、助手、事務職員、その他の職員をおく。
- 2 学長は本学則に定める職務を行い、所属職員を統督する。
 - 3 副学長は、学長の職務を助ける。
 - 4 教授、准教授、講師、助教、助手、事務職員、その他の職員の職務は、学校教育法、その他の法令および本学諸規程の定めるところによる。

(教授会)

- 第 36 条 本学の教育研究に関する事項を審議するために教授会をおく。
- 2 教授会は、これを分けて全学教授会と学部教授会とする。
 - 3 教授会に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(全学教授会)

第 36 条の 2 全学教授会は、学長、専任の教授・准教授および講師を構成員として、これを組織する。

2 全学教授会は、前項に定める者の他、必要に応じ他の教職員などの出席を求めることができる。

3 全学教授会は、次の各号に掲げる事項を審議する。

- ① 全学に関する重要事項
- ② 各学部間の連絡調整に関する事項
- ③ 全学共通の教育課程の編成に関する事項
- ④ 全学共通の授業科目の担当に関する事項
- ⑤ 教員の人事に関する事項
- ⑥ その他学長が必要と認める事項

(学部教授会)

第 36 条の 3 学部教授会は、各学部に所属する専任の教授・准教授および講師を構成員として、これを組織する。

2 学部教授会は、前項に定める者の他、必要に応じ他の教職員などの出席を求めることができる。

3 学部教授会は、学長が次に掲げる事項について決定を行うにあたり意見を述べるものとする。

- ① 学生の入学(編入学・転入学を含む)、卒業および課程の修了
- ② 学位の授与
- ③ 前 2 号に掲げるもののほか、教育研究に関する重要な事項で、学部教授会の意見を聴くことが必要なものとして学長が定めるもの
- 4 学部教授会は、前項に規定するもののほか、学長及び学部長(以下、この項において「学長等」という。)がつかさどる教育研究に関する事項について審議し、及び学長等の求めに応じ、意見を述べるることができる。

第 3 節 聴講生・科目等履修生・委託生・研究生・外国人留学生・帰国生徒および社会人

(聴講生)

第 37 条 本学の教職課程科目のうち「教職に関する専門科目」について聴講しようとする者があるときは、本学の教育・研究に支障のない場合に限り教授会の審議を経て、学長がこれを許可する。

2 聴講を許可する授業科目は 1 年度につき 12 単位とし、在学年限は 1 年以内とする。

3 学長は、特定の授業科目を履修し、その単位を修得した聴講生に対して、単位修得証明書を交付することができる。

4 聴講料等の納付金については、別表 V の③に定めるところによる。

5 聴講生に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(科目等履修生)

第 38 条 本学の学生以外の者が本学の特定の授業科目を履修しようとするときは、本学の教育・研究に支障がない限り、教授会の審議を経て、学長がこれを許可することができる。

2 履修を許可する授業科目の単位数は、1 年度に

第 36 条の 2 全学教授会は、学長、専任の教授・准教授および講師を構成員として、これを組織する。

2 全学教授会は、前項に定める者の他、必要に応じ他の教職員などの出席を求めることができる。

3 全学教授会は、次の各号に掲げる事項を審議する。

- ① 全学に関する重要事項
- ② 各学部間の連絡調整に関する事項
- ③ 全学共通の教育課程の編成に関する事項
- ④ 全学共通の授業科目の担当に関する事項
- ⑤ 教員の人事に関する事項
- ⑥ その他学長が必要と認める事項

(学部教授会)

第 36 条の 3 学部教授会は、各学部に所属する専任の教授・准教授および講師を構成員として、これを組織する。

2 学部教授会は、前項に定める者の他、必要に応じ他の教職員などの出席を求めることができる。

3 学部教授会は、学長が次に掲げる事項について決定を行うにあたり意見を述べるものとする。

- ① 学生の入学(編入学・転入学を含む)、卒業および課程の修了
- ② 学位の授与
- ③ 前 2 号に掲げるもののほか、教育研究に関する重要な事項で、学部教授会の意見を聴くことが必要なものとして学長が定めるもの
- 4 学部教授会は、前項に規定するもののほか、学長及び学部長(以下、この項において「学長等」という。)がつかさどる教育研究に関する事項について審議し、及び学長等の求めに応じ、意見を述べるることができる。

第 3 節 聴講生・科目等履修生・委託生・研究生・外国人留学生・帰国生徒および社会人

(聴講生)

第 37 条 本学の教職課程科目のうち「教職に関する専門科目」について聴講しようとする者があるときは、本学の教育・研究に支障のない場合に限り教授会の審議を経て、学長がこれを許可する。

2 聴講を許可する授業科目は 1 年度につき 12 単位とし、在学年限は 1 年以内とする。

3 学長は、特定の授業科目を履修し、その単位を修得した聴講生に対して、単位修得証明書を交付することができる。

4 聴講料等の納付金については、別表 V の③に定めるところによる。

5 聴講生に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(科目等履修生)

第 38 条 本学の学生以外の者が本学の特定の授業科目を履修しようとするときは、本学の教育・研究に支障がない限り、教授会の審議を経て、学長がこれを許可することができる。

2 履修を許可する授業科目の単位数は、1 年度に

- つき12単位とし、在学年限は1年以内とする。
- 3 学長は、特定の授業科目を履修し、その単位を修得した科目等履修生に対し、単位修得証明書を交付することができる。
 - 4 科目等履修の納付金については、別表Vの④に定めるところによる。
 - 5 科目等履修生に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(委託生)

- 第39条 公共団体その他の機関から本学の特定の学科に修学を委託されたときは、選考のうえこれを受託し、委託の目的に合致する特定の授業科目の履修について、学長がこれを許可することができる。
- 2 前項の特定の授業科目の履修およびその単位は、委託者の希望を考慮し教授会の審議を経て、学長が決定する。
 - 3 学長は、特定の授業科目を聴講し、その単位を修得した委託生に対し、単位修得証明書を交付することができる。
 - 4 委託生の委託料は、別表Vの①に規定する授業料相当額とする。
 - 5 委託生に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(研究生)

- 第40条 本学の専任教員のもとで研究しようとする者があるときは、教授会の審議を経て、学長がこれを許可することがある。
- 2 研究生の授業料等の学費は、別表Vの⑤に定めるところによる。
 - 3 研究生に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(外国人留学生)

- 第41条 勉学の目的をもった外国人で、第24条に定める要件を充足する者が本学への入学を志願するときは、選考のうえ、学長が入学を許可することがある。
- 2 外国人留学生に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(帰国生徒)

- 第42条 長期間の海外生活を体験した者で、第24条に定める要件を充足する者が本学への入学を志願するときは、選考のうえ、学長が入学を許可することがある。
- 2 帰国生徒に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(社会人)

- 第43条 社会的経験を有する者で、第24条に定める要件を充足する者が本学への入学を志願するときは、選考のうえ、学長が入学を許可することがある。
- 2 社会人に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

- つき12単位とし、在学年限は1年以内とする。
- 3 学長は、特定の授業科目を履修し、その単位を修得した科目等履修生に対し、単位修得証明書を交付することができる。
 - 4 科目等履修の納付金については、別表Vの④に定めるところによる。
 - 5 科目等履修生に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(委託生)

- 第39条 公共団体その他の機関から本学の特定の学科に修学を委託されたときは、選考のうえこれを受託し、委託の目的に合致する特定の授業科目の履修について、学長がこれを許可することができる。
- 2 前項の特定の授業科目の履修およびその単位は、委託者の希望を考慮し教授会の審議を経て、学長が決定する。
 - 3 学長は、特定の授業科目を聴講し、その単位を修得した委託生に対し、単位修得証明書を交付することができる。
 - 4 委託生の委託料は、別表Vの①に規定する授業料相当額とする。
 - 5 委託生に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(研究生)

- 第40条 本学の専任教員のもとで研究しようとする者があるときは、教授会の審議を経て、学長がこれを許可することがある。
- 2 研究生の授業料等の学費は、別表Vの⑤に定めるところによる。
 - 3 研究生に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(外国人留学生)

- 第41条 勉学の目的をもった外国人で、第24条に定める要件を充足する者が本学への入学を志願するときは、選考のうえ、学長が入学を許可することがある。
- 2 外国人留学生に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(帰国生徒)

- 第42条 長期間の海外生活を体験した者で、第24条に定める要件を充足する者が本学への入学を志願するときは、選考のうえ、学長が入学を許可することがある。
- 2 帰国生徒に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(社会人)

- 第43条 社会的経験を有する者で、第24条に定める要件を充足する者が本学への入学を志願するときは、選考のうえ、学長が入学を許可することがある。
- 2 社会人に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

か、別にこれを定める。

第4節 公開講座および履修証明プログラム (公開講座)

- 第44条 本学に公開講座をおくことができる。
- 2 公開講座は、一般市民に対し本学の教育を公開し、学問・芸術の研究向上に資することを目的とする。
 - 3 公開講座に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(履修証明プログラム)

- 第44条の2 本学に履修証明プログラムをおくことができる。
- 2 履修証明プログラムは、本学および他大学の学生以外の社会人等を対象として、体系的な知識、技術等の習得を目指す課程とする。
 - 3 履修証明プログラムに関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

第5節 情報館 (情報館)

- 第45条 本学に情報館をおき、教育および研究活動に必要な図書、文献、画像、視聴覚資料および研究資料を収集管理し、教職員、学生および一般市民の利用に供する。
- 2 情報館に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

第6節 保健施設および学生寮 (保健施設)

- 第46条 本学に教職員および学生の保健衛生を管理するために、保健室をおく。
- 2 学生は、毎年定められた時期に健康診断を受けなければならない。

(学生寮)

- 第47条 本学に学生寮をおく。
- 2 学生寮に関する規程は、別にこれを定める。

第7節 育英奨学制度 (育英奨学制度)

- 第48条 本学に育英奨学制度を設ける。
- 2 育英奨学制度に関する規程は、別にこれを定める。

第8節 賞罰 (表彰)

- 第49条 学長は、品行・学業とも優秀で他の模範となる学生に対して、表彰を行うことがある。

(懲戒)

- 第50条 学長は学則または規則に違反し、その他学生の本分に背く行為のあった学生に対して、教授会の審議を経て懲戒する。
- 2 懲戒は訓告、停学および退学とする。
 - 3 前項の退学は、次の各号のいずれかに該当する

か、別にこれを定める。

第4節 公開講座および履修証明プログラム (公開講座)

- 第44条 本学に公開講座をおくことができる。
- 2 公開講座は、一般市民に対し本学の教育を公開し、学問・芸術の研究向上に資することを目的とする。
 - 3 公開講座に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(履修証明プログラム)

- 第44条の2 本学に履修証明プログラムをおくことができる。
- 2 履修証明プログラムは、本学および他大学の学生以外の社会人等を対象として、体系的な知識、技術等の習得を目指す課程とする。
 - 3 履修証明プログラムに関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

第5節 情報館 (情報館)

- 第45条 本学に情報館をおき、教育および研究活動に必要な図書、文献、画像、視聴覚資料および研究資料を収集管理し、教職員、学生および一般市民の利用に供する。
- 2 情報館に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

第6節 保健施設および学生寮 (保健施設)

- 第46条 本学に教職員および学生の保健衛生を管理するために、保健室をおく。
- 2 学生は、毎年定められた時期に健康診断を受けなければならない。

(学生寮)

- 第47条 本学に学生寮をおく。
- 2 学生寮に関する規程は、別にこれを定める。

第7節 育英奨学制度 (育英奨学制度)

- 第48条 本学に育英奨学制度を設ける。
- 2 育英奨学制度に関する規程は、別にこれを定める。

第8節 賞罰 (表彰)

- 第49条 学長は、品行・学業とも優秀で他の模範となる学生に対して、表彰を行うことがある。

(懲戒)

- 第50条 学長は学則または規則に違反し、その他学生の本分に背く行為のあった学生に対して、教授会の審議を経て懲戒する。
- 2 懲戒は訓告、停学および退学とする。
 - 3 前項の退学は、次の各号のいずれかに該当する

者に対して行う。

- ① 性行不良で改善の見込みがないと認められる者
 - ② 正当の理由なく、出席が常でない者
 - ③ 大学の秩序を乱し、その他学生の本分に背く者
- 4 学生の懲戒に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

附 則

第 1 項 この学則に定めるもののほか、学則の施行に関し、さらに必要な事項は別にこれを定める。

第 2 項 この学則は **1979 (昭和 54)** 年 4 月 1 日から実施する。

第 3 項 **1979 (昭和 54)** 年度の美術学部造形学科・デザイン学科の総定員は第 4 条の規定にかかわらず次のとおりとする。

1979 (昭和 54) 年度

造形学科 120 名

デザイン学科 120 名

第 4 項 この学則は、**1982 (昭和 57)** 年 12 月 1 日から実施する。

第 5 項 この学則は、**1983 (昭和 58)** 年 4 月 1 日から実施する。

第 6 項 この学則は、**1984 (昭和 59)** 年 4 月 1 日から実施する。

第 7 項 この学則は、**1985 (昭和 60)** 年 4 月 1 日から実施する。

第 8 項 この学則は、**1986 (昭和 61)** 年 4 月 1 日から実施する。

第 9 項 この学則は、**1987 (昭和 62)** 年 4 月 1 日から実施する。

ただし、第 4 条の規定にかかわらず、**1987 (昭和 62)** 年度から **1995 (平成 7)** 年度までの間の入学定員は、次のとおりとする。

学部・学科等	入学定員
美術学部	人
造形学科	120
デザイン学科	120
計	240

第 10 項 この学則は、**1988 (昭和 63)** 年 4 月 1 日から実施する。

第 11 項 この学則は、**1989 (平成元)** 年 4 月 1 日から実施する。

第 12 項 この学則は、**1990 (平成 2)** 年 4 月 1 日から実施する。

第 13 項 この学則は、**1991 (平成 3)** 年 4 月 1 日から実施する。

第 18 条に規定する人文学部における英語・中学校 1 種免許状、高等学校 1 種免許状を取得しようとする者は、**1989 (平成元)** 年 4 月入学者より必要単位を履修できるものとする。

2 第 4 条および附則第 9 項ただし書きの規定にかかわらず、**1991 (平成 3)** 年度から **1999 (平成 11)** 年度までの間の入学定員は、次のとおりとする。

学部・学科等	入学定員
美術学部	人

者に対して行う。

- ① 性行不良で改善の見込みがないと認められる者
 - ② 正当の理由なく、出席が常でない者
 - ③ 大学の秩序を乱し、その他学生の本分に背く者
- 4 学生の懲戒に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

附 則

第 1 項 この学則に定めるもののほか、学則の施行に関し、さらに必要な事項は別にこれを定める。

第 2 項 この学則は昭和 **54** 年 4 月 1 日から実施する。

第 3 項 **昭和 54** 年度の美術学部造形学科・デザイン学科の総定員は第 4 条の規定にかかわらず次のとおりとする。

昭和 54 年度

造形学科 120 名

デザイン学科 120 名

第 4 項 この学則は、**昭和 57** 年 12 月 1 日から実施する。

第 5 項 この学則は、**昭和 58** 年 4 月 1 日から実施する。

第 6 項 この学則は、**昭和 59** 年 4 月 1 日から実施する。

第 7 項 この学則は、**昭和 60** 年 4 月 1 日から実施する。

第 8 項 この学則は、**昭和 61** 年 4 月 1 日から実施する。

第 9 項 この学則は、**昭和 62** 年 4 月 1 日から実施する。

ただし、第 4 条の規定にかかわらず、**昭和 62** 年度から **平成 7** 年度までの間の入学定員は、次のとおりとする。

学部・学科等	入学定員
美術学部	人
造形学科	120
デザイン学科	120
計	240

第 10 項 この学則は、**昭和 63** 年 4 月 1 日から実施する。

第 11 項 この学則は、**平成元年** 4 月 1 日から実施する。

第 12 項 この学則は、**平成 2** 年 4 月 1 日から実施する。

第 13 項 この学則は、**平成 3** 年 4 月 1 日から実施する。

第 18 条に規定する人文学部における英語・中学校 1 種免許状、高等学校 1 種免許状を取得しようとする者は、**平成元年** 4 月入学者より必要単位を履修できるものとする。

2 第 4 条および附則第 9 項ただし書きの規定にかかわらず、**平成 3** 年度から **平成 11** 年度までの間の入学定員は、次のとおりとする。

学部・学科等	入学定員
美術学部	人

美術学部	人
造形学科	150(1996(平成8)年度から1999(11)年度までは130人)
デザイン学科	150(1996(平成8)年度から1999(11)年度までは130人)
計	300(1996(平成8)年度から1999(11)年度までは260人)
人文学部	
人文学科	300
計	300

第14項 この学則は、**1992(平成4)**年4月1日から実施する。

ただし、第22条第1項については、**1991(平成3)**年12月1日より施行する。

第15項 この学則は、**1993(平成5)**年4月1日から実施する。

この学則は、**1993(平成5)**年4月1日入学者より適用する。**1993(平成5)**年以前の入学者(**1993(平成5)**年度美術学部編入生を含む)については、従来の第12条第1項別表Iを適用する。

第16項 この学則は、**1994(平成6)**年4月1日から実施する。

第17項 この学則は、**1996(平成8)**年4月1日から実施する。

2 ただし、第4条の規定にかかわらず、**1996(平成8)年度から1999(平成11)年度**までの間の入学定員は、次のとおりとする。

学部・学科等	入学定員
美術学部	人
造形学科	150
デザイン学科	150
計	300

第18項 この学則は、**1997(平成9)**年4月1日から実施する。

第19項 この学則は、**2000(平成12)**年4月1日から実施する。

2 別表I①に規定する芸術学部教育課程については全学年一斉に移行し、**1999(平成11)年度**以前入学者に対する移行・経過措置については、別にこれを定める。

3 第4条の規定にかかわらず、**2000(平成12)年度から2003(平成15)年**までの間の入学定員は、次のとおりとする。

学部・学科等	入学定員			
	2000 (平成12) 年度	2001 (平成13) 年度	2002 (平成14) 年度	2003 (平成15) 年度
芸術学部	人	人	人	人
造形学科	150	145	140	135
デザイン学科	170	165	160	155

造形学科	150(平成8年度から11年度までは130人)
デザイン学科	150(平成8年度から11年度までは130人)
計	300(平成8年度から11年度までは260人)
人文学部	
人文学科	300
計	300

第14項 この学則は、平成4年4月1日から実施する。

ただし、第22条第1項については、平成3年12月1日より施行する。

第15項 この学則は、平成5年4月1日から実施する。

この学則は、平成5年4月1日入学者より適用する。平成5年以前の入学者(平成5年度美術学部編入生を含む)については、従来の第12条第1項別表Iを適用する。

第16項 この学則は、平成6年4月1日から実施する。

第17項 この学則は、平成8年4月1日から実施する。

2 ただし、第4条の規定にかかわらず、平成8年度から平成11年度までの間の入学定員は、次のとおりとする。

学部・学科等	入学定員
美術学部	人
造形学科	150
デザイン学科	150
計	300

第18項 この学則は、平成9年4月1日から実施する。

第19項 この学則は、平成12年4月1日から実施する。

2 別表I①に規定する芸術学部教育課程については全学年一斉に移行し、平成11年度以前入学者に対する移行・経過措置については、別にこれを定める。

3 第4条の規定にかかわらず、平成12年度から平成15年までの間の入学定員は、次のとおりとする。

学部・学科等	入学定員			
	平成12 年度	平成13 年度	平成14 年度	平成15 年度
芸術学部	人	人	人	人
造形学科	150	145	140	135
デザイン学科	170	165	160	155
計	320	310	300	290
人文学部				
人文学科	248	236	224	212

計	320	310	300	290
人文学部				
人文学科	248	236	224	212
計	248	236	224	212

第20項 この学則は、**2001（平成13）**年4月1日から実施する。

ただし、第18条に規定する芸術学部マンガ学科における中学校教諭1種免許状(美術)および高等学校教諭1種免許状(美術)を取得しようとする者は、**2000（平成12）**年4月入学者より必要単位を履修できるものとする。

また、人文学部環境社会学科において図書館司書の資格を取得しようとする者および芸術学部マンガ学科・人文学部環境社会学科において博物館学芸員の資格を取得しようとする者は、**2000（平成12）**年4月入学者より必要単位を履修できるものとする。

第21項 この学則は、**2003（平成15）**年4月1日から実施する。

ただし、人文学部人文学科は、改定後の学則第3条の規定にかかわらず、当該学科に在籍する者が当該学科に在籍しなくなるまでの間、存続するものとする。

また、改定後の学則第4条の規定にかかわらず、**2003（平成15）**年度の人文学部社会メディア学科および文化表現学科の入学定員は、人文学部人文学科の臨時的定員の漸減計画による人数を継承し、以下のとおりとする。

学部・学科等	入学定員
人文学部	人
社会メディア学科	116
文化表現学科	96
計	212

第22項 この学則は、**2004（平成16）**年4月1日から実施する。

ただし、人文学部社会メディア学科において第18条に規定する高等学校教諭1種免許状(公民)を取得しようとする者は、**2003（平成15）**年4月入学者より必要単位を履修することができるものとする。

また、芸術学部造形学科・デザイン学科・マンガ学科、人文学部社会メディア学科・文化表現学科において図書館司書の資格を取得しようとする者、および人文学部社会メディア学科・文化表現学科において博物館学芸員の資格を取得しようとする者は、**2003（平成15）**年4月入学者より必要単位を履修することができるものとする。

第23項 この学則は、**2005（平成17）**年4月1日から実施する。

ただし、人文学部環境社会学科において第18条に規定する高等学校教諭1種免許状(公民)を取得しようとする者は、**2004（平成16）**年4月入学者より必要単位を履修することができるものとする。

第24項 この学則は、**2006（平成18）**年4月1日から実施する。

計	248	236	224	212
---	-----	-----	-----	-----

第20項 この学則は、**平成13**年4月1日から実施する。

ただし、第18条に規定する芸術学部マンガ学科における中学校教諭1種免許状(美術)および高等学校教諭1種免許状(美術)を取得しようとする者は、**平成12**年4月入学者より必要単位を履修できるものとする。

また、人文学部環境社会学科において図書館司書の資格を取得しようとする者および芸術学部マンガ学科・人文学部環境社会学科において博物館学芸員の資格を取得しようとする者は、**平成12**年4月入学者より必要単位を履修できるものとする。

第21項 この学則は、**平成15**年4月1日から実施する。

ただし、人文学部人文学科は、改定後の学則第3条の規定にかかわらず、当該学科に在籍する者が当該学科に在籍しなくなるまでの間、存続するものとする。

また、改定後の学則第4条の規定にかかわらず、**平成15**年度の人文学部社会メディア学科および文化表現学科の入学定員は、人文学部人文学科の臨時的定員の漸減計画による人数を継承し、以下のとおりとする。

学部・学科等	入学定員
人文学部	人
社会メディア学科	116
文化表現学科	96
計	212

第22項 この学則は、**平成16**年4月1日から実施する。

ただし、人文学部社会メディア学科において第18条に規定する高等学校教諭1種免許状(公民)を取得しようとする者は、**平成15**年4月入学者より必要単位を履修することができるものとする。

また、芸術学部造形学科・デザイン学科・マンガ学科、人文学部社会メディア学科・文化表現学科において図書館司書の資格を取得しようとする者、および人文学部社会メディア学科・文化表現学科において博物館学芸員の資格を取得しようとする者は、**平成15**年4月入学者より必要単位を履修することができるものとする。

第23項 この学則は、**平成17**年4月1日から実施する。

ただし、人文学部環境社会学科において第18条に規定する高等学校教諭1種免許状(公民)を取得しようとする者は、**平成16**年4月入学者より必要単位を履修することができるものとする。

第24項 この学則は、**平成18**年4月1日から実施する。

ただし、別表 I に規定する教育課程のうち、芸術学部基礎講義・演習科目、デザイン学部基礎講義・演習科目、マンガ学部基礎講義・演習科目、芸術学部専門講義科目、デザイン学部専門講義科目、デザイン学部建築学科専門教育科目の一部、マンガ学部専門講義科目については、芸術学部の **2005 (平成 17)** 年 4 月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

第 25 項 この学則は、**2007 (平成 19)** 年 4 月 1 日から実施する。

ただし、別表 I に規定する教育課程のうち、デザイン学部建築学科専門教育科目の「身体空間演習」と「インテリア表現演習」については **2007 (平成 19)** 年 4 月入学者より適用し、人文学部専門教育科目については **2005 (平成 17)** 年 4 月入学者より適用し、それ以外については **2006 (平成 18)** 年 4 月入学者より適用する。

第 26 項 この学則は、**2008 (平成 20)** 年 4 月 1 日から実施する。

ただし、別表 I に規定する教育課程のうち、芸術学部造形学科専門教育科目、デザイン学部基礎講義・演習科目、ビジュアルデザイン学科専門教育科目、マンガ学部基礎講義・演習科目、専門講義科目、アニメーション学科専門教育科目の一部については **2008 (平成 20)** 年 4 月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

また、第 34 条に規定する入学金は **2009 (平成 21)** 年 4 月入学者より適用し、授業料は、**2008 (平成 20)** 年 4 月入学者より適用する。

さらに、第 29 条第 5 項に規定する休学期間中の学費は、**2008 (平成 20)** 年 4 月 1 日より在籍学生に一斉適用する。

第 27 項 この学則は、**2009 (平成 21)** 年 4 月 1 日から実施する。

ただし、別表 I に規定する教育課程のうち、芸術学部基礎講義・演習科目の一部、専門講義科目、造形学科専門教育科目、素材表現学科専門教育科目の一部、デザイン学部基礎講義・演習科目の一部、ビジュアルデザイン学科専門教育科目の一部、プロダクトデザイン学科専門教育科目の一部、マンガ学部基礎講義・演習科目の一部、専門講義科目、マンガ学科専門教育科目、マンガプロデュース学科専門教育科目の一部、アニメーション学科専門教育科目については **2009 (平成 21)** 年 4 月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

第 28 項 この学則は、**2010 (平成 22)** 年 4 月 1 日から実施する。

ただし、別表 I に規定する教育課程のうち、芸術学部専門講義科目の一部、造形学科専門教育科目の一部、素材表現学科専門教育科目の一部、メディア造形学科専門教育科目の一部、デザイン学部専門講義科目、ビジュアルデザイン学科専門教育科目の一部、プロダクトデザイン学科専門教

ただし、別表 I に規定する教育課程のうち、芸術学部基礎講義・演習科目、デザイン学部基礎講義・演習科目、マンガ学部基礎講義・演習科目、芸術学部専門講義科目、デザイン学部専門講義科目、デザイン学部建築学科専門教育科目の一部、マンガ学部専門講義科目については、芸術学部の **平成 17** 年 4 月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

第 25 項 この学則は、**平成 19** 年 4 月 1 日から実施する。

ただし、別表 I に規定する教育課程のうち、デザイン学部建築学科専門教育科目の「身体空間演習」と「インテリア表現演習」については **平成 19** 年 4 月入学者より適用し、人文学部専門教育科目については **平成 17** 年 4 月入学者より適用し、それ以外については **平成 18** 年 4 月入学者より適用する。

第 26 項 この学則は、**平成 20** 年 4 月 1 日から実施する。

ただし、別表 I に規定する教育課程のうち、芸術学部造形学科専門教育科目、デザイン学部基礎講義・演習科目、ビジュアルデザイン学科専門教育科目、マンガ学部基礎講義・演習科目、専門講義科目、アニメーション学科専門教育科目の一部については **平成 20** 年 4 月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

また、第 34 条に規定する入学金は **平成 21** 年 4 月入学者より適用し、授業料は、**平成 20** 年 4 月入学者より適用する。

さらに、第 29 条第 5 項に規定する休学期間中の学費は、**平成 20** 年 4 月 1 日より在籍学生に一斉適用する。

第 27 項 この学則は、**平成 21** 年 4 月 1 日から実施する。

ただし、別表 I に規定する教育課程のうち、芸術学部基礎講義・演習科目の一部、専門講義科目、造形学科専門教育科目、素材表現学科専門教育科目の一部、デザイン学部基礎講義・演習科目の一部、ビジュアルデザイン学科専門教育科目の一部、プロダクトデザイン学科専門教育科目の一部、マンガ学部基礎講義・演習科目の一部、専門講義科目、マンガ学科専門教育科目、マンガプロデュース学科専門教育科目の一部、アニメーション学科専門教育科目については **平成 21** 年 4 月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

第 28 項 この学則は、**平成 22** 年 4 月 1 日から実施する。

ただし、別表 I に規定する教育課程のうち、芸術学部専門講義科目の一部、造形学科専門教育科目の一部、素材表現学科専門教育科目の一部、メディア造形学科専門教育科目の一部、デザイン学部専門講義科目、ビジュアルデザイン学科専門教育科目の一部、プロダクトデザイン学科専門教

育科目の一部、建築学科専門教育科目の一部、マンガ学部マンガプロデュース学科専門教育科目、アニメーション学科専門教育科目、人文学部総合人文学科専門教育科目については**2010(平成22)**年4月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

第29項 この学則は、**2011(平成23)**年4月1日から実施する。

ただし、別表Iに規定する教育課程のうち、芸術学部専門講義科目の一部、造形学科専門教育科目の一部、素材表現学科専門教育科目の一部、メディア造形学科専門教育科目の一部、デザイン学部基礎講義・演習科目の一部、ビジュアルデザイン学科専門教育科目の一部、プロダクトデザイン学科専門教育科目の一部、建築学科専門教育科目の一部、マンガ学部基礎講義・演習科目・専門講義科目の一部、マンガ学科専門教育科目の一部、マンガプロデュース学科専門教育科目の一部、アニメーション学科専門教育科目の一部、人文学部総合人文学科専門教育科目については**2011(平成23)**年4月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

第30項 この学則は、**2012(平成24)**年4月1日より実施する。

ただし、別表Iに規定する教育課程のうち、芸術学部基礎講義・演習科目の一部、デザイン学部基礎講義・演習科目の一部、デザイン学部建築学科専門教育科目の一部、マンガ学部基礎講義・演習科目の一部、人文学部基礎教育科目の一部については**2012(平成24)**年4月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。また、芸術学部造形学科専門教育科目の一部については**2011(平成23)**年4月入学者についても適用する。その移行・経過措置は別に定める。

第31項 この学則は、**2013(平成25)**年4月1日より実施する。

ただし、別表Iに規定する教育課程のうち、芸術学部専門講義科目の一部、造形学科専門教育科目の一部、素材表現学科専門教育科目の一部、デザイン学部専門講義科目の一部、マンガ学部基礎講義・演習科目の一部、マンガ学部専門講義科目の一部、アニメーション学科専門教育科目の一部については**2013(平成25)**年4月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

第32項 この学則は、**2014(平成26)**年4月1日より実施する。ただし、別表Iに規程する教育課程のうち、芸術学部専門講義科目の一部については**2014(平成26)**年4月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

第33項 この学則は、**2015(平成27)**年4月1日から実施する。ただし、別表Iに規定する教育課程のうち、芸術学部専門講義科目の一部、造形

育科目の一部、建築学科専門教育科目の一部、マンガ学部マンガプロデュース学科専門教育科目、アニメーション学科専門教育科目、人文学部総合人文学科専門教育科目については**平成22**年4月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

第29項 この学則は、**平成23**年4月1日から実施する。

ただし、別表Iに規定する教育課程のうち、芸術学部専門講義科目の一部、造形学科専門教育科目の一部、素材表現学科専門教育科目の一部、メディア造形学科専門教育科目の一部、デザイン学部基礎講義・演習科目の一部、ビジュアルデザイン学科専門教育科目の一部、プロダクトデザイン学科専門教育科目の一部、建築学科専門教育科目の一部、マンガ学部基礎講義・演習科目・専門講義科目の一部、マンガプロデュース学科専門教育科目の一部、アニメーション学科専門教育科目の一部、人文学部総合人文学科専門教育科目については**平成23**年4月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

第30項 この学則は、**平成24**年4月1日より実施する。

ただし、別表Iに規定する教育課程のうち、芸術学部基礎講義・演習科目の一部、デザイン学部基礎講義・演習科目の一部、デザイン学部建築学科専門教育科目の一部、マンガ学部基礎講義・演習科目の一部、人文学部基礎教育科目の一部については**平成24**年4月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。また、芸術学部造形学科専門教育科目の一部については**平成23**年4月入学者についても適用する。その移行・経過措置は別に定める。

第31項 この学則は、**平成25**年4月1日より実施する。

ただし、別表Iに規定する教育課程のうち、芸術学部専門講義科目の一部、造形学科専門教育科目の一部、素材表現学科専門教育科目の一部、デザイン学部専門講義科目の一部、マンガ学部基礎講義・演習科目の一部、マンガ学部専門講義科目の一部、アニメーション学科専門教育科目の一部については**平成25**年4月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

第32項 この学則は、**平成26**年4月1日より実施する。ただし、別表Iに規程する教育課程のうち、芸術学部専門講義科目の一部については**平成26**年4月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

第33項 この学則は、**平成27**年4月1日から実施する。ただし、別表Iに規定する教育課程のうち、芸術学部専門講義科目の一部、造形学科専門教

学科専門教育科目の一部、素材表現学科専門教育科目の一部、メディア造形学科専門教育科目の一部、デザイン学部プロダクトデザイン学科専門教育科目の一部、建築学科専門教育科目の一部については**2015（平成27）**年4月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

第34項 この学則は、**2016（平成28）**年4月1日から実施する。ただし、第29条（休学）および別表Iに規定する教育課程のうち芸術学部、デザイン学部、マンガ学部、ポピュラーカルチャー学部の基礎講義演習科目の一部と人文学部総合人文学科専門教育科目の一部については**2015（平成27）**年4月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

第35項 この学則は、**2017（平成29）**年4月1日から実施する。ただし、別表Iに規定する教育課程のうち全学共通科目の一部、および芸術学部、デザイン学部、マンガ学部、ポピュラーカルチャー学部、人文学部の専門教育科目の一部については**2016（平成28）**年4月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

第36項 この学則は、**2018（平成30）**年4月1日から実施する。ただし、別表Iに規定する教育課程のうち全学共通科目の一部については**2017（平成29）**年4月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。また、人文学部の専門教育科目の一部については**2015（平成27）**年4月入学者より適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

第37項 この学則は、**2019（平成31）**年4月1日から実施する。ただし、別表Iに規定する教育課程のうち、デザイン学部建築学科専門教育科目の「プレゼンテーション演習2」については**2015（平成27）**年4月入学者より適用する。また、別表Vに規定する授業料については、**2018（平成30）**年4月以前入学者に対しても一斉に適用するものとする。

第38項 この学則は、**2020（令和2）**年4月1日から実施する。

第39項 この学則は、2021（令和3）年4月1日から実施する。

育科目の一部、素材表現学科専門教育科目の一部、メディア造形学科専門教育科目の一部、デザイン学部プロダクトデザイン学科専門教育科目の一部、建築学科専門教育科目の一部については**平成27**年4月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

第34項 この学則は、**平成28**年4月1日から実施する。ただし、第29条（休学）および別表Iに規定する教育課程のうち芸術学部、デザイン学部、マンガ学部、ポピュラーカルチャー学部の基礎講義演習科目の一部と人文学部総合人文学科専門教育科目の一部については**平成27**年4月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

第35項 この学則は、**平成29**年4月1日から実施する。ただし、別表Iに規定する教育課程のうち全学共通科目の一部、および芸術学部、デザイン学部、マンガ学部、ポピュラーカルチャー学部、人文学部の専門教育科目の一部については**平成28**年4月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

第36項 この学則は、**平成30**年4月1日から実施する。ただし、別表Iに規定する教育課程のうち全学共通科目の一部については**平成29**年4月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。また、人文学部の専門教育科目の一部については**平成27**年4月入学者より適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

第37項 この学則は、**平成31**年4月1日から実施する。ただし、別表Iに規定する教育課程のうち、デザイン学部建築学科専門教育科目の「プレゼンテーション演習2」については**平成27**年4月入学者より適用する。また、別表Vに規定する授業料については、**平成30**年4月以前入学者に対しても一斉に適用するものとする。

第38項 この学則は、**令和2**年4月1日から実施する。

別表I 教育課程

①全学共通科目

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
全学部共通	全学共通	共通教育科目					●共通教育科目から50単位以上必修
		【導入プログラム】					
		フレッシュヤーズ・キャンプ	1	1	1		
		クリエイティブ・ワークショップ	1	1	1		
		【表現科目】					
		コミュニケーションスキル1	1	1	1		
		コミュニケーションスキル2	1	1	1		
		アカデミックスキル1	1	1	1		
		アカデミックスキル2	1	1	1		
		アカデミックスキル3	3	1	1		
		アカデミックスキル4	3	1	1		
		デッサン1	1	1	1		
		デッサン2	1・2・3・4	1	1		
		デッサン3	1・2・3・4	1	1		
		デッサン4	1・2・3・4	1	1		
		グラフィックデザインソフトスキル	1	1	1		
		芸術学	1・2・3・4	2	2		
		美学概論	1・2・3・4	2	2		
		現代美術概論	1・2・3・4	2	2		
		美術史	1・2・3・4	2	2		
		日本美術史	1・2・3・4	2	2		
		東洋美術史	1・2・3・4	2	2		
		西洋美術史	1・2・3・4	2	2		
		工芸概論	1・2・3・4	2	2		
		デザイン論	1・2・3・4	2	2		
		素材論	1・2・3・4	2	2		
		音楽概論	1・2・3・4	2	2		
		ポピュラー音楽論	1・2・3・4	2	2		
		身体表現論	1・2・3・4	2	2		
		身体文化演習1	1・2・3・4	1	1		
		身体文化演習2	1・2・3・4	1	1		
		表現と社会	1・2・3・4	2	2		
		表現と倫理	1・2・3・4	2	2		
		表現と知的財産権	1・2・3・4	2	2		
		写真技法	1・2・3・4	1	1		
		【グローバル科目】					
		日本文化概論	2	1	1		
		英語1	1	1	1		
		英語2	1	1	1		
		英語3	1	1	1		
		英語4	1	1	1		
		日本語1	1	1	1		
		日本語2	1	1	1		
		日本語3	1	1	1		
		日本語4	1	1	1		
		Business English	2・3・4	1	1		
		English discussion	2・3・4	1	1		
		Effective presentation	2・3・4	1	1		
		English for studying abroad	2・3・4	1	1		
		中国語1	1・2・3・4	1	1		
		中国語2	1・2・3・4	1	1		
		韓国語1	1・2・3・4	1	1		
		韓国語2	1・2・3・4	1	1		
		フランス語1	1・2・3・4	1	1		
		フランス語2	1・2・3・4	1	1		
		タイ語	1・2・3・4	1	1		
		ベトナム語	1・2・3・4	1	1		
		インドネシア語	1・2・3・4	1	1		
		スワヒリ語	1・2・3・4	1	1		
		ドイツ語	1・2・3・4	1	1		
		スペイン語	1・2・3・4	1	1		
		イタリア語	1・2・3・4	1	1		
		サステナビリティと社会	1・2・3・4	2	2		
		現代社会の諸問題	1・2・3・4	2	2		
		海外ショートプログラム入門	1・2・3・4	2	2		
		世界と食	1・2・3・4	2	2		
		日本語学概論	1・2・3・4	2	2		
		言語学	1・2・3・4	2	2		

別表I 教育課程

①全学共通科目

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
全学部共通	全学共通	全学教養科目					全学教養科目から30単位以上必修
		【表現理論】					
		芸術学	1・2・3・4	2	2		
		美学概論	1・2・3・4	2	2		
		美術史	1・2・3・4	2	2		
		日本美術史	1・2・3・4	2	2		
		東洋美術史	1・2・3・4	2	2		
		西洋美術史	1・2・3・4	2	2		
		工芸概論	1・2・3・4	2	2		
		デザイン論	1・2・3・4	2	2		
		色彩学	1・2・3・4	2	2		
		視覚文化論	1・2・3・4	2	2		
		音楽史	1・2・3・4	2	2		
		身体表現論	1・2・3・4	2	2		
		マンガ文化論	1・2・3・4	2	2		
		ストリート文化論	1・2・3・4	2	2		
		演劇論	1・2・3・4	2	2		
		サブカルチャー論	1・2・3・4	2	2		
		メディア論	1・2・3・4	2	2		
		映画芸術論	1・2・3・4	2	2		
		写真論	1・2・3・4	2	2		
		印刷論	1・2・3・4	2	2		
		広告論	1・2・3・4	2	2		
		素材論	1・2・3・4	2	2		
		【表現技法】					
		絵画演習	1・2・3・4	1	1		
		写真技法演習	1・2・3・4	1	1		
		マンガ制作演習	1・2・3・4	1	1		
		サウンド演習	1・2・3・4	1	1		
		立体造形演習	1・2・3・4	1	1		
		デザイン演習	1・2・3・4	1	1		
		デジタル作画演習	1・2・3・4	1	1		
		工芸演習	1・2・3・4	1	1		
		編集演習	1・2・3・4	1	1		
		文芸創作演習	1・2・3・4	1	1		
		【語学】					
		ことば演習	1	2	2		
		発展ことば演習	1・2・3・4	2	2		
		英語1	1	1	2		
		英語2	2	1	2		
		英語3	2・3・4	2	2		
		英語4	2・3・4	2	2		
		Business English	1	2	2		
		Business English	2	2	2		
		Academic Communication Skills	1	2	2		
		Academic Communication Skills	2	2	2		
		日本語1	1	1	2		
		日本語2	2	1	2		
		上級日本語1	1	2	2		
		上級日本語2	2	2	2		
		中国語1	1	2	2		
		中国語2	2	2	2		
		韓国語1	1	2	2		
		韓国語2	2	2	2		
		タイ語1	1	2	2		
		タイ語2	2	2	2		
		ベトナム語1	1	2	2		
		ベトナム語2	2	2	2		
		インドネシア語1	1	2	2		
		インドネシア語2	2	2	2		
		フランス語1	1	2	2		
		フランス語2	2	2	2		
		ドイツ語1	1	2	2		
		ドイツ語2	2	2	2		
		イタリア語1	1	2	2		
		イタリア語2	2	2	2		
		スペイン語1	1	2	2		
		スペイン語2	2	2	2		

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
		【リベラルアーツ科目】					
		自由論	1	1	1		
		シティズンシップとダイバーシティ	1	1	1		
		創造的思考法	1	1	1		
		情報と倫理	1	1	1		
		人権と教育	2	1	1		
		グローバル化と社会	2	1	1		
		障害学	2・3・4		2	2	
		哲学入門	1・2・3・4		2	2	
		政治学	1・2・3・4		2	2	
		法学	1・2・3・4		2	2	
		日本国憲法	1・2・3・4		2	2	
		物語論	1・2・3・4		2	2	
		考古学	1・2・3・4		2	2	
		民俗学	1・2・3・4		2	2	
		情報科学概論	1	1	1		
		データサイエンス入門	2	1	1		
		統計的思考法	1・2・3・4		2	2	
		プログラミング1	1・2・3・4		1	1	
		プログラミング2	1・2・3・4		1	1	
		プログラミング3	2・3・4		1	1	
		プログラミング4	2・3・4		1	1	
		情報テクノロジー1	1・2・3・4		2	2	
		情報テクノロジー2	1・2・3・4		2	2	
		人類と人工知能	1・2・3・4		2	2	
		教職コンピューター入門	1・2・3・4		2	2	
		自然科学概論	1・2・3・4		2	2	
		科学史	1・2・3・4		2	2	
		生物学	1・2・3・4		2	2	
		数学的思考法	1・2・3・4		2	2	
		行動心理学	1・2・3・4		2	2	
		スポーツ実習1	1・2・3・4		1	1	
		スポーツ実習2	1・2・3・4		1	1	
		【社会実践力育成プログラム】					
		大学連携プログラム	2・3・4		2	2	●【社会実践力育成プログラム】選択科目から4単位以上必修
		インターンシップ1	2・3・4		2	2	
		インターンシップ2	2・3・4		2	2	
		海外ショートプログラム	1・2・3・4		2	2	
		国内ショートプログラム	1・2・3・4		2	2	
		産学公連携PBLプログラム1	2・3・4		2	2	
		産学公連携PBLプログラム2	2・3・4		2	2	
		【キャリア科目】					
		キャリア1	1	1	1		

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
		全学専門科目(副専攻)					全学専門科目(副専攻およびコラボレーション)から14単位以上必修
		【国際】					●全学専門科目(副専攻)は各副専攻群から指定された科目を含め5科目10単位以上を修得すれば、副専攻修了として認定する。
		異文化理解とアイデンティティ	1-2-3-4		2	2	
		グローバル・スタディーズ	2-3-4		2	2	
		国際社会論	2-3-4		2	2	
		現代日本文化と世界	2-3-4		2	2	
		国際ボランティア論	2-3-4		2	2	
		海外フィールドスタディ演習	2-3-4		2	2	
		【セイカ学】					
		大学入門	1	2	2		
		自由論	1-2-3-4		2	2	
		人権論	1-2-3-4		2	2	
		日本国憲法	1-2-3-4		2	2	
		シティズンシップ・スタディーズ	1-2-3-4		2	2	
		【ITリテラシー】					
		情報リテラシー	1-2-3-4		1	1	
		ビジネスソフト演習	1-2-3-4		1	1	
		画像ソフト演習	1-2-3-4		1	1	
		動画ソフト演習	1-2-3-4		1	1	
		編集ソフト演習	1-2-3-4		1	1	
		プログラミング演習	1-2-3-4		1	1	
		【自然科学】					
		自然科学概論	1-2-3-4		2	2	
		生物学	1-2-3-4		2	2	
		科学史	1-2-3-4		2	2	
		数学	1-2-3-4		2	2	
		物理学	1-2-3-4		2	2	
		生命科学	1-2-3-4		2	2	
		地球と宇宙の科学	1-2-3-4		2	2	
		【社会科学】					
		政治学	1-2-3-4		2	2	
		法学	1-2-3-4		2	2	
		社会学	1-2-3-4		2	2	
		経済学	1-2-3-4		2	2	
		産業論	1-2-3-4		2	2	
		平和学	1-2-3-4		2	2	
		ジェンダー論	1-2-3-4		2	2	
		現代社会の諸問題	1-2-3-4		2	2	
		表現と法	1-2-3-4		2	2	
		【人文科学】					
		宗教史	1-2-3-4		2	2	
		東洋思想史	1-2-3-4		2	2	
		西洋思想史	1-2-3-4		2	2	
		哲学	1-2-3-4		2	2	
		日本文学概論	1-2-3-4		2	2	
		世界文学概論	1-2-3-4		2	2	
		日本史	1-2-3-4		2	2	
		東洋史	1-2-3-4		2	2	
		西洋史	1-2-3-4		2	2	
		考古学	1-2-3-4		2	2	
		民俗学	1-2-3-4		2	2	
		言語学	1-2-3-4		2	2	
		地理学概論	1-2-3-4		2	2	
		文化人類学	1-2-3-4		2	2	
		倫理学	1-2-3-4		2	2	
		【人間科学】					
		心理学	1-2-3-4		2	2	
		健康学	1-2-3-4		2	2	
		身体論	1-2-3-4		2	2	
		教育学	1-2-3-4		2	2	
		メンタルヘルス	1-2-3-4		2	2	
		身体文化演習	1-2-3-4		1	1	
		スポーツ実習1	1-2-3-4		1	1	
		スポーツ実習2	1-2-3-4		1	1	
		【現地演習】					
		国内ショートプログラム1	1-2-3-4		2	2	
		国内ショートプログラム2	1-2-3-4		2	2	
		国内ショートプログラム3	1-2-3-4		2	2	
		海外ショートプログラム1	1-2-3-4		2	2	
		海外ショートプログラム2	1-2-3-4		2	2	
		海外ショートプログラム3	1-2-3-4		2	2	
		全学専門科目(コラボレーション)					
		コラボレーション概論	2-3-4		2	2	
		コラボレーション実習1	3-4		2	2	
		コラボレーション実習2	3-4		2	2	
		コラボレーション実習3	3-4		2	2	
		コラボレーション実習4	3-4		2	2	
		【キャリア】					
		コミュニケーション実践演習	1-2-3-4		1	1	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
		キャリア2	2・3・4		1	1	
		キャリア3	3・4		1	1	
		職業研究	1・2・3・4		2	2	
		ベンチャー・ビジネス論	1・2・3・4		1	1	
		スポーツとビジネス	1・2・3・4		1	1	
		表現活動と経済	1・2・3・4		1	1	
		クリエイティブの現場	1・2・3・4		2	2	
		日本の企業文化研究	1・2・3・4		1	1	
		ポートフォリオ実習1	1・2・3・4		1	1	
		ポートフォリオ実習2	1・2・3・4		1	1	
		コミュニケーション実践演習	1・2・3・4		1	1	
		【マイナー科目】					
		国際文化概論1	2・3・4		1	1	●【マイナー科目】から10単位以上必修
		国際文化史1	2・3・4		1	1	
		国際文化リテラシー1	2・3・4		2	2	
		国際文化リテラシー2	2・3・4		2	2	
		国際文化特講1	2・3・4		2	2	
		国際文化特講2	2・3・4		2	2	
		メディア表現概論1	2・3・4		1	1	
		メディア表現史1	2・3・4		1	1	
		メディア表現リテラシー1	2・3・4		2	2	
		メディア表現リテラシー2	2・3・4		2	2	
		メディア表現特講1	2・3・4		2	2	
		メディア表現特講2	2・3・4		2	2	
		美術概論1	2・3・4		1	1	
		美術史1	2・3・4		1	1	
		美術リテラシー1	2・3・4		2	2	
		美術リテラシー2	2・3・4		2	2	
		美術特講1	2・3・4		2	2	
		美術特講2	2・3・4		2	2	
		デザイン概論1	2・3・4		1	1	
		デザイン史1	2・3・4		1	1	
		デザインリテラシー1	2・3・4		2	2	
		デザインリテラシー2	2・3・4		2	2	
		デザイン特講1	2・3・4		2	2	
		デザイン特講2	2・3・4		2	2	
		マンガ概論1	2・3・4		1	1	
		マンガ史1	2・3・4		1	1	
		マンガリテラシー1	2・3・4		2	2	
		マンガリテラシー2	2・3・4		2	2	
		マンガ特講1	2・3・4		2	2	
		マンガ特講2	2・3・4		2	2	
		和の伝統文化論	1・2・3・4		1	1	
		京都のまちづくり	2・3・4		1	1	
		京都の伝統工芸講座1	2・3・4		2	2	
		京都の伝統工芸講座2	2・3・4		2	2	
		京都の習俗	2・3・4		2	2	
		京都の伝統産業実習	2・3・4		2	2	
		ファイナンス論	1・2・3・4		1	1	
		マーケティング論	2・3・4		1	1	
		ビジネスモデル論	2・3・4		2	2	
		イノベーション論	2・3・4		2	2	
		ソーシャルビジネス演習1	3・4		2	2	
		ソーシャルビジネス演習2	3・4		2	2	
		アフリカ・アジア概論	1・2・3・4		1	1	
		アフリカ・アジア史	2・3・4		1	1	
		アフリカ・アジアリテラシー1	2・3・4		2	2	
		アフリカ・アジアリテラシー2	2・3・4		2	2	
		アフリカ・アジア特講1	2・3・4		2	2	
		アフリカ・アジア特講2	2・3・4		2	2	
		日本事情理解	1・2・3・4		1	1	
		言語と心理	2・3・4		1	1	
		言語と社会	2・3・4		2	2	
		日本語学	2・3・4		2	2	
		日本語教育演習1	3・4		2	2	
		日本語教育演習2	3・4		2	2	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
		ライフデザイン	1-2-3-4		2	2	
		職業研究	1-2-3-4		2	2	
		クリエイティブの現場	2-3-4		2	2	
		キャリアのためのデッサン	2-3-4		2	2	
		ポートフォリオ演習	2-3-4		1	1	
		インターンシップ	1-2-3-4		2	2	
		全学専門科目(副専攻)					全学専門科目(副専攻およびコラボレーション)から14単位以上必修
		【環境】					●全学専門科目(副専攻)は各副専攻群から指定された科目を含め5科目10単位以上を修得すれば、副専攻修了として認定する。
		持続可能な社会	1-2-3-4		2	2	
		環境社会学	2-3-4		2	2	
		環境政策学	2-3-4		2	2	
		環境経済学	2-3-4		2	2	
		生活環境学	2-3-4		2	2	
		環境社会演習	3-4		2	2	
		【京都伝統文化】					
		和の文化論	1-2-3-4		2	2	
		京都の伝統工芸講座1	2-3-4		2	2	
		京都の伝統工芸講座2	2-3-4		2	2	
		京都の習俗	2-3-4		2	2	
		京都のまちづくり	2-3-4		2	2	
		京都の伝統産業演習	3-4		2	2	
		【ビジネス】					
		ビジネス概論	1-2-3-4		2	2	
		イノベーション論	2-3-4		2	2	
		ファイナンス論	2-3-4		2	2	
		マーケティング論	2-3-4		2	2	
		ビジネス統計学	2-3-4		2	2	
		ビジネスモデル演習	3-4		2	2	
		【ソーシャルデザイン】					
		ソーシャルデザイン概論	1-2-3-4		2	2	
		NPO・NGO論	2-3-4		2	2	
		コミュニティ論	2-3-4		2	2	
		地域創生論	2-3-4		2	2	
		ライフスタイル論	2-3-4		2	2	
		ソーシャルデザイン演習	3-4		2	2	
		【福祉】					
		社会福祉概論	1-2-3-4		2	2	
		障がい者福祉論	2-3-4		2	2	
		児童・家庭福祉論	2-3-4		2	2	
		司法福祉論	2-3-4		2	2	
		高齢化社会論	2-3-4		2	2	
		地域福祉演習	3-4		2	2	
		【観光】					
		ツーリズム形態論	1-2-3-4		2	2	
		観光経済	2-3-4		2	2	
		観光資源	2-3-4		2	2	
		観光心理	2-3-4		2	2	
		観光法規	2-3-4		2	2	
		ホスピタリティ演習	3-4		2	2	
		【コンテンツマネジメント】					
		コンテンツマネジメント概論	1-2-3-4		2	2	
		コンテンツビジネス論	2-3-4		2	2	
		文化政策論	2-3-4		2	2	
		知的財産権概論	2-3-4		2	2	
		鑑賞と批評	2-3-4		2	2	
		コンテンツプランニング演習	3-4		2	2	

別表I 教育課程

④芸術学部

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考		
				必修	選択	計			
芸術学部	造形学科	【芸術学部必修科目】					●造形学科 74単位以上必修		
		美術概論1	1	1	1				
		美術概論2	1	1	1				
		美術史1	1	1	1				
		美術史2	1	1	1				
		基礎実習1	1	2	2				
		基礎実習2	1	2	2				
		基礎実習3	1	2	2				
		基礎実習4	1	2	2				
		基礎実習5	2	2	2				
		基礎実習6	2	2	2				
		応用実習1	2	2	2				
		応用実習2	2	2	2				
		応用実習3	3	2	2				
		応用実習4	3	2	2				
		社会実践実習1	3	1	1				
		社会実践実習2	3	1	1				
		社会実践実習3	3	1	1				
		社会実践実習4	3	1	1				
		応用実習5	3	2	2				
		応用実習6	3	2	2				
		卒業研究実習1	4	2	2				
		卒業研究実習2	4	2	2				
		卒業研究実習3	4	2	2				
		卒業論文・卒業制作	4	2	2				
		卒業展示	4	2	2				
				【芸術学部選択科目】					
				美術リテラシー1	1・2・3・4	2		2	
				美術リテラシー2	1・2・3・4	2		2	
				美術特講1	2・3・4	2		2	
				美術特講2	2・3・4	2		2	
				メチエ基礎1	1・2・3・4	1		1	
		メチエ基礎2	1・2・3・4	1	1				
		メチエ基礎3	1・2・3・4	1	1				
		メチエ基礎4	1・2・3・4	1	1				
		メチエ基礎5	1・2・3・4	1	1				
		メチエ基礎6	1・2・3・4	1	1				
		メチエ基礎7	1・2・3・4	1	1				
		美術史特論1	2・3・4	1	1				
		美術史特論2	2・3・4	1	1				
		美術史特論3	2・3・4	1	1				
		美術史特論4	2・3・4	1	1				
		美術工芸史1	2・3・4	1	1				
		美術工芸史2	2・3・4	1	1				
		美術工芸史3	2・3・4	1	1				
		美術工芸史4	2・3・4	1	1				
		現代社会システム論	2・3・4	1	1				
		現代美術論1	2・3・4	1	1				
		現代美術論2	2・3・4	1	1				
		芸術表象論1	2・3・4	1	1				
		芸術表象論2	2・3・4	1	1				
		芸術と哲学1	2・3・4	1	1				
		芸術と哲学2	2・3・4	1	1				
		アートマネジメント論1	2・3・4	1	1				
		アートマネジメント論2	2・3・4	1	1				
		美術解剖学	2・3・4	1	1				
		視覚認知論1	2・3・4	1	1				
		視覚認知論2	2・3・4	1	1				
		芸術と精神分析1	2・3・4	1	1				
		芸術と精神分析2	2・3・4	1	1				
		芸術評論1	2・3・4	1	1				
		芸術評論2	2・3・4	1	1				
		表現研究1	2・3・4	1	1				
		表現研究2	2・3・4	1	1				
		表現研究3	2・3・4	1	1				
		表現研究4	2・3・4	1	1				
		現代アートプロジェクト演習1	2・3・4	1	1				
		現代アートプロジェクト演習2	2・3・4	1	1				
		現代アートプロジェクト演習3	2・3・4	1	1				
		現代アートプロジェクト演習4	2・3・4	1	1				
		現代アートプロジェクト演習5	2・3・4	1	1				
		現代アートプロジェクト演習6	2・3・4	1	1				
		ドローイング1	2・3・4	1	1				
		ドローイング2	2・3・4	1	1				
		工芸1	2・3・4	1	1				
		工芸2	2・3・4	1	1				
		工芸3	2・3・4	1	1				
		工芸4	2・3・4	1	1				
		図法製図1	2・3・4	1	1				
		図法製図2	2・3・4	1	1				
		造形演習1	2・3・4	1	1				
		造形演習2	2・3・4	1	1				
		造形演習3	2・3・4	1	1				
		造形演習4	2・3・4	1	1				
		写真・映像メディア表現	2・3・4	1	1				
		映像メディア表現	2・3・4	1	1				
		写真表現	2・3・4	1	1				

②芸術学部

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考	
				必修	選択	計		
芸術学部	造形学科	芸術学部専門教育科目					必修56単位を含む80単位以上必修。	
		【専門演習科目】						
		表現研究1	1	2・3・4	2	2		
		表現研究2	2	2・3・4	2	2		
		表現研究3	3	2・3・4	2	2		
		表現研究4	4	3・4	2	2		
		表現研究5	5	3・4	2	2		
		【専門実習科目】						
		造形基礎1	2	4	4	4		
		造形基礎2	2	4	4	4		
		造形基礎3	3	2	4	4		
		造形基礎4	4	2	4	4		
		造形実習1	1	3	4	4		
		造形実習2	2	3	4	4		
		造形実習3	3	3	4	4		
		造形実習4	4	3	4	4		
		卒業研究実習1	1	4	3	3		
		卒業研究実習2	2	4	3	3		
		卒業研究	4	4	4	4		
		【専門講義科目】						
		現代美術基礎講座1	1	1・2・3・4	2	2		
		現代美術基礎講座2	2	1・2・3・4	2	2		
		美術史特論1	1	1・2・3・4	2	2		
		美術史特論2	2	1・2・3・4	2	2		
		美術史特論3	3	1・2・3・4	2	2		
		美術工芸史1	1	1・2・3・4	2	2		
		美術工芸史2	2	1・2・3・4	2	2		
		現代社会システム論	2・3・4	2	2	2		
		映像論	2・3・4	2	2	2		
		メディアアート論	2・3・4	2	2	2		
		現代美術論	2・3・4	2	2	2		
		芸術表象論	2・3・4	2	2	2		
芸術と哲学	2・3・4	2	2	2				
アートマネジメント論	2・3・4	2	2	2				
美術解剖学	2・3・4	2	2	2				
視覚認知論	2・3・4	2	2	2				
芸術と精神分析	2・3・4	2	2	2				
芸術評論	2・3・4	2	2	2				
表現研究	3・4	2	2	2				
現代アートプロジェクト演習1	2・3・4	2	2	2				
現代アートプロジェクト演習2	2・3・4	2	2	2				
現代アートプロジェクト演習3	2・3・4	2	2	2				
現代アートプロジェクト演習4	2・3・4	2	2	2				
鑑賞演習1	2・3・4	2	2	2				
鑑賞演習2	2・3・4	2	2	2				
基礎デザイン	2・3・4	2	2	2				
ドローイング	2・3・4	2	2	2				
工芸	2・3・4	2	2	2				
工芸	2・3・4	2	2	2				
工芸	2・3・4	2	2	2				
図法製図	3・4	2	2	2				
造形演習1	2・3・4	2	2	2				
造形演習2	2・3・4	2	2	2				
映像メディア表現1	2・3・4	2	2	2				
映像メディア表現2	2・3・4	2	2	2				
映像メディア表現3	2・3・4	2	2	2				
映像メディア表現4	3・4	2	2	2				
写真表現	2・3・4	2	2	2				
【専門演習科目】(再掲)								
表現研究1	1	2・3・4	2	2				
表現研究2	2	2・3・4	2	2				
表現研究3	3	2・3・4	2	2				
表現研究4	4	3・4	2	2				
表現研究5	5	3・4	2	2				
【専門基礎科目】								
基礎ゼミ	1	2	2	2				
絵画基礎	1	3	3	3				
彫刻基礎	1	3	3	3				
デザイン基礎	1	3	3	3				
工芸基礎	1	3	3	3				
【メチエ教育科目】								
洋画基礎1	1	1・2・3・4	2	2				
洋画基礎2	2	1・2・3・4	2	2				
洋画基礎3	3	1・2・3・4	2	2				
洋画基礎4	4	1・2・3・4	2	2				
日本画基礎1	1	1・2・3・4	2	2				
日本画基礎2	2	1・2・3・4	2	2				
日本画基礎3	3	1・2・3・4	2	2				
日本画基礎4	4	1・2・3・4	2	2				
立体基礎1	1	1・2・3・4	2	2				
立体基礎2	2	1・2・3・4	2	2				
立体基礎3	3	1・2・3・4	2	2				
立体基礎4	4	1・2・3・4	2	2				
陶芸基礎1	1	1・2・3・4	2	2				
陶芸基礎2	2	1・2・3・4	2	2				
陶芸基礎3	3	1・2・3・4	2	2				
陶芸基礎4	4	1・2・3・4	2	2				
染織基礎1	1	1・2・3・4	2	2				
染織基礎2	2	1・2・3・4	2	2				
染織基礎3	3	1・2・3・4	2	2				
染織基礎4	4	1・2・3・4	2	2				
版画基礎1	1	1・2・3・4	2	2				
版画基礎2	2	1・2・3・4	2	2				

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
		版 画 基 礎	3	1-2-3-4	2	2	
		版 画 基 礎	4	1-2-3-4	2	2	
		映 像 基 礎	1	1-2-3-4	2	2	
		映 像 基 礎	2	1-2-3-4	2	2	
		映 像 基 礎	3	1-2-3-4	2	2	
		映 像 基 礎	4	1-2-3-4	2	2	

別表I 教育課程

⑤デザイン学部

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考	
				必修	選択	計		
デザイン学部	デザイン学部共通	【デザイン学部必修科目】						
		デザイン概論1	1	1	1			
		デザイン概論2	1	1	1			
		デザイン史1	1	1	1			
		デザイン史2	1	1	1			
		【デザイン学部選択科目】						
		デザインリテラシー1	1・2・3・4	2	2			
		デザインリテラシー2	1・2・3・4	2	2			
		デザイン特講1	2・3・4	2	2			
		デザイン特講2	2・3・4	2	2			
		デザイン特講3	2・3・4	1	1			
		デザイン特講4	2・3・4	1	1			
		家具史1	2・3・4	1	1			
		家具史2	2・3・4	1	1			
		写真史1	2・3・4	1	1			
		写真史2	2・3・4	1	1			
		印刷論1	2・3・4	1	1			
		印刷論2	2・3・4	1	1			
		写真論1	2・3・4	1	1			
		写真論2	2・3・4	1	1			
		色彩学1	2・3・4	1	1			
		色彩学2	2・3・4	1	1			
		視覚文化論1	2・3・4	1	1			
		視覚文化論2	2・3・4	1	1			
		ユニバーサルデザイン論1	2・3・4	1	1			
		ユニバーサルデザイン論2	2・3・4	1	1			
		デザインマネージメント論1	2・3・4	1	1			
		デザインマネージメント論2	2・3・4	1	1			
		ランドスケープデザイン論1	2・3・4	1	1			
		ランドスケープデザイン論2	2・3・4	1	1			
		商品開発論1	2・3・4	1	1			
		商品開発論2	2・3・4	1	1			
		デザイン英語1	2・3・4	1	1			
		デザイン英語2	2・3・4	1	1			
		デザイン英語3	2・3・4	1	1			
		デザイン英語4	2・3・4	1	1			
		近代空間論1	2・3・4	1	1			
		近代空間論2	2・3・4	1	1			
		インテリアデザイン論1	2・3・4	1	1			
		インテリアデザイン論2	2・3・4	1	1			
		デザイン法規概論1	2・3・4	1	1			
		デザイン法規概論2	2・3・4	1	1			
		人間生活工学1	2・3・4	1	1			
		人間生活工学2	2・3・4	1	1			
		ファッション史1	1・2・3・4	1	1			
		ファッション史2	1・2・3・4	1	1			
		アパレル素材論1	2・3・4	1	1			
		アパレル素材論2	2・3・4	1	1			
		造形論1	2・3・4	1	1			
		造形論2	2・3・4	1	1			
		日本服飾史1	2・3・4	1	1			
		日本服飾史2	2・3・4	1	1			
		サステナブル・ファッション1	2・3・4	1	1			
		サステナブル・ファッション2	2・3・4	1	1			
イラスト学科	イラスト学科	【イラスト学科必修科目】					●イラスト学科 デザイン学部必修科目、デザイン学部選択科目、イラスト学科必修科目、イラスト学科選択科目から74単位以上必修	
		基礎実習1	1	2	2			
		基礎実習2	1	2	2			
		基礎実習3	1	2	2			
		基礎実習4	1	2	2			
		基礎実習5	2	2	2			
		基礎実習6	2	2	2			
		応用実習1	2	2	2			
		応用実習2	2	2	2			
		応用実習3	3	2	2			
		応用実習4	3	2	2			
		社会実践実習1	3	1	1			
		社会実践実習2	3	1	1			
		社会実践実習3	3	1	1			
		社会実践実習4	3	1	1			
		応用実習5	3	2	2			
		応用実習6	3	2	2			
		卒業研究実習1	4	2	2			
		卒業研究実習2	4	2	2			
		卒業研究実習3	4	2	2			
		卒業論文・卒業制作	4	2	2			
		卒業展示	4	2	2			
		【イラスト学科選択科目】						
		イラスト基礎演習1	1・2・3・4	1	1			
		イラスト基礎演習2	1・2・3・4	1	1			
		イラスト基礎演習3	1・2・3・4	1	1			
		イラスト基礎演習4	1・2・3・4	1	1			
		イラスト基礎演習5	1・2・3・4	1	1			
		イラスト基礎演習6	1・2・3・4	1	1			
		イラスト基礎演習7	2・3・4	1	1			
		イラスト基礎演習8	2・3・4	1	1			
		イラスト基礎演習9	2・3・4	1	1			
		イラスト基礎演習10	2・3・4	1	1			
イラスト基礎演習11	2・3・4	1	1					
イラスト基礎演習12	2・3・4	1	1					
イラスト基礎演習13	2・3・4	1	1					
イラスト基礎演習14	2・3・4	1	1					
イラスト応用演習1	3・4	1	1					
イラスト応用演習2	3・4	1	1					
イラスト応用演習3	3・4	1	1					
イラスト応用演習4	3・4	1	1					
イラスト応用演習5	3・4	1	1					
イラスト応用演習6	3・4	1	1					

③デザイン学部

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
デザイン学部	デザイン学部共通	【デザイン学部必修科目】					
		デザイン概論1	1	1	1		
		デザイン概論2	1	1	1		
		デザイン史1	1	1	1		
		デザイン史2	1	1	1		
		【デザイン学部選択科目】					
		デザインリテラシー1	1・2・3・4	2	2		
		デザインリテラシー2	1・2・3・4	2	2		
		デザイン特講1	2・3・4	2	2		
		デザイン特講2	2・3・4	2	2		
		デザイン特講3	2・3・4	1	1		
		デザイン特講4	2・3・4	1	1		
		家具史1	2・3・4	1	1		
		家具史2	2・3・4	1	1		
		写真史1	2・3・4	1	1		
		写真史2	2・3・4	1	1		
印刷論1	2・3・4	1	1				
印刷論2	2・3・4	1	1				
写真論1	2・3・4	1	1				
写真論2	2・3・4	1	1				
色彩学1	2・3・4	1	1				
色彩学2	2・3・4	1	1				
視覚文化論1	2・3・4	1	1				
視覚文化論2	2・3・4	1	1				
ユニバーサルデザイン論1	2・3・4	1	1				
ユニバーサルデザイン論2	2・3・4	1	1				
デザインマネージメント論1	2・3・4	1	1				
デザインマネージメント論2	2・3・4	1	1				
ランドスケープデザイン論1	2・3・4	1	1				
ランドスケープデザイン論2	2・3・4	1	1				
商品開発論1	2・3・4	1	1				
商品開発論2	2・3・4	1	1				
デザイン英語1	2・3・4	1	1				
デザイン英語2	2・3・4	1	1				
デザイン英語3	2・3・4	1	1				
デザイン英語4	2・3・4	1	1				
近代空間論1	2・3・4	1	1				
近代空間論2	2・3・4	1	1				
インテリアデザイン論1	2・3・4	1	1				
インテリアデザイン論2	2・3・4	1	1				
デザイン法規概論1	2・3・4	1	1				
デザイン法規概論2	2・3・4	1	1				
人間生活工学1	2・3・4	1	1				
人間生活工学2	2・3・4	1	1				
ファッション史1	1・2・3・4	1	1				
ファッション史2	1・2・3・4	1	1				
アパレル素材論1	2・3・4	1	1				
アパレル素材論2	2・3・4	1	1				
造形論1	2・3・4	1	1				
造形論2	2・3・4	1	1				
日本服飾史1	2・3・4	1	1				
日本服飾史2	2・3・4	1	1				
サステナブル・ファッション1	2・3・4	1	1				
サステナブル・ファッション2	2・3・4	1	1				
イラスト学科	イラスト学科	【イラスト学科必修科目】					デザイン学部共通専門教育科目6単位選択必修を含み、デザイン学部専門教育科目およびイラスト学科専門教育科目から80単位以上必修
		日本画	1	3	3		
		水墨画	1	3	3		
		立体表現1	1	3	3		
		立体表現2	1	3	3		
		デッサン1	1	3	3		
		デッサン2	1	3	3		
		イメージ表現1	1	3	3		
		イメージ表現2	1	3	3		
		イメージ表現3	2	3	3		
		イメージ表現4	2	3	3		
		描画	2	3	3		
		シルクスクリーン	2	3	3		
		銅版画	2	3	3		
		写真真	2	3	3		
		C G 演習1	2	2	2		
		C G 演習2	2	2	2		
		デザイン演習1	3	2	2		
		デザイン演習2	3	2	2		
		デザイン演習3	3	2	2		
		デザイン演習4	3	2	2		
		絵本1	3	2	2		
		絵本2	3	2	2		
		イラストレーション1	3	2	2		
		イラストレーション2	3	2	2		
		イラストレーション3	3	2	2		
		イラストレーション4	3	2	2		
		ビジュアルアート1	3	2	2		
		ビジュアルアート2	3	2	2		
		ビジュアルデザイン1	3	2	2		
		ビジュアルデザイン2	3	2	2		
		ビジュアルデザイン3	3	2	2		
		ビジュアルデザイン4	3	2	2		
メディアプレゼンテーション1	4	2	2				
メディアプレゼンテーション2	4	2	2				
メディアプレゼンテーション3	4	2	2				
メディアプレゼンテーション4	4	2	2				
卒業制作研究1	4	2	2				
卒業制作研究2	4	2	2				
工芸	2	2	2				
基礎立体・彫塑	2	2	2				
デザイン概論1	3	2	2				
デザイン概論2	3	2	2				
現代美術概論	2・3・4	2	2				
アートマネージメント論	3・4	2	2				
卒業制作	4	4	4				

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考	学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考			
				必修	選択	計						必修	選択	計				
ビジュアルデザイン学科	【ビジュアルデザイン学科必修科目】	基礎実習1	1	2	2	●ビジュアルデザイン学科 デザイン学部必修科目、デザイン学部選択 科目、ビジュアルデザイン学科必修科目、 ビジュアルデザイン学科選択科目から74単 位以上必修	ビジュアルデザイン学科 専門教育科目	ビジュアルデザイン学科	デザイン概論1	3	2	2	デザイン学部共通専門教育科目6単位選択 必修を含み、デザイン学部専門教育科目お よびビジュアルデザイン学科専門教育科目 から80単位以上必修					
		基礎実習2	1	2	2	デザイン概論2			3	2	2							
		基礎実習3	1	2	2	ビジュアルデザイン基礎1			1	2	2							
		基礎実習4	1	2	2	ビジュアルデザイン基礎2			1	2	2							
		基礎実習5	2	2	2	ビジュアルデザイン基礎3			1	2	2							
		基礎実習6	2	2	2	ビジュアルデザイン基礎4			1	2	2							
		応用実習1	2	2	2	ビジュアルデザイン基礎5			1	2	2							
		応用実習2	2	2	2	ビジュアルデザイン基礎6			1	2	2							
		応用実習3	3	2	2	デザインスキル1			1	2	2							
		応用実習4	3	2	2	デザインスキル2			1	2	2							
		社会実践実習1	3	1	1	デザインスキル3			1	2	2							
		社会実践実習2	3	1	1	デザインスキル4			1	2	2							
		社会実践実習3	3	1	1	デザインスキル5			1	2	2							
		社会実践実習4	3	1	1	グラフィックデザイン1			2	3	3							
		応用実習5	3	2	2	グラフィックデザイン2			2	3	3							
		応用実習6	3	2	2	グラフィックデザイン3			2	3	3							
		卒業研究実習1	4	2	2	グラフィックデザイン4			2	3	3							
		卒業研究実習2	4	2	2	グラフィックデザイン5			2	3	3							
		卒業研究実習3	4	2	2	グラフィックデザイン6			2	3	3							
		卒業論文・卒業制作	4	2	2	クリエイション1			2	3	3							
		卒業展示	4	2	2	クリエイション2			2	3	3							
		【ビジュアルデザイン学科選択科目】	デザインスキル選択実習1	1・2・3・4	1	1			クリエイション3	2	3	3						
			デザインスキル選択実習2	1・2・3・4	1	1			クリエイション4	2	3	3						
			デザインスキル選択実習3	1・2・3・4	1	1			クリエイション5	2	3	3						
			デザインスキル選択実習4	1・2・3・4	1	1			クリエイション6	2	3	3						
			デザインスキル選択実習5	1・2・3・4	1	1			デザイン1	1	2	2						
			デザインスキル選択実習6	1・2・3・4	1	1			デザイン2	2	2	2						
			デザインスキル選択実習7	1・2・3・4	1	1			デザイン3	2	2	2						
			デザインスキル選択実習8	1・2・3・4	1	1			デザイン4	2	2	2						
			デザインスキル選択実習9	2・3・4	1	1			デザイン5	2	2	2						
			デザインスキル選択実習10	2・3・4	1	1			デザイン6	2	2	2						
			デザインスキル選択実習11	2・3・4	1	1			デザイン7	2	2	2						
			デザインスキル選択実習12	2・3・4	1	1			デザイン8	2	2	2						
			デザインスキル選択実習13	2・3・4	1	1			プロジェクト1	3	3	3						
			デザインスキル選択実習14	2・3・4	1	1			プロジェクト2	3	3	3						
			デザインスキル選択実習15	2・3・4	1	1			プロジェクト3	3	1	1						
			デザインスキル選択実習16	2・3・4	1	1			プロジェクト4	3	3	3						
			デザインスキル応用実習1	3・4	1	1			プロジェクト5	3	3	3						
			デザインスキル応用実習2	3・4	1	1			プロジェクト6	3	1	1						
			デザインスキル応用実習3	3・4	1	1			デザインスキル5	3	2	2						
			デザインスキル応用実習4	3・4	1	1			デザインスキル6	3	2	2						
			デザインスキル応用実習5	3・4	1	1			デザインスキル7	3	2	2						
			デザインスキル応用実習6	3・4	1	1			デザインスキル8	3	2	2						
			デザインスキル応用実習7	3・4	1	1			テーマ研究1	4	1	1						
			デザインスキル応用実習8	3・4	1	1			テーマ研究2	4	1	1						
			プロダクトデザイン学科	【プロダクトデザイン学科必修科目】	基礎実習1	1			2	2	●プロダクトデザイン学科 デザイン学部必修科目、デザイン学部選択 科目、プロダクトデザイン学科必修科目、 プロダクトデザイン学科選択科目から74単 位以上必修	プロダクトデザイン学科 専門教育科目	プロダクトデザイン学科	基礎デザイン1	1	3	3	デザイン学部共通専門教育科目6単位選択 必修を含み、デザイン学部専門教育科目お よびプロダクトデザイン学科専門教育科目 から80単位以上必修
					基礎実習2	1			2	2	基礎デザイン2			2	3	3		
基礎実習3	1				2	2	基礎デザイン3	2	3	3								
基礎実習4	1				2	2	絵画基礎	1	3	3								
基礎実習5	2				2	2	立体構成	1	3	3								
基礎実習6	2				2	2	デザインテクノロジー1	1	2	2								
応用実習1	2				2	2	デザインテクノロジー2	2	2	2								
応用実習2	2				2	2	デザインテクノロジー3	2	2	2								
応用実習3	3				2	2	デザインテクノロジー4	2-3	2	2								
応用実習4	3				2	2	デザインテクノロジー5	2-3	2	2								
社会実践実習1	3				1	1	デザインテクノロジー6	3	2	2								
社会実践実習2	3				1	1	工芸	1	3	3								
社会実践実習3	3				1	1	工芸	2	1	3								
社会実践実習4	3				1	1	京都デザイン	1	3	3								
応用実習5	3				2	2	ワークショップ実習1	1-2	2	2								
応用実習6	3				2	2	ワークショップ実習2	3-4	2	2								
卒業研究実習1	4				2	2	立体造形1	1	3	3								
卒業研究実習2	4				2	2	立体造形2	2	3	3								
卒業研究実習3	4				2	2	デザインマテリアル1	2	3	3								
卒業論文・卒業制作	4				2	2	デザインマテリアル2	2	3	3								
卒業展示	4				2	2	デザインマテリアル3	2	3	3								
【プロダクトデザイン学科選択科目】	プロダクトカラー論1				1・2・3・4	1	1	デザインマテリアル4	2	3	3							
	プロダクトカラー論2				1・2・3・4	1	1	プロダクトコミュニケーション1	3	3	3							
	プロダクトデザイン基礎演習1	1・2・3・4			1	1	プロダクトコミュニケーション2	3	3	3								
	プロダクトデザイン基礎演習2	1・2・3・4			1	1	プロダクトコミュニケーション3	3	3	3								
	プロダクトデザイン基礎演習3	1・2・3・4			1	1	プロダクトコミュニケーション4	3	3	3								
	プロダクトデザイン基礎演習4	1・2・3・4			1	1	プロダクトコミュニケーション5	3	3	3								
	プロダクトデザイン基礎演習5	1・2・3・4			1	1	プロダクトコミュニケーション6	3	3	3								
	プロダクトデザイン基礎演習6	1・2・3・4			1	1	プロダクトコミュニケーション7	3	3	3								
	プロダクトデザイン基礎演習7	1・2・3・4			1	1	プロダクトコミュニケーション8	3	3	3								
	プロダクトデザイン基礎演習8	1・2・3・4			1	1	ライフクリエイション1	3	3	3								
	プロダクトデザイン基礎演習9	1・2・3・4			1	1	ライフクリエイション2	3	3	3								
	プロダクトデザイン基礎演習10	1・2・3・4			1	1	ライフクリエイション3	3	3	3								
	プロダクトデザイン基礎演習11	1・2・3・4			1	1	ライフクリエイション4	3	3	3								
	プロダクトデザイン基礎演習12	1・2・3・4			1	1	ライフクリエイション5	3	3	3								
	プロダクトデザイン応用演習1	2・3・4			1	1	ライフクリエイション6	3	3	3								
	プロダクトデザイン応用演習2	2・3・4			1	1	ライフクリエイション7	3	3	3								
	プロダクトデザイン応用演習3	2・3・4			1	1	ライフクリエイション8	3	3	3								
	プロダクトデザイン応用演習4	2・3・4			1	1	プロダクトデザイン1	3	3	3								
	プロダクトデザイン応用演習5	3・4			1	1	プロダクトデザイン2	3	3	3								
	プロダクトデザイン応用演習6	3・4			1	1	PC演習	4	2	2								
	プロダクトデザイン応用演習7	3・4			1	1	LC演習	4	2	2								
	プロダクトデザイン応用演習8	3・4			1	1	プロダクトカラー論	1	2	2								
	プロダクトデザイン応用演習9	3・4			1	1	家具史	1-2-3-4	2	2								
	プロダクトデザイン応用演習10	3・4			1	1	インテリアデザイン論	2-3-4	2	2								
	プロダクトデザイン応用演習11	2・3・4			1	1	近代空間論	2-3-4	2	2								
	プロダクトデザイン応用演習12	2・3・4			1	1	デザイン法規概論	3-4	2	2								

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考	学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計						必修	選択	計	
		プロダクトデザイン応用演習13	2・3・4	1	1				人間生活工学	3-4	2	2			
		プロダクトデザイン応用演習14	2・3・4	1	1				プランニングと企画	3-4	2	2			
		プロダクトデザイン応用演習15	2・3・4	1	1				日本建築史	1-2-3-4	2	2			
		プロダクトデザイン応用演習16	2・3・4	1	1				西洋建築史	1-2-3-4	2	2			
		プロダクトデザイン応用演習17	2・3・4	1	1				建築計画	1-2-3-4	2	2			
		プロダクトデザイン応用演習18	2・3・4	1	1				環境工学	1-2-3-4	2	2			
		プロダクトデザイン応用演習19	2・3・4	1	1				設備工学	1-2-3-4	2	2			
		プロダクトデザイン応用演習20	2・3・4	1	1				一般構造	1-2-3-4	2	2			
		プロダクトデザイン応用演習21	2・3・4	1	1				測量演習	1-2-3-4	2	2			
		プロダクトデザイン応用演習22	2・3・4	1	1				建築構法演習	1-2-3-4	2	2			
		プロダクトデザイン応用演習23	2・3・4	1	1				近現代建築史	2-3-4	2	2			
		プロダクトデザイン応用演習24	2・3・4	1	1				建築力学	2-3-4	2	2			
		プロダクトデザイン応用演習25	2・3・4	1	1				建築構法	2-3-4	2	2			
		プロダクトデザイン応用演習26	2・3・4	1	1				伝統建築工法	2-3-4	2	2			
		プロダクトデザイン応用演習27	3・4	1	1				住環境論	2-3-4	2	2			
		プロダクトデザイン応用演習28	3・4	1	1				まちづくりデザイン	2-3-4	2	2			
		プロダクトデザイン応用演習29	2・3・4	1	1				材料実験	3-4	2	2			
		プロダクトデザイン応用演習30	2・3・4	1	1				施工演習	3-4	2	2			
		プロダクトデザイン応用演習31	2・3・4	1	1				積算演習	3-4	2	2			
		プロダクトデザイン応用演習32	2・3・4	1	1				建築法規演習	3-4	2	2			
		プロダクトデザイン応用演習33	2・3・4	1	1				卒業制作テーマ研究1	4	3	3			
		プロダクトデザイン応用演習34	2・3・4	1	1				卒業制作テーマ研究2	4	3	3			
		プロダクトデザイン応用演習35	2・3・4	1	1				卒業制作テーマ研究3	4	3	3			
		プロダクトデザイン応用演習36	2・3・4	1	1				卒業制作研究1	4	3	3			
		プロダクトデザイン応用演習37	2・3・4	1	1				卒業制作研究2	4	3	3			
		プロダクトデザイン応用演習38	2・3・4	1	1				卒業制作研究3	4	3	3			
		プロダクトデザイン応用演習39	2・3・4	1	1				卒業制作・卒業論文	4	4	4			
		プロダクトデザイン応用演習40	2・3・4	1	1										
建築 学科		【建築学科必修科目】					●建築学科 デザイン学部必修科目、デザイン学部選択 科目、建築学科必修科目、建築学科選択科 目から74単位以上必修	建築 学科	建築学科専門教育科目			デザイン学部共通専門教育科目6単位選択 必修を含み、デザイン学部専門教育科目お よび建築学科専門教育科目から80単位以上 必修			
		基礎実習1	1	2	2	身体空間論			1	2	2				
		基礎実習2	1	2	2	設計基礎1			1	3	3				
		基礎実習3	1	2	2	コンピューター演習1			1	2	2				
		基礎実習4	1	2	2	コンピューター演習2			2	2	2				
		基礎実習5	2	2	2	コンピューター演習3			2	2	2				
		基礎実習6	2	2	2	製図模型演習			1	2	2				
		応用実習1	2	2	2	プレゼンテーション演習1			1	2	2				
		応用実習2	2	2	2	プレゼンテーション演習2			3-4	2	2				
		応用実習3	3	2	2	インテリアデザイン論			1	2	2				
		応用実習4	3	2	2	設計基礎2			1	3	3				
		社会実践実習1	2	1	1	日本建築史			1	2	2				
		社会実践実習2	2	1	1	建築計画			1	2	2				
		社会実践実習3	3	1	1	一般構造			1	2	2				
		社会実践実習4	3	1	1	測量演習			1	2	2				
		応用実習5	3	2	2	フィールドワーク1			1-2	2	2				
		応用実習6	3	2	2	フィールドワーク2			1-2	2	2				
		卒業研究実習1	4	2	2	まちづくりデザイン			2	2	2				
		卒業研究実習2	4	2	2	設計基礎3			2	3	3				
		卒業研究実習3	4	2	2	設計基礎4			2	3	3				
		卒業論文・卒業制作	4	2	2	仮想空間論			2	2	2				
		卒業展示	4	2	2	仮想空間演習			2	2	2				
		【建築学科選択科目】				西洋建築史			1	2	2				
		身体空間論	1・2・3・4	1	1	近現代建築史			2	2	2				
		建築計画	1・2・3・4	2	2	建築材料演習			2	2	2				
		一般構造	1・2・3・4	2	2	建築構法演習			1	2	2				
		西洋建築史	2・3・4	2	2	積算演習			3-4	2	2				
		仮想空間論	2・3・4	2	2	設計			1	3	6				
		住環境論1	2・3・4	1	1	設計			2	3	6				
		住環境論2	2・3・4	1	1	設計			3	4	6				
		日本建築史	1・2・3・4	2	2	設計			4	4	6				
		まちづくり論1	3・4	1	1	伝統建築工法			2	2	2				
		まちづくり論2	3・4	1	1	建築構法			2	2	2				
		建築力学	2・3・4	2	2	環境工学			1	2	2				
		環境工学	3・4	2	2	設備工学			1	2	2				
		近現代建築史	3・4	2	2	設備工学2			3・4	2	2				
		建築構造	2・3・4	2	2	伝統建築工法1			2・3・4	1	1				
		設備工学1	3・4	1	1	伝統建築工法2			2・3・4	1	1				
		設備工学2	3・4	1	1	建築構法演習			1・2・3・4	1	1				
		伝統建築工法1	2・3・4	1	1	コンピューター演習1			1・2・3・4	2	2				
		伝統建築工法2	2・3・4	1	1	コンピューター演習2			2・3・4	2	2				
		建築構法演習	1・2・3・4	1	1	仮想空間演習			2・3・4	2	2				
		コンピューター演習1	1・2・3・4	2	2	建築材料演習			2・3・4	2	2				
		コンピューター演習2	2・3・4	2	2	コンピューター演習3			2・3・4	2	2				
		仮想空間演習	2・3・4	2	2	建築法規演習			3・4	2	2				
		建築材料演習	2・3・4	2	2	材料実験			3・4	2	2				
		コンピューター演習3	2・3・4	2	2	プレゼン演習			3・4	2	2				
	建築法規演習	3・4	2	2	施工演習	3・4	2	2							
	材料実験	3・4	2	2	測量演習	2・3・4	2	2							
	プレゼン演習	3・4	2	2	積算演習	3・4	2	2							
	施工演習	3・4	2	2	フィールドワーク1	2・3・4	2	2							
	測量演習	2・3・4	2	2	フィールドワーク2	2・3・4	2	2							
	積算演習	3・4	2	2	人間環境デザインプログラム選択科目										
	フィールドワーク1	2・3・4	2	2	【人間環境デザイン基盤科目】										
	フィールドワーク2	2・3・4	2	2	国際文化概論1	1	1								
	人間環境デザインプログラム選択科目				国際文化概論2	1	1								
	【人間環境デザイン基盤科目】				国際文化史1	1	1								
	国際文化概論1	1	1		国際文化史2	1	1								
	国際文化概論2	1	1		国際文化リテラシー1	1・2・3・4	2								
	国際文化史1	1	1		国際文化リテラシー2	1・2・3・4	2								
	国際文化史2	1	1		国際文化特講1	2・3・4	2								
	国際文化リテラシー1	1・2・3・4	2		国際文化特講2	2・3・4	2								
	国際文化リテラシー2	1・2・3・4	2		自然環境演習	1・2・3・4	1	1							
	国際文化特講1	2・3・4	2		国内インターンシップ	1・2・3・4	1	1							
	国際文化特講2	2・3・4	2		長期インターンシップ1	3・4	2	2							
	自然環境演習	1・2・3・4	1	1	長期インターンシップ2	3・4	2	2							
	国内インターンシップ	1・2・3・4	1	1	長期インターンシップ3	3・4	2	2							
	長期インターンシップ1	3・4	2	2	長期インターンシップ4	3・4	2	2							
	長期インターンシップ2	3・4	2	2	長期インターンシップ5	3・4	2	2							
	長期インターンシップ3	3・4	2	2	長期インターンシップ6	3・4	2	2							
	長期インターンシップ4	3・4	2	2	【グローバル地域研究科目】										
	長期インターンシップ5	3・4	2	2	地域研究入門	2・3・4	2								
	長期インターンシップ6	3・4	2	2											

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考	学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計						必修	選択	計	
		地域研究特講	2・3・4		2										
		アフリカ地域研究1	2・3・4		2										
		アフリカ地域研究2	2・3・4		2										
		アジア地域研究1	2・3・4		2										
		アジア地域研究2	2・3・4		2										
		アメリカ地域研究1	2・3・4		2										
		アメリカ地域研究2	2・3・4		2										
		大洋州地域研究	2・3・4		2										
		欧州地域研究	2・3・4		2										
		【グローバル関係科目】													
		グローバル関係概論	2・3・4		2										
		グローバルヒストリー概論	2・3・4		2										
		グローバルヒストリー特講	2・3・4		2										
		多国籍企業論	2・3・4		2										
		社会運動論	2・3・4		2										
		世界の宗教	2・3・4		2										
		アフリカ・アジア関係論	2・3・4		2										
		国際政治学	2・3・4		2										
		国際社会の法秩序	2・3・4		2										
		人口動態論	3・4		2										
		人口政策論	3・4		2										
		比較社会学	2・3・4		2										
		【グローバル共生社会科目】													
		先住民研究	2・3・4		2										
		ポストコロニアル概論	2・3・4		2										
		国際開発論	2・3・4		2										
		マイノリティ研究概論	2・3・4		2										
		グローバル・ビジネス論	2・3・4		2										
		グローバル化とメディア	2・3・4		2										
		エイジング研究概論	3・4		2										
		子ども学概論	3・4		2										
		地球環境学概論1	2・3・4		2										
		地球環境学概論2	3・4		2										
		地球環境学概論3	3・4		2										
		NGO論	2・3・4		2										
		平和学	2・3・4		2										
		市民社会論	2・3・4		2										
		人間の安全保障	2・3・4		2										
		【グローバル文化科目】													
		観光学総論	2・3・4		2										
		世界の文学1	2・3・4		2										
		世界の文学2	2・3・4		2										
		世界文化遺産	2・3・4		2										
		アフリカ美術	2・3・4		2										
		マテリアル・カルチャー概論	2・3・4		2										
		民族音楽論	2・3・4		2										
		比較服飾文化論	2・3・4		2										
		比較建築文化論	2・3・4		2										
		【グローバル基礎講義科目】													
		哲学概論	1・2・3・4		2										
		倫理学	1・2・3・4		2										
		心理学	1・2・3・4		2										
		社会学	2・3・4		2										
		社会調査法	2・3・4		2										
		経済学	2・3・4		2										
		批評理論	2・3・4		2										
		ジェンダー論	2・3・4		2										
		宗教学	2・3・4		2										
		社会思想史	2・3・4		2										
		自然地理学	2・3・4		2										
		文化政策論	2・3・4		2										
		文化社会学	2・3・4		2										
		西洋史	2・3・4		2										
		東洋史	2・3・4		2										
		【日本文化科目】													
		日本史	2・3・4		2										
		日本地域史	2・3・4		2										
		日本社会史	2・3・4		2										
		日本・アジア関係史	2・3・4		2										
		日本の文化遺産	2・3・4		2										
		歴史地理学	2・3・4		2										
		京都の歴史	2・3・4		2										
		日本民衆史	2・3・4		2										
		日本文学史	2・3・4		2										
		漢文学	2・3・4		2										
		口承文化論	2・3・4		2										
		書誌学	2・3・4		2										
		古典文法	2・3・4		2										
		書道	2・3・4		2										
		古文書解読	2・3・4		2										
		【メディア表現講義科目】													
		コンテンツビジネス1	2・3・4		1										
		コンテンツビジネス2	2・3・4		1										
		コンテンツビジネス3	2・3・4		1										
		サウンドスケープ論	1・2・3・4		2										
		メディアアート論	1・2・3・4		2										
		ゲームデザイン論	1・2・3・4		2										
		ウェブデザイン論	1・2・3・4		2										
		コンピュータ&ネットワーク論	1・2・3・4		2										
		サブカルチャーとメディア	1・2・3・4		2										
		文化産業論	1・2・3・4		2										
		文化政策論	1・2・3・4		2										
		広告メディア論	1・2・3・4		2										
		教育メディア論	1・2・3・4		2										
		メディアミックス論	2・3・4		2										
		ソーシャルメディア論	2・3・4		2										
		【芸術講義科目】													
		美術史特論1	2・3・4		1										
		美術史特論2	2・3・4		1										
		美術史特論3	2・3・4		1										
		美術史特論4	2・3・4		1										
		美術工芸史1	2・3・4		1										
		美術工芸史2	2・3・4		1										
		美術工芸史3	2・3・4		1										

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考	学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計						必修	選択	計	
		美術工芸史4	2・3・4		1										
		現代社会システム論	2・3・4		1										
		現代美術論1	2・3・4		1										
		現代美術論2	2・3・4		1										
		芸術表象論1	2・3・4		1										
		芸術表象論2	2・3・4		1										
		芸術と哲学1	2・3・4		1										
		芸術と哲学2	2・3・4		1										
		アートマネジメント論1	2・3・4		1										
		アートマネジメント論2	2・3・4		1										
		美術解剖学	2・3・4		1										
		視覚認知論1	2・3・4		1										
		視覚認知論2	2・3・4		1										
		芸術と精神分析1	2・3・4		1										
		芸術と精神分析2	2・3・4		1										
		芸術評論1	2・3・4		1										
		芸術評論2	2・3・4		1										
		【マンガ講義科目】													
		マンガ表現史1	2・3・4		1										
		マンガ表現史2	2・3・4		1										
		メディア産業論1	2・3・4		1										
		メディア産業論2	2・3・4		1										
		キャラクター造形論1	2・3・4		1										
		キャラクター造形論2	2・3・4		1										
		キャラクター造形論3	2・3・4		1										
		キャラクター造形論4	2・3・4		1										
		アニメーション作品作家研究1	2・3・4		1										
		アニメーション作品作家研究2	2・3・4		1										
		アニメーション作品作家研究3	2・3・4		1										
		アニメーション作品作家研究4	2・3・4		1										
		マンガ業界論1	2・3・4		1										
		マンガ業界論2	2・3・4		1										
		海外コミックマンガ論1	2・3・4		1										
		海外コミックマンガ論2	2・3・4		1										
		比較マンガ論1	2・3・4		1										
		比較マンガ論2	2・3・4		1										
		新世代マンガ総合講座1	2・3・4		1										
		新世代マンガ総合講座2	2・3・4		1										
		IP研究1	2・3・4		1										
		IP研究2	2・3・4		1										
		IP研究3	2・3・4		1										
		IP研究4	2・3・4		1										

別表I 教育課程

⑥マンガ学部

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
マンガ学部	マンガ学部共通	【マンガ学部必修科目】					
		マンガ概論1	1	1	1		
		マンガ概論2	1	1	1		
		マンガ史1	1	1	1		
		マンガ史2	1	1	1		
		【マンガ学部選択科目】					
		マンガリテラシー1	1・2・3・4	2	2		
		マンガリテラシー2	1・2・3・4	2	2		
		マンガ特講1	2・3・4	2	2		
		マンガ特講2	2・3・4	2	2		
		マンガ表現史1	2・3・4	1	1		
		マンガ表現史2	2・3・4	1	1		
		メディア産業論1	2・3・4	1	1		
		メディア産業論2	2・3・4	1	1		
		キャラクター造形論1	2・3・4	1	1		
		キャラクター造形論2	2・3・4	1	1		
		キャラクター造形論3	2・3・4	1	1		
		キャラクター造形論4	2・3・4	1	1		
		アニメーション作品作家研究1	2・3・4	1	1		
		アニメーション作品作家研究2	2・3・4	1	1		
		アニメーション作品作家研究3	2・3・4	1	1		
		アニメーション作品作家研究4	2・3・4	1	1		
		マンガ業界論1	2・3・4	1	1		
		マンガ業界論2	2・3・4	1	1		
		海外コミックマンガ論1	2・3・4	1	1		
		海外コミックマンガ論2	2・3・4	1	1		
		比較マンガ論1	2・3・4	1	1		
		比較マンガ論2	2・3・4	1	1		
		新世代マンガ総合講座1	2・3・4	1	1		
		新世代マンガ総合講座2	2・3・4	1	1		
		I P研究1	2・3・4	1	1		
		I P研究2	2・3・4	1	1		
		I P研究3	2・3・4	1	1		
		I P研究4	2・3・4	1	1		
		イラスト講座1	2・3・4	1	1		
		イラスト講座2	2・3・4	1	1		
		コラボレーション演習1	2・3・4	1	1		
		コラボレーション演習2	2・3・4	1	1		
		コラボレーション演習3	2・3・4	1	1		
		コラボレーション演習4	2・3・4	1	1		
		絵本技法1	2・3・4	1	1		
		絵本技法2	2・3・4	1	1		
		絵本技法3	2・3・4	1	1		
		絵本技法4	2・3・4	1	1		
		シナリオ技法1	2・3・4	1	1		
		シナリオ技法2	2・3・4	1	1		
		シナリオ技法3	2・3・4	1	1		
		シナリオ技法4	2・3・4	1	1		
		実用マンガ演習1	2・3・4	1	1		
		実用マンガ演習2	2・3・4	1	1		
		編集実践演習1	2・3・4	1	1		
		編集実践演習2	2・3・4	1	1		
		ゲーム作画演習1	2・3・4	1	1		
		ゲーム作画演習2	2・3・4	1	1		
ゲーム作画演習3	2・3・4	1	1				
ゲーム作画演習4	2・3・4	1	1				
人体研究1	2・3・4	1	1				
人体研究2	2・3・4	1	1				
人体研究3	2・3・4	1	1				
人体研究4	2・3・4	1	1				
マンガ学科					●マンガ学科 マンガ学部必修科目、マンガ学部選択科目、マンガ学科必修科目、マンガ学科選択科目から74単位以上必修		
【マンガ学科必修科目】							
基礎実習1	1	2	2				
基礎実習2	1	2	2				
基礎実習3	1	2	2				
基礎実習4	1	2	2				
基礎実習5	2	2	2				
基礎実習6	2	2	2				
応用実習1	2	2	2				
応用実習2	2	2	2				
応用実習3	3	2	2				
応用実習4	3	2	2				
マンガ実践実習1	3	1	1				
マンガ実践実習2	3	1	1				
マンガ実践実習3	3	1	1				
マンガ実践実習4	3	1	1				
応用実習5	3	2	2				
応用実習6	3	2	2				
卒業研究実習1	4	2	2				
卒業研究実習2	4	2	2				
卒業研究実習3	4	2	2				
卒業論文・卒業制作	4	2	2				
卒業展示	4	2	2				
【マンガ学科選択科目】							
脚本概論1	2・3・4	1	1				
脚本概論2	2・3・4	1	1				
脚本概論3	2・3・4	1	1				
脚本概論4	2・3・4	1	1				
編集概論1	2・3・4	1	1				
編集概論2	2・3・4	1	1				
編集概論3	2・3・4	1	1				
編集概論4	2・3・4	1	1				
風刺画論1	2・3・4	1	1				
風刺画論2	2・3・4	1	1				
物語キャラクター論1	2・3・4	1	1				
物語キャラクター論2	2・3・4	1	1				
日本アニメーション史1	2・3・4	1	1				
日本アニメーション史2	2・3・4	1	1				
世界アニメーション史1	2・3・4	1	1				
世界アニメーション史2	2・3・4	1	1				
基礎デジタル演習1	2・3・4	1	1				
基礎デジタル演習2	2・3・4	1	1				

④マンガ学部

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
マンガ学部	マンガ学部共通						
		マンガ学部共通専門教育科目 (講義科目)					
		キャラクター造形論1	1-2-3-4	2	2		
		キャラクター造形論2	1-2-3-4	2	2		
		風刺画論	1-2-3-4	2	2		
		物語キャラクター論	1-2-3-4	2	2		
		脚本概論1	1-2-3-4	2	2		
		脚本概論2	1-2-3-4	2	2		
		マンガ表現史1	1-2-3-4	2	2		
		マンガ表現史2	1-2-3-4	2	2		
		編集概論1	1-2-3-4	2	2		
		編集概論2	1-2-3-4	2	2		
		アニメーション作品作家研究1	1-2-3-4	2	2		
		アニメーション作品作家研究2	1-2-3-4	2	2		
		海外コミックマンガ論	2-3-4	2	2		
		比較マンガ論	2-3-4	2	2		
		マンガ業界論	1-2-3-4	2	2		
		メディア文化論	2-3-4	2	2		
		メディア産業論	2-3-4	2	2		
		新世代マンガ総合講座	2-3-4	2	2		
		日本アニメーション史	2-3-4	2	2		
		世界アニメーション史	2-3-4	2	2		
		(実習・演習科目)					
		キャラクター造形基礎1	1-2-3-4	2	2		
		キャラクター造形基礎2	1-2-3-4	2	2		
		基礎デジタル演習1	1-2-3-4	2	2		
		基礎デジタル演習2	1-2-3-4	2	2		
		動態描写技法1	1-2-3-4	2	2		
		動態描写技法2	1-2-3-4	2	2		
		イラスト講座	2-3-4	2	2		
		デジタル演習1	2-3-4	2	2		
		デジタル演習2	2-3-4	2	2		
		ベース技法	2-3-4	2	2		
		アニメーション演習1	3-4	2	2		
		アニメーション演習2	3-4	2	2		
		絵本技法1	3-4	2	2		
		絵本技法2	3-4	2	2		
		シナリオ技法1	3-4	2	2		
		シナリオ技法2	3-4	2	2		
		実用マンガ演習	3-4	2	2		
		編集実践演習	3-4	2	2		
		コラボレーション演習1	3-4	2	2		
		コラボレーション演習2	3-4	2	2		
		ゲーム作画演習1	3-4	2	2		
		ゲーム作画演習2	3-4	2	2		
		アニメーション3DCG演習1	3-4	2	2		
		アニメーション3DCG演習2	3-4	2	2		
		アニメーション創作実習1	3-4	3	3		
		アニメーション創作実習2	3-4	3	3		
		マンガ学科専門教育科目					
		デッサン1	1	3	3		
		デッサン2	1	3	3		
		マンガデッサン1	1	3	3		
		マンガデッサン2	1	3	3		
基礎デッサン1	2-3-4	2	2				
基礎デッサン2	2-3-4	2	2				
絵画技法1	1	3	3				
絵画技法2	1	3	3				
デザイン1	1	3	3				
デザイン2	1	3	3				
マンガデザイン1	1-2-3-4	2	2				
マンガデザイン2	1-2-3-4	2	2				
ネームドリル実習1	1	3	3				
ネームドリル実習2	1	3	3				
制作実習1	2	3	3				
制作実習2	2	3	3				
風刺画1	2	3	3				
風刺画2	2	3	3				
クロッキー1	2	3	3				
クロッキー2	2	3	3				
脚本実習1	2	3	3				
脚本実習2	2	3	3				
脚本実習3	3	3	3				
脚本実習4	3	3	3				
表現技法1	1	3	3				
表現技法2	2	3	3				
表現技法3	3	3	3				
表現技法4	3	3	3				
キャラクター造形実習1	2	3	3				
キャラクター造形実習2	2	3	3				
キャラクター造形実習3	3	3	3				
キャラクター造形実習4	3	3	3				
カラー実習1	2-3-4	3	3				
カラー実習2	2-3-4	3	3				
工芸	2-3-4	2	2				
基礎立体彫塑	2-3-4	2	2				
カートゥーン1	3	3	3				
カートゥーン2	3	3	3				
マンガ制作実務演習	3	2	2				
マンガ制作実務研修	3	2	2				
マンガ学科、カートゥーンコース、キャラクターデザインコース、新世代マンガコースは38単位以上必修							
マンガ学科、ストーリーマンガコースは32単位以上必修							
マンガ学科、ストーリーマンガコースは48単位以上必修							

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
		基礎デジタル演習3	2・3・4	1	1		
		基礎デジタル演習4	2・3・4	1	1		
		デジタル演習1	2・3・4	1	1		
		デジタル演習2	2・3・4	1	1		
		デジタル演習3	2・3・4	1	1		
		デジタル演習4	2・3・4	1	1		
		マンガデザイン1	2・3・4	1	1		
		マンガデザイン2	2・3・4	1	1		
		マンガデザイン3	2・3・4	1	1		
		マンガデザイン4	2・3・4	1	1		
		動態描写技法1	2・3・4	1	1		
		動態描写技法2	2・3・4	1	1		
		動態描写技法3	2・3・4	1	1		
		動態描写技法4	2・3・4	1	1		
		パース技法1	2・3・4	1	1		
		パース技法2	2・3・4	1	1		
		カラー演習1	2・3・4	1	1		
		カラー演習2	2・3・4	1	1		
		カラー演習3	2・3・4	1	1		
		カラー演習4	2・3・4	1	1		
		キャラクター造形基礎1	2・3・4	1	1		
		キャラクター造形基礎2	2・3・4	1	1		
		キャラクター造形基礎3	2・3・4	1	1		
		キャラクター造形基礎4	2・3・4	1	1		
		アニメーション演習1	2・3・4	1	1		
		アニメーション演習2	2・3・4	1	1		
		アニメーション演習3	2・3・4	1	1		
		アニメーション演習4	2・3・4	1	1		
		アニメーション3DCG演習1	2・3・4	1	1		
		アニメーション3DCG演習2	2・3・4	1	1		
		アニメーション3DCG演習3	2・3・4	1	1		
		アニメーション3DCG演習4	2・3・4	1	1		
		基礎デッサン1	2・3・4	1	1		
		基礎デッサン2	2・3・4	1	1		
		基礎デッサン3	2・3・4	1	1		
		基礎デッサン4	2・3・4	1	1		
	アニメーション学科	【アニメーション学科必修科目】					
		基礎実習1	1	2	2		
		基礎実習2	1	2	2		
		基礎実習3	1	2	2		
		基礎実習4	1	2	2		
		基礎実習5	2	2	2		
		基礎実習6	2	2	2		
		応用実習1	2	2	2		
		応用実習2	2	2	2		
		応用実習3	3	2	2		
		応用実習4	3	2	2		
		社会実践実習1	3	1	1		
		社会実践実習2	3	1	1		
		社会実践実習3	3	1	1		
		社会実践実習4	3	1	1		
		応用実習5	3	2	2		
		応用実習6	3	2	2		
		卒業研究実習1	4	2	2		
		卒業研究実習2	4	2	2		
		卒業研究実習3	4	2	2		
		卒業論文・卒業制作	4	2	2		
		卒業展示	4	2	2		
		【アニメーション学科選択科目】					
		アニメーション基礎研究1	1・2・3・4	1	1		
		アニメーション基礎研究2	1・2・3・4	1	1		
		アニメーション基礎研究3	1・2・3・4	1	1		
		アニメーション基礎研究4	1・2・3・4	1	1		
		アクションドローイング基礎1	1・2・3・4	1	1		
		アクションドローイング基礎2	1・2・3・4	1	1		
		アクションドローイング基礎3	1・2・3・4	1	1		
		アニメーション演出概論1	2・3・4	1	1		
		アニメーション演出概論2	2・3・4	1	1		
		アニメーション演出特論1	2・3・4	1	1		
		アニメーション演出特論2	2・3・4	1	1		
		シナリオ概論1	2・3・4	1	1		
		シナリオ概論2	2・3・4	1	1		
		シナリオ特論1	2・3・4	1	1		
		シナリオ特論2	2・3・4	1	1		
		日本アニメーション史1	2・3・4	1	1		
		日本アニメーション史2	2・3・4	1	1		
		世界アニメーション史1	2・3・4	1	1		
		世界アニメーション史2	2・3・4	1	1		
		アニメーション3DCG演習1	2・3・4	1	1		
		アニメーション3DCG演習2	2・3・4	1	1		
		アニメーション3DCG演習3	2・3・4	1	1		
		アニメーション3DCG演習4	2・3・4	1	1		
		アニメーション音響基礎1	2・3・4	1	1		
		アニメーション音響基礎2	2・3・4	1	1		
		アニメーション音響基礎3	2・3・4	1	1		
		アニメーション音響基礎4	2・3・4	1	1		
		アクションドローイング1	2・3・4	1	1		
		アクションドローイング2	2・3・4	1	1		
		アクションドローイング3	2・3・4	1	1		
		アクションドローイング4	2・3・4	1	1		
		アニメーション音響演出1	3・4	1	1		
		アニメーション音響演出2	3・4	1	1		
		アニメーション音響演出3	3・4	1	1		
		アニメーション音響演出4	3・4	1	1		
		エディトリアル演習1	3・4	1	1		
		エディトリアル演習2	3・4	1	1		
		ブックデザイン演習1	3・4	1	1		
		ブックデザイン演習2	3・4	1	1		
		エフェクト技法1	3・4	1	1		
		エフェクト技法2	3・4	1	1		
		エフェクト技法3	3・4	1	1		
		エフェクト技法4	3・4	1	1		

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
		自由制作	4	3	3		
		卒業制作実習	4	6	6		
		卒業制作	4	3	3		
		アニメーション学科 専門教育科目					アニメーション学科専門教育科目42単位 必修を含み、マンガ学部共通専門教育科目 およびアニメーション学科専門教育科目か ら80単位以上必修
		アニメーションモーション基礎演習1	1	2	2		
		アニメーションモーション基礎演習2	1	2	2		
		アニメーションCG演習1	1	2	2		
		アニメーションCG演習2	1	2	2		
		アニメーション3DCG演習1	2	2	2		
		アニメーション3DCG演習2	2	2	2		
		アニメーション造形基礎実習1	1	3	3		
		アニメーション造形基礎実習2	1	3	3		
		アニメーション基礎研究1	1	2	2		
		アニメーション基礎研究2	1	2	2		
		アニメーション音響基礎1	2	2	2		
		アニメーション音響基礎2	2	2	2		
		アクションドローイング基礎1	1・2・3・4	2	2		
		アクションドローイング基礎2	1・2・3・4	2	2		
		アクションドローイング1	2・3・4	2	2		
		アクションドローイング2	2・3・4	2	2		
		応用作画演習1	3・4	2	2		
		応用作画演習2	3・4	2	2		
		アニメーション演出論1	2	2	2		
		アニメーション演出論2	2	2	2		
		アニメーション分析演習1	2	2	2		
		アニメーション分析演習2	2	2	2		
		アニメーション造形表現実習1	2	3	3		
		アニメーション造形表現実習2	2	3	3		
		工芸	2・3・4	2	2		
		基礎立体・彫塑	2・3・4	2	2		
		エフェクト技法1	3	2	2		
		エフェクト技法2	3	2	2		
		ストップモーション実習1	2	3	3		
		ストップモーション実習2	2	3	3		
		ポストプロダクション実習1	3	3	3		
		ポストプロダクション実習2	3	3	3		
		アニメーションCG実習1	3	3	3		
		アニメーションCG実習2	3	3	3		
		アニメーション創作実習1	3	3	3		
		アニメーション創作実習2	3	3	3		
		アニメーション造形実践実習1	3	3	3		
		アニメーション造形実践実習2	3	3	3		
		アニメーション演出論3	3	2	2		
		アニメーション演出論4	3	2	2		
		シナリオ論1	2・3・4	2	2		
		シナリオ論2	2・3・4	2	2		
		自由制作	4	6	6		
		卒業制作実習	4	6	6		
		卒業制作	4	4	4		

別表Ⅱ 教職に関する専門科目

【新】						【旧】							
教職に関する科目						教職に関する科目							
学部	学科	授業科目	単位数			備考	学部	学科	授業科目	単位数			備考
			必修	選択	計					必修	選択	計	
芸術学部・デザイン学部・マンガ学部・国際文化学部	課程を設置する各学科	教育の基礎的理解に関する科目				「道德教育論」および「教育実習Ⅱ」の単位は、中一種免取得希望者のみ必修とする。	芸術学部・デザイン学部・マンガ学部・人文学部	課程を設置する各学科	教育の基礎的理解に関する科目				「道德教育論」および「教育実習Ⅱ」の単位は、中一種免取得希望者のみ必修とする。
		教育原論	2		2				教育原論	2		2	
		教職論	2		2				教職論	2		2	
		教育制度論	2		2				教育制度論	2		2	
		教育心理学	2		2				教育心理学	2		2	
		特別支援教育論	1		1				特別支援教育論	1		1	
		教育課程論	2		2				教育課程論	2		2	
		道德、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目		2	2				道德、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目		2	2	
		道德教育論	1		1				道德教育論	1		1	
		総合的な学習の時間の指導論	1		1				総合的な学習の時間の指導論	1		1	
		特別活動論	2		2				特別活動論	2		2	
		教育方法論	2		2				教育方法論	2		2	
		生徒・進路指導論	2		2				生徒・進路指導論	2		2	
		教育相談	2		2				教育相談	2		2	
教育実践に関する科目				教育実践に関する科目									
事前・事後指導	1		1	事前・事後指導	1		1						
教育実習Ⅰ	2		2	教育実習Ⅰ	2		2						
教育実習Ⅱ		2	2	教育実習Ⅱ		2	2						
教職実践演習(中・高)	2		2	教職実践演習(中・高)	2		2						
教科及び教科の指導法に関する科目						教科及び教科の指導法に関する科目							
芸術学部・デザイン学部・マンガ学部・国際文化学部	課程を設置する各学科	各教科の指導法				「各教科の指導法」は該当教科の指導法を履修する。なお、各教科の指導法より、中一種免は8単位、高一種免は4単位以上をそれぞれ選択必修とする。	芸術学部・デザイン学部・マンガ学部・人文学部	課程を設置する各学科	各教科の指導法				「各教科の指導法」は該当教科の指導法を履修する。なお、各教科の指導法より、中一種免は8単位、高一種免は4単位以上をそれぞれ選択必修とする。
		美術科教育法Ⅰ	2		2				美術科教育法Ⅰ	2		2	
		美術科教育法Ⅱ	2		2				美術科教育法Ⅱ	2		2	
		美術科・工芸科教育法Ⅰ	2		2				美術科・工芸科教育法Ⅰ	2		2	
		美術科・工芸科教育法Ⅱ	2		2				美術科・工芸科教育法Ⅱ	2		2	
		国語科教育法Ⅰ	2		2				国語科教育法Ⅰ	2		2	
		国語科教育法Ⅱ	2		2				国語科教育法Ⅱ	2		2	
		国語科教育法Ⅲ	2		2				国語科教育法Ⅲ	2		2	
		国語科教育法Ⅳ	2		2				国語科教育法Ⅳ	2		2	
		社会科地歴科教育法Ⅰ	2		2				社会科地歴科教育法Ⅰ	2		2	
		社会科地歴科教育法Ⅱ	2		2				社会科地歴科教育法Ⅱ	2		2	
		社会科公民科教育法Ⅰ	2		2				社会科公民科教育法Ⅰ	2		2	
		社会科公民科教育法Ⅱ	2		2				社会科公民科教育法Ⅱ	2		2	
		教科又は教職に関する科目							教科又は教職に関する科目				
芸術学部・デザイン学部・マンガ学部・国際文化学部	課程を設置する各学科	人権教育論		2	2	「大学が独自に設定する科目」の選択科目又は最低修得単位を超えて履修した「教科及び教科の指導法に関する科目」「教育の基礎的理解に関する科目」「道德、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目」「教育実践に関する科目」について、併せて、中一種免の場合には4単位以上、高一種免の場合には12単位以上を修得する。	芸術学部・デザイン学部・マンガ学部・人文学部	課程を設置する各学科	人権教育論		2	2	「大学が独自に設定する科目」の選択科目又は最低修得単位を超えて履修した「教科及び教科の指導法に関する科目」「教育の基礎的理解に関する科目」「道德、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目」「教育実践に関する科目」について、併せて、中一種免の場合には4単位以上、高一種免の場合には12単位以上を修得する。
		現代学校論		2	2				現代学校論		2	2	
		障がい者理解		2	2				障がい者理解		2	2	
		学校安全論		2	2				学校安全論		2	2	
		学校ボランティア		2	2				学校ボランティア		2	2	

別表Ⅲ 図書館司書課程に関する科目

【新】						【旧】									
学部	学科	区分	授業科目	単位数			備考	学部	学科	区分	授業科目	単位数			備考
				必修	選択	計						必修	選択	計	
芸術学部・デザイン学部・マンガ学部・メディア表現学部・国際文化学部	課程を設置する学科	必修科目	生涯学習概論	2		2		芸術学部・デザイン学部・マンガ学部・ポピュラーカルチャー学部・人文学部	課程を設置する学科	必修科目	生涯学習概論	2		2	
			図書館概論	2		2					図書館概論	2		2	
			図書館制度・経営論	2		2					図書館制度・経営論	2		2	
			図書館情報技術論	2		2					図書館情報技術論	2		2	
			図書館サービス概論	2		2					図書館サービス概論	2		2	
			情報サービス論	2		2					情報サービス論	2		2	
			児童サービス論	2		2					児童サービス論	2		2	
			情報サービス演習1	1		1					情報サービス演習1	1		1	
			情報サービス演習2	1		1					情報サービス演習2	1		1	
			図書館情報資源概論	2		2					図書館情報資源概論	2		2	
			情報資源組織論	2		2					情報資源組織論	2		2	
			情報資源組織演習1	1		1					情報資源組織演習1	1		1	
		情報資源組織演習2	1		1		情報資源組織演習2			1		1			
		選択科目	図書館サービス特論		2	2	3科目のうち2科目を選択必			図書館サービス特論		2	2	3科目のうち2科目を選択必	
			図書館情報資源特論		2	2				図書館情報資源特論		2	2		
図書・図書館史			2	2		図書・図書館史		2	2						

別表Ⅳ 博物館学芸員課程に関する科目

【新】						【旧】									
学部	学科	区分	授業科目	単位数			備考	学部	学科	区分	授業科目	単位数			備考
				必修	選択	計						必修	選択	計	
芸術学部・デザイン学部・マンガ学部・メディア表現学部・国際文化学部	課程を 設置する 学科	必修科目	生涯学習概論	2		2		芸術学部・デザイン学部・マンガ学部・ポピュラーカルチャー学部・人文学部	課程を 設置する 学科	必修科目	生涯学習概論	2		2	
			博物館概論	2		2					博物館概論	2		2	
			博物館経営論	2		2					博物館経営論	2		2	
			博物館資料論	2		2					博物館資料論	2		2	
			博物館資料保存論	2		2					博物館資料保存論	2		2	
			博物館展示論	2		2					博物館展示論	2		2	
			博物館教育論	2		2					博物館教育論	2		2	
			博物館情報・メディア論	2		2					博物館情報・メディア論	2		2	
			博物館実習		3	3					博物館実習		3	3	
	選択科目	文化史	日本文化史概論		2	2	2系列以上に わたり、それ ぞれ1科目 以上、計2科 目4単位以上 を履修しな らなければならない。	選択科目	文化史	日本文化史概論		2	2	2系列以上に わたり、それ ぞれ1科目 以上、計2科 目4単位以上 を履修しな らなければならない。	
			説話・伝承史		2	2				説話・伝承史		2	2		
		美術史	美術史		2	2			美術史	美術史		2	2		
			日本美術史		2	2				日本美術史		2	2		
			東洋美術史		2	2				東洋美術史		2	2		
		考古学	西洋美術史		2	2			考古学	西洋美術史		2	2		
			考古学		2	2				考古学		2	2		
			民俗学		2	2				民俗学		2	2		
自然科学史	自然科学概論		2	2	自然科学史	自然科学概論		2	2						
	生物学		2	2		生物学		2	2						

別表V

【 新 】

【 旧 】

① 正規の学生の授業料等

1. 入学検定料

費 目	金 額
入 学 検 定 料	35,000円
大学入学共通テストを利用する入学試験の検定料	10,000円

注) 入学検定料は、学内規定により減免することができる。

2. 入学金

費 目	金 額
入 学 金	200,000円

3. 芸術学部授業料

費 目	第1クォーター	第2クォーター	第3クォーター	第4クォーター	年間合計
授 業 料	387,500円	387,500円	387,500円	387,500円	1,550,000円

4. デザイン学部授業料

費 目	第1クォーター	第2クォーター	第3クォーター	第4クォーター	年間合計
授 業 料	394,750円	394,750円	394,750円	394,750円	1,579,000円

5. マンガ学部授業料

費 目	第1クォーター	第2クォーター	第3クォーター	第4クォーター	年間合計
授 業 料	394,750円	394,750円	394,750円	394,750円	1,579,000円

6. メディア表現学部授業料

費 目	第1クォーター	第2クォーター	第3クォーター	第4クォーター	年間合計
授 業 料	296,500円	296,500円	296,500円	296,500円	1,186,000円

7. 国際文化学部授業料

費 目	第1クォーター	第2クォーター	第3クォーター	第4クォーター	年間合計
授 業 料	271,500円	271,500円	271,500円	271,500円	1,086,000円

② 編入学・転入学・再入学の授業料等は入学年次に相当する正規の学生の年次の授業料等に準ずるものとし、入学検定料および入学金については正規の学生の1年生に準ずるものとする。

③ 聴講料

登 録 料	15,000円
聴 講 料 (1単位あたり)	15,000円

④ 科目等履修料

登 録 料	15,000円
聴 講 料 (1単位あたり)	15,000円

⑤ 研究生学費

研 究 生	前 期	後 期	年 間
芸術学部	291,500円	291,500円	583,000円
デザイン学部	296,500円	296,500円	593,000円
マンガ学部	296,500円	296,500円	593,000円
メディア表現学部	231,000円	231,000円	462,000円
国際文化学部	214,500円	214,500円	429,000円

京都精華大学研究生学費算出基準

- (1) 研究生出願手数料 = 学部入学検定料×1/3
- (2) 研究生授業料 = (学部入学金+学部授業料)×1/3
- (3) ただし、1,000円未満は四捨五入とする。

① 正規の学生の授業料等

1. 入学検定料

費 目	金 額
入 学 検 定 料	35,000円
大学入試センター試験を利用する入学試験の検定料	10,000円

注) 入学検定料は、学内規定により減免することができる。

2. 入学金

費 目	金 額
入 学 金	200,000円

3. 芸術学部授業料

費 目	前期1期	前期2期	後期1期	後期2期	年間合計
授 業 料	387,500円	387,500円	387,500円	387,500円	1,550,000円

4. デザイン学部授業料

費 目	前期1期	前期2期	後期1期	後期2期	年間合計
授 業 料	394,750円	394,750円	394,750円	394,750円	1,579,000円

5. マンガ学部授業料

費 目	前期1期	前期2期	後期1期	後期2期	年間合計
授 業 料	394,750円	394,750円	394,750円	394,750円	1,579,000円

6. ポピュラーカルチャー学部授業料

費 目	前期1期	前期2期	後期1期	後期2期	年間合計
授 業 料	394,750円	394,750円	394,750円	394,750円	1,579,000円

7. 人文学部授業料

費 目	前期1期	前期2期	後期1期	後期2期	年間合計
授 業 料	271,500円	271,500円	271,500円	271,500円	1,086,000円

② 編入学・転入学・再入学の授業料等は入学年次に相当する正規の学生の年次の授業料等に準ずるものとし、入学検定料および入学金については正規の学生の1年生に準ずるものとする。

③ 聴講料

登 録 料	15,000円
聴 講 料 (1単位あたり)	15,000円

④ 科目等履修料

登 録 料	15,000円
聴 講 料 (1単位あたり)	15,000円

⑤ 研究生学費

研 究 生	前 期	後 期	年 間
芸術学部	291,500円	291,500円	583,000円
デザイン学部	296,500円	296,500円	593,000円
マンガ学部	296,500円	296,500円	593,000円
ポピュラーカルチャー学部	296,500円	296,500円	593,000円
人文学部	214,500円	214,500円	429,000円

京都精華大学研究生学費算出基準

- (1) 研究生出願手数料 = 学部入学検定料×1/3
- (2) 研究生授業料 = (学部入学金+学部授業料)×1/3
- (3) ただし、1,000円未満は四捨五入とする。

第2編 教 学 > 第1章 学長・教授会等

京都精華大学教授会規程

1986年11月13日	制定
1989年04月01日	改定
1994年04月01日	改定
1999年03月18日	改定
2003年12月06日	改定
2006年09月28日	改定
2015年03月26日	改定
2015年12月07日	改定
2019年03月18日	改定

第1章 総則

(目的)

第1条 この規程は、「京都精華大学学則」第36条第3項の規定により、本学の教授会運営について定めたものである。

(種類)

第2条 教授会は、これを分けて全学教授会と学部教授会とする。

第2章 全学教授会

(構成)

第3条 全学教授会は、学長、専任の教授・准教授および講師を構成員として、これを組織する。

2 全学教授会は、前項に定める者の他、必要に応じ他の教職員などの出席を求めることができる。

(議長)

第4条 全学教授会は、学長がこれを招集し、その議長となり議事を主宰する。

2 学長に事故あるときは、教学担当副学長がこれにあたる。

(開催)

第5条 全学教授会は、原則として毎月1回これを開く。

2 学長が必要と認めたときは、随時、これを開くことができる。

3 全学教授会構成員の4分の1以上から要求のあるときは、これを開かなければならない。

(成立)

第6条 全学教授会は、構成員の3分の2以上の出席をもって成立するものとする。ただし、4週間以上の出張者、欠勤者、休職者および学外研究員は、定足数の計算から除く。

(審議事項)

第7条 全学教授会は、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) 全学に関する重要事項
- (2) 各学部間の連絡調整に関する事項
- (3) 全学共通の教育課程の編成に関する事項

(4) 全学共通の授業科目の担当に関する事項

(5) 教員の人事に関する事項

(6) その他学長が必要と認める事項

第8条 全学教授会において、前条に定める事項につき、その提案および立案がある場合の手續に関しては、別に定めるところによる。

(議決)

第9条 削除

(委員会)

第10条 全学教授会は、必要に応じ各種の委員会を設置し、これに一定事項の調査、協議、立案、実施などを委嘱することができる。

第3章 学部教授会

(構成)

第11条 学部教授会は、各学部に属する専任の教授・准教授および講師を構成員として、これを組織する。

2 学部教授会は、前項に定める者の他、必要に応じ他の教職員などの出席を求めることができる。

(議長)

第12条 学部教授会は、学部長がこれを招集し、その議長となり議事を主宰する。

2 学部長は、あらかじめ、代理の議長を指名することができる。

(開催)

第13条 学部教授会は、必要に応じてこれを開く。

2 学部長が必要と認めたときは、随時、これを開くことができる。

3 学部教授会構成員の4分の1以上から要求あるときは、これを開かなければならない。

(成立)

第14条 学部教授会は、その構成員の3分の2以上の出席をもって成立するものとする。ただし、4週間以上の出張者、欠勤者、休職者および学外研究員は、定足数の計算から除く。

(審議事項)

第15条 学部教授会は、学長が次に掲げる事項について決定を行うにあたり意見を述べるものとする。

(1) 学生の入学（編入学・転入学を含む）、卒業および課程の修了

(2) 学位の授与

(3) 前2号に掲げるもののほか、教育研究に関する重要な事項で、学部教授会の意見を聴くことが必要なものとして学長が定めるもの

第15条の2 学部教授会は、前項に規定するもののほか、学長及び学部長（以下、この項において「学長等」という。）がつかさどる教育研究に関する事項について審議し、及び学長等の求めに応じ、意見を述べることができる。

第16条 各学部の教授会において前条に定める事項につき、その提案および立案がある場合の手續に関しては、別に定めるところによる。

(議決)

第17条 (削除)

(改廃)

第18条 この規程の改廃は、常務理事会にて行う。

附 則

- 1 1986年11月13日制定・施行
- 2 1989年4月1日改定・施行
- 3 1994年4月1日改定・施行
- 4 1999年3月18日改定・施行
- 5 2003年12月6日改定・施行
- 6 2006年9月28日に改定し、2007年4月1日より施行する。
- 7 2015年3月26日に改定し、2015年4月1日より施行する。
- 8 2015年12月7日改定・施行
- 9 2019年3月18日改定・施行

目次

① 設置の趣旨	2
② 学部、学科等の特色	5
③ 学部、学科等の名称及び学位の名称	5
④ 教育課程の編成の考え方及び特色	6
⑤ 教員組織の編成の考え方及び特色	12
⑥ 教育方法，履修指導方法及び卒業要件	14
⑦ 施設，設備等の整備計画	19
⑧ 入学者選抜の概要	22
⑨ 取得可能な資格	24
⑩ 企業実習や海外語学研修等の学外実習を実施する場合の具体的計画	24
⑪ 管理運営	26
⑫ 自己点検・評価	27
⑬ 情報の公表（リンク切れについて3月12日以降にチェックを要する）	29
⑭ 教育内容等の改善を図るための組織的な取組	30
⑮ 社会的・職業的自立に関する指導等及び体制	32

① 設置の趣旨

ア 設置の趣旨及び必要性

本学が 1989 年度に開設した人文学部は学則の「人材の養成に関する目的」において、「国際的な視野と体験を重視し、地球環境問題の深刻化、情報技術化、経済のグローバル化の時代に求められる人間の社会と文化についての学際的な教育研究を行うこと、および自立した思考力によって現実の社会と文化に貢献する資質を備えた、よりよき社会人としての人間形成を行うことを目的とする。」と定め、人類社会の諸問題に向き合うための広い視野をもち、実際に世界各地の現場における実践的な学びを通じ、自らの問題認識を社会解決への思考へと結び付けられる「よりよき社会人」を育て、社会に送り出してきた。人文学部は 2009 年度に「総合人文学科」を開設し、急速に変化する社会へ対応するための改革を進めてきたが、この間の急激な社会の変化に十分に対応することが困難となりつつあった。一方で、文部科学省「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン」(答申)(以下、「2040 年グランドデザイン」とする)では、OECD のキー・コンピテンシーなどをはじめとする議論の背景は「①テクノロジーが急速かつ継続的に変化しており、これを使いこなすためには、一回修得すれば終わりというものではなく、変化への適応力が必要になること、②社会は個人間の相互依存を深めつつ、より複雑化・個別化していることから、自らとは異なる文化等を持った他者との接触が増大すること、③グローバル리즘は新しい形の相互依存を創出しており、人間の行動は、個人の属する地域や国をはるかに越え、例えば経済競争や環境問題に左右されることがあるとされている」とされている。このようなテクノロジーの急速な変化が伴うグローバル化の中では現在の「人文学部」における海外もフィールドとして置きつつも、主に日本国内の諸課題に取り組む教育内容のみでは不十分といわざるを得ない状況となった。加えて、国連の「世界人口推計 2019 年度版」によると、生産年齢人口に基づく潜在扶養指数が日本は 1.8 と世界で最も低い状況である。一方で、インドやインドネシア、パキスタンなどのアジア、ナイジェリアやコンゴ共和国などのアフリカは 2050 年までに最も大幅な人口増加が起きると同じく国連が予測している中、将来の日本の発展を見据えた場合、日本とアフリカ、アジアを研究対象とした教育研究活動を通じたこれからの人材を養成することは我が国にとって急務である。

また、2040 年グランドデザインでは、「現在、我が国は、課題先進国として、少子高齢化や環境問題、経済状況の停滞等、世界の国々が今後直面する課題にいち早く対応していく必要に迫られている。成熟社会を迎える中で、直面する課題を解決することができるのは『知識』とそれを集約し、組み合わせて生み出す新たな価値となる『新しい知』である。その基盤となるのが教育であり、特に高等教育は、我が国の社会や経済を支えることのみならず、世界が直面する課題の解決に貢献するという使命を持っている」とある。本学においては、社会の諸課題に向き合ってきた人文学部について、世界が直面する課題の解決

に貢献することを目的とすべく、特に日本とアジア、アフリカを研究対象とした「国際文化学部」に改組し、ローカルな視点を軸としつつ、グローバルに世界を見とおし、社会の変革を起こしうる人間を育てる「人文学科」と、グローバルな視点を軸としつつグローバル、ローカル双方の社会変革を起こしうる人間を育てる「グローバルスタディーズ学科」の2学科に拡大することで、教育研究機能を強化・発展させることとする。

本学では、1979年に「京都の伝統工芸講座」を開設した。さらにはこの講座でお招きする京都を中心とした伝統工芸の工房などへ学生を派遣する「学外実習」にも連動させるもので、40年にわたり京都の伝統文化を教育研究に活かしてきた実績をもつ。今回開設する2つの学科においては特にアフリカ、アジアと日本、京都について学ぶことを軸とする。アフリカやアジアにはその土地固有の文化を持ちながらも、近代においてヨーロッパやアメリカ、日本などのいわゆる先進諸国に侵略され、支配された中でそれらの国々の文化を融合した多様な文化を形成する国が多くある。「国」を形成する人々のアイデンティティに根差す文化の相互理解は、グローバル化の発展の中で欠かすことのできないテーマである。アフリカ諸国、アジア諸国、日本との文化的な違いや関係性を理解し、世界に貢献できる人材を養成することがこの国際文化学部開設の狙いである。

イ 養成する人材像、教育上の目的

国際文化学部においては、アフリカ・アジアの文化、京都を中心とした日本の歴史や文化、そして世界の相関を理解し、現在の社会が抱える多様な課題の解決に貢献し、よりよい共生社会の実現と世界の発展に寄与できる人材の養成を目的としている。そのため以下能力を習得させることを目標とする。

アフリカ・アジアの文化、日本の歴史や文化を実践的に学ぶことで、グローバル／ローカル双方の視点を持ち、複合的なアプローチから社会課題の解決のための方法を自ら生み出すことができる発想力と、それを実践する行動力、他者とともに取り組むことのできる協働力を習得する。

このような目標を背景とした国際文化学部のディプロマ・ポリシーは以下のとおりである。

ディプロマ・ポリシー

国際文化学部の教育研究目的は、ヒト、モノ、情報が国境を超えて複雑に絡み合う現代社会の多様な課題の解決に貢献し、より良い共生社会の実現に寄与できる人間の育成です。アフリカ・アジアや日本・京都を中心にグローバル、ローカル双方のアプローチから社会課題を理解し、地球規模の視野を持ち、体験的な学修を通して個別のテーマ研究を深めます。卒業時に身につけているべき要素を以下の5つとし、卒業要件を満たせばこれらを身

につけたものと認め、学位を授与します。

- 1) 自身をとりまく社会と、シティズンシップ及びヒューマニズムに関する基本的な知識と理解がある。(知識と理解 knowledge & understanding)
- 2) グローバル化による社会的な事象を、複数の視点やアプローチから考察することができる。(視点と考察 diverse perspective & observation)
- 3) グローバルスタディーズ、人文学のいずれかの領域の専門知識を持ち、特定のテーマ研究を深め他者に伝えることができる。(研究と表現 research & expression)
- 4) 多様な他者との違いを認め、協働して課題解決に取り組むことができる。(他者理解と協働 mutual understanding & collaboration)
- 5) より良い共生社会の実現に関心を持ち、社会の課題解決や新しい価値の創出に意欲的に自ら取り組むことができる。(社会への関心と行動 interests & action)

なお、学部内に設置する各学科の養成する人材像と教育研究上の目的は以下のとおりである。

【人文学科】

日本の「文学」「歴史」「社会」「文化」を研究対象とし、日本を基点とした世界の文化と社会を多角的に捉え、課題の解決に貢献し、より良い共生社会の実現と世界の発展に寄与できる人材養成を目的とする。そのため、以下の能力を習得させることを目標とする。

日本の「文学」「歴史」「社会」「文化」の4つのテーマによる学びと体験的な学修を通して、日本と京都に関する知識を深める。さらに、学部共通の学びからアフリカ・アジアの文化、世界の相関の理解に深めることで、グローバル・ローカル双方の視点を持ち、社会課題の解決のための方法を自ら生み出すことができる発想力と、それを実践する行動力、他者とともに取り組むことのできる協働力を習得する。

【グローバルスタディーズ学科】

著しい発展と同時に多様な課題を抱え、世界が注目するアフリカ・アジア地域に学びの場を重点化し、世界の新しい関係性や構造をグローバルな視点で捉え、課題の解決に貢献し、より良い共生社会の実現と世界の発展に寄与できる人材を養成することを目的とする。そのため、以下の能力を習得させることを目標とする。

「アフリカ・アジア文化」「グローバル関係」「グローバル共生社会」の3つのテーマによる学びと体験的な学修を通して、グローバル社会について理解を深める。さらに、学部共通の学びから日本の歴史や文化についても理解することで、グローバル／ローカル双方の視点を持ち、社会課題の解決のための方法を自ら生み出すことができる発想力と、それを実践する行動力、他者とともに取り組むことのできる協働力を習得する。

ウ 中心的な学問分野

国際文化学部人文学科については、社会学分野、史学分野、文学分野を扱う学問分野とする。

国際文化学部グローバルスタディーズ学科については、社会学分野、文化人類学分野、地域研究分野を扱う学問分野とする。

② 学部、学科等の特色

国際文化学部は、以下の3つの力の習得を教育研究上の目的とする。

- ① 複合的なアプローチから社会課題の解決のための方法を自ら生み出すことができる「発想力」
- ② 発想した社会課題の解決のための方法を実践する「行動力」
- ③ 他者とともに取り組むことのできる「協働力」

この3つの力を獲得するため国際文化学部に置く人文学科においては、日本の「文学」「歴史」「社会」「文化」を研究対象とし、日本を基点とした世界の文化と社会を多角的に捉えることを軸とする。また、同学部グローバルスタディーズ学科においては、著しい発展と同時に多様な課題を抱え、世界が注目するアフリカ・アジア地域に学びの場を重点化し、世界の新しい関係性や構造をグローバル視点で捉えることを軸とする。このような多様な視点を元にした学びの中で育む「発想力」をもとに、人文学科では四半期、グローバルスタディーズ学科では半年間の国内外でのフィールドワークを必修で置き、実践的な学びを通じ、「行動力」を身につけ、社会実践力育成プログラムである産学公連携 PBL プログラムを通じ、学部を超えた学びの中で他者とともに取り組むことのできる「協働力」を身につけることができる。これらの3つの力を獲得することにより、現在の社会が抱える多様な課題の解決に貢献し、より良い共生社会の実現と世界の発展に寄与できる人材を養成する。

このような国際文化学部の特色は、中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」の提言する「高等教育の多様な機能と個性・特色の明確化」でいうところの「④総合的教養教育」および「⑦社会貢献機能（地域貢献、産学官連携、国際交流等）」を重点的に担っていくこととなる。

③ 学部、学科等の名称及び学位の名称

アフリカ・アジアの文化、京都を中心とした日本の歴史や文化、そして世界の相関を理解し、現在の社会が抱える多様な課題の解決に取り組むこの学部は、日本語の学部名を「国際文化学部」（英語名：Faculty of Global Culture）とする。日本の「文学」「歴史」「社会」「文化」を研究対象とし、日本を基点とした世界の文化と社会を多角的に捉えることを軸とした学科は、日本語名を「人文学科」（英語名を Department of

Humanities) とし、授与する学位は「学士（文化）」（英語名：Bachelor of Culture & Arts) とする。

一方、アフリカ・アジア地域に学びの場を重点化し、世界の新しい関係性や構造をグローバルな視点で捉えることを軸とした学科は、日本語名を「グローバルスタディーズ学科」（英語名を Department of Global Studies) とし、授与する学位は人文学科と同様、「学士（文化）」（英語名：Bachelor of Culture & Arts) とする。

④ 教育課程の編成の考え方及び特色

ア 教育課程編成の基本方針

本学は中長期計画において、本学が 1968 年に開学後、柱としてきた「表現の大学」「グローバルな大学」「リベラルアーツの大学」の 3 つの軸をより先鋭化させることをめざすこととしている。

これに基づき、国際文化学部教育課程は、【共通教育科目】【専門演習科目】【専門講義・演習・実習科目】の 3 つに分けられる。【共通教育科目】の「導入プログラム」「表現科目」「グローバル科目」「リベラルアーツ科目」「社会実践力育成プログラム」「キャリア科目」「マイナー科目」、【専門演習科目】の「基礎演習科目」「応用演習科目」「卒業研究演習科目」、【専門講義・演習・実習科目】の「国際文化基礎科目」を共通で学ぶ。人文学科においては、【専門講義・演習・実習科目】は「専攻基盤科目」「学科講義・演習科目」「文学講義科目」「歴史講義科目」「社会講義科目」「日本文化講義科目」「地域研究科目」「世界文化科目」で構成されている。グローバルスタディーズ学科においては、「フィールドワーク科目」「地域研究科目」「グローバル関係科目」「グローバル共生社会科目」「グローバル文化科目」「学科基礎講義科目」「日本文化科目」をもって構成されている（表 1）。

表 1. 【国際文化学部教育課程】

国際文化学部共通	
共通教育科目	導入プログラム
	表現科目
	グローバル科目
	リベラルアーツ科目
	社会実践力育成プログラム
	キャリア科目
	マイナー科目
専門演習科目	基礎演習科目
	応用演習科目
	卒業研究演習科目

専門講義・演習科目	国際文化基礎科目	
	人文学科	グローバルスタディーズ学科
専門講義・演習・ 実習科目	専攻基盤科目	フィールドワーク科目
	学科講義・演習科目	地域研究科目
	文学講義科目	グローバル関係科目
	歴史講義科目	グローバル共生社会科目
	社会講義科目	グローバル文化科目
	日本文化講義科目	学科基礎講義科目
	地域研究科目	日本文化科目
	世界文化科目	

国際文化学部では、【共通教育科目】の「導入プログラム」「表現科目」「グローバル科目」「リベラルアーツ科目」「社会実践力育成プログラム」「キャリア科目」「マイナー科目」で定められた必修科目 24 単位、「社会実践力育成プログラム」からの 4 単位と、「マイナー科目」の中から 10 単位を選択必修とし、これらを含め、計 50 単位を修得しなくてはならない。また、【専門演習科目】の「基礎演習科目」「応用演習科目」「卒業研究演習科目」で定められた必修科目を、人文学科では 30 単位、グローバルスタディーズ学科では 34 単位習得することとする。

人文学科では、【専門講義・演習・実習科目】「専攻基盤科目」「学科講義・演習科目」「文学講義科目」「歴史講義科目」「社会講義科目」「日本文化講義科目」「地域研究科目」「世界文化科目」の中で定められた必修科目 54 単位と選択科目を 20 単位修得することとする。

グローバルスタディーズ学科では、「フィールドワーク科目」「地域研究科目」「グローバル関係科目」「グローバル共生社会科目」「グローバル文化科目」「学科基礎講義科目」「日本文化科目」の中で定められた必修科目 54 単位と選択科目を 20 単位修得することとする。

このようなカリキュラムとして設計された国際文化学部のカリキュラム・ポリシーは以下のとおりである。

	<p>国際文化学部は、学位授与の方針を達成するために、全学共通教育科目、学部専門教育科目を体系的に編成し、講義、演習、実習等を適切に組み合わせた授業を開講します。</p> <p>また、科目のナンバリングおよびカリキュラム・マップにより、カリキュラムの体系を明示します。</p> <p>国際文化学部教育科目の教育内容、教育方法、学修成果の評価について以下のように定めます。</p>
--	---

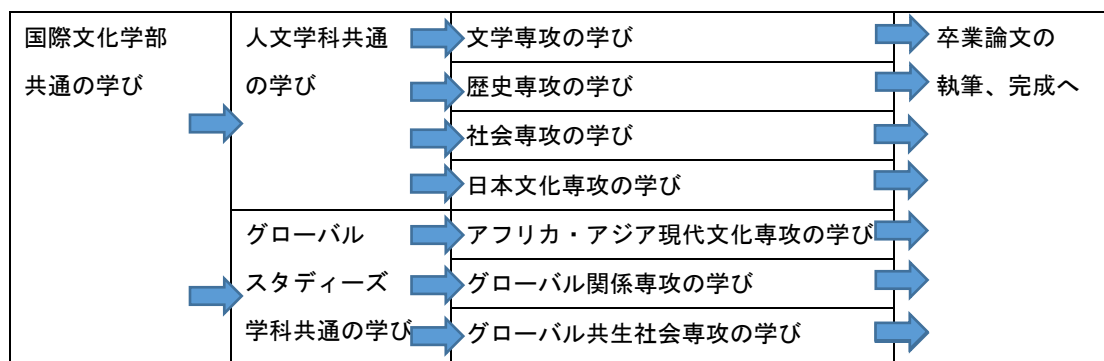
1 教育内容	<p>学部専門教育科目では、</p> <p>1年次には、基礎演習を通して基礎的な人文系の研究方法を学びつつ、各学科の基礎講義と学科共通の選択講義を通じて初歩的な理論を理解し、特にグローバルスタディーズ学科では海外短期フィールドワークを体験することによって、グローバル／ローカル双方の視点を獲得させます。</p> <p>2年次以降は専攻に分かれ、各専門分野の重要な研究に触れるとともに、最新の研究成果を知ることによって、専門的知識を系統立てて習得させます。また、少人数の演習形式の授業を通じて、各専門分野の高度な研究手法・考察能力を体得させます。</p> <p>3年次前半は国内外のフィールドでの主体的な調査・研究に遂行する必修のプログラムを経験することによって社会の課題を解決するための実践的な力を獲得させます。後半では各専門分野に関する講義を通して学識を深化させるとともに、特に人文学科では各専門領域の基本文献を精読することによって、既存の研究成果に対する批判的な分析能力と総合的な判断能力を習得させます。</p> <p>最終年次には、グローバル／ローカル双方の視点のもとで、社会課題の解決法を自ら着想できる発想力、それを実践する行動力、その実践の中で他者と積極的に関わろうとする協働力が習得できているかを確認する機会として卒業論文とその内容に関する研究発表を必修とします。これにより、実践的かつ主体的に研究・調査を計画・遂行するとともに、その成果を社会に向けて学術的に表現する技法と作法を養います。</p>
2 教育方法	<p>(1) 学生の主体性を伸ばすため、能動的学修の視点を取り入れた教育方法を実施します。</p> <p>(2) 授業内・外の学修時間を考慮した授業内容を設計します。</p> <p>(3) 学修ポートフォリオの作成指導により、学生の自律的な学修を支援します。</p>
3 学修成果の評価	<p>○学部では、学位授与の方針に掲げる能力・資質およびこれらの総合的な活用力の修得状況を、「進級時」「卒業時」の2つのレベルで把握し、評価します。</p> <p>各レベルの評価の実施方法は、以下のとおりとします。</p> <p>(1) 進級時</p> <p>進級時の学修成果は、学部所定の教育課程における進級要件達成状況により、総合的評価を行います。</p> <p>(2) 卒業時</p>

	4年間の学修成果は、学部所定の教育課程における卒業要件達成状況により、総合的評価を行います。卒業論文・制作（必修）は、評価ルーブリックを活用し、複数教員によって多面的評価を行います。
--	---

イ 教育課程及び科目区分の編成

国際文化学部は、1年次は全学、学部、学科共通での学びを基礎とし、2年次に専攻へ配属し、より専門的な学びに取り組むこととなる。（図1）

図1. 国際文化学部における学びの流れ



【共通教育科目】

「導入プログラム」

入学段階での大学の理念や本学に有する5つの学部の学びについて理解することで、本学の構成員としての自覚を獲得する。

「表現科目」

大学での学びに必要な表現技術であるコミュニケーションスキル、アカデミックスキル、観察力を身につけるためのデッサンなど芸術学部、デザイン学部、マンガ学部を置く本学ならではの形で技術の習得に取り組む科目を置き、初年次と卒業論文・卒業制作に取り組む前の3年次に履修することとする。また本学の持つ5つの学部それぞれの表現について専門的な知識を獲得するための科目を置く。

「グローバル科目」

前述の中長期計画における「グローバルな大学」における学びとして、英語、日本語を含めた12言語の言語科目を置くとともに現代の世界における諸問題の理解のための科目などを置く。日本人、日本に関心をもつ外国人双方にとって今後必要なスキルとして日本語教育に触れる科目も配置する。

「リベラルアーツ科目」

哲学、法学、政治学などの大学における学びの基盤となる教養科目に加え、シティズンシップやダイバーシティ、クリエイティブシンキングなどの現代社会において必要となる知識、あるいはデータサイエンス、プログラミング、AIなどの基礎的な

素養を身に着けるための科目も配置している。「2040年グランドデザイン」における（2040年に必要とされる人材）で示された人材に必要な基盤的リテラシーと合致している。

「社会実践力育成プログラム」

短期留学、インターンシップ、協定を交わした複数の大学との合同開催によるワークショップなど、主な学習環境を学外とし、アクティブラーニングの中で学内外のさまざまな人々とともに学ぶ中で協働性、社会性を身につけることをめざす。中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」（以下、「質的転換答申」）において、「学士課程教育はキャンパスの中だけで完結するものではなく、サービス・ラーニング、インターンシップ、社会体験活動や留学経験等は、学生の学修への動機付けを強め、成熟社会における社会的自立や職業生活に必要な能力の育成に大きな効果を持つ」とあるがまさに本プログラムはそれを体系化したものである。

「キャリア科目」

就職活動に本格的に取り組むこととなる4年生になるまでに身に付けておくべき思考、態度などの修得をめざすものである。また、「2040年グランドデザイン」において「高度外国人材としての留学生の我が国への定着を促進するためには、今後は英語での授業科目を充実するのみならず、労働政策や地域での取組も含め、留学生の日本語能力の修得、インターンシップへの参加や就職支援をどのように行っていくか、検討していくことが重要である」とあるが、これを受けて留学生に向けたキャリア教育の一環として、「日本の企業文化研究」を授業科目として置き、外国人留学生が日本の企業に就職する際に障害となる日本の企業に特有の企業文化の理解ができるように努める。

「マイナー科目」

各学部における専門科目に加え、現代社会において必要となるさまざまな専門分野を横断的に学修するために置かれた科目となる。本学に置かれた5つの学部の分野と、京都と日本の伝統文化、ビジネス、ソーシャルデザイン、アフリカ・アジア、日本語教育を学修する。「2040年グランドデザイン」において、「学術研究においても産業社会においても、分野を越えた専門知の組合せが必要とされる時代であり、一般教育・共通教育においても従来の専攻を越えた幅広くかつ深いレベルの教育が求められる。特に、専門教育については、専門知の組合せの種類が大幅に増えることを踏まえ、主専攻・副専攻制の活用など、学生の学修の幅を広げるようなカリキュラムの工夫が求められる。」とある。「マイナー科目」は各領域を10単位修得することで認定をすることとし、自らの学ぶ主専攻と組み合わせることにより、専門知を組み合わせた深いレベルでの学びができる仕組みとする。

【専門演習科目】

「基礎演習科目」

人文学科では4つの専攻である文学専攻、歴史専攻、社会専攻、日本文化専攻、グローバルスタディーズ学科では3つの専攻であるアフリカ・アジア現代文化、グローバル関係、グローバル共生社会それぞれの学びの構造や考え方を学習する。基礎演習の段階で自らの所属する専攻と主に指導を受けることとなる指導教員を選び、所属先を決定する。

「応用演習科目」

2年次から3年次における専門的な学びの幹となる授業科目にあたる。基礎演習科目において専門性の基礎を身に着けた学生は応用演習科目でその専門性を高め、4年次に取り組むこととなる卒業論文における研究テーマなどについて調査、研究を重ねることとなる。

「卒業研究演習科目」

4年次に置かれ、学生は「応用演習科目」までに設定した研究テーマをより深め、卒業論文の制作に取り組む。4年次最終学期は作成した卒業論文に関する研究発表を行う。複数教員による査読、公開型の口頭試問、ポスターセッションなどを通じ、自身の研究成果に対する学内外からの評価を受けることで卒業論文の不足した点を学習し改善することにより、卒業論文の完成を目指すこととなる。「基礎演習科目」「応用演習科目」「卒業研究演習科目」はいずれも原則として20人上限とし、少人数のゼミナール形式で教員、学生、学生間の対話を基礎とした学習体制を組む。

【専門講義・演習・実習科目】

「国際文化基礎科目」

両学科共通で、国際文化学部的基本的な知識や考え方を学ぶ科目群として配置する。

人文学科

「専攻基盤科目」

人文学科の各専攻において基盤となる知識や考え方を学ぶ科目群として置く。

「学科講義・演習科目」

人文学科共通科目として置く。専門書の講読、哲学や倫理学等の共通科目を配置するとともに、3年次必修科目として長期のフィールドワークを置く。長期フィールドワークでは、フィールドワークは1クォーター期間、自身の研究テーマに基づく調査研究を国内外の調査地で行う。

「文学講義科目」「歴史講義科目」「社会講義科目」「日本文化講義科目」

人文学科の各専攻における学びをより深めるため置く。各専攻で必修とする科目を6単位定める。

「地域研究科目」「世界文化科目」

人文学科の各専攻の枠を超え、学科として理解しておくべきテーマをそろえ配置する。

グローバルスタディーズ学科

「フィールドワーク科目」

グローバルスタディーズ学科は、フィールドワークを特に重視した学科である。そこで3年次第1クォーター、第2クォーターに主に海外でのフィールドワークに取り組むための長期フィールドワークとその準備のための科目群として配置する。

「地域研究科目」、「グローバル関係科目」「グローバル共生社会科目」

グローバルスタディーズ学科の各専攻では各専攻での学びを深めるため、指定された3科目6単位を必修で学ぶこととする。「グローバル関係科目」は多国籍企業、国際政治、人口政策などに関連する科目によって構成されている。「グローバル共生社会科目」はポストコロニアル、地球環境、NGO、市民社会などに関連する科目によって構成されている。

「グローバル文化科目」「学科基礎講義科目」「日本文化科目」

各専攻を超え、研究を深めるための科目として、観光・文学・美術・音楽などを学ぶ「グローバル文化科目」、哲学・倫理学・ジェンダーなどについて学ぶ「学科基礎講義科目」、日本史、京都の歴史や書誌学などについて学ぶ「日本文化科目」を配置する。

⑤ 教員組織の編成の考え方及び特色

教員組織の編成においては、各学科の「教育研究上の目的を達成するため、教育研究組織の規模並びに授与する学位の種類及び分野に応じ、必要な教員を置く」ことを原則にしている。(大学設置基準第7条第1項)

以下に学科ごとに教員組織の編成の考え方と特色を述べる。

人文学科

人文学科の教員組織は、基礎となる学科である総合人文学科から異動する教員15名によって構成される。さらに、「教育研究の実施に当たり、教員の適切な役割分担の下で、組織的な連携体制を確保し、教育研究に係る責任の所在が明確になるように教員組織を編成する」(大学設置基準第7条第2項)ため、国際文化学部全体の教務を管理する教務主任と学科長を置き、全学の教務運営を担う教務委員会の下、適切な役割分担が果たせるように編成している。

人文学科では、「文学」「歴史」「社会」「日本文化」の4分野を研究の中心としている。加えて、学びの基盤となる哲学、語学力の強化や国際文化学部において取得可能な資格である教職課程、司書課程等を担う専任教員も配置する。

なお、教育上主要な授業科目については、すべて教授または准教授が担当することが

できる。

上記のように、設置基準上必要な教員数及び科目を担当するにふさわしい教育歴や研究業績を有した教員を配置しており、学生に対して十分な教育水準を担保している。

2024年度時点での年齢構成は以下のとおりである。

60代：5名（33%） 50代：7名（47%） 40代：2名（13%） 30代：1名（7%）
平均年齢は、54歳となる。

また、本学の教員の定年は「学校法人京都精華大学就業規則」において65歳と定められている。加えて、新たに設置する学部の学部長に就任する者については、当該学部の完成年度前に定年年齢に達する場合は、当該学部の完成年度まで定年年齢を延長することができることとしている（「学校法人京都精華大学就業規則」第12条の4）。

教員の退職後には速やかに後任となる教員の補充を行い、教員組織は常にバランスが保たれることとなる。

（資料1：学校法人京都精華大学就業規則）

グローバルスタディーズ学科

グローバルスタディーズ学科の教員組織は、基礎となる学科である総合人文学科から異動する3名と、創造戦略機構から異動する3名、新規に採用する教員2名の計8名の専任教員によって構成される。

さらに、「教育研究の実施に当たり、教員の適切な役割分担の下で、組織的な連携体制を確保し、教育研究に係る責任の所在が明確になるように教員組織を編成する」（大学設置基準第7条第2項）ため、国際文化学部全体の教務を管理する教務主任と学科長を置き、全学の教務運営を担う教務委員会の下、適切な役割分担が果たせるように編成している。

グローバルスタディーズ学科では、「アフリカ・アジア文化」「グローバル関係」「グローバル共生社会」の3分野を研究の中心としている。

なお、教育上主要な授業科目については、すべて教授または准教授が担当することができる。

上記のように、設置基準上必要な教員数及び科目を担当するにふさわしい教育歴や研究業績を有した教員を配置しており、学生に対して十分な教育水準を担保している。

2024年度時点での年齢構成は以下のとおりである。

60代：2名（25%） 50代：3名（25%） 40代：3名（50%）
平均年齢は、53歳である。

また、本学の教員の定年は「学校法人京都精華大学就業規則」において65歳と定められている。

教員の退職後には速やかに後任となる教員の補充を行い、教員組織は常にバランスが保たれることとなる。

(資料1：学校法人京都精華大学就業規則)

⑥ 教育方法、履修指導方法及び卒業要件

ア 授業内容に応じた授業の方法、適した学生数の設定、配当年次

国際文化学部では、教育効果を考えて様々な形態の科目を設置している。そのため、科目の形態によって教育方法はさまざまである。以下に人文学科、グローバルスタディーズ学科の科目群ごとにその概要を記載する。

【共通教育科目】

人文学科、グローバルスタディーズ学科で共通して開講している科目群である「共通教育科目」群における授業方法の概要は以下の通り。配当年次は1年次、3年次に指定された必修科目と、主に1年次、2年次の低学年の段階からの履修、修得を目的とした必修、選択科目で構成されている。

「導入プログラム」

1年次必修として置かれた科目であり、多くの教員が配置され、個々のクラス単位で授業が開講される。1クラスあたりの学生数は20人～30人程度の規模を適正規模としている。

「表現科目」

アカデミックスキルやコミュニケーションスキル、デッサン能力などを育成する演習形式の科目と、講義形式で専門知識の教授が行われる授業をもって構成される。演習形式で開講される科目は20人程度を適正規模の授業として展開し、講義形式で開講される科目は100人程度を適正規模の授業として展開する。

「グローバル科目」

語学・コミュニケーションのための言語習得をめざす科目については、20人程度を適正規模として展開する。日本文化概論などの一部の講義形式で開講される科目は100人程度を適正規模の授業として展開する。

「リベラルアーツ科目」

講義形式での専門知識の教授が基本となるが、教授内容によってはインタラクティブに演習形式で行われるものや実践的にスキルを習得するために実習形式で行われるものもある。50～100人程度を受講生の適正規模とするが、演習形式や実習形式で行われるものについては、20～30人程度を受講生を適正規模とする。

「社会実践力育成プログラム」

短期海外留学や協定校との連携によるワークショップ、PBL科目で構成されるこの科目群においては、基本的に実習形式で科目は展開される。適正規模は20～30人程度

として展開される。

「キャリア科目」

講義形式での知識の教授が基本となるが、教授内容によってはインタラクティブに演習形式で行われるものや実践的にスキルを習得するために実習形式で行われるものもある。50～100人程度を受講生の適正規模とするが、演習形式や実習形式で行われるものについては、20～30人程度の受講生を適正規模とする。

「マイナー科目」

講義形式での知識の教授が基本となるが、教授内容によってはインタラクティブに演習形式で行われるものや実践的にスキルを習得するために実習形式で行われるものもある。50～100人程度を受講生の適正規模とするが、演習形式や実習形式で行われるものについては、20～30人程度の受講生を適正規模とする。

【専門演習科目】人文学科、グローバルスタディーズ学科で共通した形態で開講している科目群である「専門演習科目」群における授業方法の概要は以下の通り。

「基礎演習科目」

1年次から2年次に開講され、専門的に学ぶための思考力の基礎を身に着けるための基礎演習科目は、インタラクティブな演習形式で行われる科目をもって構成される。適正規模は20人程度としてこれらの科目は展開される。

「応用演習科目」

2年次から3年次に開講され、卒業論文執筆に向けた準備段階としての専門的な考え方を身に着けるための応用演習科目は、インタラクティブな演習形式で行われる科目をもって構成される。適正規模は20人程度としてこれらの科目は展開される。

「卒業演習科目」

4年次に開講され、卒業論文執筆に向けた専門的な考え方を身に着けるための卒業演習科目は、インタラクティブな演習形式で行われる科目をもって構成される。適正規模は20人程度としてこれらの科目は展開される。

【専門講義・演習・実習科目】基本的に人文学科とグローバルスタディーズ学科それぞれに開講されるこの科目群は学科の専門的な知識の修得を目的として開講する。

「国際文化基礎科目」

国際文化領域における専門的な知識の教授が講義形式で行われるものであり、人文学科、グローバルスタディーズ学科の両学科の学生を対象とする。200人～250人程度を適正規模として展開される。1年次、2年次に開講される。この科目群において、入学後の1年次第1クォーターにおいて、国際文化基礎科目として、「国際文化概論1」を配置している。これに加え、「国際文化概論2」、「国際文化史1」、「国際文化史2」をすべての学生が履修することとなり、これら1年次開講の科目において、国際文化

学部の教育の目的について指導をする。特に国際文化概論は学部の専任教授が持つことから、「アフリカ・アジア」と「京都」の関連性など国際文化学部の軸となる教育内容について、学術的根拠に基づき丁寧に説明する場として設計している。

「専攻基盤科目」

人文学科の学生は、2年次から学生は文学、歴史、社会、日本文化の4つの専攻に所属し、講義形式での専門的な知識の修得を目指す。専攻基盤科目では、専攻に所属後である2年次を対象に、各専攻における専門的な学びのための基礎的な知識の教授を目的として開講する。適正規模は50人程度で展開される科目である。

「学科講義・演習科目」

人文学科における専門的な学びの幹となる科目群であるこの科目群は哲学や心理学などの講義型の科目に加え、演習形式での講読、学外でのフィールドワークをもって構成される。講義形式での科目における適正規模は50人程度であり、演習形式での科目においては20人程度を適正規模として展開される。

「文学講義科目」「歴史講義科目」「社会講義科目」「日本文化講義科目」

人文学科の各専攻の専門的な知識の修得を目的として開講する講義形式の科目群である。配当年次は2年次以上として開講され、適正規模は30人～50人程度として展開される。

「地域研究科目」「世界文化科目」

日本を基点とした世界の文化と社会を多角的に捉えることを人材養成の目的とする人文学科における世界の文化や地域研究のための専門的な知識の教授のため講義形式で行われる科目である。2年次以上を対象として開講され、適正規模は100人程度として展開される。

「フィールドワーク科目」

グローバルスタディーズ学科では体験的な学修を学びの柱としており、その中でもこのフィールド科目は、3年次必修科目である「海外長期フィールドワーク1」～「同6」までを中心とした科目群である。配当年次は2年次から3年次である。科目は講義形式であるが、フィールドワークを軸とした科目においては、現地での講義などを中心とした体験的な学びの要素が含まれる。適正規模は20人～30人程度として展開される。

「地域研究科目」「グローバル関係科目」「グローバル共生社会科目」「グローバル文化科目」

グローバルスタディーズ学科では、4年次の卒業論文に向け、2年次から学生は学科の専門的な知識の修得をめざすこととなる。これらの科目群は2年次以上を対象とした知識を教授するための講義形式の科目であり、その適正規模は30人～40人程度として展開される。

「学科基礎講義科目」

グローバルスタディーズ学科の学生が心理学や倫理学、社会調査法などの学科の基礎的な知識を身に着けるために講義形式で開講される科目である。1年次から2年次を中心としており、その適正規模は40人～60人程度として展開される。

「日本文化科目」

グローバルスタディーズ学科は、グローバル、ローカル双方の視点をもつことを教育研究上の目的の一つとする。この科目は2年次以上の学生を対象とした専門的な知識の修得を目的とした講義形式の科目群である。その適正規模は40人～60人程度として展開される。

イ 卒業要件

以下に各学科の卒業要件を記載する。

人文学科の卒業要件としては、大学設置基準に従い、以下の単位数の修得を義務付ける。

共通教育科目のうち必修科目24単位を修得(母国語を日本語とするものは英語1,2,3,4を選択必修、母国語を英語とするものは日本語1,2,3,4を選択必修)。

共通教育科目のうち、社会実践力育成プログラムの科目群から4単位を選択必修として修得。共通マイナー科目の中から10単位を選択必修として修得。全共通教育科目の中から12単位以上を修得。

学科・各専攻で定めた必修科目54単位を修得。

専門講義・演習・実習科目のうち、選択科目20単位以上を修得(各専攻で定めた3科目6単位を選択必修)。

総計124単位以上

グローバルスタディーズ学科の卒業要件としては、大学設置基準に従い、以下の単位数の修得を義務付ける。

共通教育科目のうち必修科目24単位を修得(母国語を日本語とするものは英語1,2,3,4を選択必修、母国語を英語とするものは日本語1,2,3,4を選択必修)。共通教育科目のうち、社会実践力育成プログラムの科目群から4単位を選択必修として修得。共通マイナー科目の中から10単位を選択必修として修得。全共通教育科目の中から12単位以上を修得。

学科・各専攻で定めた必修科目54単位を修得。専門講義・演習・実習科目のうち、選択科目20単位以上を修得(各専攻ごとに定めた3科目6単位を選択必修)。

総計124単位以上

ウ 履修モデル

履修モデルとして下記の4パターンを添付する。詳細は添付資料を参照。

人文学科

- ・日本で働く外国人労働者に関する課題など、地域の課題解決に取り組むコンサルタントを目指す場合。
- ・京都の伝統文化とアフリカ、アジアの伝統文化を学び、相互の交流や発展に貢献を目指す場合。

グローバルスタディーズ学科

- ・アフリカの食文化の関心から現地の研究調査を通じ、セネガルの現地企業で活躍することを目指す場合。
- ・地球温暖化等の諸問題に関心があり、学部卒業後大学院進学をめざしており、将来的には国際的な研究機関でアジアでの国際貢献をめざすことを目指す場合。

(資料2：履修モデル)

エ 卒業論文、卒業制作の作成に関連する研究活動などを単位として認定

大学設置基準第21条の3に基づき、国際文化学部では、卒業論文の学修の成果を評価して単位を授与する。

卒業論文は1年次から4年次の必修科目、選択科目を適正に修得したものが取り組むものであり、3年次第3クォーターから4年次の第3クォーターにかけての学びの中心として位置づけられるものである。3年次の段階で学生は、計画立案から、実際の執筆に至る過程において授業内外での教員からの指導を受けながら取り組む。単位数としては2単位であるが、学修に要する時間は90時間を優に超えるものである。論文は教員の口頭試問や指導教員以外の教員による査読を経ることからも卒業論文の単位認定は妥当であるといえる。

オ 履修科目の登録上限の設定（CAP制）

本学では2021年度から4学期制を予定しており、1学期10単位、年間40単位とする履修科目登録の上限を定める。上限を設定しない場合、演習や実習で課される課題が過多となり学修量の限度を超え、学習効果が得にくくなることが懸念されるため、従来は年間48単位を上限としていたところを見直し、年間40単位の上限を設定することとする。

カ 他大学における授業科目の履修等

京都精華大学は大学コンソーシアム京都に参画しており、大学コンソーシアム京都を通じて、他大学との単位互換を行っている。学生の興味関心に応じて、他大学の優れた授業を受講し、他大学の教員や学生と交流することができる。このように異なる価値

観に触れることを通じて、さらなる学習効果を高めることが可能となっている。

⑦ 施設、設備等の整備計画

本学では、従来から教育研究等に関する環境の整備を継続的に進めてきた結果、現在は大学設置基準を満たす校地・校舎面積を有している。加えて、実習系科目に対応するために工房等の設備の充実も図ってきた。これらが有効利用されるように、学生には原則 22 時までの施設使用を可能とするなどルール化、教育研究等環境の整備に努めてきた。

こうした従来からの環境整備の方針を明文化するため、「京都精華大学の教育研究等環境の整備に関する方針」を定め、その後教職員への周知を行い、社会に公表している。

ア 校地、運動場の整備計画

休息場

カフェスペース、学生ラウンジ、屋外ベンチ等の休息・交流に必要な施設を数多く設置している。また、校舎内には多数の談話スペースがあり、学生の利用が多く見られる。さらに、大学が山間に立地している利点を活かし、自然を身近に感じられる散歩コースを用意しており、勉学や制作の合間の気分転換に利用されている。

運動場

運動施設は、10,800 m²で校舎と同一の敷地にある。授業で使用するだけでなく、学生からの利用申請も受け付けており、サークルや有志による課外活動や他大学との交流にさかんに活用されている。日没後も利用できるよう照明器具等の各種設備の適切に設置されており、自由に利用が可能である。なお、利用料は無料であり、学生の経済的負担はない。

イ 校舎等施設の整備計画

学長室、会議室、事務室

本学は学長室、会議室、事務室を専用スペースとして設けている。学長室、会議室、事務室が本館に集中しているため、会議の運営や情報共有などがスムーズに行われている。

情報館（図書館）、医務室、学生自習室、学生控室

情報館には約 23 万点の蔵書に加え、様々なメディアの提供、貸し出しを行っている。詳細は次項目にて述べる。

医務室は本館 1F にあり、学生ラウンジと隣接しており、かつ本学スクールバスのバス停から非常に近いところに設置している。そのため、緊急時にも対応しやすく、大学全体の厚生の向上に寄与している。

PC ルーム、CALL 教室

PC ルーム、CALL 教室については学内に複数設けている。機器を使用する演習科目で使用するほか、実習科目でも必要に応じて使用する。

体育館、課外活動施設、その他厚生施設

学生の厚生施設も充実させている。スポーツ関連の施設は、体育館のほか、テニスコート 3 面とフットサルコート 1 面、トレーニングジムを設けている。さらに、展示スペースとして、学内には「ギャラリーフロール」や「春秋館ギャラリー」、「ギャラリーデッドスペース」があり、学外には市内中心部に「kara-s」を設置している。学外施設として、「丹後学舎（京都府京丹後市丹後町上野 844）」「朽木学舎（滋賀県高島市朽木古屋 472）」があり、宿泊施設として安価で利用することができる。学外の施設は周辺の相場より安価で利用することができ、時期によっては抽選、予約待ちが発生するなど、学生に大変好評を博している。

研究室

研究室については各教員が研究に集中できる環境を整えている。また、研究室の近くには美術関連の専門書等の資料を保管・閲覧できるスペースを設け、オープンスペースにテーブル、イス等を置き、学生が相談に訪れやすいレイアウトとしている。

・必要な教室等の整備計画

国際文化学部において、大学設置基準第 36 条第 3 項に定める教室数を整備するにあたっては、適正な教育環境を検討するにあたり、以下の時間割を設計している。

1 年次	月曜日～金曜日の 1～3 講時：共通教育科目の必修、選択科目を配置 月曜日～金曜日の 4～6 講時：専門演習科目、専門講義・演習・実習科目を配置 火曜日、木曜日の 5～6 講時：必修科目である基礎演習を配置
2 年次	月曜日～金曜日の 1～2 講時：共通教育科目の必修、選択科目を配置 月曜日～土曜日の 3～6 講時：専門演習科目、専門講義・演習・実習科目を配置 月曜日、水曜日の 5～6 講時：必修科目である基礎演習及び応用演習を配置 土曜日の 1～2 講時：資格課程科目を配置
3 年次	月曜日～金曜日の 1～2 講時：共通教育科目の必修、選択科目を配置 月曜日～土曜日の 3～6 講時：専門演習科目、専門講義・演習・実習科目を配置 月曜日、水曜日の 3～4 講時：必修科目である応用演習を配置 土曜日の 1～2 講時：資格課程科目を配置 ただし、人文学科の第 1 クォーター及びグローバルスタディーズ学科の第 1、第 2 クォ

	ーターは、企業実習（インターンシップを含む）や海外語学研修等の学外実習を実施するため、時間割は変則的となる。
4年次	月曜日～金曜日の1～2講時：共通教育科目の必修、選択科目を配置 月曜日～土曜日の3～6講時：専門演習科目、専門講義・演習・実習科目を配置 月曜日、水曜日の3～4講時：必修科目である卒業研究演習を配置 土曜日の1～2講時：資格課程科目を配置

国際文化学部の開講科目数は、人文学科 276 科目、グローバルスタディーズ学科 276 科目である。必修の演習科目等の少人数の授業は 20 人程度の履修者でカリキュラムは設計されており、必修、選択科目における講義科目においては 40 人程度の科目から 300 人程度の科目の開講を計画している。これらの授業を適切に開講するため、2021 年度に新校舎の開設計画している。新校舎の教室数は 8 教室であり、その総面積は 405.45 m²である。これらの教室は国際文化学部を主として利用する計画である。加えて、その他に全学で共有する教室は 43 教室を有しており、国際文化学部が開講を予定している科目数に対して十分な施設を整備する計画となっている。

ウ 図書等の資料及び図書館の整備計画

本学は、図書資料、視聴覚資料、博物資料の所蔵およびデジタル機材の充実をはかる方針によって、全学共用の施設である「情報館」を設置している。

情報館は、4 層構造の建物で床面積は約 4,500 m²である。そのうち、サービススペースが約 3,000 m²（閲覧約 1,900 m²、視聴覚および情報端末スペース約 1,100 m²）、管理スペースは、書庫・事務スペースを合わせて 1,000 m²である。また、閲覧席数は 584 席である。

大学設置基準第 38 条に基づく十分な機能を満たすため、本学では「京都精華大学情報館規程」「京都精華大学情報館資料管理規程」を定めている。

蔵書数は、図書資料 23 万点以上を有している（内、内国書約 18 万点、外国書約 5 万点）。これらの図書資料は、本学の蔵書検索システム（OPAC）で学内はもとより学外からも検索することが可能であるとともに、予約も可能である。さらに国立情報学研究所（NII）が提供している NACSIS ILL により他大学図書館および他機関の文献複写や図書資料の取り寄せも充実している。さらに利用者に最新の情報を速やかに提供するために、データベース、電子ジャーナルの充実・整備を図っており、ホームページを通じて図書館内はもちろん、学内であれば教員の研究室等での利用も可能な環境を整備している。

図書資料以外にも、視聴覚資料について AV・マイクロ資料を 1 万 3 千点以上所蔵しており、映像・録音資料も充実させている。

その他、館内施設には、デジタル機器を用いた創作活動を支援するメディアラボや、館外での創作活動のための機器を貸し出すメディアセンターを有している。また、撮影や録

音用のスタジオや上映用機材を備えたメディアホールも完備している。

また、京都を中心とした日本の伝統工芸や産業についての図書資料や実物資料を一堂に集めた「伝統工芸・産業資料室」を設置し、学生たちの研究・創作活動を支援している。

このように、国際文化学部における教育研究に支障がない環境を整備している。

⑧ 入学者選抜の概要

本学に入学することのできる者は、高等学校若しくは中等教育学校を卒業した者若しくは通常の課程による十二年の学校教育を修了した者、又は文部科学大臣の定めるところにより、これと同等以上の学力があると認められた者とする（学校教育法第90条）。また、入学者の選抜では、公正かつ妥当な方法により、適当な体制を整えて行うものとする（大学設置基準第2条の2）

国際文化学部は、アフリカ・アジアの文化、京都を中心とした日本の歴史や文化、そして世界の相関を理解し、現在の社会が抱える多様な課題の解決に貢献し、より良い共生社会の実現と世界の発展に寄与できる人材を養成することを目指している。本学部に入学者として次のような人材を求めている。

アドミッション・ポリシー

領域1 知識・理解・技能	高等学校の教育課程における基礎学力・技能を有している
領域2 思考・判断・表現	1 身近な問題について、知識や情報をもとに筋道を立てて思考できる 2 他者の意見を理解し、自分の考えをわかりやすく表現できる
領域3 関心・意欲・態度	1 新しい領域や多様な人々に対して先入観なく向き合い、生涯にわたって学習を継続する意欲がある 2 学びたい学部・学科の知識や経験を社会で活かしたいという目的意識を持っている

このような人材を集めるために、本学部では以下のように多様な選抜を行い、受験生の適正や意欲を見極め、本学の受入方針にふさわしい人材の確保を目指す予定である。それぞれの区分ごとの募集定員も以下のとおりである。

	人文学科	グローバルスタディーズ学科
一般選抜入学試験（30%）	48名	27名
学校推薦型選抜入学試験（30%）	48名	27名
総合型選抜入学試験（20%）	32名	18名
大学入学共通テストを利用した入学試験（10%）	16名	9名
外国人留学生入学試験（10%）	16名	9名

海外帰国生徒入学試験	若干名	若干名
社会人入学試験		
編入学入学試験	若干名	若干名

外国人留学生試験を実施し、多様な文化や言語を持つ学生の受入を行う。大学における学修に必要な日本語能力を確認するために、出願の条件として日本語能力試験（JLPT）でN2以上、日本留学試験（EJU）220以上を定めている。経費支弁能力については出願書類において「経済状況調査票」の提出を義務付けており、受験段階で適切に把握している。また、在籍管理においては、学期ごとに演習等少人数の必修科目での出欠状況を担当教員へ提出を求め、各学科において欠席が続く学生と連絡をとり、学習指導等を行うことを各学部において義務付けている。

社会経験の有る者が大学で学ぶことができるよう、社会人入学試験を設定している。本学において、社会人入学試験は以下の条件を満たすものを対象として実施している。

年齢	23 歳以上の者
国籍	次のいずれかに該当する者 (1) 日本国籍を有する者（重国籍者を含む） (2) 特別永住者の資格を有する者 (3) 入学に際して「留学」以外の適切な在留資格を有する見込みの者
学歴	次のいずれかに該当する者 (1) 日本国内の高等学校または中等教育学校後期課程を卒業した者 (2) 特別支援学校の高等部または高等専門学校の 3 年次を修了した者 (3) 高等学校卒業程度認定試験（旧大学入学資格検定）に合格した者 (4) 国を問わず、一以上の国の学校教育制度に基づく通算 12 年以上の教育課程を修了した者 (5) 上記以外に文部科学省が定める大学入学資格を有する者
社会経験	4 年以上の社会経験を有する者 ※大学・専門学校・各種学校・受験予備校等の在籍期間はこれに含めない。

また、社会人を受け入れる際、既修得単位の認定にあたっては、大学設置基準第 30 条に基づき適正に対応している。この上限は学則において 30 単位と定めている。これに当たっては全学の教務委員会にてその適切性を確認したうえで認定している。

編入学試験では、出願資格を満たす者を、他大学、短期大学、専修学校等から 2 年次、3 年次に若干名の受入を行っている。受け入れに当たっては、大学設置基準第 30 条に基づき適正に対応している。この上限は学則において 2 年次編入の場合には 30 単位以内、3 年次編入の場合には 62 単位を上限と定めている。これに当たっては全学の教務委員会にてその適切性を確認したうえで認定している。また入学後のオリエンテーションの際には編入学

生を対象とした個別の履修指導の時間を設けており、学生が当該学部における学習に支障がないよう配慮している。受け入れ予定人数としては2年次、3年次それぞれにおいて人文学科、グローバルスタディーズ学科ともに1、2名の受け入れを予定している。

正規の学生以外に科目等履修生、聴講生等も受け入れるが、この場合も正規の学生の教育に影響を与えないよう、受入数は若干名とし、書類審査を行うなどしてその目的、意欲を確かめたうえで受講を認める予定である。

⑨ 取得可能な資格

国際文化学部人文学科では、卒要件単位に含まれる科目に加えて、教職関連科目を履修することで、中学校教諭一種免許（国語）（社会）および高等学校教諭一種免許（国語）（地理歴史）（公民）の取得を可能とする。

国際文化学部グローバルスタディーズ学科では、卒要件単位に含まれる科目に加えて、教職関連科目を履修することで、中学校教諭一種免許（社会）および高等学校教諭一種免許（公民）の取得を可能とする。

また、国際文化学部人文学科およびグローバルスタディーズ学科では、卒業要件単位に含まれる科目に加えて、博物館学芸課程関連科目を履修することで、博物館学芸員資格の取得を可能とする。

加えて、国際文化学部人文学科およびグローバルスタディーズ学科では、図書館司書課程関連科目を履修することで、図書館司書資格の取得を可能とする。

これらの資格はいずれも国家資格にあたる。

⑩ 企業実習（インターンシップを含む）や海外語学研修等の学外実習を実施する場合の具体的計画

ア 実習先の確保の状況

人文学科では、3年次第1クォーターの必修科目として「長期フィールドワーク1」「長期フィールドワーク2」「長期フィールドワーク3」を各2単位の必修科目として配置しており1人の学生は派遣先にて一貫して実習に取り組む。この科目では国内の協定を交わしている大学への留学、学術機関や公共施設での調査、研究、教員指導の下でのPBL形式での学修のいずれかによる長期的な学外での調査、研究、学習活動に取り組む。

協定を交わしている大学は、沖縄大学、旭川大学、札幌大学で各大学とも最大5名の受け入れを可能としている。また、学術機関及び公共施設では、総合地球環境学研究所、国際日本文化研究センター、京都市動物園があり、それぞれ15名の学生の受け入れを可能とする。その他、国際文化学部の教員が指導するPBL形式でのオフキャンパス学修としては、いずれも10名程度の規模で14クラスを開講することを計画している。このように国内での学外実習として全学生を丁寧な学修指導体制のもとで受け入れるに足る規模の派遣先等をすでに確保している。このように国内での学外実習としてす

すべての学生を受け入れるに足る規模の派遣先等をすでに確保している。

「長期フィールドワーク 1」「長期フィールドワーク 2」「長期フィールドワーク 3」における派遣先および受入可能人数

派遣先	受入可能人数
沖縄大学 (沖縄県那覇市宇国場 555 番地)	5 名
旭川大学 (北海道旭川市永山 3 条 2 3 丁目 1-9)	5 名
札幌大学 (北海道札幌市豊平区西岡 3 条 7 丁目 3-1)	5 名
総合地球環境学研究所 (京都府京都市北区上賀茂本山 457 番地 4)	15 名
国際日本文化研究センター (京都府京都市西京区御陵大枝山町 3 丁目 2)	15 名
京都市動物園 (京都府京都市左京区岡崎法勝寺町)	15 名
教員指導下での PBL 形式での学修 (14 クラス)	140 名
受入総数	200 名

グローバルスタディーズ学科では、「海外長期フィールドワーク 1」「海外長期フィールドワーク 2」「海外長期フィールドワーク 3」「海外長期フィールドワーク 4」「海外長期フィールドワーク 5」「海外長期フィールドワーク 6」を各 2 単位の必修科目として配置しており 1 人の学生は派遣先にて一貫して実習に取り組む。このうち「海外長期フィールドワーク 1」「海外長期フィールドワーク 2」「海外長期フィールドワーク 3」は 3 年次第 1 クォーター、「海外長期フィールドワーク 4」「海外長期フィールドワーク 5」「海外長期フィールドワーク 6」は 3 年次第 2 クォーターに配置している。

「海外長期フィールドワーク 1」～「同 6」において協定先並びに受け入れ可能人数は以下のとおりである。

受入大学名	国・地域	受入可能人数
チェンマイ大学	タイ	20 人
マラナタ基督教大学	インドネシア	10 人
ベトナム国家大学ホーチミン市 人文社会科学大学	ベトナム	20 人
インド工科大学 (ポンペイ校)	インド	5 人

大邱大学	韓国	5人
静宜大学	台湾	5人
珠海学院	香港	5人
オークランド工科大学 International House	ニュージーランド	10人
シェイク・アンタ・ジョップ大学	セネガル	5人
クワラ州立大学	ナイジェリア	3人
マリ人文科学研究所	マリ	2人
受入総数		90人

このように学外実習としてすべての学生を受け入れるに足る規模の派遣先等をすでに確保している。

イ 実習先との連携体制

いずれの派遣先とも大学間あるいは学部間で協定を結び、学生の派遣及び受け入れを随時協議すること、受け入れプログラムや学生指導も含めて、双方で連携しながら進めることとしている。また、グローバルスタディーズ学科においては、多くの学生を派遣するため、海外生活に不慣れな学生が発生することも考えられる。現地での生活面での相談に応じられるよう旅行会社を通じた 24 時間の相談窓口体制を整備するとともに、派遣先大学と、各地域の本学側の担当指導教員による連携を密にとり、留学先での勉学の状況、生活等も含めた相談が行える体制の整備を計画している。

ウ 成績評価体制及び単位認定方法

人文学科では、大学、学術機関、公共団体、PBL 形式での学修いずれにおいても適切な授業時間を設定し、期中の定期的な指導教員へのミニレポート、期中の報告会、事前学習、事後学習、レポートなどを勘案した総合的な評価による単位認定を行う。いずれのプログラムで学修する場合でも必ず担当指導教員を配置し、5名から20名程度の適切な指導規模による指導体制のもと評価を行う。

グローバルスタディーズ学科では、協定先となる海外の大学へ派遣し、期間中の協定先での学修と事前学習、事後学習及び期中の本学側の指導教員への電子メールや skype 等の電子媒体を活用した報告、期間中に現地を訪問する指導教員への報告会などをもって総合的に評価する。

⑪ 管理運営

「京都精華大学学則」第 36 条の規程により、学長が決定を行うに当たり意見を述べる事項及び当該学部の運営に関する事項を審議するために、教授会を配置している。教授

会は全学教授会と学部教授会を置いており、全学教授会は全学の専任の教授、准教授、講師を構成員とし、原則月 1 回の定例教授会の他、必要に応じ臨時教授会を開催する。学部教授会は当該学部に属する専任の教授・准教授および講師を構成員とし、必要に応じて開催している。全学教授会は、学長が招集しその議長となる。学部教授会は学部長が招集し、その議長となる。教授会を開催するには全学教授会、学部教授会いずれも構成員の 3 分の 2 以上の出席が必要である。

全学教授会の議題は、以下のとおりである。

- (1) 全学に関する重要事項
- (2) 各学部間の連絡調整に関する事項
- (3) 全学共通の教育課程の編成に関する事項
- (4) 全学共通の授業科目の担当に関する事項
- (5) 教員の人事に関する事項
- (6) その他学長が必要と認める事項

学部教授会は、学長が次に掲げる事項について決定を行うにあたり意見を述べる

- (1) 学生の入学（編入学・転入学を含む）、卒業および課程の修了
- (2) 学位の授与
- (3) 前 2 号に掲げるもののほか、教育研究に関する重要な事項で、学部教授会の意見を聴くことが必要なものとして学長が定めるもの

⑫ 自己点検・評価

ア 自己点検・評価委員会

実施方法

本学では 1996 年以来「京都精華大学自己点検・自己評価規程」にもとづき自己点検・評価委員会を設け、自己点検・評価活動に取り組んできた。

2005 年度までは、主な活動方針として、年度ごとに特定の部署や教学プログラムを取り上げ、集中的に点検・評価を加えてきた。この間の点検・評価結果はこれまで 4 冊の報告書として刊行されている。

2006 年度から現在に至るまでは大学基準協会の点検・評価項目（A 群・B 群）すべてにおける点検・評価に取り組んでいる。また、すべての開講科目を対象とした授業評価アンケートも実施している。

2008 年度、2015 年度には自己点検・評価結果を財団法人大学基準協会に提出し、認証評価された。

2019 年度、規程を「学校法人京都精華大学自己点検・自己評価規程」に改定し、来たる第 3 期認証評価に向け、理事長の下で自己点検・自己評価活動に取り組む体制とした。

実施体制

2018年度までは、副学長をはじめとした組織運営の要となる学部長、事務部長等、各部署から委員を選出し、全学で連携して、自己点検・評価委員会を組織していた。現在は、理事長の下、学長を長とし、副学長ら教学運営上の主な者だけではなく、法人部門を所管する専務理事や総務担当理事も含めた法人全体が連携する組織として、自己点検・評価委員会を整備し、これに取り組んでいる。

結果の活用・公表および評価項目等

2015年度の認証評価の結果をもとに課題を抽出し、改善策を策定した。さらに、今後も自己点検・評価や学生アンケート、累積した大学基礎データを包括的に分析し、課題について継続的に取り組んでいく。

このような取組については「自己点検評価報告書」および「大学基礎データ」と大学基準協会による「京都精華大学に対する相互評価結果ならびに認証評価結果」をまとめた自己点検・評価報告書を刊行、本学ウェブサイトにおいても公開している。

イ 外部評価委員会

実施方法

2014年から自己点検・評価活動の客観性および妥当性を担保し、教育研究水準のさらなる向上をはかるために、学長の諮問機関として、京都精華大学外部評価委員会を設置した。委員会は学長の諮問を受け、評価を行い、学長に報告する。主な諮問内容としては本学が行う自己点検・評価結果の客観性および妥当性に関する評価、本学の教育研究水準の適切性および妥当性に関する評価、学長が必要とする重要事項に関する評価が挙げられる。

外部評価については7年に1度であったものを、同様の観点で毎年行うものとしPDCAのサイクルをより短くした。これは、予測不可能な時代にあって、できるだけ早急に時代に対応し、社会の要望を捉え適応していくために他ならない。

2019年度からこの外部評価委員会を学校法人京都精華大学外部評価委員会に改め、法人理事長の諮問を受ける機関とした。

実施体制

委員会は学長が委嘱した学外の有識者4～8名で構成され、学長が委員長および副委員長を指名する。

結果の活用・公表および評価項目等

評価結果は自己点検・評価の客観性および妥当性を担保する資料として取り扱う。外

部評価の過程で判明した本学の課題については発展に寄与する重大な指摘事項として受け止め、改善に取り組んでいる。

⑬ 情報の公表

本学では広報紙、ウェブサイトなどのメディアを通じて、広く社会への情報公開を行っている。国際文化学部に関しても、学部の教育目的、教育課程や担当教員など、教育研究活動の状況を積極的にウェブサイトにて公開していく計画である。

ア 大学の教育研究上の目的に関すること

<http://www.kyoto-seika.ac.jp/about/>

「大学の概要と取り組み」

<https://www.kyoto-seika.ac.jp/about/disclosure/policy.html>

「教育の3つの方針」

イ 教育研究上の基本組織に関すること

<http://www.kyoto-seika.ac.jp/edu/>

「学部・大学院」

ウ 教育組織、教員の数並びに各教員が有する学位及び業績に関すること

<https://www.kyoto-seika.ac.jp/about/number.html>

「学生数・教員数」

<https://www.kyoto-seika.ac.jp/edu/faculty/>

「教員紹介 > 各学部 > 各教員」

エ 入学者に関する受け入れ方針及び入学者の数、収容定員及び在学する学生の数、卒業又は修了した者の数並びに進学者数及び就職者その他進学及び就職等の状況に関すること

<https://www.kyoto-seika.ac.jp/about/disclosure/>

「修学上の情報」

オ 授業科目、授業の方法及び内容並びに年間の授業の計画に関すること

<https://www.kyoto-seika.ac.jp/about/features/index.html>

「学びの特色」

カ 学修の成果に係る評価及び卒業又は修了の認定に当たっての基準に関すること

<http://www.kyoto-seika.ac.jp/about/report/>

「事業報告・学則・評価 > 学則」

キ 校地・校舎等の施設及び設備その他の学生の教育研究環境に関すること

<http://www.kyoto-seika.ac.jp/about/map>

「キャンパスマップ」

ク 授業料、入学料その他の大学が徴収する費用に関すること

<https://www.kyoto-seika.ac.jp/about/tuition-and-fee/index.html>

「学費・入学手続き」

ケ 大学が行う学生の修学、進路選択及び心身の健康等に係る支援に関すること

<http://www.kyoto-seika.ac.jp/career/>

「進路・就職」

<https://www.kyoto-seika.ac.jp/stu/>

「健康・生活の相談」

コ その他

<http://www.kyoto-seika.ac.jp/about/report/>

「事業報告・学則・評価」

⑭ 教育内容等の改善を図るための組織的な取組

ア FD 研修

本学では、教員の教育力の向上を図るために、「京都精華大学 FD 委員会規程」を定めて FD 活動を実施している。全学的な切り口で教員の資質の維持向上を恒常的かつ組織的に推進する組織として、京都精華大学 FD 委員会を設置し、その下部組織として各学部・研究科に各学部・研究科 FD 委員会を部門ごとに設けている。

FD 委員会は、PDCA サイクルによって組織的・継続的に教育効果を高めていく「教育マネジメントサイクル」を構築し、各部門の情報共有、年次ごとの全体目標、部門目標の設定などによって全学的な FD を活性化している。その他、全学的な教育改善・開発に関しても FD 委員会が中心となり、1 クォーターに 1 回、教職員を対象とした研修会などを催している。

本学の FD 活動の特色は、スムーズな活動展開を推進していること、SD（大学職員の能力開発）の効果を見込んで、積極的に職員を参加させていることが挙げられる。また、日常的な教育開発・改善活動もその活動の対象とし、全学の教学研究組織を活性化させる手

段にもなっている。

上記以外にも、教員の資質を向上させる制度として、各セメスターの後半に授業アンケートを実施している。授業アンケートは全科目を対象に行われ、集計結果を担当教員に提示する。当該教員はアンケート結果を踏まえ、今後の改善点を所定様式で提出する。芸術学部 FD 委員会においても定期的にこれを検証している。

このように、本学では教員の資質の維持向上を目指すべく、組織的に機能する FD 委員会と授業アンケート制度を整えており、今後さらに継続的な向上を進める。

イ SD 研修

実質的な本学の設立宣言ともいえる、岡本清一初代学長の「教育の基本方針に関する覚書」には、「教員の学生に対する愛情責任は、親の子に対するそれが無限であるように、無限でなければならない。職員もまた教員に準じて教室外教育の一斑の責任を負う。」と記されている。これにもとづき、事務職員に対しても、教育に携わる者として常に社会的・文化的な知見を深め、不断に能力を高めていくために、個人研究費を支給している。

また、同様の理念から、事務職員についても学外研究制度を設けている。

さらに、学外団体で主催するセミナー研究会への参加に際しても、その経費を負担する形で奨励している。また、SD の一環として以下の制度を設置している。

・ 新人研修

入職後 1～2 年の新入職員に対して、「新人研修」として理事長、学長をはじめとして理事、部・次長等の指導のもと、数ヶ月間にわたる研修を行っている。研修内容は、大学業務全般にわたって基礎的な知識を幅広く身につけるよう、構成されている。

・ 個人研究費

教員同様に、職員にも個人研究費が与えられている。その用途については、定めはあるものの限定的ではなく、各人の裁量に任されている。これに基づき、各自の職務に直接に関わる分野だけではなく、事務職員も学生に対して教育的指導を行う主体であるという観点のもと、多様な研究を行っている。

・ 学外研究

専任職員であれば申請に基づき 6 ヶ月もしくは 1 年間、職務を離れて学外で研究を行うことが可能となっている。

・ 学外研修

事務職員は、所属する各部署の業務の円滑な遂行および資質向上のため、自主的に学外で実施される研修に参加している。

⑮ 社会的・職業的自立に関する指導等及び体制

ア 教育課程内の取組について

国際文化学部は「現在の社会が抱える多様な課題の解決に貢献し、より良い共生社会の実現と世界の発展に寄与できる人材」を養成するという目的に基づいた自らと社会とを常に意識し、自ら社会の中で実践的に学ぶプログラムを軸としたカリキュラムをもって構成されている。その中にある共通教育科目においてはキャリア科目を配置している。配置された12科目の中で1年次第1クォーターに配置された「キャリア1」は必修科目であり、学生はこの中で4年間の学習期間の中でどの時期にどのような科目を受けることで社会的・職業的自立に関する正課科目、教育課程外のプログラムを受けられるのかを体系的に理解することができる。

加えて2年次、3年次においては「キャリア2」「キャリア3」を配置しており、大学設置基準第42条の2「学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力」の修得機会を担保している。また、共通教育科目には、社会実践力育成プログラムが置かれており、「インターンシップ1」「インターンシップ2」では国内外の企業やNGOなどでの体験を通じた学びの機会を置き、「産学公連携プログラム1」「産学公連携プログラム2」では、プロジェクトベースドラーニング(PBL)形式による企業や自治体との連携を通じた社会課題解決のための実践的な学修のできる科目を配置している。

イ 教育課程外の取組について

本学では、教育課程外に以下のプログラムを配置している。

- ・進路就職ガイダンス
- ・企業説明会
- ・内定した先輩との交流イベント
- ・マナー実践講座
- ・面接・グループディスカッション対策講座
- ・語学力やPC・デジタルスキルの向上を目指す講座
- ・筆記試験対策講座

これらのプログラムは自らが選択して受講するものであるが、前述のとおり必修科目として配置している「キャリア1」で自らが必要とする講座を把握することで自らの目指す将来像に合わせたプログラムを受講することができる。

ウ 適切な体制の整備について

社会的・職業的自立に関する指導については、事務部門に配置された学生グループキャリア支援チームが学部における指導を支援する体制を置いている。

これに加え、創造戦略機構に配置されたキャリアデザインセンターでは、アに定めたキャリア科目の管理と運営を担い、全学部が横断的に委員を配置したキャリア支援委員

会との連携をもって、横断的に学生を支援する体制を置いている。

以上

資料目次

- 資料 1. 学校法人京都精華大学就業規則 p. 35-
- 資料 2. 履修モデル p. 49-
- ・人文学科
 - ・グローバルスタディーズ学科

学校法人京都精華大学就業規則

1993年10月13日	制定
1997年03月22日	改定
1999年03月27日	改定
2001年03月24日	改定
2001年10月06日	改定
2003年03月29日	改定
2005年03月26日	改定
2007年03月31日	改定
2007年05月26日	改定
2007年09月29日	改定
2007年12月08日	改定
2008年03月29日	改定
2009年03月28日	改定
2010年03月27日	改定
2011年03月26日	改定
2016年03月26日	改定
2017年03月25日	改定
2017年09月23日	改定
2019年03月23日	改定
2019年09月28日	改定
2019年11月09日	改定

第1章 総則

(目的)

第1条 この就業規則は、学校法人京都精華大学(以下「学園」という。)の職員(以下「教職員」という。)の就業に関する事項を定めることを目的とする。

2 学園および教職員は、ともに誠意をもってこの規則を守らなければならない。

(教職員の定義)

第2条 この規則において「教職員」とは、第6条第1項に規定する条件を満たし、同条第2項に規定する手続きを経て、学園に採用された専任の教育職員、事務職員をいう。ただし、特別任用教員、非常勤講師、その他期間を定めて雇用する要員に関する事項は、別に定める。

(役職者の定義)

第 2 条の 2 この規則において「役職者」とは、管理および監督する地位にある教職員とし、その職位および職務については、「役職者の職位および職務規程」に定める。

(義務)

第 3 条 教職員は、学園の建学の精神を尊重し、その民主的伝統を重んじ、職責を誠実に遂行し、互いに協力して教育目的の達成に努め、これに背反する言行があつてはならない。

2 教職員は、上司の指揮命令に従い、誠実に職務を遂行しなければならない。

3 教職員は、互いに人格を尊重し、以下に該当する行為を行ってはならない。

(1) 学内外を問わず、学園の名誉または信用を傷つけ、その利益を害し、または教職員全体の不名誉となるような行為を行うこと

(2) 職務上知り得た守秘事項をもらすこと

(3) 職場の風紀、秩序の維持の妨げとなる行為を行うこと

(4) 言葉や行為により、相手方に不利益や不快感を与え、その尊厳を損なう行為を行うこと

(5) その他教職員として不相当と認められる行為を行うこと

4 前項第 4 号については、「学校法人京都精華大学ハラスメントの防止・対策に関する規程」に定めるものとする。

5 法令による証人、鑑定人等となり、職務上の秘密に属する事項を公表するには、事前に許可を得なければならない。

第 4 条 削除

第 5 条 学園は、業務の都合等により、教職員に職場、職種の変更を命ずることがある。教職員は、正当な理由がなければこれを拒むことができない。

第 2 章 人事

(採用)

第 6 条 教職員として新たに採用される者は、次の条件を備えなければならない。

(1) 健康 職務を遂行するために十分な健康を有すること。

(2) 年齢 満 18 歳以上の者

(3) 学力技能 従事する勤務に必要な程度の学力と技能を有すること。

2 教職員として新たに採用される者は、速やかに次の書類を提出しなければならない。

(1) 履歴書(必要があるときは写真を添付したもの。)

(2) 住民票記載事項証明書、その他身分を証明する書類

(3) 最終卒業学校の卒業証明書および成績証明書

(4) 健康診断書(最近 3 か月以内に実施したもの。)

(5) その他学園が必要と認める書類

3 教職員として新たに採用される者が、学園外の他の業務を兼ねようとするときは、あらかじめ届け出て、理事長の承認を得なければならない。

4 削除

(試用期間)

第7条 学園は、新たに採用した教職員に対して、3か月間の試用期間を設ける。

2 試用期間中または試用期間終了の際、引き続き教職員として就業させることを不相当と認めた場合は、第13条に規定する手続を経てこれを解雇する。

(異動の届出)

第8条 教職員は、次に掲げる事項について異動のある場合は、その都度、速やかに届け出なければならない。

- (1) 現住所の変更
- (2) 諸手当支給や休暇取得に係る家族の異動
- (3) 学園に就職した後の学歴および資格の変更
- (4) その他身分上必要な事項

(休職事由)

第9条 学園は、次のいずれかに該当する場合には教職員に休職を命ずる。ただし、第2号の場合は、常務理事会の議を経て休職を命じないことがある。

- (1) 業務外の傷病により、正常な勤務に堪えられないと認められたとき
- (2) 刑事訴追を受けたとき
- (3) 学園の命により、留学その他で職務を離れるとき

(休職期間)

第10条 前条に規定する休職の期間は、次の通りとする。ただし、この休職期間は在籍年数に通算する。

- (1) 前条第1号による休職の期間は5年間とし、同一傷病もしくは同一傷病に起因すると認められる傷病が再発した場合の休職期間は、すでに取得した休職期間の残存期間とする。
- (2) 前条第2号による休職の期間は、その事件が裁判所に係属する期間とする。
- (3) 前条第3号による休職の期間は、休職の事由が解消するまでの期間とする。

2 休職者は本学園の教職員としての身分を保有する。

(復職)

第11条 学園は、第9条による休職者の事由が解消したときは、復職を命ずる。ただし、同条第2号の規定による休職者については、復職を命じないことがある。

2 第9条第1号による休職者の場合、復職を命ずるにあたっては、就労可能であることを証明する医師の診断書の提出を求める。さらに、必要と認める場合は学園が指定する医師の診断書の提出を求めることがある。

(定年)

第 12 条 教職員は、満 65 歳に達した年度末をもって退職するものとする。

2 年齢の計算方法は、「年齢計算に関する法律」の規定によるものとする。

第 12 条の 2 学園は、定年等により退職した教職員を退職日の翌日から再雇用することができる。

2 再雇用に関する規定は、別に定める。

(定年の延長)

第 12 条の 3 学長に就任する者が、当該任期の終了前に定年年齢に達する場合は、当該任期の終了まで定年年齢を延長するものとする。

第 12 条の 4 本学が新設する学部、研究科の学部長、研究科長に就任する者が、当該学部、研究科の完成年度前に定年年齢に達する場合は、当該学部、研究科の完成年度まで定年年齢を延長するものとする。

(解雇)

第 13 条 学園は、教職員が次の各号の一に該当するときは、解雇する。

(1) 職務に著しく不適任で配置転換しても改善の見込みがないと認められたとき

(2) 精神または身体に著しい障害があつて、業務に耐えられないと認められたとき

(3) 学園の承認を得ないで他の業務に従事し、その停止の勧告に応じないとき

(4) 正当な事由なく、14 日以上無断欠勤したとき

(5) 本規則第 45 条第 2 項に該当するとき

(6) 天災事変、その他やむを得ない事由の為、事業継続が不可能となったとき

(7) 休職期間が満了し、復職できないとき

2 前項第 1 号から第 6 号により解雇するときは、30 日前に解雇の予告をするか、または 30 日分の平均賃金を支給する。

(解雇の制限)

第 14 条 学園は、教職員が業務上で負傷または疾病にかかり、療養のために第 33 条による特別休暇をうけている場合は、解雇しない。

(退職)

第 15 条 教職員が退職を希望するときは、退職を希望する日の 30 日前までに、学園所定の退職願を提出しなければならない。ただし、選択定年制による退職を希望するときの手続については、別に定める。

(身分の喪失)

第 16 条 教職員は、次の場合には教職員の身分を失う。

(1) 本人が死亡したとき

(2) 学園が休職を命じ、休職期間が終了しても復職を命じないとき

(3) 雇用契約の期間に定めがあつて、その期間が終了したとき

第 17 条 教職員は、退職の際、身分証明書および日本私立学校振興・共済事業団が管掌する私学共済制度の加入者証を遅滞なく返却しなければならない。

第 3 章 給与・退職金・旅費

(給与)

第 18 条 教職員に支給する給与は、本俸と諸手当とし、別に定める給与規程による。

(退職手当)

第 19 条 削除

第 20 条 削除

(退職金)

第 21 条 教職員が退職したときは、別に定める退職金規程により、退職金を支給する。

(旅費)

第 22 条 教職員が業務のために出張を命じられたときは、別に定める旅費規程により旅費を支給する。

第 4 章 勤務・休日・休暇・休業

(勤務時間)

第 23 条 教職員の勤務時間は 1 週あたり 37 時間 30 分、勤務時間中の休憩時間は 1 日あたり 1 時間とする。

2 前項の勤務時間およびその内の休憩時間の配分は次の通りとする。

(1) 勤務時間については、原則として、月曜日から土曜日の午前 9 時から午後 6 時までのうち 7 時間 30 分とする。

(2) 休憩時間については、前号の勤務時間のうち 1 時間とする。

3 学園は、業務等の都合により、前項第 1 号および第 2 号の時間を変更することがある。

第 24 条 教育職員の授業担当時間数は、前条第 1 項の範囲内で、次の基準によることとする。ただし、業務上の必要がある場合には、これによらないことがある。

(1) 講義および演習の場合 1 週あたり 12 時間

(2) 実験、実習および実技の場合 1 週あたり 18 時間

2 前項にかかわらず、学長等の役職者の授業担当時間数は、これを軽減することができる。学長等の役職者の授業担当時間数については、別に定める。

3 教育職員の授業担当時間の配分については、前条第 2 項にかかわらず、学園の定める時間割によることとする。

4 教育職員は、前条にかかわらず、業務に差し支えない範囲内で、学園以外の場所で教育・研究等に従事することができる。

5 教育職員が学園外で非常勤講師に就任しようとする場合は、あらかじめ所定の書式によって届け出て、理事長の承認を得なければならない。ただし、学園外における非常勤講師授業担当時間は、原則として、1 週あたり 6 時間を超えないものとする。

6 教育職員が学園外の研究機関において、共同研究員、学園外の各種審議会等の委員等、その他教育・研究業務等に就こうとする場合は、あらかじめ所定の書式によって届け出て、理事長の承認を得なければならない。

(事務職員の本学園における授業担当)

第 24 条の 2 本学園の学部または研究科等が事務職員に授業担当を委嘱するときは、理事長の承認を得なければならない。

2 前項の場合の手続きについては、これを別に定める。

(事務職員の外大学非常勤講師等の就任)

第 24 条の 3 事務職員が、他大学の非常勤講師に就任しようとするときは、理事長はこれを認めることができる。

2 事務職員が、学園外の各種審議会等の委員等に就任しようとするときは、理事長の承認を得なければならない。

3 事務職員が、学園外の教育研究機関等の共同研究員等に就任しようとするときは、理事長の承認を得なければならない。

4 第 1 項、第 2 項および第 3 項に関する手続きについては、これを別に定める。

(遅刻、早退、欠勤)

第 25 条 教職員が病気その他やむを得ない事由で遅刻、早退または欠勤するときは、あらかじめ所属長に届け出なければならない。ただし、事前に余裕のないときは、事後速やかに届け出なければならない。

2 病気欠勤が 7 日以上におよぶときは、前項の届出の他に医師の診断書を提出しなければならない。

3 学園は、本人の申し出により欠勤を有給休暇に振り替えることができる。

4 欠勤した教職員の給与の支給については、給与規程に定める。

(時間外勤務、休日出勤)

第 26 条 学園は、業務の都合上、やむを得ない事由のある場合は、労働基準法第 36 条に基づく協定に従い、第 23 条の規定を超え、または第 28 条第 1 項の休日に通常の勤務をさせることがある。

2 前項に規定する時間外労働および休日勤務を命じた場合は、別に定める時間外勤務手当を支給する。

3 小学校入学前までの子の養育または要介護状態にある家族の介護を行う教職員のうち、延長することができる時間を短くすることを申し出た者の勤務時間については、別に定める。

(代休)

第 26 条の 2 休日勤務は次の通りとし、記載の通りの代休を与える。

事項	条件	代休
----	----	----

休日勤務 休日に出勤し 4 週間以内に与えて 5 時間以上 する。
勤務した場合

2 平日の時間外勤務が 1 ヶ月につき 7.5 時間以上ある場合、当月に限り、7.5 時間につき 1 日の残業代休を与えることがある。

(日直、宿直)

第 27 条 学園は、業務上の必要があるとき、教職員に日直、宿直を命ずることがある。

(休日)

第 28 条 教職員の休日は、次のとおりとする。

- (1) 日曜日
- (2) 1 週につき日曜日以外の 1 日
- (3) 国民の祝日に関する法律に規定する休日
- (4) 年末・年始(学園が別に定める日)
- (5) その他、学園が定める臨時休業日

2 学園は、業務等の都合により、前項各号の休日を 4 週間を通じて 4 日間の範囲内で変更することがある。

3 第 1 項各号の規定にかかわらず、振替休日として業務の都合により所定の休日を他の日と振替えることがある。

4 振替休日は、原則として所定の休日の前後 4 週間以内にあらかじめ休日を指定のうえ、振替えるものとする。

(年次有給休暇)

第 29 条 教職員は、1 か年(4 月 1 日から翌年 3 月 31 日まで)を通じて 20 日の年次有給休暇を取得することができる。ただし、前年度において勤務すべき日数の 8 割以上勤務しない者はこの限りでない。また、年度途中採用者については、採用月により別表第 1 に定めるとおり取得することができる。

2 年次有給休暇の詳細については、労働基準法(昭和 22 年法律第 49 号)第 39 条の規定による。

3 前各項の規定により 10 日以上年次有給休暇を付与したときは、当該有給休暇日数のうち 5 日については、基準日から 1 年以内に、学園が時季を指定することにより付与するものとする。ただし、5 日のうち、教職員が取得し、または計画的付与が行われたときは、学園は、その日数分について時季を指定して付与しない。

4 学園は、前項の規定により、年次有給休暇の時季を定めるときは、あらかじめその時季について当該教職員の意見を聴くものとする。

第 30 条 教職員は、前条の年次有給休暇のうち未取得日数を次年度に繰り越すことができる。ただし、繰越日数を合算して 40 日を超えることはできない。

第 31 条 教職員は、欠勤を年次有給休暇に振り替えることができる。

(年次有給休暇の時間単位での付与)

第 31 条の 2 労使協定に基づき、年次有給休暇の日数のうち、1 か年について 5 日の範囲内で、労使協定で定めた時間単位で年次有給休暇を取得することができる。

2 年次有給休暇の時間単位での付与に関する詳細は労使協定に定めるものとする。

(代替休暇)

第 31 条の 3 1 ヶ月の時間外勤務時間が 60 時間を超えた教職員に対して、労使協定に基づき代替休暇を与えるものとする。

2 代替休暇は半日または 1 日単位で与える。

3 代替休暇に関する詳細は労使協定に定めるものとする。

(特別休暇)

第 32 条 教職員は、次のいずれかに該当する場合には、有給の特別休暇を取得することができる。休暇日数については、別表第 2 に定めるとおりとする。

(1) 本人が結婚する場合

(2) 本人の子が結婚する場合

(3) 本人の妻が出産する場合

(4) 親族が死亡した場合

(5) 本人の父母、配偶者もしくは子の死亡該当日に墓参または法要を行う場合

(6) 教職員が生理休暇を請求した場合

(7) 天災、事変その他教職員の責に帰すことのできない理由によって災害を受け、または交通遮断のため勤務できない場合

2 前項における用語の定義は、以下のとおりとする。

(1) 結婚 入籍、内縁関係、および結婚に相当する関係として学園に申請し受理されたもの

(2) 配偶者 前号の相手方

(業務上、通勤途上の傷病)

第 33 条 教職員が業務上または通勤途上で負傷し、あるいは疾病にかかった場合は、医師の診断書に基づき、学園が認めた場合に特別休暇を与えることができる。ただし、必要がある時は、学園の指定する医師の診断書の提出を求めることができる。

2 前項の期間の給与等は、別に定める業務上災害における法定外補償給付および法定外通勤災害補償規程による。

(産前産後休暇)

第 34 条 出産予定の教職員は、請求によって出産予定日前 8 週間(多胎妊娠の場合は 14 週間)の有給休暇を取得することができる。

2 実際の出産が予定日より遅れた場合は、この産前休暇を遅れた日数分だけ延長することができる。

3 産後 8 週間を経過しない教職員は就業させない。この期間は、有給とする。ただし、産後 6 週間を経過した教職員が勤務を申し出たときは、当該教職員を医師が支障ないと認めた業務に就かせることがある。

(母性健康管理)

第 34 条の 2 妊娠中および出産後 1 年以内の教職員が健康診査等を受けるために通院する場合、必要時間の遅刻、早退、離席を認める。通院のため出勤不能の場合は、本人の請求により有給休暇の取得を認める。

2 前項の通院時間については、有給とする。

3 妊娠中および出産後 1 年以内の教職員が健康診査等を受け、医師等から指導を受けた場合は、その指導事項を守ることができるよう、勤務時間の変更、勤務の軽減等を認める。

また、休業が必要な場合は、特別休暇の取得を認める。

4 前項の措置のうち、休業中の給与は、「学校法人京都精華大学休職を命じられた教職員に対する給与および休職給付に関する取扱い細則」によるものとする。

(育児休業等)

第 35 条 教職員は請求によって、子の養育のために育児休業、育児短時間勤務、子の看護休暇、育児のための時間外労働および深夜労働の制限等の適用を受けることができる。

2 前項に掲げる制度の適用に関する必要事項については、別に定める「学校法人京都精華大学育児休業等に関する規程」による。

(介護休業等)

第 36 条 教職員は請求によって、家族の看護のために介護休業、介護短時間勤務、介護休暇、介護のための時間外労働および深夜労働の制限等の適用を受けることができる。

2 前項に掲げる制度の適用に関する必要事項については、別に定める「学校法人京都精華大学介護休業等に関する規程」による。

第 5 章 保健・衛生

(健康診断)

第 37 条 教職員は、毎年少なくとも 1 回定期的に健康診断を受けなければならない。

2 学園は、教職員に対して、前項の他に必要に応じて健康診断または予防措置を命ずることができる。

(就業の禁止)

第 38 条 学園は、産業医または専門医が必要と認めたときは、次のいずれかに該当する者を就業させない。ただし、第 1 号に規定する者が伝染予防の措置をした場合は、この限りでない。

- (1) 伝染性の疾病にかかっている者
 - (2) 精神病患者で、就業することが不適當な者
 - (3) 前 2 号以外の疾病で、就業することによって著しく病勢が悪化するおそれのある者
 - (4) 病後、健康回復の十分でない者
 - (5) その他、医師が就業を不適當と認めた者
- (職務の軽減措置)

第 38 条の 2 産業医または衛生管理者の助言により、理事長は、傷病・事故等により職員の担当職務を十分に遂行できないと認めた場合、当該職員の職務を軽減することができる。

第 6 章 災害補償および通勤災害給付

(届出の義務)

第 39 条 教職員が業務上または通勤途上で負傷し、あるいは疾病にかかったときは、速やかに届け出なければならない。

(災害補償)

第 40 条 教職員が、業務上または通勤途上で負傷し、もしくは疾病にかかり、その結果障害を受け、もしくは死亡したときの災害補償および保険給付は、労働者災害補償保険法に定めるところによる。

(法定外補償)

第 41 条 学園は、教職員が労働者災害補償保険法による保険給付を受けることになった場合には、別に定めるところにより、法定外補償給付または法定外給付を行う。

第 7 章 非常事故

(非常事故)

第 42 条 教職員は、災害その他非常事態が発生する危険があることを知ったときは、速やかに学園に通知するとともに臨機の措置をとらなければならない。

2 教職員は、非常災害が発生した場合は、互いに協力して、その被害を阻止しなければならない。

第 8 章 表彰・懲戒

(表彰)

第 43 条 教職員が次の各号の一に該当したときは、表彰する。

- (1) 学園の名誉を特に発揚し、教職員の模範となる行為をしたとき
- (2) 教育・研究・発明において、著しい功績をあげ、学園に貢献したとき

- (3) その他、上記各号に準ずる功績があり、表彰の必要を認めるとき
- 2 表彰は、総務担当常務理事の発議により、常務理事会の議を経て行う。
 - 3 表彰は賞状を授与してこれを行う。賞状には、賞品または賞金を付すことがある。
- (懲戒)

第 44 条 懲戒は、譴責、減給、出勤停止、諭旨解雇、懲戒解雇とする。

(懲戒の事由)

第 45 条 教職員が、次の各号の一に該当した場合、譴責、減給、出勤停止に処するものとする。

- (1) 学園の信用を傷つけ、または不名誉となるような行為を行ったとき
- (2) 職務上知り得た守秘事項をもらしたとき
- (3) 第 3 条第 3 項第 4 号に該当する行為により、相手方に被害を与えたとき
- (4) 過失により学園に損害を与えたとき
- (5) 部下の、懲戒に該当する行為に対し、監督責任があるとき
- (6) その他この規則および諸規程に違反し、または前各号に準ずる不都合な行為があったとき

2 教職員が次の各号の一に該当するときは、諭旨解雇または懲戒解雇に処するものとする。ただし、情状により減給または出勤停止とすることがある。

- (1) 学園の信用を著しく傷つけ、または極めて不名誉となるような行為を行ったとき
- (2) 故意または重大な過失により、学園に重大な損害を与えたとき
- (3) 重要な経歴を偽り採用されたとき、および重大な虚偽の届出・申告を行ったとき
- (4) 第 3 条第 3 項第 4 号に該当する行為により、相手方に重大な被害を与えたとき
- (5) 飲酒運転または酒気帯び運転をし、交通事故を発生させ、重大な被害を及ぼしたとき
- (6) 再三の注意・指導にもかかわらず、職務に対する熱意・誠意がなく、怠慢で業務に支障が及ぶと認められるとき
- (7) 刑罰法規の適用を受け、または刑罰法規の適用を受けることが明らかとなり、学園の信用を害したとき
- (8) 前項の懲戒を受けたにもかかわらず、あるいは再三の注意・指導にもかかわらず改悔または向上の見込みがないとき
- (9) その他この規則および諸規程に違反し、または前各号に準ずる重大な行為があったとき

3 第 3 条第 3 項第 4 号に該当する行為により懲戒を行う場合は、「学校法人京都精華大学ハラスメントに関する懲戒規程」の定めるところによる。

4 懲戒は、懲戒委員会による審議の結果を受け、総務担当常務理事の発議により、常務理事会の議を経て理事長が決定する。

5 懲戒委員会に関する事項は、これを別に定める。

(出勤停止)

第 46 条 前条に定める出勤停止の期間は 3 ヶ月以内とし、出勤停止期間中の賃金は支払わないものとする。

(懲戒の手続き)

第 47 条 懲戒解雇・諭旨解雇に係る手続は、これを別に定める。

(懲戒前自宅待機措置)

第 48 条 教職員の行為が懲戒解雇・諭旨解雇事由に該当しないしそのおそれがある場合、調査または審議決定するまでの間、自宅待機させることがある。

(懲戒不服審査委員会)

第 48 条の 2 懲戒処分を受けた教職員の不服についての審査は、懲戒不服審査委員会が行う。

(損害賠償)

第 49 条 懲戒に該当し、学園に損害を与えた者には、その損害の全部または一部を賠償させることがある。

第 9 章 雑則

(兼職)

第 50 条 教職員が学園に採用された後、学園外の他の業務を兼ねようとするときは、あらかじめ届け出て、理事長の承認を得なければならない。

2 削除

(公益通報者の保護等)

第 51 条 公益通報者の保護等については、「学校法人京都精華大学における公益通報者の保護等に関する規程」の定めるところによる。

(出向)

第 52 条 学園の業務執行上その意義を認めた場合には、学園は、職員の同意を得て、関係諸団体に出向させることがある。

2 事務職員の出向については、「学校法人京都精華大学事務職員出向規程」の定めるところによる。

附 則

1 この規則は、1993 年 10 月 13 日に制定し、1994 年 4 月 1 日より施行する。

2 1997 年 3 月 22 日改定・施行

3 1999 年 3 月 27 日に改定し、1999 年 4 月 1 日より施行する。

4 2001 年 3 月 24 日に改定し、2001 年 4 月 1 日より施行する。

5 2001 年 10 月 6 日に改定し、同日より施行する。

6 2003 年 3 月 29 日改定・施行

7 2005 年 3 月 26 日改定・施行

8 2007 年 3 月 31 日に改定し、2007 年 4 月 1 日より施行する。

- 9 2007年5月26日改定・施行
- 10 2007年9月29日改定・施行
- 11 2007年12月8日改定・施行
- 12 2008年3月29日に改定し、2008年4月1日より施行する。
- 13 2009年3月28日に改定し、2009年4月1日より施行する。
- 14 2010年3月27日に改定し、2010年4月1日より施行する。
- 15 2011年3月26日に改定し、2011年4月1日より施行する。
- 16 2016年3月26日に改定し、2016年4月1日より施行する。
- 17 2017年3月25日に改定し、2017年4月1日から施行する。ただし、第12条に規定する定年年齢について、2027年度までは次の通り段階的に移行するものとする。

年度	定年
2018年度まで	満70歳
2019年度	満70歳、満69歳
2020年度	満69歳
2021年度	満69歳、満68歳
2022年度	満68歳
2023年度	満68歳、満67歳
2024年度	満67歳
2025年度	満67歳、満66歳
2026年度	満66歳
2027年度	満66歳、満65歳

18 2017年9月23日に改定し、同日から施行する。ただし、前項に規定する定年年齢の段階的移行については、2018年4月1日以降に採用された教職員には適用しないものとする。

19 2019年3月23日に改定し、同日から施行する。ただし、第12条の2および第29条第3項ならびに第4項については2019年4月1日から施行する。

20 2019年9月28日に改定し、2020年4月1日から施行する。

21 2019年11月9日に改定し、2020年4月1日から施行する。

別表第1(第29条関係)

年度途中採用月による有給休暇取得可能日数

採用月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
日数	20	18	16	14	13	11	9	7	6	4	2

別表第2(第32条関係)

特別休暇取得日数基準

(1) 本人が結婚する場合…5日以内

(ただし、入籍日、挙式日、および結婚に相当する関係として学園に申請し受理された日のいずれか早い日から1年以内一括して取得のこと。)

(2) 本人の子が結婚する場合…2日以内

(3) 本人の妻が出産する場合…3日以内

(4) 親族が死亡した場合

ア 配偶者…10日以内

イ 血族 ① 父母(1親等の直系尊属)…7日以内

② 子(1親等の直系卑属)…7日以内

③ 祖父母(2親等の直系尊属)…3日以内

④ 孫(2親等の直系卑属)…3日以内

⑤ 兄弟姉妹(2親等の傍系者)…3日以内

⑥ 曾祖父母(3親等の直系尊属)…2日以内

⑦ 伯叔父母(3親等の傍系尊属)…2日以内

⑧ 甥姪(3親等の傍系卑属)…2日以内

ウ 姻族 ① 父母(1親等の直系尊属)…3日以内

② 祖父母(2親等の直系尊属)…3日以内

③ 兄弟姉妹(2親等の傍系者)…2日以内

④ 伯叔父母(3親等の傍系尊属)…1日以内

(ただし、生計を一にする姻族の場合は血族に準ずる)

(5) 本人の父母、配偶者または子の死亡該当日に墓参もしくは法要を行う場合…1日

(ただし、前4号および同5号の場合で、遠隔地に赴く必要のあるときは、実際に要する往復日数を加算することができる。)

(6) 教職員が生理休暇を請求した場合…2日以内

(7) 天災、事変その他教職員の責に帰すことのできない理由によって災害をうけ、または交通遮断のため勤務できない場合…本学の認めた期間

国際文化学部人文学科 履修モデル①
日本で働く外国人労働者に関する課題など、地域の課題解決に取り組むコンサルタントを育成する。

科目区分	1年次		2年次		3年次		4年次		区分別 単位数	
	科目名	単位数	科目名	単位数	科目名	単位数	科目名	単位数		
共通教育科目	導入プログラム	1	フレッシュヤーズ・キャンパス クリエイティブ・ワークショップ	1					2	
	表現科目	コミュニケーションスキル1	1	コミュニケーションスキル1	1	アカデミックスキル3	1		8	
		アカデミックスキル2	1	アカデミックスキル2	1	アカデミックスキル4	1			
		アカデミックスキル1	1	アカデミックスキル1	1					
		アカデミックスキル2	1	アカデミックスキル2	1					
	グローバル科目	グローバルデザインソフトスキル1	1	グローバルデザインソフトスキル1	1					10
		英語1	1	日本語概論	1	現代社会の諸問題	2	ベトナム語	1	
		英語2	1			サステナビリテイと社会	2			
		英語3	1							
	リベラルアーツ科目	自由論	1	人権と教育	1	統計的思考法	2			12
シテイズンシップとダイバーシティ		1	グローバル化と社会	1	行動心理学	2				
創造的思考法		1	データサイエンス入門	1						
情報と倫理		1								
社会実践力育成プログラム	情報科学概論	1								
	国内ショートプログラム	2			大学連携プログラム	2			4	
キャリア科目	キャリア1	1	職業研究	2					4	
			スポーツとビジネス	1						
	日本事情理解	1	言語と心理	1	日本語教育演習1	2			10	
			言語と社会	2	日本語教育演習2	2				
専門演習科目	基礎演習1	2	基礎演習5	2					12	
	基礎演習2	2	基礎演習6	2						
	基礎演習3	2								
	基礎演習4	2								
応用演習科目			応用演習1	2	応用演習5	2			12	
			応用演習2	2	応用演習6	2				
			応用演習3	2						
			応用演習4	2						
卒業研究演習科目										
専門講義・演習・実習科目	国際文化概論1	1	国際文化特講1	2					8	
	国際文化概論2	1								
	国際文化史1	1								
	国際文化史2	1								
	国際文化リテラシー1	1								
	国際文化リテラシー2	1								
専攻基礎科目			現代社会論	2					4	
			社会研究1	1						
			社会研究2	1						
			哲学概論	2	講義演習1	2			12	
学科講義・演習科目										
文学高講義科目									0	
歴史講義科目									0	
社会講義科目			社会学	2	ジェンダー論	2			12	
			社会調査法	2	人間の安全保障	2				
			社会思想史	2	市民社会論	2				
日本文化講義科目									0	
地域研究科目									0	
世界文化科目									0	
年間単位数		37	38	36	13					
合計単位数		124								

国際文化学部人文学科 履修モデル②
 京都の伝統文化とアフリカ、アジアの伝統文化を学び、相互の交流や発展に貢献できる人材を育成する。

科目区分	1年次		2年次		3年次		4年次		区分別 単位数	
	科目名	単位数	科目名	単位数	科目名	単位数	科目名	単位数		
共通教育科目	導入プログラム	フレッシュヤーズ・キャンパス クリエイティブ・ワークショップ	1						2	
	表現科目	コミュニケーションスキル1	1	東洋美術史	2	アカデミックスキル3	1			12
		コミュニケーションスキル2	1			アカデミックスキル4	1			
		アカデミックスキル1	1			工芸概論	2			
		アカデミックスキル2	1							
		デッサン1	1							
	グローバル科目	グローバルデザインソフトスキル1	1							11
		英語1	1	日本文化概論	1	インドネシア語	1	スワヒリ語	1	
		英語2	1	ベトナム語	1	中国語1	1			
		英語3	1	タイ語	1	韓国語1	1			
リベラルアーツ科目	自由論	1	人権と教育	1					8	
	シテイズンシップとダイバーシティ	1	グローバル化と社会	1						
	創造的思考法	1	データサイエンス入門	1						
	情報と倫理	1								
社会実践力育成プログラム	海外ショートプログラム	2	大学連携プログラム	2					4	
	キャリア1	1	キャリア2	1	キャリア3	1			3	
専門演習科目	マイナー科目	和の伝統文化論	1	京都のまちづくり	1				10	
	基礎演習科目	基礎演習1	2	京都の伝統工芸講座1	2					12
		基礎演習2	2	京都の伝統工芸講座2	2					
		基礎演習3	2	京都の習俗	2					
		基礎演習4	2	京都の伝統産業実習	2					
	応用演習科目	応用演習1	2	基礎演習5	2					12
		応用演習2	2	基礎演習6	2					
		応用演習3	2			応用演習5	2			
		応用演習4	2			応用演習6	2			
	卒業研究演習科目									
専門講義・演習・実習科目	国際文化基礎科目	国際文化概論1	1	国際文化特講1	2				8	
		国際文化概論2	1							
		国際文化史1	1							
		国際文化史2	1							
	専攻基礎科目	国際文化リテラシー1	1						4	
		国際文化リテラシー2	1							
	学科学講義・演習科目	日本文化論	2	日本文化論	2				10	
		日本文化研究1	1	日本文化研究1	1					
		日本文化研究2	1	日本文化研究2	1					
		講義演習1	2	講義演習2	2					
文学部講義科目								0		
歴史講義科目								0		
社会講義科目								0		
日本文化講義科目								12		
地域研究科目								0		
世界文化科目								6		
年間単位数		35	40	32	17					
合計単位数				124						

国際文化学部グローバルスタディーズ学科 履修モデル①
 アフリカの食文化の関心から現地の研究調査を通じ、セネガルの現地企業で活躍する人材を育成する。

科目区分	1年次		2年次		3年次		4年次		区分別 単位集計 単位数	
	科目名	単位数	科目名	単位数	科目名	単位数	科目名	単位数		
共通教育科目	導入プログラム	1							2	
	表現科目	フレッシュヤーズ・キャンパス	1							
		クリエイティブ・ワークショップ	1							
		コミュニケーションスキル1	1			アカデミックスキル3	1			10
		コミュニケーションスキル2	1			アカデミックスキル4	1			
	アカデミックスキル1	1			身体文化演習1	1				
	アカデミックスキル2	1			身体文化演習2	1				
	デッサン1	1								
	グラフィックデザインソフトスキル1	1								
	グローバル科目	英語1	1	世界と食	2	現代社会の諸問題	2	スワヒリ語	1	13
英語2		1	サステナビリテイと社会	2						
英語3		1	フランス語1	1						
英語4		1	フランス語2	1						
リベラルアーツ科目	自由論	1	人権と教育	1					8	
	シテイズンシップとダイバーシテイ	1	グローバル化と社会	1						
	創造的思考法	1	データサイエンス入門	1						
	情報と倫理	1								
社会実践力育成プログラム	情報科学概論	1								
			インターンシップ1	2					4	
			インターンシップ2	2						
	キャリア1	1	キャリア2	1	キャリア3	1			3	
			ファイナンス論	1	美術概論	1			10	
			マーケティング論	1	美術史1	1	ビジネスモデル論	2		
							イノベーション論	2		
							美術リテラシー1	2		
専門演習科目	グローバルゼミ	2	基礎演習3	2					12	
	海外短期フィールドワーク	2	基礎演習4	2						
	基礎演習1	2								
	基礎演習2	2								
応用演習科目			応用演習1	2	応用演習3	2			12	
			応用演習2	2	応用演習4	2				
					応用演習5	2				
					応用演習6	2				
卒業研究演習科目										
国際文化基礎科目	国際文化概論1	1							4	
	国際文化概論2	1								
	国際文化史1	1								
	国際文化史2	1								
フィールドワーク科目			フィールドワーク入門	2	海外長期フィールドワーク1	2			18	
			フィールドワーク方法論	2	海外長期フィールドワーク2	2				
			フランス語圏事情理解	1	海外長期フィールドワーク3	2				
			フランス語圏経済理解	1	海外長期フィールドワーク4	2				
					海外長期フィールドワーク5	2				
					海外長期フィールドワーク6	2				
地域研究科目			アフリカ地域研究1	2					4	
					アフリカ地域研究2	2				
グローバル関係科目			グローバル関係概論	2					8	
			国際政治学	2	多国籍企業論	2				
グローバル共生社会科目			比較社会学	2						
					ポストコロナリアル概論	2			4	
グローバル文化科目					国際開発論	2				
学科基礎講義科目									0	
									0	
日本文化科目									2	
									2	
年間単位数		30	38	37	19					
合計単位数				124						

国際文化学部グローバルスタディーズ学科 履修モデル②
地球温暖化等の諸問題に関心があり、学部卒業後大学院進学をめざしており、将来的には国際的な研究機関でアジアでの国際貢献をめざす人材を育成する。

科目区分	1年次		2年次		3年次		4年次		区分別 単位数
	科目名	単位数	科目名	単位数	科目名	単位数	科目名	単位数	
共通教育科目	導入プログラム	フレッシュヤーズ・キャンパス クリエイティブ・ワークショップ	1						2
	表現科目	コミュニケーションスキル1	1			アカデミックスキル3	1		8
		コミュニケーションスキル2	1			アカデミックスキル4	1		
		アカデミックスキル1	1						
		アカデミックスキル2	1						
	グローバル科目	デッサン1	1						8
		グラフィックデザインソフトスキル1	1						
		英語1	1	インドネシア語	1				
		英語2	1	現代社会の諸問題	1				
	リベラルアーツ科目	英語3	1	サステナビリテイと社会	2				16
英語4		1							
自由論		1	人権と教育	1	障害学	2			
シテイズンシップとダイバーシティ		1	グローバル化と社会	1					
創造的思考法		1	データサイエンス入門	1					
情報と倫理		1	統計的思考法	2					
情報科学概論		1	数学的思考法	2					
自然科学概論		2							
大学連携プログラム		2					国内シヨートプログラム	2	
2								4	
キャリア科目	キャリア1	1						2	
	コミュニケーション実践演習	1							
	デザイン概論1	1	デザイン概論1	1	デザイン特講1	2			
	デザイン史1	1	デザイン史1	1	デザイン特講2	2			
	デザインリテラシー1	2	デザインリテラシー1	2					
	デザインリテラシー2	2	デザインリテラシー2	2					
基礎演習科目	グローバルゼミ	2	基礎演習3	2				12	
	海外短期フィールドワーク	2	基礎演習4	2					
	基礎演習1	2							
	基礎演習2	2							
			応用演習1	2	応用演習3	2			
			応用演習2	2	応用演習4	2			
					応用演習5	2			
					応用演習6	2			
卒業研究演習科目								10	
国際文化基礎科目	国際文化概論1	1						4	
	国際文化概論2	1							
	国際文化史1	1							
	国際文化史2	1							
フィールドワーク科目								20	
地域研究科目								0	
グローバル関係科目								2	
グローバル共生社会科目								14	
グローバル文化科目								0	
学科基礎講義科目								0	
日本文化科目								0	
年間単位数		35		40		36		124	
合計単位数							13		

学生の確保の見通し等を記載した書類

目次

(1) 学生の確保の見通し及び申請者としての取組状況	・・・P.2
(2) 人材需要の動向等社会の要請	・・・P.5
資料目次	・・・P.8

(1) 学生の確保の見通し及び申請者としての取組状況

①学生の確保の見通し

ア 定員充足の見込み

国際文化学部の基礎となる人文学部総合人文学科については、収容定員充足率が2019年度時点で0.29と0.7を著しく下回っている。学問の社会的認知度の低さから高校生に人文学の名称や教育内容が浸透しておらず将来像が描きにくいこと、収容定員数1,200名という設定が現在の18歳人口の減少と近接した全国の文系学部の数に対してミスマッチであること、在学中に学びの内容と実社会での就労イメージとのギャップを埋めるキャリア教育の観点が不足していたことによる就職率の低さが定員未充足の主な原因であると考えている。

グローバル化やスマート社会に向けた変化によって複雑かつ高度化した現代社会においては、世界の相関を理解したうえで多様な社会的課題の解決に貢献し、より良い共生社会の実現に寄与できる人材育成の必要性が高まっている。人類社会や文化に関わる複雑な問題に向き合うためには、多様な歴史的、文化的、社会的背景を学び、科学だけでは判断が困難な「より良い社会のあり方」を問い直し考察する能力が求められる。

そこで、これまで人文学部で実施してきた「多様性を認め、問いを立てる批判的思考力」を育成する教育研究をベースにしつつ、本学が教育の3大要素のひとつに位置づける「グローバル」な規模での観点や課題考察力と行動力を有する学生を育成するために、学部名称を国際文化学部に変更する。学科については、グローバル社会を理解するための基礎的、汎用的な知識を学部共通科目として学びつつ、国内のローカルなフィールドを実践の軸とする人文学科と、国際的なフィールドを学びの実践の軸とするグローバルスタディーズ学科の両学科を設置する。定員の適正化のため、人文学科の定員を160名、グローバルスタディーズ学科の定員を90名とし、学部合計250名の定員とすることで現行の人文学部から50名のダウンサイジングを行う。

また、教育研究内容については、他大学の近接した学部学科との差別化を図るため、各学科の研究対象領域に本学独自の特徴を打ち出す。人文学科については、基礎となる人文学部で日本の文学、歴史、社会に関する教育のベースがあること、日本の伝統文化や伝統産業の拠点として発展を続けてきた京都に本学が立地しており、約40年間にわたって京都の伝統産業の現場で学生の実習を行ってきた実績から、「日本・京都」を研究対象のローカル地域として設定する。グローバルスタディーズ学科の研究対象地域においては、他大学の国際領域の学部学科が主要な対象地域として設定している欧米ではなく、著しい経済発展と同時に多民族が混在し多様な文化と社会的な課題を抱えているアフリカ・アジア地域に絞って設定する。

さらに、人文学科では3年次に1クォーター、グローバルスタディーズ学科では1年次に1クォーター、3年次に2クォーターの学外フィールドワークを必修科目化し

ており、主体的に思考し行動する経験と現場での実践の機会を学部専門科目として設けているほか、共通教育科目の中でもインターンシップや学外機関との PBL 科目などから 4 単位を選択必修として位置づけており、教室外の実際の社会現場における実践体験を豊富に積みながら多様な社会課題への意識付けや就労観の涵養をはかり、確実な進路決定に導くことが可能な教育構造となっている。

また、より客観的な定員充足の見込みを担保するため、第三者機関である株式会社さんぼうに対して意識調査を委託した(資料 6)。近畿圏を中心に高校 2 年生を対象に実施した意識調査結果では、国際文化学部人文学科について「関心がある」と回答した生徒が 13.21%、803 名となっている。また、「関心がある」と回答した生徒に受験の意思を質問したところ、「受験したい」と回答した生徒は 4.46%、271 名で、入学定員の 160 名を上回る数字となっている。

同学部グローバルスタディーズ学科についても、「関心がある」と回答した生徒が 11.63%、707 名となっている。また、「関心がある」と回答した生徒に受験の意思を質問したところ、「受験したい」と回答した生徒は 3.57%、217 名で、入学定員の 90 名を上回る数字となっている。

このほか、調査を実施していない他府県の高等学校からの受験生も多数いることが想定されることから、十分な定員充足が見込まれる。

既設学部のうち、ポピュラーカルチャー学部ポピュラーカルチャー学科、芸術学部造形学科においては、いずれも定員超過率が 0.7 倍を下回っている。

ポピュラーカルチャー学部ポピュラーカルチャー学科については、2013 年に新設しファッションと音楽という主にコンテンツ制作を中心とした教育を行ってきたが、制作したコンテンツを社会にどう接続して展開させるかという観点が欠けていたため完成年次の 2016 年から進路決定率が 2 年連続 8 割以下とふるわず、社会的要望に応えられなかったことが定員未充足の主な原因と考えている。そこで、コンテンツ制作技術の向上のみを目指すのではなく、メディアの活用によって新しいビジネスモデルを構想するなど新しい価値を創造する力を養うことで「変化し続ける科学技術と社会が抱える課題の解決と次世代の産業界の発展に『表現』を通して寄与できる人間」を育成するため、国際文化学部設置と同時期の 2021 年度からメディア表現学部メディア表現学科として教育内容と名称とを改めることを構想している。学外のビジネス現場における実践体験を積みながら多様な社会課題への意識づけや就労観を涵養することが可能な教育構造とすることで、確実な進路決定につなげる。

芸術学部においては、2017 年度にそれまでの 3 学科から一学科に統合する改組を行い、定員 240 名として募集を行ってきたところ、入学者は 2017 年度が 109 名、2018 年度が 103 名であったところ、2019 年度は 123 名と改善した。全国の芸術系学部の入学志願者の動向を見ても、過去 3 年間の間に志願者数と入学定員充足率は増加傾

向にあり、将来的にも急激に志願者が減ることはないと考えられることから、2020年度から入学定員を現状の入学者数に即した 112 名に変更する届出を既に済ませている。定員超過率については 2016 年度から 2019 年度までの入学者割合の平均値となるため 0.49 となったが、2020 年度からは安定した入学定員の確保が想定されているため、今後は 1 年ごとに数値が回復していく見込みである。

イ 定員充足の根拠となる客観的なデータの概要

前述の通り、第三者機関である株式会社さんぽうに、近畿圏を中心とした高校を対象に高校 2 年生の意識調査の実施を委託した(資料 6)。調査にあたっては、本学への志願実績がある近畿圏を中心とした高校 64 校に対して実施し、回答 7,126 件を得られた。当該地域は本学の主となる通学地域であり、調査対象および回答件数から、現実性と客観性は担保されている。調査内容は(資料 6)の通りであり、学部学科の名称、開設時期、入学定員、養成する人物像、設置場所を明示している。

調査票の問 8 で、国際文化学部人文学科が設置された場合に受験を希望するかを質問したところ、271 名から「受験を希望する」との回答を得られた。問 9 で、合格した場合の入学希望を質問したところ、「受験を希望する」と回答した対象者のうち 223 名から「入学を希望する」との回答を得られたことから、入学定員の 160 名の確保は十分可能であると判断した。

同学部グローバルスタディーズ学科についても同様に、問 8 で受験を希望するかを質問したところ、217 名から「受験を希望する」との回答を得られた。問 9 で、合格した場合の入学希望を質問したところ、「受験を希望する」と回答した対象者のうち 180 名から「入学を希望する」との回答を得られ、入学定員の 90 名を大きく上回る結果となった。

さらに、日本私立学校振興・共済事業団が実施した調査結果をまとめた「平成 31(2019)年度私立大学・短期大学等入学志願動向」によると、全国の人文科学系学部の志願倍率は、2015 年度の 7.37 倍から 2019 年度は 9.40 倍となり 5 年連続で増加を続けており、充足率は 2015 年度から 2019 年度にかけて 100%台を維持していることから、今後も安定した定員充足が見込まれる学問領域であることが分かる(資料 2)。

ウ 学生納付金の設定の考え方

国際文化学部の学生納付金については、人文学科、グローバルスタディーズ学科ともに、入学金 200,000 円、授業料 1,086,000 円とし、初年度学生納付金の合計金額を 1,286,000 円とした。これは、基礎となる人文学部の現行の学生納付金の合計と同額である。

また、全国の他の 4 年制大学のうち、同系統または近接する学問領域と考えられる学部学科を持つ大学の学生納付金を比較した(資料 3)結果、国際文化学部の 2 学科に適用した学生納付金は極めて平均的な金額であることから、金額の設定水準が妥

当なものであると判断した。

②学生確保に向けた具体的な取組状況

学生確保の取組としては、国際文化学部教育内容に対する認知度を向上させ社会的な理解を得るための重層的な広報活動を、開設前から継続的に実施していくことが必要であるという考えから、学長を中心とした全学的な広報活動体制をとる。

具体的な取組としては、文部科学省の「PR活動について」に従い、2019年9月から、大学ホームページに特設ページを設け、教育内容や特色、学習の流れ等について情報公開を開始しているほか、進学媒体や動画広告の出稿や高校生向けのDM発送等による積極的な周知を行っている。ホームページは今後随時更新を行い、教員紹介や学生生活等具体的な最新情報を随時公開・発信していく。

また、本学の通学圏内にある京都、大阪、滋賀を中心とした関西圏エリアの高等学校を定期的に訪問し、進路指導担当教諭に広報活動を行いながら、当該年度の受験生の進路志望状況等の情報収集を行う。その際、基礎となる学部からの変更点について十分に伝わるよう、訪問する教職員間の認識や情報を統一するよう留意する。

オープンキャンパスの取組としては、例年5～7回実施しており、近年の参加者数の推移は(資料4)、高等学校等との接触者数、出願者数の推移は(資料5)の通りである。国際文化学部については、オープンキャンパス内でも積極的に教育内容紹介や模擬授業等を行い、それぞれの学科における特徴的な学びの内容とその内容からどういった成果が得られるかを高校生がイメージし易く入学先の選択に役立つよう工夫する。

定員超過率が0.7を下回っているポピュラーカルチャー学部ポピュラーカルチャー学科については、先に述べた通り国際文化学部の開設と同時にメディア表現学部として改組を予定しており、国際文化学部と同様に、学長を中心とした全学的な広報活動体制をとる。具体的な取組として、メディア表現学部の特設ページを設け、教育内容や特色、学習の流れ等について情報公開を開始している。今後随時更新を行い、教員紹介や学生生活等具体的な最新情報を随時公開・発信していく。

定員超過率が0.7を下回っている芸術学部造形学科については、芸術、美術系コースを備える高校や芸術領域の連携校を継続的に訪問し、芸術の学びに関心を持つ高校生の実情や進路指導方針などのヒアリングを実施し、本学の教育内容や入試情報を説明し情報交換を行っている。

(2) 人材需要の動向等社会の要請

①人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的(概要)

本学部で養成する人材像を端的に述べると、「アフリカ・アジアの文化、京都を中心とした日本の歴史や文化、そして世界の相関を理解し、現在の社会が抱える多様な課題の解決に貢献し、よりよい共生社会の実現と世界の発展に寄与できる人間」である。

現代ではテクノロジーの進化やグローバル化によって膨大なデータが空間を越えて共有することが容易になり、今後は携帯などの ICT 端末だけでなく家電や車、施設など身の回りのあらゆる機器がインターネットとつながり、モノのデータ化や自動化が世界規模で進展していくことが見込まれている。技術革新やグローバル化は新たなビジネスを生み、国籍を超えて多くの人々の生活をより便利で豊かなものにする一方で、価格競争の激化や産業の空洞化により雇用形態に影響することによる経済格差の助長や、グローバル化によるヒトの移動による文化の消滅や異文化間の衝突といった社会的に深刻な課題も多くはらんでいる。

今後の社会に必要となるのは、自国と世界各国の歴史や文化と変遷、そして現代の相関関係と多様性を理解し、世界中のヒト・モノ・カネが複雑に絡み合うことで起こる経済現象や社会現象に向き合い、課題をより良い形に導くための新しい価値を生み出す創造的な思考力と実行力とを備えた人材である。

上述の人材を養成するために、グローバル化と社会の関係、シティズンシップとダイバーシティ理解、情報テクノロジー等、基礎的かつ普遍的な知識や理解を習得させる全学教育を行う。

人文学部では、文学、歴史、社会、日本文化のうち最も関心が高い1テーマについて研究を行い、3年次前半に長期フィールドワークを必修科目としている。グローバルスタディーズ学科では、国際関係にフォーカスするグローバル関係、国境を越えた共生社会のあり方にフォーカスするグローバル共生社会、アフリカ・アジア文化の3テーマから最も関心が高い1テーマについて研究を行い、1年次前半に短期、3年次前半に長期の海外フィールドワークを必修科目としている。両学科とも、学外へ出て現地でリサーチを行うことで、必然的に全員が机上の学びを「実践」する経験を得、実際の社会課題に主体的に向き合い行動する力を養う。

②上記①が社会的、地域的な人材需要の動向等を踏まえたものであることの客観的な根拠

OECD が近未来のあり方を世界に提案する「Education2030」プロジェクトにおいて、グローバル化や技術革新などにより多様化や複雑化が進む今後の社会においては、新しい価値を創造する力、対立やジレンマを調停する力、責任ある行動をとる力が「変革を起こす力のあるコンピテンシー」として提言されている。その3つの力を発揮させるのは、学習者のエージェンシー（自ら考え、主体的に行動して、責任をもって社会変革を実現していく力）であるとされており、2018年11月26日に中央教育審議会から示された「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」においても、OECDの提言がベースとなった人材像が示されている。

国際文化学部ではこうした社会的な人材需要の動向を踏まえ、基礎となる人文学部で実施してきた多様性を認め批判的に思考する力を育成する教育内容を根幹に置きつ

つ、現代社会の構造や各国の相関について過去から現在について学び、グローバルとローカル双方の観点を養いながら関心の高いテーマについての地域研究を現地で実践することで、多様な社会課題に向き合い、解決に向けて主体的に考え行動することができる力を養うことを教育研究上の目的としている。

さらに、本学部学科で養成する人材像や教育目的と社会的、地域的人材需要とが適合しているか、さらに客観的な指標による確証を得るため、第三者機関である株式会社さんぽうに調査（資料7）を委託した。主に京都や大阪などの近隣地域に所在している企業のうち、過去に本学学生への求人依頼や卒業生採用等の関連性があった企業2,979社を対象に調査協力依頼を行ったところ、381社からの回答が得られた。

国際文化学部人文学科で学んだ学生について、調査票の問6で採用意向について確認したところ、回答者の62.73%にあたる239社から「採用したいと思う」との回答が得られた。また問7で、「採用したいと思う」と回答した企業に対して、同学科で育成する人材について最も魅力的に感じた点について質問したところ、「社会課題解決に対する認識・意識」が38.49%にあたる92名と最も多い結果となった。問8で、問6で「採用したい」と回答した企業に対して、何名ほどの採用意欲があるのかを質問した。結果、「1人」が62.34%、「2人」が19.67%となり、調査協力企業のみで総計353人の採用可能人数が示された。

同学部グローバルスタディーズ学科で学んだ学生について、調査票の問9で採用意向を確認したところ、回答者の58.27%にあたる222社から「採用したいと思う」との回答が得られた。また問10で、採用意向のある企業に対して、同学科で育成する人材について最も魅力的に感じた点について質問したところ、「社会課題解決に対する認識・意識」が30.63%にあたる68名、「半年間の海外留学による実践体験を通じた行動力」が27.48%にあたる61名であった。問11で、問9で「採用したい」と回答した企業に対して、何名ほどの採用意欲があるのかを質問した結果、「1人」が64.41%、「2人」が17.12%となり、調査協力企業のみで総計326人の採用可能人数が示された。

両学科とも入学定員数を大きく上回る採用希望人数を得られた結果から、本学部で育成する人材への需要は十分にあると考える。キャリア支援部門とも連携し、適切な企業・団体に対して、今回の調査で明らかになった企業側が魅力を感じる資質や能力を同学部でどのように育成するのかについて積極的な広報活動を行うことで、さらなる採用枠の獲得が見込まれる。

資料目次

資料番号	ページ番号	資料名
資料 1	p. 9	高校生が進学先検討時に重視する項目
資料 2	p. 10	人文科学系学部志願者・入学者動向
資料 3	p. 10	人文科学系学部学科 初年度納付金額一覧
資料 4	p. 12	オープンキャンパス参加者数推移
資料 5	p. 12	高等学校等との接触者数、出願者数の推移等
資料 6	p. 13	進学需要に関する調査報告書
資料 7	p. 39	人材需要に関する調査報告書

(資料1)

高校生が進学先検討時に重視する項目

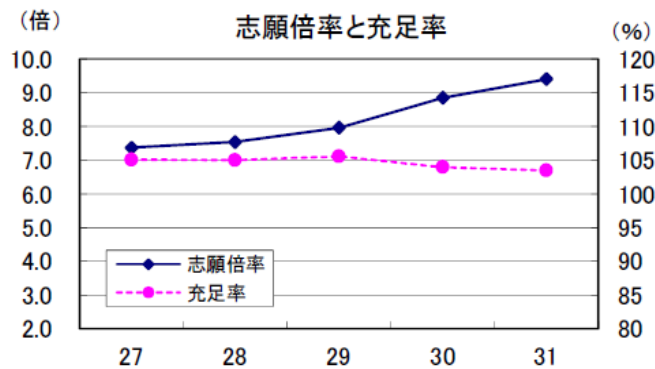
進学先検討時の重視項目（進学者／複数回答）	パーセンテージ(%)
学びたい学部・学科・コースがあること	79.8
校風や雰囲気が良いこと	47.1
就職に有利であること	46.8
自分の興味や可能性が広げられること	46.8
資格取得に有利であること	40.3
自宅から通えること	39.5
将来の選択肢が増えること	36.6
偏差値が自分に合っていること	32.8

(リクルートマーケティングパートナーズ株式会社『進学センサス 2019』)

(資料 2)

人文科学系学部志願者・入学者動向

年度	27	28	29	30	31
学部数	237	240	240	244	244
志願倍率	7.37	7.54	7.96	8.85	9.40
充足率	105.05	104.99	105.56	103.94	103.47



(日本私立学校振興・共済事業団『平成 31 (2019) 年度私立大学・短期大学等入学志願動向』)

(資料 3)

人文科学系学部学科 初年度納付金額一覧

大学名	学部名	学科名	入学初年度 年間納付金額
山梨学院大学	国際リベラルアーツ学部	国際リベラルアーツ学科	1,695,000
早稲田大学	国際教養学部	国際教養学科	1,590,000
法政大学	国際文化学部	国際文化学科	1,580,000
青山学院大学	地球社会共生学部	地球社会共生学科	1,558,000
順天堂大学	国際教養学部	国際教養学科	1,550,000
近畿大学	国際学部	国際学科	1,550,000
法政大学	グローバル教養学部	グローバル教養学科	1,543,000
明治学院大学	国際学部	国際キャリア学科	1,481,000
上智大学	国際教養学部	国際教養学科	1,472,500

立命館アジア太平洋大学	アジア太平洋学部	アジア太平洋学科	1,458,000
京都外国語大学	国際貢献学部	グローバルスタディーズ学科	1,420,000
関西学院大学	国際学部	国際学科	1,412,000
龍谷大学	国際学部	グローバルスタディーズ学科	1,351,000
創価大学	国際教養学部	国際教養学科	1,340,000
拓殖大学	国際学部	国際学科	1,337,000
明治学院大学	国際学部	国際学科	1,316,000
桜美林大学	グローバル・コミュニケーション学群	グローバル・コミュニケーション学類	1,314,000
敬愛大学	国際学部	国際学科	1,310,000
国士舘大学	21世紀アジア学部	21世紀アジア学科	1,297,600
文教大学	国際学部	国際理解学科	1,292,000
京都精華大学	人文学部	総合人文学科	1,286,000
京都精華大学	国際文化学部	人文学科	1,286,000
京都精華大学	国際文化学部	グローバルスタディーズ学科	1,286,000
桃山学院大学	国際教養学部	英語・国際文化学科	1,259,000
上智大学	総合グローバル学部	総合グローバル学科	1,257,800
東洋大学	国際学部	国際地域学科	1,250,000
大阪学院大学	国際学部	国際学科	1,248,000
共愛学園前橋国際大学	国際社会学部	国際社会学科	1,242,000
南山大学	国際教養学部	国際教養学科	1,228,000
大阪経済法科大学	国際学部	国際学科	1,196,000
追手門学院大学	国際教養学部	国際教養学科	1,195,000
同志社大学	グローバル地域文化学部	グローバル地域文化学科	1,188,000
武蔵野大学	グローバル学部	グローバルビジネス学科	1,178,000
追手門学院大学	地域創造学部	地域創造学科	1,165,000
龍谷大学	国際学部	国際文化学科	1,036,000
九州産業大学	国際文化学部	国際文化学科	1,020,000

(資料 4)

オープンキャンパス参加者数推移(全学)

オープンキャンパス 実施月	2016 年度 参加者数 (人)	2017 年度 参加者数(人)	2018 年度 参加者数(人)	2019 年度 参加者数(人)
4 月		574	375	575
5 月	466			
6 月	433	488	513	570
7 月	1,071	1,246	720	1,590
8 月			459	
9 月	252	242		689
10 月			244	
12 月	248	202		
2 月		176	327	264
3 月		282	333	(中止)
合計参加者数(人)	2,470	3,210	2,971	3,680

(資料 5)

高等学校等との接触者数、出願者数の推移等(全学)

	2015 年度	2016 年度	2017 年度	2018 年度	2019 年度
接触高校数	255 校	523 校	287 校	500 校	534 校
メディア(新聞・ 雑誌・TV・ウェブ) 掲載数	160 件	199 件	468 件	565 件	529 件
接触者数	18,780 人	17,175 人	20,773 人	24,478 人	22,775 人
出願者数	1,860 人	1,604 人	1,929 人	2,919 人	4,042 人

京都精華大学
国際文化学部 人文学科
国際文化学部 グローバルスタディーズ学科
メディア表現学部 メディア表現学科
進学需要に関する調査

結果報告書

2020年1月

株式会社さんぽう



目次

1. 進学需要調査	p.15-
1.1. 調査概要	p.15
1.2. 集計結果	p.17
1.3. 進学需要調査結果のまとめ.....	p.31
2. 添付資料	p.32

1. 進学需要調査

設置計画に係る高校生アンケート調査

1.1. 調査概要

1.1.1. 調査目的

学校法人京都精華大学が2021年度に設置を構想中の「京都精華大学 国際文化学部 人文学科」「京都精華大学 国際文化学部 グローバルスタディーズ学科」「京都精華大学 メディア表現学部 メディア表現学科」(以下「当該設置予定学科群」)に関して、高校生の進路、進学先の教育内容等に関する意向や学生確保の見込みを把握すること。

1.1.2. 調査対象

当該設置予定学科群の設置予定地が京都府であることから、京都府内への進学者が多い近畿圏を中心に、北陸地区(一部関東地区)を含めた高等学校、高等専修学校に在籍する現高校2年生(2021年3月卒業予定者)を対象とし、次により依頼した。

① 高校への郵送もしくは持参による依頼

上記地域64校にアンケート用紙を郵送もしくは持参し実施をお願いした。結果、56校から調査実施にご協力いただいた。実施いただいた高校の県別内訳は次の通りである。

茨城県	1校	奈良県	2校
京都府	13校	富山県	1校
滋賀県	7校	兵庫県	4校
大阪府	27校	和歌山県	1校

1.1.3. 調査内容

調査の設問については、基礎情報に関する項目から、進学への意向、及び当該設置予定学科群への入学意向を問う流れとし、設問の表現は、正確な需要を把握できるように配慮した。設問数は全 10 問とした。

設問 1～3	回答者の基礎情報
設問 4～5	希望進路・分野
設問 6～10	当該大学及び当該設置予定学科群に関する事項

1.1.4. 調査時期

2019 年 9 月 19 日～11 月 25 日

1.1.5. 調査方法

調査方法として①を主としつつ、②を併せて行った。

① 高校への郵送による依頼

アンケート実施に了承をいただいた高校に、アンケート調査用紙を郵送し、HR 等の時間等を利用していただき、教職員から調査対象者（現高校 2 年生）にアンケート用紙及び添付資料を配布、その場で回答、その後、調査用紙をまとめて返送していただいた。

② 高校への持参による依頼

高校訪問時にアンケート回答を依頼し、了承を得た生徒に対して HR 等の時間等を利用していただき、教職員から調査対象者（現高校 2 年生）にアンケート用紙及び添付資料を配布、その場で回答、その後、調査用紙をまとめて返送していただいた。

いずれの場合も、調査実施に際して、当該設置予定学科群に関する設置計画の内容を理解していただくため、リーフレットを添付した。

1.1.6. 回収件数

有効回答数 7,126 件

1.2. 集計結果

<回答者の基礎情報>

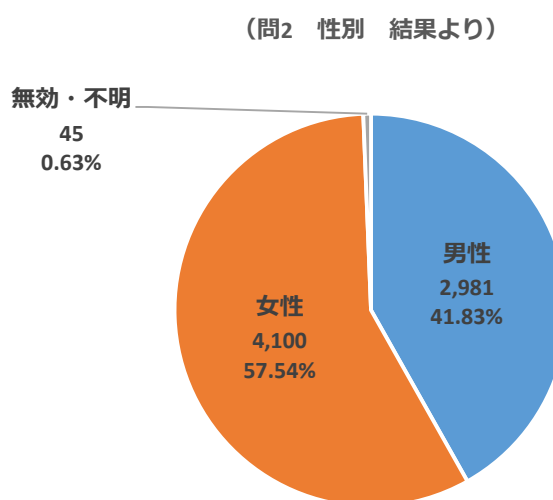
以下、アンケート集計結果を記載する。

問1 所属高等学校名称

⇒ (別表1)

問2 性別

No.	項目名	数(人)	率
1	男性	2,981	41.83%
2	女性	4,100	57.54%
	無効・不明	45	0.63%
集計		7,126	100.00%



問3 居住地

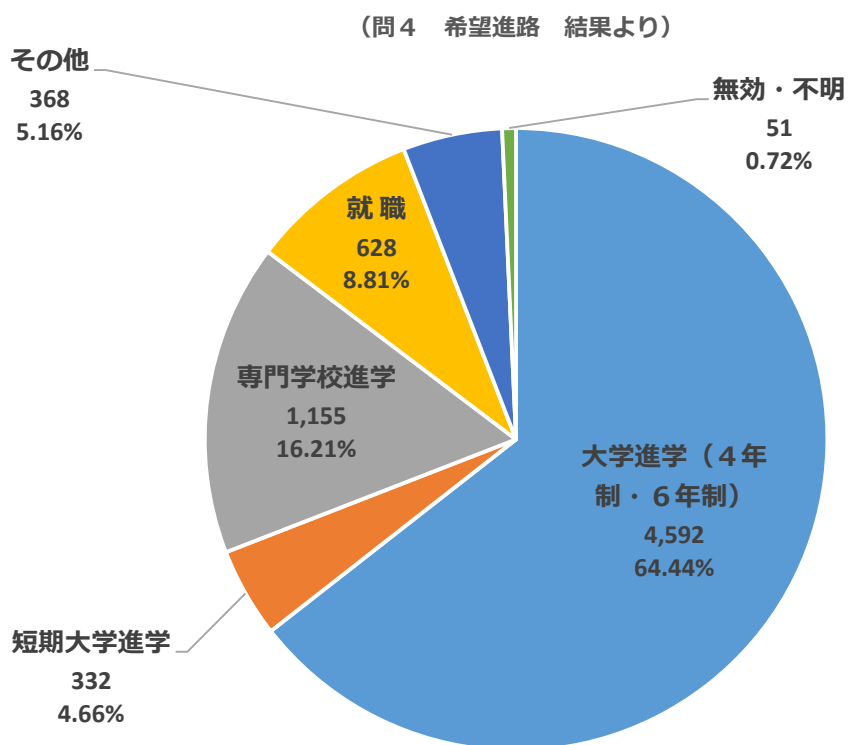
No.	項目名	数(人)	率
1	滋賀県	997	13.99%
2	京都府	1,774	24.89%
3	大阪府	2,973	41.72%
4	兵庫県	474	6.65%
5	奈良県	176	2.47%
6	和歌山県	205	2.88%
7	その他	487	6.83%
	無効・不明	40	0.56%
集計		7,126	100.00%

<希望進路・分野>

問4 希望進路

高等学校卒業後の進路について質問をしたところ、回答者数7,126人の85.31%にあたる6,079人が「大学進学（4年制・6年制）」、「短期大学進学」、「専門学校進学」を希望しており、そのうち「大学進学（4年制・6年制）」への進学を希望している者は、全回答者数の64.44%にあたる4,592人と最も高い数値を示していることから、大学（4年制・6年制）への進学意向の高さをうかがうことができる。

No.	項目名	数(人)	率
1	大学進学（4年制・6年制）	4,592	64.44%
2	短期大学進学	332	4.66%
3	専門学校進学	1,155	16.21%
4	就職	628	8.81%
5	その他	368	5.16%
	無効・不明	51	0.72%
集計		7,126	100.00%

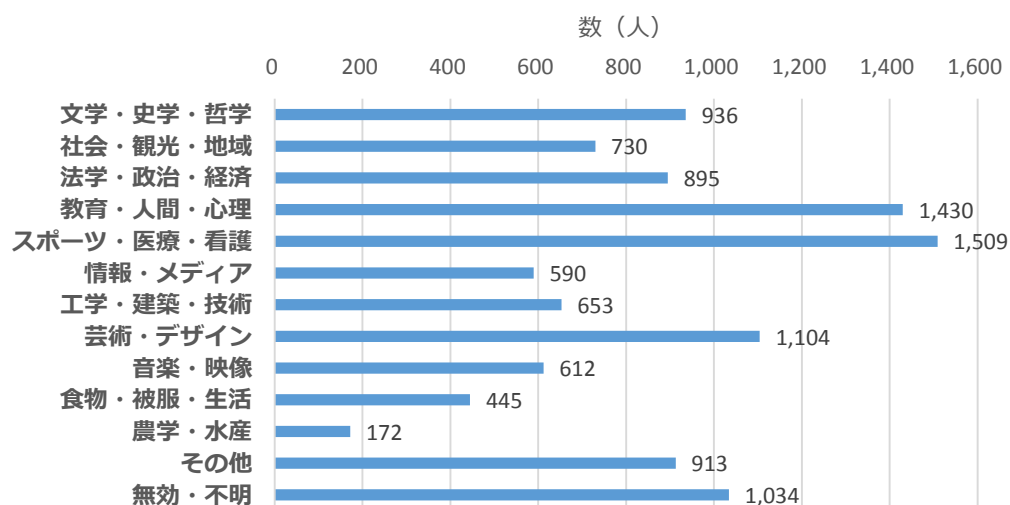


問5 希望分野

問4で高等学校卒業後に進学を希望すると回答した6,079人に対し、どの分野を希望するかについて、2つまでの選択方式にて質問したところ、回答者数6,079人のうち、当該設置予定学科群の分野として主に該当すると考えられる「文学・歴史・哲学」「社会・観光・地域」「情報・メディア」「芸術・デザイン」「音楽・映像」を選択したのは、合計3,972件/65.34%となっている。

No.	項目名	数(件)	率(回答件数/回答者数)
1	文学・史学・哲学	936	15.40%
2	社会・観光・地域	730	12.01%
3	法学・政治・経済	895	14.72%
4	教育・人間・心理	1,430	23.52%
5	スポーツ・医療・看護	1,509	24.82%
6	情報・メディア	590	9.71%
7	工学・建築・技術	653	10.74%
8	芸術・デザイン	1,104	18.16%
9	音楽・映像	612	10.07%
10	食物・被服・生活	445	7.32%
11	農学・水産	172	2.83%
12	その他	913	15.02%
	無効・不明	1,034	17.01%

(問5 希望分野 結果より)



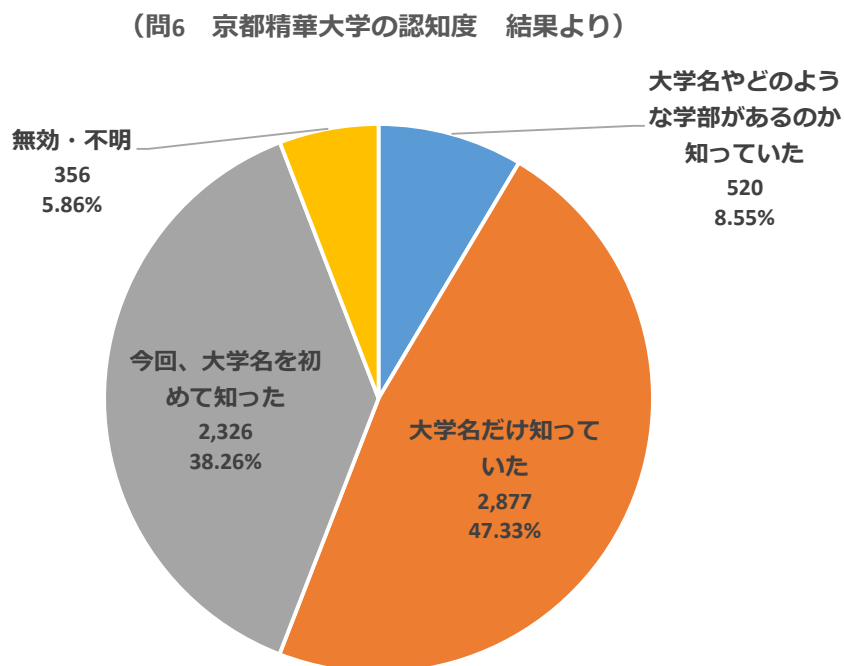
<当該大学及び当該設置予定学科群に関する事項>

問6 京都精華大学の認知度

問4で高等学校卒業後に進学を希望すると回答した6,079人に対し、アンケート配布前の京都精華大学の認知度について質問したところ、「大学名やどのような学部があるのか知っていた」と回答した者は、520人/8.55%となった。

また、「大学名だけ知っていた」と回答した者は、2,877人/47.33%となっており、「大学名やどのような学部があるのか知っていた」と回答した者と合わせると3,397人/55.88%となった。

No.	項目名	数(人)	率
1	大学名やどのような学部があるのか知っていた	520	8.55%
2	大学名だけ知っていた	2,877	47.33%
3	今回、大学名を初めて知った	2,326	38.26%
	無効・不明	356	5.86%
集計		6,079	100.00%



問7 設置予定学科への興味：(1)国際文化学部 人文学科

問4で高等学校卒業後に進学を希望すると回答した6,079人に対し、計画中の国際文化学部人文学科への興味について質問したところ、「興味がある」と回答した者は、803人/13.21%となった。さらに、その803人に対し、専攻分野への興味を質問したところ、「文学専攻」が382人/47.57%、ついで、「歴史専攻」が229人/28.52%となった。

(1-A) 国際文化学部 人文学科への興味

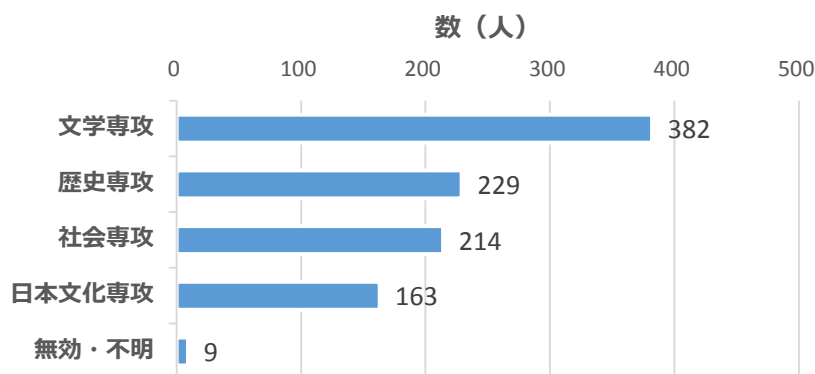
No.	項目名	数(人)	率
1	興味がある	803	13.21%
2	興味がない	4,848	79.75%
	無効・不明	428	7.04%
集計		6,079	100.00%

(1-B) 国際文化学部 人文学科の専攻分野への興味

※上記(1-A)の設問の回答が1だった者のみ対象

No.	項目名	数(人)	率
1	文学専攻	382	47.57%
2	歴史専攻	229	28.52%
3	社会専攻	214	26.65%
4	日本文化専攻	163	20.30%
	無効・不明	9	1.12%

問7 設置予定学科への興味：(1)国際文化学部 人文学科
(1-B) 国際文化学部 人文学科の専攻分野への興味



問7 設置予定学科への興味：(2)国際文化学部 グローバルスタディーズ学科

問4で高等学校卒業後に進学を希望すると回答した6,079人に対し、計画中の国際文化学部グローバルスタディーズ学科への興味について質問したところ、「興味がある」と回答した者は、707人/11.63%となった。さらに、その707人に対し、専攻分野への興味を質問したところ、「グローバル関係専攻」が476人/67.32%、ついで、「グローバル共生社会専攻」が199人/28.15%となった。

(2-A) 国際文化学部 グローバルスタディーズ学科への興味

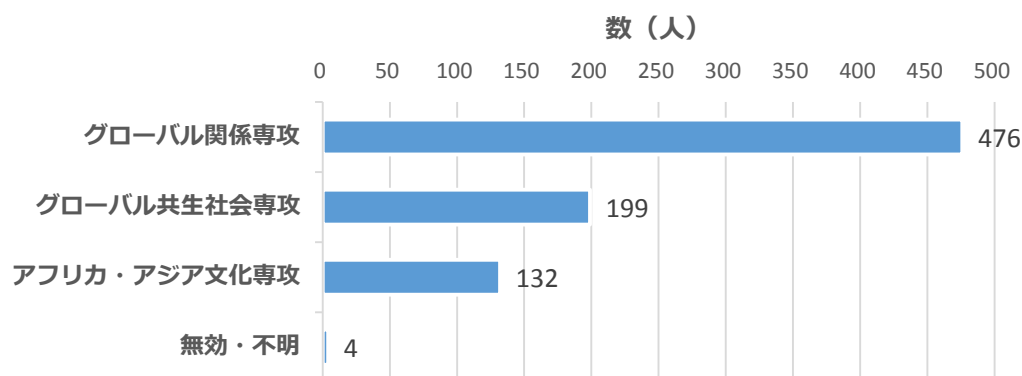
No.	項目名	数(人)	率
1	興味がある	707	11.63%
2	興味がない	4,852	79.82%
	無効・不明	520	8.55%
集計		6,079	100.00%

(2-B) 国際文化学部 グローバルスタディーズ学科の専攻分野への興味

※上記(2-A)の設問の回答が1だった者のみ対象

No.	項目名	数(人)	率
1	グローバル関係専攻	476	67.33%
2	グローバル共生社会専攻	199	28.15%
3	アフリカ・アジア文化専攻	132	18.67%
	無効・不明	4	0.57%

問7 設置予定学科への興味：(2)国際文化学部 グローバルスタディーズ学科
(2-B) 国際文化学部 グローバルスタディーズ学科の専攻分野への興味



問7 設置予定学科への興味：(3)メディア表現学部 メディア表現学科

問4で高等学校卒業後に進学を希望すると回答した6,079人に対し、計画中のメディア表現学部メディア表現学科への興味について質問したところ、「興味がある」と回答した者は、1,060人/17.44%となった。さらに、その1,060人に対し、専攻分野への興味を質問したところ、「イメージ表現専攻」が473人/44.62%、ついで、「音楽表現専攻」が450人/42.45%となった。

(3-A) メディア表現学部 メディア表現学科への興味

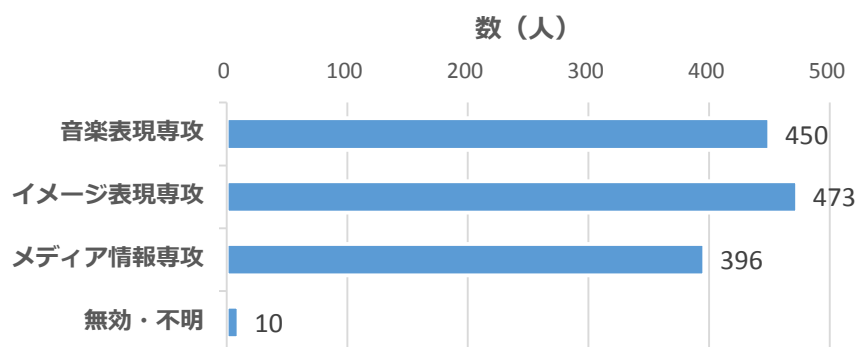
No.	項目名	数(人)	率
1	興味がある	1,060	17.44%
2	興味がない	4,508	74.16%
	無効・不明	511	8.41%
集計		6,079	100.00%

(3-B) メディア表現学部 メディア表現学科の専攻分野への興味

※上記(3-A)の設問の回答が1だった者のみ対象

No.	項目名	数(人)	率
1	音楽表現専攻	450	42.45%
2	イメージ表現専攻	473	44.62%
3	メディア情報専攻	396	37.36%
	無効・不明	10	0.94%

問7 設置予定学科への興味：(3)メディア表現学部 メディア表現学科
(3-B) メディア表現学部 メディア表現学科の専攻分野への興味



問8 受験希望：(1)国際文化学部 人文学科

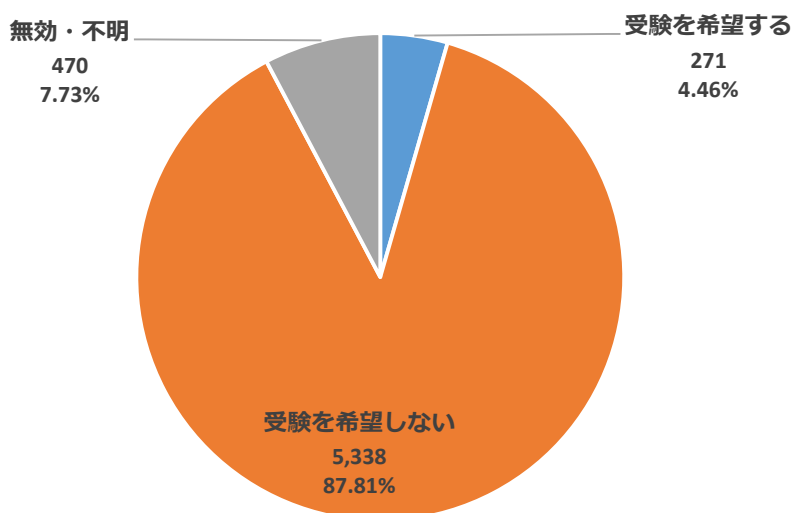
問4で高等学校卒業後に進学を希望すると回答した6,079人に対し、計画中の国際文化学部人文学科の受験希望について質問したところ、「受験を希望する」と回答した者は、271人/4.46%となった。これは、当該設置予定学科群の予定入学定員数の160名を超える回答者数となっている。

当該結果を踏まえると、広報活動の積極的推進を図ることなどにより、入学定員を充足することは十分に可能であると考えられる。

(1) 国際文化学部 人文学科

No.	項目名	数(人)	率
1	受験を希望する	271	4.46%
2	受験を希望しない	5,338	87.81%
	無効・不明	470	7.73%
集計		6,079	100.00%

(問8 受験希望：(1)国際文化学部 人文学科 結果より)



問8 受験希望：(2)国際文化学部 グローバルスタディーズ学科

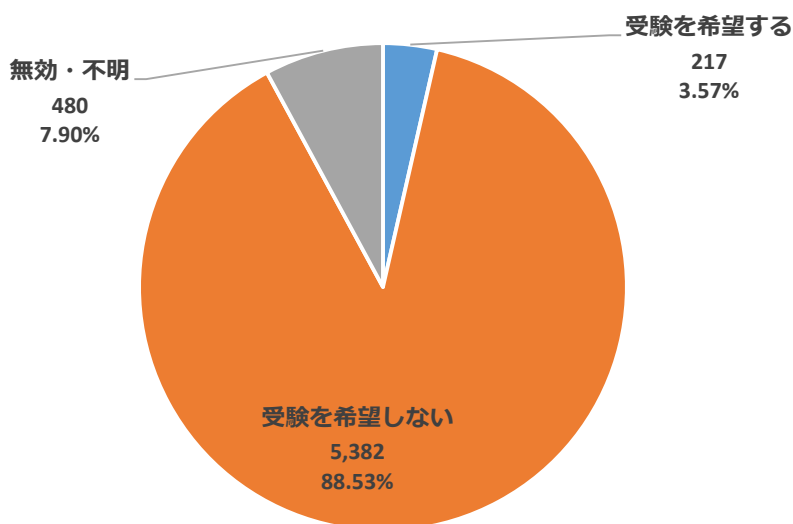
問4で高等学校卒業後に進学を希望すると回答した6,079人に対し、計画中の国際文化学部グローバルスタディーズ学科の受験希望について質問したところ、「受験を希望する」と回答した者は、217人/3.57%となった。これは、当該設置予定学科群の予定入学定員数の90名を超える回答者数となっている。

当該結果を踏まえると、広報活動の積極的推進を図ることなどにより、入学定員を充足することは十分に可能であると考えられる。

(2) 国際文化学部 グローバルスタディーズ学科

No.	項目名	数(人)	率
1	受験を希望する	217	3.57%
2	受験を希望しない	5,382	88.53%
	無効・不明	480	7.90%
集計		6,079	100.00%

(問8 受験希望：(2)国際文化学部 グローバルスタディーズ学科 結果より)



問8 受験希望：(3)メディア表現学部 メディア表現学科

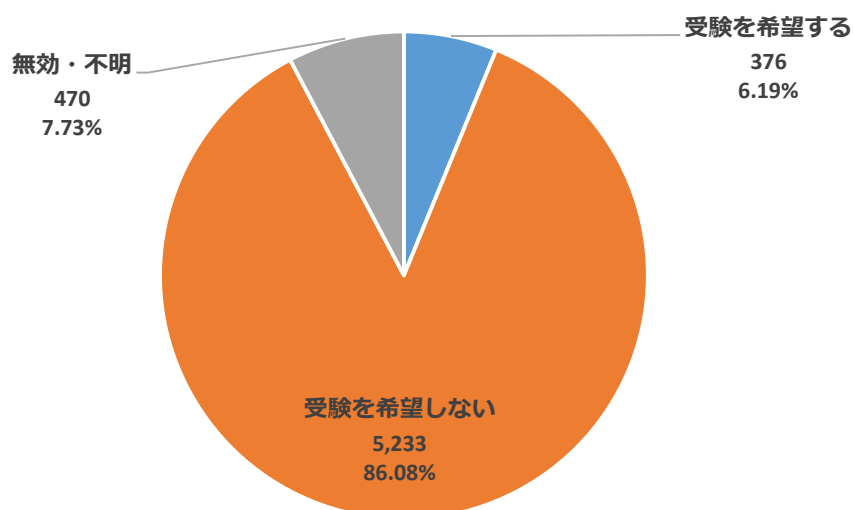
問4で高等学校卒業後に進学を希望すると回答した6,079人に対し、計画中の(3)メディア表現学部メディア表現学科の受験希望について質問したところ、「受験を希望する」と回答した者は、376人/6.19%となった。これは、当該設置予定学科群の予定入学定員数の168名を超える回答者数となっている。

当該結果を踏まえると、広報活動の積極的推進を図ることなどにより、入学定員を充足することは十分に可能であると考えられる。

(3) メディア表現学部 メディア表現学科

No.	項目名	数(人)	率
1	受験を希望する	376	6.19%
2	受験を希望しない	5,233	86.08%
	無効・不明	470	7.73%
集計		6,079	100.00%

(問8 受験希望：(3)メディア表現学部 メディア表現学科 結果より)



問9 入学希望：(1)国際文化学部 人文学科

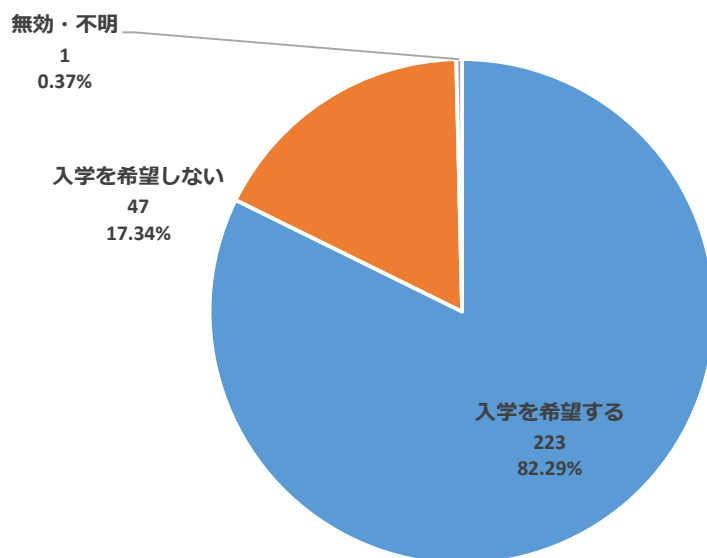
問8で国際文化学部人文学科に受験を希望すると回答をした271人に対し、合格した場合の入学希望について質問したところ、「入学を希望する」と回答した者は、223人/82.29%となった。これは、当該設置予定学科群の予定入学定員数の160名を超える回答者数となっている。

当該結果を踏まえると、広報活動の積極的推進を図ることなどにより、入学定員を充足することは十分に可能であると考えられる。

(1) 国際文化学部 人文学科

No.	項目名	数(人)	率
1	入学を希望する	223	82.29%
2	入学を希望しない	47	17.34%
	無効・不明	1	0.37%
集計		271	100.00%

(問9 入学希望：(1)国際文化学部 人文学科 結果より)



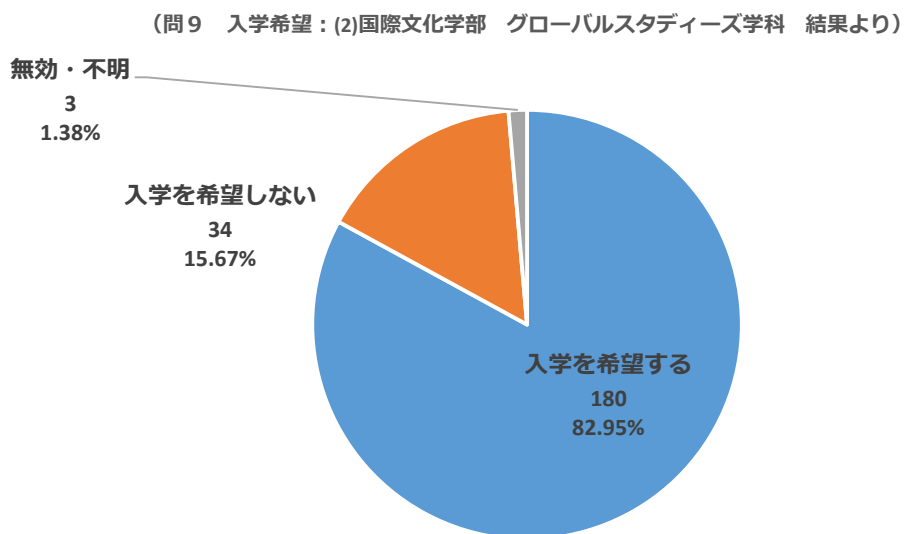
問9 入学希望：(2)国際文化学部 グローバルスタディーズ学科

問8で国際文化学部グローバルスタディーズ学科に受験を希望すると回答をした217人に対し、合格した場合の入学希望について質問したところ、「入学を希望する」と回答した者は、180人/82.94%となった。これは、当該設置予定学科群の予定入学定員数の90名を超える回答者数となっている。

当該結果を踏まえると、広報活動の積極的推進を図ることなどにより、入学定員を充足することは十分に可能であると考えられる。

(2) 国際文化学部 グローバルスタディーズ学科

No.	項目名	数(人)	率
1	入学を希望する	180	82.95%
2	入学を希望しない	34	15.67%
	無効・不明	3	1.38%
集計		217	100.00%



問9 入学希望：(3)メディア表現学部 メディア表現学科

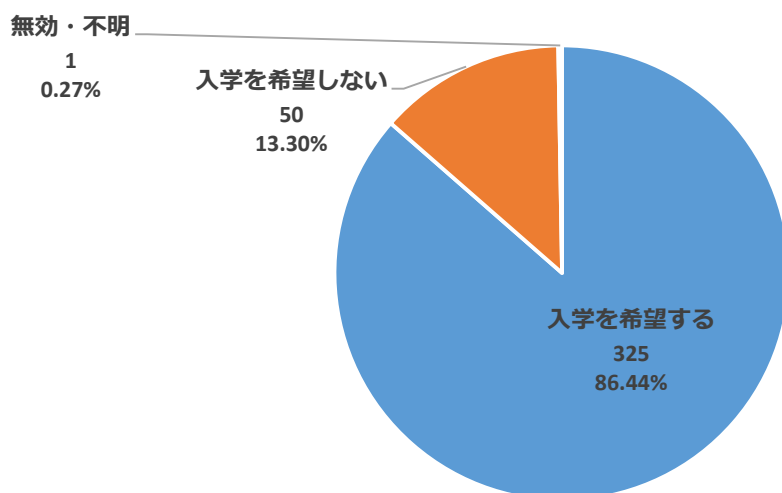
問8でメディア表現学部メディア表現学科に受験を希望すると回答をした376人に対し、合格した場合の入学希望について質問したところ、「入学を希望する」と回答した者は、325人/86.44%となった。これは、当該設置予定学科群の予定入学定員数の168名を超える回答者数となっている。

当該結果を踏まえると、広報活動の積極的推進を図ることなどにより、入学定員を充足することは十分に可能であると考えられる。

(3) メディア表現学部 メディア表現学科

No.	項目名	数(人)	率
1	入学を希望する	325	86.44%
2	入学を希望しない	50	13.30%
	無効・不明	1	0.26%
集計		376	100.00%

(問9 入学希望：(3)メディア表現学部 メディア表現学科 結果より)

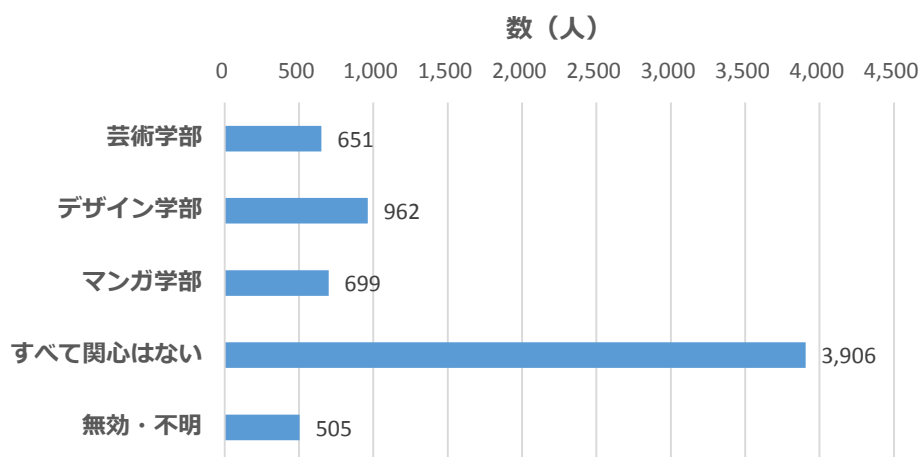


問 10 設置予定学科への関心事由

問 4 で高等学校卒業後に進学を希望すると回答した 6,079 人に対し、設置している他の学部で関心のある学部について質問したところ、「デザイン学部」と回答した者は、962 人/15.82%となり、つづいて、「マンガ学部」と回答した者が 699 人/11.50%となっている。

No.	項目名	数(人)	率
1	芸術学部	651	10.71%
2	デザイン学部	962	15.82%
3	マンガ学部	699	11.50%
4	すべて関心はない	3,906	64.25%
	無効・不明	505	8.31%

(問10 設置予定学科への関心事由 結果より)



1.3. 進学需要調査結果のまとめ

進学需要調査の結果、アンケート回答者数 7,126 人中、当該設置予定学科それぞれの予定入学定員数名を超える進学意向が確認された。特に受験可能性が高い、当該設置予定学科群の設置予定地の京都府や近隣府県の高校 2 年生に対するアンケートでの需要調査レベルでみても、当該設置予定学科群の学生確保の見通しは立っていると言ったことができるものと考えられる。

2. 添付資料

- 2.1. 高等学校別回答者数一覧
- 2.2. 設置計画に係る高校生アンケート調査票

2.1. 高等学校別回答者数一覧

1 学生の確保の見通し等を記載した書類

2 出典

株式会社さんぽう

3 説明

「京都精華大学国際文化学部人文学科 国際文化学部グローバルスタディーズ学科
メディア表現学部メディア表現学科 進学需要に関する調査」のうち、以下のページ
については回答元への掲載許諾の確認が困難であるため、公開にあたり該当ページを
削除した。

アンケート回答高校学校一覧 34 ページ～35 ページ

アンケート回答企業・機関一覧 60 ページ～70 ページ

2.2 設置計画に係る高校生アンケート調査票

2021年度の学部の新設計画に関するアンケート調査（高校2年生対象）

このアンケート調査は、京都精華大学が設置を計画する「国際文化学部 人文学科」、「国際文化学部 グローバルスタディーズ学科」、「メディア表現学部 メディア表現学科」（学部学科名称は全て仮称、以下同）の計画に関する基礎資料とするためのものです。京都精華大学では、このアンケート調査を通して、2021年に大学進学時期を迎える現・高校2年生の皆さんからご意見をお聞きし、計画内容に反映したいと考えています。

なお、このアンケートの結果は、統計資料としてのみ用い、個別の回答内容について公開することはありません。以下の質問に、別紙のリーフレットをご覧の上お答えくださいますよう、ご協力お願いいたします。

<回答欄>

問1 あなたの、所属の高校名について教えてください。（回答欄に記入）

高校

問2 あなたの、性別について教えてください。（一つだけ選んで、回答欄に番号を記入）……………

1. 男性 2. 女性

--

問3 あなたの、居住の都道府県について教えてください。（一つだけ選んで、回答欄に番号を記入）……………

1. 滋賀県 2. 京都府 3. 大阪府
4. 兵庫県 5. 奈良県 6. 和歌山県 7. その他

--

問4 あなたは、高校卒業後、どのような進路をお考えですか。（一つだけ選んで、回答欄に番号を記入）……………

1. 大学進学（4年制・6年制） 4. 就職
2. 短期大学進学 5. その他
3. 専門学校進学

--

問4で4、5を選択した方は、これでアンケートは終了です。ご協力ありがとうございました。

問5 **問4で1、2、3のいずれかを選択した方におたずねします。**

あなたが、高校卒業後に進学をする場合、どの分野を希望されますか。（最大2つまで選んで、回答欄に番号を記入）……………

1. 文学・歴史・哲学 6. 情報・メディア 11. 農学・水産
2. 社会・観光・地域 7. 工学・建築・技術 12. その他
3. 法・政治・経済 8. 芸術・デザイン
4. 教育・人間・心理 9. 音楽・映像
5. スポーツ・医療・看護 10. 食物・被服・生活

<裏面に続きます>

以下の質問には、別紙のリーフレットをご覧の上お答えください。

問6 あなたは、この調査票が配られる前に「京都精華大学」をどの程度ご存知でしたか？

(一つだけ選んで、回答欄に番号を記入)

- 1. 大学名やどのような学部があるのか知っていた
- 2. 大学名だけ知っていた
- 3. 今回、大学名を初めて知った

問7 あなたは、京都精華大学で計画中の3つの学科について興味がありますか？各学科についてお答えください。

(1)～(3)各設問Aのいずれかの番号を○で囲み、「1. 興味がある」を選択された方は、設問Bについてもご回答ください。

(1) 国際文化学部 人文学科

(1-A) 国際文化学部 人文学科への興味 1. 興味がある 2. 興味はない

(1-B) (1A)で「1. 興味がある」と選択した方は、どの専攻分野に興味がありますか？(当てはまるすべての番号を○で囲む)

- 1. 文学専攻
- 2. 歴史専攻
- 3. 社会専攻
- 4. 日本文化専攻

(2) 国際文化学部 グローバルスタディーズ学科

(2-A) 国際文化学部 グローバルスタディーズ学科への興味 1. 興味がある 2. 興味はない

(2-B) (2A)で「1. 興味がある」と選択した方は、どの専攻分野に興味がありますか？(当てはまるすべての番号を○で囲む)

- 1. グローバル関係専攻
- 2. グローバル共生社会専攻
- 3. アフリカ・アジア文化専攻

(3) メディア表現学部 メディア表現学科

(3-A) メディア表現学部 メディア表現学科への興味 1. 興味がある 2. 興味はない

(3-B) (3A)で「1. 興味がある」と選択した方は、どの専攻分野に興味がありますか？(当てはまるすべての番号を○で囲む)

- 1. 音楽表現専攻
- 2. イメージ表現専攻
- 3. メディア情報専攻

問8 あなたは、京都精華大学で計画中の以下の学科が設置された場合に受験を希望しますか？(右の選択肢を選択して番号を○で囲む)

(1) 国際文化学部 人文学科 1. 受験を希望する 2. 受験を希望しない

(2) 国際文化学部 グローバルスタディーズ学科 1. 受験を希望する 2. 受験を希望しない

(3) メディア表現学部 メディア表現学科 1. 受験を希望する 2. 受験を希望しない

問9 あなたは、京都精華大学で計画中の以下の学科に合格した場合に入学を希望しますか？(右の選択肢を選択して番号を○で囲む)

(1) 国際文化学部 人文学科 1. 入学を希望する 2. 入学を希望しない

(2) 国際文化学部 グローバルスタディーズ学科 1. 入学を希望する 2. 入学を希望しない

(3) メディア表現学部 メディア表現学科 1. 入学を希望する 2. 入学を希望しない

問10 京都精華大学が設置している他の学部で関心をお持ちの学部はありますか？(当てはまるすべての番号を○で囲む)

- 1. 芸術学部
- 2. デザイン学部
- 3. マンガ学部
- 4. すべて関心はない

以上でアンケートは終了です。ご協力ありがとうございました。

京都精華大学
国際文化学部 人文学科
国際文化学部 グローバルスタディーズ学科
メディア表現学部 メディア表現学科
人材需要に関する調査

結果報告書

2020年1月

株式会社さんぽう



目次

1. 人材需要の見通し調査.....	p. 41
1.1. 調査概要	p. 41
1.2. 集計結果	p. 43
1.3. 人材需要調査結果のまとめ.....	p. 57
2. 添付資料	p. 58

1. 人材需要の見通し調査

設置計画に係る各企業・機関アンケート調査

1.1. 調査概要

1.1.1. 調査目的

学校法人京都精華大学が2021年度に設置を構想中の「京都精華大学 国際文化学部 人文学科」「京都精華大学 国際文化学部 グローバルスタディーズ学科」「京都精華大学 メディア表現学部 メディア表現学科」(以下「当該設置予定学科群」)に関して、卒業生の主な進路となる各企業・機関における採用に関する意向を把握すること。

1.1.2. 調査対象

当該設置予定学科群の設置予定地が京都府であることから、京都府をはじめとする近畿圏及びその近隣県を中心に計2,979か所の企業及び機関を対象とした。

1.1.3. 調査内容

調査の設問については、基礎情報に関する項目から、人材需要全般に関する項目、及び当該設置予定学科群に関する事項を問う流れとし、設問の表現は、正確な人材需要を把握できるよう配慮した。設問数は全14問とした。

問1～4	回答者の基礎情報
問5	人材需要全般に関する事項
問6～14	当該設置予定学科群に関する事項

1.1.4. 調査時期

2019年9月19日～11月25日

1.1.5. 調査方法

調査対象先の人事・採用担当者あてに、依頼状・アンケート調査用紙・返送用封筒を送付した。ご協力いただける場合、回答済みのアンケート調査用紙をご返送いただいた。

なお、調査実施に際して、当該設置予定学科群に関する設置計画の内容を理解していただくため、設置計画の概要を記載した書類を添付した。

1.1.6. 回収件数

有効回答数 381 件

依頼企業・機関数 2,979 件

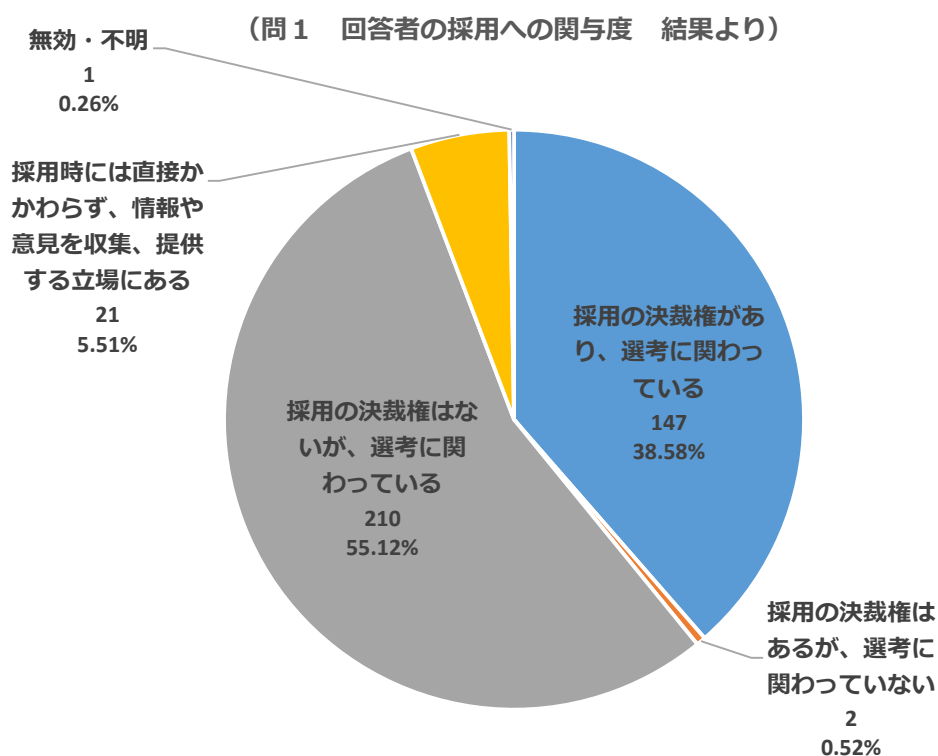
1.2. 集計結果

<回答者の基礎情報>

以下、アンケート集計結果を記載する。

問1 回答者の採用への関与度

No.	項目名	数(件)	率
1	採用の決裁権があり、選考に関わっている	147	38.58%
2	採用の決裁権はあるが、選考に関わっていない	2	0.52%
3	採用の決裁権はないが、選考に関わっている	210	55.12%
4	採用時には直接かわらず、情報や意見を収集、提供する立場にある	21	5.51%
	無効・不明	1	0.26%
集計		381	100.00%



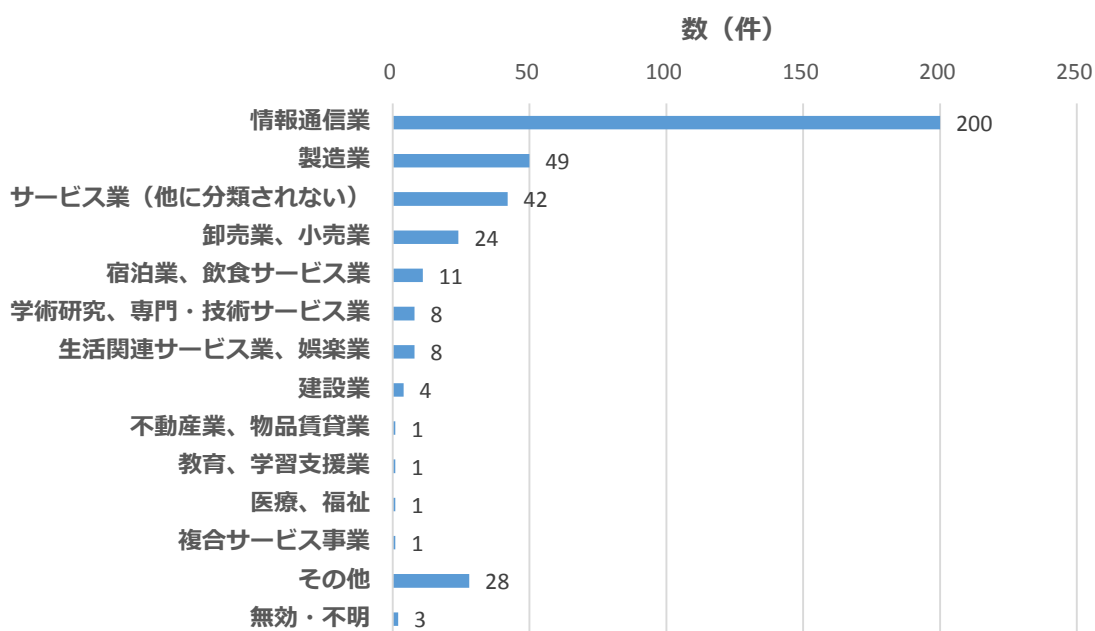
問2 企業・機関の本社・本部所在地

No.	項目名	数(件)	率
1	大阪府	156	40.94%
2	東京都	110	28.87%
3	京都府	63	16.54%
4	滋賀県	9	2.36%
5	愛知県	9	2.36%
6	兵庫県	8	2.10%
7	神奈川県	8	2.10%
8	和歌山県	4	1.05%
9	広島県	2	0.52%
10	三重県	2	0.52%
11	静岡県	2	0.52%
12	山梨県	1	0.26%
13	石川県	1	0.26%
14	北海道	1	0.26%
15	茨城県	1	0.26%
16	千葉県	1	0.26%
17	新潟県	1	0.26%
18	その他	0	0.00%
	無効・不明	2	0.52%
集計		381	100.00%

問3 企業・機関の主業種

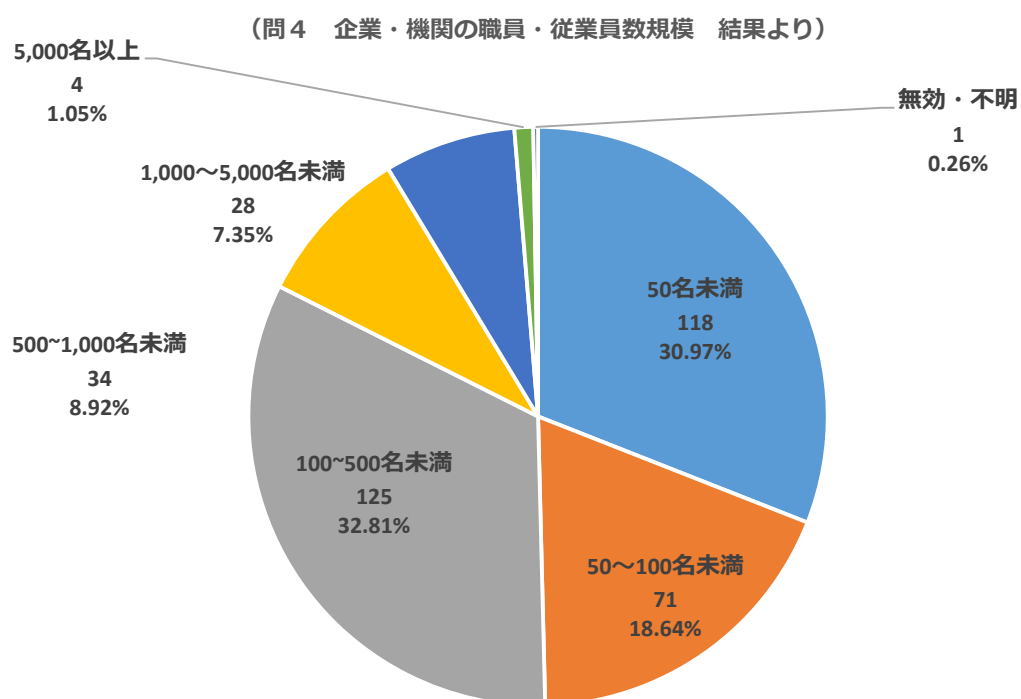
No.	項目名	数(件)	率
1	情報通信業	200	52.49%
2	製造業	49	12.86%
3	サービス業(他に分類されない)	42	11.02%
4	卸売業、小売業	24	6.30%
5	宿泊業、飲食サービス業	11	2.89%
6	学術研究、専門・技術サービス業	8	2.10%
7	生活関連サービス業、娯楽業	8	2.10%
8	建設業	4	1.05%
9	不動産業、物品賃貸業	1	0.26%
10	教育、学習支援業	1	0.26%
11	医療、福祉	1	0.26%
12	複合サービス事業	1	0.26%
13	その他	28	7.35%
	無効・不明	3	0.79%
集計		381	100.00%

(問3 企業・機関の主業種 結果より)



問4 企業・機関の職員・従業員数規模

No.	項目名	数(件)	率
1	50名未満	118	30.97%
2	50~100名未満	71	18.64%
3	100~500名未満	125	32.81%
4	500~1,000名未満	34	8.92%
5	1,000~5,000名未満	28	7.35%
6	5,000名以上	4	1.05%
	無効・不明	1	0.26%
集計		381	100.00%

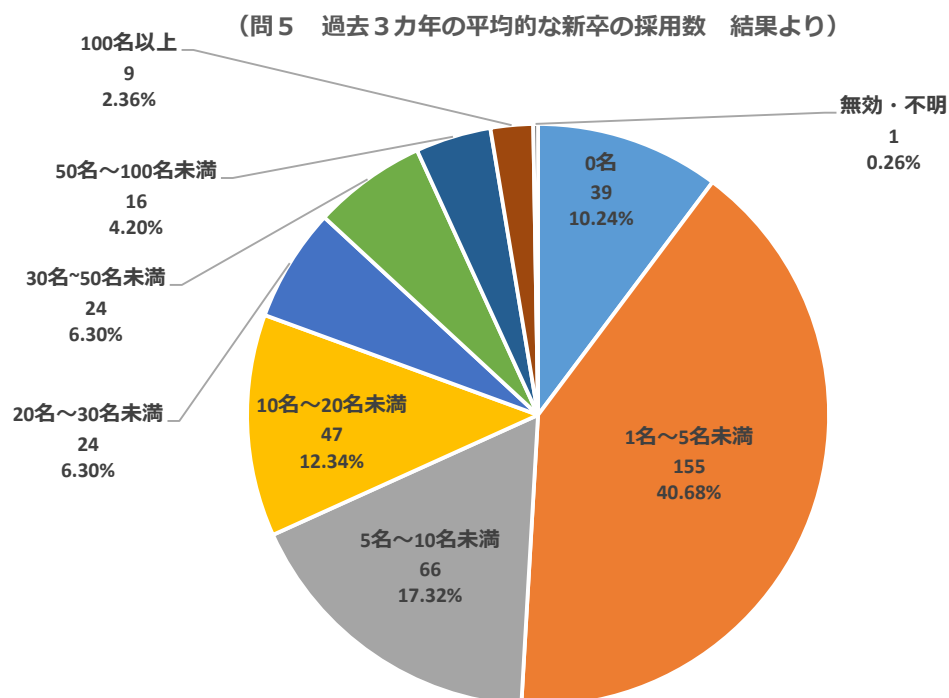


<人材需要全般に関する事項>

問5 過去3カ年の平均的な新卒の採用数

過去3カ年の平均的な新卒の採用数について質問したところ、回答件数381件中、「1名以上の採用を行っている」との回答が89.5%となった。

No.	項目名	数(件)	率
1	0名	39	10.24%
2	1名~5名未満	155	40.68%
3	5名~10名未満	66	17.32%
4	10名~20名未満	47	12.34%
5	20名~30名未満	24	6.30%
6	30名~50名未満	24	6.30%
7	50名~100名未満	16	4.20%
8	100名以上	9	2.36%
	無効・不明	1	0.26%
集計		381	100.00%



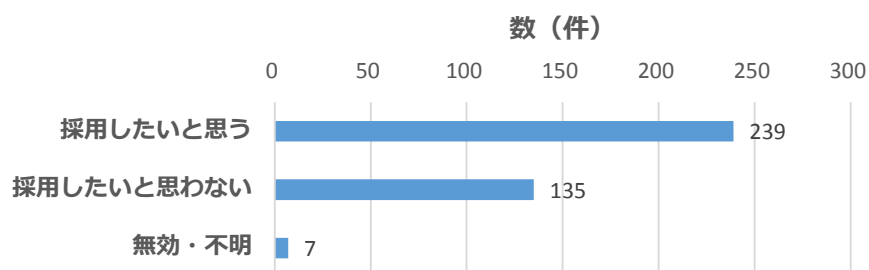
<当該設置予定学科群に関する事項>

問6 国際文化学部 人文学科の卒業生の採用意向

国際文化学部人文学科の卒業生に対する採用意向について質問をしたところ、回答件数381件のうち、「採用したい」と回答したのは239件/62.73%であり、国際文化学部人文学科で学んだ卒業生への採用に積極的な意向を示している。

No.	項目名	数(件)	率
1	採用したいと思う	239	62.73%
2	採用したいと思わない	135	35.43%
	無効・不明	7	1.84%
集計		381	100.00%

(問6 国際文化学部 人文学科の卒業生の採用意向 結果より)

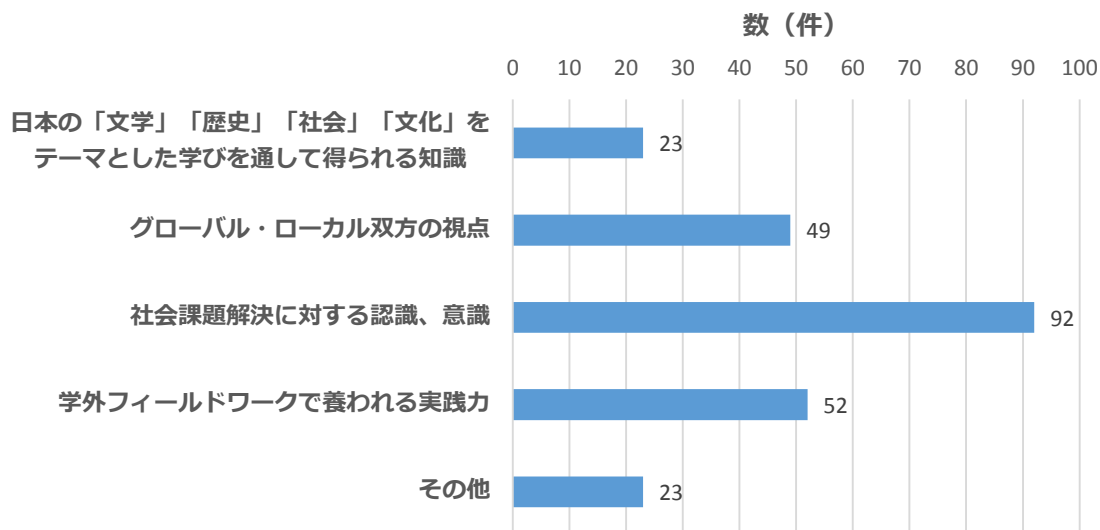


問7 国際文化学部 人文学科への関心事由

問6で採用したいと思うと回答した239件に、養成する人材の特色として最も魅力を感じた点について質問したところ、回答件数239件の38.49%にあたる92件が「社会課題解決に対する認識、意識」と回答しており、つづき、21.76%にあたる52件が「学外フィールドワークで養われる実践力」と回答している。

No.	項目名	数(件)	率
1	日本の「文学」「歴史」「社会」「文化」をテーマとした学びを通して得られる知識	23	9.62%
2	グローバル・ローカル双方の視点	49	20.50%
3	社会課題解決に対する認識、意識	92	38.49%
4	学外フィールドワークで養われる実践力	52	21.76%
5	その他	23	9.62%
集計		239	100.00%

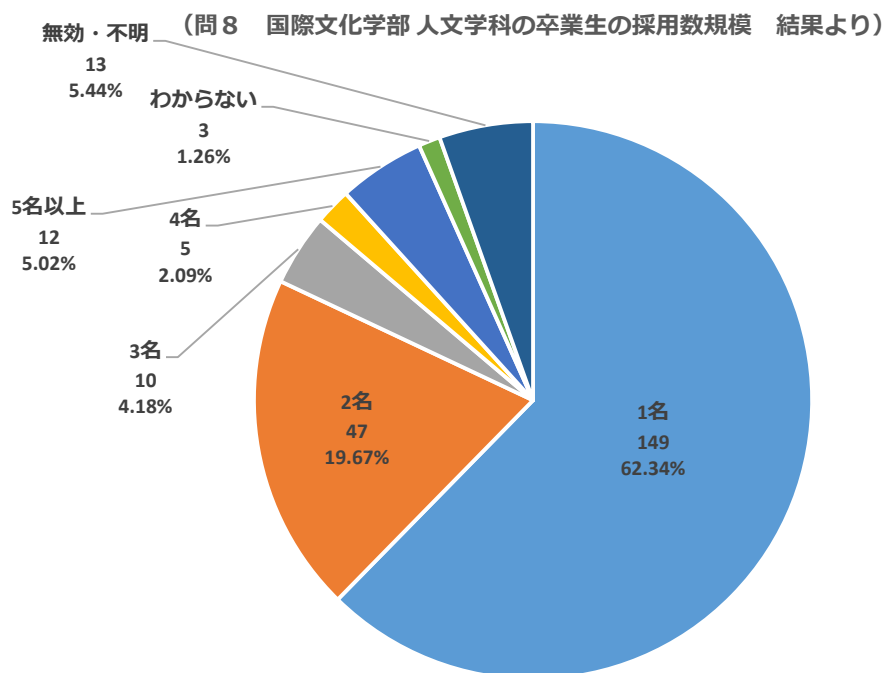
(問7 国際文化学部 人文学科への関心事由 結果より)



問8 国際文化学部 人文学科の卒業生の採用数規模

問6で採用したいと思うと回答した239件に、卒業生の採用人数について質問したところ、「1名」と回答した企業・機関が149件、「2名」と回答した企業・機関が47件、「3名」と回答した企業・機関が10件、「4名」と回答した企業・機関が5件、「5名以上」と回答した企業・機関が12件であった。「5名以上」と回答した企業・機関を5名として、これらの採用予定人数を積算合計すると353名となる。これは、国際文化学部人文学科の予定入学定員数160名を上回る結果であり、国際文化学部人文学科で育成する人材の需要を見込むことができるものといえる。

No.	項目名	数(件)	率
1	1名	149	62.34%
2	2名	47	19.67%
3	3名	10	4.18%
4	4名	5	2.09%
5	5名以上	12	5.02%
6	わからない	3	1.26%
	無効・不明	13	5.44%
集計		239	100.00%

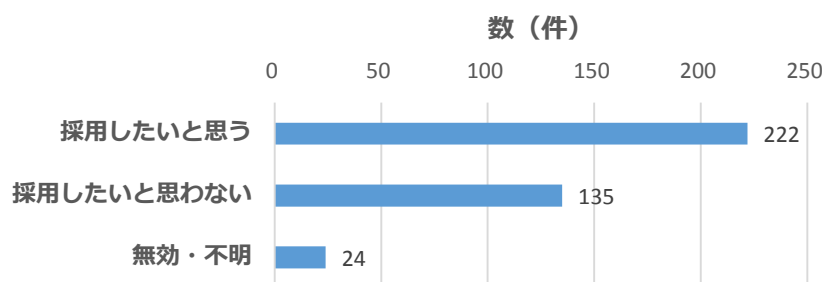


問9 国際文化学部 グローバルスタディーズ学科の卒業生の採用意向

国際文化学部グローバルスタディーズ学科の卒業生に対する採用意向について質問をしたところ、回答件数 381 件のうち、「採用したい」と回答したのは 222 件/58.27%であり、国際文化学部グローバルスタディーズ学科で学んだ卒業生への採用に積極的な意向を示している。

No.	項目名	数 (件)	率
1	採用したいと思う	222	58.27%
2	採用したいと思わない	135	35.43%
	無効・不明	24	6.30%
集計		381	100.00%

(問9 国際文化学部 グローバルスタディーズ学科の卒業生の採用意向 結果より)

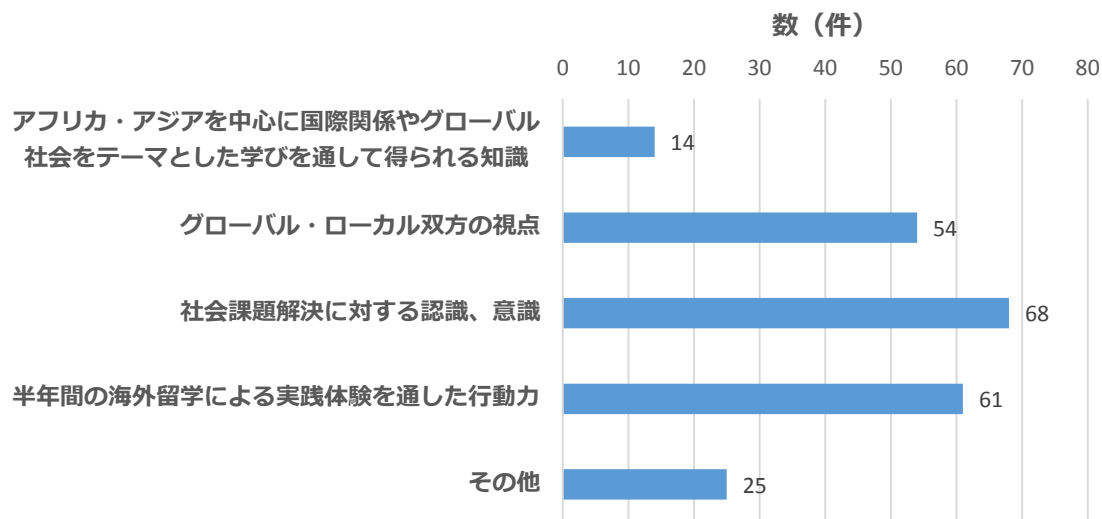


問10 国際文化学部 グローバルスタディーズ学科への関心事由

問9で採用したいと思うと回答した222件に、養成する人材の特色として最も魅力を感じた点について質問したところ、回答件数222件の30.63%にあたる68件が「社会課題解決に対する認識、意識」と回答しており、つづき、27.48%にあたる61件が「半年間の海外留学による実践体験を通じた行動力」と回答している。

No.	項目名	数(件)	率
1	アフリカ・アジアを中心に国際関係者やグローバル社会をテーマとした学びを通して得られる知識	14	6.31%
2	グローバル・ローカル双方の視点	54	24.32%
3	社会課題解決に対する認識、意識	68	30.63%
4	半年間の海外留学による実践体験を通じた行動力	61	27.48%
5	その他	25	11.26%
集計		222	100.00%

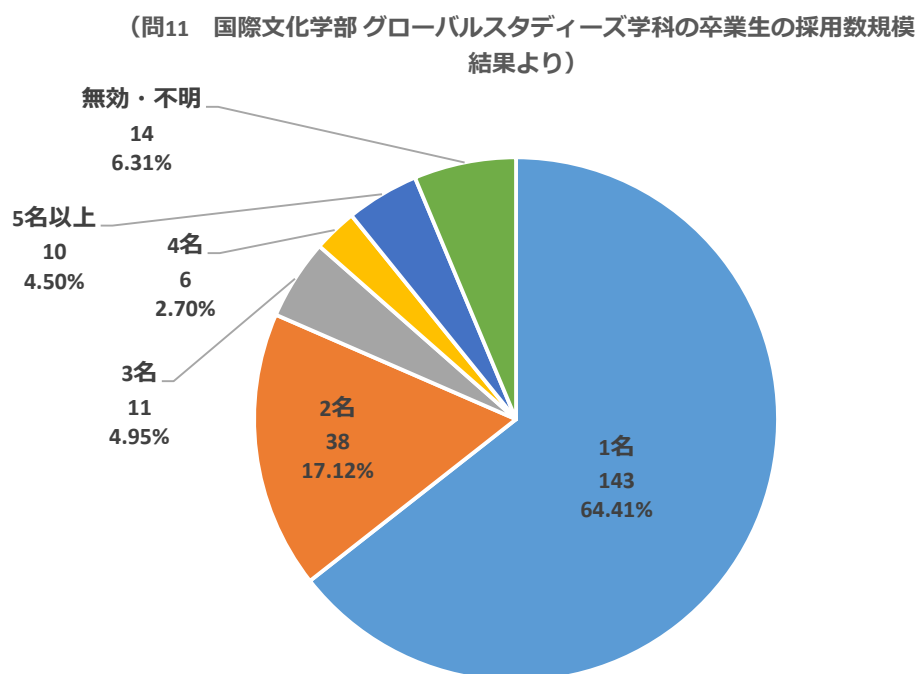
(問10 国際文化学部 グローバルスタディーズ学科への関心事由 結果より)



問 11 国際文化学部 グローバルスタディーズ学科の卒業生の採用数規模

問9で採用したいと思うと回答した222件に、卒業生の採用人数について質問したところ、「1名」と回答した企業・機関が143件、「2名」と回答した企業・機関が38件、「3名」と回答した企業・機関が11件、「4名」と回答した企業・機関が6件、「5名以上」と回答した企業・機関が10件であった。「5名以上」と回答した企業・機関を「5名」として、これらの採用予定人数を積算合計すると326名となる。これは、国際文化学部グローバルスタディーズ学科の予定入学定員数90名を上回る結果であり、国際文化学部グローバルスタディーズ学科で育成する人材の需要を見込むことができるものといえる。

No.	項目名	数(件)	率
1	1名	143	64.41%
2	2名	38	17.12%
3	3名	11	4.95%
4	4名	6	2.70%
5	5名以上	10	4.50%
	無効・不明	14	6.31%
集計		222	100.00%

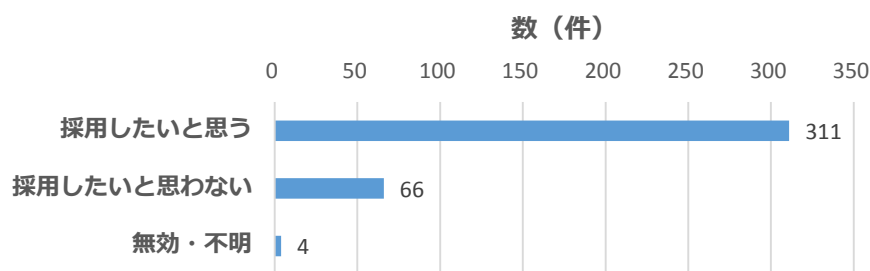


問 12 メディア表現学部 メディア表現学科の卒業生の採用意向

メディア表現学部メディア表現学科の卒業生に対する採用意向について質問をしたところ、回答件数 381 件のうち、「採用したい」と回答したのは 311 件/81.63%であり、メディア表現学部メディア表現学科で学んだ卒業生への採用に積極的な意向を示している。

No.	項目名	数 (件)	率
1	採用したいと思う	311	81.63%
2	採用したいと思わない	66	17.32%
	無効・不明	4	1.05%
集計		381	100.00%

(問12 メディア表現学部 メディア表現学科の卒業生の採用意向
結果より)

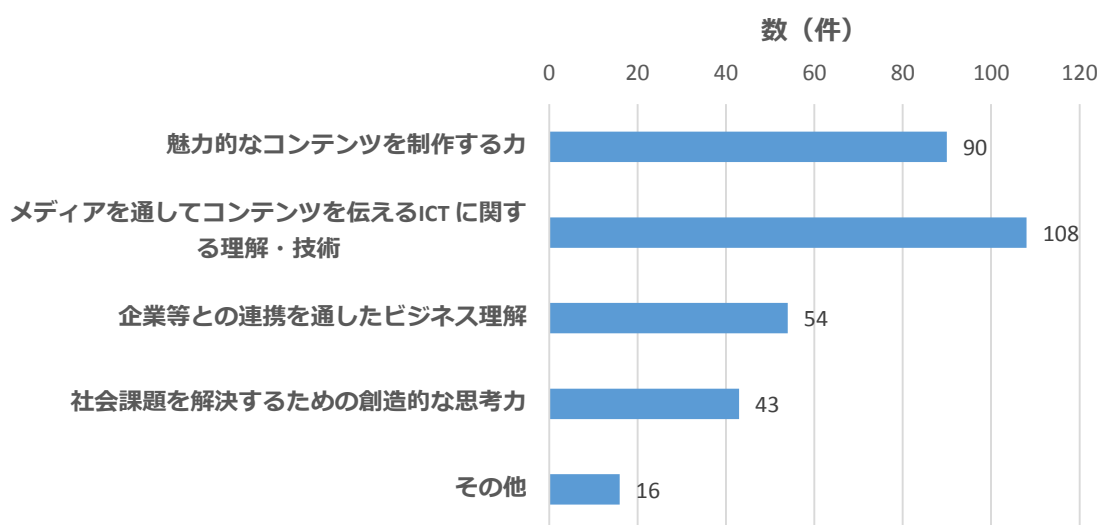


問13 メディア表現学部 メディア表現学科への関心事由

問12で採用したいと思うと回答した311件に、養成する人材の特色として最も魅力を感じた点について質問したところ、回答者数311件の28.25%にあたる108件が「メディアを通してコンテンツを伝えるICTに関する理解・技術」と回答しており、つづき、23.62%にあたる90件が「魅力的なコンテンツを制作する力」と回答している。

No.	項目名	数(件)	率
1	魅力的なコンテンツを制作する力	90	23.62%
2	メディアを通してコンテンツを伝えるICTに関する理解・技術	108	28.25%
3	企業等との連携を通じたビジネス理解	54	14.17%
4	社会課題を解決するための創造的な思考力	43	11.29%
5	その他	16	3.94%
集計		311	100.00%

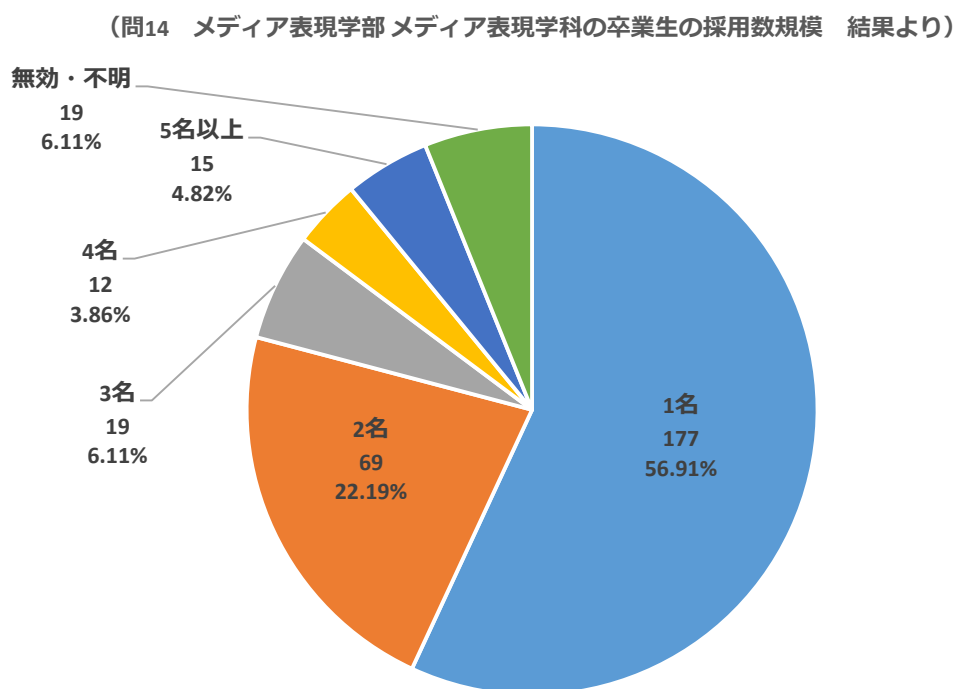
問13 メディア表現学部 メディア表現学科への関心事由



問 14 メディア表現学部 メディア表現学科の卒業生の採用数規模

問 12 で採用したいと思うと回答した 311 件に、卒業生の採用人数について質問したところ、「1名」と回答した企業・機関が 177 件、「2名」と回答した企業・機関が 69 件、「3名」と回答した企業・機関が 19 件、「4名」と回答した企業・機関が 12 件、「5名以上」と回答した企業・機関が 15 件であった。「5名以上」と回答した企業・機関を「5名」として、これらの採用予定人数を積算合計する 495 名となる。これは、メディア表現学部メディア表現学科の予定入学定員数 168 名を上回る結果であり、メディア表現学部メディア表現学科で育成する人材の需要を見込むことができるものといえる。

No.	項目名	数(件)	率
1	1名	177	56.91%
2	2名	69	22.19%
3	3名	19	6.11%
4	4名	12	3.86%
5	5名以上	15	4.82%
	無効・不明	19	6.11%
集計		311	100.00%



1.3. 人材需要調査結果のまとめ

人材需要調査の結果、アンケート回答件数 381 件中、当該設置予定学科それぞれの予定入学定員数を超える採用意向が確認された。このことから、当該設置予定学科それぞれでの人材需要の見通しは立っていると言えるものと考えられる。

さらに、今回の調査では調査対象地域を近畿圏及びその近隣県のみにしたが、全国区からも需要があることを考慮すると、進学需要、人材需要ともに十分に見込むことができると考えられる。

2. 添付資料

- 2.1. アンケート回答企業・機関一覧
- 2.2. 設置計画に係る事業所アンケート調査票

2.1. アンケート回答企業・機関一覧

1 学生の確保の見通し等を記載した書類

2 出典

株式会社さんぽう

3 説明

「京都精華大学国際文化学部人文学科 国際文化学部グローバルスタディーズ学科
メディア表現学部メディア表現学科 進学需要に関する調査」のうち、以下のページ
については回答元への掲載許諾の確認が困難であるため、公開にあたり該当ページを
削除した。

アンケート回答高校学校一覧 34 ページ～35 ページ

アンケート回答企業・機関一覧 60 ページ～70 ページ

2.2. 設置計画に係る事業所アンケート調査票

2021年度の学部の新設計画に関するアンケート調査

このアンケート調査は、京都精華大学が設置を計画する「国際文化学部 人文学科」、「国際文化学部 グローバルスタディーズ学科」、「メディア表現学部 メディア表現学科」（学部学科名称は全てに仮称、以下同）の計画に関する基礎資料とするためのものです。京都精華大学では、このアンケート調査を通して、採用のご責任者・ご担当者の皆様からご意見をお聞きし、計画内容に反映したいと考えています。

なお、このアンケートの結果は、統計資料としてのみ用い、個別の回答内容について公開することはありません。以下の質問に、別紙のリーフレットをご覧くださいませよう、ご協力お願いいたします。

<回答欄>

問1 はじめに、アンケートをお答えいただいている方の、採用への関与度を教えてください。

次の中から、一つだけ選んで、回答欄に番号を記入してください。.....

1. 採用の決裁権があり、選考に関わっている
2. 採用の決裁権はあるが、選考に関わっていない
3. 採用の決裁権はないが、選考に関わっている
4. 採用時には直接かわらず、情報や意見を収集、提供する立場にある

問2 貴社・貴機関の本社・本部所在の都道府県について教えてください。（一つだけ選んで、回答欄に番号を記入）.....

1. 北海道	2. 青森県	3. 岩手県	4. 宮城県	5. 秋田県	6. 山形県	7. 福島県
8. 茨城県	9. 栃木県	10. 群馬県	11. 埼玉県	12. 千葉県	13. 東京都	14. 神奈川県
15. 新潟県	16. 富山県	17. 石川県	18. 福井県	19. 山梨県	20. 長野県	21. 岐阜県
22. 静岡県	23. 愛知県	24. 三重県	25. 滋賀県	26. 京都府	27. 大阪府	28. 兵庫県
29. 奈良県	30. 和歌山県	31. 鳥取県	32. 島根県	33. 岡山県	34. 広島県	35. 山口県
36. 徳島県	37. 香川県	38. 愛媛県	39. 高知県	40. 福岡県	41. 佐賀県	42. 長崎県
43. 熊本県	44. 大分県	45. 宮崎県	46. 鹿児島県	47. 沖縄県	48. その他	

問3 貴社・貴機関の主業種について教えてください。（一つだけ選んで、回答欄に番号を記入）.....

1. 農業、林業	2. 漁業	3. 鉱業、採石業、 砂利採取業	4. 建設業	5. 製造業
6. 電気・ガス・ 熱供給・水道	7. 情報通信業	8. 運輸業、郵便業	9. 卸売業、小売業	10. 不動産業 物品賃貸業
11. 学術研究、 専門・技術サービス業	12. 宿泊業、 飲食サービス業	13. 生活関連サービス業、 娯楽業	14. 教育、学習支援業	15. 医療、福祉
16. 複合サービス事業	17. サービス業 (他に分類されない)	18. 公務	19. その他	

問4 貴社・貴機関の規模について教えてください。（一つだけ選んで、回答欄に番号を記入）.....

1. 50名未満
2. 50名～100名未満
3. 100名～500名未満
4. 500名～1,000名未満
5. 1,000名～5,000名未満
6. 5,000名以上

問5 貴社・貴機関の過去3カ年の平均的な新卒の採用数について教えてください。（一つだけ選んで、回答欄に番号を記入）.....

1. 0名
2. 1名～5名未満
3. 5名～10名未満
4. 10名～20名未満
5. 20名～30名未満
6. 30名～50名未満
7. 50名～100名未満
8. 100名以上

<裏面に続きます>

以下の質問には、別紙リーフレットの国際文化学部の計画概要の頁をご覧の上お答えください。

問6 京都精華大学 国際文化学部 人文学科で学んだ卒業生の採用意向について、教えてください。・・・・・・・・・・
(一つだけ選んで、回答欄に番号を記入)

1. 採用したいと思う 2. 採用したいと思わない

問7 問6で、「1. 採用したいと思う」とお答えになった方にお伺いします。

養成する人材の特色として最も魅力を感じた点を、以下からお選びください。(一つだけ選んで、回答欄に番号を記入)・・・

1. 日本の「文学」「歴史」「社会」「文化」をテーマとした学びを通して得られる知識
2. グローバル・ローカル双方の視点 3. 社会課題解決に対する認識、意識
4. 学外フィールドワークで養われる実践力 5. その他

問8 問6で、「1. 採用したいと思う」とお答えになった方にお伺いします。

京都精華大学 国際文化学部 人文学科で学んだ卒業生の採用人数について、毎年何名程度の採用可能性がありますか。・・・

(一つだけ選んで、回答欄に番号を記入)

1. 1名 2. 2名 3. 3名 4. 4名 5. 5名以上 (具体的に： 名程度)

問9 京都精華大学 国際文化学部 グローバルスタディーズ学科で学んだ卒業生の採用意向について、教えてください。・・・・・・・・・・
(一つだけ選んで、回答欄に番号を記入)

1. 採用したいと思う 2. 採用したいと思わない

問10 問9で、「1. 採用したいと思う」とお答えになった方にお伺いします。

養成する人材の特色として最も魅力を感じた点を、以下からお選びください。(一つだけ選んで、回答欄に番号を記入)・・・

1. アフリカ・アジアを中心に国際関係やグローバル社会をテーマとした学びを通して得られる知識
2. グローバル・ローカル双方の視点 3. 社会課題解決に対する認識、意識
4. 半年間の海外留学による実践体験を通じた行動力 5. その他

問11 問9で、「1. 採用したいと思う」とお答えになった方にお伺いします。

京都精華大学 国際文化学部 グローバルスタディーズ学科で学んだ卒業生の採用人数について、毎年何名程度の採用可能性がありますか。

(一つだけ選んで、回答欄に番号を記入)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

1. 1名 2. 2名 3. 3名 4. 4名 5. 5名以上 (具体的に： 名程度)

以下の質問には、別紙リーフレットのメディア表現学部の計画概要の頁をご覧の上お答えください。

問12 京都精華大学 メディア表現学部 メディア表現学科で学んだ卒業生の採用意向について、教えてください。・・・・・・・・・・
(一つだけ選んで、回答欄に番号を記入)

1. 採用したいと思う 2. 採用したいと思わない

問13 問12で、「1. 採用したいと思う」とお答えになった方にお伺いします。

養成する人材の特色として最も魅力を感じた点を、以下からお選びください。(一つだけ選んで、回答欄に番号を記入)・・・

1. 魅力的なコンテンツを制作する力 2. メディアを通してコンテンツを伝える ICT に関する理解・技術
3. 企業等との連携を通じたビジネス理解 4. 社会課題を解決するための創造的な思考力
5. その他

問14 問12で、「1. 採用したいと思う」とお答えになった方にお伺いします。

京都精華大学 メディア表現学部 メディア表現学科で学んだ卒業生の採用人数について、毎年何名程度の採用可能性がありますか。

(一つだけ選んで、回答欄に番号を記入)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

1. 1名 2. 2名 3. 3名 4. 4名 5. 5名以上 (具体的に： 名程度)

以上でアンケートは終了です。ご協力ありがとうございました。

教 員 名 簿

学 長 の 氏 名 等						
調書 番号	役職名	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額基本給 (千円)	現 職 (就任年月)
2	学長	ウスビ・サコ (佐古ウスビ) <平成30年4月>		博士 (工学)		京都精華大学学長 (平成30年4月～ 令和4年3月)
17						

教 員 の 氏 名 等												
(国際文化学部人文学科)												
調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配当 年次	担当 単位数	年間 開講数	現 職 (就任年月)	申請に係 る大職 務に等 する日 数
1	専	教授	イワモト シンイチ 岩本 真一 (令和3年4月)		修士 (学術)		基礎演習1 基礎演習2 基礎演習3 基礎演習4 基礎演習5 基礎演習6 応用演習1 応用演習2 応用演習3 応用演習4 応用演習5 応用演習6 卒業研究演習1 卒業研究演習2 卒業研究演習3 卒業論文 卒業発表 講読演習1 講読演習2 長期フィールドワーク1 長期フィールドワーク2 長期フィールドワーク3 歴史学概論 日本民衆史 日本・アジア関係史	1 1Q 1 2Q 1 3Q 1 4Q 2 1Q 2 2Q 2 3Q 2 4Q 3 1Q 3 2Q 3 3Q 3 4Q 4 1Q 4 2Q 4 3Q 4 3Q 4 4Q 2 4Q 3 4Q 3 1Q 3 1Q 3 1Q 2 2Q 2 4Q 2 4Q	1 1 1 1 2	1 1	京都精華大学 人文学部 総合人文学科 教授 (平成8年4月)	5日
2	専	教授	オンチ ノリオ 恩地 典雄 (令和3年4月)		工学博士		サステナビリティと社会 基礎演習1 基礎演習2 基礎演習3 基礎演習4 基礎演習5 基礎演習6 応用演習1 応用演習2 応用演習3 応用演習4 応用演習5 応用演習6 卒業研究演習1 卒業研究演習2 卒業研究演習3 卒業論文 卒業発表 講読演習1 講読演習2 長期フィールドワーク1 長期フィールドワーク2 長期フィールドワーク3 経済学	1 3Q 1 1Q 1 2Q 1 3Q 1 4Q 2 1Q 2 2Q 2 3Q 2 4Q 3 1Q 3 2Q 3 3Q 3 4Q 4 1Q 4 2Q 4 3Q 4 3Q 4 4Q 2 4Q 3 4Q 3 1Q 3 1Q 3 1Q 2 3Q	2 1 1 1 2	1 1	京都精華大学 人文学部 総合人文学科 教授 (平成13年4月)	5日
3	専	教授	スエツグ サトシ 末次 智 (令和3年4月)		文学修士 ※		基礎演習1 基礎演習2 基礎演習3 基礎演習4 基礎演習5 基礎演習6 応用演習1 応用演習2 応用演習3 応用演習4 応用演習5 応用演習6 卒業研究演習1 卒業研究演習2 卒業研究演習3 卒業論文 卒業発表 日本文化研究2 講読演習1 講読演習2 長期フィールドワーク1 長期フィールドワーク2 長期フィールドワーク3 南島文化論	1 1Q 1 2Q 1 3Q 1 4Q 2 1Q 2 2Q 2 3Q 2 4Q 3 1Q 3 2Q 3 3Q 3 4Q 4 1Q 4 2Q 4 3Q 4 3Q 4 4Q 2 2Q 2 4Q 3 4Q 3 1Q 3 1Q 3 1Q 2 4Q	1 1 1 1 2	1 1	京都精華大学 人文学部 総合人文学科 教授 (平成15年4月)	5日

14	専	講師	ニシノ アツシ 西野 厚志 (令和3年4月)	博士 (学術)	基礎演習1 基礎演習2 基礎演習3 基礎演習4 基礎演習5 基礎演習6 応用演習1 応用演習2 応用演習3 応用演習4 応用演習5 応用演習6 卒業研究演習1 卒業研究演習2 卒業研究演習3 卒業論文 卒業発表 文学概論 講読演習1 講読演習2 長期フィールドワーク1 長期フィールドワーク2 長期フィールドワーク3 書誌学 日本文学史	1 1Q 1 2Q 1 3Q 1 4Q 2 1Q 2 2Q 2 3Q 2 4Q 3 1Q 3 2Q 3 3Q 3 4Q 4 1Q 4 2Q 4 3Q 4 3Q 4 4Q 2 2Q 2 4Q 3 4Q 3 1Q 3 1Q 3 1Q 2 4Q 2 2Q	1 1 1 1 2	1 1	京都精華大学 人文学部 総合人文学科 講師 (平成27年4月)	5日
15	専	講師	ヨシモト カナミ 吉元 加奈美 (令和3年4月)	博士 (文学)	基礎演習1 基礎演習2 基礎演習3 基礎演習4 基礎演習5 基礎演習6 応用演習1 応用演習2 応用演習3 応用演習4 応用演習5 応用演習6 卒業研究演習1 卒業研究演習2 卒業研究演習3 卒業論文 卒業発表 講読演習1 講読演習2 長期フィールドワーク1 長期フィールドワーク2 長期フィールドワーク3 日本史研究1 古文書解読 日本史 日本地域史 日本社会史	1 1Q 1 2Q 1 3Q 1 4Q 2 1Q 2 2Q 2 3Q 2 4Q 3 1Q 3 2Q 3 3Q 3 4Q 4 1Q 4 2Q 4 3Q 4 3Q 4 4Q 2 4Q 3 4Q 3 1Q 3 1Q 3 1Q 2 2Q 2 1Q 2 1Q 2 3Q 2 3Q	1 1 1 1 2	1 1	京都精華大学 人文学部 総合人文学科 講師 (令和2年4月)	5日
16	兼担	教授	イナガ シゲミ 稲賀 繁美 (令和3年4月)	文学博士	フレッシュ・キャンブ クリエイティブ・ワークショップ 国際文化リテラシー1 国際文化特講2	1 1Q 1 2Q 1 3Q 2 2Q	1 1 2 1	1 1 1 1	人間文化研究機構 国際日本文化研究センター 教授 (平成9年4月)	—
17	兼担	教授	ウスビ・サコ (佐古(サ)ウスビ) (令和3年4月)	博士 (工学)	自由論 世界文化遺産	1 3Q 2 1Q	1 2	1 1	京都精華大学 人文学部 総合人文学科 教授 (平成13年4月)	—
18	兼担	教授	ウニガメ トシヒコ 雲丹亀 利彦 (令和3年4月)	芸術学士	デッサン1	1 1Q	1	1	京都精華大学 芸術学部 造形学科 教授 (平成13年4月)	—
19	兼担	教授	オオシモ ダイスケ 大下 大介 (令和4年4月)	専門学校 卒	メディア表現特講1	2 1Q	2	1	京都精華大学 ホビュールカルチャー学部 教授 (平成18年4月)	—
20	兼担	教授	オグラ ジュンイチ 小椋 純一 (令和4年4月)	博士(農 学)	日本の風土	2 2Q	2	1	人文学部 総合人文 学科学科 教授 (昭和59年4月)	—
21	兼担	教授	カン ジュン 姜 竣 (令和5年4月)	博士(文 学)	マンガ特講1 マンガ特講2	2 1Q 2 2Q	2 2	1 1	京都精華大学 マンガ学部 マンガ学科学科 教授 (平成23年4月)	—
22	兼担	教授	クリス ミツル 栗巢 満 (令和3年4月)	体育学修 士	スポーツ実習1 スポーツ実習2	1 2Q 1 3Q	1 1	1 1	京都精華大学 人文学部 総合人文学科 教授 (昭和61年4月)	—

23	兼担	教授	コマツ マサフミ 小松 正史 (令和4年4月)		博士 (工学)		メディア表現特講2	2 2Q	2	1	京都精華大学 ポピュラーカルチャー学部 教授 (平成13年4月)	—
24	兼担	教授	コヤマ コウヘイ 小山 格平 (令和4年10月)		芸術学修士		デザインリテラシー1 デザインリテラシー2	2 3Q 2 4Q	2 2	1 1	京都精華大学 デザイン学部 プロダクトデザイン 学科 教授 (平成27年5月)	—
25	兼担	教授	サイトウ ヒカル 斎藤 光 (令和3年4月)		理学修士		科学史 メディア表現リテラシー1 メディア表現リテラシー2 日本の現代文化 市民社会論	1 3Q 2 3Q 2 4Q 2 2Q 2 2Q	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	京都精華大学ポピュ ラーカルチャー学部 教授 (平成2年10月)	—
26	兼担	教授	サトウ ミツヨシ 佐藤 光儀 (令和4年4月)		芸術学修士		美術概論1	2 1Q	1	1	京都精華大学 芸術学部 造形学科 教授 (平成1年4月)	—
27	兼担	教授	サワダ マサト 澤田 昌人 (令和3年4月)		理学博士		国際文化概論1 国際文化概論2 アフリカ地域研究2 アフリカ・アジア概論	1 1Q 1 2Q 2 4Q 1 4Q	1 1 2 1	1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 総合人文学科 教授 (平成9年4月)	—
28	兼担	講師	ティーター・ジェニ ファー TEETER Jennifer (令和3年4月)		master of art (英国)		英語1 英語2 英語3 英語4 Business English English for studying abroad	1 1Q 1 2Q 1 3Q 1 4Q 2 1Q 2 4Q	1 1 1 1 1 1	2 2 2 2 1 1	京都精華大学 マンガ学部 マンガ学科 講師 (平成30年4月)	—
29	兼担	教授	シン チャンホウ 申 昌浩 (令和3年4月)		博士 (学術)		世界の文学1 世界の文学2	2 3Q 2 4Q	2 2	1 1	京都精華大学 人文学部 総合人文学科 教授 (平成15年4月)	—
30	兼担	教授	スギモト マサヒロ 杉本 昌裕 (令和3年4月)		修士(美 術)		デッサン3	1 3Q	1	1	京都精華大学 芸術学部 造形学科 特任准教 授 (平成31年4月)	—
31	兼担	教授	ツツミ クニヒコ 堤 邦彦		文学博士		世界の宗教 宗教学 物語論 コミュニケーションスキル1	2 3Q 2 2Q 1 4Q 1 1Q	2 2 2 1	1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 総合人文学科 教授 (平成9年4月)	—
32	兼担	教授	ナカガワ ヒロタカ 中川 裕孝 (令和3年4月)		芸術学修士		デッサン2	1 2Q	1	1	京都精華大学 芸術学部 造形学科 教授 (平成23年4月)	—
33	兼担	教授	ハマダ クヒニロ 濱田 邦裕 (令和3年4月)		工学修士		数学的思考法	1 4Q	2	1	京都精華大学 芸術学部 教授 (平成4年10月)	—
34	兼担	教授	ハヤマ ツトム 葉山 勉 (令和4年4月)		工学修士		京都のまちづくり	2 4Q	1	1	京都精華大学 デザイン学部 建築学科 教授 (平成3年4月)	—
35	兼担	教授	ホソカワ コウメイ 細川 弘明 (令和4年4月)		PhD(豪 国)		グローバル化と社会 人間の安全保障	2 2Q 2 3Q	1 2	1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平成13年4月)	—
36	兼担	教授	ミカミ カヨ 三上 賀代 (令和4年4月)		学術博士		日本芸能史	2 3Q	2	1	京都精華大学 人文学部 教授 (平成13年4月)	—
37	兼担	教授	ミヤナガ コウタロ ウ 宮永 甲太郎 (令和4年4月)		芸術学士		美術特講1	2 1Q	2	1	京都精華大学 芸術学部 造形学科 准教授 (平成20年4月)	—

38	兼担	教授	モリハラ ノリユキ 森原 規行 (令和3年4月)		学士(美術)	創造的思考法	1 3Q	2	1	京都精華大学 デザイン学部 ビジュアルデザイン 学科 教授 (平成18年4月)	—
39	兼担	教授	ヤスダ マサヒロ 安田 昌弘 (令和3年4月)		Doctor of Philosophy (英国)	ポピュラー音楽論 文化社会学	1 3Q 2 1Q	2 2	1 1	京都精華大学 ポピュラーカルチャー学部 教授 (平成21年4月)	—
40	兼担	教授	ヤブウチ サトシ 飯内 智 (令和3年4月)		修士 (教育学) ※	英語1 英語2 英語3 英語4 言語学	1 1Q 1 2Q 1 3Q 1 4Q 1 4Q	1 1 1 1 2	2 2 2 2 1	京都精華大学 人文学部 総合人文学科 教授 (平成15年4月)	—
41	兼担	教授	ヨシオカ エミコ 吉岡 恵美子 (令和3年4月)		M. A. Humanities (米国)	現代美術概論	1 4Q	2	1	京都精華大学 芸術学部 造形学科 准教授 (平成26年4月)	—
42	兼担	教授	ヨシカワ マサタカ 吉川 昌孝 (令和3年4月)		商学士	フレッシュ・キャンブ クリエイティブ・ワークショップ メディア表現概論1	1 1Q 1 2Q 2 1Q	1 1 1	1 1 1	株式会社博報堂DYM メディアパートナーズ メディア 環境研究所 所長 (平成27年4月)	—
43	兼担	教授	ヨシムラ カズマ 吉村 和真 (令和4年4月)		修士 (文学)	マンガ概論1 マンガ史1 日本思想史	2 1Q 2 3Q 2 3Q	1 1 2	1 1 1	京都精華大学 マンガ学部 マンガ学科 教授 (平成16年4月)	—
44	兼担	准教授	アシダ ヒロシ 蘆田 裕史 (令和3年4月)		修士 (学術)	グラフィックデザインソフトスキル	1 2Q	1	1	京都精華大学 ポピュラーカルチャー学部 准教授 (平成25年4月)	—
45	兼担	准教授	カワバタ ヘイキ(ミ キト) 川端 平気(幹人) (令和3年4月)		法学士	現代社会の諸問題 キャリア1 キャリア3 職業研究 クリエイティブの現場 コミュニケーション実践演習	1 3Q 1 1Q 3 3Q 1 3Q 1 4Q 1 3Q	2 1 1 2 2 1	1 1 1 1 1 1	京都精華大学 マンガ学部 マンガ学科 准教授 (平成29年4月)	—
46	兼担	准教授	キタノ ヒロユキ 北野 裕之 (令和4年4月)		修士 (美術)	美術特講2	2 2Q	2	1	京都精華大学 芸術学部 造形学科 准教授 (平成23年4月)	—
47	兼担	准教授	サバエ ヒデキ 鯖江 秀樹 (令和3年4月)		博士 (人間・ 環境学)	アカデミックスキル3 アカデミックスキル4 美術史 西洋美術史 美術史1 美術リテラシー1 美術リテラシー2	3 3Q 3 4Q 1 2Q 1 3Q 2 3Q 2 3Q 2 4Q	1 1 2 2 1 2 2	1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 芸術学部 造形学科 准教授 (平成30年4月)	—
48	兼担	准教授	シミズ タカオ 清水 貴夫 (令和3年4月)		修士 (文学) ※	世界と食 NGO論 地球環境学概論2 地球環境学概論3	1 4Q 2 4Q 3 3Q 3 4Q	2 2 2 2	1 1 1 1	京都精華大学 創造戦略機構 准教授 (令和2年4月)	—
49	兼担	准教授	ナカノ ニウスケ 中野 裕介 (令和3年4月)		修士 (美術)	デッサン4	1 4Q	1	1	京都精華大学 芸術学部 造形学科 特任准教授 (平成29年4月)	—
50	兼担	准教授	ニシダ シンジロウ 西田 真二郎 (令和4年4月)		文芸学士	マンガリテラシー1 マンガリテラシー2	2 3Q 2 4Q	2 2	1 1	京都精華大学 マンガ学部 マンガ学科 教授 (平成18年4月)	—
51	兼担	講師	アモウ カエ 阿毛 香絵 (令和4年4月)		博士 (文化人 類学)	地域研究入門 アフリカ地域研究1	2 1Q 2 3Q	2 2	1 1	京都精華大学 創造戦略機構 講師 (令和2年4月)	—
52	兼担	講師	エサカ ユキコ 恵阪 友紀子 (令和4年4月)		博士(文学)	漢文学	2 3Q	2	1	京都精華大学 人文学部 講師 (平成28年4月)	—

53	兼任	講師	オガタ(ハマダ) シラベ 緒方(濱田) しらべ (令和3年4月)	博士 (文学)	観光学総論 アフリカ美術 マテリアル・カルチャー概論	2 3Q 2 2Q 2 3Q	2 2 2	1 1 1	大阪大学 外国語学部 非常勤講師 (平成26年4月)	—
54	兼任	講師	コシバ ユウコ 小柴 裕子 (令和3年4月)	学士 (文学)	日本語1 日本語2 日本語3 日本語4	1 1Q 1 2Q 1 3Q 1 4Q	1 1 1 1	2 2 2 2	京都精華大学 マンガ学部 アニメーション学科 講師 (平成30年4月)	—
55	兼任	講師	シュクリ ユキコ 宿利 由希子 (令和3年4月)	博士 (学術)	日本語1 日本語2 日本語3 日本語4	1 1Q 1 2Q 1 3Q 1 4Q	1 1 1 1	2 2 2 2	京都精華大学 デザイン学部 建築学科 講師 (平成31年4月)	—
56	兼任	講師	スミダ テツロウ 住田 哲郎 (令和3年4月)	博士 (学術)	日本語1 日本語2 日本語3 日本語4	1 1Q 1 2Q 1 3Q 1 4Q	1 1 1 1	2 2 2 2	京都精華大学 マンガ学部 マンガ学科 講師 (平成29年4月)	—
57	兼任	講師	ナカオカ ジュリ 中岡 樹里 (令和3年10月)	修士(日 本語・日 本文化)	日本語学概論 日本事情理解 言語と社会 日本語教育演習1 言語と心理 日本語学 日本語教育演習2	1 4Q 1 4Q 2 2Q 3 3Q 2 1Q 2 3Q 3 4Q	2 1 2 2 1 2 2	1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 総合人文学科 講師 (令和2年4月)	—
58	兼任	講師	フジエダ アヤコ 藤枝 絢子 (令和3年4月)	博士 (地球環 境学)	海外ショートプログラム 国内ショートプログラム 大洋州地域研究 地球環境学概論1 比較建築文化論	1 2Q 1 2Q 2 3Q 2 4Q 2 3Q	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	京都精華大学 創造戦略機構 講師 (令和2年4月)	—
59	兼任	講師	ヨネハラ ユウジ 米原 有二 (令和3年4月)	学士 (人文 学)	和の伝統文化論 京都の伝統工芸講座1 京都の伝統工芸講座2 京都の伝統産業実習 日本文化概論	1 4Q 2 1Q 2 2Q 2 2Q 2 3Q	1 2 2 2 1	1 1 1 1 1	京都精華大学 マンガ学部 マンガ学科 講師 (平成29年4月)	5日
60	兼任	講師	ウェスリー・アーム ストロング (令和4年4月)	修士(教 育学)	English discussion Effective presentation	2 2Q 2 3Q	1 1	1 1	京都精華大学共通教 育機構非常勤講師 (平成24年4月)	—
61	兼任	講師	アイハラ マサミチ 相原 正道 (令和3年10月)	修士 (体育 学)	スポーツとビジネス	1 4Q	1	1	大阪経済大学 人間科学部教授 (平成31年4月)	—
62	兼任	講師	アオキ トキコ 青木 登紀子 (令和3年10月)	準学士	身体文化演習1 身体文化演習2	1 3Q 1 4Q	1 1	1 1	京都精華大学非常勤 講師 (平成29年4月)	—
63	兼任	講師	アカタ チカコ あかた ちかこ (令和3年10月)	人間科学 修士	表現と倫理	1 3Q	2	1	京都精華大学非常勤 講師 (平成27年4月)	—
64	兼任	講師	アキヨシ ヤスハル 秋吉 康晴 (令和4年10月)	博士 (文学)	メディア表現史1	2 3Q	1	1	京都精華大学ポピュ ラーカルチャー学部 非常勤講師 (平成25年4月)	—
65	兼任	講師	アベ マヤ 安部 麻矢 (令和3年4月)	博士 (文学)	スワヒリ語	1 1Q	1	1	大阪大学マルチリン ガル教育センター 特任講師 (平成31年7月)	—
66	兼任	講師	イケダ ショウゴ 池田 彰吾 (令和3年4月)	外国語学 士	フランス語1 フランス語2	1 1Q 1 2Q	1 1	1 1	株式会社ECC講師 (平成26年11月)	—
67	兼任	講師	イシカワ ラン 石川 蘭 (令和3年4月)	学士 (経営 学)	ベトナム語	1 1Q	1	1	株式会社ECC ベトナム語講師 (平成31年2月)	—

68	兼任	講師	イソベ アツシ 磯部 淳史 (令和4年4月)		博士(文学)		東洋史	2 2Q	2	1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成30年4月)	—
69	兼任	講師	オオスギ タクゾウ 大杉 卓三 (令和4年10月)		博士 (比較社会文化)		イノベーション論	2 3Q	2	1	京都産業大学 経営 学部 准教授 (平成30年4月)	—
70	兼任	講師	オザキ エレナ 尾崎 エレナ (令和3年4月)		産業社会 学士		スペイン語	1 1Q	1	1	株式会社ECC講師 (平成30年1月)	—
71	兼任	講師	カジマル ガク 梶丸 岳 (令和4年4月)		博士(人間・環境 学)		民族音楽論	2 4Q	2	1	京都大学 助教 (平成29年3月)	—
72	兼任	講師	カタオカ タツキ 片岡 樹 (令和4年10月)		博士 (比較社会文化)		アジア地域研究 1	2 3Q	2	1	京都大学大学院アジア・ アフリカ地域研究 研究科教授 (平成20年4月)	—
73	兼任	講師	カヨウ ヒデアキ 嘉陽 英朗 (令和3年4月)		修士 (経済学) ※		自然科学概論	1 2Q	2	1	京都精華大学 非常勤講師 (平成29年4月)	—
74	兼任	講師	キタムラ タスク 来田村 輔 (令和3年10月)		博士(理学)		生物学	1 3Q	2	1	京都精華大学非常勤 講師 (令和2年4月)	—
75	兼任	講師	キタワキ マナブ 北脇 学 (令和3年4月)		文学修士		海外ショートプログラム入門	1 3Q	2	1	学校法人 京都精華大学 専任職員 (平成27年4月)	—
76	兼任	講師	キヌカワ ヤスノリ 衣川 泰典 (令和3年10月)		修士 (美術)		写真技法	1 3Q	1	1	京都精華大学 芸術学部 非常勤講師 (平成21年4月)	—
77	兼任	講師	コバヤシ クミコ 小林 久美子 (令和4年4月)		修士(人間・環境 学)		西洋史	2 2Q	2	1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成30年10月)	—
78	兼任	講師	コバヤシ ヒロヒデ 小林 広英 (令和4年10月)		博士 (地球環境学)		アフリカ・アジア特講 1	2 3Q	2	1	京都大学大学院地球 環境学 教授 (平成14年4月)	—
79	兼任	講師	コムラ マサノブ 小村 雅信 (令和3年4月)		修士 (メディア表現)		情報と倫理 情報科学概論 データサイエンス入門 統計的思考法 プログラミング1 プログラミング2 プログラミング3 プログラミング4 情報テクノロジー1 情報テクノロジー2 人類と人工知能 教職コンピューター入門 メディアデザイン理論 2	1 1Q 1 2Q 2 1Q 1 3Q 1 4Q 2 1Q 2 2Q 1 3Q 1 4Q 1 3Q 1 4Q 2 2Q	1 1 1 2 1 1 1 1 2 2 2 2 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	個人事業主、プログラマー (平成21年5月)	—
80	兼任	講師	サカイ コウジ 坂井 功治 (令和3年10月)		経済学博 士		ファイナンス論	1 4Q	1	1	京都産業大学教授 (平成22年4月)	—
81	兼任	講師	サカイ シンタロウ 酒井 伸太郎 (令和4年10月)		社会福祉 学修士		障害学	2 3Q	2	1	京都精華大学非常勤 講師 (令和2年4月)	—
82	兼任	講師	ササキ タカヒロ 佐々木 高弘 (令和4年10月)		教育学修 士		歴史地理学	2 3Q	2	1	京都学園大学(現: 京都先端科学大学) 人文学部 教授 (平成11年4月)	—
83	兼任	講師	サダクニ タカノブ 貞國 貴信 (令和3年4月)		法学士		アカデミックスキル 1	1 2Q	1	1	株式会社インテグ講師 (平成28年4月)	—
84	兼任	講師	サトウ トモヒサ 佐藤 知久 (令和3年10月)		博士 (人間・環境学)		表現と社会	1 4Q	2	1	京都市立芸術大学 芸術資源研究セン ター (平成29年4月)	—
85	兼任	講師	サトウ モリヒロ 佐藤 守弘 (令和3年4月)		博士 (芸術学)		芸術学 デザイン特講 1 デザイン特講 2	1 2Q 2 1Q 2 2Q	2 2 2	1 1 1	京都精華大学 デザイン学部 建築学科 教授 (平成16年4月)	—

86	兼任	講師	シバタ アツキ 芝田 篤紀 (令和4年10月)		博士 (学術)		自然地理学	2 4Q	2	1	京都精華大学 人文学部 総合人文学科 非常勤講師 (令和2年4月)	—
87	兼任	講師	シモモト ヨシミツ 下元 善光 (令和3年10月)		学士 (美術)		ポートフォリオ実習1 ポートフォリオ実習2	1 3Q 1 4Q	1 1	1 1	個人事業主 グラ フィックデザイナー (平成20年5月)	—
88	兼任	講師	シン ヒョンオ 申 絃昨 (令和3年10月)		博士 (国際関 係学)		日本国憲法	1 3Q	2	1	京都精華大学非常勤 講師 (令和2年4月)	—
89	兼任	講師	シンボ シズ 新保 静 (令和3年4月)		国際関係 学士		中国語1 中国語2	1 1Q 1 2Q	1 1	1 1	株式会社E C C 講師 (平成28年8月)	—
90	兼任	講師	スズキ ヒデアキ 鈴木 英明 (令和4年4月)		博士 (文学)		アフリカ・アジア史 アフリカ・アジア関係論	2 1Q 2 2Q	1 2	1 1	国立民族学博物館 グローバル現象研究 部 助教 (平成30年8月)	—
91	兼任	講師	スズキ ヒロヤス 鈴木 洋保 (令和4年10月)		学士(工 学)		書道	2 4Q	2	1	京都精華大学人文学 部 非常勤講師 (平成22年4月)	—
92	兼任	講師	スミジ マホ 隅地 茉歩 (ヤマシタ ノブコ 山下 伸子) (令和3年4月)		文学修士		身体表現論	1 2Q	2	1	個人事業主、ダン サー (平成9年)	—
93	兼任	講師	タカハシ ヤスシゲ 高橋 靖以 (令和4年10月)		博士 (文学)		アイヌ文化論	2 3Q	2	1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成30年4月)	—
94	兼任	講師	タダ ミノル 多田 実 (令和4年4月)		博士 (工学)		マーケティング論 文化政策論	2 1Q 2 3Q	1 2	1 1	同志社大学 政策学部 教授 (平成16年4月)	—
95	兼任	講師	タニモト ナオコ 谷本 尚子 (令和3年10月)		学術博士		デザイン論 デザイン概論1 デザイン史1	1 3Q 2 1Q 2 3Q	2 1 1	1 1 1	京都精華大学非常勤 講師 (平成28年4月)	—
96	兼任	講師	チェ ミヒ 崔 美希 (令和3年4月)		専門士		韓国語1 韓国語2	1 1Q 1 2Q	1 1	1 1	株式会社E C C 講師 (平成28年7月)	—
97	兼任	講師	ツカダ アキラ 塚田 章 (令和3年10月)		芸術学士		素材論	1 4Q	2	1	京都精華大学 デザイン学部 非常勤講師 (平成31年4月)	—
98	兼任	講師	ツジモト キョウコ 辻本 香子 (令和3年4月)		修士 (学術)		音楽概論	1 2Q	2	1	京都精華大学ポピュ ラーカルチャー学部 非常勤講師 (平成27年4月)	—
99	兼任	講師	ロベルト デメツ Robert Demetz (令和3年4月)		美術修士		イタリア語	1 1Q	1	1	株式会社ECC 講師 (平成30年1月)	—
100	兼任	講師	ツツイ ナオコ 筒井 直子 (令和4年10月)		修士 (家政 学)		比較服飾文化論	2 3Q	2	1	京都服飾文化研究財 団・キュレーター (平成29年1月)	—
101	兼任	講師	ツルタ ナオミ 鶴田 尚美 (令和3年4月)		修士※ (文学)		倫理学	1 2Q	2	1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成15年4月)	—
102	兼任	講師	ナカオ サキコ 中尾 沙季子 (令和4年4月)		博士 (歴史)		国際文化史1 国際文化史2 国際文化リテラシー2 欧州地域研究 世界の文学1	1 3Q 1 4Q 1 4Q 2 3Q 2 3Q	1 1 2 2 2	1 1 1 1 1	日本学術振興会 海外特別研究員 (平成30年10月)	—
103	兼任	講師	ナカオ セイジ 中尾 世治 (令和4年10月)		博士 (人類 学)		マテリアル・カルチャー概論	2 3Q	2	1	総合地球環境学研 究所 特任助教 (令和元年8月)	—
104	兼任	講師	ナカムラ (タカハ シ) サエ 中村(高橋) 沙絵 (令和5年10月)		博士(地 域研究)		エイジング研究概論	3 4Q	2	1	京都大学大学院アジ ア・アフリカ地域研 究研究科 准教授 (平成28年4月)	—
105	兼任	講師	ナカムラ ジュンコ 中村 潤子 (令和3年4月)		文学修士		考古学	1 2Q	2	1	京都精華大学非常勤 講師 (平成2年4月)	—
106	兼任	講師	ナラ マサシ 奈良 雅史 (令和4年10月)		博士(文 学)		アジア地域研究2	2 4Q	2	1	国立民族学博物館超 域フィールド科学研 究部・准教授 (令和元年4月)	—

107	兼任	講師	ナン ミヤ ケー (モウ) カイン NANG MYA KAY (MOE) KHAING (令和3年4月)	博士(国際関係学)		アフリカ・アジア概論 国際開発論 子ども学概論 国際文化特講1 国際文化特講2	1 4Q 2 2Q 3 4Q 2 2Q 2 2Q	1 2 2 2 2	1 1 1 1 1	明治学院大学国際学部非常勤講師(2019年4月)	
108	兼任	講師	ニシモト ヌウキ 西本 裕樹 (令和3年10月)	社会学士		コミュニケーションスキル2	1 3Q	1	1	株式会社イング講師(平成27年4月)	—
109	兼任	講師	ノリタケ リツキ 則武 立樹 (令和3年10月)	修士(国際公共政策)		人権と教育	2 1Q	1	1	京都精華大学非常勤講師(平成31年4月)	—
110	兼任	講師	ハシモト アキヒコ 橋本 章彦 (令和3年10月)	博士(文学)		民俗学	1 3Q	2	1	京都精華大学人文学部非常勤講師(平成16年4月)	—
111	兼任	講師	ハヤカワ ヨシアキ 早川 慶朗 (令和3年10月)	博士(工学)		ベンチャー・ビジネス論	1 4Q	1	1	株式会社Andeco代表取締役(平成26年7月)	—
112	兼任	講師	ハヤシ コウジ 林 耕次 (令和4年10月)	博士(学術)		先住民族研究	2 3Q	2	1	総合地球環境学研究所(平成28年8月)	—
113	兼任	講師	フクオカ ショウゾウ 福岡 正蔵 (令和3年10月)	修士(政策科学)		インターンシップ2 キャリア2 日本の企業文化研究	2 4Q 2 2Q 1 3Q	2 1 1	1 1 1	京都精華大学キャリアセンター長(平成4年4月)	—
114	兼任	講師	フジタ アキフミ 藤田 明史 (令和4年4月)	修士※(国際関係学)		平和学	2 2Q	2	1	立命館大学国際関係学部非常勤講師(平成13年9月)	—
115	兼任	講師	フルカワ テツシ 古川 哲史 (令和4年10月)	修士(学術)		アメリカ地域研究1	2 3Q	2	1	大谷大学文学部教授(平成30年4月)	—
116	兼任	講師	ホンジョウ モエ 本庄 萌 (令和3年4月)	法学博士		法学	1 2Q	2	1	京都精華大学非常勤講師(令和2年4月)	—
117	兼任	講師	ホンダ ケンイチ 本多 健一 (令和4年10月)	博士(文学)		京都の習俗	2 3Q	2	1	大阪観光大学観光学部准教授(平成30年4月)	—
118	兼任	講師	マツオ メグミ 松尾 恵 (令和3年10月)	学士(美術)		表現活動と経済	1 3Q	1	1	Voice Gallery代表(昭和61年4月)	—
119	兼任	講師	ミウラ シュンスケ 三浦 俊介 (令和4年10月)	文学修士※		口承文化論	2 3Q	2	1	京都精華大学人文学部非常勤講師(平成8年4月)	—
120	兼任	講師	ミナミ リョウタ 南了太 (令和4年10月)	文学修士		インターンシップ1 産学公連携PBLプログラム1 産学公連携PBLプログラム2 大学連携プログラム ソーシャルビジネス演習1 ソーシャルビジネス演習2 グローバル・ビジネス論 グローバル化とメディア ビジネスモデル論	2 3Q 2 3Q 2 4Q 2 1Q 3 3Q 3 4Q 2 4Q 2 4Q 2 2Q	2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1 1	京都大学産官学連携本部(特定研究員)(平成26年4月)	—
121	兼任	講師	ミネ ヨウイチ 峯 陽一 (令和4年10月)	経済学修士		アフリカ・アジアリテラシー2	2 3Q	2	1	同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究教授(平成22年4月)	—
122	兼任	講師	ミムラ ユタカ 三村 豊 (令和4年10月)	修士(工学)		アフリカ・アジア特講2	2 4Q	2	1	大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所研究員(平成30年)	—
123	兼任	講師	ミヤマエ カズハ 宮前 一葉 (令和3年10月)	修士(社会学)		アカデミックスキル2	1 4Q	1	1	株式会社イング講師(平成30年4月)	—
124	兼任	講師	ムシガ トモカ 虫賀 幹華 (令和4年4月)	博士(文学)		アフリカ・アジアリテラシー1	2 2Q	2	1	国立民族学博物館人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員(平成30年11月)	—

125	兼任	講師	ムラカミ ユウスケ 村上 勇介 (令和4年10月)		博士(政治学)		アメリカ地域研究2	2 4Q	2	1	京都大学東南アジア 地域研究研究所教授 (平成30年2月)	—
126	兼任	講師	モリシタ マサナオ 森下 正修 (令和3年10月)		文学博士		行動心理学 心理学	1 3Q 1 2Q	2 2	1 1	京都府立大学 准教 授 (平成14年4月)	—
127	兼任	講師	ヤスギ クンワディ 八杉 クンワディ (令和3年4月)		英文学士		タイ語	1 1Q	1	1	株式会社ECC タイ語講師 (平成30年6月)	—
128	兼任	講師	ヤマウチ シンヤ 山内 眞也 (令和3年4月)		文学士		インドネシア語	1 1Q	1	1	株式会社ECC 講師 (平成30年9月)	—
129	兼任	講師	ヤマザキ アツヨシ 山崎 篤良 (令和3年4月)		経済学士		ドイツ語	1 1Q	1	1	株式会社ECC講師 (昭和58年7月)	—
130	兼任	講師	ユミクラ キョウヘ イ 弓倉 京平 (令和3年10月)		法務博士		表現と知的財産権	1 4Q	2	1	弁護士法人プログ レ・ TNY国際法律事務 所(平成31年1月)	—
131	兼任	講師	ワダ ツミキ 和田 積希 (令和3年10月)		修士 (文学)		工芸概論	1 4Q	2	1	京都工芸繊維大学 美術工芸資料館 特任助教 (平成31年4月)	—

(注)

- 1 教員の数に応じ、適宜枠を増やして記入すること。
- 2 私立の大学若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合又は大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 3 「申請に係る学部等に従事する週当たりの平均日数」の欄は、専任教員のみ記載すること。

教 員 の 氏 名 等												
(国際文化学部グローバルスタディーズ学科)												
調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有学位等	月額基本給(千円)	担当授業科目の名称	配当年次	担当単位数	年間開講数	現職(就任年月)	申請に係る大学の職務に等しい従事する日数(平均)
1	専	教授(学部長)	イナガ シゲミ 稲賀 繁美 (令和3年4月)		文学博士		フレッシュヤーズ・キャンプ クリエイティブ・ワークショップ グローバルゼミ 基礎演習1 基礎演習2 基礎演習3 基礎演習4 応用演習1 応用演習2 応用演習3 応用演習4 応用演習5 応用演習6 卒業研究演習1 卒業研究演習2 卒業研究演習3 卒業論文 卒業発表 国際文化リテラシー1 国際文化特講2 マイノリティ研究概論	1 1Q 1 2Q 1 1Q 1 3Q 1 4Q 2 1Q 2 2Q 2 3Q 2 4Q 3 1Q 3 2Q 3 3Q 3 4Q 4 1Q 4 2Q 4 3Q 4 4Q 1 3Q 2 2Q 2 2Q	1 1 2	1 1	人間文化研究機構国際日本文化研究センター 教授 (平成9年4月)	5日
2	専	教授	ウスビ・サコ (佐古(サ)ウスビ) (令和3年4月)		博士(工学)		自由論 グローバルゼミ 基礎演習1 基礎演習2 基礎演習3 基礎演習4 応用演習1 応用演習2 応用演習3 応用演習4 応用演習5 応用演習6 卒業研究演習1 卒業研究演習2 卒業研究演習3 卒業論文 卒業発表 世界文化遺産	1 3Q 1 1Q 1 3Q 1 4Q 2 1Q 2 2Q 2 3Q 2 4Q 3 1Q 3 2Q 3 3Q 3 4Q 4 1Q 4 2Q 4 3Q 4 4Q 2 1Q	1 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 総合人文学科 教授 (平成13年4月)	5日
3	専	教授	サワダ マサト 澤田 昌人 (令和3年4月)		理学博士		グローバルゼミ 基礎演習1 基礎演習2 基礎演習3 基礎演習4 応用演習1 応用演習2 応用演習3 応用演習4 応用演習5 応用演習6 卒業研究演習1 卒業研究演習2 卒業研究演習3 卒業論文 卒業発表 国際文化概論1 国際文化概論2 国際文化特講1 アフリカ地域研究2 グローバル関係概論	1 1Q 1 3Q 1 4Q 2 1Q 2 2Q 2 3Q 2 4Q 3 1Q 3 2Q 3 3Q 3 4Q 4 1Q 4 2Q 4 3Q 4 4Q 1 1Q 1 2Q 2 2Q 2 4Q 2 1Q	2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 1 1 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 総合人文学科 教授 (平成9年4月)	5日

4	専	教授	シン チャンホウ 申 昌浩 (令和3年4月)	博士 (学術)	グローバルゼミ 基礎演習1 基礎演習2 基礎演習3 基礎演習4 応用演習1 応用演習2 応用演習3 応用演習4 応用演習5 応用演習6 卒業研究演習1 卒業研究演習2 卒業研究演習3 卒業論文 卒業発表 世界の文学2	1 1Q 1 3Q 1 4Q 2 1Q 2 2Q 2 3Q 2 4Q 3 1Q 3 2Q 3 3Q 3 4Q 4 1Q 4 2Q 4 3Q 4 4Q 2 4Q	2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 総合人文学科 教授 (平成15年4月)	5日
5	専	准教授	シミズ タカオ 清水 貴夫 (令和3年4月)	修士 (文学) ※	グローバルゼミ 基礎演習1 基礎演習2 基礎演習3 基礎演習4 応用演習1 応用演習2 応用演習3 応用演習4 応用演習5 応用演習6 卒業研究演習1 卒業研究演習2 卒業研究演習3 卒業論文 卒業発表 フィールドワーク入門 地域研究特講 比較社会学 地球環境学概論2 地球環境学概論3 NGO論 世界と食	1 1Q 1 3Q 1 4Q 2 1Q 2 2Q 2 3Q 2 4Q 3 1Q 3 2Q 3 3Q 3 4Q 4 1Q 4 2Q 4 3Q 4 4Q 2 2Q 2 2Q 2 4Q 3 3Q 3 4Q 2 4Q 1 4Q	2 2	1 1	京都精華大学 創造戦略機構 准教授 (令和2年4月)	5日
6	専	講師	アモウ カエ 阿毛 香絵 (令和3年4月)	博士 (文化人 類学)	グローバルゼミ 基礎演習1 基礎演習2 基礎演習3 基礎演習4 応用演習1 応用演習2 応用演習3 応用演習4 応用演習5 応用演習6 卒業研究演習1 卒業研究演習2 卒業研究演習3 卒業論文 卒業発表 フランス語圏文化理解 フランス語圏のメディア 地域研究入門 アフリカ地域研究1 社会運動論	1 1Q 1 3Q 1 4Q 2 1Q 2 2Q 2 3Q 2 4Q 3 1Q 3 2Q 3 3Q 3 4Q 4 1Q 4 2Q 4 3Q 4 4Q 2 2Q 2 4Q 2 1Q 2 3Q 2 4Q	2 2	1 1	京都精華大学 創造戦略機構 講師 (令和2年4月)	4日

7	専	講師	オガタ(ハマダ) シラベ 緒方(濱田) しらべ (令和3年4月)	博士 (文学)	グローバルゼミ 基礎演習1 基礎演習2 基礎演習3 基礎演習4 応用演習1 応用演習2 応用演習3 応用演習4 応用演習5 応用演習6 卒業研究演習1 卒業研究演習2 卒業研究演習3 卒業論文 卒業発表 フィールドワーク方法論 観光学総論 アフリカ美術 マテリアル・カルチャー概論	1 1Q 1 3Q 1 4Q 2 1Q 2 2Q 2 3Q 2 4Q 3 1Q 3 2Q 3 3Q 3 4Q 4 1Q 4 2Q 4 3Q 4 4Q 2 3Q 2 3Q 2 2Q 2 3Q	2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	大阪大学 外国語学部 非常勤講師 (平成26年4月)	5日
8	専	講師	フジエダ アヤコ 藤枝 絢子 (令和3年4月)	博士 (地球環境学)	グローバルゼミ 海外短期フィールドワーク 基礎演習1 基礎演習2 基礎演習3 基礎演習4 応用演習1 応用演習2 応用演習3 応用演習4 応用演習5 応用演習6 卒業研究演習1 卒業研究演習2 卒業研究演習3 卒業論文 卒業発表 海外長期フィールドワーク1 海外長期フィールドワーク2 海外長期フィールドワーク3 海外長期フィールドワーク4 海外長期フィールドワーク5 海外長期フィールドワーク6 大洋州地域研究 地球環境学概論1 比較建築文化論 海外ショートプログラム 国内ショートプログラム	1 1Q 1 2Q 1 3Q 1 4Q 2 1Q 2 2Q 2 3Q 2 4Q 3 1Q 3 2Q 3 3Q 3 4Q 4 1Q 4 2Q 4 3Q 4 4Q 3 1Q 3 1Q 3 1Q 3 2Q 3 2Q 3 2Q 2 3Q 2 3Q 1 2Q 1 2Q	2 2	1 1	京都精華大学 創造戦略機構 講師 (令和2年4月)	5日
9	兼担	教授	イワモト シンイチ 岩本 真一 (令和4年4月)	修士 (学術)	日本・アジア関係史 日本民衆史	2 4Q 2 4Q	2 2	1 1	京都精華大学 人文学部 総合人文学科 教授 (平成8年4月)	—
10	兼担	教授	ウニガメ トシヒコ 雲丹亀 利彦 (令和3年4月)	芸術学士	デッサン1	1 1Q	1	1	京都精華大学 芸術学部 造形学科 教授 (平成13年4月)	—
11	兼担	教授	オオシモ ダイスケ 大下 大介 (令和4年4月)	専門学校 卒	メディア表現特講1	2 1Q	2	1	京都精華大学 ポピュラーカルチャー学部 教授 (平成18年4月)	—
12	兼担	教授	オンチ ノリオ 恩地 典雄 (令和3年4月)	工学博士	サステナビリティと社会 経済学	1 3Q 2 3Q	2 2	1 1	京都精華大学 人文学部 総合人文学科 教授 (平成13年4月)	—
13	兼担	教授	カン ジュン 姜 竣 (令和5年4月)	博士(文学)	マンガ特講1 マンガ特講2	3 1Q 3 2Q	2 2	1 1	京都精華大学 マンガ学部 マンガ学科 教授 (平成23年4月)	—
14	兼担	教授	クリス ミツル 栗巢 満 (令和3年4月)	体育学修 士	スポーツ実習1 スポーツ実習2	1 2Q 1 3Q	1 1	1 1	京都精華大学 人文学部 総合人文学科 教授 (昭和61年4月)	—
15	兼担	教授	コマツ マサフミ 小松 正史 (令和4年4月)	博士 (工学)	メディア表現特講2	2 2Q	2	1	京都精華大学 ポピュラーカルチャー学部 教授 (平成13年4月)	—
16	兼担	教授	コヤマ コウヘイ 小山 格平 (令和4年10月)	芸術学修 士	デザインリテラシー1 デザインリテラシー2	2 3Q 2 4Q	2 2	1 1	京都精華大学 デザイン学部 プロダクトデザイン 学科 教授 (平成27年5月)	—
17	兼担	教授	サイトウ ヒカル 斎藤 光 (令和3年4月)	理学修士	科学史 メディア表現リテラシー1 メディア表現リテラシー2 市民社会論	1 3Q 2 3Q 2 4Q 2 2Q	2 2 2 2	1 1 1 1	京都精華大学ポピュ ラーカルチャー学部 教授 (平成2年10月)	—

18	兼担	教授	サトウ ミツヨシ 佐藤 光儀 (令和4年4月)	芸術学修士	美術概論 1	2 1Q	1	1	京都精華大学 芸術学部 造形学科 教授 (平成14年4月)	—
19	兼担	教授	スギモト マサヒロ 杉本 昌裕 (令和3年4月)	修士(美術)	デッサン 3	1 3Q	1	1	京都精華大学 芸術学部 造形学科 特任准教授 (平成31年4月)	—
20	兼担	教授	レイチェル・ソーン (令和4年4月)	M. Phil. (米国)	ジェンダー論	2 4Q	2	1	京都精華大学 マンガ学部 マンガ学科 教授 (令和2年4月)	—
21	兼担	教授	タカハシ シンイチ 高橋 伸一 (令和4年4月)	博士(文学)	批評理論	2 1Q	2	1	京都精華大学 人文学部 総合人文学科 教授 (平成10年4月)	—
22	兼担	教授	タムラ ヌカ 田村 有香 (令和4年4月)	修士(社会学)	社会調査法	2 1Q	2	1	京都精華大学 人文学部 総合人文学科 教授 (平成12年4月)	—
23	兼担	教授	ツツミ クニヒコ 堤 邦彦 (令和3年4月)	文学博士	世界の宗教 宗教学 物語論 コミュニケーションスキル 1	2 3Q 2 2Q 1 4Q 1 1Q	2 2 2 1	1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 総合人文学科 教授 (平成9年4月)	—
24	兼担	教授	ナカガワ ヒロタカ 中川 裕孝 (令和3年4月)	芸術学修士	デッサン 2	1 2Q	1	1	京都精華大学 芸術学部 造形学科 教授 (平成23年4月)	—
25	兼担	教授	ハマダ クヒニロ 濱田 邦裕 (令和3年4月)	工学修士	数学的思考法	1 4Q	2	1	京都精華大学 芸術学部 教授 (平成4年10月)	—
26	兼担	教授	ハヤマ ツトム 葉山 勉 (令和4年4月)	工学修士	京都のまちづくり	2 4Q	1	1	京都精華大学 デザイン学部 建築学科 教授 (平成3年4月)	—
27	兼担	教授	ホソカワ コウメイ 細川 弘明 (令和4年4月)	PhD(豪国)	グローバル化と社会 人間の安全保障	2 2Q 2 3Q	1 2	1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平成13年4月)	—
28	兼担	教授	マエダ シゲル 前田 茂 (令和3年4月)	博士(文学)	フレッシュヤーズ・キャン クティブ・ワークショップ 日本の文化遺産 美学概論	1 1Q 1 2Q 2 2Q 1 3Q	1 1 2 2	1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 総合人文学科 教授 (平成15年4月)	—
29	兼担	教授	ミヤナガ コウタロウ 宮永 甲太郎 (令和4年4月)	芸術学士	美術特講 1	2 1Q	2	1	京都精華大学 芸術学部 造形学科 准教授 (平成20年4月)	—
30	兼担	教授	モリハラ ノリユキ 森原 規行 (令和3年4月)	学士(美術)	創造的思考法	1 3Q	2	1	京都精華大学 デザイン学部 教授 (平成18年4月)	—
31	兼担	教授	ヤスダ マサヒロ 安田 昌弘 (令和3年4月)	Doctor of Philosophy (英)	ポピュラー音楽論 文化社会学	1 3Q 2 1Q	2 2	1 1	京都精華大学 ポピュラーカルチャー学部 教授 (平成21年4月)	—
32	兼担	教授	ヤブウチ サトシ 蘆内 智 (令和3年4月)	修士(教育学)※	英語 1 英語 2 英語 3 英語 4 言語学	1 1Q 1 2Q 1 3Q 1 4Q 1 4Q	1 1 1 1 2	2 2 2 2 1	京都精華大学 人文学部 総合人文学科 教授 (平成15年4月)	—
33	兼担	教授	ヤマナ シンセイ 山名 伸生 (令和3年4月)	文学修士※	日本美術史 東洋美術史 京都の歴史	1 3Q 1 4Q 2 2Q	2 2 2	1 1 1	京都精華大学 人文学部 総合人文学科 教授 (昭和62年4月)	—
34	兼担	教授	ヨシオカ エミコ 吉岡 恵美子 (令和3年4月)	M. A. Humanities	現代美術概論	1 4Q	2	1	京都精華大学 芸術学部 造形学科 准教授 (平成26年4月)	—
35	兼担	教授	ヨシカワ マサタカ 吉川 昌孝 (令和3年4月)	商学士	フレッシュヤーズ・キャン クティブ・ワークショップ メディア表現概論 1	1 1Q 1 2Q 2 1Q	1 1 1	1 1 1	株式会社博報堂DY メディアパートナーズ メ ディア環境研究所 所長 (平成27年4月)	—

36	兼担	教授	ヨシムラ カズマ 吉村 和真 (令和4年4月)		修士 (文学)	マンガ概論1 マンガ史1	2 1Q 2 3Q	1 1	1 1	京都精華大学 マンガ学部 マンガ学科 教授 (平成16年4月)	—
37	兼担	准教授	アシダ ヒロシ 蘆田 裕史 (令和3年4月)		修士 (学術)	グラフィックデザインソフトス キル	1 2Q	1	1	京都精華大学 ホビージャカレッジ学部 准教授 (平成25年4月)	—
38	兼担	准教授	イソベ ユカリ 磯辺(磯邊) ゆかり (令和3年4月)		博士 (言語コミュニ ケーション 文化)	英語1 英語2 英語3 英語4	1 1Q 1 2Q 1 3Q 1 4Q	1 1 1 1	2 2 2 2	京都精華大学 人文学部 総合人文学科 准教授 (平成27年4月)	—
39	兼担	准教授	カワバタ ヘイキ(ミキト) 川端 平気(幹人) (令和3年4月)		法学士	現代社会の諸問題 キャリア1 キャリア3 職業研究 クリエイティブの現場 コミュニケーション実践演習	1 3Q 1 1Q 3 3Q 1 3Q 1 4Q 1 3Q	2 1 1 2 2 1	1 1 1 1 1 1	京都精華大学 マンガ学部 マンガ学科 准教授 (平成29年4月)	—
40	兼担	准教授	キタノ ヒロユキ 北野 裕之 (令和4年4月)		修士 (美術)	美術特講2	2 2Q	2	1	京都精華大学 芸術学部 造形学科 准教授 (平成23年4月)	—
41	兼担	准教授	コレサワ ノリミツ 是澤 範三 (令和3年4月)		博士 (文学)	古典文法	2 1Q	2	1	京都精華大学 人文学部 総合人文学科 准教授 (平成21年4月)	—
42	兼担	准教授	ササキ(クシビキ) アタル 佐々木(榎引) 中 (令和3年4月)		博士 (文学)	哲学入門 哲学概論	1 2Q 1 2Q	2 2	1 1	京都精華大学 人文学部 総合人文学科 准教授 (平成27年4月)	—
43	兼担	准教授	サバエ ヒデキ 鯖江 秀樹 (令和3年4月)		博士 (人間・ 環境学)	アカデミックスキル3 アカデミックスキル4 美術史 西洋美術史 美術史1 美術リテラシー1 美術リテラシー2	3 3Q 3 4Q 1 2Q 1 3Q 2 3Q 2 3Q 2 4Q	1 1 2 2 1 2 2	1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 芸術学部 芸術学部 造形学科 准教授 (平成30年4月)	—
44	兼担	准教授	ナカノ ヌウスケ 中野 裕介 (令和3年4月)		修士 (美術)	デッサン4	1 4Q	1	1	京都精華大学 芸術学部 造形学科 特任准教授 (平成29年4月)	—
45	兼担	准教授	ニシダ シンジロウ 西田 真二郎 (令和4年4月)		文芸学士	マンガリテラシー1 マンガリテラシー2	2 3Q 2 4Q	2 2	1 1	京都精華大学 マンガ学部 マンガ学科 教授 (平成18年4月)	—
46	兼担	准教授	ヤマダ ソウヘイ 山田 創平 (令和4年4月)		博士 (文学)	社会学 ジェンダー論	2 1Q 2 4Q	2 2	1 1	京都精華大学 人文学部 総合人文学科 准教授 (平成21年4月)	—
47	兼担	講師	エサカ ユキコ 恵阪 友紀子 (令和4年4月)		博士(文 学)	漢文学 書誌学	2 3Q 2 4Q	2 2	1 1	京都精華大学 人文学部 講師 (平成28年4月)	—
48	兼担	講師	コシバ ユウコ 小柴 裕子 (令和3年4月)		学士 (文学)	日本語1 日本語2 日本語3 日本語4	1 1Q 1 2Q 1 3Q 1 4Q	1 1 1 1	2 2 2 2	京都精華大学 マンガ学部 アニメーション学科 講師 (平成30年4月)	—
49	兼担	講師	シュクリ ユキコ 宿利 由希子 (令和3年4月)		博士 (学術)	日本語1 日本語2 日本語3 日本語4	1 1Q 1 2Q 1 3Q 1 4Q	1 1 1 1	2 2 2 2	京都精華大学 デザイン学部 建築学科 講師 (平成31年4月)	—
50	兼担	講師	シライ サトシ 白井 聡 (令和3年4月)		博士(社 会学)	シティズンシップとダイバーシ テイ 政治学 社会思想史	1 4Q 1 2Q 2 4Q	1 2 2	1 1 1	京都精華大学 人文学部 総合人文学科 講師 (平成27年4月)	—
51	兼担	講師	スミダ テツロウ 住田 哲郎 (令和3年4月)		博士 (学術)	日本語1 日本語2 日本語3 日本語4	1 1Q 1 2Q 1 3Q 1 4Q	1 1 1 1	2 2 2 2	京都精華大学 マンガ学部 マンガ学科 講師 (平成29年4月)	—
52	兼担	講師	ティーター・ジェニ ファー Jennifer TEETER (令和3年4月)		master of art (英国)	英語1 英語2 英語3 英語4 Business English English for studying abroad	1 1Q 1 2Q 1 3Q 1 4Q 2 1Q 2 4Q	1 1 1 1 1 1	2 2 2 2 1 1	京都精華大学 マンガ学部 マンガ学科 講師 (平成30年4月)	—

53	兼任	講師	ナカオカ ジュリ 中岡 樹里 (令和3年10月)	修士(日本語・日本文化)	日本語学概論 日本事情理解 言語と社会 日本語教育演習1 言語と心理 日本語学 日本語教育演習2	1 4Q 1 4Q 2 2Q 3 3Q 2 1Q 2 3Q 3 4Q	2 1 2 2 1 2	1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 総合人文学科 講師 (令和2年10月)	—
54	兼任	講師	ニシノ アツシ 西野 厚志 (令和4年4月)	博士(学術)	日本文学史	2 2Q	2	1	京都精華大学 人文学部 総合人文学科 講師 (平成27年4月)	—
55	兼任	講師	ヨシモト カナミ 吉元 加奈美 (令和3年4月)	博士(文学)	日本史 日本地域史 日本社会史 古文書解説	2 1Q 2 3Q 2 3Q 2 1Q	2 2 2 2	1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 総合人文学科 講師 (令和2年4月)	—
56	兼任	講師	ヨネハラ ユウジ 米原 有二 (令和3年4月)	学士(人文学)	和の伝統文化論 京都の伝統工芸講座1 京都の伝統工芸講座2 京都の伝統産業実習 日本文化概論	1 4Q 2 1Q 2 2Q 2 2Q 2 3Q	1 2 2 2 1	1 1 1 1 1	京都精華大学 マンガ学部 マンガ学科 講師 (平成29年4月)	—
57	兼任	講師	ウェスリー・アーム ストロング (令和4年4月)	修士(教育学)	English discussion Effective presentation	2 2Q 2 3Q	1 1	1 1	京都精華大学共通教育 機構非常勤講師 (平成24年4月)	—
58	兼任	講師	アオキ トキコ 青木 登紀子 (令和3年10月)	准学士	身体文化演習1 身体文化演習2	1 3Q 1 4Q	1 1	1 1	京都精華大学非常勤 講師 (平成29年4月)	—
59	兼任	講師	アイハラ マサミチ 相原 正道 (令和3年10月)	修士(体育学)	スポーツとビジネス	1 4Q	1	1	大阪経済大学 人間科学部教授 (平成31年4月)	—
60	兼任	講師	アカタ チカコ あかた ちかこ (令和3年10月)	人間科学 修士	表現と倫理	1 3Q	2	1	京都精華大学非常勤 講師 (平成27年4月)	—
61	兼任	講師	アキヨシ ヤスハル 秋吉 康晴 (令和3年10月)	博士(文学)	メディア表現史1	1 3Q	1	1	京都精華大学ポピュ ラーカルチャー学部 非常勤講師 (平成25年4月)	—
62	兼任	講師	アベ マヤ 安部 麻矢 (令和3年4月)	博士(文学)	スワヒリ語	1 1Q	1	1	大阪大学マルチリン ガル教育センター 特任講師 (平成31 年7月)	—
63	兼任	講師	イクタ ショウゴ 池田 彰吾 (令和3年4月)	外国語学 士	フランス語1 フランス語2	1 1Q 1 2Q	1 1	1 1	株式会社ECC講師 (平成26年11月)	—
64	兼任	講師	イシカワ ラン 石川 蘭 (令和3年4月)	学士(経営学)	ベトナム語	1 1Q	1	1	株式会社ECC ベトナム語講師 (平成31年2月)	—
65	兼任	講師	イソベ アツシ 磯部 淳史 (令和4年4月)	博士(文学)	東洋史	2 2Q	2	1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成30年4月)	—
66	兼任	講師	オオスギ タクゾウ 大杉 卓三 (令和4年10月)	博士(比較社会文化)	イノベーション論	2 3Q	2	1	京都産業大学 経営 学部 准教授 (平成30年4月)	—
67	兼任	講師	オザキ エレナ 尾崎 エレナ (令和3年4月)	産業社会 学士	スペイン語	1 1Q	1	1	株式会社ECC講師 (平成30年1月)	—
68	兼任	講師	カジマル ガク 梶丸 岳 (令和4年4月)	博士(人間・環境学)	民族音楽論	2 4Q	2	1	京都大学 助教 (平成29年3月)	—
69	兼任	講師	カタオカ タツキ 片岡 樹 (令和4年10月)	博士(比較社会文化)	アジア地域研究1	2 3Q	2	1	京都大学大学院アジ ア・アフリカ地域研 究研究科教授 (平成20年4月)	—
70	兼任	講師	カヨウ ヒデアキ 嘉陽 英朗 (令和3年4月)	修士(経済学)※	自然科学概論	1 2Q	2	1	京都精華大学 非常勤講師 (平成29年4月)	—
71	兼任	講師	キタムラ タスク 来田村 輔 (令和3年10月)	博士(理学)	生物学	1 3Q	2	1	京都精華大学非常勤 講師 (令和2年4月)	—
72	兼任	講師	キタワキ マナブ 北脇 学 (令和3年4月)	文学修士	海外ショートプログラム入門	1 3Q	2	1	学校法人 京都精華大学 専任職員 (平成27年4月)	—
73	兼任	講師	キヌカワ ヤスノリ 衣川 泰典 (令和3年10月)	修士(美術)	写真技法	1 3Q	1	1	京都精華大学 芸術学部 非常勤講師 (平成21年4月)	—
74	兼任	講師	コバヤシ クミコ 小林 久美子 (令和4年4月)	修士(人間・環境学)	西洋史	2 2Q	2	1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成30年10月)	—
75	兼任	講師	コバヤシ ヒロヒデ 小林 広英 (令和4年10月)	博士(地球環境学)	アフリカ・アジア特講1	2 3Q	2	1	京都大学大学院地球 環境学 教授 (平成21年●月)	—

76	兼任	講師	コムラ マサノブ 小村 雅信 (令和3年4月)	修士 (メディア表現)	情報と倫理 情報科学概論 データサイエンス入門 統計的思考法 プログラミング1 プログラミング2 プログラミング3 プログラミング4 情報テクノロジー1 情報テクノロジー2 人類と人工知能 教職コンピューター入門	1 1Q 1 2Q 2 1Q 1 3Q 1 3Q 1 4Q 2 1Q 2 2Q 1 3Q 1 4Q 1 3Q 1 4Q	1 1 1 2 1 1 1 1 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	個人事業主、プログラマー (平成21年5月)	—
77	兼任	講師	サカイ コウジ 坂井 功治 (令和3年10月)	経済学博士	ファイナンス論	1 4Q	1	1	京都産業大学教授 (平成22年4月)	—
78	兼任	講師	サカイ シンタロウ 酒井 伸太郎 (令和4年10月)	社会福祉学修士	障害学	2 3Q	2	1	京都精華大学非常勤講師 (令和2年4月)	—
79	兼任	講師	ササキ タカヒロ 佐々木 高弘 (令和4年10月)	教育学修士	歴史地理学	2 3Q	2	1	京都学園大学(現:京都先端科学大学)人文学部 教授 (平成11年4月)	—
80	兼任	講師	サダクニ タカノブ 貞國 貴信 (令和3年4月)	法学士	アカデミックスキル1	1 2Q	1	1	株式会社イング講師 (平成28年4月)	—
81	兼任	講師	サトウ トモヒサ 佐藤 知久 (令和3年10月)	博士 (人間・環境学)	表現と社会	1 4Q	2	1	京都市立芸術大学芸術資源研究センター (平成29年4月)	—
82	兼任	講師	サトウ モリヒロ 佐藤 守弘 (令和3年4月)	博士 (芸術学)	芸術学 デザイン特講1 デザイン特講2	1 2Q 2 1Q 2 2Q	2 2 2	1 1 1	京都精華大学デザイン学部建築学科教授 (平成16年4月)	—
83	兼任	講師	シバタ アツキ 芝田 篤紀 (令和4年10月)	博士 (学術)	自然地理学	2 4Q	2	1	京都精華大学人文学部総合人文学科非常勤講師 (令和2年4月)	—
84	兼任	講師	シモモト ヨシミツ 下元 善光 (令和3年10月)	学士 (美術)	ポートフォリオ実習1 ポートフォリオ実習2	1 3Q 1 4Q	1 1	1 1	個人事業主 グラフィックデザイナー (平成20年5月)	—
85	兼任	講師	シン ヒョンオ 申 紘旻 (令和3年10月)	博士 (国際関係学)	日本国憲法	1 3Q	2	1	京都精華大学非常勤講師 (令和2年4月)	—
86	兼任	講師	シンボ シズ 新保 静 (令和3年4月)	国際関係学学士	中国語1 中国語2	1 1Q 1 2Q	1 1	1 1	株式会社ECC講師 (平成28年8月)	—
87	兼任	講師	スズキ ヒデアキ 鈴木 英明 (令和4年4月)	博士 (文学)	アフリカ・アジア史 アフリカ・アジア関係論	2 1Q 2 2Q	1 2	1 1	国立民族学博物館グローバル現象研究部助教 (平成30年8月)	—
88	兼任	講師	スズキ ヒロヤス 鈴木 洋保 (令和4年10月)	学士(工学)	書道	2 4Q	2	1	京都精華大学人文学部非常勤講師 (平成22年4月)	—
89	兼任	講師	スミジ マホ 隅地 茉歩 (ヤマシタ ノブコ 山下 伸子) (令和3年4月)	文学修士	身体表現論	1 2Q	2	1	個人事業主、ダンサー (平成9年4月)	—
90	兼任	講師	タダ ミノル 多田 実 (令和4年4月)	博士 (工学)	マーケティング論 文化政策論	2 1Q 2 3Q	1 2	1 1	同志社大学政策学部教授 (平成16年4月)	—
91	兼任	講師	タニモト ナオコ 谷本 尚子 (令和3年10月)	学術博士	デザイン論 デザイン概論1 デザイン史1	1 3Q 2 1Q 2 3Q	2 1 1	1 1 1	京都精華大学非常勤講師 (平成28年4月)	—
92	兼任	講師	チェ ミヒ 崔 美希 (令和3年4月)	専門士	韓国語1 韓国語2	1 1Q 1 2Q	1 1	1 1	株式会社ECC講師 (平成28年7月)	—
93	兼任	講師	ツカダ アキラ 塚田 章 (令和3年10月)	芸術学士	素材論	1 4Q	2	1	京都精華大学デザイン学部非常勤講師 (平成31年4月)	—
94	兼任	講師	ツジモト キョウコ 辻本 香子 (令和3年4月)	修士 (学術)	音楽概論	1 2Q	2	1	京都精華大学ポピュラーカルチャー学部非常勤講師 (平成27年4月)	—
95	兼任	講師	ツツイ ナオコ 筒井 直子 (令和4年10月)	修士 (家政学)	比較服飾文化論	2 3Q	2	1	京都服飾文化研究財団・キュレーター (平成29年1月)	—
96	兼任	講師	ツルタ ナオミ 鶴田 尚美 (令和3年4月)	修士※ (文学)	倫理学	1 2Q	2	1	京都精華大学人文学部非常勤講師 (平成15年4月)	—

97	兼任	講師	ナカオ サキコ 中尾 沙季子 (令和4年4月)	博士 (歴史)		国際文化史1 国際文化史2 国際文化リテラシー2 フランス語圏事情理解 フランス語圏経済理解 欧州地域研究 グローバルヒストリー概論 グローバルヒストリー特講 ポストコロナル概論 世界の文学1	1 3Q 1 4Q 1 4Q 2 1Q 2 3Q 2 3Q 2 1Q 2 2Q 2 2Q 2 4Q	1 1 2 1 1 2 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	日本学術振興会 海外特別研究員 (平成30年10月)	—
98	兼任	講師	ナカオ セイジ 中尾 世治 (令和4年10月)	博士 (人類学)		マテリアル・カルチャー概論	2 3Q	2	1	総合地球環境学研究所 特任助教 (令和元年8月)	—
99	兼任	講師	ナカムラ (タカハシ) サエ 中村 (高橋) 沙絵 (令和5年10月)	博士 (地域研究)		エイジング研究概論	3 4Q	2	1	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 准教授 (平成28年4月)	—
100	兼任	講師	ナカムラ ジュンコ 中村 潤子 (令和3年4月)	文学修士		考古学	1 2Q	2	1	京都精華大学非常勤講師 (平成2年4月)	—
101	兼任	講師	ナラ マサシ 奈良 雅史 (令和4年10月)	博士 (文学)		アジア地域研究2	2 4Q	2	1	国立民族学博物館超域フィールド科学研究部・准教授 (令和元年4月)	—
102	兼任	講師	ナン ミヤ ケー (モウ) カイン NANG MYA KAY (MOE) KHAING (令和3年4月)	博士 (国際関係学)		アフリカ・アジア概論 国際開発論 子ども学概論	1 4Q 2 2Q 3 4Q	1 2 2	1 1 1	(社) 国際交流サービス協会 (平成16年7月) 明治学院大学国際学部非常勤講師 (平成31年4月)	—
103	兼任	講師	ニシモト ヌウキ 西本 裕樹 (令和3年10月)	社会学士		コミュニケーションスキル2	1 3Q	1	1	株式会社イング講師 (平成27年4月)	—
104	兼任	講師	ノリタケ リツキ 則武 立樹 (令和4年4月)	修士 (国際公共政策)		人権と教育	2 1Q	1	1	京都精華大学非常勤講師 (平成31年4月)	—
105	兼任	講師	ハシモト アキヒコ 橋本 章彦 (令和3年10月)	博士 (文学)		民俗学	1 3Q	2	1	京都精華大学人文学部 非常勤講師 (平成16年4月)	—
106	兼任	講師	ハヤカワ ヨシアキ 早川 慶朗 (令和3年10月)	博士 (工学)		ベンチャー・ビジネス論	1 4Q	1	1	株式会社Andeco代表取締役 (平成26年7月)	—
107	兼任	講師	ハヤシ コウジ 林 耕次 (令和4年10月)	博士 (学術)		先住民族研究	2 3Q	2	1	総合地球環境学研究所 (平成28年8月)	—
108	兼任	講師	ハヤシ レイコ 林 玲子 (令和5年10月)	博士 (政策研究)		人口動態論 人口政策論	3 3Q 3 3Q	2 2	1 1	国立社会保障・人口問題研究所・国際関係部長 (平成24年4月)	—
109	兼任	講師	フクオカ ショウゾウ 福岡 正蔵 (令和3年10月)	修士 (政策科学)		インターンシップ2 キャリア2 日本の企業文化研究	2 4Q 2 2Q 1 3Q	2 1 1	1 1 1	京都精華大学キャリアセンター長 (平成4年4月)	—
110	兼任	講師	フジタ アキフミ 藤田 明史 (令和4年4月)	修士※ (国際関係学)		平和学	2 2Q	2	1	立命館大学国際関係学部 非常勤講師 (平成13年9月)	—
111	兼任	講師	フルカワ テツシ 古川 哲史 (令和4年10月)	修士 (学術)		アメリカ地域研究1	2 3Q	2	1	大谷大学文学部 教授 (平成30年4月)	—
112	兼任	講師	ホンジョウ モエ 本庄 萌 (令和3年4月)	法学博士		法学	1 2Q	2	1	京都精華大学非常勤講師 (令和2年4月)	—
113	兼任	講師	ホンダ ケンイチ 本多 健一 (令和4年10月)	博士 (文学)		京都の習俗	2 3Q	2	1	大阪観光大学観光学部 准教授 (平成30年4月)	—
114	兼任	講師	マエダ ナオコ 前田 直子 (令和4年4月)	人間・環境学博士		国際政治学	2 2Q	2	1	京都女子大学法学部 准教授 (平成27年4月)	—
115	兼任	講師	マツオ メグミ 松尾 恵 (令和3年10月)	学士 (美術)		表現活動と経済	1 3Q	1	1	Voice Gallery代表 (昭和61年4月)	—
116	兼任	講師	ミウラ シュンスケ 三浦 俊介 (令和4年10月)	文学修士※		口承文化論	2 3Q	2	1	京都精華大学人文学部 非常勤講師 (平成8年4月)	—

117	兼任	講師	ミナミ リョウタ 南 了太 (令和4年10月)	文学修士	インターンシップ1 産学公連携PBLプログラム1 産学公連携PBLプログラム2 ソーシャルビジネス演習1 ソーシャルビジネス演習2 グローバル・ビジネス論 グローバル化とメディア ビジネスモデル論 大学連携プログラム	2 3Q 2 3Q 2 4Q 3 3Q 3 4Q 2 4Q 2 4Q 2 2Q 2 1Q	2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1 1	京都大学産学連携 本部(特定研究員) (平成26年4月)	—
118	兼任	講師	ミネ ヨウイチ 峯 陽一 (令和4年10月)	経済学修 士	アフリカ・アジアリテラシー2	2 3Q	2	1	同志社大学大学院グ ローバル・スタ ディーズ研究 教授 (平成22年4月)	—
119	兼任	講師	ミムラ ユタカ 三村 豊 (令和4年10月)	修士(工 学)	アフリカ・アジア特講2	2 4Q	2	1	大学共同利用機関法 人文化研究機構 総合地球環境学研 究所研究員(2018年○ 月)	—
120	兼任	講師	ミヤマエ カズハ 宮前 一葉 (令和3年10月)	修士(社 会学)	アカデミックスキル2	1 4Q	1	1	株式会社イング 講師 (平成30年4月)	—
121	兼任	講師	ムシガ トモカ 虫賀 幹華 (令和4年4月)	博士(文 学)	アフリカ・アジアリテラシー1	2 2Q	2	1	国立民族学博物館人 間文化研究機構 総合人間文化研究推 進センター推進セン ター研究員(平成30 年11月)	—
122	兼任	講師	ムラカミ ユウスケ 村上 勇介 (令和4年10月)	博士(政 治学)	アメリカ地域研究2	2 4Q	2	1	京都大学東南アジア 地域研究所教授 (平成30年2月)	—
123	兼任	講師	モリシタ マサナオ 森下 正修 (令和3年10月)	文学博士	行動心理学 心理学	1 3Q 1 2Q	2 2	1 1	京都府立大学 准教 授 (平成14年4月)	—
124	兼任	講師	ヤスギ クンワディ 八杉 クンワディ (令和3年4月)	英文学士	タイ語	1 1Q	1	1	株式会社ECC タイ語講師 (平成30年6月)	—
125	兼任	講師	ヤニ・カラヴァシレ ヴ YANI Karavasilev (令和4年10月)	博士(国 際公共政 策)	多国籍企業論	2 3Q	2	1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成30年4月)	—
126	兼任	講師	ヤマウチ シンヤ 山内 眞也 (令和3年4月)	文学士	インドネシア語	1 1Q	1	1	株式会社ECC 講師 (平成30年9月)	—
127	兼任	講師	ヤマザキ アツヨシ 山崎 篤良 (令和3年4月)	経済学士	ドイツ語	1 1Q	1	1	株式会社ECC講師 (昭和58年7月)	—
128	兼任	講師	ユミクラ キョウヘ イ 弓倉 京平 (令和3年10月)	法務博士	表現と知的財産権	1 4Q	2	1	弁護士法人プログ レ・ TNY国際法律事務 所(平成31年1月)	—
129	兼任	講師	ライタ マイコ 來田 真依子 (令和4年10月)	博士 (法学)	国際社会の法秩序	2 3Q	2	1	日本学術振興会特別 研究員(PD・京都大 学) (令和2年4月)	—
130	兼任	講師	ロベルト デメツ Robert Demetz (令和3年4月)	美術修士	イタリア語	1 1Q	1	1	株式会社ECC 講師 (平成30年1月)	—
131	兼任	講師	ワダ ツミキ 和田 積希 (令和3年10月)	修士 (文学)	工芸概論	1 4Q	2	1	京都工芸繊維大学 美術工芸資料館 特任助教 (平成31年4月)	—

(注)

- 1 教員の数に応じ、適宜枠を増やして記入すること。
- 2 私立の大学若しくは高等専門学校に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合又は大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 3 「申請に係る学部等に従事する週当たりの平均日教」の欄は、専任教員のみ記載すること。

専任教員の年齢構成・学位保有状況										
職位	学位	29歳以下	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～64歳	65～69歳	70歳以上	合計	備考
教授	博士	人	人	人	2人	1人	人	人	3人	
	修士	人	人	人	2人	1人	2人	人	5人	
	学士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
准教授	博士	人	人	人	3人	1人	人	人	4人	
	修士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
講師	博士	人	1人	2人	人	人	人	人	3人	
	修士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
助教	博士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	修士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
合計	博士	人	1人	2人	5人	2人	人	人	10人	
	修士	人	人	人	2人	1人	2人	人	5人	
	学士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	

(注)

- 1 この書類は、申請又は届出に係る学部等ごとに作成すること。
- 2 この書類は、専任教員についてのみ、作成すること。
- 3 この書類は、申請又は届出に係る学部等の開設後、当該学部等の修業年限に相当する期間が満了する年度（以下「完成年度」という。）における状況を記載すること。
- 4 専門職大学院の課程を修了した者に対し授与された学位については、「その他」の欄にその数を記載し、「備考」の欄に、具体的な学位名称を付記すること。

専任教員の年齢構成・学位保有状況										
職位	学位	29歳以下	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～64歳	65～69歳	70歳以上	合計	備考
教授	博士	人	人	人	2人	人	2人	人	4人	
	修士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
准教授	博士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	修士	人	人	人	1人	人	人	人	1人	
	学士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
講師	博士	人	人	3人	人	人	人	人	3人	
	修士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
助教	博士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	修士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
合計	博士	人	人	3人	2人	人	2人	人	7人	
	修士	人	人	人	1人	人	人	人	1人	
	学士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	

(注)

- この書類は、申請又は届出に係る学部等ごとに作成すること。
- この書類は、専任教員についてのみ、作成すること。
- この書類は、申請又は届出に係る学部等の開設後、当該学部等の修業年限に相当する期間が満了する年度（以下「完成年度」という。）における状況を記載すること。
- 専門職大学院の課程を修了した者に対し授与された学位については、「その他」の欄にその数を記載し、「備考」の欄に、具体的な学位名称を付記すること。